

# 郡遺跡・倍賀遺跡1

平成30年(2018年)12月



茨木市教育委員会  
公益財団法人 大阪府文化財センター



## 序 文

私たちの住む茨木市では、北半部は老ノ坂山地の麓で、南半部には大阪平野の一部をなす三島平野が広がり、温暖な気候と豊かな自然に恵まれたベッドタウンとして過ごしやすい環境のもと、古来数多くの歴史が育まれてきました。

文化施設の充実をはじめ、安心・安全なまちづくりをめざして発展をとげた本市は、交通の利便性や京都・大阪間という立地の良さも手伝い大規模な開発も少なくありません。昨今の時勢のなか、開発に伴う埋蔵文化財の調査件数は全国的に減少しているのに対し、本市では緩やかながら増加の傾向をみせています。

本書は、平成28年度に松下町で実施した大型倉庫建設工事に伴う発掘調査の成果報告書です。16,500 m<sup>2</sup>に至る広大な面積を一挙に開陳し得た稀少な調査例として、広く活用されることを願ってやみません。

調査の実施にあたりましては、土地所有者、施工関係者、調査関係者、近隣住民の皆様にはご理解と多大なご協力を賜りました。また、文化庁、大阪府教育庁ならびに公益財団法人大阪府文化財センターの諸機関には、ご指導と格別のご協力をいただき、茨木市の文化財保護行政が推進できましたことを感謝いたしますとともに、今後ともより一層のご理解とお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

平成30年12月

茨木市教育委員会  
教育長 岡田祐一





方形周溝墓と環濠で囲まれた集落（南西から）





周溝出土の石庖丁（左列 7 点は 4140 溝、右列 2 点は 4201 溝）



人形土製品と銅鐸形土製品



## はしがき

西国三十三所第22番札所總持寺のまちとしても知られる茨木市は、大阪府北部の摂津と呼ばれる地域に位置し、江戸時代には横断する西国街道沿いに本陣が設けられるなど、交通の要衝として古くから重要な役割を担ってまいりました。高度経済成長期以降は、大阪と京都、さらには東京までも結ぶ鉄道や高速道路が整備され、摂津地域の中核都市としてますますの発展を遂げております。

調査地である松下町は、その名のとおり旧松下電器産業株式会社の跡地であり、ここに名神高速道路茨木インターチェンジ隣接地という利便性を活かした大型物流施設の建設が計画されたため、当センターは茨木市教育委員会と共同で調査を実施することとなりました。

郡遺跡と倍賀遺跡はこれまでにも茨木市による調査が数次にわたり実施され、弥生時代以降の遺構が数多く発見されております。特に調査地の周辺からは弥生時代の方形周溝墓が多数見つかっており、貴重な銅鐸形土製品なども出土しております。

今回の調査では、上層で古代末から中世前半期の屋敷の跡を、下層では弥生時代の160基にも及ぶ大規模な方形周溝墓群や環濠で囲まれた集落を検出しました。集落内からは高杯形土製品や送風管が発見され、当遺跡内で青銅器の生産が行われていたことが明らかとなりました。また周溝内からはこけし状の人形土製品や長さ37cmを測る大型の石庖丁など、方形周溝墓の祀りを理解するうえで有用な遺物が多数見つかっております。

このように摂津地域における弥生時代中期以降の歴史解明に欠くことのできない数多くの成果をあげることができました。これらの成果を収めた本書が多くの方々に活用され、地域史の解明に少しでも役立てていただければ幸いです。

最後に、今回の工事の事業主である茨木松下開発特定目的会社をはじめ、ご指導とご協力を賜った大阪府教育庁、茨木市教育委員会、並びに地元関係各位に深く感謝するとともに、今後とも当センターの事業につきまして、より一層のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成30年12月

公益財団法人 大阪府文化財センター

理事長 田邊 征夫



# 例　　言

1. 本書は、(仮称)茨木市松下町物流施設建設工事に伴い実施した大阪府茨木市松下町2-2所在の郡遺跡・倍賀遺跡の発掘調査報告書である。調査名称は「郡・倍賀遺跡15-3」とした。
2. 発掘調査は安西工業株式会社大阪支店の委託を受けた公益財団法人大阪府文化財センターが、茨木市教育委員会と共同で実施した。整理作業および本書の編集は公益財団法人大阪府文化財センターが行ない、平成30年11月30日までにすべての資料を茨木市に引き渡した。本書編集後の印刷・製本は茨木市が行ない、平成30年12月28日の本書刊行を以って一連の事業を完了した。契約名称・契約期間等については以下のとおりである。

【契約名称】(仮称)茨木市松下町物流施設建設工事に伴う郡遺跡・倍賀遺跡発掘調査

【契約期間】平成28年6月1日～平成30年11月30日

3. 現地調査および整理作業は以下の体制で実施した。

【茨木市教育委員会】

〔平成28・29年度〕社会教育振興課 文化財係長 前田聰志、同 発掘調査員 藤田徹也、同 坂田典彦

〔平成30年度〕歴史文化財課 課長代理兼調査管理係長 前田聰志、調査管理係 発掘調査員 坂田典彦

【公益財団法人大阪府文化財センター】

〔平成28・29年度〕事務局次長（平成30年1月1日から事務局長）江浦 洋

調整課長（平成30年1月1日から事務局次長兼）岡本茂史

調査課長 岡戸哲紀（平成28年9月まで）、同 調査課長補佐 三好孝一、同 主査 佐伯博光（現地調査のみ）

同 副主査 伊藤 武、同 信田真美世（現地調査のみ）

〔平成30年度〕事務局次長兼調整課長 岡本茂史、調査課長 三好孝一、同 調査課長補佐 龜井 聰

同 主査 伊藤 武

4. 遺構の写真撮影は佐伯・伊藤・信田が、遺物の写真撮影は中部調査事務所写真室が行なった。
5. 発掘調査および報告書の作成にあたっては、大阪府教育庁文化財保護課をはじめとして、下記の方々にご指導・ご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。（敬称略）  
設楽博己（東京大学大学院）、西口陽一（前大阪府教育庁）、深澤芳樹（天理大学客員教授）  
福永伸哉（大阪大学）、森岡秀人（関西大学大学院）
6. 出土した石製品の石材については公益財団法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所の小倉徹也氏に、人骨（歯）については安部考古動物学研究所の安部みき子氏に鑑定していただいた。
7. 本書の執筆分担については、調査の経緯や既往の調査に関する記述を茨木市教育委員会坂田が担当した。また位置と環境については、既に平成17年に茨木市が刊行した『郡遺跡発掘調査概要報告書』に詳しく記載されており、大きく変わるものではないため、これをもとに公益財団法人大阪府文化財センターで部分的に修正・加筆して作成した。基本層序については佐伯が、その他の遺構・遺物については伊藤が担当し、上層の遺物に関しては信田の所見を参考に伊藤が補足した。なお、位置と環境・石器については、公益財団法人大阪府文化財センターの奥村茂輝・川瀬貴子・鹿野 墓・若林幸子の協力を得た。執筆分担の詳細については目次に記載している。編集は伊藤が行なった。
8. 本調査に関わる遺物及び写真・実測図等の記録類はすべて茨木市教育委員会が保管している。広く利用されることを希望する。

# 凡　　例

1. 遺構図および断面図に示した標高は、東京湾平均海面（T.P.）からのプラス値である。単位は全てメートルである。
2. 発掘調査での使用測地系は世界測地系（測地成果 2000）である。遺構図に記載した座標値の単位は全てメートルである。
3. 本書で用いた北はいずれも平面直角座標系第VI系の座標北を示す。  
ちなみに郡遺跡・倍賀遺跡では座標北は真北より西へ約 $0^{\circ} 15'$ 、磁北は西へ約 $7^{\circ} 1'$ 振っている。
4. 現地調査及び整理作業は、茨木市教育委員会との調整をはかりながら、基本的に平成 22 年度に改訂された財団法人大阪府文化財センター 2010『遺跡調査基本マニュアル』に準拠して進めた。
5. 土層断面図で使用した土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2007 年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。なおその記載順は記号・土色・土質とした。  
例：10YR5/6 黄褐色 粘土質シルト
6. 遺構番号は、遺構の種類や調査区に関わらず 1 から通じて付した。その場合、番号 — 遺構種類の順とした。複数の遺構の集合体である掘立柱建物や竪穴建物・方形周溝墓などについては、各遺構番号とは別に集合体独自の遺構番号を付した。この場合は混乱を避けるため遺構種類 — 番号とした。なお本書挿図内では図面が煩雑となるため、掘立柱建物や竪穴建物の柱穴番号を「○○柱穴」とはせず、番号のみを記入し、ピットは「p」に省略している。また方形周溝墓については本文中でも「周溝墓」に省略した。　例：「1 溝」・「2 土坑」・「3 ピット」、「掘立柱建物 1」・「周溝墓 1」  
本書中の遺構番号・種類は、基本的に現地調査段階での遺構番号をそのまま使用したが、整理作業の段階で新たに遺構番号を振り足したものや振り直したものがある。これらについては現地で付した最終番号以降の番号、あるいは欠番となっていた番号を振っているため、一連の遺構でも番号が続かない場合がある。
7. 遺構図における断面位置は、図面上に「—」形によってその位置を示した。縮尺は各図のスケールを参照されたい。
8. 遺物実測図の縮尺は、土器 4 分の 1、石製品 3 分の 2、鉄製品・土製品 2 分の 1 を基本としたが、大型石庖丁などは 3 分の 1、石斧は 2 分の 1 にするなど遺物に即して異なる縮尺としたため、必ずしもこの限りではない。各々の縮尺率については、スケールに明示しているのでそちらを参照されたい。
9. 遺物の実測図のうち、弥生土器・土師器・黒色土器・瓦器の断面は白抜きに、須恵器・陶磁器類の断面を黒塗りとし、石製品・土製品・鉄製品・木製品等の断面、および黒色土器については内外面の黒色化している部分にアミカゲを施した。
10. 土器の調整技法のうち、「ヘラケズリ」・「ヘラミガキ」については、単に「ケズリ」・「ミガキ」と省略して表現した。
11. 周溝墓の墳丘規模については、特に断らない限り周溝の内法（墳丘上面）の数値を示した。
12. 写真図版中の遺物番号は挿図の遺物番号と対応する。また遺物写真のうち、俯瞰撮影を行ない縮尺率が判明するものについては写真の隅に縮尺率を記した。
13. 出土遺物については、復元・図化できず挿図や写真図版に掲載できなかったものでも本文中で報告しているものがある。掲載遺物については器種等の後ろの（ ）内に掲載番号を記したが、未掲載の遺物については番号を記入していない。
14. 引用文献・参考文献・註は各章の末尾に記した。出土した土器の時期区分と器種分類については、主に以下の文献を参考に記述した。  
・寺沢 薫・森井貞雄 1989 「河内地域」「弥生土器の様式と編年」近畿編Ⅰ 木耳社  
・森田克行 1990 「摂津地域」「弥生土器の様式と編年」近畿編Ⅱ 木耳社  
・小森俊寛 2005 『京から出土する土器の編年的研究』京都編集工房  
・中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社  
・太宰府市教育委員会 2000 『太宰府条坊跡 XV—陶磁器分類編一』太宰府市の文化財 第 49 集

# 目 次

巻頭原色図版

序文・はしがき・例言・凡例

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	(坂田) 1
第2節 調査地周辺の既往調査	(坂田) 3
第3節 現地調査の経過（日誌抄）	(伊藤) 4
第4節 調査成果の公開	(伊藤) 7
第2章 遺跡の位置と環境	9
第1節 地理的環境	9
第2節 歴史的環境	9
第3章 調査の方法	(伊藤) 15
第1節 現地調査	15
第2節 整理作業	18
第4章 調査成果	20
第1節 基本層序	(佐伯) 20
第2節 4層上面検出遺構と出土遺物	(伊藤) 28
第3節 4層下面検出遺構と出土遺物	(伊藤) 78
第5章 総 括	(伊藤) 207
第1節 古代末～中世前半期の村落	207
第2節 弥生時代の遺構と遺物	210
遺構・遺物一覧表	219

# 卷頭原色図版目次

- 卷頭原色図版1 方形周溝墓と環濠で囲まれた集落（南西から）  
卷頭原色図版2 上：周溝出土の石庖丁（左列7点は4140溝、右列2点は4201溝）  
下：人形土製品と銅鐸形土製品

## 写真目次

写真1	2007年撮影航空写真と調査地位置	2
写真2	現地説明会風景（上）と配布資料（下左：表、下右：裏）	8
写真3	1948年撮影航空写真と調査地位置	12
写真4	調査区内地層堆積状況	21

## 挿図目次

図1	調査地位置	1	図18	掘立柱建物12・13・14 平面・断面	36
図2	調査地周辺の遺跡分布	11	図19	掘立柱建物15・塀4平面・断面	37
図3	地区割りの方法	16	図20	掘立柱建物16平面・断面	38
図4	調査区内の地区割り	17	図21	掘立柱建物17・18平面・断面	40
図5	基本層序柱状断面位置 及び東壁断面土色	22	図22	掘立柱建物19・20平面・断面	41
図6	基本層序柱状断面（東壁）	23	図23	掘立柱建物21・24平面・断面	42
図7	基本層序柱状断面（南壁）	24	図24	掘立柱建物22・23平面・断面	43
図8	基本層序柱状断面（西壁）	25	図25	掘立柱建物25・26平面・断面	44
図9	基本層序柱状断面（北壁）	26	図26	掘立柱建物27・28平面・断面	46
図10	4層出土遺物	27	図27	掘立柱建物29・30平面・断面	47
図11	掘立柱建物1平面・断面	28	図28	掘立柱建物31・塀6平面・断面	48
図12	掘立柱建物2・4平面・断面	29	図29	掘立柱建物32・33・38 平面・断面	49
図13	掘立柱建物3・8平面・断面	30	図30	掘立柱建物34・35・410柱穴 平面・断面	50
図14	掘立柱建物5平面・断面	31	図31	掘立柱建物36・37平面・断面	51
図15	掘立柱建物6・塀1平面・断面	32	図32	塀2・5平面・断面	52
図16	掘立柱建物7・塀3平面・断面	34	図33	掘立柱建物出土遺物	53
図17	掘立柱建物9・10・11 平面・断面	35	図34	4層上面ピット平面・断面	54

図 35	4層上面ピット出土遺物	54	図 71	竪穴建物 20・21・22 平面・断面	94
図 36	4層上面土坑平面・断面(1)	56	図 72	竪穴建物出土遺物	95
図 37	4層上面土坑平面・断面(2)	57	図 73	竪穴建物・ピット出土遺物	96
図 38	4層上面土坑平面・断面(3)	59	図 74	集落域 4層下面遺構平面	97
図 39	4層上面土坑平面・断面(4)	60	図 75	4層下面土坑平面・断面(1)	99
図 40	4層上面土坑平面・断面(5)	61	図 76	4層下面土坑平面・断面(2)	100
図 41	4層上面土坑平面・断面(6)	62	図 77	4層下面土坑・凹み出土遺物	102
図 42	4層上面土坑出土遺物	63	図 78	4層下面土坑出土遺物	103
図 43	4層上面墓出土遺物	65	図 79	3082 土坑出土遺物	104
図 44	4層上面墓平面・断面	65	図 80	3001・3013溝・4187土坑 断面及び土器出土状況	106
図 45	4層上面井戸平面・断面(1)	66	図 81	3001溝出土遺物(1)	107
図 46	4層上面井戸出土遺物(1)	67	図 82	3001溝出土遺物(2)	108
図 47	301 井戸出土遺物	68	図 83	3001溝出土遺物(3)	109
図 48	4層上面井戸平面・断面(2)	69	図 84	3001溝出土遺物(4)	110
図 49	4層上面井戸出土遺物(2)	70	図 85	3001溝出土遺物(5)	111
図 50	4層上面井戸平面・断面(3)	71	図 86	3001溝出土遺物(6)	112
図 51	1274 井戸出土遺物	72	図 87	3001溝出土遺物(7)	113
図 52	1215 井戸曲物	73	図 88	3001溝出土遺物(8)	114
図 53	1274 井戸曲物	74	図 89	3013溝出土遺物(1)	117
図 54	1525 井戸曲物	75	図 90	3013溝出土遺物(2)	118
図 55	4層上面溝平面・断面	76	図 91	4434溝土器出土状況及び断面	119
図 56	4層上面溝断面	77	図 92	4434溝出土遺物(1)	120
図 57	4層上面溝出土遺物	77	図 93	4434溝出土遺物(2)	121
図 58	4層下面遺構全体平面	79・80	図 94	周溝墓 1～9周辺 4層下面 遺構平面	123
図 59	竪穴建物 1・3 平面・断面	81	図 95	周溝墓 1～9周辺周溝断面(1)	124
図 60	竪穴建物 2 平面・断面	82	図 96	周溝墓 1～9周辺周溝断面(2)	125
図 61	竪穴建物 4 平面・断面	83	図 97	周溝墓 1～9周辺遺構平面・断面 及び土器出土状況	126
図 62	竪穴建物 5 平面・断面	84	図 98	調査区中央南寄り 4層下面 遺構平面	127
図 63	竪穴建物 6・7・3057 凹み 平面・断面	85	図 99	調査区中央南寄り 遺構平面・断面 及び土器出土状況	128
図 64	竪穴建物 8・23 平面・断面	86	図 100	周溝出土遺物(1)	129
図 65	竪穴建物 9 平面・断面	87	図 101	周溝墓 18周辺 4層下面遺構平面	130
図 66	竪穴建物 10・11・13・15・16 平面・断面	88	図 102	周溝墓 18周辺周溝断面 及び土器出土状況	131
図 67	竪穴建物 12・14 平面・断面	90			
図 68	竪穴建物 17 平面・断面	91			
図 69	竪穴建物 18・24 平面・断面	92			
図 70	竪穴建物 19 平面・断面	93			

図 103 周溝墓 18 周辺遺構平面・断面 及び土器出土状況	132	図 131 周溝出土遺物 (4)	161
図 104 周溝墓 18 出土遺物 (1)	133	図 132 周溝墓 95・97～99 周辺 4層下面遺構平面	162
図 105 周溝墓 18 出土遺物 (2)	134	図 133 周溝墓 95・97～99 周辺 周溝・土坑断面	163
図 106 調査区中央北寄り 4層下面遺構平面	135	図 134 周溝墓 95・97～99 周辺 遺構平面・断面	164
図 107 調査区中央北寄り周溝断面	136	図 135 4028・4030～4032 墓壙 平面・断面	165
図 108 3571・3572・3715 墓壙 平面・断面	137	図 136 4034・4038～4040 墓壙 平面・断面	166
図 109 周溝出土遺物 (2)	137	図 137 4041・4042・4044・4046 墓壙 平面・断面	169
図 110 周溝墓 30・100 周辺 4層下面遺構平面	138	図 138 周溝墓 95 出土遺物 (1)	170
図 111 周溝墓 30・100 周辺周溝・3001 溝 断面及び土器出土状況	140	図 139 周溝墓 95 出土遺物 (2)	171
図 112 周溝墓 30 出土遺物 (1)	141	図 140 周溝墓 99 出土遺物	172
図 113 周溝墓 30 出土遺物 (2)	142	図 141 周溝墓 97 出土遺物 (1)	173
図 114 周溝墓 30 出土遺物 (3)	143	図 142 周溝墓 97 出土遺物 (2)	174
図 115 周溝墓 30 出土遺物 (4)	144	図 143 周溝墓 98 出土遺物	175
図 116 周溝出土遺物 (3)	145	図 144 調査区南方 4層下面遺構平面 .....	177・178
図 117 周溝墓 32 出土遺物	146	図 145 周溝墓 100 出土遺物	180
図 118 調査区西端中央北寄り 4層下面 遺構平面	147	図 146 4140 溝 石庖丁出土状況	181
図 119 調査区西端中央北寄り周溝断面 及び土器出土状況	148	図 147 周溝墓 101 出土遺物 (1)	182
図 120 調査区西端中央北寄り遺構 平面・断面及び土器出土状況	149	図 148 周溝墓 101 出土遺物 (2)	183
図 121 調査区北方周溝・3600 溝断面 及び土器出土状況	150	図 149 調査区南方周溝断面 (1)	184
図 122 調査区北方 4層下面遺構平面 .....	151・152	図 150 調査区南方周溝断面 (2)	185
図 123 調査区北方周溝断面 (1)	153	図 151 調査区南方周溝断面 及び土器出土状況	186
図 124 調査区北方周溝断面 (2)	154	図 152 調査区南方周溝・土坑断面	187
図 125 調査区北方周溝断面 (3)	155	図 153 調査区南方遺構平面・断面	188
図 126 調査区北方遺構平面・断面	156	図 154 周溝出土遺物 (5)	190
図 127 3600 溝・周溝出土遺物	157	図 155 調査区南方墓壙平面・断面	192
図 128 周溝墓 64 出土遺物 (1)	158	図 156 周溝出土遺物 (6)	192
図 129 周溝墓 64 出土遺物 (2)	159	図 157 調査区南西隅 4層下面遺構平面	193
図 130 周溝墓 73 出土遺物	160	図 158 調査区南西隅周溝・4434 溝断面	194
		図 159 調査区南西隅周溝断面 及び土器出土状況	195

図 160 調査区南西隅墓壙平面・断面	196	図 165 周溝墓 145 周辺周溝断面	
図 161 調査区南西隅墓壙・土坑		及び土器出土状況	202
平面・断面	197	図 166 周溝墓 145 周辺遺構平面・断面	203
図 162 周溝・墓壙出土遺物（1）	198	図 167 周溝出土遺物（7）	204
図 163 周溝墓 145 周辺 4 層下面		図 168 周溝・墓壙出土遺物（2）	205
遺構平面	200	図 169 4 層上面遺構の変遷	208
図 164 周溝墓 145 周辺周溝・4434 溝		図 170 方形周溝墓の群と遺構の変遷	211
断面及び土器出土状況	201		

## 遺構・遺物一覧表目次

周溝墓一覧表	220	土製品一覧表	250
土器一覧表	234	鉄製品一覧表	250
石製品一覧表	249	木製品一覧表	250

## 写真図版目次

中扉 J R 茨木駅上空付近より北方を望む（中央やや下が調査地）

### 写真図版 1 4 層上面遺構

1. 4 層上面遺構全景（空撮写真モザイク）

### 写真図版 2 4 層上面遺構

1. 1 区全景〔北西から〕
2. 2 区全景〔北から〕

### 写真図版 3 4 層上面遺構

1. 3 区全景〔北東から〕
2. 4 区全景〔南から〕

### 写真図版 4 4 層上面遺構

1. 5 区北端部全景〔東から〕
2. 6 区北半部全景〔西から〕

### 写真図版 5 4 層上面遺構

1. 掘立柱建物 1 [東から]
2. 掘立柱建物 5 [東から]
3. 掘立柱建物 6 [南から] (全て 3 区)

### 写真図版 6 4 層上面遺構

1. 掘立柱建物 2・8 [北から] (3 区)
2. 掘立柱建物 7 [北から] (3 区)
3. 掘立柱建物 9・10 [北から] (3 区)
4. 掘立柱建物 12・13 [東から] (4 区)
5. 掘立柱建物 14 [東から] (4 区)
6. 掘立柱建物 16・17 [東から] (4 区)
7. 掘立柱建物 18・19 [東から] (4 区)
8. 掘立柱建物 20 [東から] (4 区)

### 写真図版 7 4 層上面遺構

1. 4 区北半部調査風景 [東から]
2. 掘立柱建物 15 [東から] (4 区)
3. 掘立柱建物 30・31・32 [西から] (6 区)

写真図版8 4層上面遺構

1. 挖立柱建物 21・24〔南から〕(1区)
2. 挖立柱建物 22〔西から〕(1区)
3. 挖立柱建物 23〔北から〕(1区)
4. 挖立柱建物 25〔東から〕(5区)
5. 挖立柱建物 27〔南から〕(5区)
6. 挖立柱建物 28〔西から〕(5・6区)
7. 挖立柱建物 29〔東から〕(6区)
8. 挖立柱建物 33〔北から〕(6区)

写真図版9 4層上面遺構

1. 23柱穴(掘立柱建物1)
2. 97柱穴(掘立柱建物2)
3. 126柱穴(掘立柱建物5)
4. 73柱穴(掘立柱建物7)
5. 248柱穴(掘立柱建物8)
6. 252柱穴(掘立柱建物9)
7. 260柱穴(掘立柱建物10)
8. 270柱穴(掘立柱建物11)
9. 534柱穴(掘立柱建物14)
10. 612柱穴(掘立柱建物15)
11. 632柱穴(掘立柱建物16)
12. 695柱穴(掘立柱建物19)
13. 1171柱穴(掘立柱建物24)
14. 1409柱穴(掘立柱建物29)
15. 1459柱穴(掘立柱建物30)
16. 1431柱穴(掘立柱建物31)
17. 1470柱穴(掘立柱建物32)
18. 1496柱穴(掘立柱建物34)

写真図版10 4層上面遺構

1. 471墓(3区)
2. 592墓〔奥〕・599墓〔手前〕〔北から〕  
(4区)
3. 592墓
4. 592墓木棺片出土状況
5. 599墓
6. 599墓白磁碗・短刀出土状況

写真図版11 4層上面遺構

1. 40土坑(3区)
2. 41土坑(3区)
3. 67土坑(3区)
4. 158土坑(3区)
5. 461土坑(3区)
6. 503土坑(4区)
7. 516土坑(4区)
8. 751土坑(4区)

写真図版12 4層上面遺構

1. 1004土坑(2区)
2. 1106土坑(1区)
3. 1120土坑(1区)
4. 1121土坑(1区)
5. 1122土坑(1区)
6. 1217土坑(5区)
7. 1218土坑(5区)
8. 1233土坑(5区)

写真図版13 4層上面遺構

1. 1304土坑(5区)
2. 1417土坑(6区)
3. 1445土坑(6区)
4. 1494土坑(6区)
5. 162溝(3区)
6. 307溝(2区側)
7. 307溝(3区北方)
8. 307溝(3区南方)

写真図版14 4層上面遺構

1. 381溝(3区)
2. 501溝(4区)
3. 504溝(4区)
4. 586・587溝(4区)
5. 586溝(4区)
6. 587溝(4区)
7. 1000溝(1区側)
8. 1000溝(2区側)

写真図版 15 4層上面遺構

1. 1001 溝（2区）
2. 1108 溝（1区）
3. 1005 溝（1区）
4. 1464 溝（6区）
5. 216 井戸（3区）

写真図版 16 4層上面遺構

1. 216 井戸枠板検出状況
2. 216 井戸曲物内土器出土状況
3. 217 井戸
4. 264 井戸
5. 301 井戸（全て3区）

写真図版 17 4層上面遺構

1. 301 井戸上層土器出土状況
2. 301 井戸中層土器出土状況
3. 511 井戸（4区）
4. 512 井戸（4区）
5. 512 井戸（4区）

写真図版 18 4層上面遺構

1. 1215 井戸（5区）
2. 1215 井戸曲物
3. 1274 井戸曲物（5区）
4. 1274 井戸曲物内下駄出土状況
5. 1274 井戸曲物内土器出土状況
6. 1525 井戸（6区）
7. 1525 井戸底曲物検出状況

写真図版 19 4層下面遺構

1. 4層下面遺構全景（空撮写真モザイク）

写真図版 20 4層下面遺構

1. 1区全景〔東から〕
2. 1区全景〔北から〕

写真図版 21 4層下面遺構

1. 2区全景〔北から〕
2. 2区全景〔南西から〕

写真図版 22 4層下面遺構

1. 3・4区全景〔東から〕
2. 4区全景〔南東から〕

写真図版 23 4層下面遺構

1. 5区全景〔北東から〕
2. 5・6区全景〔西から〕

写真図版 24 4層下面遺構

1. 集落〔奥〕と大型方形周溝墓〔手前〕  
〔3区南西から〕
2. 5区北東隅集落域〔北東から〕

写真図版 25 4層下面遺構

1. 竪穴建物 1〔北から〕（3区）
2. 竪穴建物 2 南半〔北から〕（3区）
3. 竪穴建物 2 北半〔北東から〕（1区）

写真図版 26 4層下面遺構

1. 竪穴建物 3〔南から〕（3区）
2. 竪穴建物 4〔南東から〕（3区）
3. 竪穴建物 5〔北西から〕（1区）

写真図版 27 4層下面遺構

1. 竪穴建物 6〔南西から〕
2. 竪穴建物 7〔南東から〕
3. 竪穴建物 8〔西から〕（全て3区）

写真図版 28 4層下面遺構

1. 竪穴建物 7・9・10〔南東から〕
2. 竪穴建物 12〔南から〕
3. 竪穴建物 13〔南から〕（全て3区）

写真図版 29 4層下面遺構

1. 竪穴建物 14〔北東から〕（3区）
2. 竪穴建物 17〔南西から〕（2区）
3. 竪穴建物 20・21〔北東から〕（5区）

写真図版 30 4層下面遺構

1. 3002 土坑（竪穴建物 1）
2. 3054 ピット（竪穴建物 2）
3. 3045 土坑（竪穴建物 3）
4. 3051 土坑（竪穴建物 3）
5. 3103 土坑（竪穴建物 4）
6. 3058 土坑（竪穴建物 5）
7. 3338 土坑（竪穴建物 8）
8. 竪穴建物 8 内土器出土状況

写真図版 31 4層下面遺構

1. 竪穴建物 9 検出状況
2. 3191 土坑（竪穴建物 9）
3. 3394 土坑（竪穴建物 12）
4. 3431 土坑（竪穴建物 13）
5. 3450 土坑（竪穴建物 14）
6. 3958 土坑（竪穴建物 18）
7. 4219 土坑（竪穴建物 20）
8. 4220 土坑（竪穴建物 22）

写真図版 32 4層下面遺構

1. 3082 土坑
2. 3138 土坑
3. 3157 土坑
4. 3167 土坑
5. 3274 土坑
6. 3297 土坑
7. 3298 土坑
8. 3325 土坑（全て 3 区）

写真図版 33 4層下面遺構

1. 3336 土坑〔左〕・3335 土坑〔右〕（3 区）
2. 3350 土坑（3 区）
3. 3524 土坑（4 区）
4. 3579 土坑（4 区）
5. 3700 土坑（2 区）
6. 3701 土坑（2 区）
7. 3945 土坑（1 区）
8. 4029 土坑（1 区）

写真図版 34 4層下面遺構

1. 4170 土坑
2. 4187 土坑と 3001 溝
3. 4187 土坑土器出土状況
4. 4203 土坑
5. 4208 土坑と 4184 溝
6. 4214 土坑
7. 4215 土坑
8. 4216 土坑（全て 5 区）

写真図版 35 4層下面遺構

1. 4217 土坑（5 区）
2. 4218 土坑（5 区）
3. 4539 土坑（6 区）
4. 4543 土坑（6 区）
5. 4547 土坑（6 区）
6. 4550 土坑土器出土状況（6 区）
7. 4551 土坑（6 区）
8. 4553 土坑（6 区）

写真図版 36 4層下面遺構

1. 3001 溝（1 区側）
2. 3001 溝（3 区側）
3. 3001 溝（5 区側）
4. 3001 溝土器出土状況（5 区）
5. 3013 溝と竪穴建物 6（3 区）
6. 3013 溝
7. 4434 溝北半（6 区）
8. 4434 溝南半

写真図版 37 4層下面遺構

1. 4434 溝〔南東から〕（6 区）
- 2～5. 4434 溝土器出土状況

写真図版 38 4層下面遺構

1. 周溝墓 98〔西から〕
  2. 周溝墓 97〔奥〕・98〔手前〕〔東から〕
- （全て 1 区）

写真図版 39 4層下面遺構

1. 周溝墓 95〔奥〕・98〔手前〕〔南東から〕
2. 周溝外に並ぶ埋葬施設〔南東から〕
3. 1 区西辺方形周溝墓群〔北から〕（全て 1 区）

写真図版 40 4層下面遺構

1. 2 区中央部方形周溝墓群〔南から〕
2. 2 区東半部方形周溝墓群〔南から〕
3. 周溝墓 24〔奥〕・25〔手前〕・28〔手前左〕〔東から〕（4 区）

写真図版 41 4層下面遺構

1. 周溝墓 18・15・33〔奥より〕〔南から〕  
（3・4 区）
2. 4 区南西隅部方形周溝墓群〔北西から〕

写真図版 42 4層下面遺構

1. 5区東半部方形周溝墓群  
[右端は周溝墓 101] [南から]
2. 5区中央部方形周溝墓群 [東から]
3. 周溝墓 100 [北東から] (5区)

写真図版 43 4層下面遺構

1. 6区北西部方形周溝墓群  
[右端は周溝墓 145] [北から]
2. 4434 溝 [中央] と周辺の方形周溝墓群  
[南から] (6区)

写真図版 44 4層下面遺構

1. 周溝墓 98 墳丘裾の細溝(3904 溝) [東から]
2. 3900 溝
3. 3912 溝
4. 3919 溝
5. 3926 溝
6. 3930 溝
7. 3938 溝 (全て 1 区)

写真図版 45 4層下面遺構

1. 3600 溝
2. 3606 溝
3. 3618 溝
4. 3622 溝
5. 3640 溝
6. 3643 溝
7. 3644 溝
8. 3648 溝 (全て 2 区)

写真図版 46 4層下面遺構

1. 3364 溝
2. 3368 溝
3. 3381 溝
4. 3383 溝
5. 3405 溝
6. 3411 溝
7. 3533 溝
8. 3534 溝 (全て 3 区)

写真図版 47 4層下面遺構

1. 3501 溝
2. 3506 溝
3. 3507 溝
4. 3509 溝
5. 3527 溝
6. 3535 溝
7. 3556 溝
8. 3563 溝 (全て 4 区)

写真図版 48 4層下面遺構

1. 4126 溝
2. 4140 溝
3. 4141 溝
4. 4146 溝
5. 4147 溝
6. 4168 溝
7. 4198 溝 [左]・3365 溝 [右]
8. 4201 溝 (全て 5 区)

写真図版 49 4層下面遺構

1. 4424 溝
2. 4432 溝 [左]・4429 溝 [右]
3. 4455 溝
4. 4471 溝
5. 4491 溝 [左]・4493 溝 [右]
6. 4515 溝
7. 4525 溝
8. 4532 溝 (全て 6 区)

写真図版 50 4層下面遺構

1. 3572 墓壙 (4 区)
2. 3573 墓壙 (4 区)
3. 3574 墓壙木棺据え付け穴検出状況 (4 区)
4. 4024 墓壙 (1 区)
5. 4025 墓壙 (1 区)
6. 4033 墓壙 (1 区)
7. 4034 墓壙 (1 区)

写真図版 51 4層下面遺構

1. 4028 墓壙
2. 4028 墓壙木棺痕跡検出状況
3. 4038 墓壙
4. 4038 墓壙木棺痕跡検出状況
5. 4044 墓壙
6. 4044 墓壙木棺底板上人骨〈歯〉出土状況  
(全て1区)

写真図版 52 4層下面遺構

1. 4106 墓壙(5区)
2. 4534 墓壙木棺小口穴検出状況(6区)
3. 4535 墓壙(6区)
4. 4563 墓壙木棺据え付け穴検出状況(6区)
5. 4564 墓壙(6区)
6. 4565 墓壙(6区)
7. 4567 墓壙(6区)
8. 4568 墓壙(6区)

写真図版 53 4層下面遺構

1. 4560 墓壙
2. 4570 墓壙
3. 4571 墓壙〔奥〕・4572 墓壙〔手前〕  
(全て6区)

写真図版 54 4層下面遺構

1. 3413 溝土器出土状況(3区)
2. 3618 溝土器出土状況(2区)
3. 3640 溝土器出土状況(2区)

写真図版 55 4層下面遺構

1. 3621・3622 溝交点土器出土状況(2区)
2. 4155 溝土器出土状況(5区)
3. 4160 溝土器出土状況(5・6区)
4. 4168 溝土器出土状況(5区)
5. 4212 溝土器出土状況(5区)
6. 4470 溝土器出土状況(6区)
7. 4515 溝土器出土状況(6区)
8. 4531 溝土器出土状況(6区)

写真図版 56 4層下面遺構

1. 4201 溝土器出土状況
2. 4140 溝石庖丁出土状況〔東から〕
3. 4140 溝石庖丁出土状況〔南から〕  
(全て5区)

写真図版 57～63

4層上面出土遺物

写真図版 64～89

4層下面出土遺物

## 付 図 目 次

付図1 4層上面遺構全体平面

# 第1章 調査の経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

大阪府茨木市松下町において、平成27年12月に埋蔵文化財発掘調査の届出が事業主である茨木松下開発特定目的会社より提出された（茨教社第4-223号、平成27年12月28日付け）。本市教育委員会は受理した届出を基に確認調査の計画及び設計を行ない、翌28年1月25日～2月3日の実働7日で調査を実施した。その結果、開発対象地の全範囲に埋蔵文化財が遺存していることを確認した。

これを受け、敷地の一部のみに分布範囲が掛かっていた郡遺跡と倍賀遺跡の範囲拡大を目的として、事業主より遺跡発見の届出が提出された。本市教育委員会は、両遺跡のうち郡遺跡の拡大を提案し、大阪府教育委員会教育長宛で進達した（茨教社第2990号、平成28年2月22日付け）。結果、同年2月25日付け教文第11-14号にて郡遺跡の範囲拡大が、大阪府教育委員会教育長より事業主に通知された。

これと併行して、本件の調査規模はもとより本市における当時の調査体制では発掘調査の実施が困難と判断し、大阪府教育委員会教育長に調査の協力を依頼した（茨教社第3208号、平成28年3月17日付け）。結果、同年3月23日付け教文第3205号にて、公益財団法人大阪府文化財センターが協力する旨、回答を得た。そこで、当該調査の実施に関して、必要な事項を定め、適正かつ円滑な発掘調査を図ることを目的とした協定書の作成に着手した。協定書は、茨木市教育委員会、茨木松下開発特定目的会社、安西工業株式会社大阪支店、公益財団法人大阪府文化財センターの四者で締結した（平成

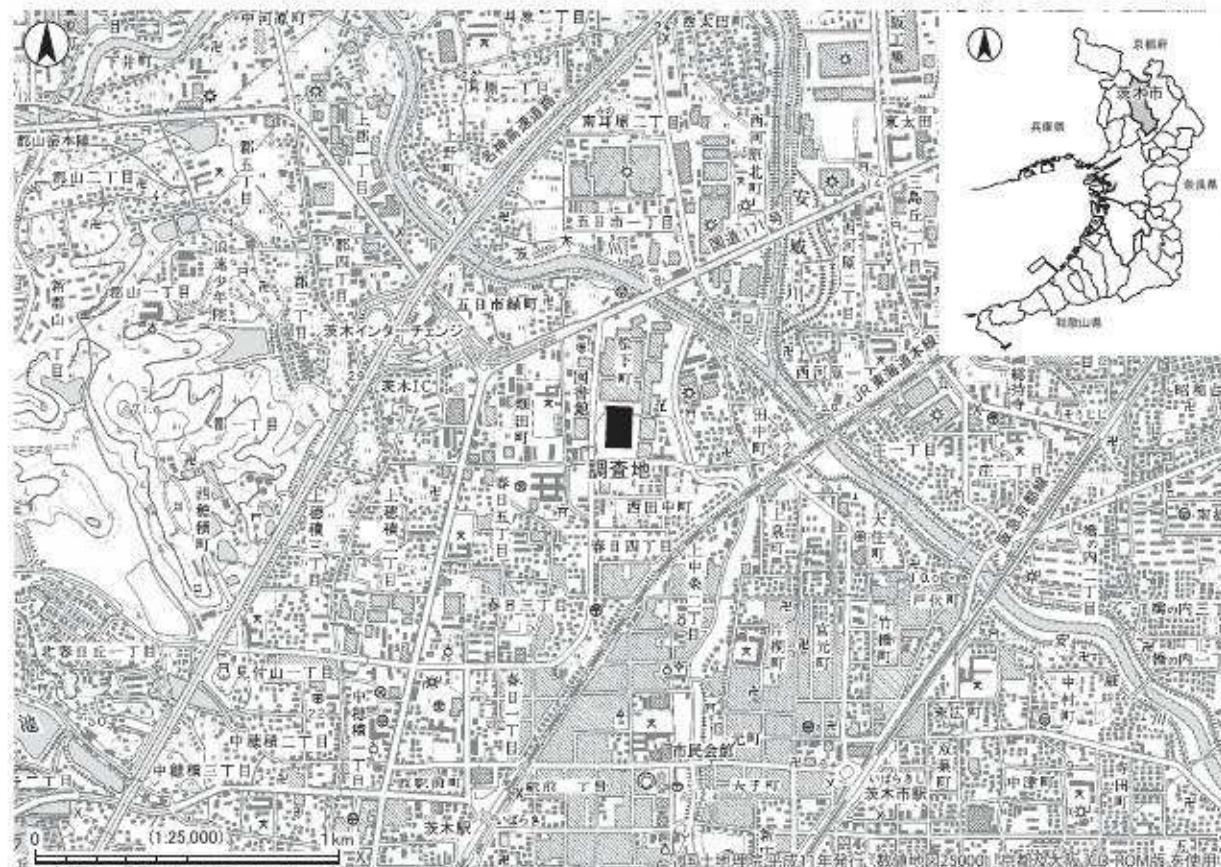


図1 調査地位置



写真1 2007年撮影航空写真と調査地位置

28年4月28日付け)。

以上を経て、平成28年6月1日～平成29年3月31日の期間で本発掘調査を実施した。別途後述するが、この間、平成29年1月29日には、発掘調査の成果を地元住民をはじめ広く府内外に公開するべく現地説明会を実施し、1200人近い参加者があった。

なお、本件付帯工事として雨水貯留槽の建設があったが、届出の遅滞により、遺憾ながら工事着手後の緊急調査を行うこととなった。当該調査成果については別途報告する予定である。

## 第2節 調査地周辺の既往調査

今回の調査地は郡遺跡の東端、倍賀遺跡の北端に位置する。両遺跡ともに市内でも調査事例の多い場所である。先ず、郡遺跡の発見の端緒は昭和 29 年に遡る。郡神社の南側の丘陵を切り開いて児童公園を造った際、弥生土器が出土したことを嚆矢とする。以降、高度経済成長期に至り名神高速道路の建設、大規模宅地開発などによって調査事例が増加していくこととなった。この間の詳細については〔茨木市教育委員会 1978・1993・2005〕に委ねるが、平成も半ばを過ぎると開発の勢いは停滞し、僅かに残っていた農地の宅地化や、建て直しによる戸建住宅に伴う調査が散見される。これらの典型例として、平成 27 年度に西田中町の交差点から西へ 100 m で実施した 11 戸の分譲住宅に伴う調査が挙げられる。当該調査では、戸建てという限られた調査面積の中で、11 箇所の言わば点データから面を把握するものであり、弥生時代後期と 6 世紀後半の柱穴や土坑を確認している〔茨木市教育委員会 2015・2016〕。

一方、郡遺跡に南接する倍賀遺跡は、昭和 37 年の上中条町における水路改修工事で弥生時代から古墳時代にかけての土器が発見されたことに端を発する〔茨木市 2012〕。以降、戸建住宅に伴う調査など、小規模な調査は行なわれてきたが、本格的な調査は昭和 61 年度の春日保育所、そして昭和 63 年度・平成 3 年度の銅鐸形土製品が出土したことで知られるセメント工場建設に伴う発掘調査を待たねばならなかった〔茨木市教育委員会 1993、茨木市 2014〕。また、特記すべきこととして、平成 29 年度の埋蔵文化財包蔵地範囲の拡大が挙げられる。これは、春日四丁目で計画のあった共同住宅建設に伴う包蔵地外の試掘調査により、古墳時代の遺構と遺物を確認したことによる。これによって、倍賀・春日遺跡間の空白地を僅かながらも埋める結果となった。

以上、本節の責を既刊報告書に委ね難駭な事例紹介となったが、これをみても今回の調査がいかに本遺跡において数少ない大規模な調査事例の一つであり、両遺跡の様相や動態がより明らかになる契機となったかが分かる。

### 参考文献

- 茨木市 2012 『新修 茨木市史』第 1 卷 通史 I 茨木市史編さん委員会編  
茨木市 2014 『新修 茨木市史』第 7 卷 史料編 考古 茨木市史編さん委員会編  
茨木市教育委員会 1978 『茨木市郡遺跡発掘調査概報』—上穂積・畑田地区—  
茨木市教育委員会 1993 『倍賀遺跡発掘調査概要報告書』—平成 4 年度 発掘調査概報—  
茨木市教育委員会 1998 『茨木市の史跡』  
茨木市教育委員会 2005 『郡遺跡発掘調査概要報告書』—茨木市立生涯学習センター建設事業に伴う発掘調査概要報告—  
茨木市教育委員会 2015 『平成 26 年度茨木市埋蔵文化財発掘調査概報 7』—国庫補助事業に伴う発掘調査—  
茨木市教育委員会 2016 『平成 26 年度茨木市埋蔵文化財発掘調査概報 8』—国庫補助事業に伴う発掘調査—

### 第3節 現地調査の経過(日誌抄)

- 平成28年6月1日  
3区から機械掘削開始(碎石等の盛土は先行して掘削)。  
1面目である4層上面を人力掘削にて精査。ピット多数検出。下層の弥生時代の遺構も部分的に確認できる。
- 6月2日  
廻付きの掘立柱建物を確認。
- 6月8日  
遺構掘削開始。建物に伴うピット(柱穴)は半裁し、写真撮影・図面作成。
- 6月10日  
土器を多く含む蛇行する溝(307溝)を検出。包含する土器はどれも弥生土器だが、明らかに4層上面で検出できる。
- 6月13日  
3区:機械掘削完了。
- 6月15日  
4区:北辺より機械掘削開始。
- 6月17日  
3区:井戸から巴紋スタンプが押された陶器片が出土。
- 6月22日  
3区:足場から掘立柱建物の写真撮影。  
4区:4層上面の遺構検出開始。
- 6月27日  
3区:空撮に向けた掃除。次日の天候が心配なため、念のため足場から調査区全景写真を撮影。  
4区:機械掘削完了。
- 6月28日  
3区:4層上面の空撮及び高所作業車から調査区全景写真の撮影。朝までの雨の影響できれいに仕上がらず。
- 6月30日  
3区:引き続き井戸等掘削。白磁等遺物多数、曲物も出土。  
4区:コの字状に曲がる区画溝とその内側でピット多数検出。
- 7月1日  
3区:北端より4層掘削開始。並行して遺構検出。竪穴建物・ピット・溝等確認。
- 7月5日  
3区:溝(集落を開む3001溝)の深さ確認のため、幅0.3mのトレーナーを入れたところ、ザル3箇分の遺物が出土。  
4区:遺構検出完了。ピット・土坑等半裁し、写真撮影・図面作成。
- 7月6日  
3区:4層掘削と並行し遺構検出するが、なかなか進まず。竪穴建物になると思われる方形プランも検出。
- 7月7日  
3区:竪穴建物には円形のものと方形のものがあることを確認。弥生時代中期から後期にかけての集落か。
- 7月8日  
3区:4層下面検出遺構の掘削開始。
- 7月11日  
4区:区画溝の北西角で墓を検出。白磁碗・刀が出土。
- 7月14日  
3区:竪穴建物の掘削開始。
- 7月16日  
3区:3001溝の検出・掘削。南端で方形周溝墓の周溝と重なるが、切り合い関係は不明。
- 7月20日  
3区:3001溝と竪穴建物4との切り合い関係について、溝が切っていることを確認。  
4区:昼から4層上面の空撮予定が、ヘリコプターの燃料漏れにより夕方に変更。午前中に高所作業車からの調査区全景写真の撮影。
- 7月21日  
4区:南西隅より4層掘削開始。0.3m程の厚みがあるが、土器はほとんど包含していない。
- 7月22日  
3区:引き続き竪穴建物の柱穴・炉等掘削と写真撮影・図面作成。  
4区:4層下面の遺構検出。周溝掘削開始。
- 7月23日  
4区:南西隅部の周溝掘削。肩部から前期の土器出土。  
3区との境付近からは大型の方形周溝墓を検出。
- 8月2日  
大阪府立今宮高等学校体験授業受け入れ。3区の3001溝掘削体験。
- 8月9日  
4区:小土坑掘削するが、どれも浅いか地震痕跡で、遺構ではないことが判明。
- 8月16日  
4区:北西部から周溝掘削。遺構にならない黒いシミ多い。
- 8月18日  
3区:3001溝完掘。
- 8月22日  
2区:機械掘削開始。
- 8月27日  
3・4区:高所作業車からの全景写真撮影。
- 8月29日  
2区:北西隅より遺構検出開始。  
3・4区:朝9:35から4層下面の空撮を開始するが、

大雨、無事撮影を終え安堵するが、夕方になり図化できないとの連絡が入る。	10月5日 1区：北壁観察中に、検出面直上の埋土に黒色土器が包含されていることを確認。
大阪府・茨木市による最終立会を受ける。	
8月30日 3・4区：朝7:50より遺構面の水抜き・掃除。 14:30から再度空撮。	10月11日 1区：機械掘削完了。
8月31日 3区：周溝に残した土層観察用の畔を掘削、埋め戻し開始。 4区：埋葬施設の調査開始。	10月13日 私立和光高等学校（東京都）現場見学。 2区：空撮に向けた掃除中に、豊穴建物を検出。周溝が不自然に広がっていた箇所で、検出当初は周溝として認識して掘削したことから、平面的に切り合い関係を検討できておらず、先後関係は不明。
9月1日 4区：北端の埋葬施設は小口板を地面に突刺す構造であることが判明。	10月14日 2区：4層下面の空撮及び高所作業車からの調査区全景写真の撮影。
9月2日 3区：4層上面検出の井戸の曲物を取り上げて、調査完了。 4区：埋葬施設はどれも浅く、木棺痕跡なし。埋め戻し開始。	10月17日 1区：北東隅落ち込みの遺構面から瓦器片出土。 2区：大阪府・茨木市による最終立会。
9月5日 4区：埋葬施設の写真撮影・図面作成を終え、調査完了。	10月18日 5区：機械掘削開始。
9月6日 2区：機械掘削・遺構検出に並行して遺構掘削開始。	10月22日 1区：4層上面の空撮及び高所作業車からの調査区全景写真の撮影。
9月7日 2区：機械掘削完了。3区から続く307溝を検出。	10月24日 1区：4層掘削開始。並行して遺構検出。 5区：4層上面遺構検出。
9月12日 2区：遺構掘削完了。遺構が稀薄なため空撮はせず、自前で三次元レーザー測量（～14日）。	10月25日 1区：4層掘削と並行して遺構検出。
9月15日 2区：高所作業車からの4層上面の調査区全景写真の撮影。午後から4層掘削開始。遺構検出と並行して遺構掘削も開始。	10月26日 1区：南端より4層下面検出のピットや豊穴建物掘削開始。
9月21日 2区：南西隅部に遺物が多い周溝を検出。形あるものがゴロゴロといった状況ではなく、大型片がザクザクといった感じで、供献というよりも廃棄されたような状況。	10月31日 5区：機械掘削完了。
9月24日 2区：4層掘削完了。周溝等掘削は続行。 1区：機械掘削開始。	11月4日 1区：周溝墓98の周溝内に細溝検出。先行して掘られた設計の基準となる溝か。
9月27日 1区：北東部に広い落ち込みあり、4層はその落ち込みの縁で薄くなり、無くなる。	11月9日 5区：遺構掘削開始。
10月1日 1区：遺構検出開始。掘立柱建物としてまとまるピット検出。ピットから白磁や瓦器出土。	11月10日 5区：縁付きの掘立柱建物検出。重複する総柱建物もありそう。
10月3日 1区：北東隅の落ち込み内からもピット検出。	11月15日 1区：周溝墓99の埋葬施設から小さな管玉が出土。
10月4日 1区：遺構掘削開始。	11月16日 6区：南東から機械掘削開始。
	11月17日 1区：大阪府・茨木市による最終立会。
	11月18日 1区：4層下面の空撮及び高所作業車からの調査区全景写真の撮影。

6区：機械掘削に並行して遺構検出開始。遺構全くなし。

11月21日  
1区：埋葬施設調査開始。埋土は水洗い。

11月22日  
1区：周溝墓99の埋葬施設埋土洗浄中に再び管玉が出土。

11月24日  
1区：周溝墓99の埋葬施設埋土洗浄中に3個目の管玉が出土。  
6区：調査区中央付近に掘立柱建物としてまとまるピットを検出。

11月29日  
5区：井戸から曲物が出土。さらに上に1段あったと思われるが失われている。  
6区：機械掘削完了。

12月1日  
1区：木棺が残る埋葬施設を検出。

12月2日  
5区：4層上面の空撮及び高所作業車からの調査区全景写真的撮影。

12月5日  
茨木市立畠田小学校5・6年生の遺跡発掘体験。  
6区：遺構掘削開始。

12月7日  
5区：井戸枠の曲物内から下駄や土師器皿出土。南から4層掘削開始。

12月8日  
1区：埋葬施設内の木棺上から歯が出土。まだまだ時間がかかりそう。  
5区：4層掘削と並行して遺構検出。

12月9日  
5区：遺構掘削開始。

12月10日  
5区：北東隅で小型の竪穴建物を検出。

12月12日  
1区：埋葬施設出土の歯の実測。木棺の取り上げについて茨木市と協議。

12月14日  
1区：歯の取り上げ、調査完了。

12月20日  
6区：4層上面の空撮及び高所作業車からの調査区全景写真的撮影。

12月21日  
6区：4層掘削開始。並行して4層下面の遺構検出及びピット掘削。

12月27日  
6区：周溝墓を検出するが、周溝が四角くめぐらないものが多い。周溝の掘削も開始。

平成29年1月5日  
5区：周溝墓30の南辺周溝から土器がまとまって出土。人形土製品・大型石庖丁も出土。

1月12日  
5区：人形土製品が出土した同じ溝から有柄式磨製石剣の柄頭が出土。

1月13日  
5区：集落域で検出した小型の竪穴建物20の周りで、円形にめぐる溝が認められる。竪穴建物である可能性が高い。

1月17日  
大阪大学福永伸哉教授来場。

1月18日  
5区：4層下面の空撮及び高所作業車からの調査区全景写真的撮影。

1月25日  
現地にて現地説明会に向けた記者発表。

1月27日  
茨木市教育委員会教育長視察。

1月29日  
午前：茨木市長視察。  
午後：5・6区で現地説明会開催。公式には1184名の来場者、名簿記入していない方を含めると実際には1300名程度か。

1月31日  
5区：現説で中断していた周溝墓101の西辺周溝西壁から出土した石庖丁の調査再開。  
7枚が壁面に食い込んだ状態で出土。

2月1日  
5区：石庖丁が埋められたものか確認するため断ち割り。結果、やはり遺構内に埋められたものではないことを確認。

2月2日  
5区：石庖丁取り上げ。

2月8日  
6区：4層下面の空撮及び高所作業車からの調査区全景写真的撮影。午後から埋葬施設の調査開始。

2月9日  
5・6区：大阪府・茨木市による最終立会。

2月14日  
6区：上層検出（見落とし）の井戸掘削。

2月15日  
文化庁川畠純文部科学技官視察。  
6区：井戸内から曲物出土。

2月21日  
6区：埋葬施設や井戸の完掘状態の写真撮影。現地調査完了。

## 第4節 調査成果の公開

調査も後半になり、弥生時代の方形周溝墓群の全容がほぼ確認できてきたことから、平成29年1月29日に遺跡の現地説明会を開催して、地域の方々に発掘調査現場及び出土遺物の公開を行なった。<sup>1)</sup>検出した方形周溝墓は140基（当時）を超えて、近畿地方でも群を抜く規模の墓域が広がっていたこと、また周溝から小さな人形土製品や、大型の石庖丁など大変貴重な遺物が出土したことなど話題が多く、テレビや新聞、またインターネットなどで大きく報道されたこともあり、当日は1,184名もの見学者に来場いただいた。説明会では、来場の方々に遺跡というものを実感してもらえるよう、調査区の中まで降りて周溝墓上を歩いていただき、周溝内から出土した状態のままの土器を間近で見ていただいた。また遺物展示場には土器や石器を詰めたコンテナを設置し、自由に遺物に触って観察していただけるような企画も行なった。普段触ることのできない遺物に触ることができ、来場された方々からは「手に触れられる展示物が良かった」・「触らせてもらったり、中に入れたりできて身近に感じた」や「画面等で見ると違って、やはり本物を見られるのはおもしろい。係の方の説明を伺うのはとても楽しい！」などの声が寄せられ、好評を得ることができた。しかし一方、予想をはるかに超える来場者を適切に誘導できず、「人が多いのでしかたないのですがもう少し誘導の声がほしかったです」や「見学者への誘導が不慣れだった。一度に入場させずに分けて説明していくなど工夫がほしい。列に並ぶ人と入場してきた人が混乱」など、いくつかのお叱りもいただいた。当日は受付での混乱を避けるため、開門予定時刻を10分早めたが、全体説明の時間をずらすことができなかつたため、場内が混雑し、結果的に様々な混乱が生じることとなってしまった。全体説明前に調査区内の見学へ誘導するなど、状況に応じた対応を取るべきだったのかもしれない。受付から遺物展示場・調査区内への順路、入場いただいてから担当者の説明までの時間及びその方法など、反省点の多い現地説明会となってしまった。千人を超すような現地説明会では、どのような混乱が生じるのかを想定し、問題が起った場合に臨機応変に対応できるよう、事前に細かな計画を立てておく必要がある。この反省を今後の説明会に活かしていくなければならない。

この現地説明会では、出土した人形土製品や石庖丁に大きな関心が寄せられ、「発掘物は早く市で展示してほしい」と、遺物展示の要望も多くあった。また現地説明会後の調査や整理作業で、さらに大型の石庖丁のほか、優美な鹿の絵画のある銅鐸形土製品や青銅器の製作に用いられた高杯形土製品などが発見されたことから、早速茨木市立文化財資料館では、平成29年4月26日から6月26日までの期間で、「掘りたてホヤホヤ—発掘速報展いばらき2016—」と題した展示を行ない、人形土製品や銅鐸形土製品の公開を行なった。<sup>2)</sup>さらに引き続き同年9月30日から11月27日までの間には、「銅鐸をつくった人々—東奈良遺跡の工人集団—」と題したテーマ展のなかで、当遺跡出土の高杯形土製品や送風管が展示され、あわせて青銅器生産に関する発表も行なった。このほか平成29年12月14日から翌年2月18日までの期間には、大阪府立弥生文化博物館において「発掘された弥生人の姿 人形・銅鐸形・石庖丁—茨木市郡遺跡・倍賀遺跡の最新調査成果—」と題したスポット展示を開催し、展示期間中の1月13日には調査成果の発表を行なった。<sup>3)</sup>また同博物館では平成30年7月14日から同9月9日までの間にも、「弥生のマツリを探る」と題した夏季特別展で、人形土製品と銅鐸形土製品を展示している。このほか平成29年6月24日には、近畿弥生の会主催の研究集会で、主に研究者を対象とした調査成果報告も行なった。<sup>4)</sup>



写真2 現地説明会風景(上)と配布資料(下左:表、下右:裏)

#### 参考文献

- 1) 茨木市教育委員会・公益財団法人大阪府文化財センター 2017.1.29 「郡遺跡・倍賀遺跡現地説明会資料」
- 2) 茨木市立文化財資料館 2017「掘りたてホヤホヤ—発掘速報展いばらき 2016—」展示パンフレット
- 3) 茨木市立文化財資料館 2017「銅鏡をつくった人々—東奈良遺跡の工人集団—」展示図録、三好孝一 2017.10.15「近畿地方の青銅器生産再考—近年出土例を通して—」テーマ展発表資料 公益財団法人大阪府文化財センター
- 4) 大阪府立弥生文化博物館 2017～2018「発掘された弥生人の姿 人形・銅鏡形・石庖丁—茨木市郡遺跡・倍賀遺跡の最新調査成果—」スポット展示資料、三好孝一 2018.1.13「郡遺跡・倍賀遺跡の最新調査成果」スポット展示発表資料 公益財団法人大阪府文化財センター
- 5) 大阪府立弥生文化博物館 2018「弥生のマツリを探る—祈りのイメージと祭場—」平成30年夏季特別展展示図録
- 6) 伊藤武 2017「茨木市郡遺跡・倍賀遺跡の調査—中期の方形周溝墓—」「近畿弥生の会 第20回集会京都場所発表要旨集」近畿弥生の会

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

茨木市は大阪府の北東部に位置し、南北 17.3km、東西 8.6km と南北に長く東西に短い市域を有している。北は京都府亀岡市、南は摂津市、東は高槻市、西は吹田市・箕面市・豊能町に接しており、人口は平成 29 年 5 月現在で約 28 万 1000 人を数える、大阪府下でも有数のベッドタウンである。

地理的特徴としては、北摂山地をほぼ東西に横切る有馬高槻構造線を境に南北で大きく二分される。北半部は標高 300 m 前後の秩父古生層系の岩石により構成される北摂山地、及びそこから派生する茨木丘陵からなる。南半部の西は標高 50 ~ 100 m 前後で、前期洪積層の隆起地形の一つである大阪層群で形成された千里丘陵が南北にのびる。東には富田丘陵、南は淀川・安威川等の河川によって形成された沖積層からなる三島平野が広がっている。

また、市内を流れる河川は北摂山地に源を発し、安威川・佐保川・茨木川や中河原付近で茨木川と合流する勝尾寺川等の主要河川が屈曲しながら北から南へと三島平野を流れ、最終的に神崎川と合流して大阪湾に注いでいる。安威古墳群等茨木丘陵に立地する遺跡を除いて、東奈良遺跡をはじめとする遺跡は、千里丘陵の東側、沖積扇状地に多く位置し、淀川中・下流域北岸に広がる北摂地域の西半部に属している。

今回調査された郡遺跡は、茨木川右岸の千里丘陵から派生した段丘の先端、標高 15 m 前後の高さに位置する。遺跡の範囲は南北に約 1.5km、東西 1 km と茨木川沿いにやや北西 - 南東方向に広がっており、今回の調査地点は遺跡の東端部にあたる。

### 第2節 歴史的環境

**旧石器時代** 茨木市及び周辺での最古の人類の足跡は、旧石器時代後期の国府型ナイフ形石器や有舌尖頭器が出土している北部山間部の初田遺跡や、安威遺跡 B 地点・丘陵部裾の太田遺跡・耳原遺跡・郡遺跡・福井遺跡・安威遺跡等で確認できる。いずれも表面採集や後世の遺物包含層からの出土である。

また、沖積地の微高地上に立地する東奈良遺跡や新庄遺跡でもナイフ形石器が出土している。

**縄文時代** 茨木市及び周辺では、縄文時代草創期から縄文時代中期にかけての遺跡は他の時代の遺跡数に比べると分布は稀薄で、挙げられるのは以下の 3 遺跡だけである。東奈良遺跡での縄文時代前期末の土器（大歳山式土器）の出土（2 点）、西福井遺跡での縄文時代中期から後期の土器、千提寺南遺跡での縄文時代中期末の土器（北白川 C 式土器）である。

縄文時代後期になると、太田遺跡・初田遺跡等の丘陵部の遺跡で土器の出土例がみられるようになる。

縄文時代晩期になると遺跡数が増加してくる傾向にあり、近年は耳原遺跡や牟礼遺跡・郡遺跡において明確な遺構と遺物を伴う調査事例が挙がっている。

茨木川（佐保川）と安威川に挟まれた舌状の低位段丘上に立地する耳原遺跡では、縄文時代晚期（滋賀里Ⅲ～Ⅴ式・船橋式・長原式）の土器棺墓群が検出され、多量の石鏃や石器が出土した。安威川右岸の沖積地に立地する牟礼遺跡では、縄文時代晚期（滋賀里Ⅲ～Ⅳ式・船橋式）の土器や自然流路・井堰・水田跡が検出されている。耳原遺跡から安威川を挟んで南に位置する郡遺跡では、縄文時代晚期前半と

考えられる石刀が出土している。また、東奈良遺跡では弥生時代の遺物包含層から縄文時代前期末(大歳山式・北白川下層式)の爪形文(C字)土器、弥生時代前期の溝から東北地方の縄文時代晚期後半(大洞A・A'式)に併行する浮線文土器、晚期後半の突帯文土器が出土している。

**弥生時代** 北部九州から東進してきた水稻農耕をはじめとする弥生文化は、大阪湾から淀川を北上し、茨木市にも急速に広がりを見せはじめる。

市内の弥生時代前期の遺跡では、東奈良遺跡・牟礼遺跡・耳原遺跡等前代の縄文時代晚期から続く遺跡において集落が確認できる。

特に東奈良遺跡は、北摂地域における大規模な拠点集落の一つと考えられており、当遺跡とも3km程度しか離れておらず、その関係が注目される。遺跡は南北約1.4km、東西1kmを範囲とし、畿内や九州の拠点集落と同様、集落の周りの何重もの環濠、畿内では最も古い弥生時代前期末の方形周溝墓や貯蔵穴・木器溜め遺構等が検出されている。遺跡の南東部では、流水文銅鐸の鋳型や大阪湾型銅戈の鋳型、ガラス勾玉の鋳型等が出土しており、集落の中には铸造工房施設があったと推定されている。

弥生時代中期になると更に遺跡数が増加する。中条小学校遺跡や中河原遺跡・太田遺跡・溝咲遺跡・春日遺跡・郡遺跡・倍賀遺跡・高地性集落の石堂ヶ丘遺跡等、市内の主要河川の両岸や丘陵部、山地部にまでその広がりを見せる。

中条小学校遺跡は東奈良遺跡の分村と推定されており、弥生時代中期後半の竪穴建物や溝・井戸等が検出されている集落遺跡である。またこの遺跡では東奈良遺跡と同様の列状土坑が検出されている。太田遺跡では弥生時代中期から後期の竪穴建物12棟が検出されている。郡遺跡では、弥生時代中期の方形周溝墓が50基以上検出されており、大きな墓域が形成されていたことが判明している。倍賀遺跡では、郡遺跡から続く弥生時代中期の方形周溝墓や溝状遺構・柱穴等が検出されている。また銅鐸形土製品が出土していることが特筆される。

周辺では、高槻市に東奈良遺跡と同様に拠点的集落と考えられている安満遺跡、平野部に郡家川西遺跡・芥川遺跡が、丘陵上に天神山遺跡があり、北摂山地の尾根上には、高地性集落と呼ばれる古曾部・芝谷遺跡や紅背山遺跡・萩之庄遺跡・成合遺跡が展開している。吹田市にも弥生時代中期から後期の高地性集落である垂水遺跡があり、摂津市には銅鐸片や高杯形土製品等の铸造関連遺物が出土した明和池遺跡がある。また千里丘陵東の山田別所では外縁付紐式銅鐸、箕面市如意谷遺跡では突線紐式銅鐸が単独出土している。

弥生時代後期にはさらに勝尾寺川北岸に宿久庄遺跡、安威川と茨木川に挟まれた丘陵の末端に安威遺跡、富田台地上に総持寺遺跡等が出現する。総持寺遺跡では弥生時代後期後半の土器棺墓や方形周溝墓が検出されている。

**古墳時代** 古墳時代前期中葉、北部の丘陵部に紫金山古墳や將軍山古墳が相次いで造営される。両古墳とも全長100m強の前方後円墳である。紫金山古墳では竪穴式石槨の内部から12面の銅鏡や貝製の腕輪・鏡形石・車輪石、筒形銅器、刀剣や鉄鏃等の鉄製品・武具等多種多様な副葬品が出土している。將軍山古墳の竪穴式石槨の石材は、和歌山県の紀ノ川流域から運ばれたとされる結晶片岩を用いている。盜掘を受けていたが、硬玉製勾玉やガラス玉・銅鏡・鉄鏃・刀剣等が出土している。

古墳時代前期末には、安威0号墳・安威1号墳が築造される。安威0号墳は直径約15mの円墳で、墳頂部には割竹型木棺を据えた粘土槨が2基(1・2号棺)検出されている。安威1号墳は全長約45m、後円部径約30mの前方後円墳で、後円部墳頂に東西主軸を持つ粘土槨2基(1・2号棺)が検出され

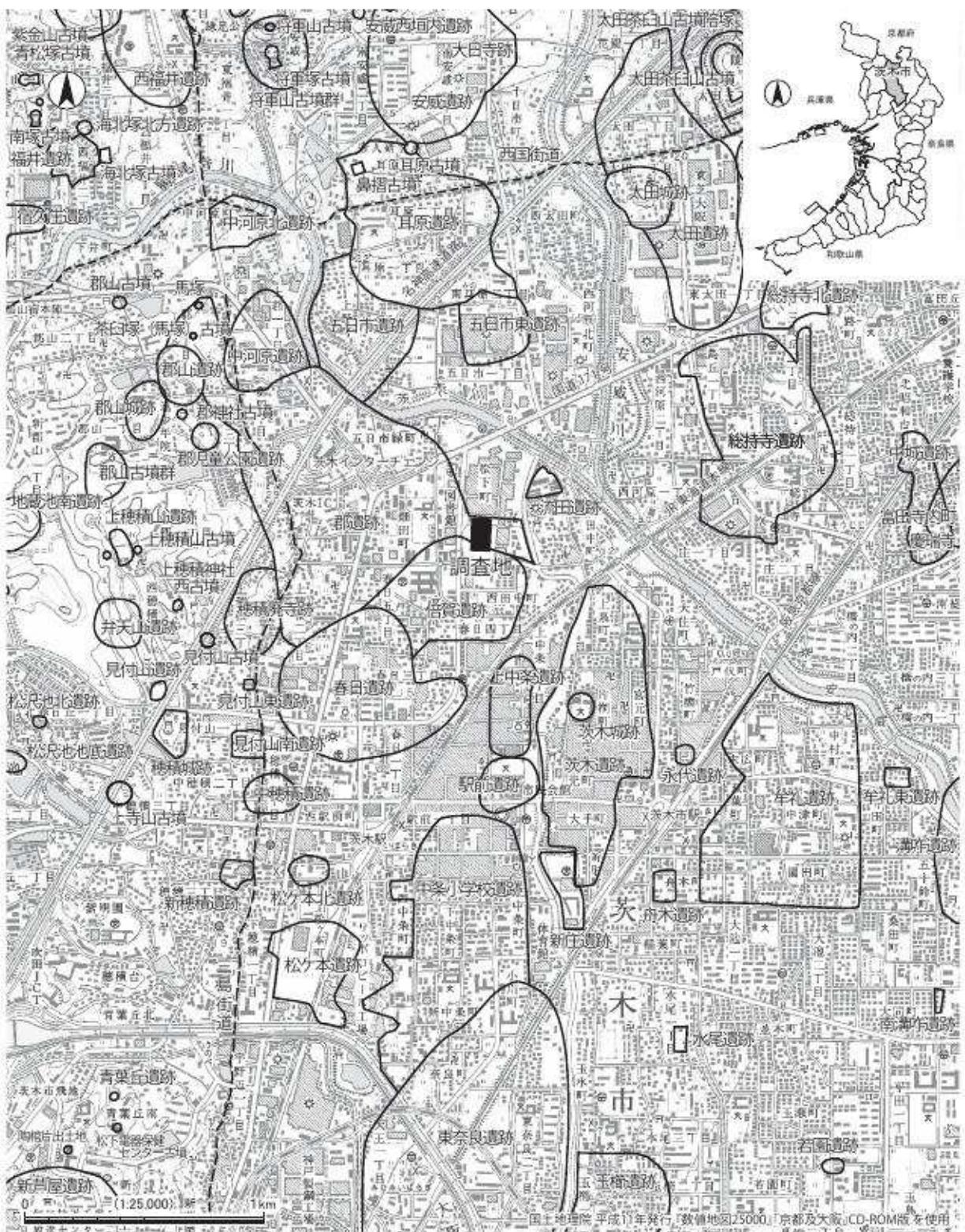


図2 調査地周辺の遺跡分布



写真3 1948年撮影航空写真と調査地位置

ている。

古墳時代中期になると、全長226m、後円部径138mの前方後円墳である太田茶臼山古墳（繼体天皇陵）が造営される。現在判明しているだけでも、陪冢が周囲に5箇所存在し、三島地域最大級の古墳である。また、石山古墳や高槻市の土保山古墳・番山古墳等が築造される。また、墳丘を削平された古墳時代中期の古墳が郡遺跡・駅前遺跡・中条小学校遺跡で検出されている。

近年では、太田茶臼山古墳と同じ安威川左岸の総持寺遺跡において、約40基もの古墳群が発見された。特徴的なのは40基のうち1基のみが円墳で、それ以外はすべて方墳であったことである。墳丘規模は4～15m程である。ここから出土した円筒埴輪や形象埴輪の中には、太田茶臼山古墳や今城塚古墳に埴輪を供給していた新池埴輪製作遺跡とする分析結果が得られているものもある。

古墳時代後期になると、横穴式石室を主体とする古墳が、安威川・佐保川・勝尾寺川流域の山麓部に出現する。茨木市域で、最も早く横穴式石室を導入したと推定されるのは青松塚古墳で、続いて南塚古墳・海北塚古墳が築造され、群集墳である安威古墳群・將軍山古墳群・新屋古墳群・長ヶ淵古墳群・郡古墳群・真龍寺古墳群・耳原古墳群等が築造された。特に耳原古墳は、直径23m前後の円墳で巨大な横穴式石室を持ち、玄室奥壁は花崗岩の一枚岩、側壁3段積みで玄室内には奥棺に凝灰岩製の家形組合式石棺、前棺は家形剝抜式石棺を配している。

周辺の高槻市では安威川と女瀬川に挟まれた富田台地上に、全長約190mの前方後円墳である今城塚古墳が築造されている。群集墳では塚原古墳群・塚脇古墳群・慈願寺古墳群が形成される。また古墳時代後期末から終末期にかけて初田古墳・上寺山古墳・阿武山古墳が築造される。

集落遺跡としては、弥生時代から引き続き東奈良遺跡・太田遺跡・中条小学校遺跡・郡遺跡・倍賀遺跡・安威遺跡・総持寺遺跡・溝昨遺跡等で集落が営まれるが、集落規模や構造等の具体的な事実は明らかではない部分もある。安威遺跡では朝鮮半島系の土器が多く出土すると共に、鉄滓や鉄器づくりの道具が出土し、鍛冶工房が存在したと考えられる。倍賀遺跡でも鍛冶関連遺物が出土している。溝昨遺跡では古墳時代を通して居住域と水田域が見られる。

高槻市では安満遺跡や大藏司遺跡・芥川遺跡等で弥生時代から引き続き集落が営まれている。また、吹田市域では古墳時代後期に千里丘陵東南部に大規模な須恵器窯が多数築かれる。

**古代** 古代に入ると、それまで三嶋（『日本書紀』雄略9年条）と呼んでいた高槻・茨木地域は主に高槻市側を嶋上郡、茨木市側を嶋下郡（初見は和銅4（711）年）と呼ばれるようになる。嶋下郡は、新野・宿人（久）・安威・穂積の4郷からなり、嶋下郡衙は旧山陽道（西国街道）沿いの郡付近にあったと推定されている。今回調査した郡遺跡は、古代にはそのほとんどが新野郷に属し、一部が穂積郷に属していたものと思われる。また嶋上郡衙は、昭和45年に富田台地上の芥川右岸沿いの高槻市郡家において、奈良時代の掘立柱建物跡群や「上郡」と墨書きされた土師器が出土したことなどから、当地にあったものとされる。

奈良時代以前には古代山陽道が成立していたと考えられるが、嶋上郡の郡家川西遺跡では古代山陽道の一部と考えられる石敷遺構が検出されている。嶋下郡の中河原北遺跡でも古代山陽道の一部と考えられる石敷遺構が検出されている。

その他、飛鳥時代から奈良時代頃にかけて創建された有力氏族の氏寺とされる穂積廃寺・太田廃寺・三宅廃寺があり、特に太田廃寺からは礎石・舍利容器一具や軒丸瓦・軒平瓦が出土している。平安時代前期の9世紀には、忍頂寺・総持寺が建立される。また安威大織冠山からは凝灰岩製の石櫃から三彩釉蔵骨器が発見されている。

最近の発掘調査によると、総持寺遺跡から総持寺北遺跡にかけて6～10世紀前半にかけての掘立柱建物跡を主体とする集落跡が確認されている。総持寺遺跡では7～8世紀代の建物が多く、約80棟検出されており、さらに数十棟は確認されることは確実である。また、総持寺北遺跡では9～10世紀代の建物が多く、約70棟検出されている。安威川と茨木川に挟まれた微高地上に立地する新庄遺跡では、平安時代の掘立柱建物群や溝が検出され、越窯青磁や定邢窯白磁・綠釉陶器・灰釉陶器や奈良時代の軒丸瓦・軒平瓦が出土している。郡遺跡においても畠田町内の西側、現在の主要地方道大阪高槻京都線沿いの茨木インターチェンジ付近で7～8世紀代と思われる建物群が検出されているほか、郡神社の北東裾野に広がる郡山遺跡からも当該期の建物跡が検出されている。

これまでの調査事例からすると、西国街道沿いの遺跡で古代の大規模な集落が発見されている。

**中・近世** 山地部では、栗栖山南墳墓群・佐保栗栖山砦・粟生間谷遺跡・千提寺遺跡群等が挙げられる。栗栖山南墳墓群からは室町時代から戦国時代の墓が約350基検出されている。墓の種類には火葬墓と土葬墓の双方があり、骨や火葬骨を納めその上に石仏や五輪塔を置く。千提寺遺跡群でも中世の墓地が検出されている。佐保栗栖山砦では曲輪や竪堀が検出され、15世紀中頃～末の山城とされている。隠れキリストンの里として知られる地域に位置する千提寺遺跡群からは、長方形墓に伸展葬で葬られたキ

リシタン墓が発見されており、中世墓から近世墓への流れの中にキリスト教墓を位置づけることができる例として注目されている。

平野部では、郡遺跡・宿久庄遺跡・総持寺遺跡・春日遺跡・倍賀遺跡・中条小学校遺跡・牟礼遺跡・溝堀遺跡・目垣遺跡・東奈良遺跡・玉櫛遺跡等で掘立柱建物や井戸を中心とした中世集落が展開している。このうち特に、総持寺遺跡と郡遺跡における中世（11～13世紀）の掘立柱建物や、区画溝の検出数及び遺物出土量は、市内のほかの遺跡と比べても群を抜いているといつてよい。前者は総持寺及び、その門前町にかかるもの、後者は郡衙衰退後も交通の要衝として絶えず重要視された場所であったのだろう。

室町時代になると楠正成によって茨木城が築かれ、中川清秀や片桐且元が城主となったが、江戸時代になって一国一城令によって廢城となった。茨木城は、現在宅地化が進んだことにより、その痕跡を窺い知ることはできない。茨木遺跡は茨木城の推定範囲内にある遺跡で、織豊期から江戸時代の流路や道路状遺構・土坑・溝等と、土器・瓦・木製品・金属製品等の様々な日常用具が出土している。

#### 参考文献

- 茨木市教育委員会 2003『東奈良』—東奈良土地区画整理事業に伴う発掘調査概要報告—  
茨木市教育委員会 2005『郡遺跡発掘調査概要報告書』—茨木市立生涯学習センター建設事業に伴う発掘調査概要報告—  
茨木市教育委員会 2015『中条小学校遺跡発掘調査報告書』—立命館大学いばらきキャンパス建設に伴う発掘調査報告書—  
公益財団法人大阪府文化財センター 2014『総持寺遺跡3』  
公益財団法人大阪府文化財センター 2017『総持寺遺跡4』  
公益財団法人大阪府文化財センター 2015『千提寺西遺跡・日奈戸遺跡・千提寺市販遺跡・千提寺クルス山遺跡』  
茨木市 2012『新修 茨木市史』第1巻 通史1 茨木市市史編さん委員会編  
茨木市 2014『新修 茨木市史』第7巻 史料編 考古 茨木市市史編さん委員会編

# 第3章 調査の方法

## 第1節 現地調査

調査台帳に登録する調査名は、茨木市教育委員会のこれまでの方式に則り「郡・倍賀遺跡 15-3」とした。遺物取り上げラベルや遺構図面等に記入する調査名（遺跡名）はすべてこの名称を用いた。

現地では南北約 160 m、東西約 100 m の調査地を一度に全面掘削することができなかったため、調査地内を南北に 3 分割し、さらにその中を東西に 2 分割した 6 調査区に分けて調査を進めた。調査区の名称は北東隅の調査区を 1 区とし、その西側を 2 区、1 区の南側を 3 区、その西側を 4 区、3 区の南側を 5 区、その西側を 6 区とした（図 4）。掘削土仮置き場等を確保し、且つ発掘作業が途切れることがないよう順次掘削を進めなければならなかったため、調査は中央の 3 区から開始し、4 区-2 区-1 区-5 区-6 区の順で、複数の調査区を併行して進めた。

調査完了時には、全ての調査区において茨木市教育委員会及び大阪府教育庁文化財保護課による最終確認を受け、埋戻し作業へと移った。発掘調査は 2 月末で完了し、残りの 1 カ月を埋戻し作業にあてた。

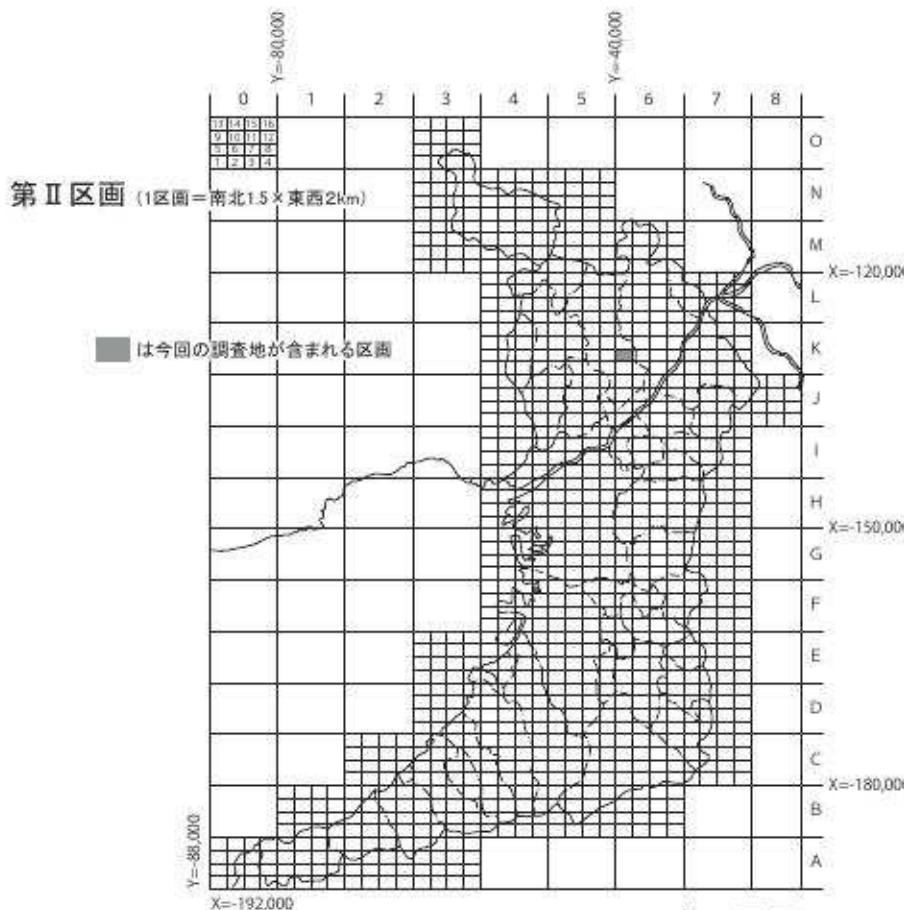
調査地には、既存の建物の解体に伴い、碎石による分厚い盛土が施されたため、調査のための機械掘削の前に、先行してその盛土の掘削作業を行なう必要があった。その後機械掘削により 1 層から 3 層までの旧表土層・近世以降の耕作土層等を除去し、4 層上面検出段階からスコップ・鋤簍等を使った人力掘削による遺構面の精査を行ない、遺構を検出した。掘削で生じた土砂はベルトコンベヤーにより調査区外へと搬出した。検出した遺構については、片手用草削りや移植ゴテ等を用いて丹念に掘り下げ、必要に応じて遺物の出土状況や遺構平面・埋土堆積状況等の図面作成と写真撮影を行なった。

遺物の取り上げ・遺構図面の作成・写真撮影等の作業については、基本的に公益財団法人大阪府文化財センターが平成 22 年に定めた『遺跡調査基本マニュアル<sup>D</sup>』に準拠して行なった。

地区割りについては、世界測地系に則った平面直角座標系第 VI 系を基準とし、I ~ V の大小 5 段階の区画を用いた。これは大阪府内全域に共通する地区割りである。第 I 区画は大阪府の南西部を通る X = -192,000 m・Y = -88,000 m を起点に、府域を東西 9 (0 ~ 8) 区画、南北 15 (A ~ O) に分割したもので、一区画は東西 8 km、南北 6 km となる。第 II 区画は第 I 区画を東西、南北各 4 分割の、計 16 区画 (1 ~ 16) に分けたもので、一区画は東西 2.0 km、南北 1.5 km となる。第 III 区画は第 II 区画を東西 20 (1 ~ 20) 分割、南北 15 (A ~ O) 分割する一辺 100 m の区画である。第 IV 区画は第 III 区画をさらに東西、南北ともに 10 (東西 1 ~ 10、南北 a ~ j) 分割した一辺 10 m の区画である。第 V 区画は第 IV 区画をさらに「田」の字状に 4 (I ~ IV) 分割したもので、一辺 5 m の区画である（図 3）。

上記の方法で区画した場合、この調査の第 I 区画は「K 6」、第 II 区画は「5」となり、第 III 区画は「16 J・16 K・16 L・17 J・17 K・17 L」の 6 区画に分かれる（図 3・4）。遺物の取り上げ作業については、すべての調査区でこの地区割りを用い、遺物取上げ用ラベルへの記入については、煩雑となるため第 I・II 区画は省略し、「17 K-3c」のように第 III 区画以降のみを記入した。

現場の写真は、6 × 7 フィルムカメラを使用し、モノクロフィルムとリバーサルフィルムによる写真的撮影を行ない、これまで 35mm カメラを使用していたモノクロフィルムとリバーサルフィルムの撮影については、完全にデジタルカメラによる撮影に切り替えた。使用したデジタルカメラは「Nikon



第 I 区画 (1区画 = 南北6 × 東西8km)

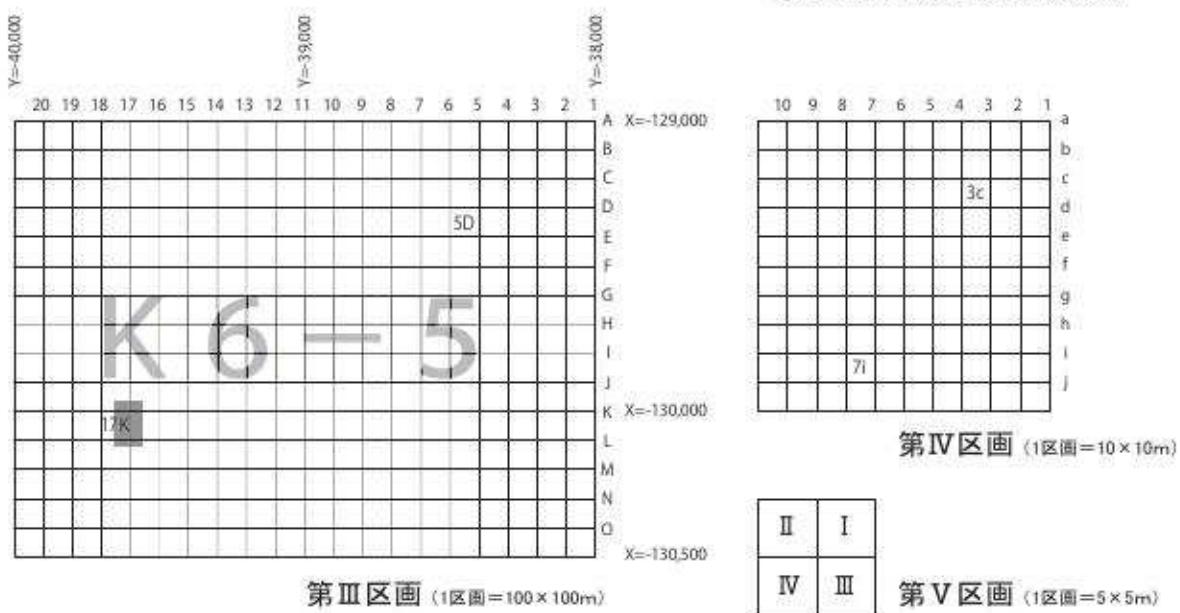


図3 地区割りの方法

D610」で、RAW データと JPEG データを記録した。

調査区の全景を撮影するような場合には、3・4区では3段の写真撮影用足場からの撮影も併用したが、基本的には高所作業車を利用して高位置からの撮影を行なった。その撮影は調査担当者が行なっている。

遺構全体の平面測量は、ヘリコプターによる空中写真測量を行ない、50分の1の全体平面図とそれ

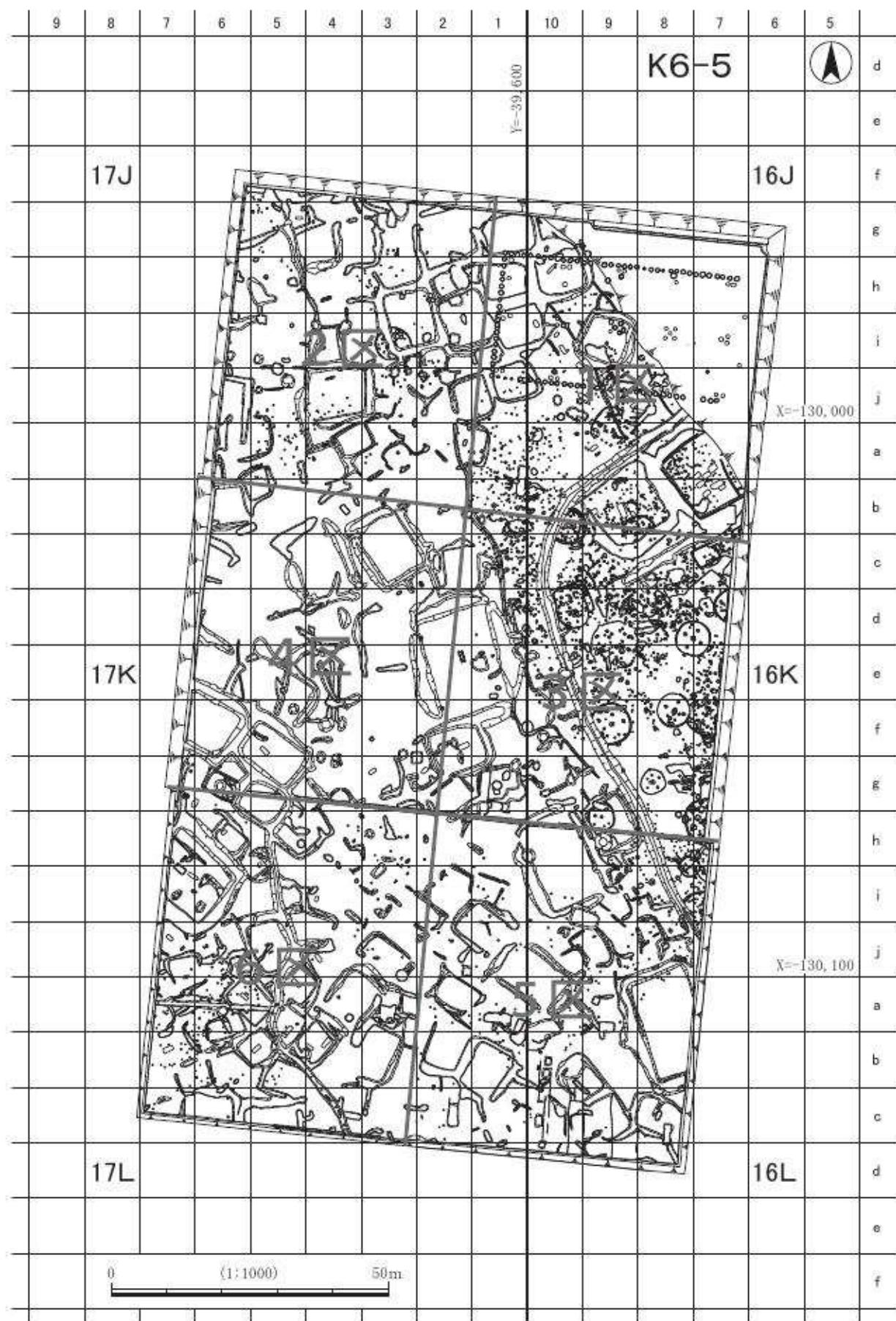


図4 調査区内の地区割り

を縮小編纂した 100 分の 1 の平面図を作成した。ヘリコプターは実機とラジコンを併用し、計 10 回の撮影を行なった。ただし 2 区の 4 層上面については、遺構数が少なかったため、三次元計測機器を用いたレーザー計測による平面図化に代えた。このほか遺物出土状況や井戸の詳細図面等、作成に時間がかかり、次の作業に支障が出るような場合には、写真測量による図化作業に切り替え時間の短縮に努めた。埋葬施設の平面・断面図や各遺構や調査地全体の断面図等については、オートレベルや巻尺・コンベックス等を用いて、随時 20 分の 1 や 10 分の 1、状況によっては 5 分の 1 の図面を作成した。これらの遺構図面は全て世界測地系に準拠して作成している。

方位は座標北を使用し、水準は全て東京湾平均海面（T.P.）を用いた。

遺構番号は遺構の種類、調査区等にかかわらず、1 から通しで振り、遺構の種類は遺構番号の後ろに付した。「1 土坑」・「2 溝」・「3 ピット」という具合である。つまり今回の調査区内には同じ番号の遺構は二つと存在していない。ただし複数の遺構の集合体である竪穴建物や掘立柱建物、方形周溝墓等については、各遺構番号とは別に「掘立柱建物 1」・「周溝墓 1」のように前に遺構種類を標記し、後ろに遺構ごとに 1 から番号を振っている。つまり、「1～6 柱穴」と「7 土坑」・「8 溝」の集合体が「竪穴 1」という具合である。

本書中の遺構番号・種類は、基本的には現地調査段階での遺構番号をそのまま使用しているが、現地調査の段階で番号の振り漏れもあり、整理作業の段階で新たに遺構番号を振り足したものがある。これについては現地で付した最終番号以降の番号、あるいは欠番となっていた番号を振っているため、たとえ一連の遺構でも番号が続かない場合もある。なお第 1 節で記したとおり、例えば 1 区の 4 層上面と 2 区の 4 層下面の調査のように、複数の調査区を同時進行で調査しているため、番号を振る際に混乱しないよう、事前に各調査区にある程度のまとまりで番号を割りあてた。また、4 层上面と下面との混同も避けるため、4 层上面は 1 から、4 层下面は 3001 以降の番号とした。このため遺構番号が大きく飛んでいる箇所がある。各調査区の遺構番号の開始番号は以下のとおりである。

1 区 - 4 层上面：1100 ～、4 层下面：3800 ～

2 区 - 4 层上面：1000 ～、4 层下面：3600 ～

3 区 - 4 层上面：1 ～、4 层下面：3001 ～

4 区 - 4 层上面：500 ～、4 层下面：3500 ～

5 区 - 4 层上面：1200 ～、4 层下面：4100 ～

6 区 - 4 层上面：1400 ～、4 层下面：4400 ～

遺構の種類についても、各調査区（担当者）によって方形周溝墓の埋葬施設を「主体」と呼んだり、「土坑」や「土壙」と呼んだりと統一できていないものがあったため、整理作業の段階で「墓壙」に変更・統一した。

## 第 2 節 整理作業

整理作業についても、公益財団法人大阪府文化財センターが定めた『遺跡調査基本マニュアル<sup>2)</sup>』に準拠して行なった。

現地調査期間中は、現場詰所において出土遺物の洗浄や、現地にて作成した遺構図面や撮影した写真の整理など基礎的な整理作業を発掘調査と併行しながら実施し、現地調査終了後の平成 29 年 3 月から平成 30 年 8 月までは、東大阪市所在の公益財団法人大阪府文化財センター中部調査事務所において

報告書刊行に向けた本格的な整理作業を進めた。

整理作業の対象となった遺物は、弥生時代と平安時代後期から鎌倉時代のものが中心で、現場撤収時の収納コンテナ数は497箱を数えた。内容は弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、国産施釉陶器、輸入陶磁器、管玉・石鐵・石庖丁等の石製品、曲物・下駄等の木製品、人形土製品・銅鐸形土製品等の土製品、釘等の鉄製品などである。

遺物はブラシを用いて洗浄し、遺物登録台帳と照合できるよう、面相筆やスタンプによる注記作業を行なった。遺物への注記は、調査名をローマ字で省略して「K O R · H K A 15 - 3 - 遺物登録番号」とした。出土遺物は登録番号ごとにデジタルカメラで撮影し、出土調査区・出土区画・出土層位・出土遺構・出土年月日等を記入したデジタル遺物登録台帳を作成した。その後遺構ごと、また遺物包含層出土遺物については、近隣の地区とも確認しながら接合作業を行ない、必要に応じて石膏を用いた遺物復元作業を行なった。同時に実測可能な遺物をピックアップし、ピックアップしたものは順次実測作業を行ない、必要に応じて拓本をとった。

上記の手順で作成した遺物実測図は、スキャナーで原図を取り込み、描画ソフト（Adobe Illustrator）を用いてトレースし、必要に応じてデジタル化した拓本等のデータを貼り込み、挿図を作成した。本書に掲載した遺物は最終的に662点となった。掲載遺物については、遺物登録台帳とは別に個体データとリンクした掲載遺物台帳も作成した。

遺構図については、空中写真測量によって調査地全体の遺構平面図が既にデジタル化されていたため、必要な箇所を拡大・加工し各平面図を作成した。現地で作成した個々の遺構平面・断面図や地層断面図等についても、遺物同様の手順でデジタルトレースし、挿図を作成した。

このように報告書掲載の挿図は、遺構図・遺物実測図ともにデジタルデータによって作成した。

現地で撮影したモノクロ・リバーサルフィルムについては、その都度現像・焼き付けに出し、直ちにアルバムへの収納及び台帳登録を進めた。写真台帳へはデジタルカメラで撮影した写真を用い、調査区・地区割り・撮影対象・撮影内容・撮影方向・撮影日等とともに、収納したアルバムを検索できるようアルバム・フィルム番号を記入した。

写真図版のうちの遺構写真については、6×7フィルムからの引き伸ばしではなく、デジタルカメラで撮影したデータを使用した。遺物写真については、挿図のレイアウトがほぼ決まった段階で、大まかに図版レイアウトを組み、中部調査事務所の写真室へ遺物を搬入して撮影を行なった。

整理作業を終えた遺物は、報告書掲載遺物とそれ以外の未掲載遺物とに分け、マニュアルにしたがって収納した。収納は55×35×15cmのコンテナを主に使用した。掲載遺物の多くはピックアップ後に復元しているため、最終的なコンテナ数は現場撤収時の497箱を上回り、掲載遺物87箱、未掲載遺物427箱（両者とも異形大型コンテナを含む）の計514箱となった。

これらの出土遺物や実測図面・写真・台帳等の記録類は、報告書刊行後すべて茨木市教育委員会に引き渡し、保管している。

#### 参考文献

1・2) 財團法人大阪府文化財センター 2010『遺跡調査基本マニュアル』

# 第4章 調査成果

## 第1節 基本層序

発掘調査着手時の調査地は、旧松下電器産業テレビ事業部の工場建設に伴う盛土及び、工場解体後の造成により、標高が北でT.P.17.0 m前後、南ではT.P.15.5 m前後を測る、北から南へ下る地形を呈していた。しかし昭和33年に稼働を始めたこの工場が建設される以前は、現在よりも2.5～1.9 mも低く、標高がT.P.14.5～13.6 mを測る、北から南へそして西から東の旧茨木川へ向かって下がる地形の水田が広がる景観であった。

調査地は、蛇行しながら北東から南西へ流れる旧茨木川の西側に位置しているため、主に旧茨木川からの土砂の供給により地層が形成されたと考えられる。弥生時代から中世段階の層準には自然堆積層は見られず土砂の供給は緩やかであったと考えられるが、近世段階には複数の自然堆積層が見られる個所もあり、頻繁に土砂の供給があったことを示している。このため、これらを母材とした作土層も粗粒砂から極粗粒砂を多く含む、砂っぽい土質である。おそらく、旧茨木川の天井川化によるものであろう。

調査では盛土下の現代作土層の下層を1層とし、下方へ順に2層、3層、4層、5層に分層した。なお、5層は人為的な擾乱が及んでいない層で基盤層とした。いわゆる地山である。

以下、各層について記述するが、色調や土質などは調査区東壁の層準を基にする。

### 現代の盛土層

昭和33年の旧松下電器産業テレビ事業部の工場建設に伴う盛土及び、工場解体後の盛土である。層厚は1.7～2.8 mを測る。

### 現代作土層

昭和33年の旧松下電器産業テレビ事業部の工場建設直前の作土層である。畝立てがきれいに見られる個所もあり、2～3層に細分できる。色調は大きく青灰色・灰色・黄灰色を呈する。土質はシルト混じりの極細粒砂から細粒砂で、粗粒砂から小礫を含む。また、ラミナを有する極細粒砂が部分的に見られる。作土としてはかなり砂っぽい土質である。層厚は0.08～0.25 mを測る。

#### 1層

近・現代の作土層である。調査区の大部分では層厚0.3～0.6 mを測り、3～6層に細分される。なお、調査区北東隅では北東方向へ向かって大きく下がる地形が認められ、ここでは層厚1.1 m前後と分厚く、10～11層に細分される。

色調は大きく青灰色・にぶい黄色・灰白色・灰オリーブ色を呈する。土質は、粗粒砂から小礫混じりシルト・粗粒砂から小礫混じる極細粒砂である。ラミナを有する極細粒砂が部分的に見られる。旧作土層同様にかなり砂っぽい土質である。

#### 2層

近世段階の作土層である。2層は、1層の形成時に失われたと考えられ、存在しない箇所も多く見られる。層厚は0.02～0.04 mと薄い。

色調は大きく褐灰色・オリーブ灰色・灰黄色・灰色を呈する。土質は、粗粒砂から小礫を含むシルト・

粗粒砂から小礫を含む極細粒砂である。  
やはり砂っぽい土質である。

### 3層

中世段階の作土層である。層厚は 0.06m 前後と薄いものの、調査区北東隅の北東方向へ向かって大きく下がる部分を除き調査区全体に見られる。

色調は灰色・黄灰色・灰黄褐色・褐灰色を呈する。土質は粗粒砂から小礫混じりシルトである。

調査区北東隅の北東方向へ向かって大きく下がる部分では、1層の形成時に失われている。

### 4層

弥生時代から古墳時代前期にかけての古土壤である。いわゆる遺物包含層で、特に弥生時代の遺物を多く包含していた（遺物 10）。調査区北東隅の北東方向へ向かって大きく下がる部分を除き、調査区全体に見られる。本調査区の鍵層である。4層の上・下面で遺構検出を行なっている。上面では平安時代から鎌倉時代にかけての掘立柱建物や井戸・土坑・溝などを検出している。下面では弥生時代中期から後期の方形周溝墓群や竪穴建物・土坑・溝などを検出している。

色調は灰色・黒褐色・褐灰色を呈する。土質は粗粒砂から小礫混じりシルト・粗粒砂から小礫混じり細粒砂で、全般に土器を多く含む。

### 5層

基盤層とした層で、いわゆる地山である。

色調はオリーブ灰色・灰色・灰黄色・灰黄褐色・暗灰色を呈する。土質は粗粒砂から小礫混じりシルトで、調査区北東隅の北東方向へ向かって大きく下がる部分では極粗粒砂から小礫である。この部分は旧茨木川の河道内にあたる可能性が考えられる。

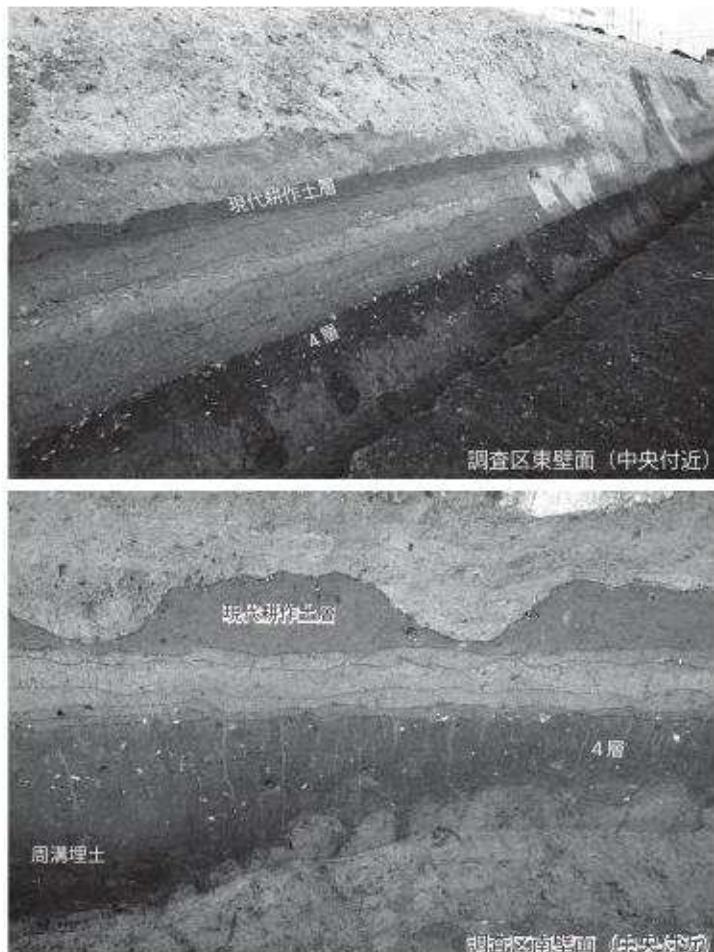


写真4 調査区内地層堆積状況

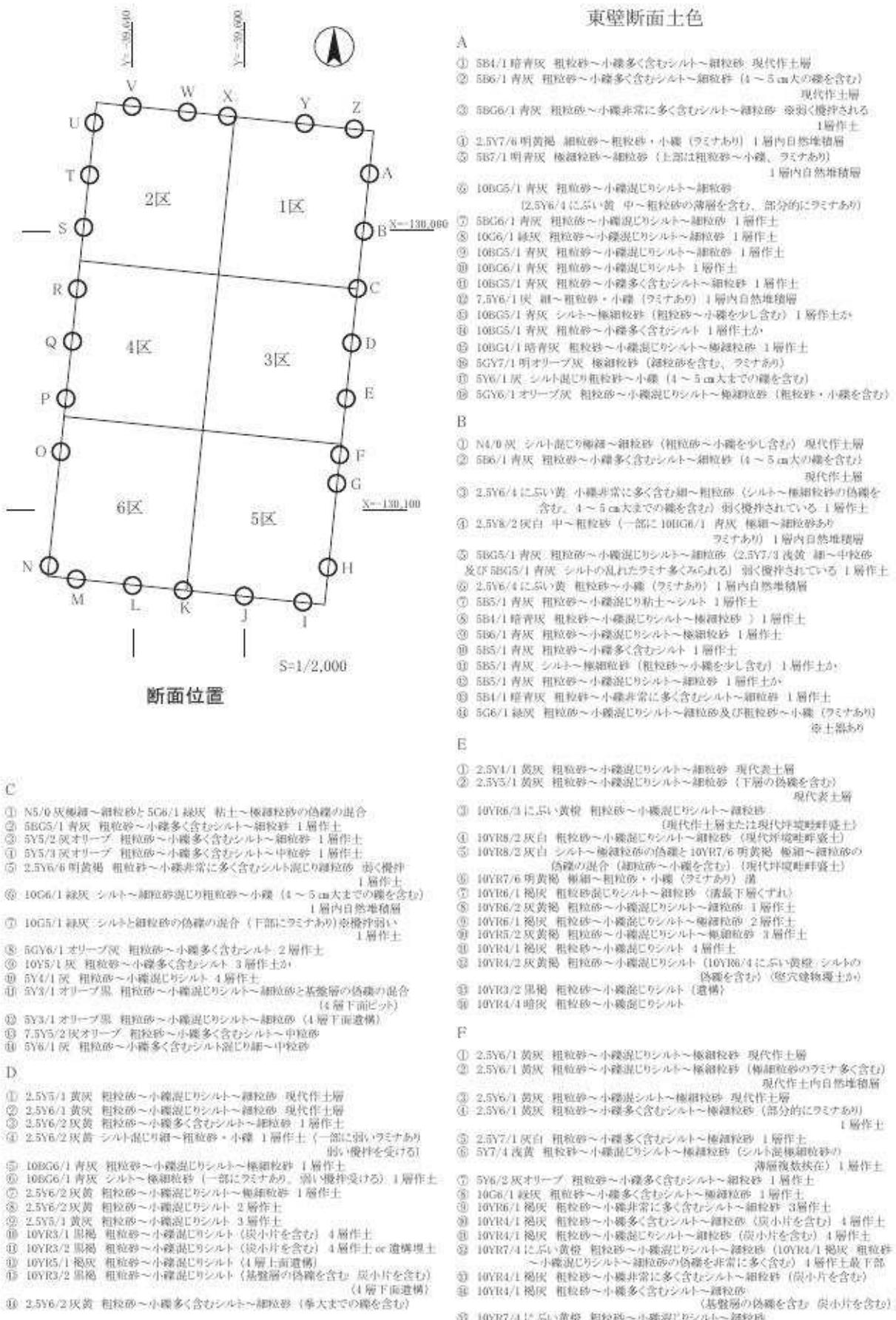
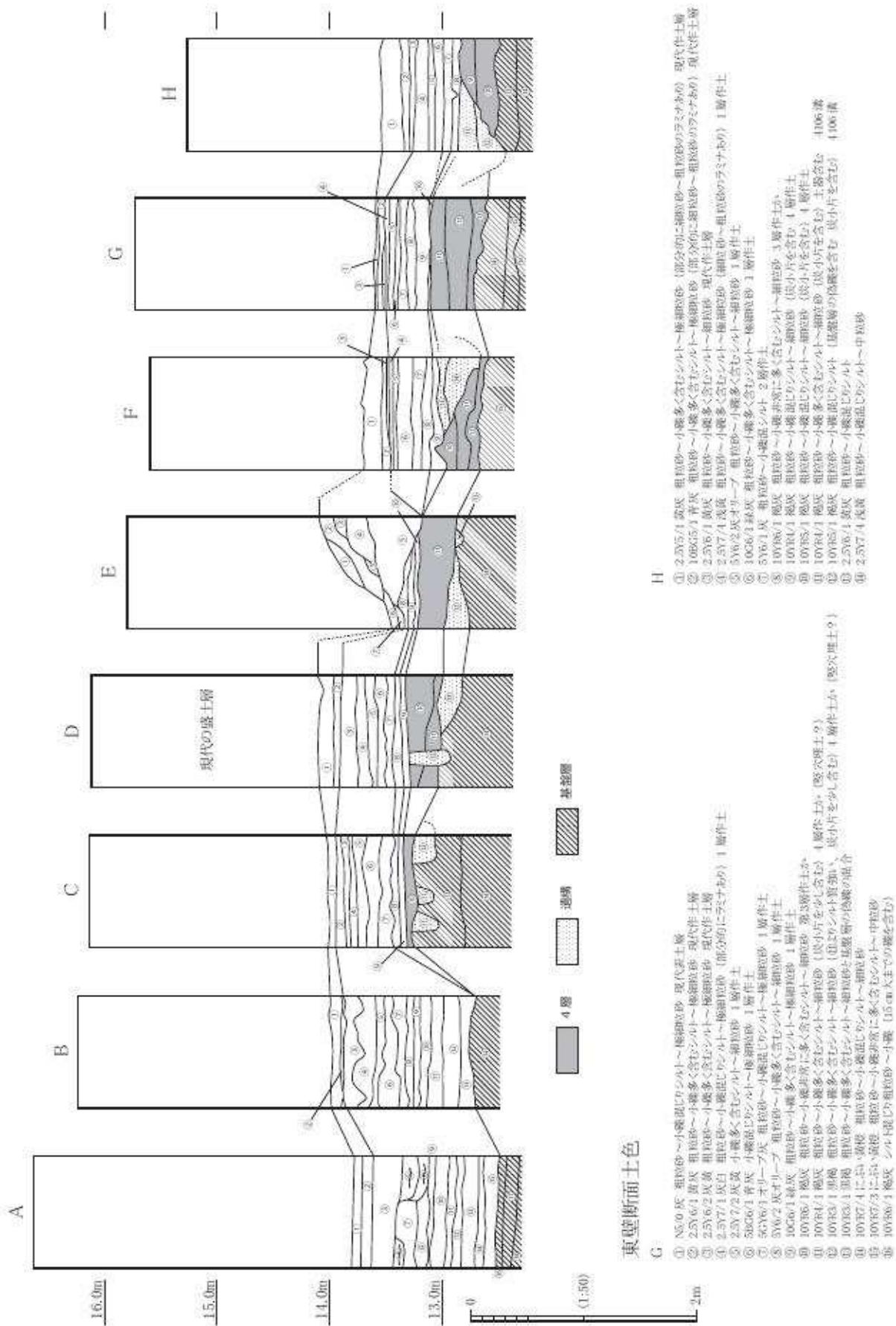


図5 基本層序柱状断面位置及び東壁断面土色



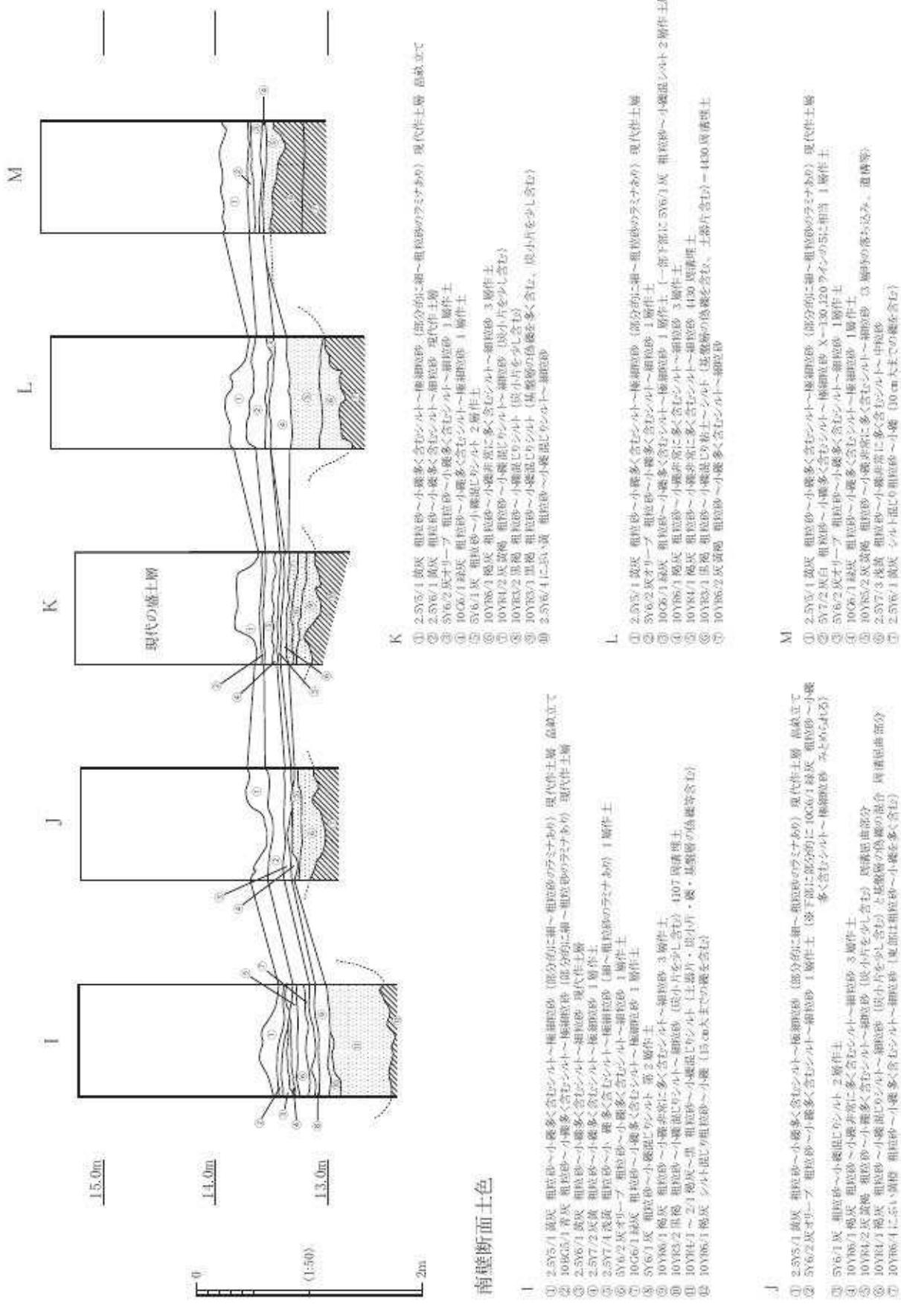


図7 基本層序柱状断面（南壁）

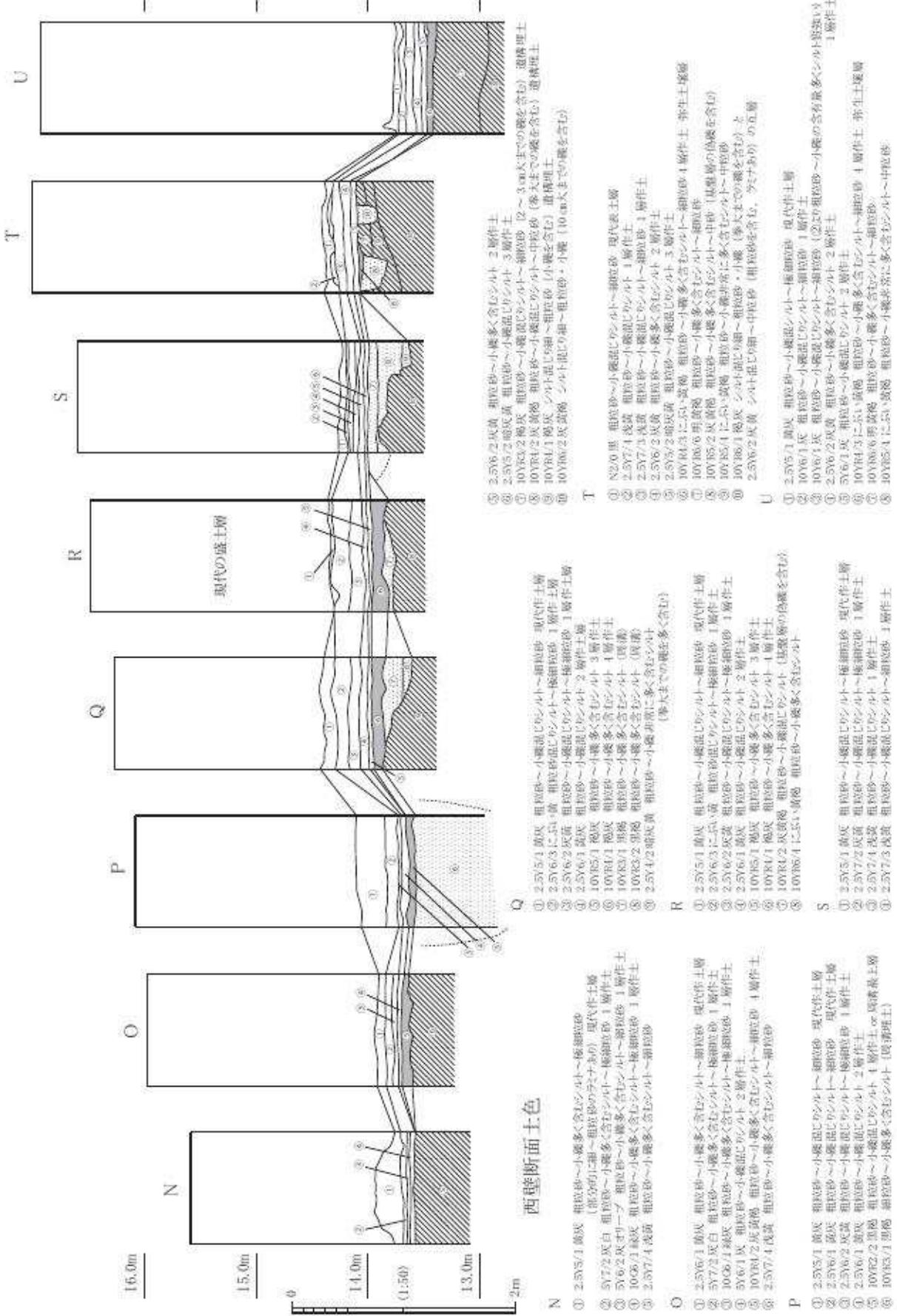


図8 基本層序柱状断面（西壁）

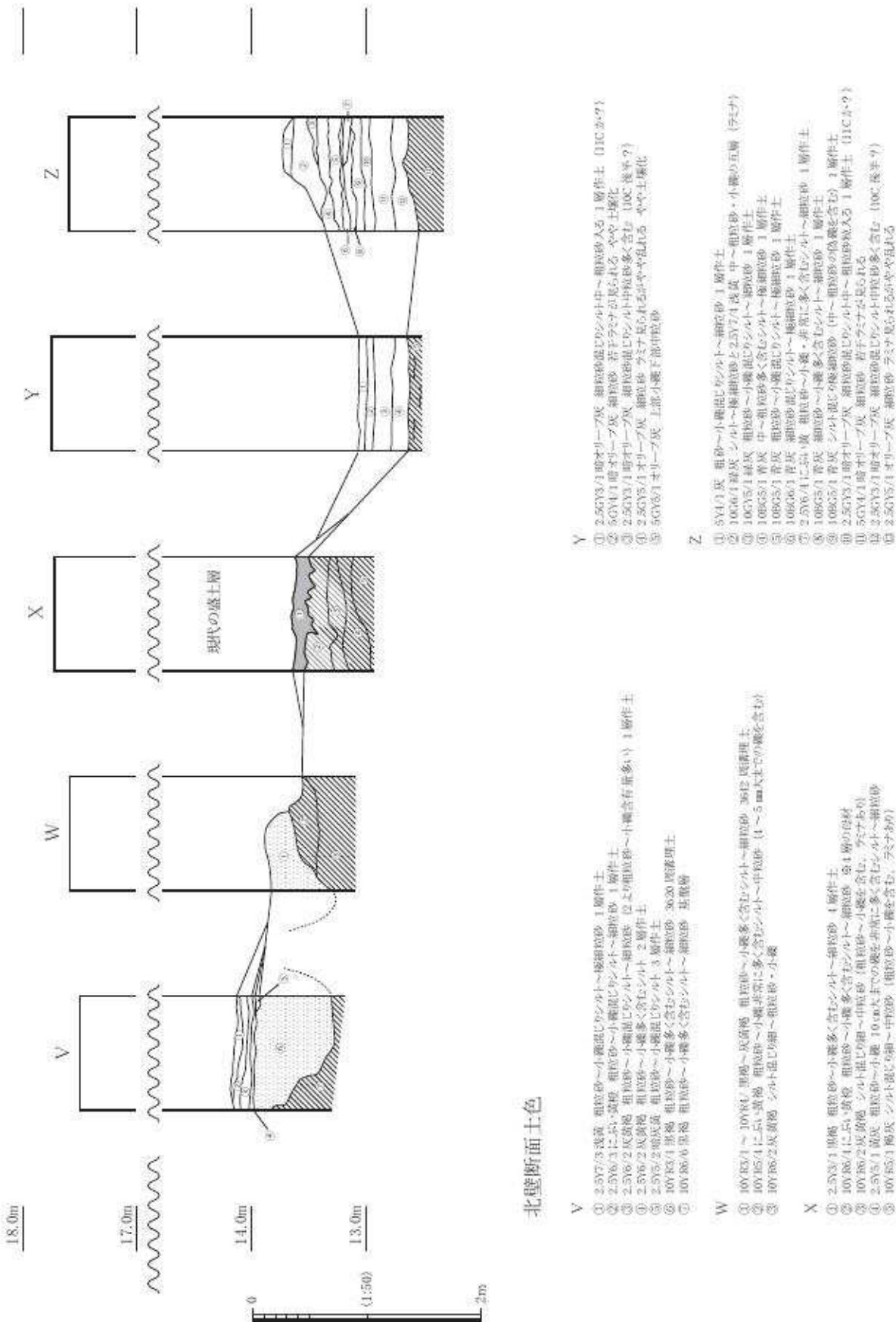


図9 基本層序柱状断面（北壁）

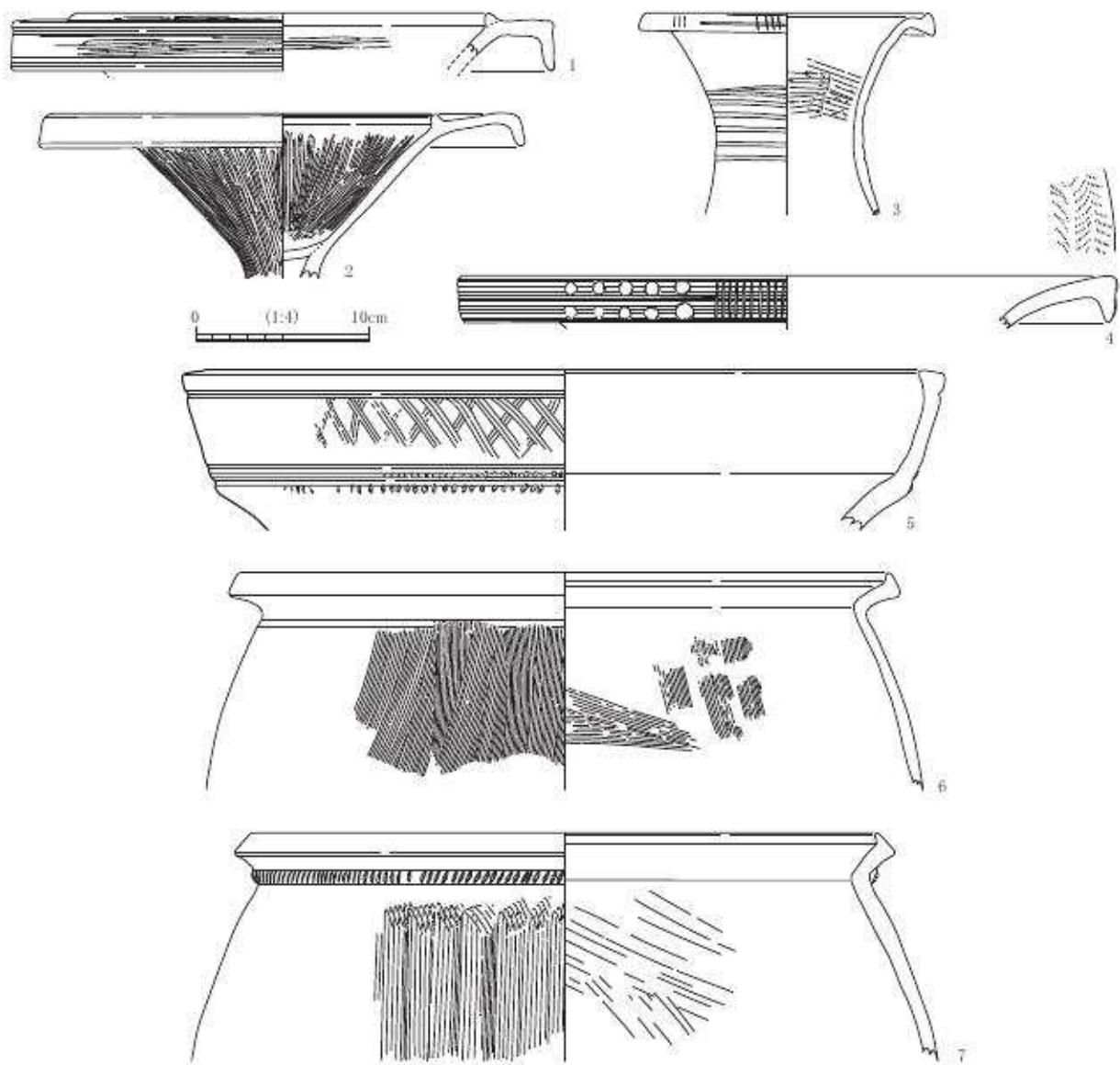


図 10 4層出土遺物

## 第2節 4層上面検出遺構と出土遺物

4層上面では、古代末から中世前半期（10世紀後葉～13世紀中葉）の遺構を検出した。

検出した主な遺構は、掘立柱建物38棟、塙6条のほか、多数のピットや土坑、墓や井戸などで、掘立柱建物の中には廂や縁が付属する非常に立派なものもある。13世紀になると細溝で周囲を方形に囲むまさに屋敷と呼ぶべきものも現れるなど、当時の景観を知る貴重な成果を得ることができた。

なお出土遺物については、製作技法など個々の細かい説明は一覧表に譲り、ここでは遺物（遺構）の

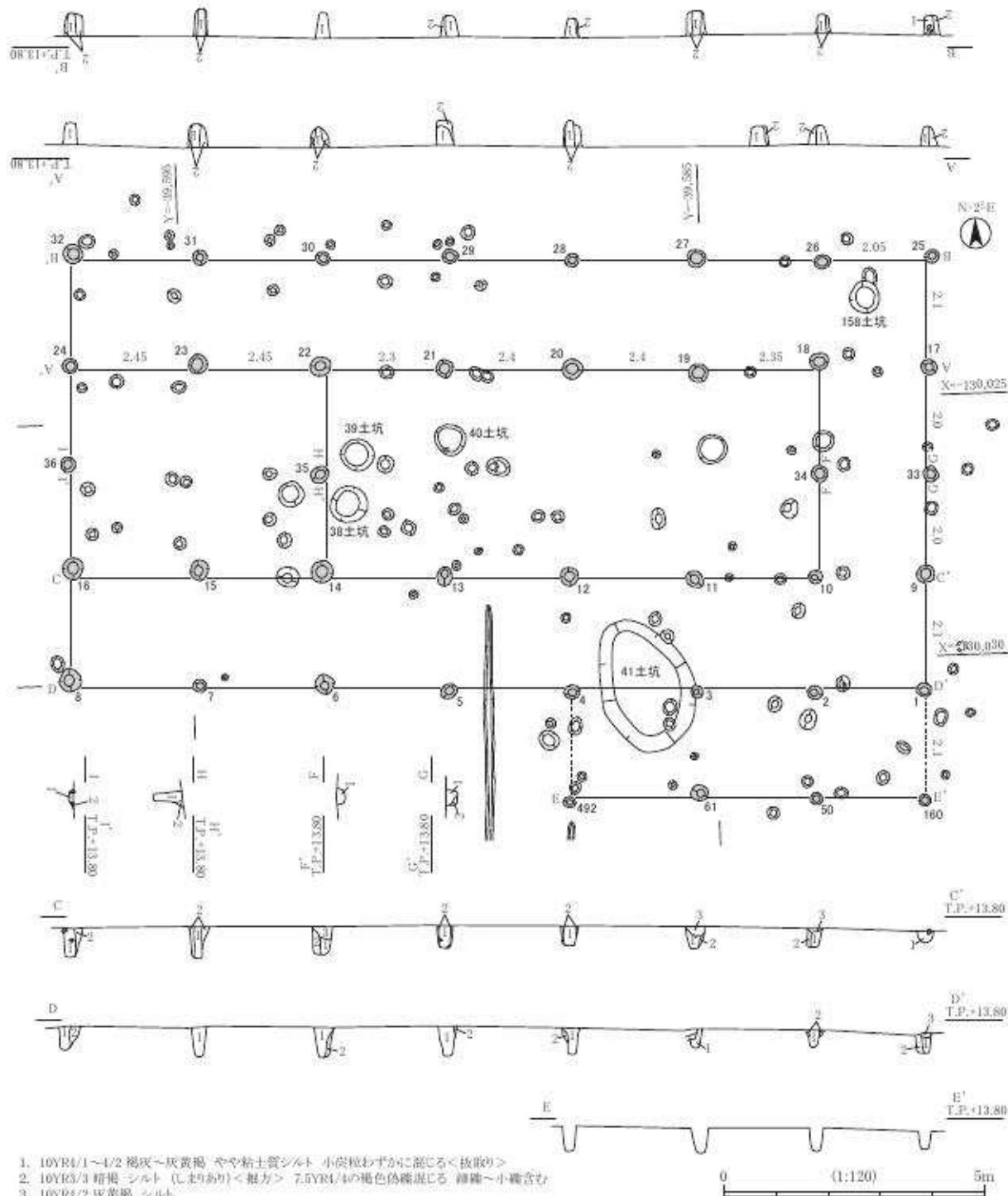


図11 掘立柱建物1平面・断面

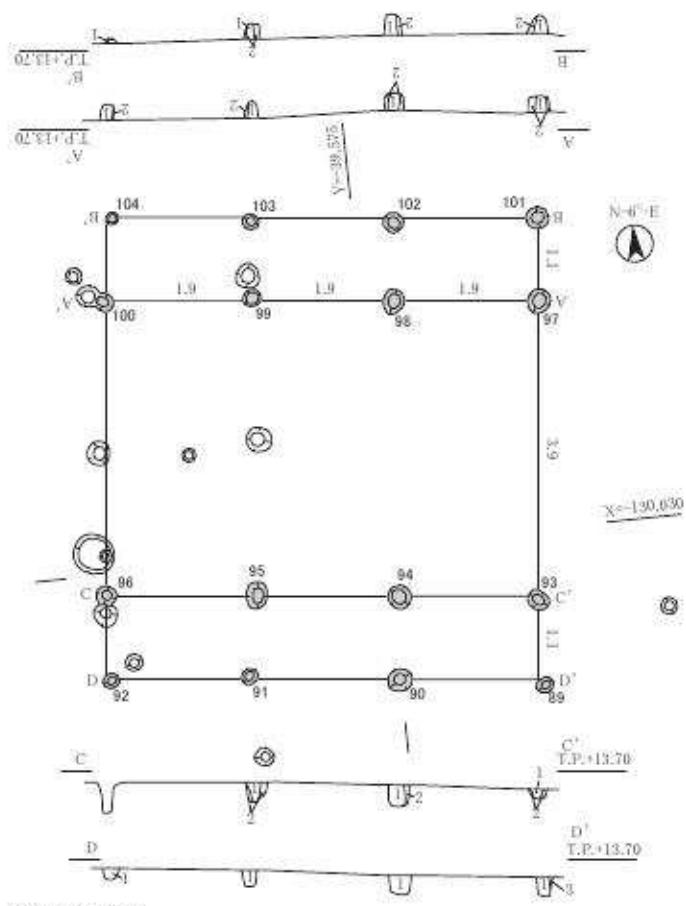
時期など全体に関わる事柄についてのみ記すこととする。

**掘立柱建物1（図11・33）** 3区の北端部に位置する。東西7間（16.4m）、南北4間（8.2m）の西面以外の3面に廂が付く東西棟建物で、今回の調査で検出した掘立柱建物の中では最大規模である。身舎の桁行柱間寸法は僅かにばらつきがあり、東から2.35m、2.4m、2.4m、2.3m、2.45m、2.45mで、西から2間目の柱間に間仕切りの柱を設ける。梁間の柱間寸法は2.0m等間である。廂の出は南北ともに2.1m、東面が2.05mで、身舎と柱筋を揃える。建物の振れはN-2°-Eである。なお南面廂の外側東端に、さらに2.1m隔てて東西3間の柱列が見られる。これについては孫廂状の張り出しであったのか、一本柱壙であったのか判断が難しい。柱穴は直径0.3m程度の円形である。

7柱穴から黒色土器A類の椀（8）、13柱穴から土師器皿（9）、20柱穴から緑釉陶器の碗（10）が出土している。9はての字状口縁皿で、器壁が非常に薄く胎土は精良である。10の緑釉陶器椀は、胎土は浅黄橙色で軟質、釉は濃緑色を呈する。近江産か。このほか19柱穴から鉄釘（47）が1点出土している。

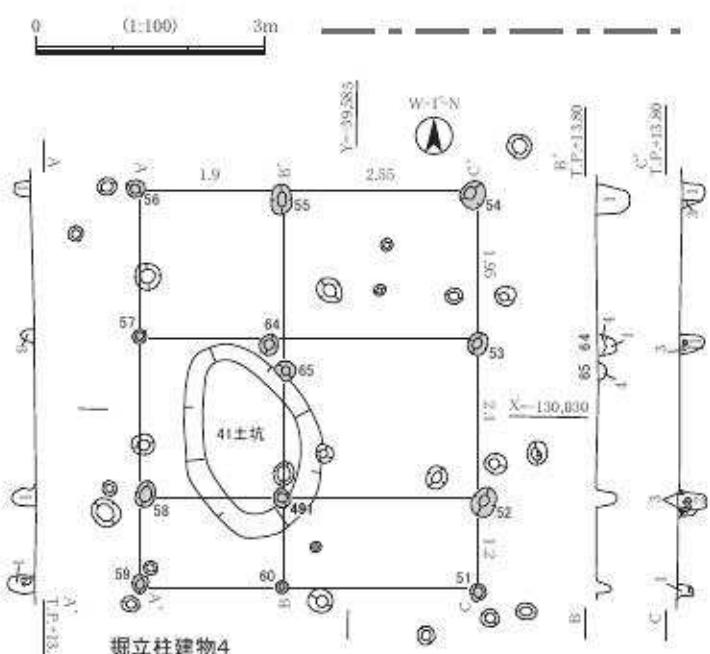
この建物の柱穴から出土する遺物は、10世紀後葉を中心とする時期のものがほとんどで、他の建物よりも明らかに古い。この建物を核に集落形成が始まったことがうかがえる。

**掘立柱建物2（図12・33）** 掘立柱建物1の東側に位置する。東西3間（5.7m）、南北3間（6.1m）の南北2面に廂（縁）が付く東西棟建物で、建物の振れはN-6°-Eである。身舎の柱間寸法は桁行



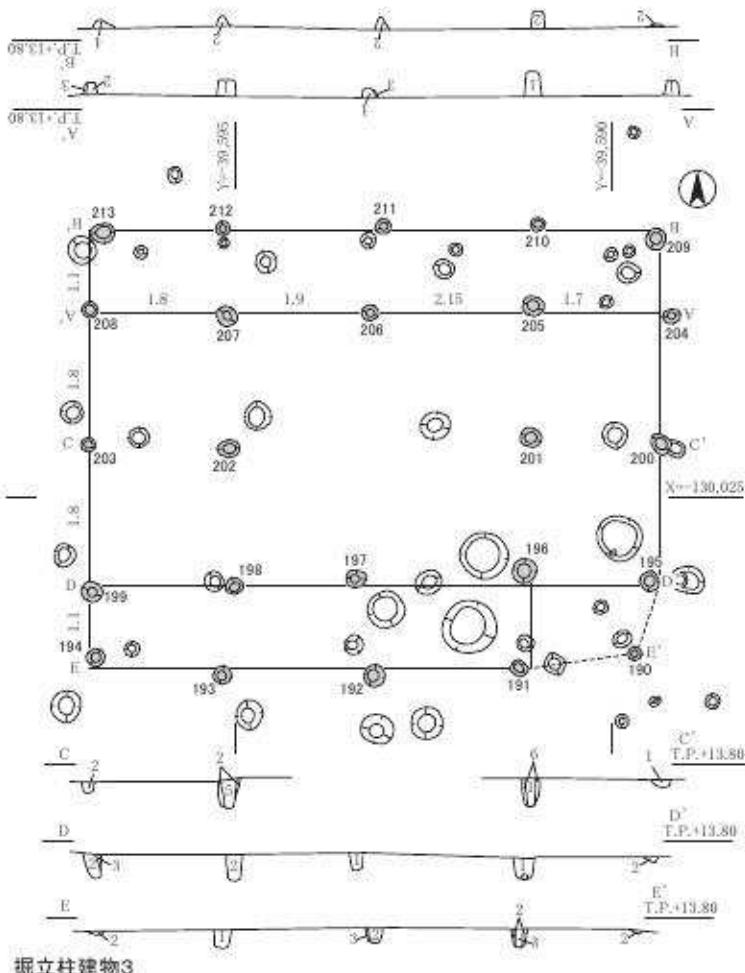
掘立柱建物2

1. 10YR4/1 極灰 粘土質シルト わずかに炭化による  
2. 10YR4/2 淡黄褐 粘土質シルト 10YR4/4 暗 地山の砂質亜礫含む



1. 2.5Y6/1 黄灰 中～粗粒砂混じりシルト(炭小片少し含む) <柱抜き取り痕>  
2. 2.5Y6/1 黄灰 中～粗粒砂混じりシルト(炭小片少し含む) 10YR6/1 極灰 シルトの砂礫含む  
<柱抜き取り痕>  
3. 10YR5/1 極灰 中～粗粒砂混じりシルト(4層の砂礫含む) 炭小片少し含む<掘方>  
4. 10YR7/1 灰白 中～粗粒砂、小礫混じりシルト(4層の砂礫含む) 炭小片少し含む  
※建物4の柱穴埋土としては異質

図12 掘立柱建物2・4平面・断面



掘立柱建物3

1. 10YR4/1～4/2 細灰～灰黄褐 やや粘土質シルト 小炭粒わずかに混じる<抜取り>
2. 10YR4/2 黄褐 やや粘土質シルト
3. 10YR4/1 細灰 シルトと 10YR3/2 黑褐 シルトとの混じる
4. 10YR3/2 黑褐 シルト角礫混じる
5. 10YR4/1～4/2 細灰～灰黄褐 やや粘土質シルト 炭多く含む
6. 10YR3/3 黑褐 シルト (しまりあり)<推力>7.5YR4/4の褐色 角礫混じり細礫～小礫含む

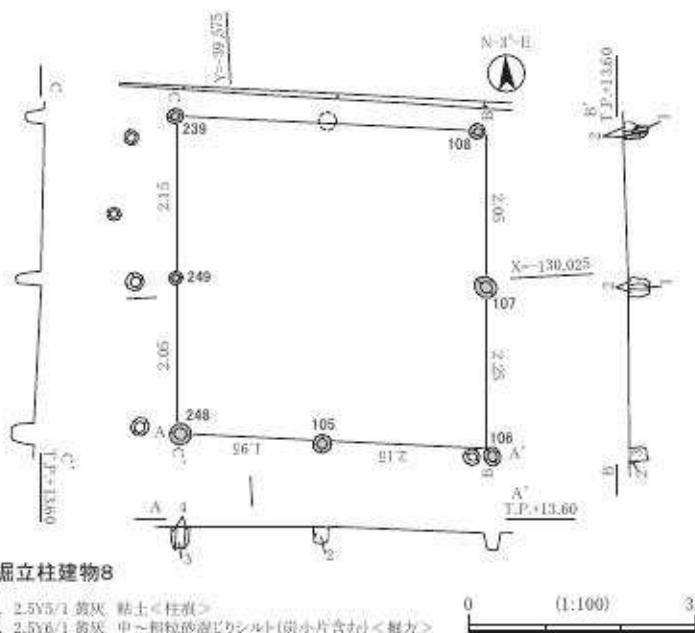


図 13 掘立柱建物 3・8 平面・断面

が 1.9 m 等間で、東西両妻には妻柱がなく、梁間は 1 間で 3.9 m を測る。梁上の束柱によって棟木を支える構造であったと考えられる。廂（縁）は身舎と柱筋を揃えるが、出が南北ともに 1.1 m と小さく、縁もしくは土廂であったと考えられる。柱穴は直径 0.2 m 程度の円形を呈する。

100 柱穴から土師器皿（11）と黒色土器 B 類の椀（12）が出土している。11 はての字状口縁皿で、器壁が厚い 11 世紀後半のものである。

**掘立柱建物 3（図 13）** 掘立柱建物 1 の北西隅で掘立柱建物 1 と重複するが、柱穴の切り合いはない。東西 4 間（7.55 m）、南北 4 間（5.8 m）の南北 2 面に廂（縁）が付く東西棟建物である。身舎の桁行柱間寸法は東から 1.7 m、2.15 m、1.9 m、1.8 m で、梁間は 1.8 m 等間である。身舎棟筋にも柱筋を揃え 2 基の柱穴（201・202 柱穴）を検出している。床束の痕跡であろうか。廂（縁）の出は南北ともに掘立柱建物 2 と同じ 1.1 m で、縁もしくは土廂であったと考えられる。柱筋は身舎と概ね揃えるが、若干ずれる箇所もある。なかでも南東隅の柱穴は大きくなれており、廂（縁）が東辺まで設けられていなかった可能性もある。柱穴は直径 0.2 m 程度の円形、または隅丸方形を呈する。

191・200 柱穴から黒色土器 B 類椀、205 柱穴から土師器ての字状口縁皿と黒色土器 B 類椀など、11 世紀後半のものと思われる土器が出土しているが、すべて細片のため図化できなかった。

**掘立柱建物 4（図 12・33）** 掘立柱建物 1 の南東隅で掘立柱建物 1 と重複す

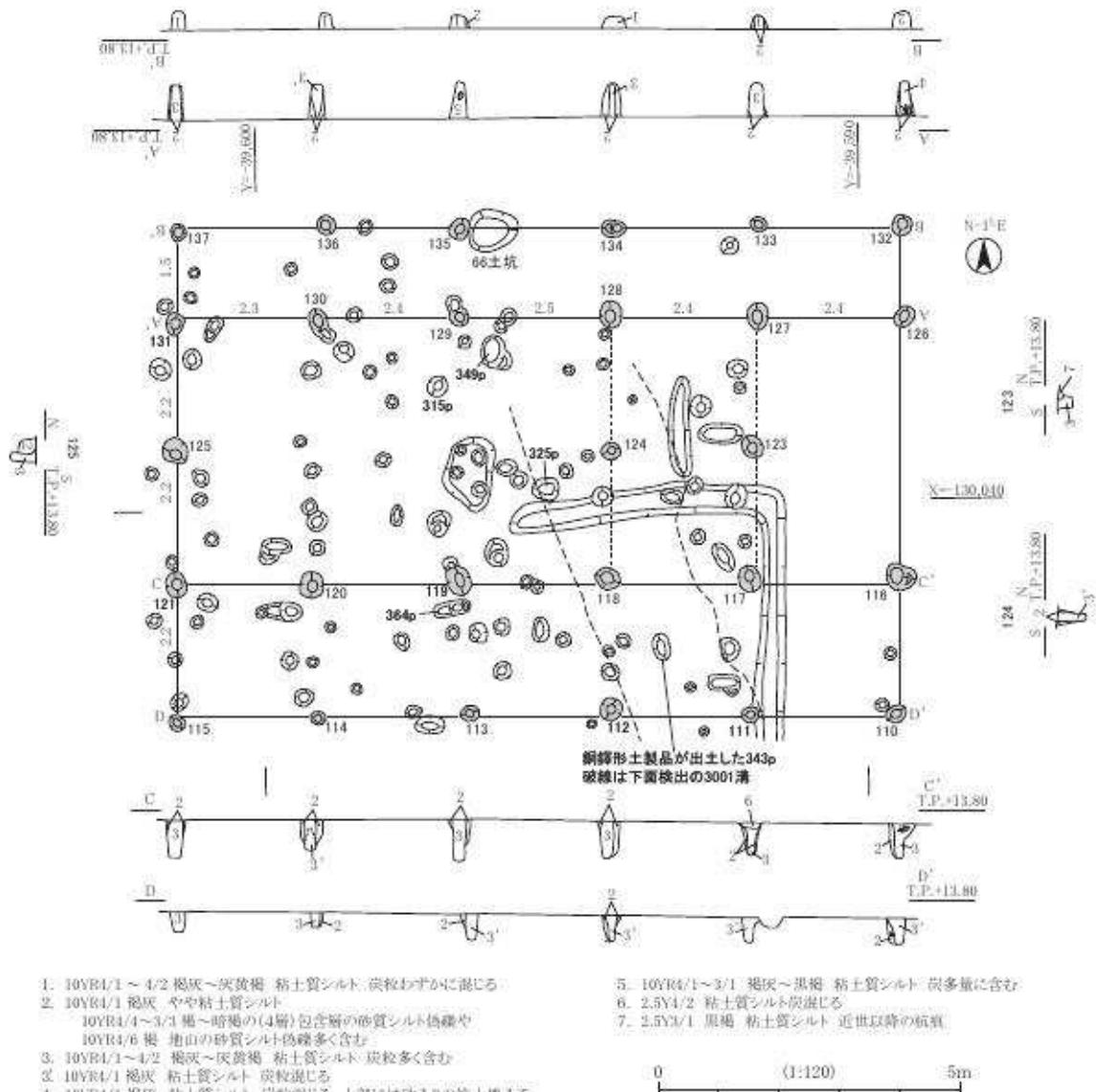


図 14 掘立柱建物 5 平面・断面

るが、柱穴の切り合はない。東西 2 間 (4.45 m)、南北 3 間 (5.25 m) の総柱の南北棟建物で、建物の振れは W-1°-N である。柱間寸法はばらつきがあり、桁行は南から 1.2 m、2.1 m、1.95 m で、梁間は東から 2.55 m、1.9 m である。柱穴は直径 0.2 m 弱～0.3 m 程度の円形を呈する。

55 柱穴から土師器皿 (13) が出土した。ての字状口縁皿で、器壁の厚みや口縁部の形状から、11 世紀代のものと判断した。11 の皿よりは古相と思われる。

**掘立柱建物 5 (図 14・33)** 掘立柱建物 1 の南西側に位置する。東西 5 間 (12.0 m)、南北 4 間 (8.1 m) の南北 2 面に廊が付く東西棟建物で、建物の振れは N-1°-E である。身舎の桁行柱間寸法は、場所により 2.3 m や 2.5 m のところもあるが、ほぼ 2.4 m 等間である。梁間は 2.2 m 等間であるが、東面の妻柱は検出できなかった。身舎の東から 1 間目と 2 間目には間仕切りの柱穴が検出できたが、そのどちらかはこの建物に伴わなものかもしれない。廊は身舎と柱筋を揃える。出は南面が梁間と同じ 2.2 m で、北面が 1.5 m とやや小さい。北面廊は土廊であろうか。柱穴は身舎が直径 0.3 m 強の円形や隅丸長方形で、廊はやや小さく 0.25 m 程度の円形である。柱抜き取り痕跡内に炭が多く混入していることが特徴で、129 柱穴には炭の大型片が、また 126 柱穴には焼土塊 (写真図版 58) が混入していた。焼土

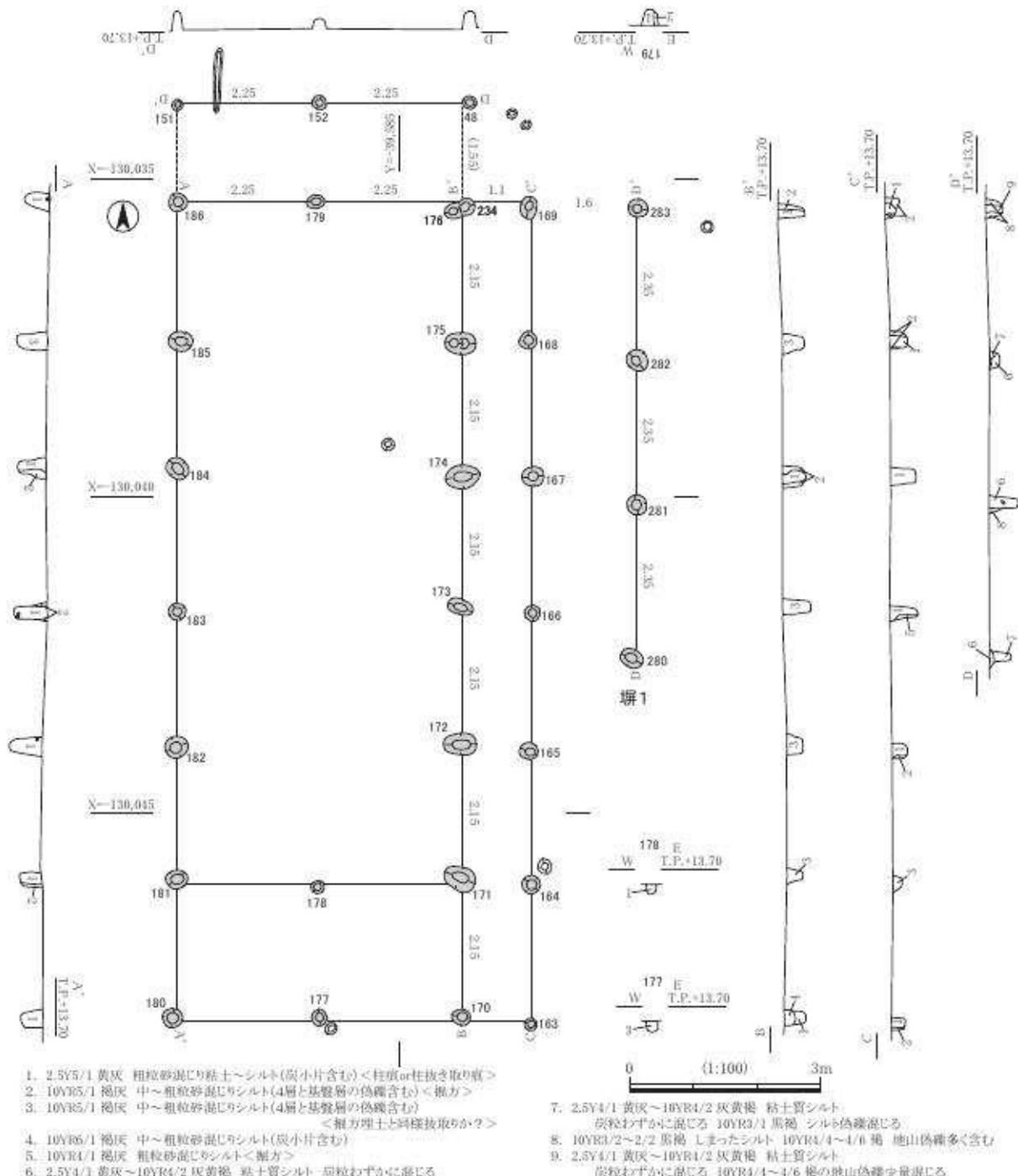


図 15 掘立柱建物 6・堀 1 平面・断面

塊は厚さ 5.0cm以上で、スサが多く見られることから建物の壁土と考えられる。

110 柱穴から須恵器甕(46)、128 柱穴から白磁の碗(14)・黒色土器 B 類の椀(15)、132 柱穴から土師器の脚付杯(16)、136 柱穴から土師器ての字状口縁皿(17)、137 柱穴から黒色土器 B 類の椀(18)が出土している。若干古手のものも見られるが、概ね 11 世紀中葉を中心とする時期のものである。46 は香川県綾南町陶窯跡群産と思われる甕で、口縁端部を外側へ引き出し、体部外面に比較的細かい格子状タタキを施す。14 は 117 柱穴と 128 柱穴出土のものが接合した。高台は低い輪状で内側が斜行しており、唇付の外面端部が浮く。見込みに浅い段を有し、体部外面下位から高台外面には施釉しない。大宰府分類の XI 類あるいは IV 類と考えられる。15 は体部上半部の強い横ナデにより外面に明瞭な段が

できる。17はやや厚手の字状口縁皿である。これ以外にも、111・125柱穴からの字状口縁皿、116・127柱穴から須恵器鉢、117柱穴からの字状口縁皿・白磁碗、126柱穴から黒色土器B類の椀、128柱穴から土師器大皿・黒色土器B類椀・白磁碗、131柱穴から土師器脚付杯・ての字状口縁皿・須恵器甕、132柱穴から土師器脚付杯、121・136柱穴からの字状口縁皿・須恵器甕、137柱穴からの字状口縁皿・土師器大皿・黒色土器B類の椀・須恵器甕などが出土しているが、すべてが小片のため図化することができなかった。これらの柱穴出土遺物の中には瓦器は見られず、被熱痕跡が認められるものがいくつか見られた。

**掘立柱建物6**（図15・33）掘立柱建物5の東側に近接する。東西3間（5.6m）、南北6間（12.9m）の東・南面に廂（縁）が付く南北棟建物で、西側の掘立柱建物5とは北辺を揃える。身舎の桁行柱間寸法は2.15m等間で、梁間は2.25m等間である。廂は身舎と柱筋を揃える。出は南面が身舎と同じ2.15mで、東面が1.1mと小さい。おそらく東面は縁もしくは土廂であったと思われる。また北妻柱筋から外側に1.55m隔てて、身舎と柱筋を揃えて柱穴が並ぶ。北面の廂であったのか、一本柱塀であったのかは不明。柱穴は身舎が直径0.25～0.4m程度の円形や楕円形で、東縁の柱穴は0.2m程度の円形である。

173・184柱穴から土師器皿（19・23）、174柱穴から黒色土器A類椀（20・22）とB類椀（21）、185柱穴から黒色土器B類椀（24）が出土している。19・23は11世紀前～中葉頃の字状口縁皿である。22は10世紀後半のもので、細い高台が付く。器壁の厚いタイプで、下記の柱穴出土のものも概ね同タイプと思われる。このほか166柱穴から土師器皿・黒色土器A・B類椀、170柱穴から須恵器、173柱穴からコースター形の土師器皿・黒色土器B類椀、174柱穴からの字状口縁皿を含む土師器皿・緑釉陶器片・白磁片、182・185柱穴からの字状口縁皿、184柱穴から土師器皿、186柱穴から黒色土器A類椀など多数出土しているが、すべて小片のため図化することができなかった。緑釉陶器は高台部の小片である。胎土は淡い橙色で軟質、釉は濃緑色を呈する。白磁は小片2点があり、1点は薄い内湾気味の口縁部である。184柱穴出土の土師器皿は底部を糸切りとする回転台土師器である。黒色土器A類椀のように若干古手のものも含まれるが、11世紀中葉までのものが多く、瓦器は出土していない。

**廂1**（図15）掘立柱建物6の東側に位置する。掘立柱建物6とは1.6m隔てて向きを揃える。柱筋は揃わないが、掘立柱建物6に伴う一本柱塀であったことは間違いない。柱間は3間で、2.35m等間である。柱穴は0.3m程度の円形を呈する。

**掘立柱建物7**（図16）掘立柱建物1の東隅で掘立柱建物1・2と重複する。掘立柱建物2とは柱穴が切り合い、掘立柱建物2の柱穴を切る。東西2間（5.85m）、南北5間（10.5m）の東面に廂が付く南北棟建物で、建物の振れはN-2°-Eである。身舎の柱間寸法は桁行が2.1m等間で、南北両妻には妻柱がなく、梁間は1間で3.75mを測る。廂の出は2.1mで、身舎と柱筋を揃える。柱穴は直径0.25m程度の円形を呈する。

70柱穴から土師器皿、71・81柱穴から黒色土器A類椀の小片が出土している。土師器皿はての字状口縁皿で、器壁の厚みから11世紀代のものと判断した。

**廂3**（図16）掘立柱建物7の北妻から1.9m北側に隔てて並列する一本柱塀である。柱間は3間、1.8m等間であるが、掘立柱建物7とは柱筋を揃えない。柱穴は直径0.2m弱の円形を呈する。

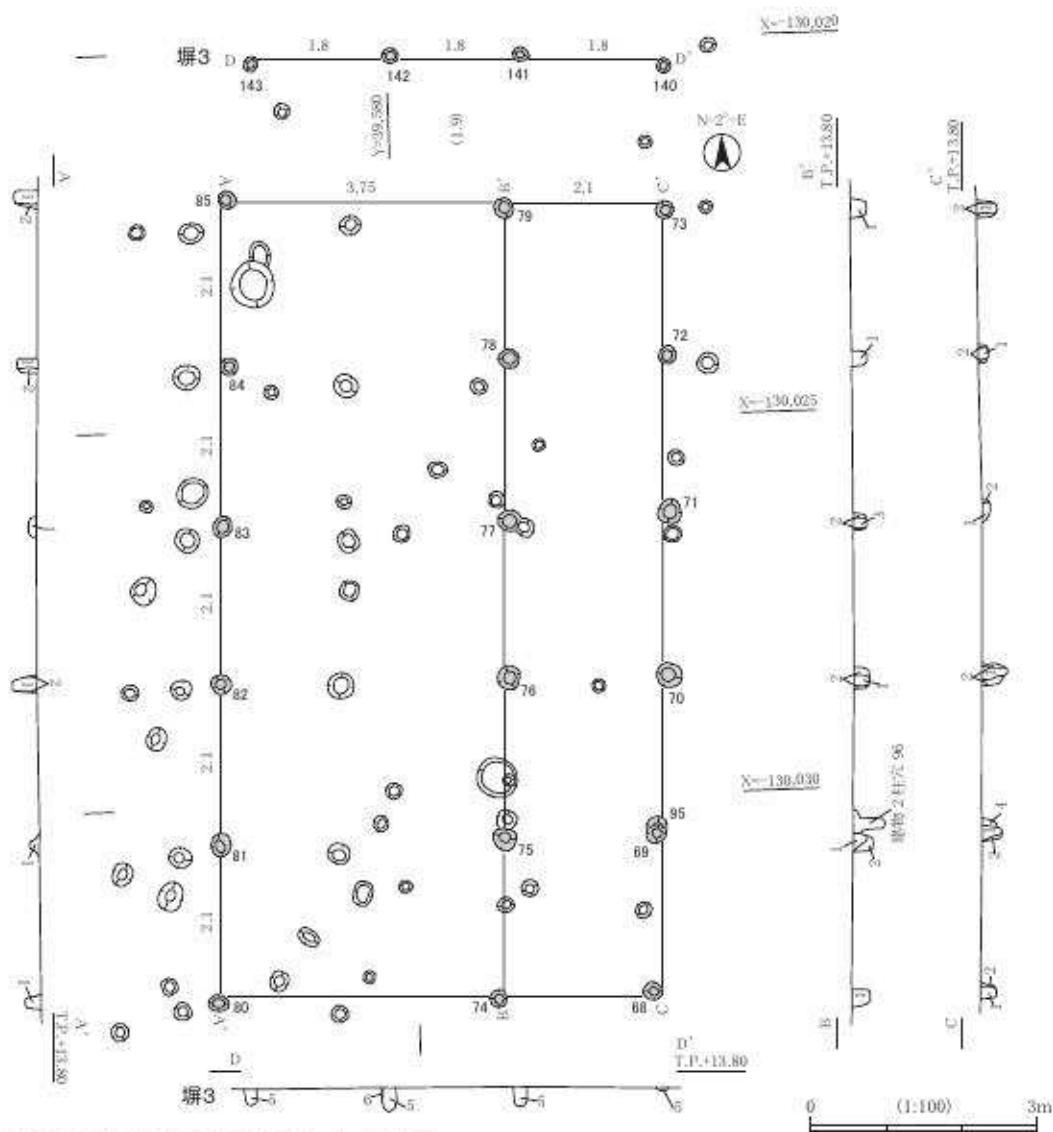
**掘立柱建物8**（図13）掘立柱建物2の北側に近接する。北辺中央に柱穴が検出できなかったことから、

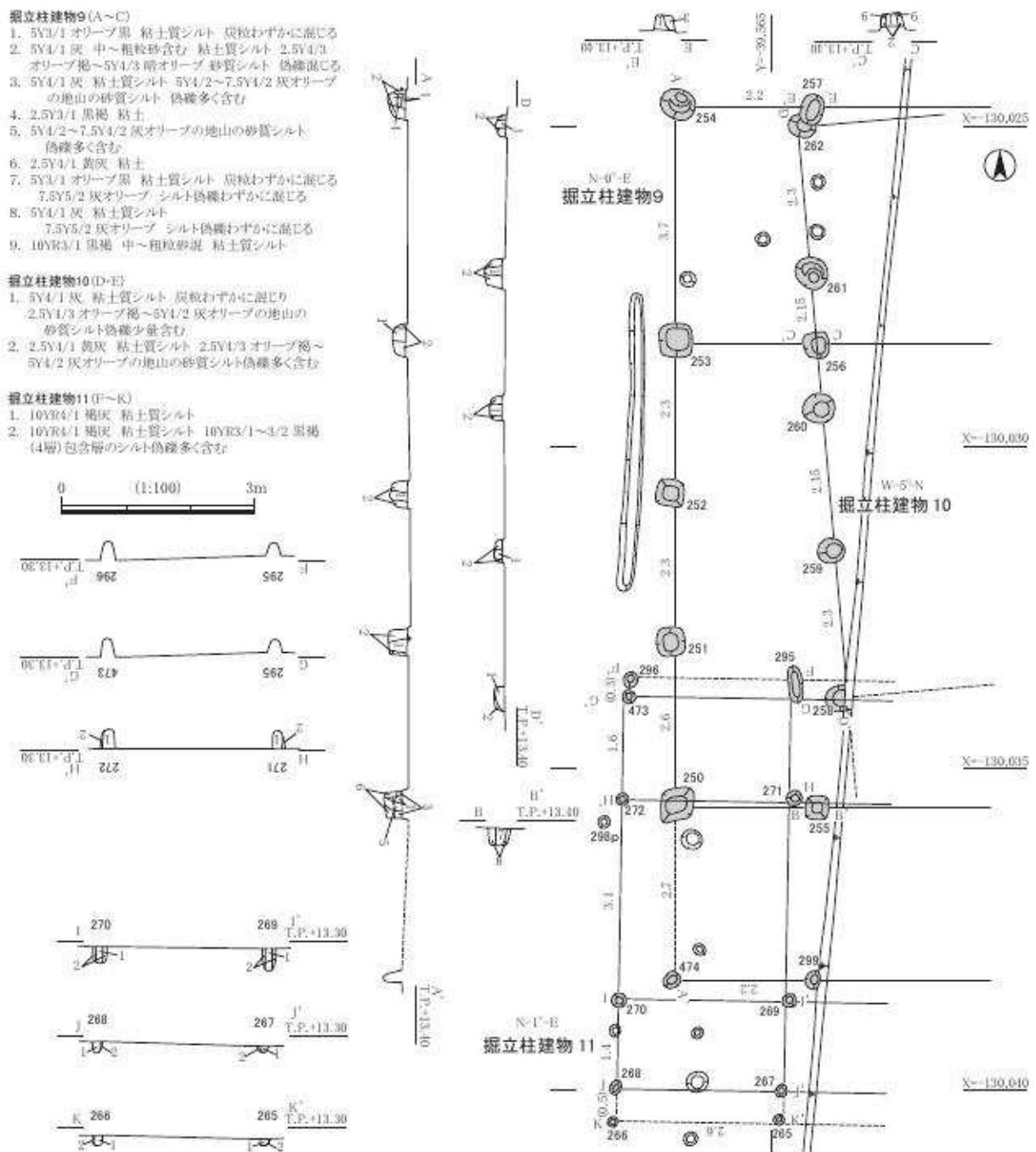
当初は北側の1区にのびる南北棟になると予想したが、1区では柱穴が検出できず、東西・南北ともに2間の建物となった。東西の柱間寸法は東から2.15m、1.95mで、南北の柱間寸法は東と西の柱筋で異なり僅かに歪む。東面が南から2.25m、2.05m、西面が2.05m、2.15mである。建物の振れはN-3°-Eである。柱穴は直径0.2m程度の円形を呈する。

南辺妻柱105柱穴から滑石片が出土している。石鍋が割れたものか。

**掘立柱建物9(図17)** 挖立柱建物2東側の調査区際に位置する。北端の257柱穴が挖立柱建物10の262柱穴と重複し、262柱穴を切る。南北5間(13.6m)の南面に廂が付く南北棟建物と考えられる。東西は1間分のみを検出。身舎の柱間寸法は、桁行(南北)が南から2.6m、2.3m、2.3m、3.7mで、もっとも北側の柱間が広い。この1間目の柱筋上には間仕切りの柱穴がある。梁間(東西)の1間は2.2mである。南面廂の出は2.7mで、身舎と柱筋を揃える。柱穴は一辺0.35~0.5m程度の隅丸方形で、他の建物とは異質である。廂の柱穴はやや小さく直径0.3m弱の円形である。

柱穴から弥生土器の小片が多数出土しているが、建物に伴う時期の遺物は出土していない。





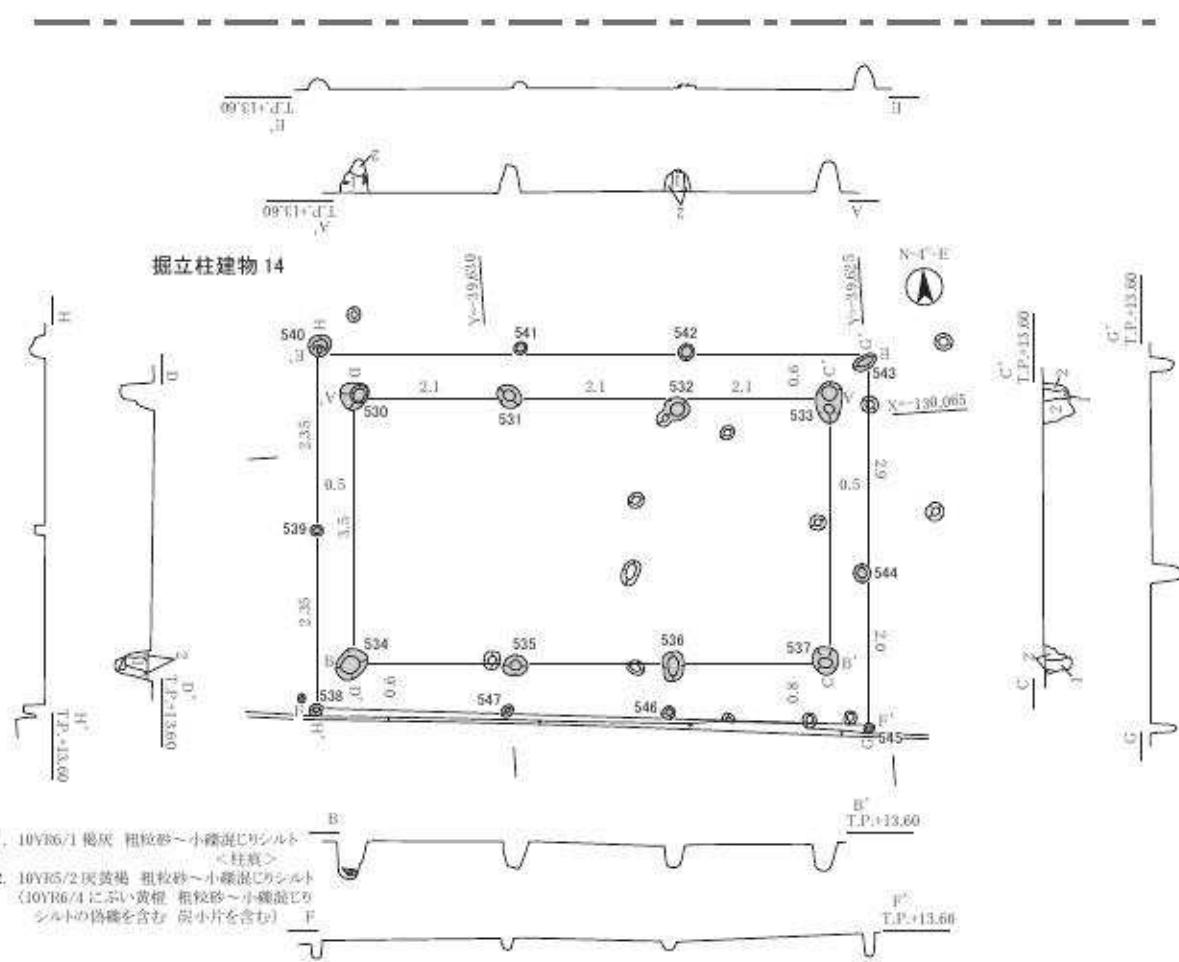
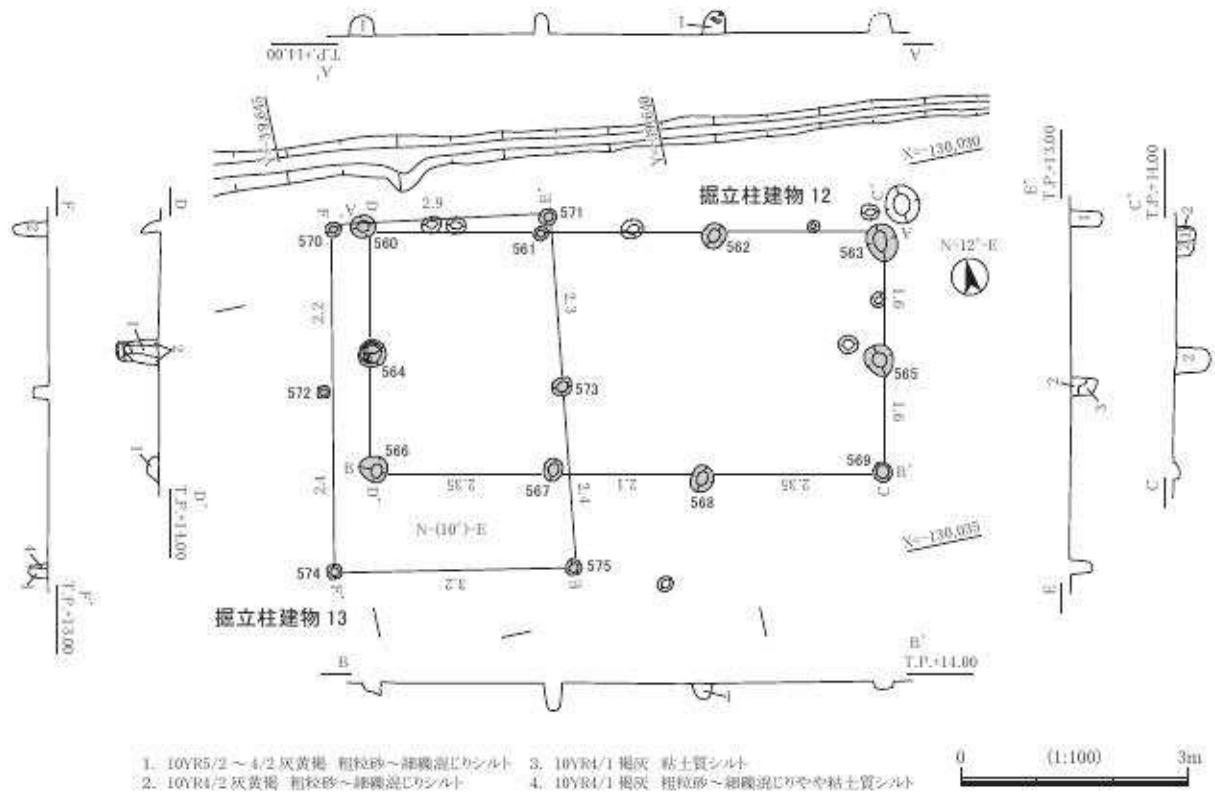


図 18 掘立柱建物 12・13・14 平面・断面

える。柱穴は直径 0.15 ~ 0.2 m 強の円形を呈する。

296 柱穴から薄手の土師器の字状口縁皿が、271 柱穴から灰釉陶器の小片が出土している。

**掘立柱建物 12(図 18)** 4 区では、細溝で囲まれた平面長方形の屋敷地が 2 区画並んで見つかっており、このうちの西側区画の北端部に位置する。東西 3 間 (6.8 m)、南北 2 間 (3.2 m) の東西棟建物である。柱間寸法は桁行が東から 2.35 m、2.1 m、2.35 m、梁間は 1.6 m 等間である。建物の振れは N - 12° - E で、柱穴は直径 0.35 m 程度の円形を呈する。

563 柱穴から瓦器碗・須恵器甕、564 ~ 567 柱穴から瓦器碗、568 柱穴から瓦質土器脚付羽釜の脚が出土している。すべて小片である。563 柱穴出土の瓦器碗片は、退化した高台を貼り付けるもので、13 世紀代のものと思われる。

**掘立柱建物 13(図 18)** 掘立柱建物 12 の西側で重複するが、柱穴の切り合いはない。東西 1 間 (2.9 ~ 3.2 m)、南北 2 間 (4.6 ~ 4.7 m) の南北にやや長い簡易な建物である。南面の柱間は 3.2 m、北面は 2.9 m と揃っていないためやや歪んだ平面形で、このため東西の柱筋も、西面の柱間寸法が南から 2.4 m、2.2 m であるのに対して、東面は 2.4 m、2.3 m と僅かに広くなる。柱穴は直径 0.2 m 程度の円形や隅丸方形である。

572 柱穴から瓦器碗、570 柱穴から土師器皿、574 柱穴から東播系須恵器鉢、575 柱穴から瓦質土器などが出土している。すべて小片である。

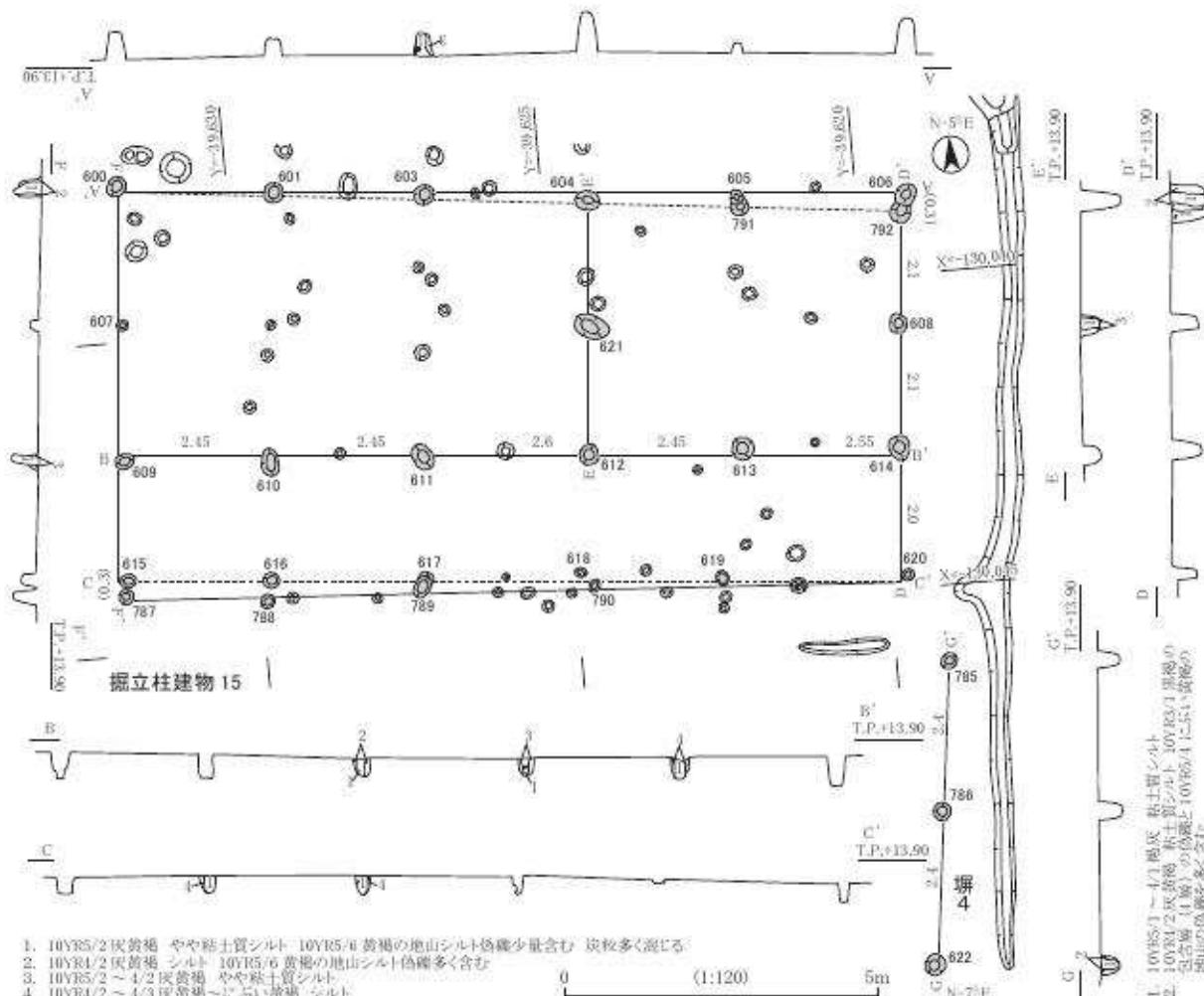


図 19 掘立柱建物 15・屏 4 平面・断面

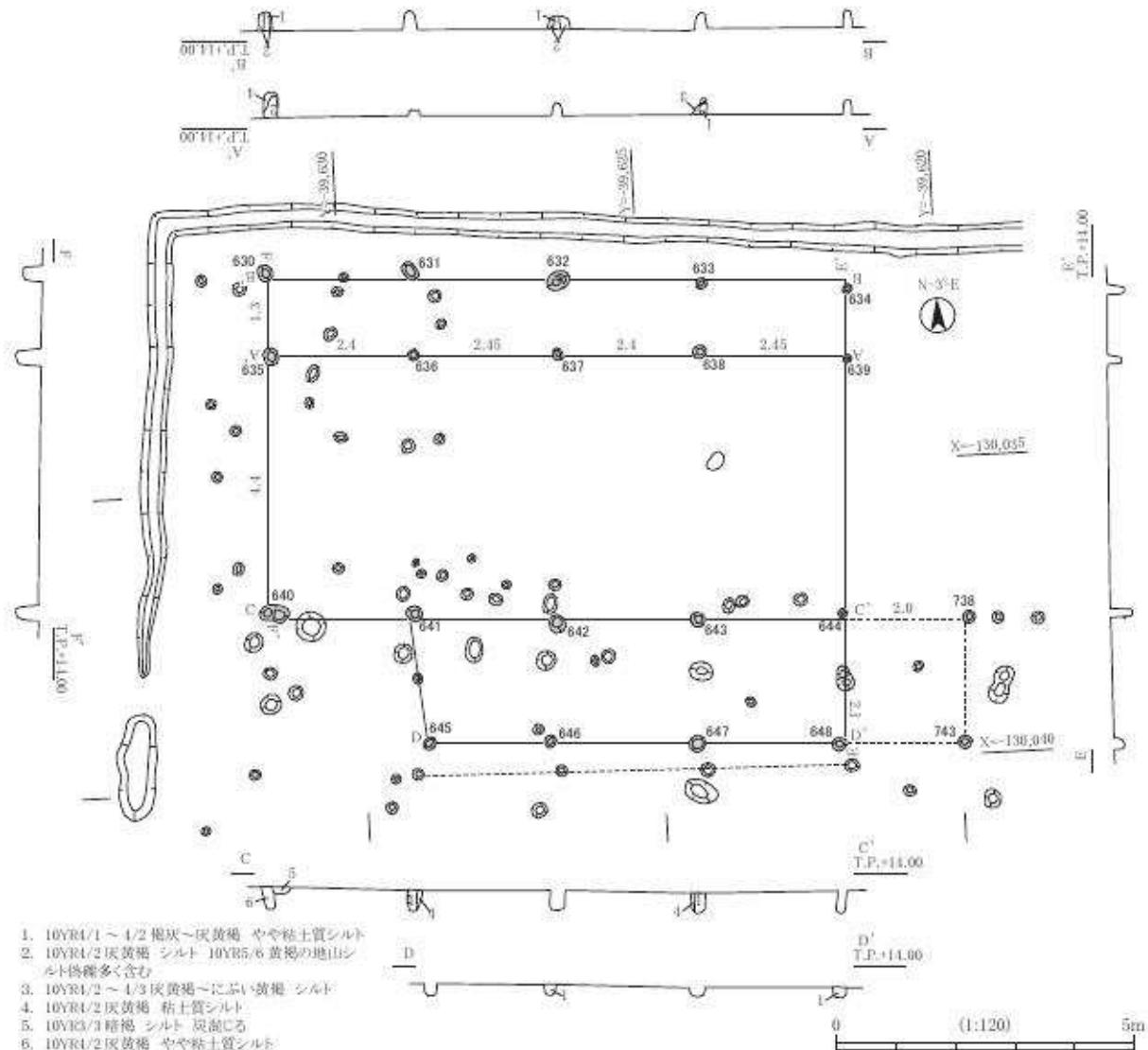


図 20 掘立柱建物 16 平面・断面

**掘立柱建物 14 (図 18・33)** 溝で囲まれた屋敷地の南方、4 区の南端に位置する。東西 3 間 (6.3 m)、南北 1 間 (3.5 m) の身舎の 4 面に幅の狭い縁が付く東西棟建物である。建物の振れは N-4°-E で、桁行の柱間寸法は 2.1 m 等間である。妻柱はない。縁の出は東西両面が 0.5 m、北面が 0.6 m で、南面は東側が広く 0.6 ~ 0.8 m である。柱筋は身舎と概ね揃えるが、身舎の側柱筋と妻柱筋の延長上には設けない。柱穴は円形で、身舎は直径 0.35 ~ 0.4 m 程度、縁は小さく直径 0.2 m 程度である。

530・537 柱穴から土師器皿 (25・26) が出土している。このほか 532 柱穴から須恵器甕・瓦器椀、533・537 柱穴から土師器皿・瓦器椀、536 柱穴から須恵器甕、540 柱穴から瓦器椀などが出土しているが、すべて小片である。12世紀中～後葉を中心とした時期のもので、土師器皿は概ね口縁部を 2 段ナデとする。

**掘立柱建物 15 (図 19・33)** 溝で囲まれた屋敷地のうち、東側の屋敷地内中央やや北寄りに位置する。東西 5 間 (12.5 m)、南北 3 間 (6.2 m) の南面に廊が付く東西棟建物である。身舎の桁行柱間寸法は東から 2.55 m、2.45 m、2.6 m、2.45 m、2.45 m で、東から 2 間目の柱筋に間仕切りの柱を設ける。梁間の柱間寸法は 2.1 m 等間である。廊の出は 2.0 m で、柱筋は東から 1 間目が西側にずれる以外は身舎と揃える。なお北面の側柱筋については東端を外 (北) 側に 0.3 m ほど、廊の柱筋については西端を

外(南)側に 0.3 mほど広げる改築が行なわれている。建物の振れは N-5°-E である。柱穴は円形で、身舎は直径 0.3 m程度、縁はやや小さく直径 0.2~0.25 m程度である。

604 柱穴から 13世紀前半の土師器皿(27・28)・瓦器椀(29)が出土している。このほか 603 柱穴から土師器皿・瓦器椀・瓦質土器羽釜、606 柱穴から瓦器椀と須恵器片、611・617 柱穴から瓦器椀、615 柱穴から瓦質土器羽釜などが出土しているが、すべて小片である。

解4(図19) 掘立柱建物 15 の南東側に位置する。柱間2間の南北方向の一本柱屏である。柱間寸法は 2.4 m等間で、柱穴は直径 0.25~0.35 mの円形を呈する。

掘立柱建物 16(図20) 東側の屋敷地内の北端に位置し、一部が掘立柱建物 15 と重複する。柱穴の切り合いはない。東西4間(9.7 m)、南北3間(7.8 m)の南北2面に廂が付く東西棟建物である。身舎の桁行柱間寸法は、東から 2.45 m、2.4 m、2.45 m、2.4 mで、妻柱がないため梁間は1間で 4.4 mである。建物の振れは N-3°-E。廂の出は南面が 2.1 mであるのに対し、北面は 1.3 mとやや小さく、土廂と考えられる。柱筋は両面とも身舎と揃えるが、南面廂の東から3間目の 645 柱穴のみ若干東にずれる。また西端の柱穴が確認できないことから、南面廂は西端の1間分を欠いていたと考えられる。なお南面廂のさらに 0.35~0.55 m南側に柱間3間の柱穴が並ぶ。建物とは多少柱筋がずれるものもあるが、概ね揃っており、廂が改築された可能性も考えられる。南面廂の東側にもさらに1間分(2.0 m)張り出すように柱穴(738・743 柱穴)が並ぶが、この建物に伴うものは不明。柱穴は直径 0.2 弱~0.25 m程度の円形を呈する。

641・643・738 柱穴から黒色土器B類椀の小片が出土している。

掘立柱建物 17(図21) 東側の屋敷地内の北西隅で、掘立柱建物 16 と重複する。柱穴の切り合いはない。東西2間(3.3 m)、南北2間(4.7 m)の南北にやや長い総柱の建物で、建物の振れは N-4°-E である。柱間寸法は東西が 1.65 m等間、南北が 2.35 m等間である。柱穴は一辺(直径) 0.2 m程度の隅丸方形や円形を呈する。

660 柱穴から須恵器甕の小片が出土している。

掘立柱建物 18(図21) 東側の屋敷地の北側に位置する。東西4間(9.7 m)、南北3間(4.9 m)の、北と西の2面に廂が付く東西棟建物である。身舎の桁行柱間寸法は東から 2.2 m、2.7 m、2.7 mで、梁間は 1.85 m等間である。建物の振れは N-2°-E。廂の出は西面が 2.1 mであるのに対し、北面は 1.2 mとやや小さく、北西隅を欠く。土廂と考えられる。柱筋は両面ともに身舎と揃えるが、北面廂東端の 780 柱穴のみ若干西にずれる。なお身舎南面の西から1間目には、さらに南側に1間分(1.2 m)張り出すように柱穴(686・687 柱穴)が並ぶ。この建物に伴うものは不明。この箇所のみ軒を出すような構造だったのかもしれない。柱穴は円形で、直径は身舎が 0.2~0.3 m程度、北面廂は 0.2 m程度とやや小さい。

684 柱穴から黒色土器A類椀の小片が出土している。

掘立柱建物 19(図22・33) 東側の屋敷地の北側で、掘立柱建物 18 と重複する。柱穴の切り合いはない。東西4間(8.65 m)、南北2間(5.4 m)の、北面に廂が付く東西棟建物である。身舎の桁行柱間寸法は南面が東から 2.15 m、1.9 m、2.35 m、2.25 m、北面が 2.15 m、2.1 m、2.15 m、2.25 mで、梁間は妻柱がないため 1間で 4.1 mである。建物の振れは N-1°-E。廂の出は 1.3 mとやや小さく、土廂と考えられる。柱筋は身舎と揃える。北西隅の1間分を欠いていることから、掘立柱建物 18 と同じく身舎は東西3間で、北と西の2面に廂が付く建物であったとも考えられる。なお南面の西から1間

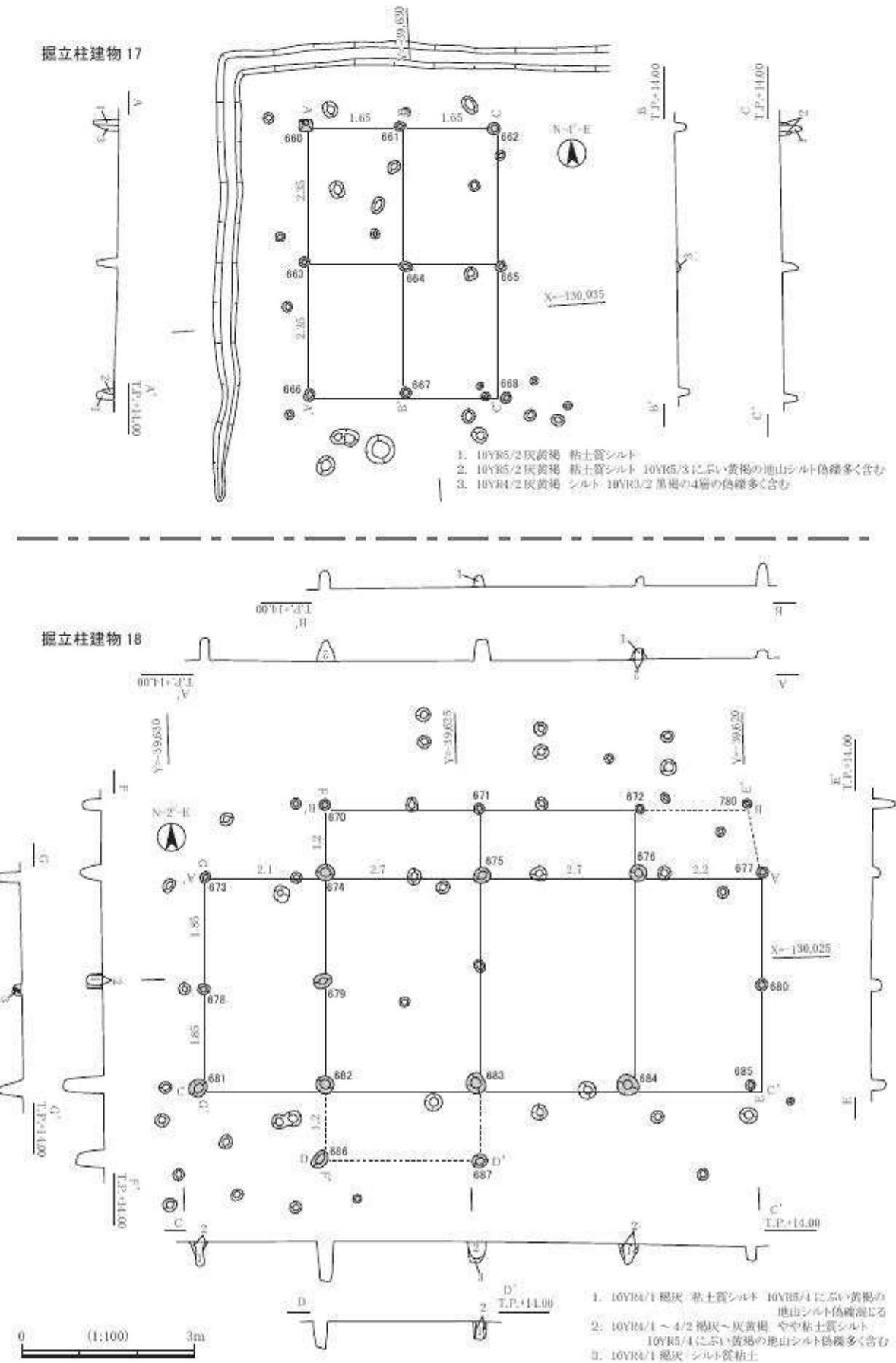


図 21 掘立柱建物 17・18 平面・断面

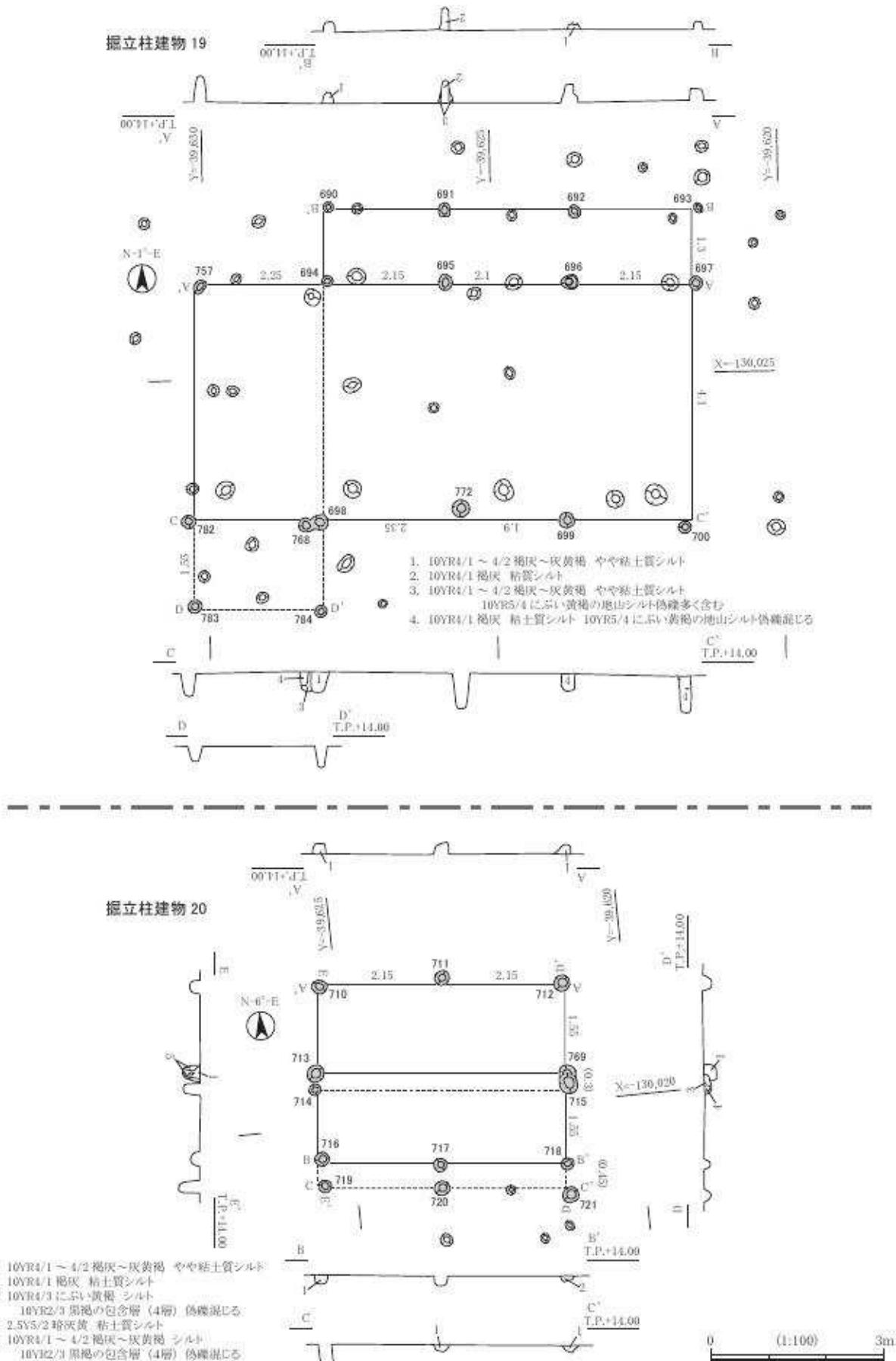


図 22 掘立柱建物 19・20 平面・断面

目には、掘立柱建物 18 と同様にさらに南側に 1 間分 (1.55 m) 張り出すように柱穴 (783・784 柱穴) が並ぶが、この建物に伴うものかは不明。柱穴は直径 0.2 ~ 0.25 m 程度の円形を呈する。

698 柱穴から須恵器甕片と土師器皿(30)が出土した。30 は底部糸切り未調整の回転台土師器である。このほか 692 柱穴から土師器ての字状口縁皿が、697 柱穴から黒色土器 A 類、699 柱穴から B 類椀の小片が出土している。697 柱穴出土の黒色土器は器壁の厚いものである。

**掘立柱建物 20 (図 22)** 掘立柱建物 18・19 の北側に近接する。東西 2 間、南北 2 間の東西棟建物で、南半部を改築により拡張する。建物の振れは N - 6° - E である。改築前の柱間寸法は桁行が 2.15 m 等間で、梁間が 1.55 m 等間であるが、南面の柱筋を南側に 0.45 m 広げたため、棟筋も南に 0.3 m ずれる。これにより梁間は南から 1.7 m、1.85 m となる。柱穴は直径 0.25 m 前後の円形を呈する。

柱穴から遺物は出土していない。

**掘立柱建物 21 (図 23)** 1 区南半に位置する。東西 4 間 (8.5 ~ 8.65 m)、南北 2 間 (3.7 ~ 3.85 m)

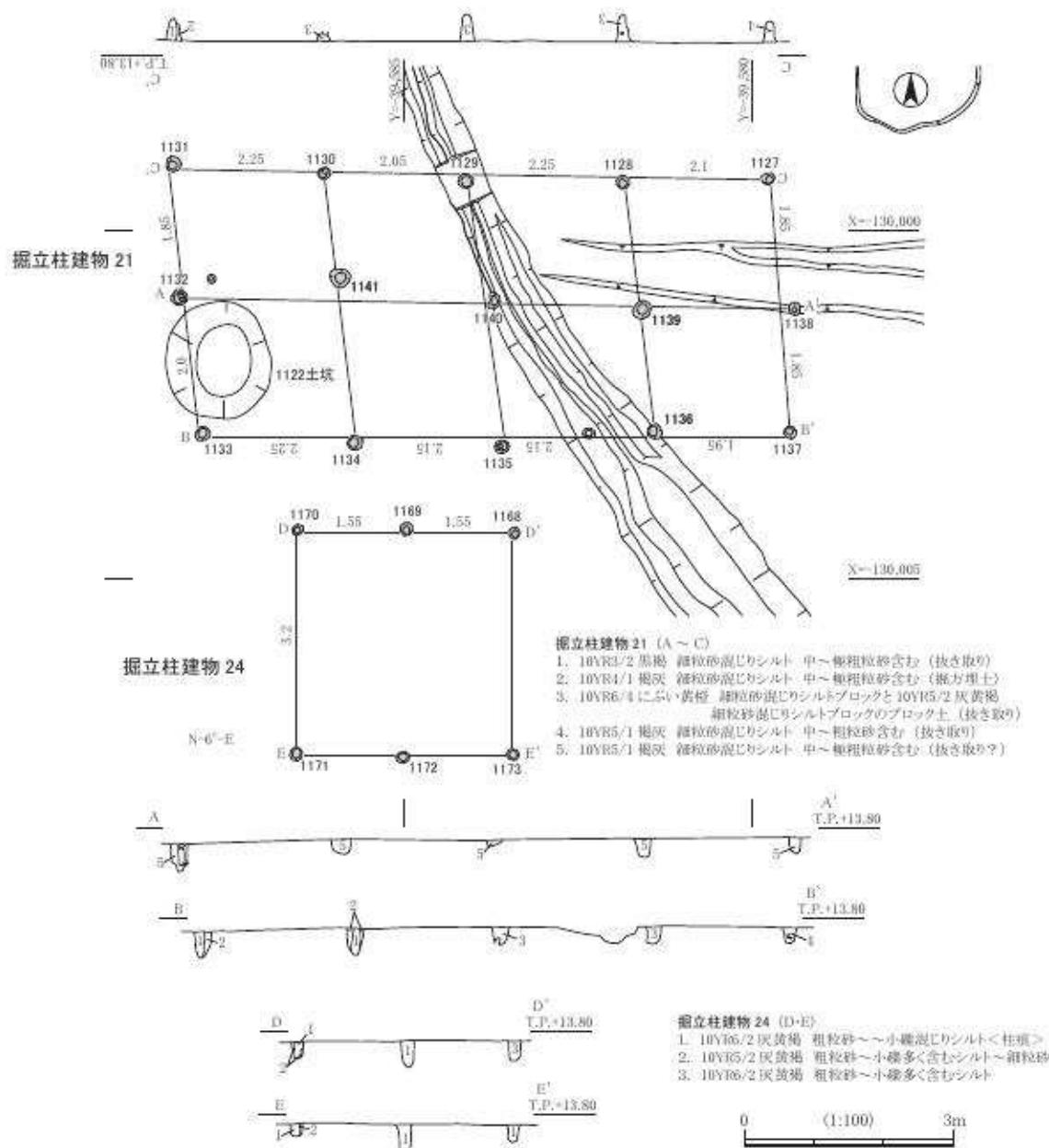


図 23 掘立柱建物 21・24 平面・断面

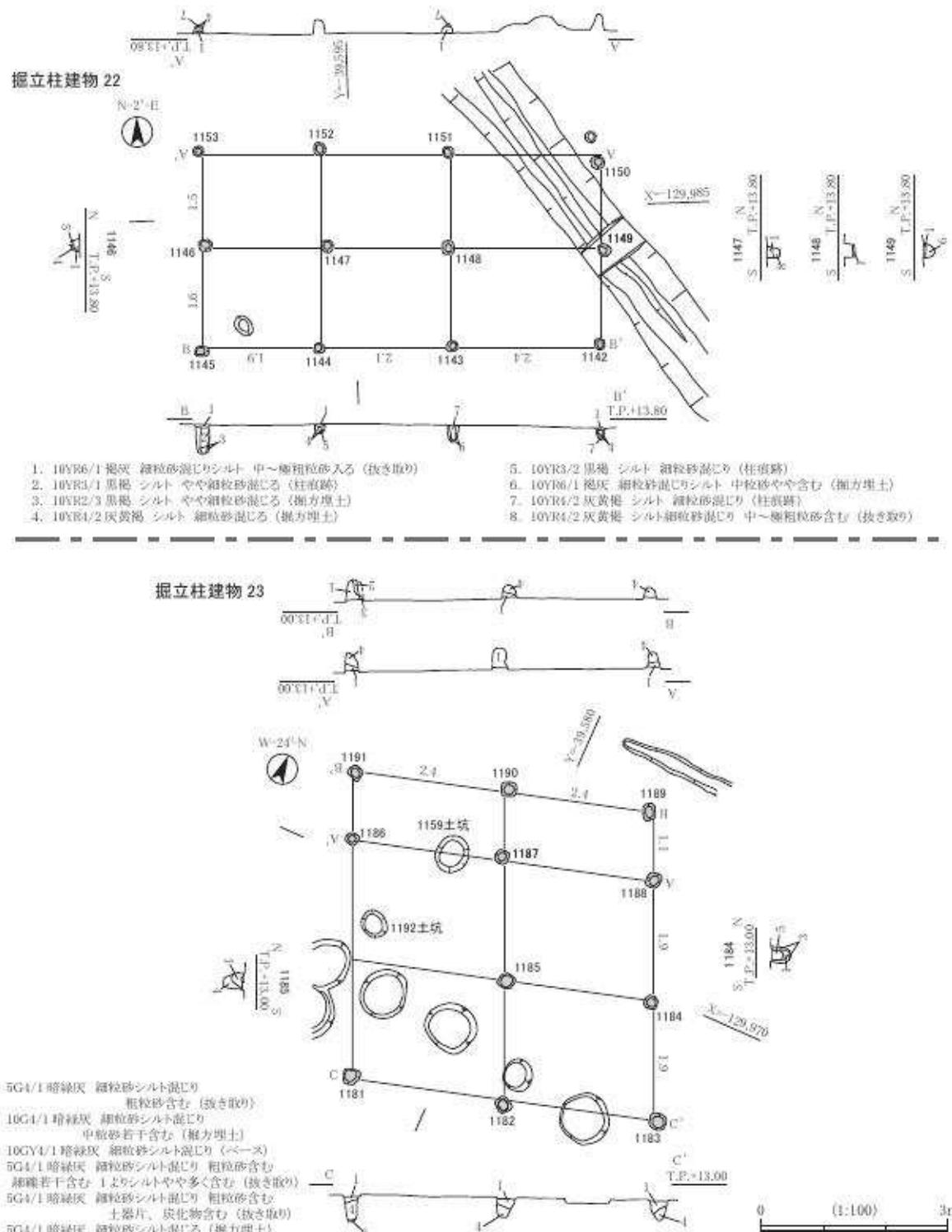
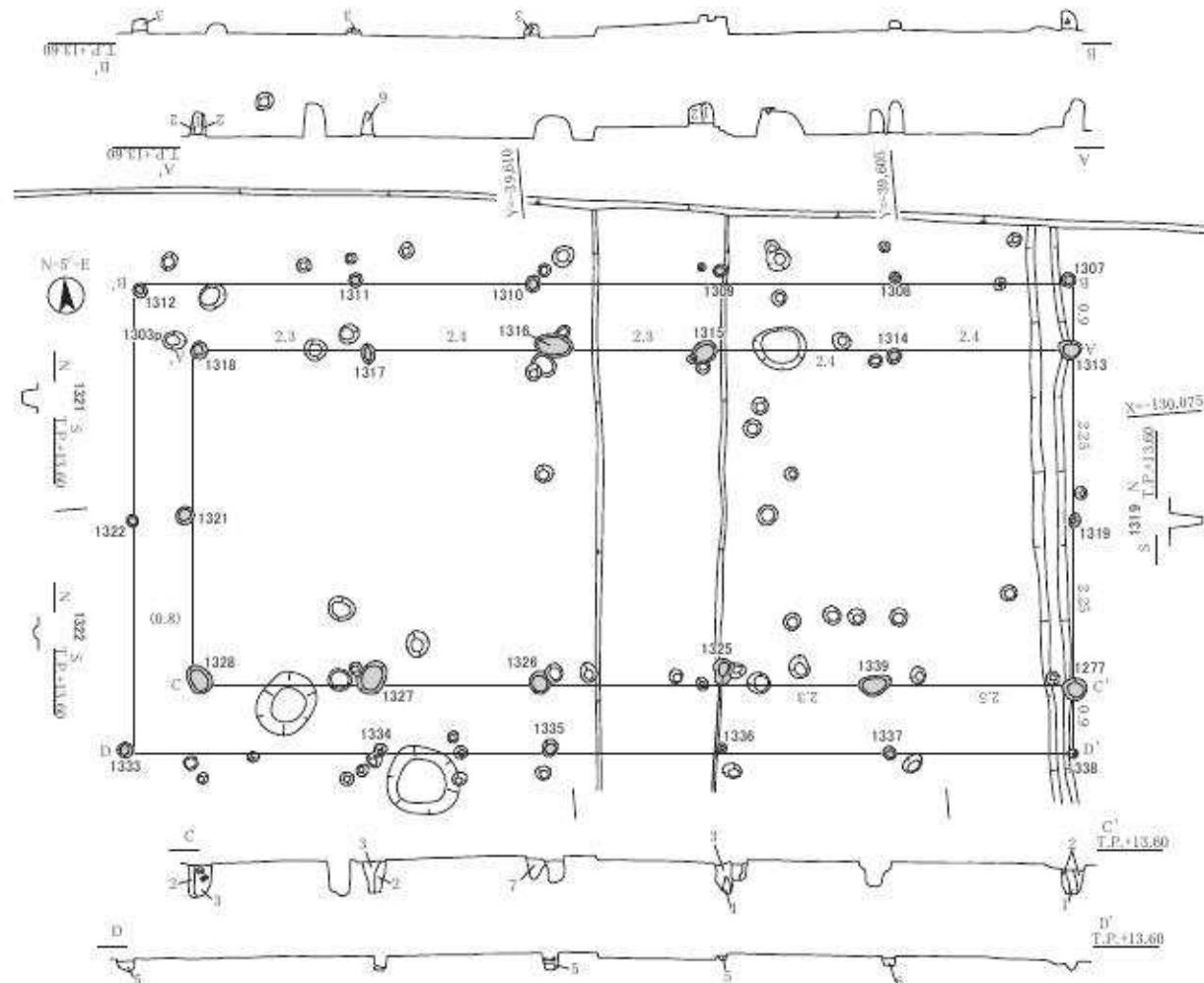


図 24 掘立柱建物 22・23 平面・断面

の総柱の東西棟建物である。柱穴がきれいに並んでおらず、柱間寸法に若干のばらつきが見られる。桁行は南面が東から 1.95 m、2.15 m、2.15 m、2.25 m、北面が 2.1 m、2.25 m、2.05 m、2.25 m で、梁間は東面が 1.85 m 等間で、西面が南から 2.0 m、1.85 m である。梁の向きと棟の向きも直角ではなく、建物の平面形は平行四辺形のように若干歪む。柱穴は直径 0.2 ~ 0.25 m 程度の円形を呈する。

1129・1139 柱穴から薄手の土師器での字状口縁皿小片が出土している。

掘立柱建物 22（図 24）掘立柱建物 21 の北西側に位置する。東西 3 間（6.4 m）、南北 2 間（3.1 m）



掘立柱建物 25

掘立柱建物 25

1. 10YR5/1 緩灰 シルト質粘土
2. 10YR4/2 ~ 4/3 灰黄褐色～灰褐色
3. 10YR4/1 緩灰 中粒砂～細粒高じりやや粘土質シルト  
やや粘土質シルト
4. 10YR5/1 緩灰 中～極粗粒砂高じりやや粘土質シルト
5. 10YR5/1 ~ 4/1 緩灰  
中粒砂～細粒高じりやや粘土質シルト
6. 10YR4/1 緩灰 中粒砂～細粒高じりシルト 岩塊による
7. 10YR4/1 緩灰 やや粘土質シルト
- 10YR5/4 に灰褐色のシルト偽礫を多く含む

掘立柱建物 26

掘立柱建物 26

1. 10YR4/1 緩灰 中粒砂～細粒高じりやや粘土質シルト
2. 10YR4/1 緩灰 やや粘土質シルト  
10YR5/4 に灰褐色のシルト偽礫を多く含む
3. 10YR5/1 緩灰 中～極粗粒砂高じりやや粘土質シルト
4. 10YR4/1 緩灰 中粒砂～細粒高シルト 岩塊による
5. 10YR4/2 灰黃褐 中粒砂～細粒高じりやや粘土質シルト
6. 10YR4/2 ~ 4/3 灰黃褐色～灰褐色
- やや粘土質シルト 中粒砂～細粒多く混じる



図 25 掘立柱建物 25・26 平面・断面

の総柱の東西棟建物で、建物の振れはN-2°-Eである。柱間寸法は桁行が東から2.4m、2.1m、1.9mで、梁間は南から1.6m、1.5mである。柱穴は一辺0.2m強の隅丸方形を呈し、東端の一つは1000溝の埋土上面で検出した。

柱穴からは中世の時期の遺物は出土していない。

**掘立柱建物23(図24)** 調査区北端部の落ち込み内に位置する。東西2間(4.8m)、南北3間(4.9m)の総柱建物で、建物の振れはW-24°-Nである。柱筋は通るもの、梁の向きと棟の向きが直角ではなく、建物の平面形が平行四辺形のように歪む。柱間寸法は東西が2.4m等間、南北は南から1.9m、1.9m、1.1mである。柱穴は一辺0.2m強の隅丸方形を呈する。

1184 柱穴から黒色土器A類椀の小片が出土している。

**掘立柱建物24(図23)** 掘立柱建物21の南側に近接する。東西2間(3.1m)、南北1間(3.2m)の簡易な建物である。東西の柱間寸法は1.55m等間で、建物の振れはN-6°-Eである。柱穴は直径0.2m程度の円形を呈する。

1172 柱穴から土師器皿の小片が出土している。

**掘立柱建物25(図25・33)** 5区の北端部に位置する。東西5間(11.8m)、南北2間(4.5m)を身舎とする東西棟建物で、東面以外の3面に縁が付く。身舎桁行の柱間寸法は、南面が東から2.5m、2.3m、2.3m、2.4m、2.3m、北面が2.4m、2.4m、2.3m、2.4m、2.3mで、梁間は2.25m等間である。縁の出は南北両面が0.9m、西面が0.8mである。柱筋は身舎と概ね揃えるが、西隅については身舎の側柱筋と妻柱筋の延長上には柱を設げず隅のみとする。建物の振れはN-5°-Eである。柱穴の規模は身舎が直径0.2m～0.4m程度、縁は直径0.2m程度で、円形や梢円形を呈する。

1318 柱穴から土師器皿(31)、1319 柱穴から瓦器椀(32)が出土している。31は器壁が厚い11世紀後半の字状口縁皿である。32は11世紀後葉の楠葉型で、内外面に密なミガキを施す。外面の分割ミガキは高台際まで及ぶ。このほか1277柱穴から須恵器甕、1312柱穴から黒色土器B類椀、1313柱穴から土師器煮炊具・黒色土器B類椀・瓦器椀、1318柱穴から土師器皿・黒色土器B類椀、1319柱穴から瓦器椀などが出土地で出土している。すべて小片である。総じて11世紀中～後葉のものと思われる。

**掘立柱建物26(図25)** 掘立柱建物25の南側で重複する。一部の柱穴が切り合っており、当建物の柱穴が切る。東西2間(4.9m)、南北2間(2.4m)の東西に長い総柱の建物で、柱間寸法は東西が2.45m等間、南北が1.2m等間である。建物の振れはN-5°-E。柱穴は直径0.2～0.25m程度の円形を呈する。

1281 柱穴から土師器ての字状口縁皿・黒色土器B類椀、1282柱穴からての字状口縁皿、1283柱穴から瓦器椀・須恵器、1284柱穴から楠葉型瓦器椀が出土している。すべて小片で詳細な時期は不明。

**掘立柱建物27(図26)** 掘立柱建物25・26の南東側に位置する。東西2間(3.4m)、南北3間(5.0m)の南北にやや長い総柱建物で、建物の振れはN-4°-Eである。柱穴はきれいに並ばず、若干ずれるものもある。東西の柱間寸法は1.7m等間であるが、南北は南から1.05m、1.5m、2.45mとまちまちである。柱穴は直径0.25～0.3m程度の円形を呈する。

1261 柱穴から瓦器椀、1264 柱穴から須恵器、1265・1266 柱穴から瓦器椀の小片が出土している。

**掘立柱建物28(図26)** 掘立柱建物25・26の南西側に位置する。東西3間(6.3m)、南北1間(3.9m)の東西棟建物である。東妻柱筋上には棟筋から南にずれて1344柱穴を検出したが、当建物に伴う

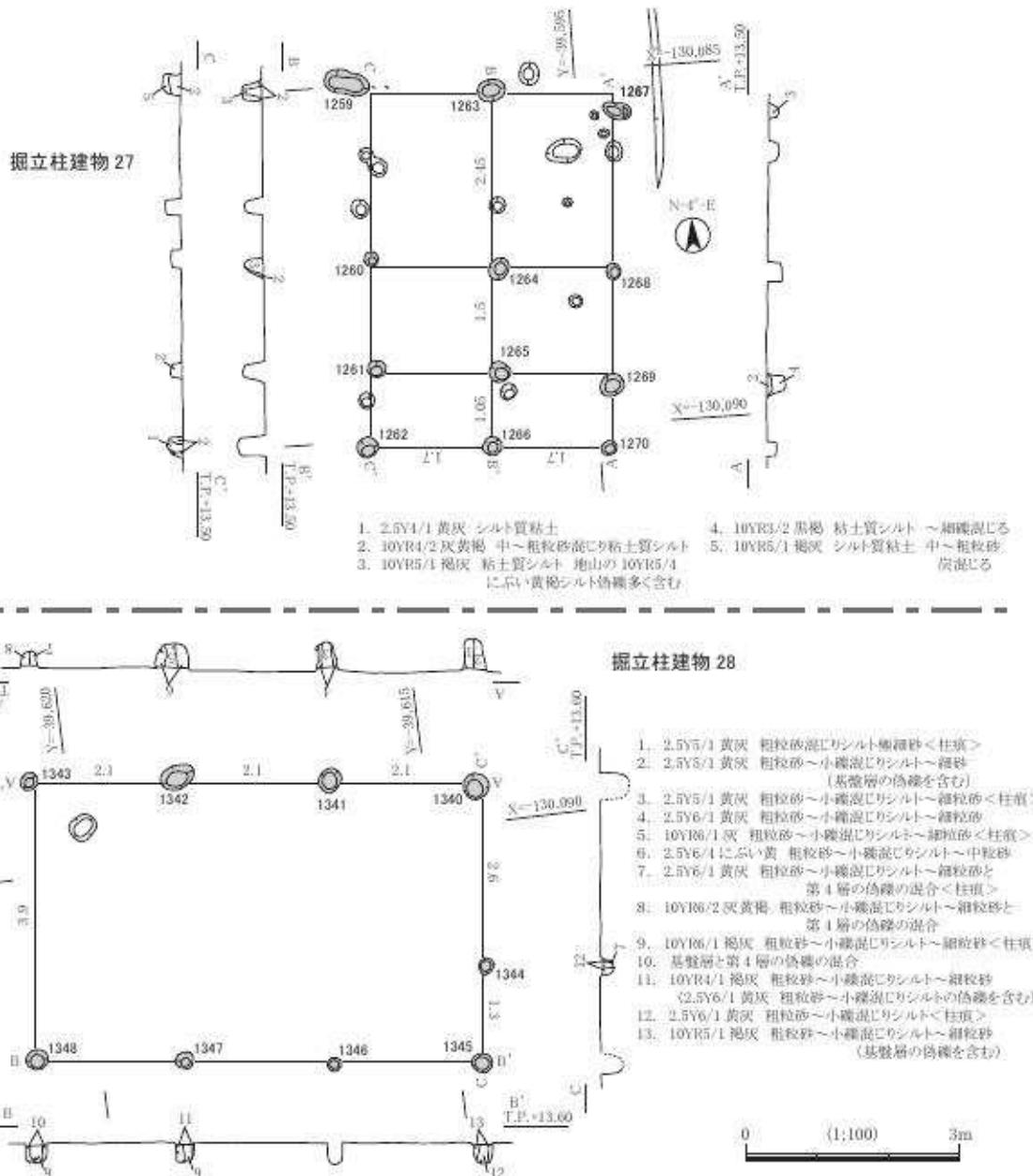


図 26 掘立柱建物 27・28 平面・断面

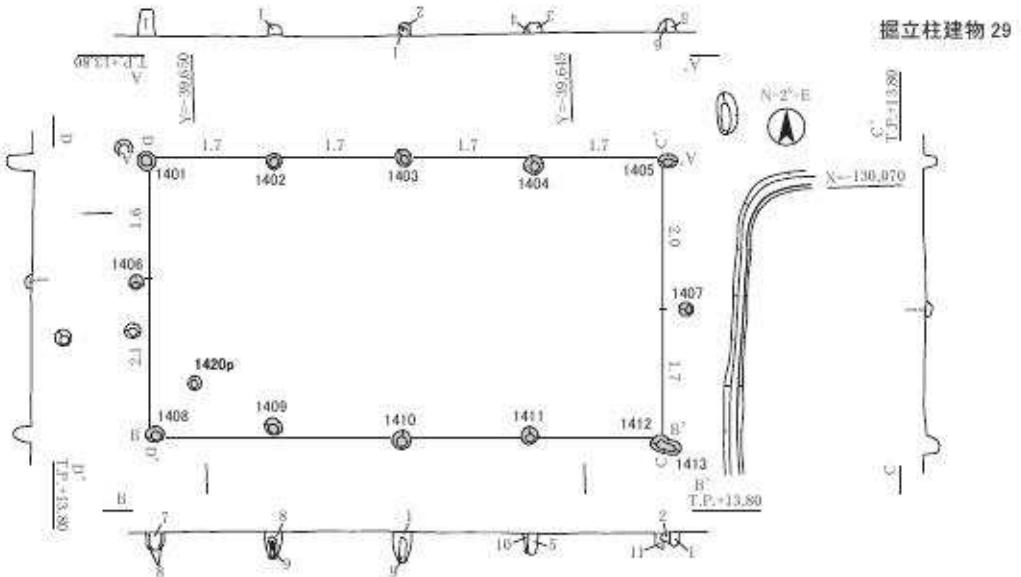
ものか不明。柱間寸法は桁行が 2.1 m 等間で、建物の振れは N-7°-E である。柱穴は直径 0.2 ~ 0.4 m 程度の円形を呈する。

1340 柱穴から須恵器甕の小片が出土している。

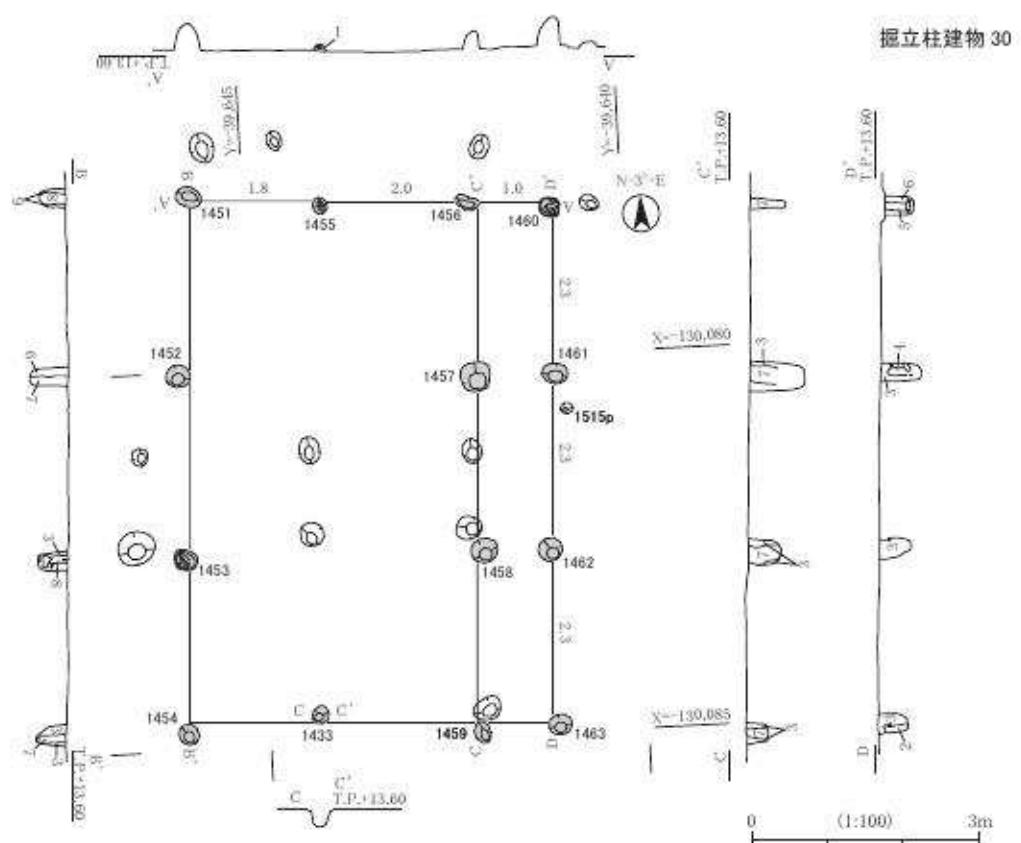
**掘立柱建物 29 (図 27)** 掘立柱建物 14 の南西側に位置する。東西 4 間 (6.8 m)、南北 2 間 (3.7 m) の東西棟建物である。両妻柱ともに柱筋からやや外側にずれる。その柱間寸法は、東面が南から 1.7 m、2.0 m で、西面が 2.1 m、1.6 m である。桁行柱間寸法は 1.7 m 等間で、建物の振れは N-2°-E である。柱穴は直径 0.2 m 前後の円形である。

1402 柱穴から土師器・須恵器の細片、1408 柱穴から土師器皿の小片が出土している。

**掘立柱建物 30 (図 27・33)** 掘立柱建物 29 の南側に位置する。東西 3 間 (4.8 m)、南北 3 間 (6.9 m) の東面に廻(縁)が付く南北棟建物である。身舎の柱間寸法は桁行が 2.3 m 等間、梁間は東から 2.0 m、1.8 m で、廻(縁)は身舎と柱筋を揃え、出は 1.0 m である。縁もしくは土廻と考えられる。建物の振れは

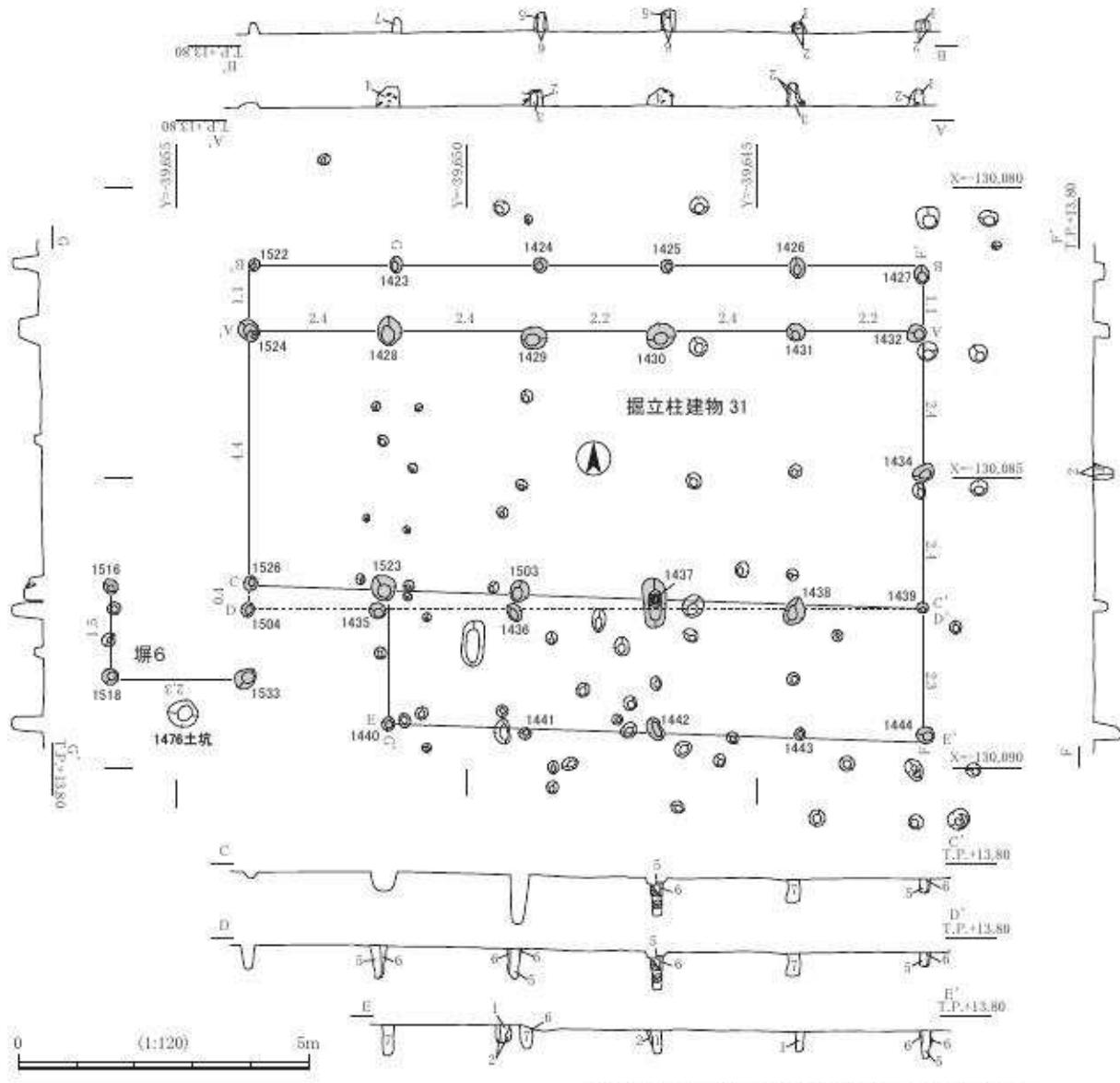


1. 2.5Y5/1 黄灰 粗粒砂～小礫混じりシルト～細粒砂 (4層の砂礫を少し含む)
2. 1上第1層の砂礫の混合
3. 2.5Y5/1 黄灰 粗粒砂～小礫混じりシルト～細粒砂 (4層の砂礫を少し含む) <柱底>
4. 10VR4/2 灰黄灰 粗粒砂～小礫混じりシルト (2.5Y5/1 黄灰 粗粒砂～小礫混じりシルト～細粒砂の砂礫を含む)
5. 2.5V6/2 灰黄 粗粒砂～小礫混じりシルト～細粒砂 <柱底>
6. 2.5V6/3にぶい黄 粗粒砂～小礫混じりシルト～細粒砂 (4層の砂礫を少し含む)
7. 10YR5/1 暗灰 粗粒砂～小礫混じりシルト～細粒砂 (炭小片を含む) <柱底>
8. 10YR5/2 灰黄灰 粗粒砂～小礫混じりシルト～細粒砂 (10Y7/1 灰白 シルトの砂礫を含む)
9. 10YR6/1 暗灰 シルト <柱底>
10. 1層の基盤層の砂礫の混合
11. 2.5Y6/1 暗灰 粗粒砂～小礫混じりシルト～細粒砂と基盤層の砂礫の混合 (4層の砂礫を含む)



1. 2.5Y4/1 黄灰 粗粒砂～小礫混じりシルト
2. 10G6/1 緑灰 粘土～シルト <柱底>
3. 2.5Y6/1 黄灰 粗粒砂～小礫混じりシルト～細粒砂
4. 2.5Y6/1 黄灰 粗粒砂～小礫混じりシルト <柱底>
5. 10VR3/1 黑褐色 粗粒砂～小礫混じりシルト～細粒砂 (2.5Y6/1 黄灰 粗粒砂～小礫混じりシルト～細粒砂の砂礫を含む) <柱底>
6. 2.5Y6/1 黄灰 粗粒砂～小礫混じりシルト～細粒砂 (4層の砂礫を非常に多く含む)
7. 5Y6/1 灰 粘土～シルト (上層に 10G7/1 明緑灰 粘土～シルトの砂礫を含む 炭小片を含む) <柱底>
8. 2.5Y6/1 黄灰 粗粒砂～小礫混じりシルト～細粒砂 <柱底>
9. 2.5Y6/1 黄灰 粗粒砂～小礫混じりシルト～細粒砂 (4層の砂礫を含む)

図 27 掘立柱建物 29・30 平面・断面



1. 2.5Y6/1 黄灰 シルト 細粒砂混じり中～粗粒砂含む  
2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト 中粒砂含む（ベースブロック）炭若干含む<柱直>  
2. 10VR3.2 黒褐 細粒砂シルト混じり中～極粗粒砂多く含む  
2.5Y4/1 黄灰 シルト 細粒砂混じりブロック含む
3. 2.5Y6/1 黄灰 細粒砂シルト混じり 岩化物含む 土器含む<柱直>  
4. 2.5Y4/1 黄灰 シルト 細粒砂混じり中～極粗粒砂多く含む 砂隕～中疊含む  
5. 2.5Y5/1 黄灰 シルト 細粒砂混じり中～極粗粒砂含む 土器片含む<柱直>  
6. 2.5Y5/2 暗灰 黃 シルト 細粒砂混じり中～極粗粒砂含む  
7. 2.5Y4/1 黄灰 シルト 細粒砂混じり中～極粗粒砂含む 磨礫若干含む

図 28 掘立柱建物 31・塹 6 平面・断面

N-3°-Eで、柱穴は直径 0.25 m 程度の円形を呈する。

1459 柱穴から黒色土器 B 類椀 (33)・土師器皿 (34)、1462 柱穴から土師器皿 (35) が出土している。34・35 は 11 世紀中～後葉のやや厚手の字状口縁皿である。このほか 1451・1463 柱穴から土師器皿、1452・1454 柱穴から瓦器椀、1459 柱穴から黒色土器 B 類椀・瓦器椀、1462 柱穴から黒色土器 B 類椀が出土している。1452 柱穴出土の瓦器椀は楕葉型で、厚手の器壁に密にミガキを施す。瓦器椀は総じて 11 世紀中～後葉のものである。

掘立柱建物 31(図 28・33) 掘立柱建物 30 の南側で重複するが、柱穴の切り合いはない。東西 5 間(11.6 m)、南北 4 間(8.2 m)の南北 2 面に廂(縁)が付く東西棟建物である。身舎の桁行柱間寸法は東から 2.2 m、2.4 m、2.2 m、2.4 m、2.4 m で、南側柱筋については西の妻を 0.4 m ほど狭める改築が行なわれている。梁間の柱間寸法は東面で 2.4 m 等間である。西面の妻柱は未検出。廂(縁)は身舎と柱筋を揃え、南面廂は改築後の身舎柱筋に並行する。出は南面が 2.3 m であるが、北面は 1.1 m と小さい。縁も

しくは土廟であったと考えられる。また南面廂は掘立柱建物 16 と同様に西端の 1 間分を欠く。柱穴は身舎が直径 0.3 ~ 0.4 m 程度の円形であるが、廂は直径 0.2 m 程度とやや小さい。

1428・1434・1524 柱穴から土師器皿 (36・37・39)、1503 柱穴から綠釉陶器の碗 (38) が出土している。36・37 はての字状口縁皿で、器壁の厚みや口縁部の形状から 11 世紀中～後葉頃のものと判断した。39 は底部をヘラ切りとする回転台土師器皿である。38 は内面に陰刻花紋を施す。胎土は灰白色でやや軟質、釉色は灰オリーブ色を呈する。9 世紀後半頃のものか。このほか 1423・1430・1431・1444・1503・1504 柱穴から土師器皿、1425 柱穴から瓦器椀、1434 柱穴から黒色土器 B 類椀・瓦器椀、1522 柱穴から須恵器甕が出土している。すべて小片である。1430・1503 柱穴出土の土

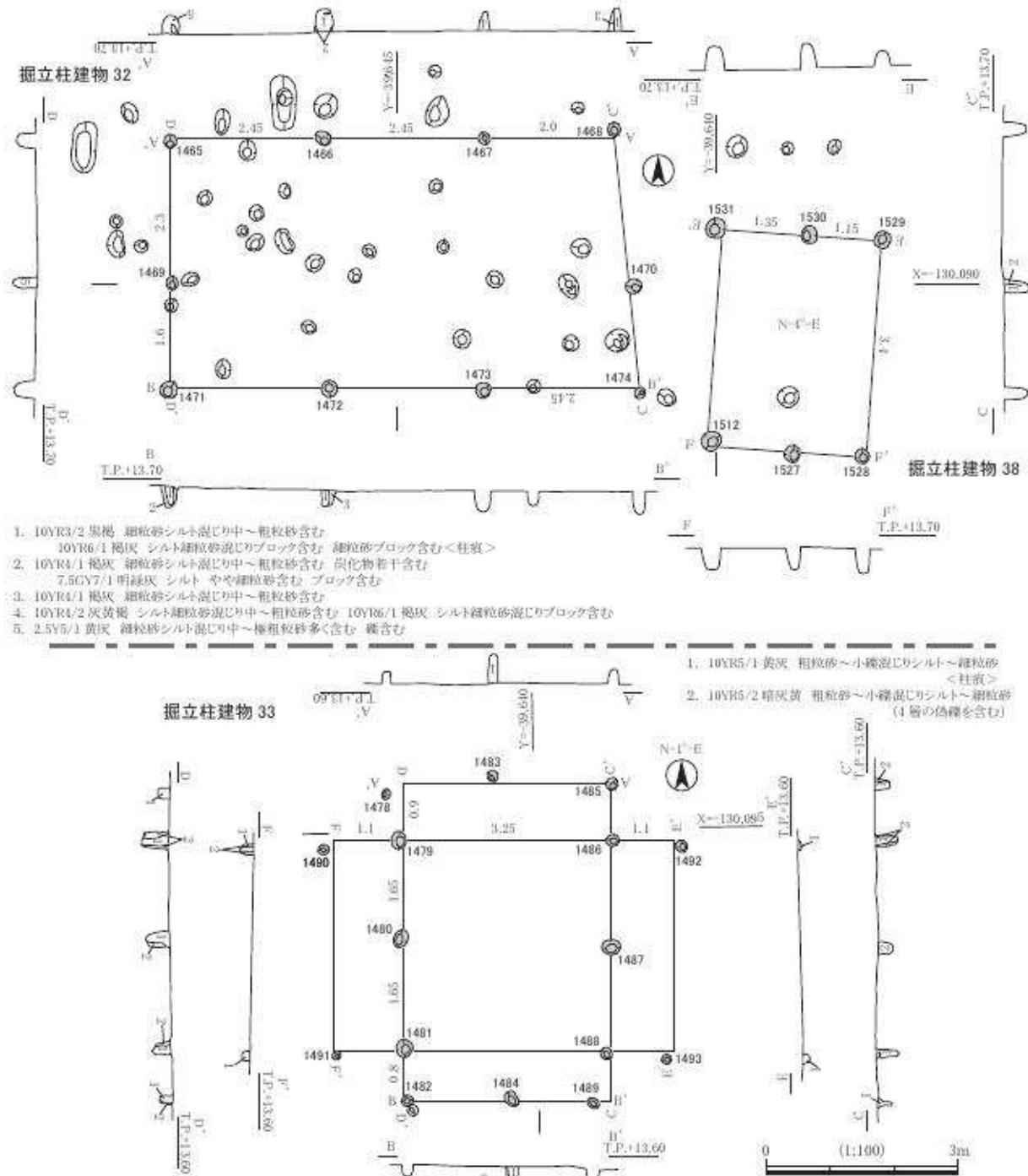


図 29 掘立柱建物 32・33・38 平面・断面

師器皿はての字状口縁皿で、1504 柱穴の土師器皿は 11 世紀代のものと思われる大皿片である。1425 柱穴出土の瓦器椀は楕葉型。

図6(図28) 掘立柱建物31の南西側に近接する。南北1間、東西1間のL字状に曲がる一本柱屏で、柱間寸法は南北が1.5m、東西が2.3mである。柱穴は直径0.25~0.35mの円形である。

1516・1518 柱穴から須恵器片が計3点出土している。

**掘立柱建物 32(図 29)** 掘立柱建物 31 の南面廊部で重複するが、柱穴の切り合いはない。東西 3 間(6.9 ~ 7.35 m)、南北 2 間(3.9 m)の東西棟建物である。桁行の柱間寸法は、南面は 2.45 m 等間であるが、北面はもっとも東側の柱間が 2.0 m と狭いため、東の妻柱筋がやや歪む。梁間の柱間寸法は南から 1.6 m、2.3 m で、妻柱がやや南に偏る。柱穴は直径 0.2 ~ 0.25 m 程度の円形を呈する。

1470 柱穴から土師器での字状口縁皿の小片が出土している。

**掘立柱建物 33(図 29・33)** 掘立柱建物 31・32 の南東側に位置する。東西 4 間(5.45 m)、南北 4 間(5.0 m)の 4 面に廻が付く建物である。身舎の柱間は南北が 2 間で 1.65 m 等間、東西は 1 間で 3.25 m であり、

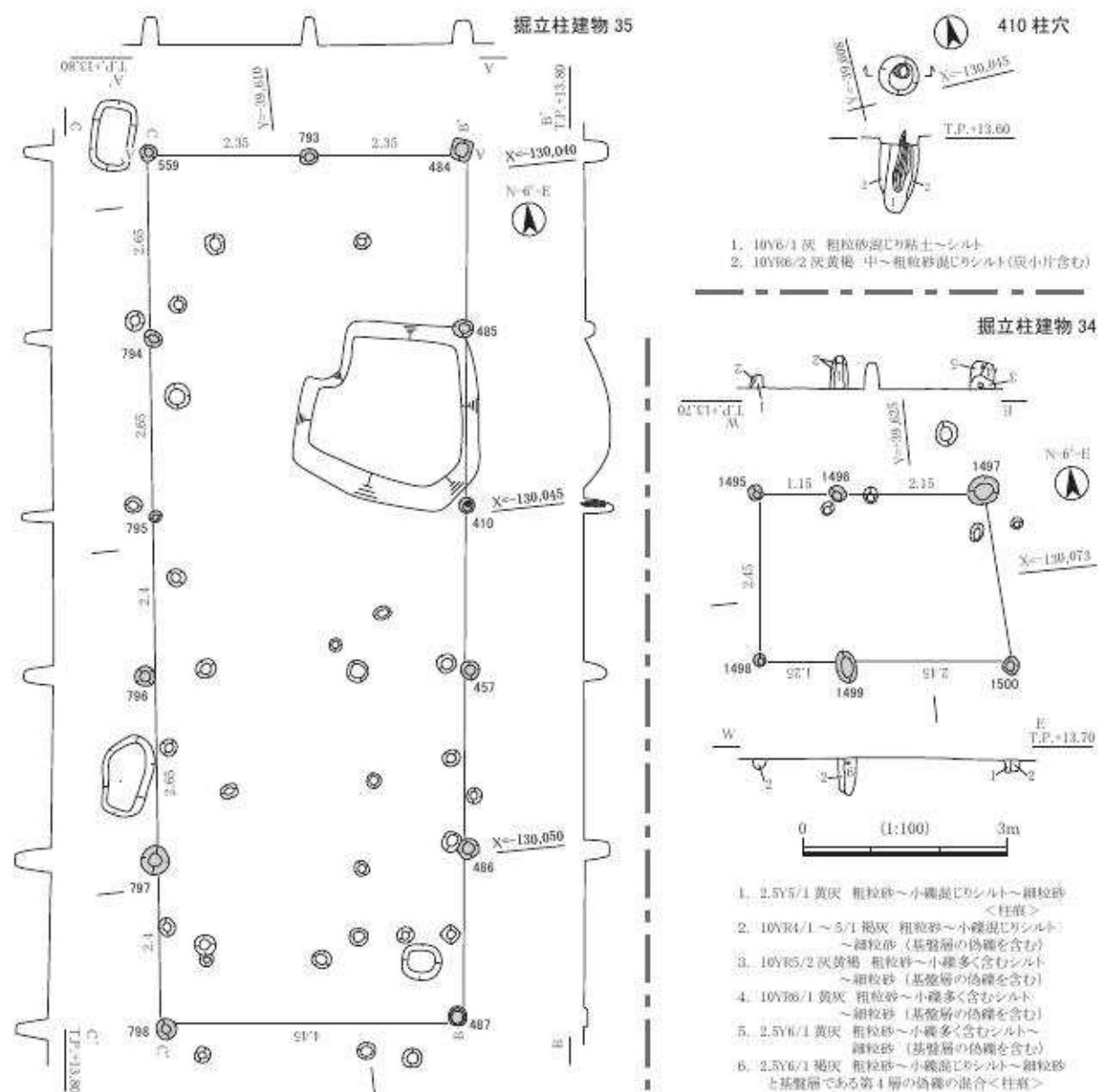


図 30 掘立柱建物 34・35・410 柱穴平面・断面

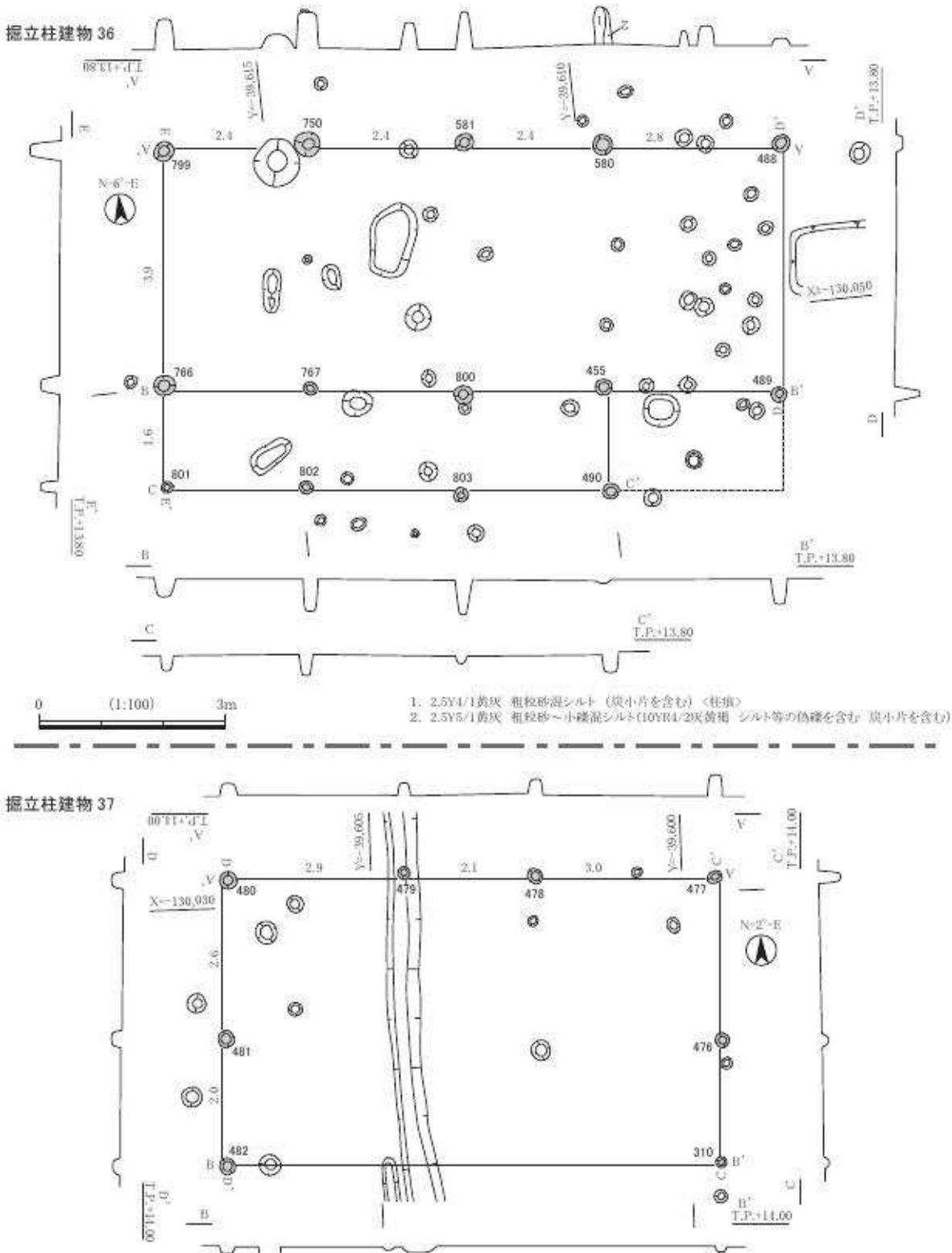


図31 掘立柱建物36・37平面・断面

おそらく梁上の束柱によって棟を支える南北棟であったと思われる。建物の振れはN-1°-Eである。廻の出は、東西がともに1.1m、南面が0.8m、北面が0.9mで、4隅を欠く。土廻であろうか。廻の柱穴はきれいに並ばず、身舎の柱筋と若干ずれる箇所もある。身舎の南北面には中央に柱穴（妻柱）を設けないが、南北の廻柱筋上には中央にも柱を設け、また身舎の東西面には中央に柱穴を設けるが、東西の廻柱筋上には中央に柱を設けない。柱穴は身舎が直径0.25～0.3m程度、廻は0.15～0.2m程度

の円形である。

1488 柱穴から土師器椀（40）が出土した。底部に糸切り後高台を貼り付ける回転台土師器である。このほか 1478・1480 柱穴から土師器皿、1484・1489 柱穴から 11 世紀代の土師器ての字状口縁皿、1486 柱穴から瓦器椀の小片が出土している。

**掘立柱建物 34(図 30・33)** 掘立柱建物 14 の南側に近接する。東西 2 間(3.3 ~ 3.7 m)、南北 1 間(2.45 m) の東西にやや長い簡易な建物である。東西の柱間寸法は、南面が東から 2.45 m、1.25 m、北面が 2.15 m、1.15 m と、柱間が揃っておらず東面が歪む。建物の振れは N-6°-E で、柱穴は直径 0.2 ~ 0.4 m 弱の円形や楕円形である。

1499 柱穴から土師器皿(41)が出土した。底部をへラ切りする回転台土師器である。このほか  
1497 柱穴からは瓦器小片が出土している。

**掘立柱建物 35(図 30・33)** 掘立柱建物 5 の西側に位置する。東西 2 間(4.45 ~ 4.7 m)、南北 5 間(12.75 m) の南北棟建物である。桁行の柱間寸法は南から 2.4 m、2.65 m、2.4 m、2.65 m、2.65 m であるが、梁間の柱間寸法は北面が 2.35 m 等間であるのに対して、南面には妻柱がなく、1 間で 4.45 m とやや狭い。建物の振れは N - 6° - E である。柱穴は大小様々あるが、直径 0.25 ~ 0.3 m 程度のものが主で、円形や隅丸方形を呈する。410 柱穴には柱根が残っていた。

559柱穴から11世紀中～後葉の土師器での字状口縁皿(42)が出土している。

**掘立柱建物 36(図 31・33)** 掘立柱建物 35 の南側で重複するが、柱穴の切り合いはない。東西 4 間(10 m)、南北 2 間(5.5 m)の南面に廂が付く東西棟建物である。身舎の桁行柱間寸法はもっとも東側の柱間が 2.8 m とやや広いが、西側の 3 間は 2.4 m 等間である。妻柱はなく梁間 1 間で 3.9 m である。廂

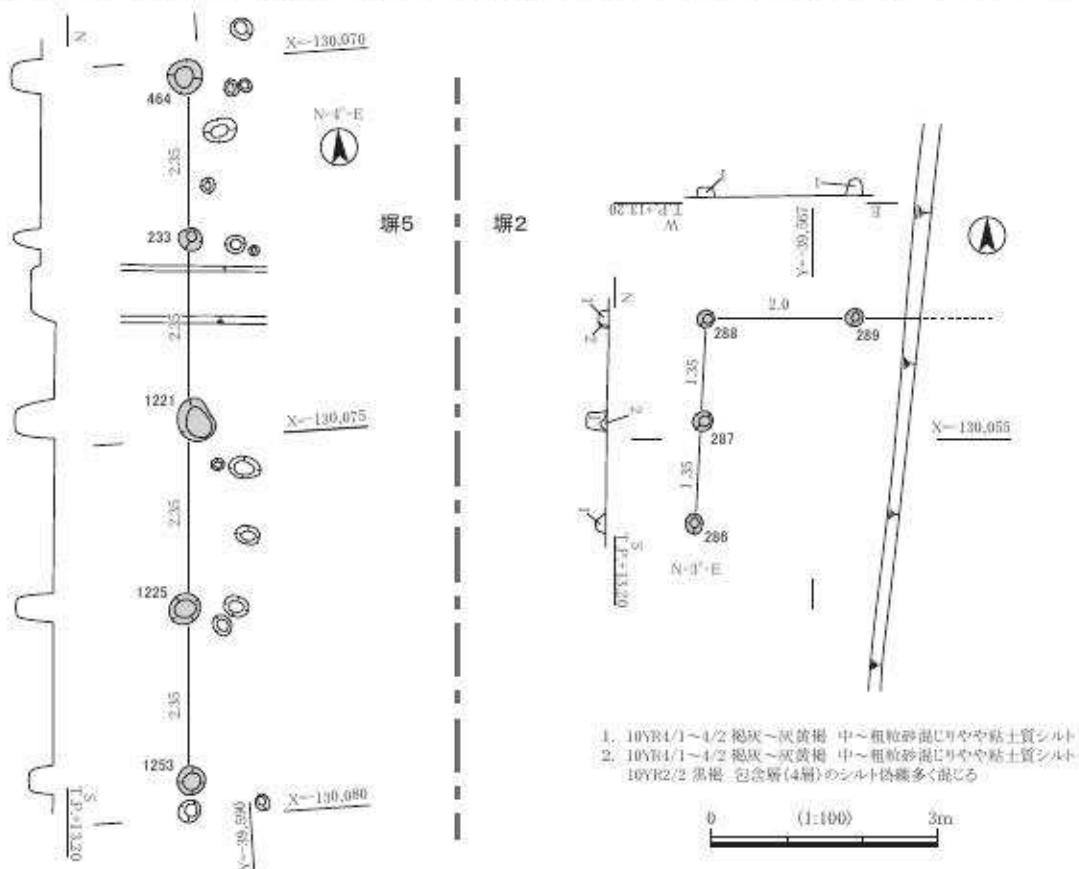
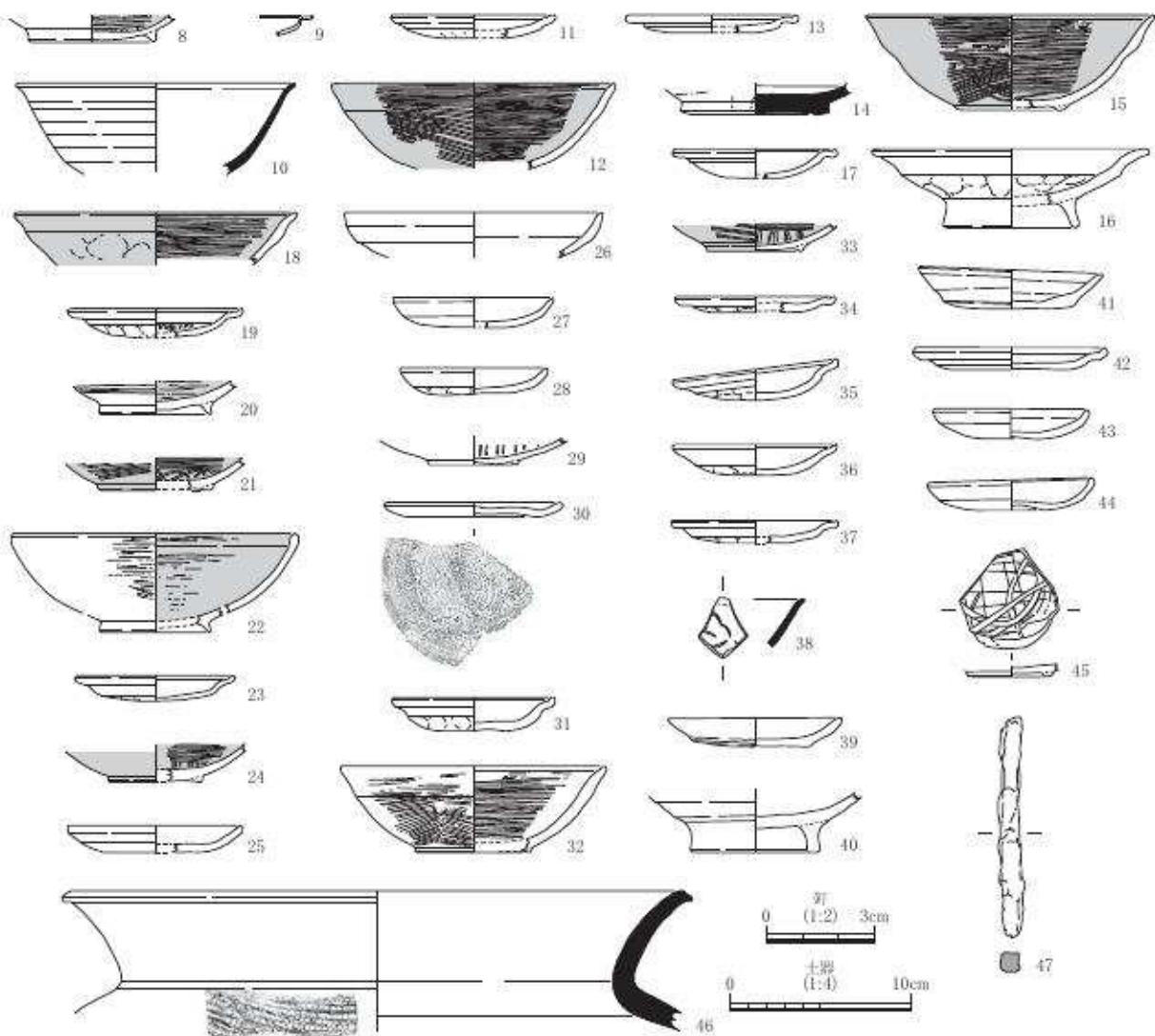


図32 壁2・5平面・断面



掘立柱建物 1 (8, 7 柱穴, 9, 13 柱穴, 10, 20 柱穴, 47, 19 柱穴)、掘立柱建物 2 (11-12, 100 柱穴)、掘立柱建物 4 (13, 55 柱穴)  
 掘立柱建物 5 (14-15, 128 柱穴, 16, 132 柱穴, 17, 136 柱穴, 18, 137 柱穴, 46, 110 柱穴)、掘立柱建物 6 (19, 173 柱穴, 20 ~ 22, 174 柱穴,  
 23, 184 柱穴, 24, 185 柱穴)、掘立柱建物 14 (25, 530 柱穴, 26, 537 柱穴)、掘立柱建物 15 (27 ~ 29, 604 柱穴)、掘立柱建物 19 (30, 698 柱穴)  
 掘立柱建物 25 (31, 1318 柱穴, 32, 1319 柱穴)、掘立柱建物 30 (33-34, 1459 柱穴, 35, 1462 柱穴)  
 掘立柱建物 31 (36, 1428 柱穴, 37, 1434 柱穴, 38, 1503 柱穴, 39, 1524 柱穴)、掘立柱建物 33 (40, 1488 柱穴)、掘立柱建物 34 (41, 1499 柱穴)  
 掘立柱建物 35 (42, 559 柱穴)、掘立柱建物 36 (43, 767 柱穴)、壠 5 (44, 233 柱穴, 45, 1225 柱穴)

図 33 掘立柱建物出土遺物

の出は 1.6 m で、柱筋は身舎と揃える。廟の柱列のうち東端の柱穴が検出できておらず、東端の 1 間分を欠いていたと考えられる。身舎の柱穴は直径 0.25 ~ 0.3 m 程度の円形であるが、廟は直径 0.2 ~ 0.25 m とやや小さい。

767 柱穴から 13 世紀前半の土師器皿 (43) が出土している。口縁部は 2 段ナデで、底部外面が凹む。  
**掘立柱建物 37 (図 31)** 掘立柱建物 1 の南西側に近接する。東西 3 間 (8.0 m)、南北 2 間 (4.6 m) の東西棟建物で、北側柱筋が掘立柱建物 1 の南面廟の柱筋とほぼ揃う。柱間寸法はまちまちで、桁行は東から 3.0 m、2.1 m、2.9 m、梁間は南から 2.0 m、2.6 m と、他の建物に比べやや広い。南側柱筋の柱穴は 2箇所検出できていない。柱穴は直径 0.25 m 程度の円形である。

**掘立柱建物 38 (図 29)** 掘立柱建物 32 の東側に近接する。東西 2 間 (2.5 m)、南北 1 間 (3.4 m) の南北にやや長い簡易な建物である。建物の振れは N - 4° - E で、東西の柱間寸法は東から 1.15 m、1.35 m である。柱穴は直径 0.25 ~ 0.3 m 程度の円形を呈する。

**壠 2 (図 32)** 掘立柱建物 9・10・11 の南方、調査区東壁際に位置する。南北 2 間の L 字状に曲がる

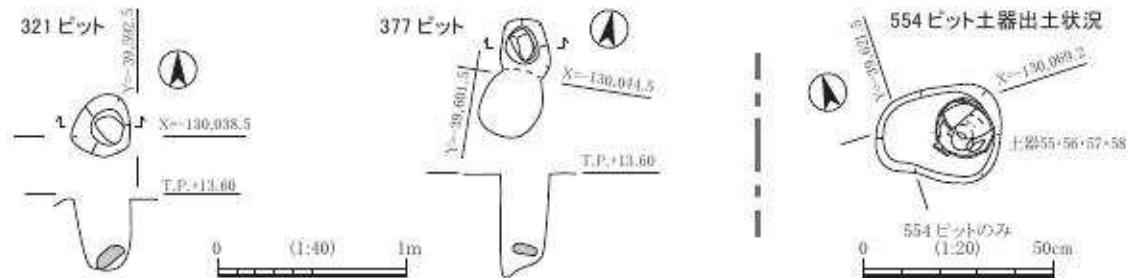


図34 4層上面ピット平面・断面

一本柱塀で、東西は1間分を検出した。さらに東側調査区外へと続いていると思われる。柱間寸法は南北が1.35 m等間で、東西が2.0 mである。柱穴は直径0.2 m程度の円形を呈する。

289 柱穴から黒色土器B類碗の小片が出土している。

塀5(図32・33) 挖立柱建物25の東側に位置する。柱間4間の南北方向の一本柱塀で、振れはN-4°-Eである。柱間寸法は2.35 m等間で、柱穴は直径0.3~0.5 mの円形を呈する。

233 柱穴から12世紀後半の土師器皿(44)が出土した。1225 柱穴からは12世紀代の土師器皿や瓦器碗の細片が多く出土している。45は和泉型瓦器碗の底部片で、見込みには暗紋を描く前に細い格子状の線刻が施されている。

掘立柱建物以外のピット(図34・35・付図1) 3区の掘立柱建物5周辺や4区の掘立柱建物12・13の南方、5区の掘立柱建物25周辺には、建物として復原できないピットが多数広がっている。それの中には、図34に示した321・377ピットのように、礎石をもち、建物の柱穴であったことを示すものもいくつか見られた。特に4区の掘立柱建物12・13の南方については、500・587溝で開まれた屋敷地の内側であり、そのピットの数からもあと1、2棟の掘立柱建物が建っていたと推測できる。柱穴が完全に揃わず、現地では建物として復原することができなかつたが、その並びから、屋敷地の東辺に

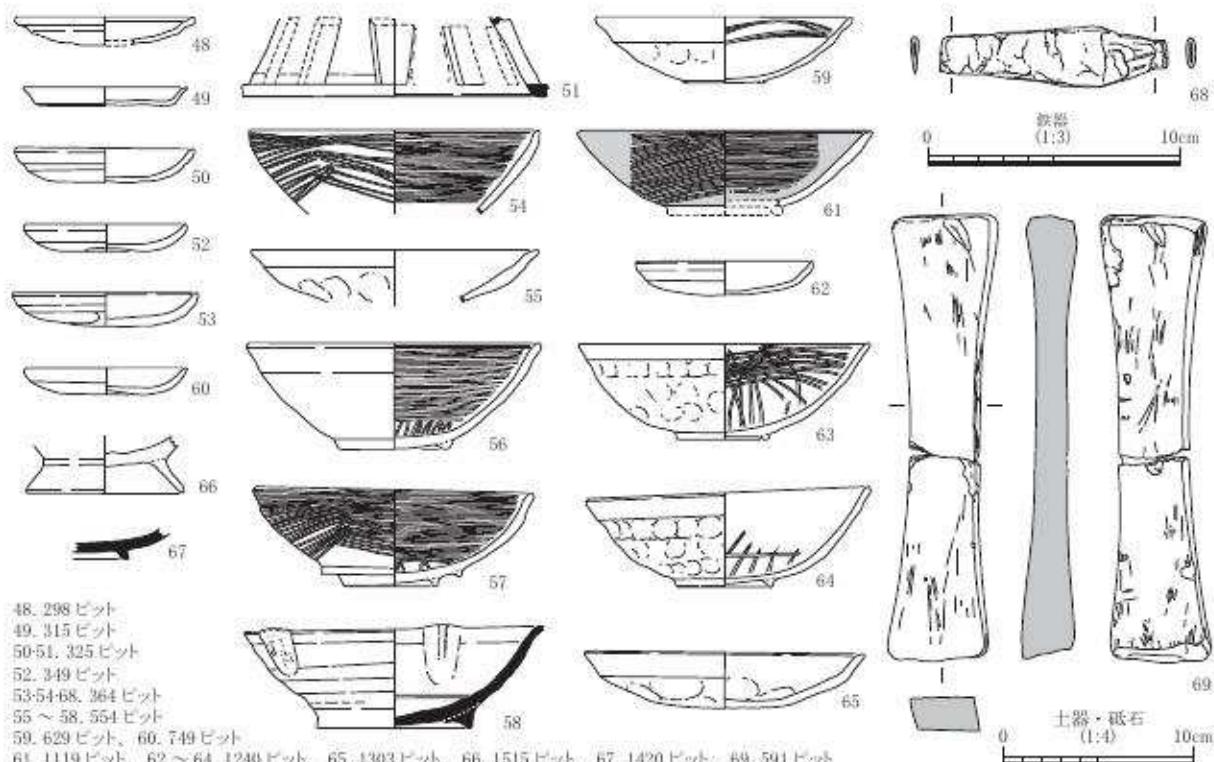


図35 4層上面ピット出土遺物

沿って南北棟が1棟と、その西側に北辺の柱筋をほぼ揃えるようにもう1棟の掘立柱建物が建っていたことが容易に推定できる。その西側屋敷地内で検出した629・749ピットからは13世紀代の瓦器椀(59)や土師器皿(60)が、591ピットからは黄白色を呈する流紋岩質凝灰岩の砥石(69)が出土しており、3区の掘立柱建物5と重複する315・325・349・364ピットからは12世紀代の土師器皿や瓦器椀(49・50・52~54)・刀子(68)が出土している。このほか325ピットからは焼成不良の円面硯(51)の一部が出土している。また2区中央部や北西端からもピットがまとまって見つかっており、ここにも簡易な掘立柱建物が建っていた可能性が考えられる。

上記以外にも、掘立柱建物としてまとめられないピットからは多数の遺物が出土している。掘立柱建物14の東側で検出した554ピットは、平面形は径0.33×0.26mの歪んだ隅丸長方形で、深さ0.25mを測る。12世紀前半の楠葉型瓦器椀(56・57)や土師器皿(55)のほか、山茶碗(58)など多数が出土している。57の瓦器椀は高台を二重とする特異なものである。58は口縁に輪花を施す。掘立柱建物11の西側に接する298ピットからは11世紀後葉の土師器ての字状口縁皿が、掘立柱建物25と重複する1303ピットからは11世紀前半の土師器皿(65)が出土しており、掘立柱建物29と重複する1420ピットからは緑釉陶器の碗あるいは皿(67)が、掘立柱建物30の東側に接する1515ピットからは回転台土師器の台付皿(66)が出土している。66は京都からの搬入品であろうか。67は胎土が淡い橙白色で軟質。釉は淡い薄黄緑色で、高台より内側にも施されている。

このほか1区北半に位置する1119ピットからは11世紀後半の黒色土器B類椀(61)が、塀5の南側に位置する1240ピットからは12世紀後半の土師器皿や和泉型瓦器椀(62~64)が出土している。  
**38・39・40土坑(図36・42)** 挖立柱建物1のほぼ中央部やや西寄りにまとまる。建物と重複するが、いずれも柱穴との切り合いはない。38土坑は直径0.7mの整った円形で、深さは0.28m。39土坑は径0.6×0.56mの円形で、深さは0.21m。40土坑は径0.57×0.55mの円形で、深さは0.12mを測る。

39土坑から10世紀後葉頃のものと思われる土師器ての字状口縁皿小片が、40土坑からは黒色土器B類の椀(70)のほか土師器ての字状口縁皿小片が出土している。70は11世紀前半のもので、外面には分割のミガキが認められる。

**41土坑(図36・42)** 挖立柱建物1・4と重複し、両者の柱穴と切り合う。3柱穴を切り、491柱穴には切られる。大型の土坑で、平面形は径2.6×1.84mの長い卵形を呈する。深さは0.34mを測る。

11世紀前半の黒色土器B類椀(71)・土師器皿(72)・灰釉陶器碗(73)が出土している。72は器壁が薄いての字状口縁皿。73は底部の小片で、内面の重ね焼き痕跡よりも外側に自然釉がかかる。胎土は緻密である。

**66土坑(図36・42)** 挖立柱建物5の北面廻と重複するが、柱穴とは切り合わない。平面形は径0.8×0.7mの卵形で、深さは深い箇所で0.23mを測る。

11世紀前半の黒色土器B類の椀(74)が出土している。

**67土坑(図36)** 挖立柱建物5の中央部で重複する。平面形は最大長1.25m、幅0.83mの隅丸台形で、深さは0.24mを測る。土坑の底面で4基のピットを検出した。本来は353土坑同様に土坑埋土上面からピットが掘り込まれていたと思われるが、遺構検出段階、および断面観察でも先後関係を検証できなかった。

須恵器片と12世紀後半のものと思われる瓦器椀の小片が出土している。

**158土坑(図36・42)** 挖立柱建物1・7と重複する。柱穴とは切り合わない。平面形は径0.55×0.5

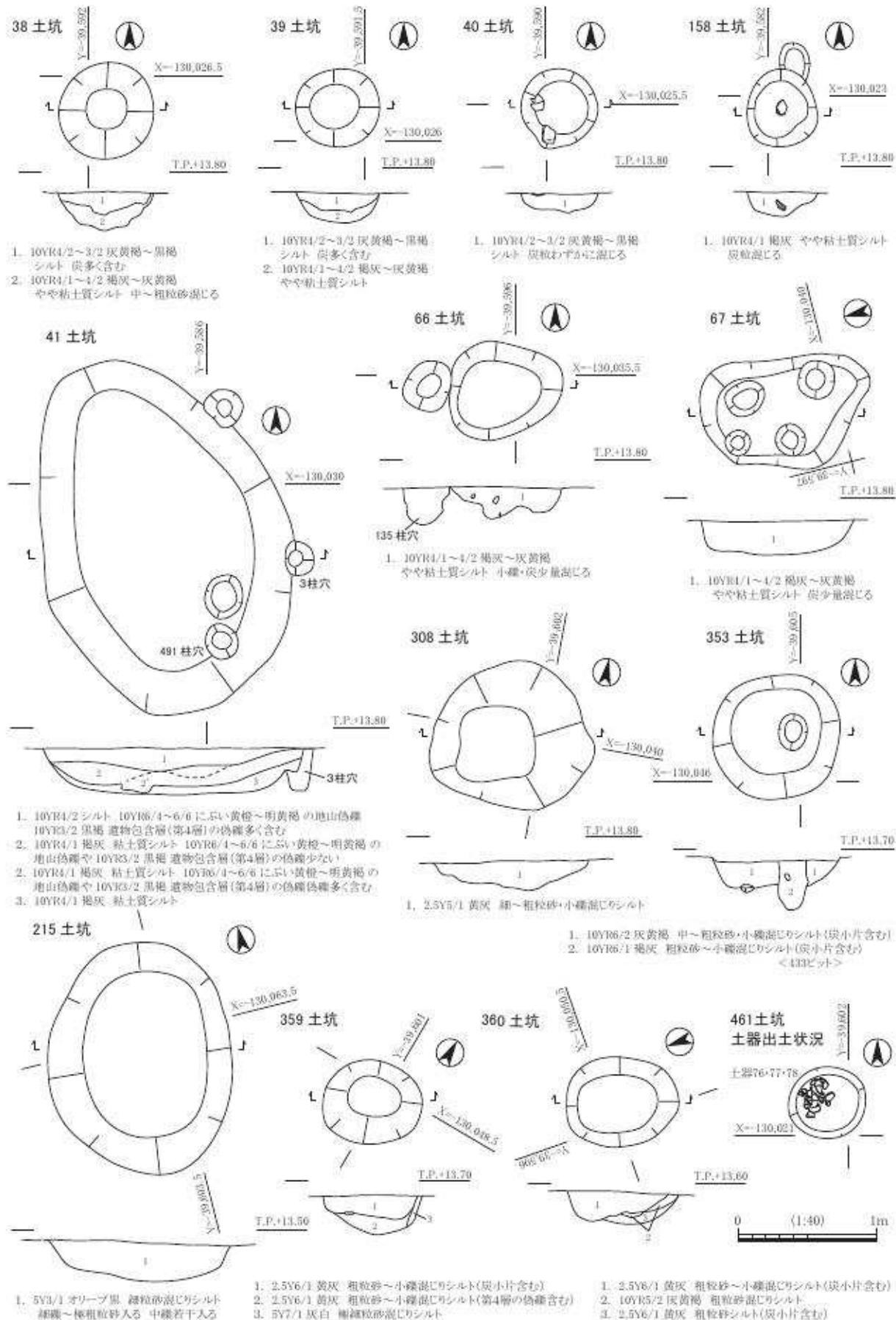


図 36 4層上面土坑平面・断面 (1)

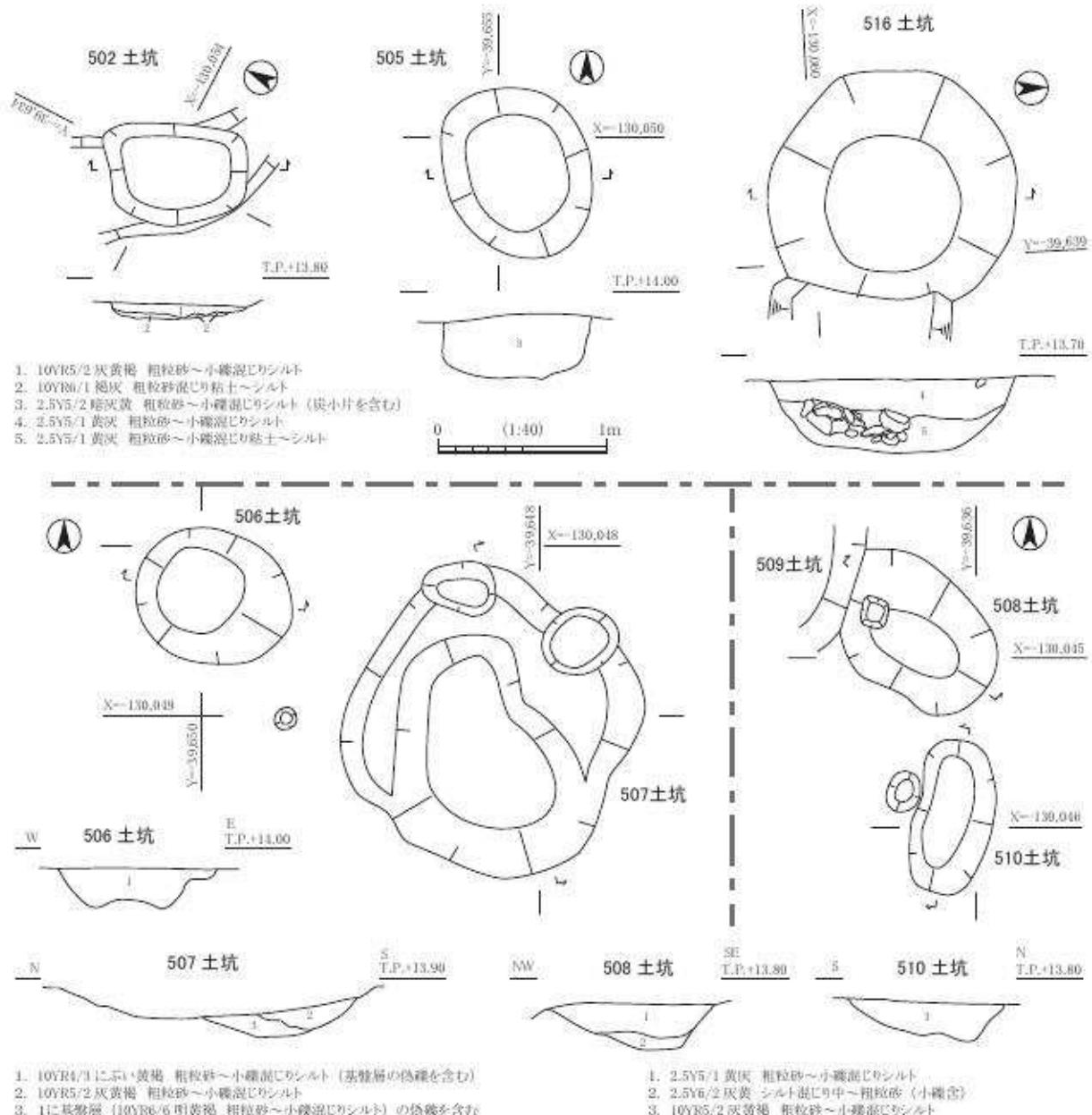


図37 4層上面土坑平面・断面(2)

mのほぼ円形で、深さは0.17mを測る。

11世紀前半の灰釉陶器碗(75)が出土している。底部糸切り後にやや開き気味の高台を貼り付け、内面には重ね焼き痕跡よりも外側に自然釉がかかる。胎土は緻密である。

**215土坑(図36)** 3区の南方、471墓の西側に位置する。大型の土坑で、平面形は径1.67×1.33mの楕円形を呈する。深さは0.27mを測る。

表面が磨滅した瓦器椀片が出土している。

**308土坑(図36)** 掘立柱建物5の西側に近接する。平面形は径1.15×1.1mの歪んだ五角形で、深さは0.21mを測る。

**353土坑(図36)** 掘立柱建物35の東側に位置する。平面形は直径0.9mの隅丸方形気味の円形で、深さは0.22mを測る。重複するピットに切られる。

**359土坑(図36)** 掘立柱建物5の南西側に位置する。平面形は径0.72×0.6mの楕円形で、深さは0.28

mを測る。

360 土坑(図36) 挖立柱建物5の南、359土坑の東側に位置する。平面形は径 $0.8 \times 0.65$ mの楕円形で、深さは0.23mを測る。

461 土坑(図36・42) 挖立柱建物1の北西側に位置する。平面形は径 $0.55 \times 0.52$ mの円形で、深さは浅く0.06m程度である。

10世紀後半の黒色土器A類の椀が3点(76～78)出土している。

502 土坑(図37) 4区の東側屋敷区画の南西隅で501溝と重複する。溝埋土除去後に検出したが、溝埋土上面から検出できたのかは検証できていない。平面形は径 $0.8 \times 0.6$ mの隅丸長方形で、深さは0.09mを測る。

503 土坑(付図1・写真図版11) 挖立柱建物29の北西側に位置する。平面形は直径0.46mの整った円形で、深さ0.15mを測る。埋土は黄灰色の粗粒砂～小礫混じりシルトである。

505 土坑(図37) 4区の西側屋敷区画内の南西隅に位置する。平面形は径 $1.05 \times 0.87$ mの楕円形で、深さは0.37mを測る。

瓦器椀小片が出土している。

506・507・527 土坑(図37・38) 4区の西側屋敷区画内の南西部、505土坑の東側に並ぶ。506土坑は平面形が径 $0.95 \times 0.79$ mの楕円形で、深さは約0.2m。507土坑は一辺1.6mの隅丸方形で、深さは0.27m。527土坑は径 $0.9 \times 0.77$ mの卵形の平面形で、深さは0.27mを測る。

507土坑から須恵器・瓦器椀の小片と白磁片が出土している。

508～510 土坑(図37・42) 4区の西側屋敷区画内の中央東端にまとまる。508土坑は平面形が長さ1.1m以上、幅0.77mの楕円形で、深さは0.27mを測る。509土坑は径 $3.4 \times 2.3$ mの大型の土坑である。平面形は卵型を呈し、深さは0.2mを測る。508土坑と切り合うが、先後関係は不明。510土坑は $0.91 \times 0.48$ mの楕円形で、深さは0.21mを測る。

508土坑からは白磁皿の小片と13世紀前半の瓦器椀小片、東播系の片口鉢片などが出土している。

509土坑からは13世紀前葉頃の楠葉型瓦器椀(79)や東播系の片口鉢(80)のほか、土師器皿小片・IV類の白磁碗片などが、また510土坑からは13世紀代の瓦器椀片と土師器鍋小片が出土している。

516 土坑(図37) 4区の西側屋敷区画の南方、掘立柱建物14の北西側に位置する。平面形は直径約1.5mの円形で、深さは0.44mを測る。下層には拳大から人頭大の石が多く含まれていた。

器壁が厚い須恵器甕片が1点出土している。

529 土坑(図38) 挖立柱建物36と重複するが、柱穴とは切り合わない。平面形は長さ1.2m、最大幅0.74mの隅丸長方形気味の楕円形で、深さは0.11mを測る。

548・549・593 土坑(図38) 4区の西側屋敷区画内の中央東端、508～510土坑の北側にまとまる。

548土坑は平面形が一辺 $0.69 \times 0.62$ mの隅丸方形で、深さは0.24mを測る。549土坑は平面形が一辺約0.4mの隅丸方形で、深さは0.37mを測る。548・549土坑は切り合い、548土坑が切る。593土坑は径 $0.7 \times 0.59$ mの楕円形で、深さは0.25mを測る。

549土坑からは13世紀代の瓦器椀小片が、593土坑からは瓦器椀と土師器皿の小片が出土している。

558 土坑(図38) 挖立柱建物35の北西隅に近接する。長さ1.04m、幅0.64mの隅丸長方形で、深さは0.14mを測る。

11世紀代の土師器ての字状口縁皿小片が出土している。

**751 土坑 (図 38)** 掘立柱建物 36 と重複するが、柱穴とは切り合わない。平面形は径  $0.77 \times 0.72$  m のほぼ円形で、深さは 0.22 m を測る。

**770・771 土坑 (図 38)** 4 区の東側屋敷区画の東辺 586 溝と重複する。溝埋土除去後に検出したが、溝埋土上面から検出できたのかは検証できていない。770 土坑は平面形が径  $0.98 \times 0.77$  m の楕円形で、深さは 0.37 m を測る。771 土坑は長さ 0.7 m 以上、幅 0.46 m の隅丸長方形で、深さは 0.32 m を測る。両者は切り合い、770 土坑が切る。

**1003 土坑 (図 39)** 2 区の北方、1001 溝の南側に位置する。平面形は径  $0.88 \times 0.69$  m の楕円形で、深さは 0.21 m を測る。

**1004 土坑 (付図 1・写真図版 12)** 2 区のピットが集中する中央部東寄りに位置する。平面形は径  $0.6 \times 0.45$  m の卵形で、深さは 0.13 m を測る。埋土は灰黄褐色の粗粒砂～小礫混じりシルトである。

**1106 土坑 (図 39)** 1 区の北西隅に位置する大型の土坑である。平面形は南北 3.26 m、東西最大幅 2.95 m の隅丸台形で、深さは平面規模のわりに 0.17 m と浅い。この土坑の周囲には多数のピットが広がる。

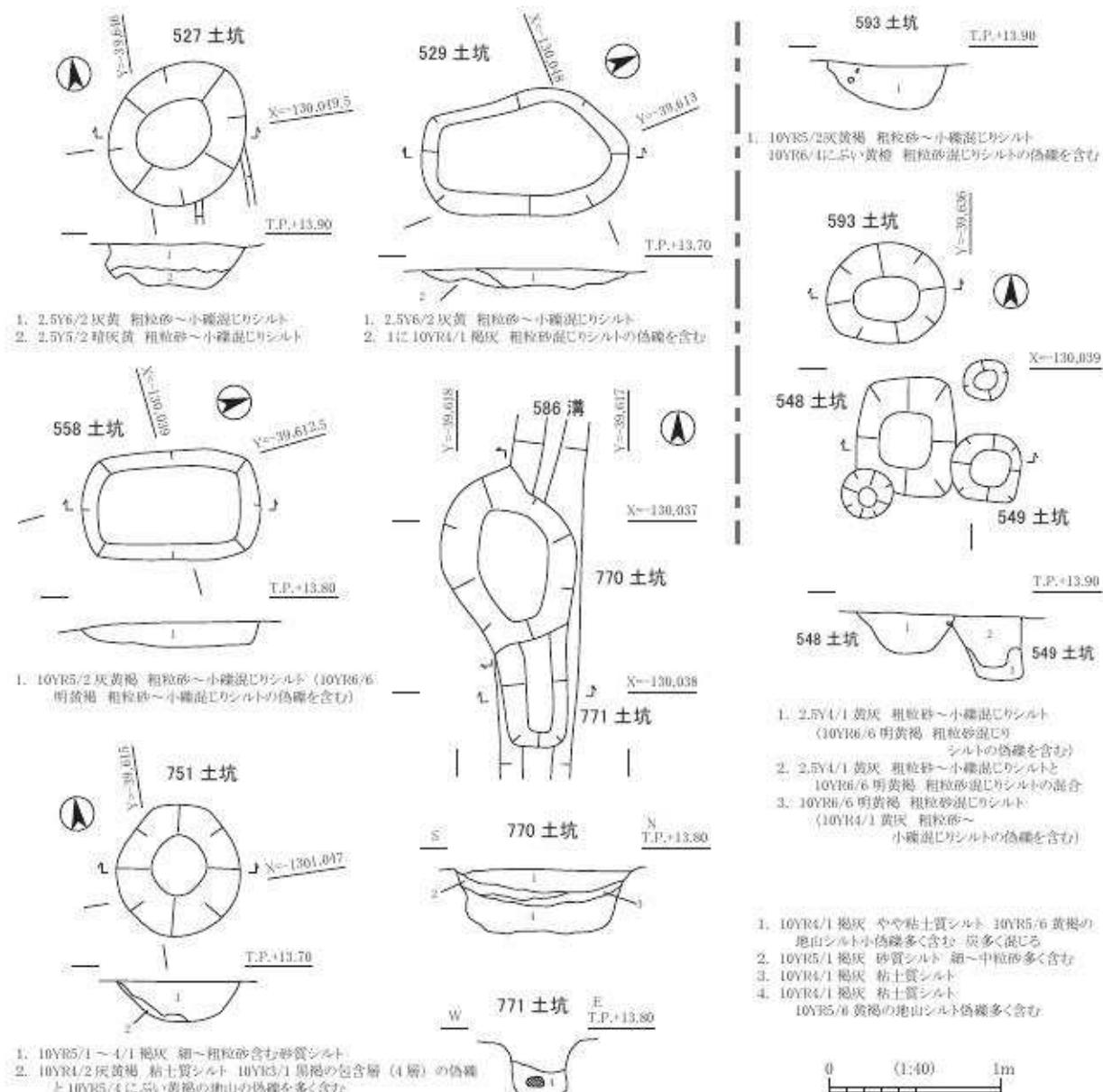


図 38 4 層上面土坑平面・断面 (3)

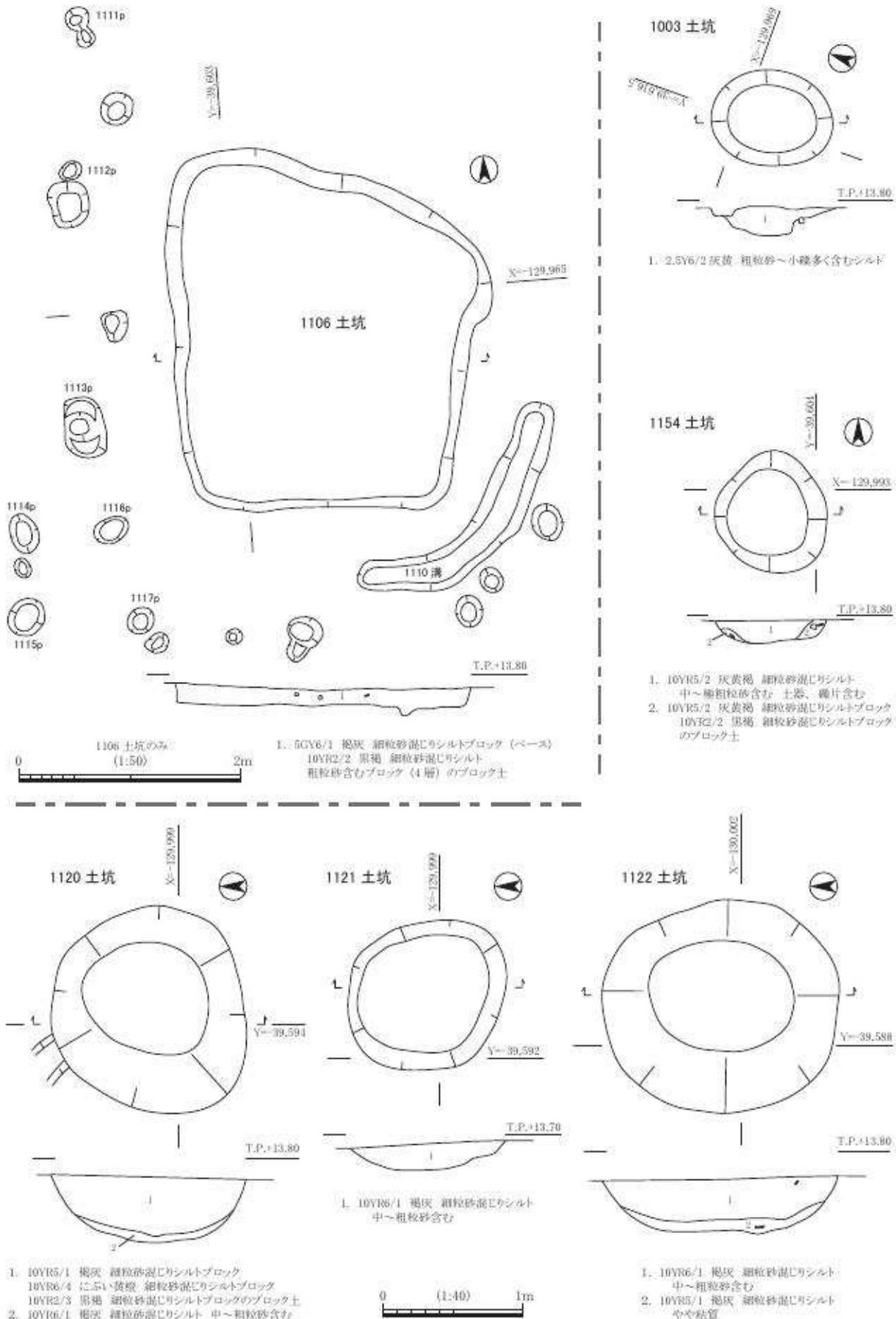


図 39 4層上面土坑平面・断面 (4)

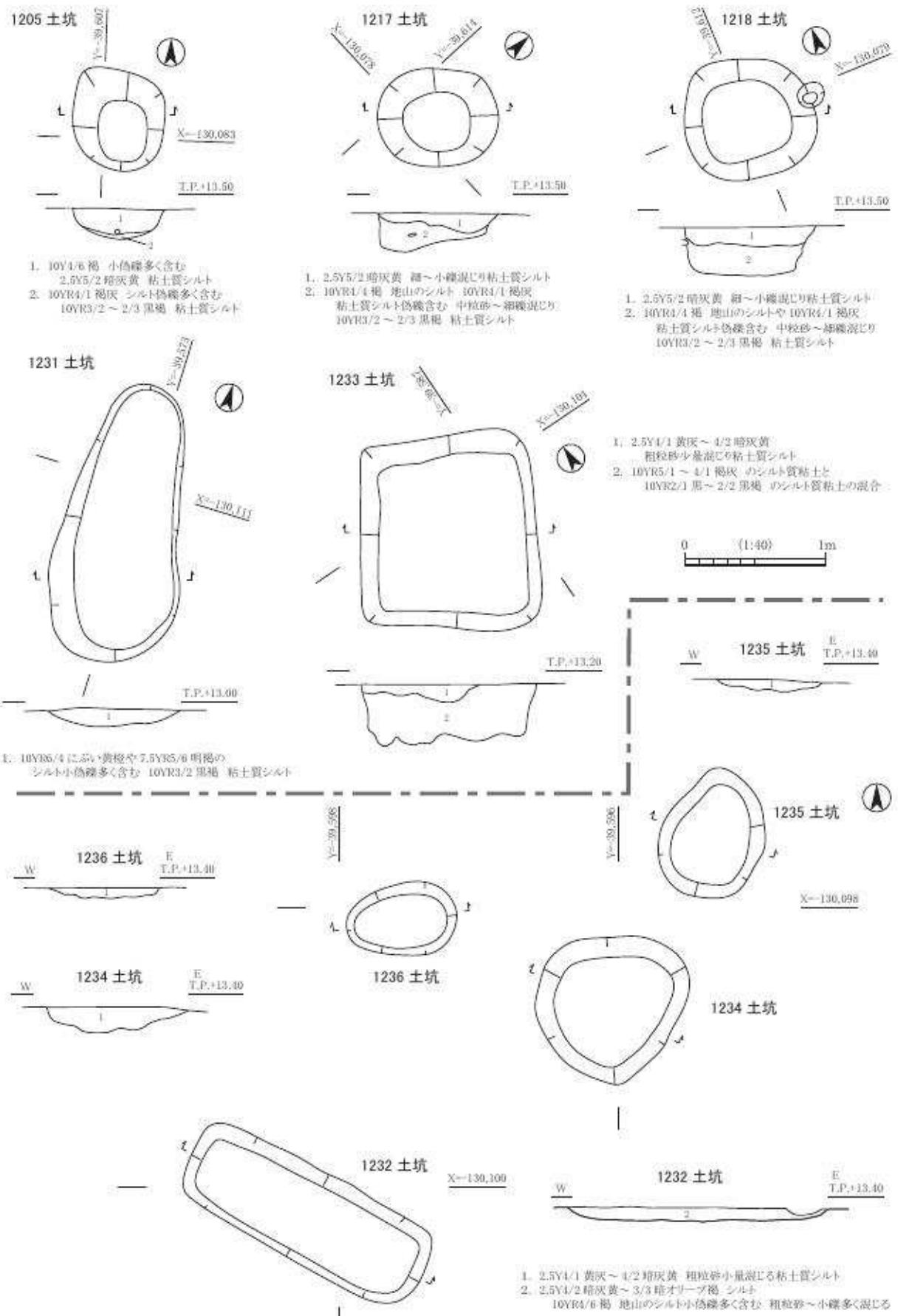


図40 4層上面土坑平面・断面 (5)

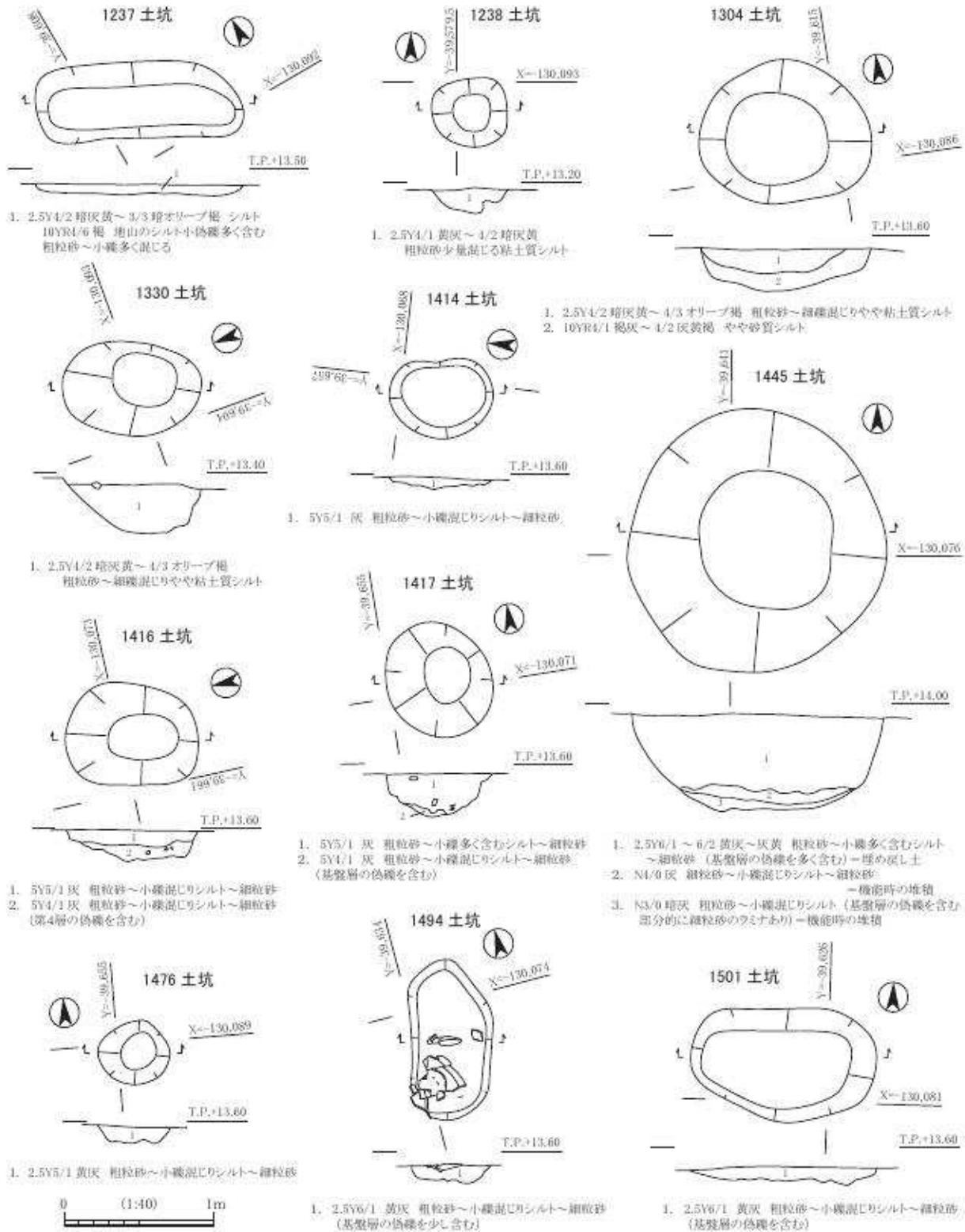


図 41 4層上面土坑平面・断面 (6)

ており、覆屋が建っていた可能性も考えられる。遺構の性格は不明。

瓦器碗と土師器皿の小片が出土している。

**1120・1121 土坑 (図 39)** 1005 溝の東端に位置する。1120 土坑は溝と重複し、溝を切る。平面形は径 1.54 × 1.44 m の卵形で、深さは 0.46 m を測る。1121 土坑は 1120 土坑の東側に近接する。平面形は径 1.12 × 1.07 m の隅丸方形気味の円形で、深さは 0.18 m を測る。

1122 土坑(図39・42) 1120・1121 土坑の東側で掘立柱建物 21 と重複する。柱穴との切り合いはない。平面形は径  $1.68 \times 1.53$  m の楕円形で、深さは 0.37 m を測る。

11 世紀前半の黒色土器 B 類の椀 (81) やコースター形の土師器皿片が出土している。

1154 土坑(図39) 1005 溝の北側に近接する。平面形は径  $0.88 \times 0.8$  m の歪んだ卵形で、深さは 0.16 m を測る。

1159・1192 土坑(図24・42) 両者とも掘立柱建物 23 と重複する小規模な土坑であるが、柱穴との切り合いはない。1159 土坑は径  $0.6 \times 0.54$  m の楕円形で、深さは約 0.25 m、1192 土坑は径  $0.47 \times 0.38$  m の楕円形で、深さは約 0.2 m を測る。

1159 土坑からは 10 世紀後半の黒色土器 A 類の椀 (82) や須恵器の鉢 (83) のほか、薄手の土師器の字状口縁皿が出土している。82 は体部の立ち上がりが急角度で深く、内面のミガキや見込みの暗紋は密である。83 は篠窯産で、口縁部を内側に丸く肥厚させる。1192 土坑からは 10 世紀後半の土師器羽釜 (85) が出土した。

1205 土坑(図40) 掘立柱建物 26 の南側に位置する。平面形は径  $0.72 \times 0.65$  m の隅丸方形で、深さは 0.22 m を測る。

須恵器と瓦器椀の小片が出土している。

1217 土坑(図40) 掘立柱建物 25 と重複するが、柱穴との切り合いはない。平面形は径  $0.86 \times 0.7$  m の隅丸方形気味の楕円形で、深さは 0.28 m を測る。

1218 土坑(図40) 掘立柱建物 25 の南面廻と重複する。柱穴との切り合いはない。平面形は径  $0.95 \times 0.87$  m の隅丸方形で、深さは 0.35 m を測る。

1231 土坑(図40) 5 区東端の調査区際に位置する。周辺にはピット等もなく、遺構が稀薄などろに単独で築かれている。平面形は長さ 2.0 m、幅  $0.55 \sim 0.95$  m の下膨れの楕円形で、深さは 0.13 m

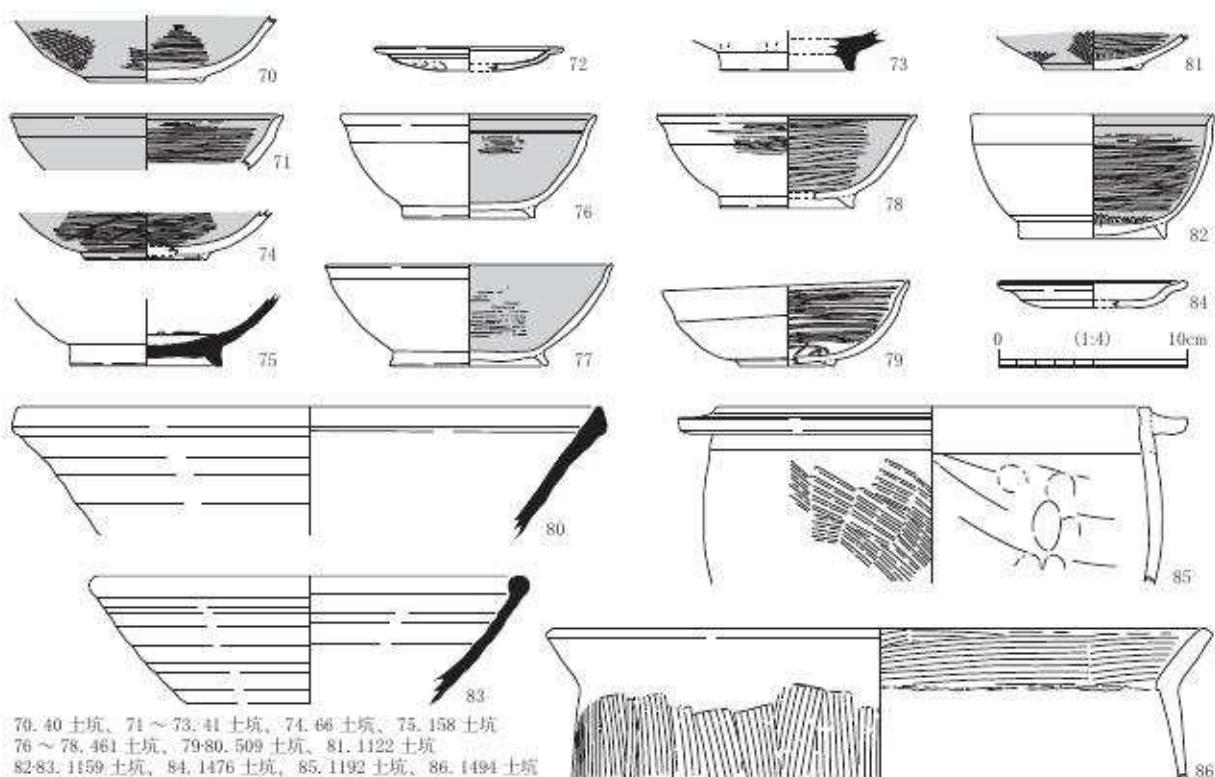


図42 4層上面土坑出土遺物

を測る。

1232・1234～1236 土坑(図40) 挖立柱建物27の南側にまとまって位置する。1232 土坑は長さ1.86m、幅0.65mの隅丸長方形で、深さは0.1m。1234 土坑は径1.08×1.0mの隅丸台形で、深さは0.18m。1235 土坑は径0.94×0.74mの卵形で、深さは0.09m。1236 土坑は径0.76×0.52mの卵形で、深さは0.07mである。

1233 土坑(図40) 1234～1236 土坑の南東側に位置する。周辺にはピット等もなく、遺構が稀薄なところに単独で築かれている。平面形は一辺約1.4×1.3mの隅丸方形で、深さは約0.4mを測る。

1237 土坑(図41) 挖立柱建物28の東側に位置する。平面形は長さ1.4m、幅0.5mの楕円形で、深さは0.07mを測る。

1238 土坑(図41) 挖立柱建物27の東方に位置する。周辺にはピット等もなく、遺構が稀薄なところに単独で築かれている。平面形は径0.5×0.46mの隅丸方形気味の円形で、深さは0.17mを測る。

1304 土坑(図41) 挖立柱建物28の北側に位置する。平面形は径1.14×0.97mの楕円形で、深さは0.27mを測る。

1330 土坑(図41) 1237 土坑の東側に位置する。平面形は径0.94×0.62mの楕円形で、深さは0.33mを測る。

1414 土坑(図41) 挖立柱建物29の西側に近接する。平面形は径0.68×0.51mのビーンズ形で、深さは0.08mを測る。

1416 土坑(図41) 挖立柱建物29の西側に近接する。平面形は径0.88×0.69mの隅丸長方形気味の楕円形で、深さは0.21mを測る。

1417 土坑(図41) 挖立柱建物29の西側に近接する。平面形は径0.8×0.7mの楕円形で、深さは0.28mを測る。

須恵器片が2点出土している。

1445 土坑(図41) 挖立柱建物30の北側に近接する。平面形は直径1.75mの円形で、深さは0.65mを測る。埋土は最下層に機能時の堆積と考えられる粗粒砂～小礫混じりのシルトが2層あり、その上に埋戻し土と考えている基盤層の偽礫を多く含む粗粒砂～小礫混じりのシルト～細粒砂が堆積する。

11世紀中葉の土師器での字状口縁皿のほか、10世紀代の摂津C型の土師器羽釜や緑釉陶器片などや古手の土器が出土している。緑釉陶器の胎土は淡い橙色で軟質、釉は明黄緑色を呈する。

1476 土坑(図41・42) 挖立柱建物31西側の塀6南側に近接する。平面形は直径0.48×0.42mの隅丸方形気味の円形で、深さは0.1mを測る。

11世紀中～後葉の土師器での字状口縁皿(84)が出土している。

1494 土坑(図41・42) 挖立柱建物34の西側に位置する。周辺にはピット等もなく、遺構が稀薄なところに単独で築かれている。平面形は長さ1.07m、幅0.52mの楕円形で、深さは0.12mを測る。

土師器鍋(86)が出土している。12世紀中～後葉頃のものか。

1501 土坑(図41) 1494 土坑の南東側に位置する。1494 土坑同様周辺にはピット等もなく、遺構が稀薄なところに単独で築かれている。平面形は径1.24×0.76mの楕円形で、深さは0.12mを測る。

471 墓(図43・44) 3区南半に位置する。4層上面では検出できず4層下面での検出となった。このため本来の正確な規模は明らかでない。4層下面での規模は長さ0.99m、幅0.62mを測る。平面形は一部が欠けた楕円形を呈するが、本来はこれより一回り大きな隅丸長方形であったと思われる。深さ

は検出位置の4層の厚さを考慮すると0.18m程度であったことが復原できる。

底面から長さ0.65m、幅0.46mの薄い板材が出土し、その板上から青白磁の合子(87)が出土したことから、木棺墓であったことが判明した。

**592墓(図43・44)** 4区の西側屋敷区画の北西隅に位置する。587溝と一部重複し、溝を切る。平面形は長さ1.27m、幅0.94mの隅丸長方形で、深さは0.18mを測る。埋土は上層が褐灰色の粗粒砂～小礫混じりのシルト、下層が粗粒砂～小礫を多量に含む灰黄褐色のシルト～粘土である。底面から小さな木片が出土(写真図版10-4)していることから、木棺墓であったと考えている。

人頭大の石3個とともに13世紀中葉の瓦器椀(88)が1点出土している。石は墓上に据えられていたものが、木棺の腐朽に伴い落下したものと考えられる。88は和泉型の瓦器椀で、体部は浅く内面見込みに平行線の暗紋を施す。

**599墓(図43・44)** 西側屋敷地を囲む溝の外側、592墓のすぐ北側に並ぶ。平面形は長さ1.6m、幅0.87mの隅丸長方形で、深さは約0.33mを測る。鉄釘が2点(90・91)出土していることから、木棺墓であったと考えられる。底面は水平で、その規模は長さ約1.1m、幅約0.4mを測る。おそらくこの墓壙底面の規模が木棺の大きさを示していると思われる。その木棺内に副葬されたと思われる短刀と白磁碗(89)が、墓壙の北西隅の底面から0.05m程浮いた状態で出土している。白磁碗は完形で、短刀の上に正位で置かれた状態であった。短刀は長さ0.3mまで確認できたが、遺構掘削時に南端を欠いてしまったため全長は不明。鋒の進行が進んでおり、取り上げ復原することもできなかった。この遺物出土状況から、北向きに埋葬されていたことが復原できる。埋土は上層が小礫を多く含む暗褐色のシルト、下層が粗粒砂～小礫を含む灰褐～灰黄褐色のやや粘土質のシルトで、木棺の痕跡などは確認できなかった。

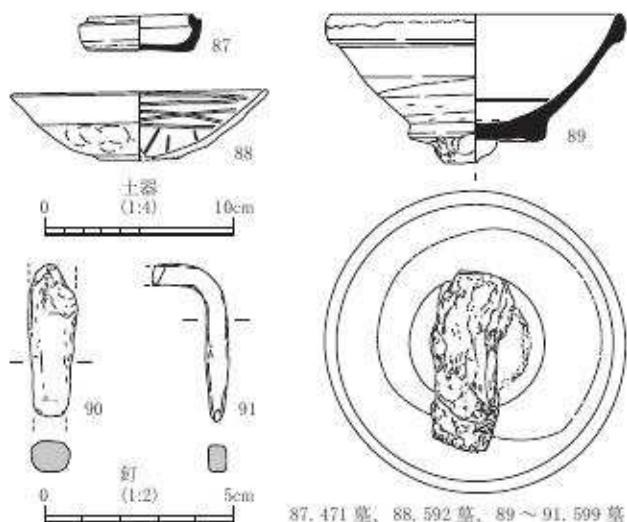


図43 4層上面墓出土遺物

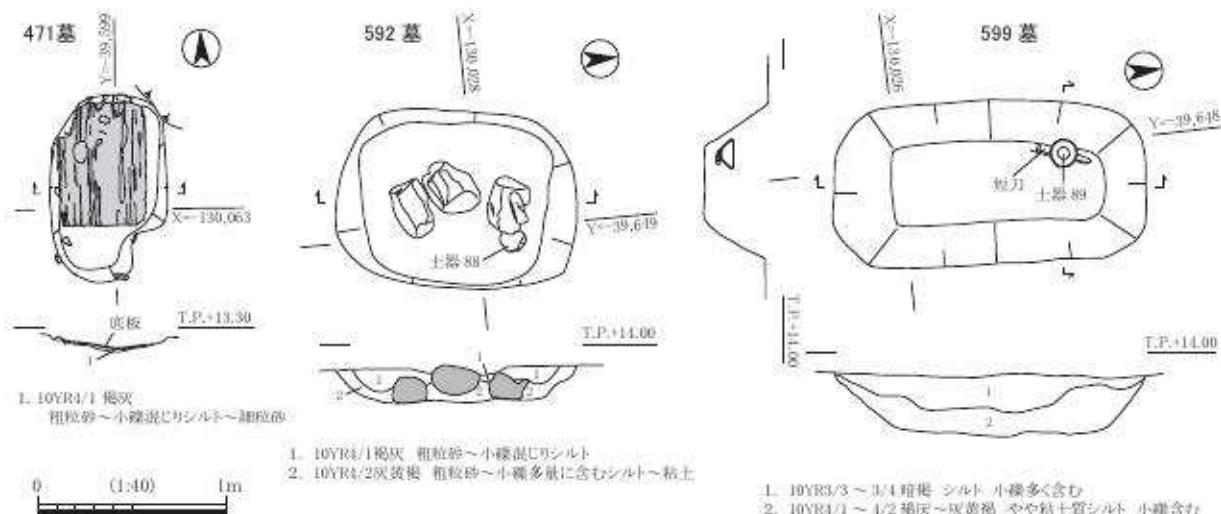


図44 4層上面墓平面・断面

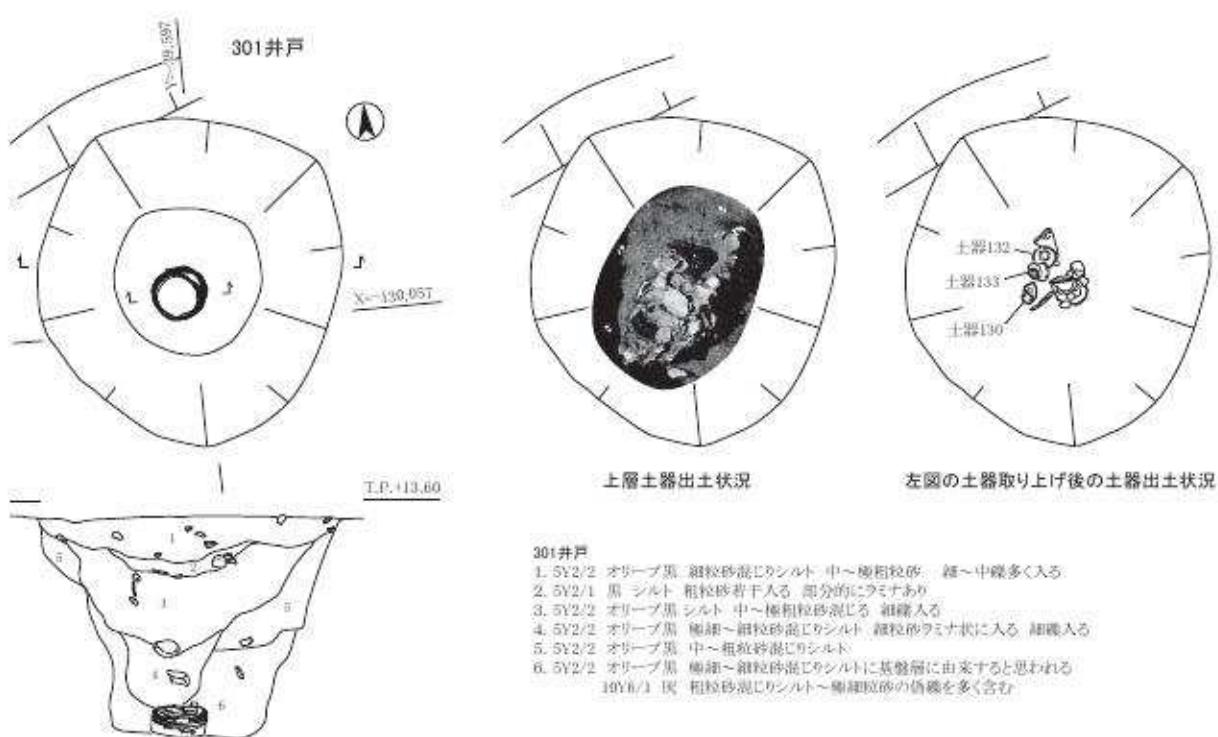
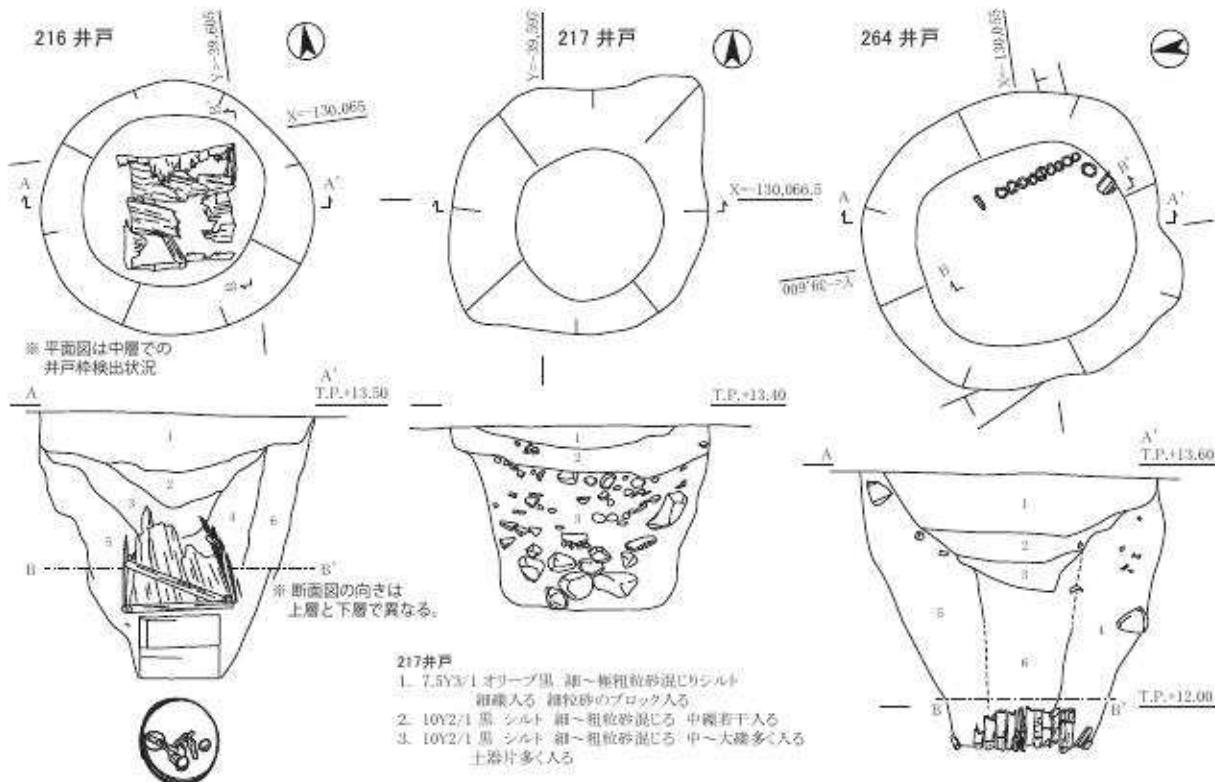
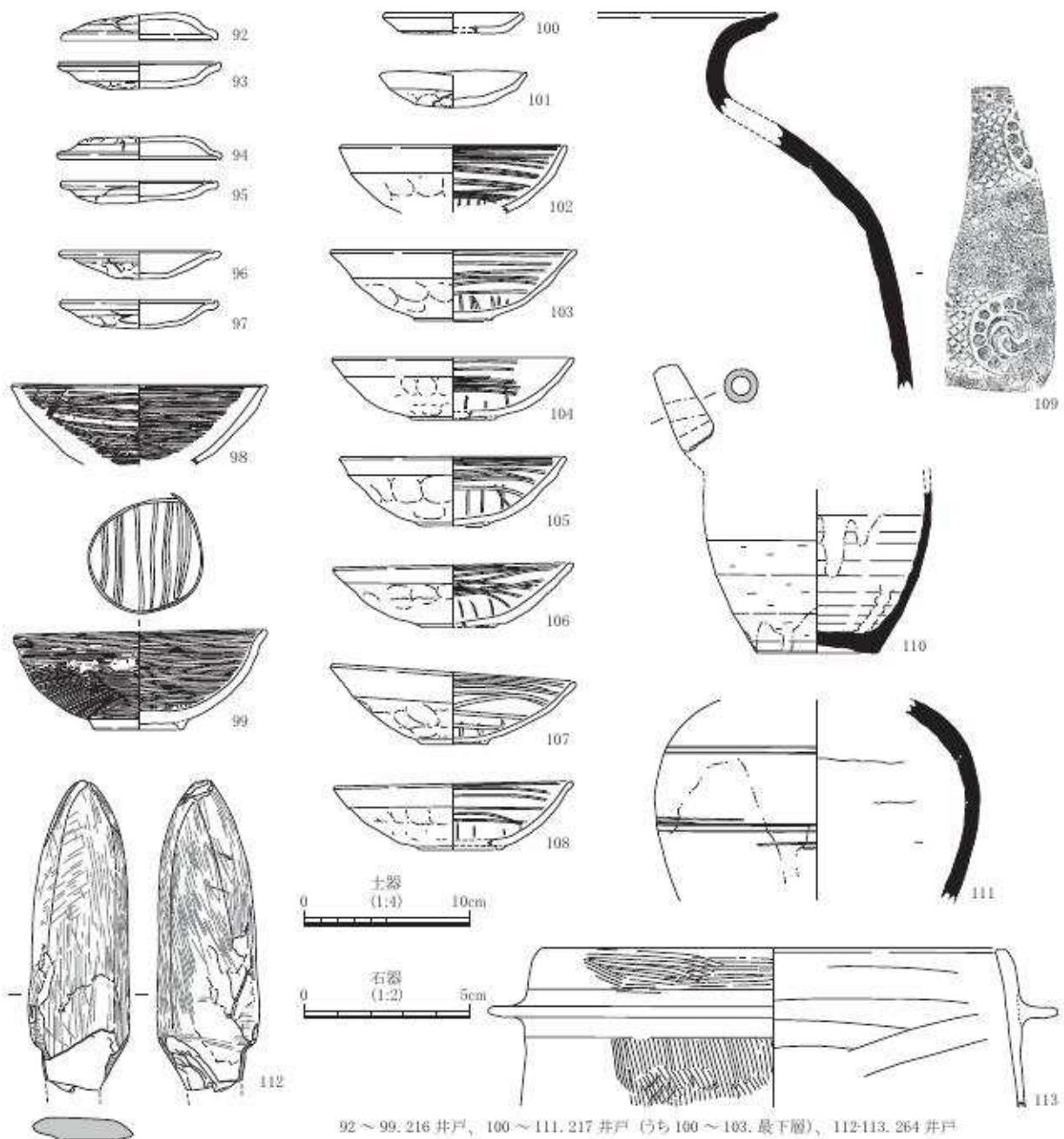


図 45 4層上面井戸平面・断面 (1)



92～99. 216 井戸、100～111. 217 井戸（うち 100～103. 最下層）、112-113. 264 井戸

図46 4層上面井戸出土遺物（1）

白磁は口縁部を玉縁にするIV類の碗である。12世紀代のものであるが、伝世品である可能性もあり、この1点で遺構の時期を判断することは難しい。

**216 井戸**（図45・46）3区南西隅に位置する。掘方の平面形は直径1.8×1.69mのほぼ円形で、深さは1.75mを測る。4本の柱と横桟とで組まれた枠の外側に縦板を数枚ずつ貼った方形井戸枠をもつ。横桟の内法は一辺約0.65mで、縦板1枚の大きさは、大きなもので残存長0.7m、幅0.36m、厚さ2.3cmを測る。この井戸枠より下層には直径約0.55mの曲物を2段埋設する。

曲物内から11世紀後半の土師器皿（92～97）と瓦器椀（98・99）が出土した。92～97はすべての字状口縁皿で、うち4枚は2枚1組（92と93、94と95）の合わせ口の状態で出土した。おそらく残りの2枚も当初は合わせ口になっていたと思われる。本来は紐や薬などで縛ってあったと考えられるが、その痕跡は認められなかった。合わせ口の内部の土を丁寧に洗浄したが、種などは発見できな

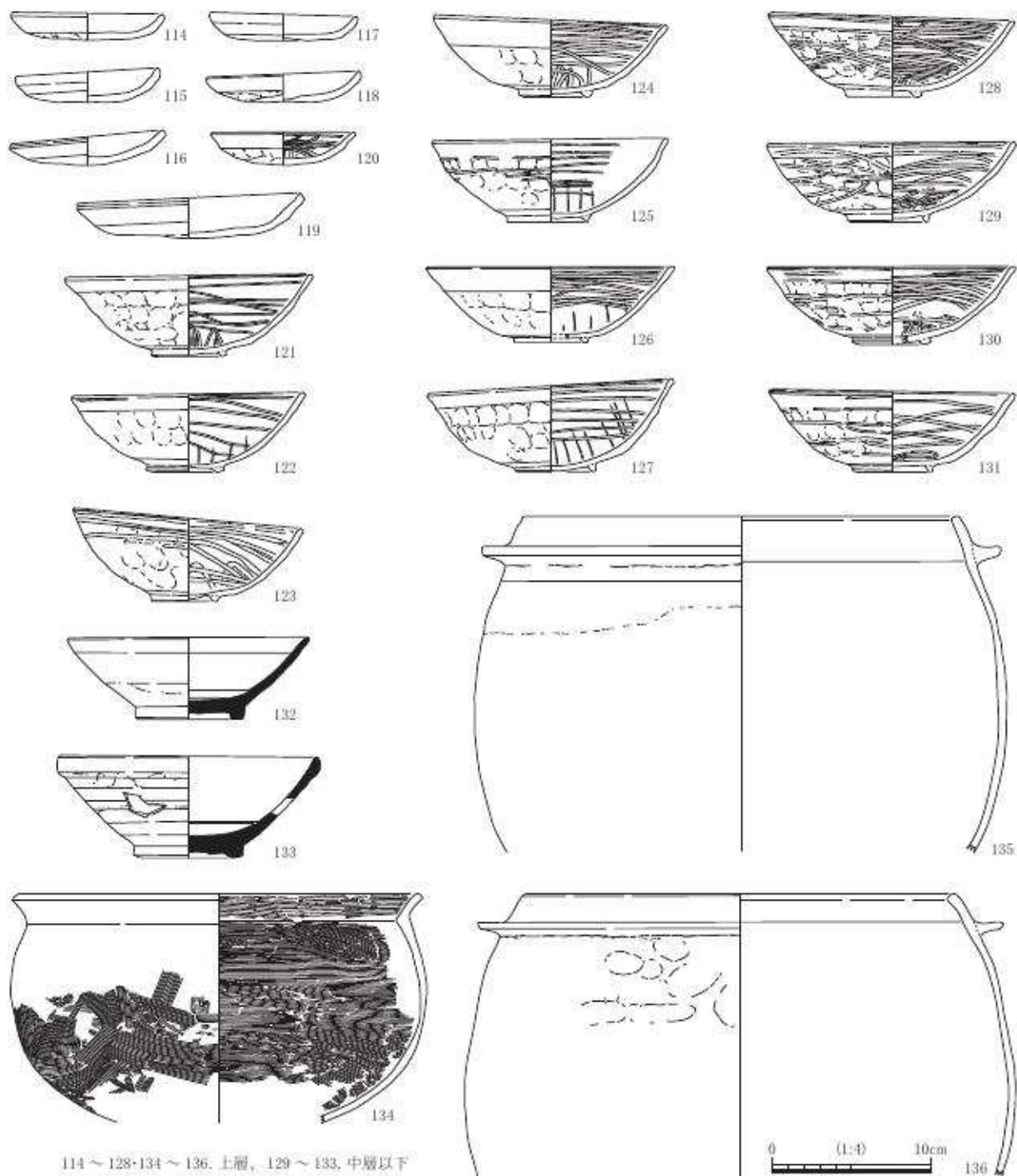


図 47 301 井戸出土遺物

かった。これらは井戸を廃棄する際の祭祀に用いられたものと考えている。98・99は楠葉型の瓦器椀で、ミガキは隙間なく密に施す。99の外面のミガキは3分割で、外見は黒色土器に近い。

217 井戸 (図 45・46) 216 井戸の東側に位置する。平面形は径  $1.67 \times 1.61$  m の歪んだ隅丸方形で、深さは 1.21 m を測る。埋土は3層に分層でき、下層には中～大碟が多く混入する。井戸枠はない。

土師器皿 (100)・瓦器皿 (101)・瓦器椀 (102～108)・常滑焼の甕 (109) と壺 (111)・輸入陶器の水注 (110) など多数が出土した。瓦器椀はどれもミガキが疎らな 13世紀前葉のものである。102のみ楠葉型で、他は和泉型。常滑焼は両者とも 12世紀後半のものである。109は接合しないが肩部から口縁部までが復原できる。頸部は大きく外反し、口縁端部は内外面に段ができるように強く引き

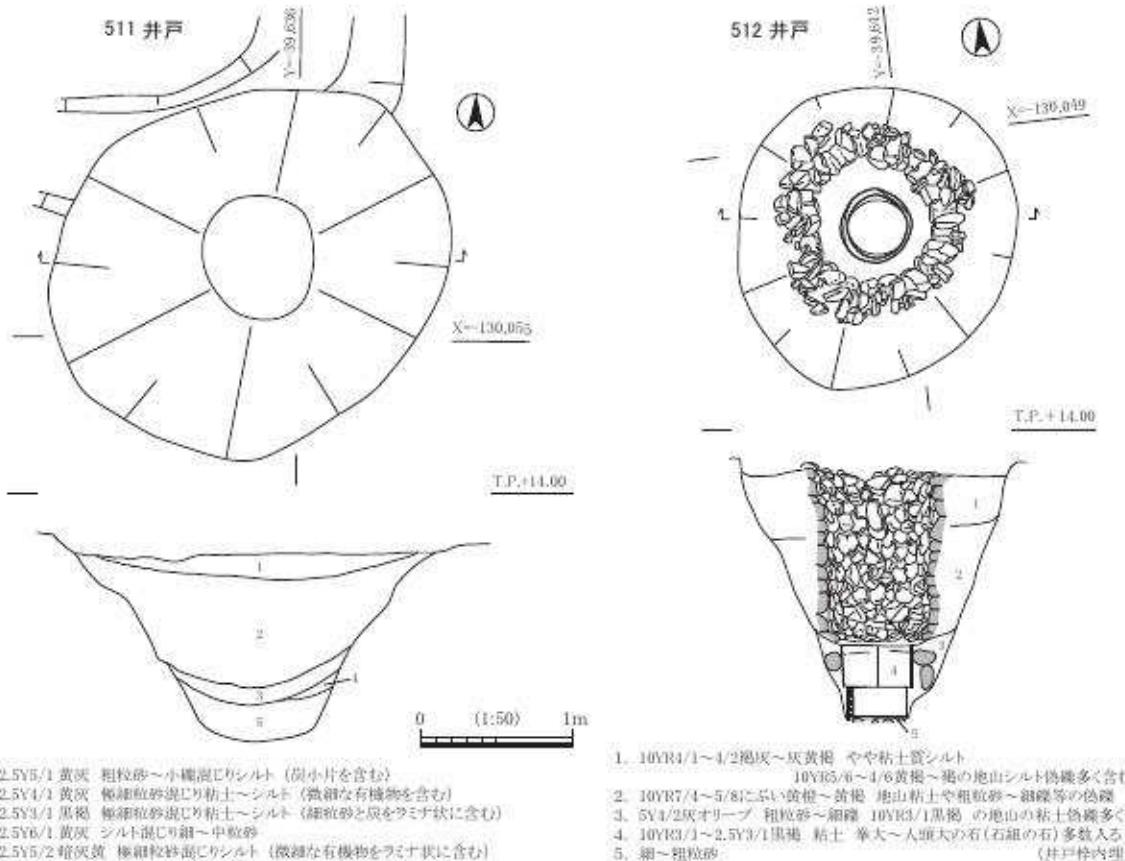


図48 4層上面井戸平面・断面 (2)

出す。体部には珠紋+巴紋の押印紋が見られる。111はいわゆる三筋壺である。沈線は幅3.5mmの複線である。110は13世紀前半の水注で、接合しないが注口もある。胎土は褐色であるが表面は赤褐色を呈する。ほぼ全面に施釉するが剥落している。

**264 井戸(図45・46)** 掘立柱建物5の南側に位置する。307溝と重複し、溝を切る。平面形は直径約2.0mの隅丸方形気味の円形で、深さは約1.8mを測る。底面東壁寄りに、太さ0.07～0.1m程度の竹が隙間なく並ぶ。木枠の外側に打ち込まれていたものであろうか。断面観察でも井戸枠の抜き取り痕跡が確認できることから、本来は216井戸のような縦板による井戸枠が組まれていたと考えられる。

13世紀代の土師器の羽釜片(113)のほか土師器皿や瓦器碗の小片、また弥生時代の磨製石劍(112)が1点出土している。石劍は泥質片岩製で、おそらく壁面の4層中に包含されていたものが、調査掘削の段階で混入したと考えられる。

**301 井戸(図45・47)** 264井戸の南東側に近接する。平面形は径2.15×1.95mの隅丸五角形で、深さは1.47mを測る。底面から押し潰されたような状態の曲物が1段見つかった。断面観察でも井戸枠の抜き取り痕跡が確認できることから、本来はさらに上部にも井戸枠が組まれていたと考えられる。

埋土の上半から土師器皿(114～119)・瓦器皿(120)・瓦器碗(121～131)・白磁碗(132・133)・土師器鍋(134)・土師器羽釜(135・136)など多数の土器が出土した。どれも12世紀後半を中心とした時期のものである。119は大皿で、口縁端部は面取りし、端面が僅かに凹む。若干新しい要素か。瓦器碗はすべて和泉型である。128～130のように若干古手のものも含まれているが、どれもミガキは疎らである。132は大宰府分類VIII-2類の碗。体部は直線的に開き、口縁部内側に明瞭な稜線が見られる。見込みは蛇の目釉剥ぎとする。133には外面からの穿孔がある。135・136は根津

E型の羽釜である。両者および134の鍋には外面に煤が付着する。

511 井戸（図48・49） 4区の西側屋敷区画の南東隅に位置する。500溝と重複し、溝を切る。平面形は径 $2.7 \times 2.3$ mの梢円形で、深さは1.33mを測る。断面形は擂鉢状を呈し、埋土は5層に分層できる。曲物などは設置されていない。

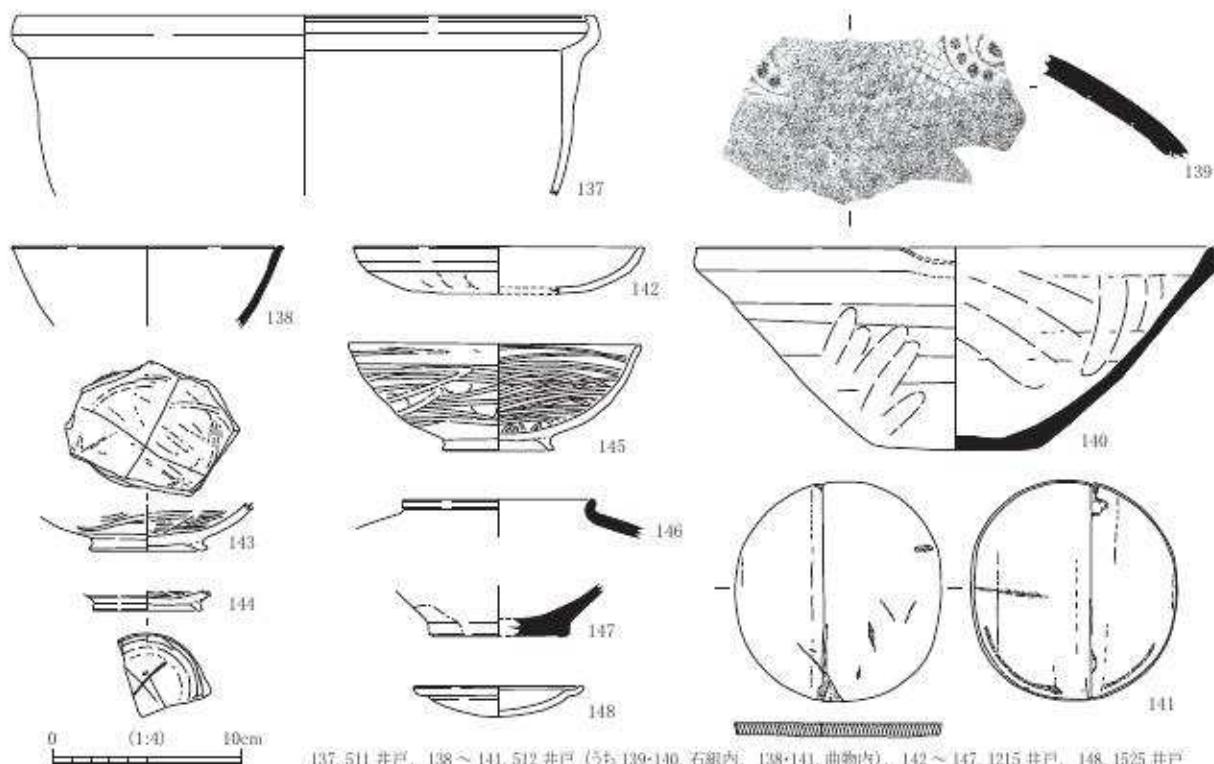
瓦質土器の鍋（137）のほか、瓦器椀・須恵器甕・瓦質脚付羽釜の脚など、13世紀前半の土器が出土している。137は外面に炭化物が多く付着する。

512 井戸（図48・49） 4区の西側屋敷区画内の南端部に位置する。唯一の石組井戸である。掘方の平面形は直径約 $2.03 \times 1.83$ mの卵形を呈する。深さは1.7mで、上方の約1.2mには拳大の石を積む。石組の内法は直径約 $0.65 \sim 0.7$ mである。石組の下には直径 $0.47$ m（上）と $0.4$ m（下）の曲物を2段重ね、曲物の下には礫混じりの細～粗粒砂を敷く。

石組内から常滑焼の甕（139）や東播系片口鉢（140）が出土した。139はおそらく217井戸出土品と同一個体と思われる体部片で、珠紋+巴紋の押印紋が見られる。曲物内からは白磁V類の碗（138）や小型の曲物底板（141）が出土した。曲物は水を汲む際に使っていたものであろうか。図化したもの以外に土師器皿や瓦器椀・羽釜の小片など、13世紀前葉の土器が出土している。

1215 井戸（図49・50・52） 5区の北端、掘立柱建物25の東側に位置する。平面形は直径約2.5mの角張った円形で、深さは1.3mを測る。掘方の断面形状は椀形を呈する。下部には曲物を用いた井戸枠（177・178）が3段埋設されていた。その上部にも抜き取り痕跡が認められることから、本来は上部まで曲物や板材による井戸枠が組まれていたと考えられる。

土師器皿（142）・瓦器椀（143～145）・緑釉陶器羽釜（146）・白磁碗（147）など12世紀前半を中心とした時期の土器が出土している。142は2段ナデを施す12世紀前葉の大皿、瓦器椀はいずれも12世紀前半の和泉型で、143は見込みに、144は底部外面に「×」の線刻がある。146は口縁部の小片。



137. 511 井戸、138～141. 512 井戸（うち139・140. 石組内、138・141. 曲物内）、142～147. 1215 井戸、148. 1525 井戸

図49 4層上面井戸出土遺物（2）

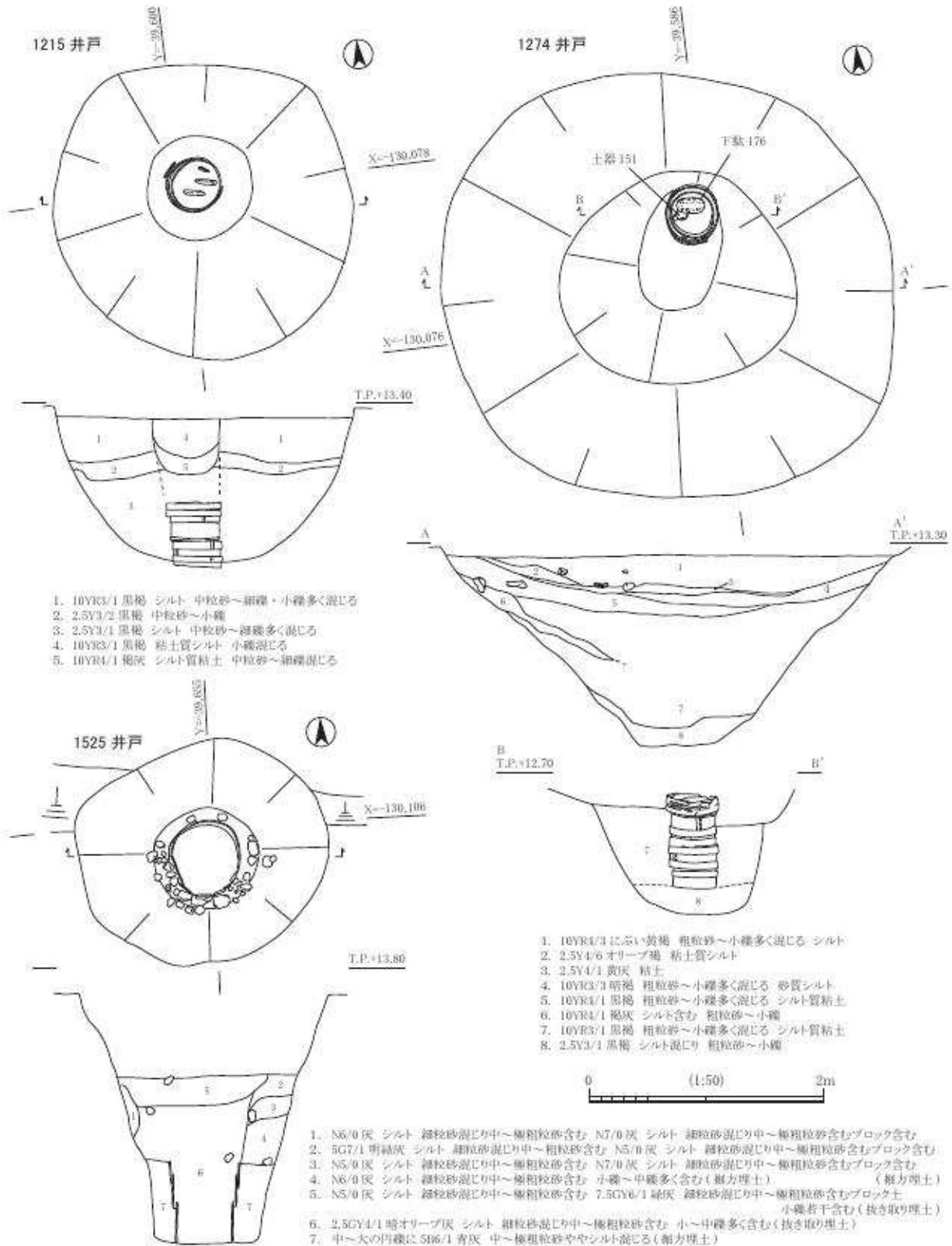


図 50 4層上面井戸平面・断面 (3)

胎土は灰白色で硬質、釉は淡い黄緑色で外面から口縁部内面に施す。9世紀代のものか。

**1274 井戸(図 50・51・53)** 5区の北端、1215 井戸の東側に位置する。大型で、平面形は径  $3.85 \times 3.58$  m の楕円気味の円形で、深さは 1.68 m を測る。壁は緩やかで、掘方の断面形は擂鉢状を呈する。中心から北にずれて曲物 (179 ~ 182) を転用した井戸枠が 5段埋設されていた。上部の構造は不明。

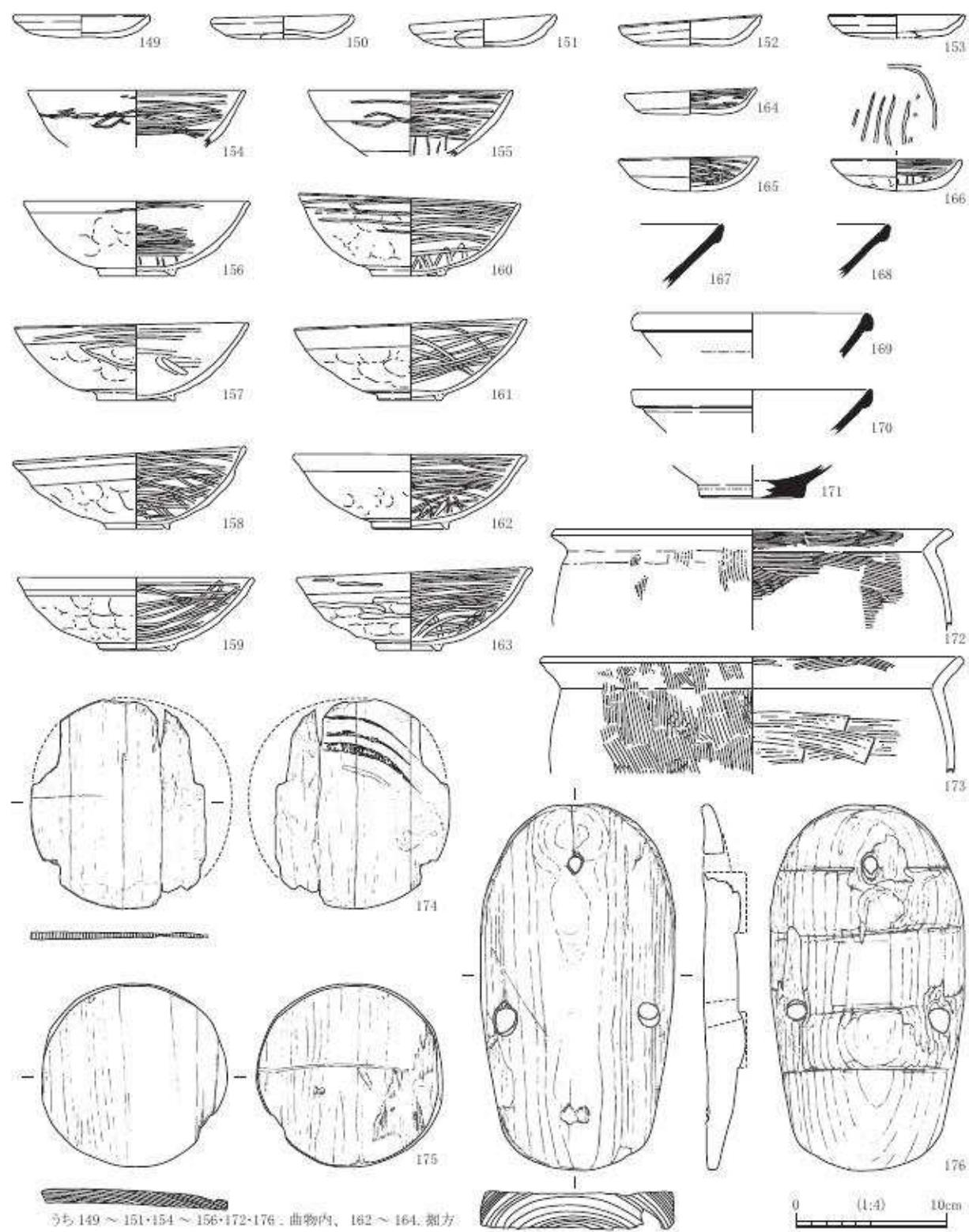


図 51 1274 井戸出土遺物

土師器皿（149～153）・瓦器椀（154～163）・瓦器皿（164～166）・白磁碗（167～171）・土師器鍋（172・173）など多数の土器が出土した。どれも 12 世紀後半を中心とした時期のものである。このうち 149～151・154～156・172 は曲物の井戸枠内から、162～164 は掘方から出土したものである。150・151 の土師器皿には粘土の接合痕が観察できる。瓦器の皿も椀もすべて和泉型で、白磁はすべて大宰府分類のIV類椀である。172・173 は外面に煤が付着する。このほか小型の曲物底板が

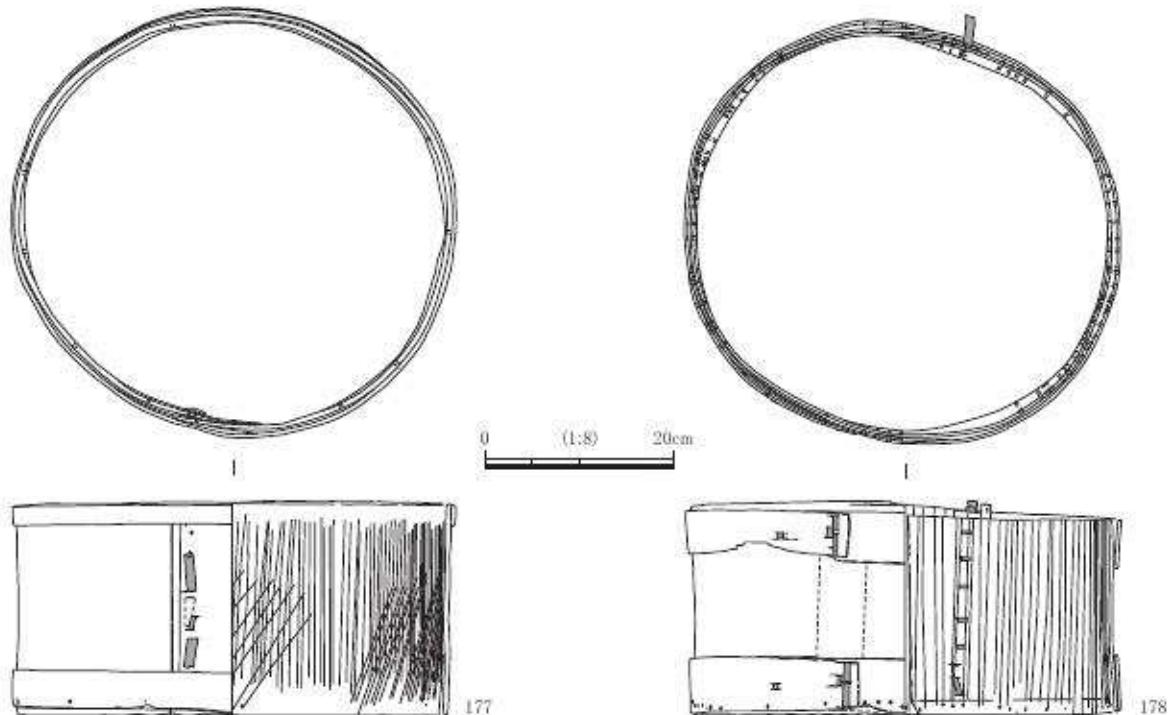


図 52 1215 井戸曲物

2枚（174・175）と井戸枠内から片足分の下駄（176）が出土している。曲物は水を汲む際に使っていたものと考えられる。176は連歛下駄。長さ24.3cm、幅12.9cmの平面梢円形で、僅かに踵側が狭い。台のみの厚さは最大2.5cmを測る。前壺はほぼ中心で、横緒孔は後歛の前面に位置する。親指の当たりも左右ほぼ対称で、左右の区別なく使われていたことがうかがえる。21～22cm程度の足の持ち主か。

**1525 井戸（図49・50・54）** 6区の南半、掘立柱建物群からはやや隔てて位置する。平面形は径2.1×1.85mの梢円形を呈する。深さは2.12mで、下部には曲物（183）を転用した井戸枠が3段埋設されていた。上部の構造は不明。

土師器皿（148）のほか黒色土器B類椀・瓦器椀・須恵器甕・灰釉陶器皿などが出土しているが、すべて小片のため148以外は図化することができなかった。148は11世紀後半での字状口縁皿。灰釉陶器は9世紀代の段皿である。瓦器椀はミガキを密に施す11世紀後葉のもの。

**307 溝（図56・付図1）** 調査区北半のほぼ中央に位置する。コンテナ5箱分の遺物が出土した。そのすべてが弥生土器で、平安時代の遺物が含まれていなかつたことから、現地でも下面の遺構である可能性も検討したが、確実に4層の上面から掘り込まれていたことから、4層上面の遺構とした。この溝の埋土上面からピットが検出できることから、屋敷地が形成される以前の溝であったと判断できる。

調査区北東隅の落ち込み肩部とほぼ向きを揃えていることから、もともとは自然に形成された溝と考えられるが、南端部がクランク状に屈曲していることや、壁面が急角度で立っている部分があることなどから、部分的に人為的に改修されたと考えている。幅は南方では0.5m程度のところもあるが、平均約1～1.5mで、深さは約0.2～0.4mを測る。

**162・381・383 溝（図55・57）** 3区の西半、掘立柱建物5の周辺に位置する。いずれもL字状に曲がる溝で、4区で検出した溝のように屋敷周囲を囲む溝の一部であったとも考えられるが、溝の内側に掘立柱建物が並ぶわけではなく、また162溝は掘立柱建物5と重複しており、その性格は不明。

162溝は幅約0.35～0.5m、深さ約0.15m。381溝は幅約0.25m、深さ約0.05m。383溝は幅約0.2

～0.25 m、深さ約0.1 mを測る。

162溝からは須恵器碗（184）・土師器皿（185）・白磁碗（186）・瓦器碗（187・188）が出土している。いずれも12世紀前半のものである。184は底部糸切りで、その側面は未調整。内面の段は不明瞭である。187・188はともに和泉型である。

500・501・504・586・587溝（図55・57）4区で検出した屋敷の周囲を囲む区画溝であるが、簡単に跨げる程度の細く浅い溝である。途中で途切れていたために異なる遺構番号を振ったが、本来は一連の溝である。南北に長い長方形の区画が二つ、約0.7 m隔てて東西に並列する。

東側の区画は北半を586溝、南西側を501溝とした。南東隅は検出できなかった。区画の規模は、溝の内側で東西15.1～15.6 m、南北23.8 mで、面積は約365m<sup>2</sup>である。溝の規模は北辺が幅約0.4

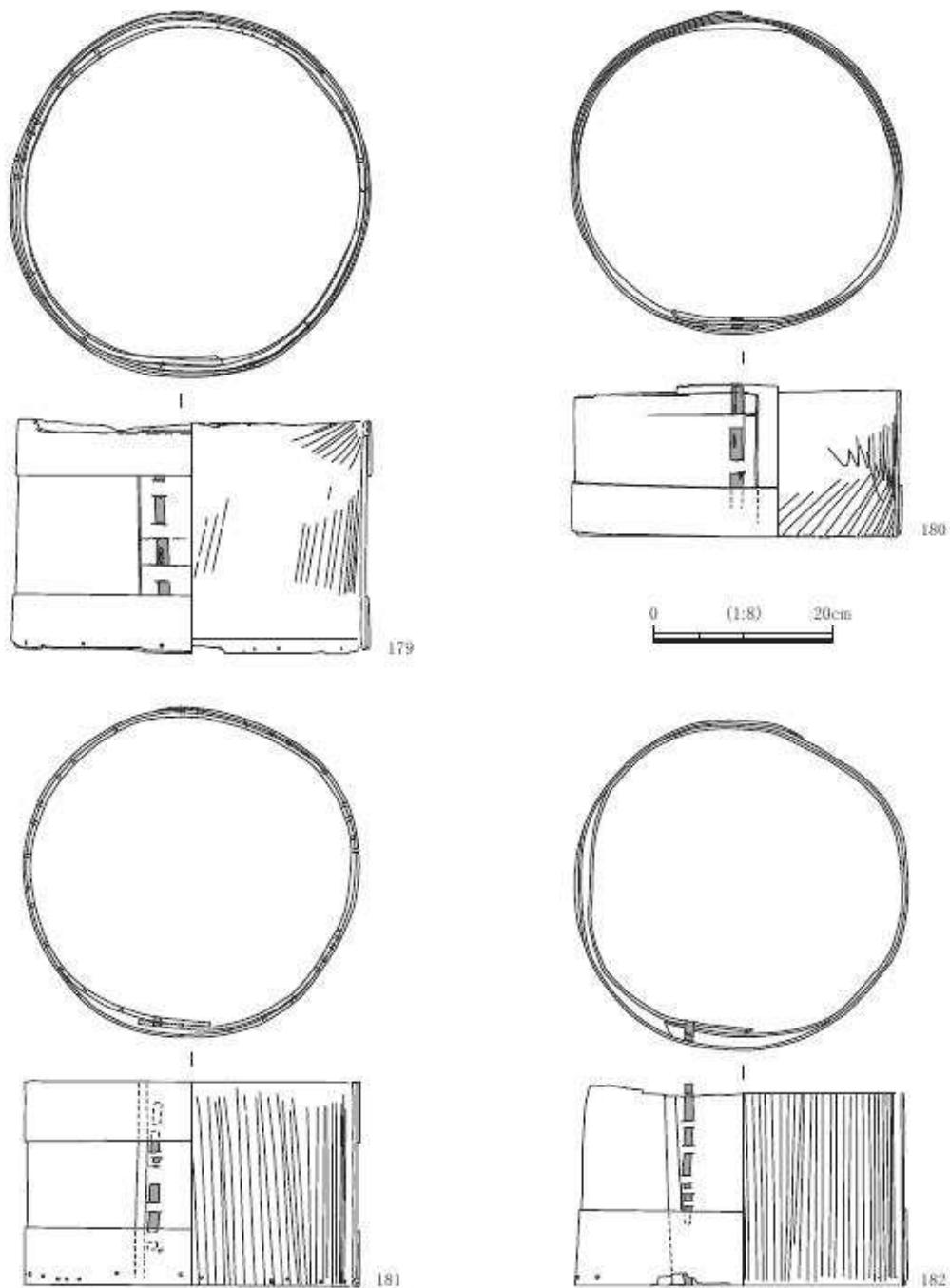


図53 1274 井戸曲物

～0.5 m、深さ約0.1 m。南辺が幅約0.3 m強で、深さ約0.05 m。東辺が幅約0.3～0.4 m、深さ約0.05～0.1 m。西辺が幅約0.4 m、深さ約0.05～0.1 mである。この区画内の中央やや北寄りに前記掘立柱建物15が建つが、その南側にはまったく遺構がない空白地が広がっている。

西側の区画は北東側を587溝、南東側を500溝、南半西寄りを504溝とした。西辺の溝は検出できなかった。区画の規模は、溝の内側で南北24.0(東端)～26.0 m(西端)で、東側区画と南北辺をほぼ揃えるが、西側が僅かに広く平面形は台形気味となる。東西幅は約19 mまで検出した。ピットの広がり、またこの区画のすぐ西側に南北方向の杭列(おそらく畦畔)がつづいていることから、東西幅は広くても20 m程度で、面積は500m<sup>2</sup>程度であったと考えている。溝の幅は北辺が幅約0.25～0.65 m、深さ約0.05～0.1 m。南辺が幅約0.4～0.6 m、深さ約0.1～0.15 m。東辺北半が幅約0.4 m、深さ0.1 m弱。東辺南半が幅約0.5～0.75 m、深さ約0.1 mである。南西側の504溝は、東側が512井戸を避けるようL字に曲がって屋敷内に入り込んでおり、幅も広く、深さも一定ではなく土坑状に0.45 mほど窪む箇所もある。南北方向の部分は屋敷内を区画する溝と考えられる。また東側区

画の西辺中央部と西側区画の東辺中央部には、約5 mにわたり溝が途切れる箇所が見られる。両区画を行き来する出入口であろうか。これら屋敷区画のすぐ南側には坪境の東西溝や畦畔が接する。

500溝からは瓦器椀(189)・土師器皿(190)が、504溝からは瓦器椀(191・192)・白磁碗(193)が、586溝からは瓦器椀(194)が、587溝からは土師器皿(195)・瓦器椀(196)が出土した。すべて小片である。瓦器椀はどれも浅く、高台は退化する。ミガキが観察できるものはどれも粗い。193は大宰府分類のVII類である。体部内面に草花紋を描き、見込みに段を有す。195は口縁端部を面取りする大皿である。いずれも13世紀前半を中心とする時期のものである。

**1000溝(図56・付図1)** 1区に位置する。コンテナ9箱分の遺物が出土した。須恵器片1点以外すべて弥生土器である。307溝と同じく確実に4層上面から掘り込まれていた。調査区北東隅の落ち込みの肩の向きと並行しており、その関連がうかがえる。307溝とともに、落ち込みの形成時期と同時に形成されたが、後に屋敷地を造成するための排水を目的として利用された可能性が考えられる。

**1001溝(図56・付図1)** 2区北端に位置する。東西方向の溝で、前記307・1000溝がこの溝に合流する。幅は約0.7～1.8 m、深さは0.2 m弱である。

**1005溝(図56・付図1)** 307溝と1000溝との間に位置する。東西方向から南北方向にL字状に曲がる溝で、西端が大きく北に曲がりながら前記307溝に合流する。幅約0.35～0.6 m、深さ約0.05～0.1 mを測る。

**1108溝(付図1・写真図版15)** 1000溝南端部の西側に並行する。おそらく1005溝の続きと思われる。幅約0.35～0.45 m、深さ約0.05 mを測る。

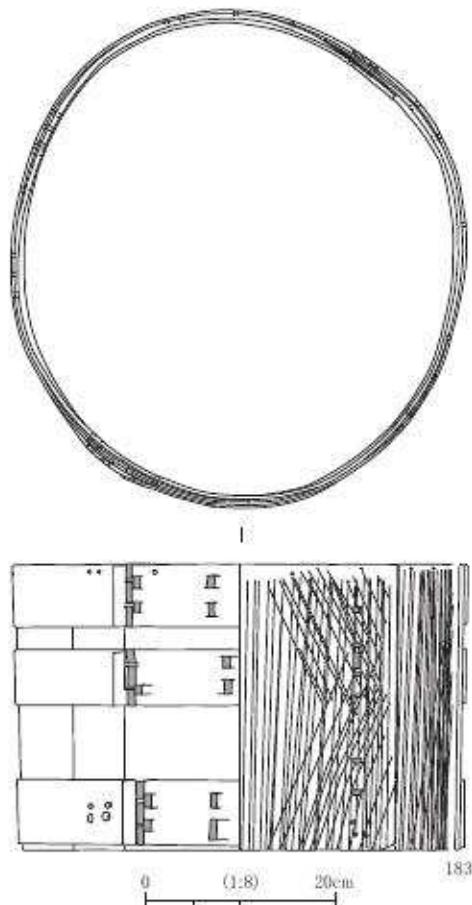


図54 1525 井戸曲物

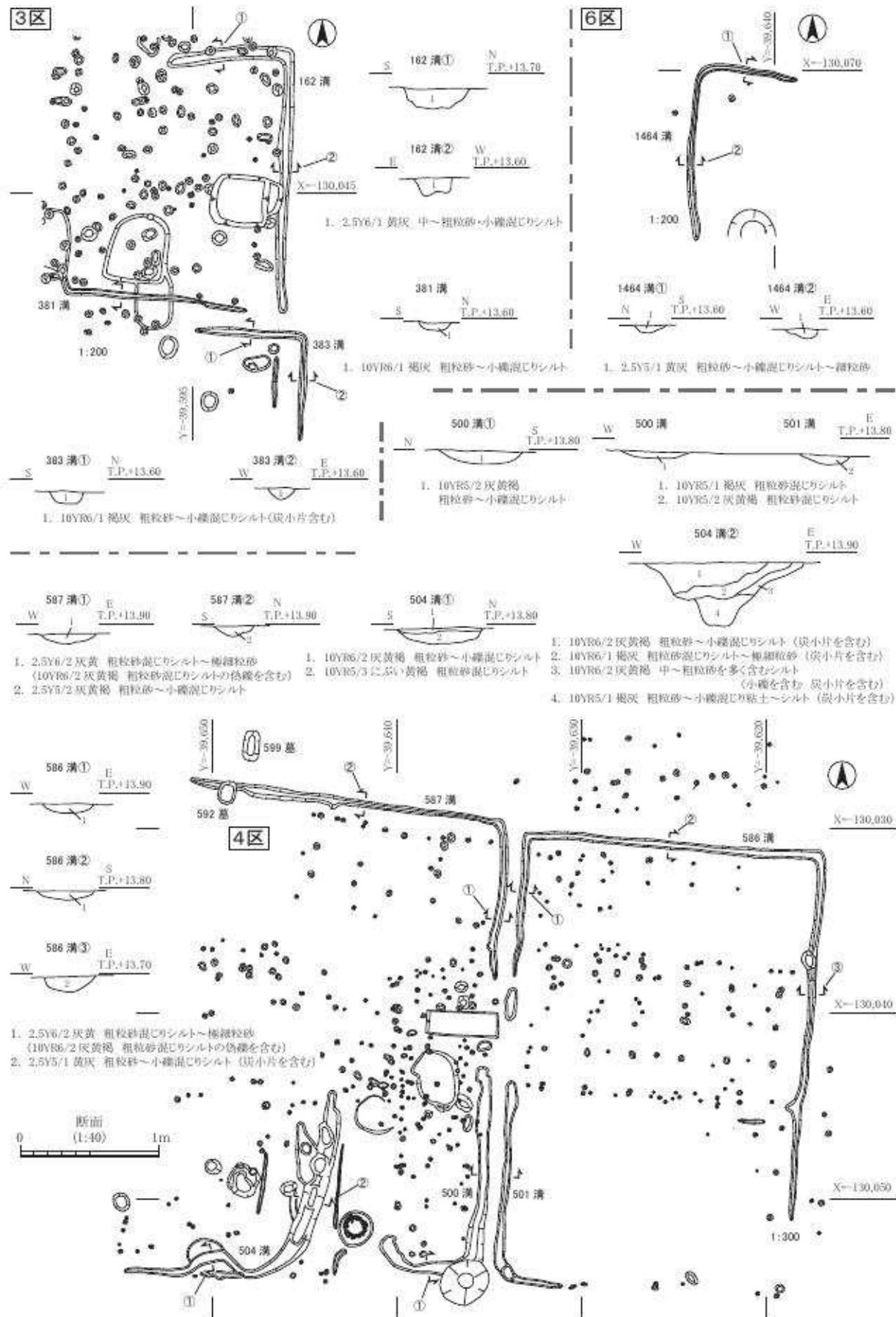


図 55 4層上面溝平面・断面

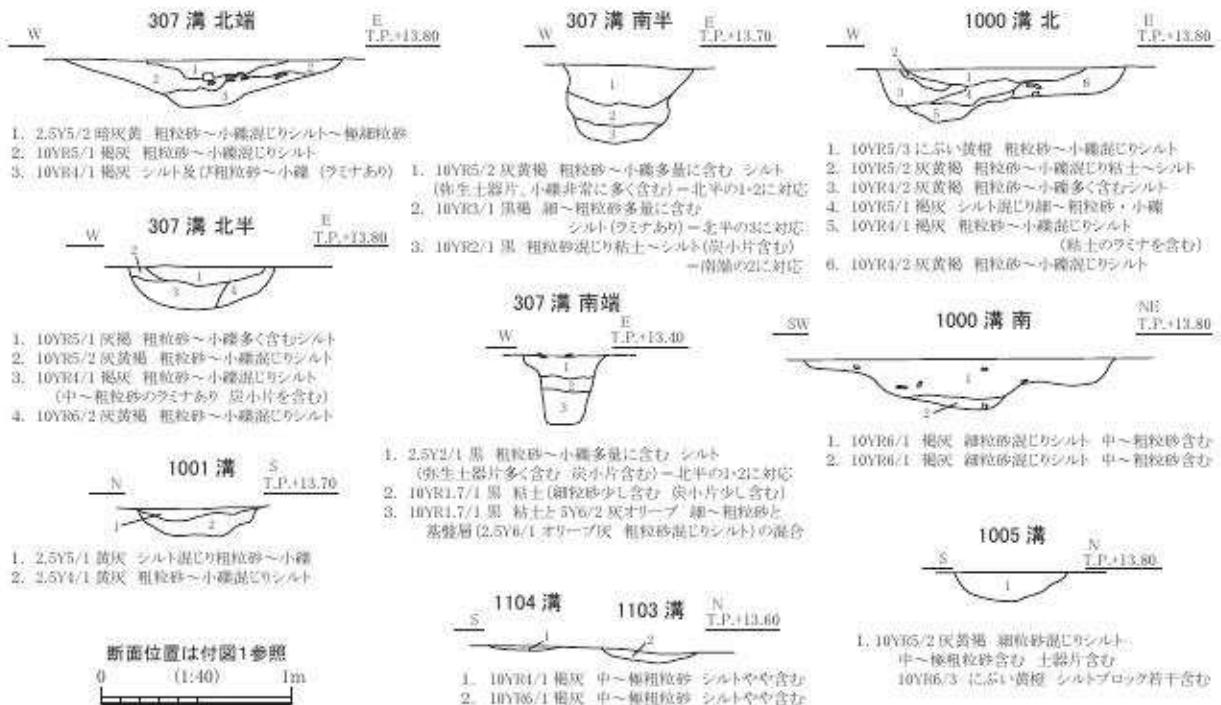


図 56 4層上面溝断面

1464溝(図55) 6区北端の掘立柱建物29の東側に近接する。東西方向から南北方向にL字状に曲がる細溝である。幅は約0.2~0.25m、深さは約0.05mを測る。

#### 落ち込み(付図1)

調査区の北東隅は、北東方向に向かって大きく落ち込んでいる。1948年撮影の航空写真(写真3)を見ると、調査区の北東隅近くまで旧茨木川が蛇行して接近していることから、人為的に削られたものではなく、旧茨木川に向かって下っていく自然の地形であったと考えられる。この落ち込みが形成された時期については、下面の弥生時代の遺構が落ち込み内では検出されないこと、また中世の段階にはその自然の斜面地形を有効に利用して耕作が営まれ、掘立柱建物も建てられていること、さらにその落ち込み内に築かれた遺構から10世紀後半の黒色土器などが出土していることなどから、弥生時代より後、遅くとも10世紀中頃までの間に茨木川の氾濫などにより大きく削られたと考えている。その耕作に伴う1103・1104溝(図56)などの浅い溝が、落ち込みの肩部に並行するように数条認められる。

この落ち込みの底の窪みからは13世紀代の瓦器碗片などが出土しており、この時期までは土地利用されていたことがうかがえる。

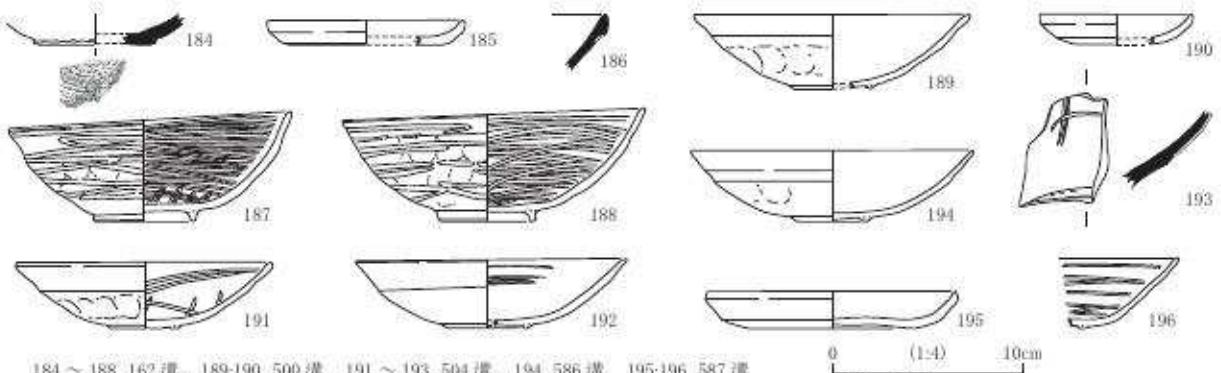


図 57 4層上面溝出土遺物

### 第3節 4層下面検出遺構と出土遺物

4層下面で検出した遺構は、僅かに古墳時代のものも含むが、ほとんどが弥生時代のものである。弥生時代中期から後期の遺構が中心で、調査区の東側約3分の1の範囲で集落を、それ以外の範囲で方形周溝墓を検出した。集落域には円形や方形の竪穴建物25棟のほか、無数のピット・土坑が広がっている。方形周溝墓は大小さまざままで、その数160基以上と、北摂地域の中でも突出した規模の墓域が広がっていたことが明らかとなった。また墓域と集落域との境には環濠と考えられる大溝がめぐっており、当時の弥生のムラの景観を知ることができる貴重な成果を得ることができた。

なお出土遺物個々の紋様・調整等細かい説明については、上面の遺物同様に一覧表に譲る。また方形周溝墓についても個々の規模や周囲の周溝墓との関係などについては一覧表に譲り、ここでは埋葬施設についてのみを記すこととする。

**竪穴建物1**（図59）3区の北端、墓域と集落域とを画する環濠3001溝の北西隅外側に位置する。平面形は直径5.9mの円形で、周囲には幅約0.15～0.2mの壁溝（3003溝）がめぐる。ただし南半は残りが悪く検出できなかった。調査当初は、中央土坑（3002土坑）を有する8本柱（3004～3011柱穴）の建物と考え、写真撮影まで行なったが、他の竪穴建物に比べ柱の数が多く、またその並びが南西側にやや偏っていたため、整理の段階で再検討し、4本主柱（3010・3472柱穴・3019・3027ピット）の建物に復原し直した。柱穴は直径0.25～0.35m程度の円形や楕円形で、深さは0.2～0.35m程度である。柱間は東西2.4m、南北1.9m。3002土坑は径1.17×1.0mの卵形で、深さは0.41mを測る。埋土は3層に分層でき、上2層は炭や焼土を包含する。

3015ピットや中央の3002土坑からⅡ様式の甕や壺の小片が出土している。

**竪穴建物2**（図60）環濠3001溝の北西隅、竪穴建物1のすぐ東側に隣接する。3001溝と重複し、切られる。また東側に周溝墓97が隣接するが、西辺周溝3900溝がこの竪穴建物を避けるように築かれていることから、周溝墓97よりも古い段階の竪穴であったことがうかがえる。平面形は直径7.15×6.75mの円形を呈し、周囲には幅0.2～0.4mの壁溝（3043溝）がめぐる。北端部では壁溝が3重となる箇所もあるが、狭い範囲であり建て替えに伴うものは不明。中央土坑（3029土坑）を有する4本主柱（3034・3039・3979柱穴）の建物であるが、北西隅の柱穴は3001溝に削られて失われている。柱穴はいずれも直径0.4m程度の円形で、深さは0.22～0.3mである。柱間寸法は東西3.0m、南北3.6mを測る。3029土坑は径1.35×1.1mの楕円形を呈する。深さは0.35mを測る。埋土は2層に分層でき、両層は炭を多く包含する。

竪穴内南端に位置する3054ピットから、Ⅱ様式の壺底部片が出土している（写真図版30-2）。底径11cmの大型品で、外面はハケ。ピットは直径0.26mの円形を呈する。

**竪穴建物3**（図59・72）3区の南東端に位置する。調査区東壁際のため西半部のみの検出。平面形は円形に復原でき、周囲には幅約0.2～0.3mの壁溝（3053溝）がめぐる。平面規模は中央土坑（3051土坑）までを半径とすると直径は約8mに復原できる。4本主柱と考えられ、そのうちの2本の柱穴（3048・3050柱穴）を検出している。直径は0.3～0.5m程度の隅丸方形で、深さは約0.5mを測る。柱間寸法は3.8mである。3051土坑は肩部が浅く広がるが、中心部では径約0.7mの隅丸方形を呈する。深さは0.4mで、埋土は3層に分層でき、下層は炭や焼土を包含する。

竪穴内西寄りに位置する3045土坑からⅡ様式の広口壺（197・198）が出土している。土坑は径1.15

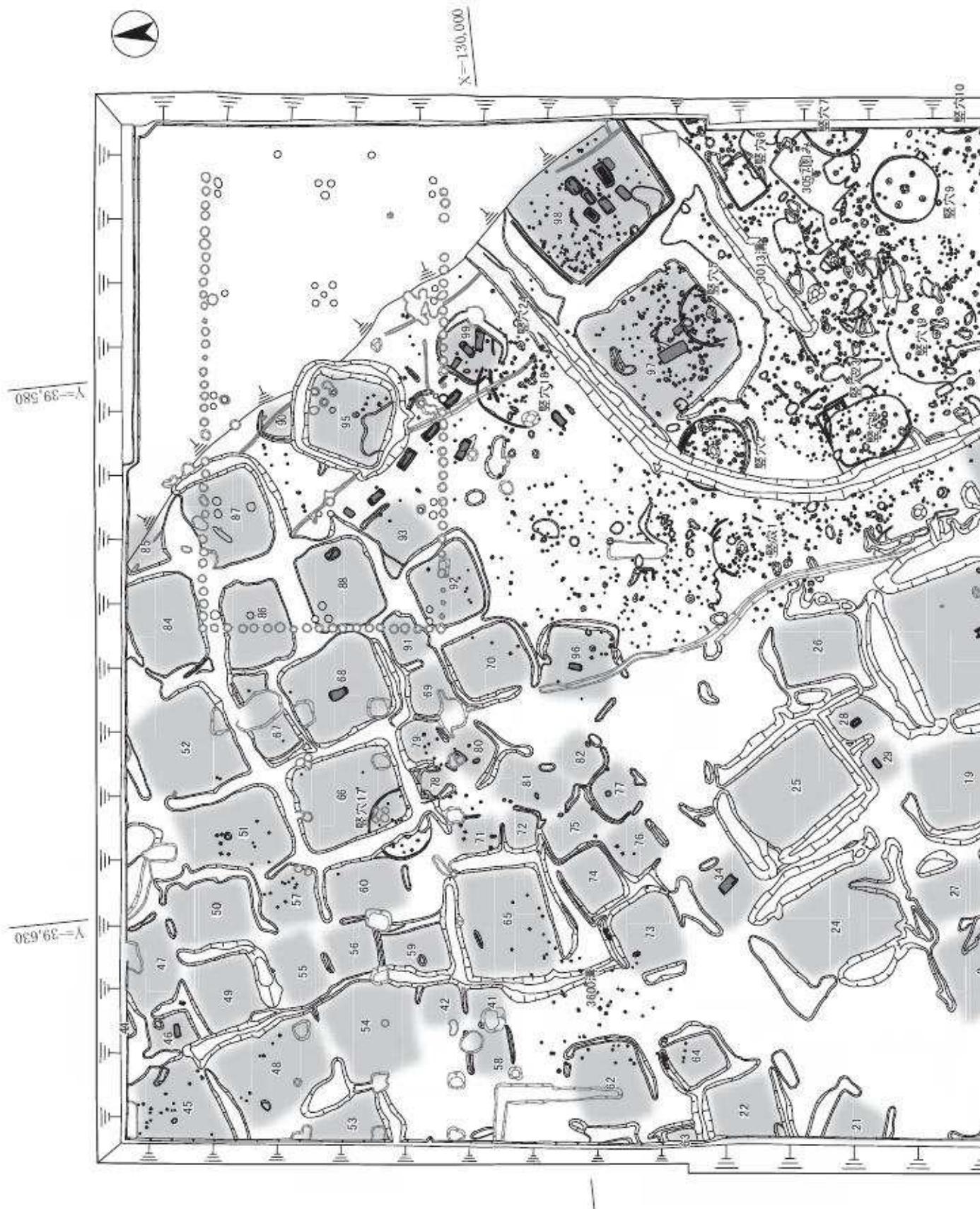




図 58 4層下面遺構全体平面

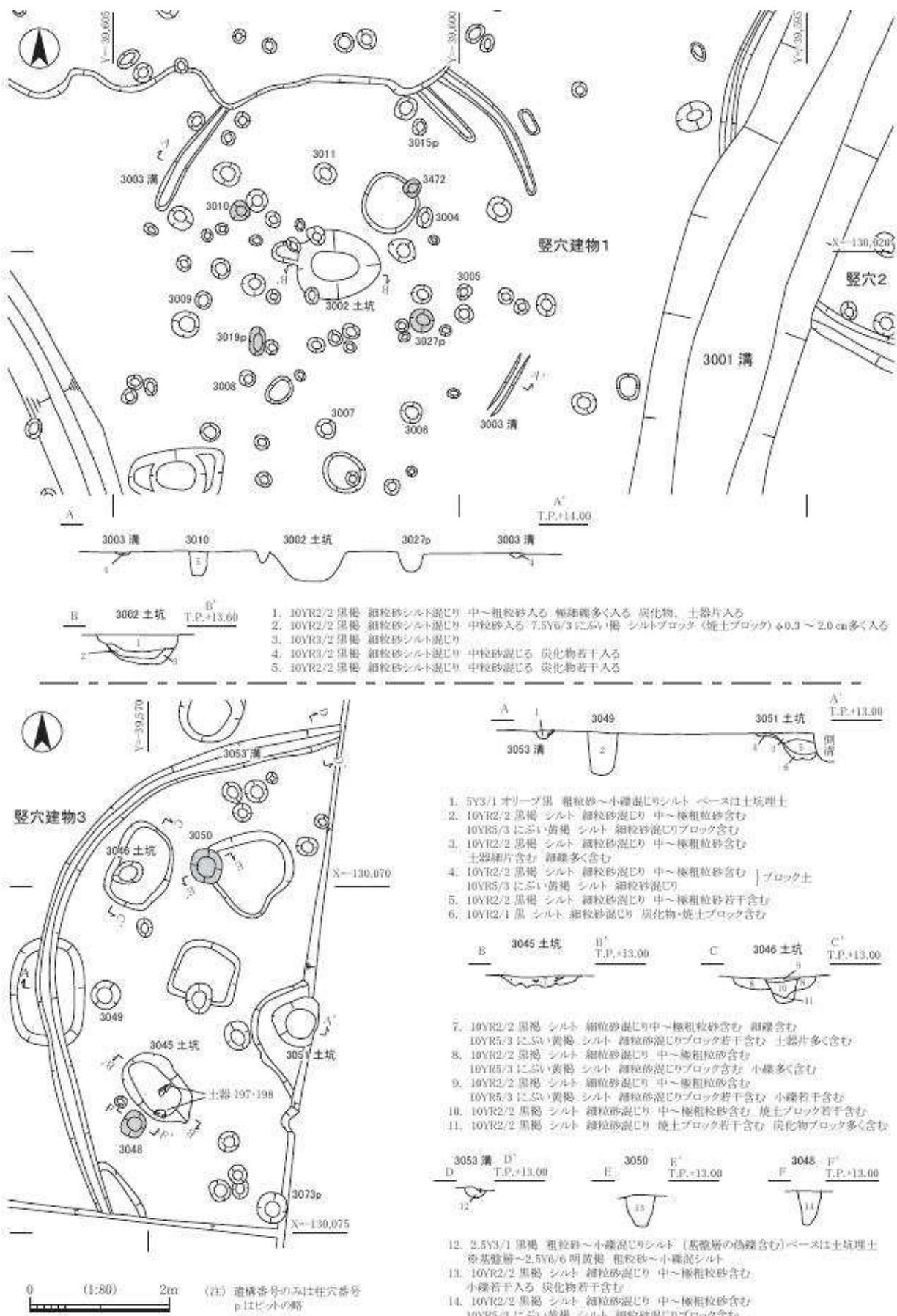


図 59 竪穴建物 1・3 平面・断面

× 0.75 mの楕円形で、深さは 0.15 mを測る。これ以外に小片ではあるが、中央の 3051 土坑からⅣ様式末頃の小型の無頸壺、壁溝 3053 溝からⅡ様式の広口壺とⅣ様式末～Ⅴ様式初頭頃の器台、3049柱穴からⅢ様式後半の無頸壺が出土している。

**竪穴建物 4** (図 61) 3 区の南半に位置する。環濠 3001 溝と重複し、3001 溝に切られる。平面形は直径 7.6 m の円形を呈し、周囲には幅約 0.2 ~ 0.3 m の壁溝 (3096 溝) がめぐる。中央土坑 (3103 土坑) を有する 5 本主柱 (3098・3100・3101・3102 柱穴・3145 ピット) の建物で、柱間寸法は 3145 ピットから時計回りに 2.5 m、2.6 m、3.0 m、2.5 m、2.6 m である。柱穴は直径 0.3 ~ 0.8 m 程度の円形や楕円形・隅丸方形などで、深さは約 0.3 ~ 0.5 m である。3103 土坑は径約 0.8 m、深さは 0.43 m で、肩部がやや乱れ不整形となる。埋土は 3 層に分層でき、下 2 層は炭を包含する。

3100 柱穴から広口壺、3102 柱穴から甕の小片が出土している。両者ともIV様式のものである。また覆土からもIV様式の広口壺や甕の小片が出土している。

竪穴建物5（図62）1区と3区の調査区境に位置する。周溝墓97の墳丘上にあり、南半を周溝3014・3901溝に切られる。平面形は直径6.1mの円形を呈し、周囲には幅約0.25～0.35mの壁溝（3948

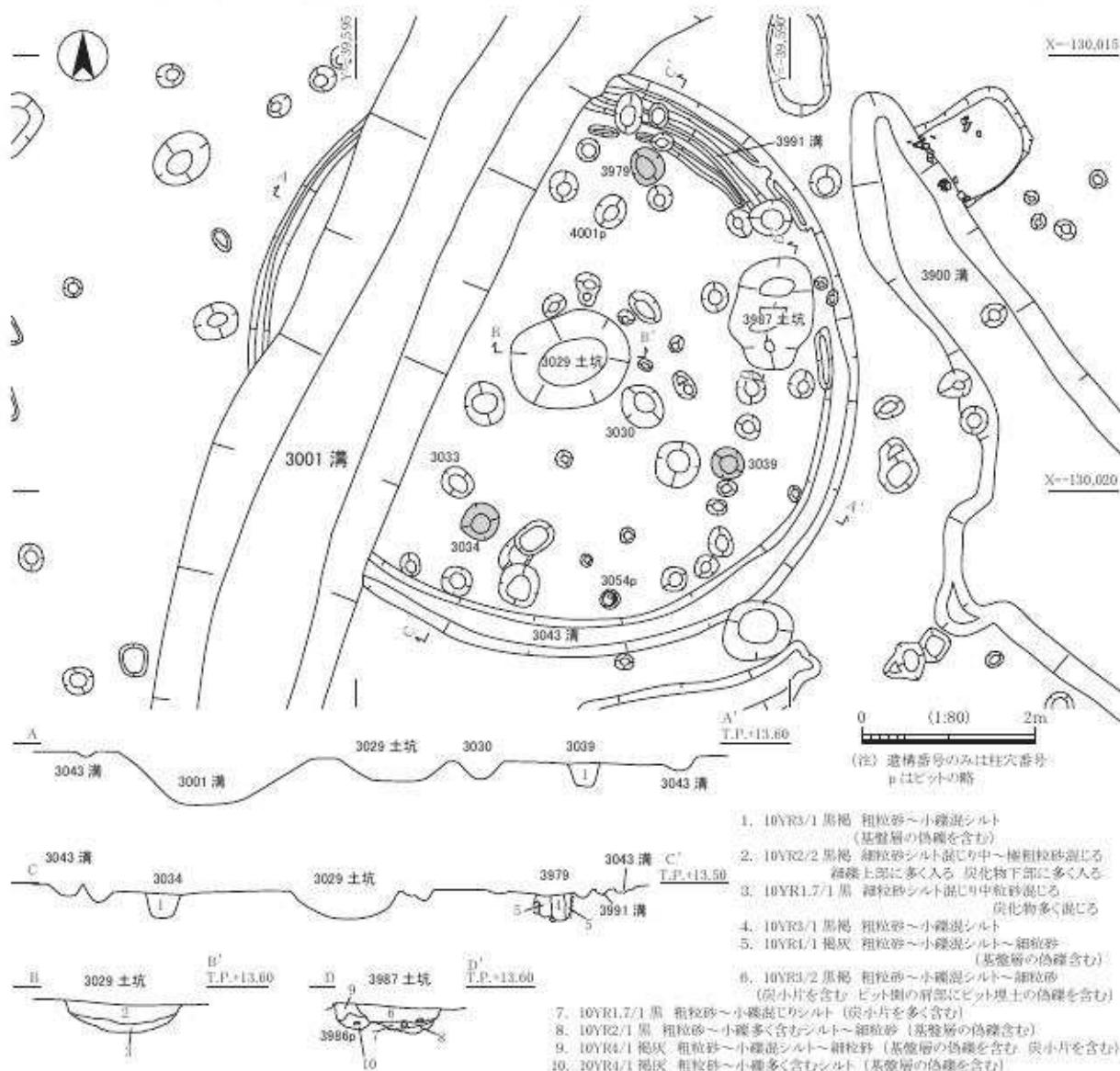
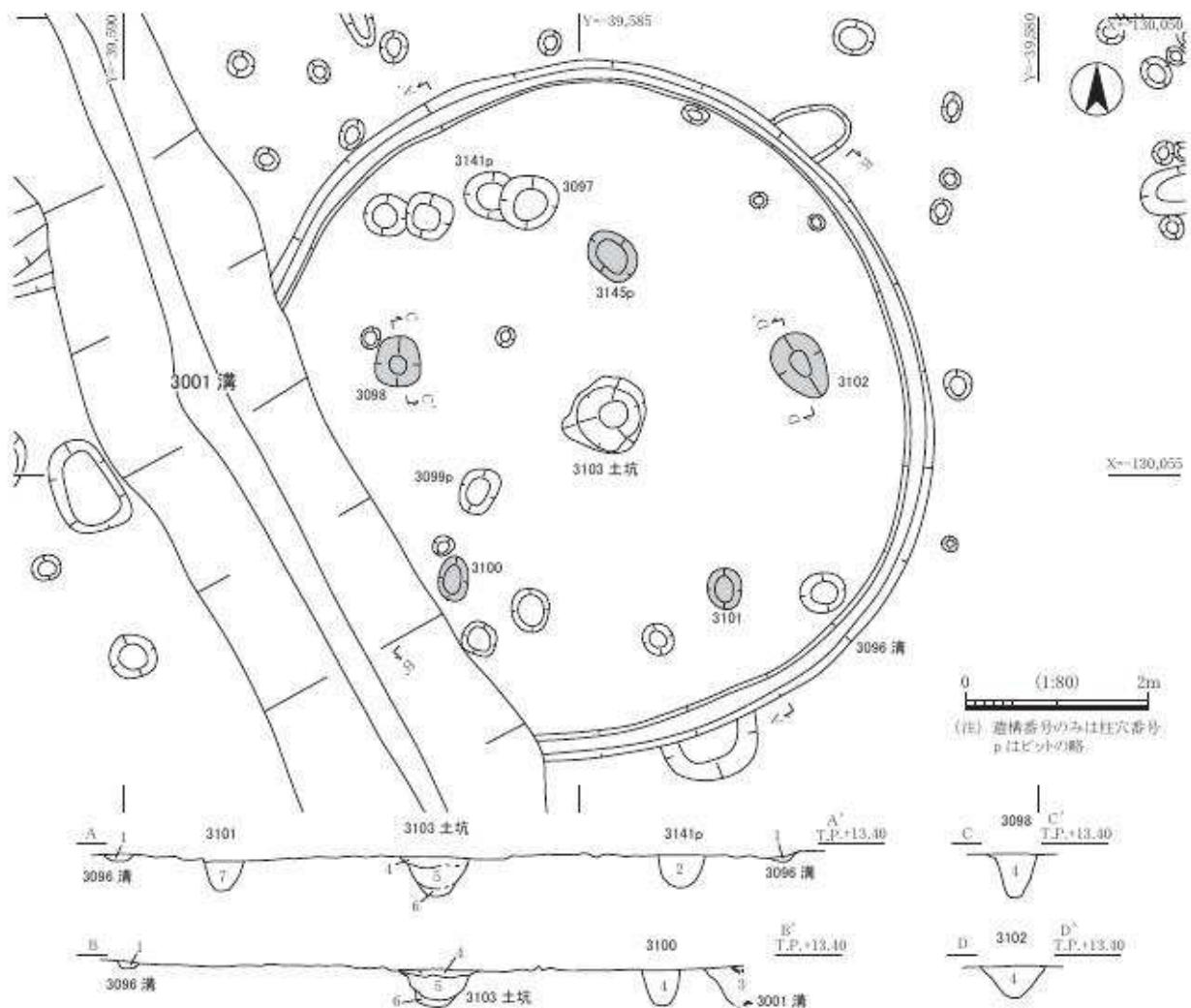


図 60 積穴建物 2 平面・断面



(複土)10YR3/2 黒褐 細粒砂混じシルトに10YR4/1 暗灰 細粒砂混じシルトと 10YR5/3 に赤い黄褐 細粒砂混じシルトのブロック含む 中～極粗粒砂 粗細砂多く含む 小礫含む炭化物・土器細片含む

1. 10YR3/2 黒褐 細粒砂混じシルト 中～極粗粒砂多く含む 極細砂含む
2. 10YR2/2 黑褐 細粒砂混じシルト 中～極粗粒砂含む 10YR5/3 に赤い黄褐 細粒砂混じシルトブロック含む
3. 10YR3/1 黒褐 細粒砂混じシルト 中～極粗粒砂含む 土器細片多く含む
4. 10YR4/2 灰黄褐 粗粒砂～小礫混じシルト
5. 10YR4/1 暗灰 粗粒砂～小礫混じり 粘土～シルト(炭小片少し含む)
6. 10YR3/1 黒褐 粗粒砂～小礫混じり 粘土～シルト(炭小片含む)

図 61 竪穴建物 4 平面・断面

溝)がめぐる。中央土坑(3058 土坑)を有する 4 本主柱(3469・3972・3990 柱穴)の建物であるが、南東隅の柱穴は周溝に削られて失われている。柱穴は直径 0.3 ~ 0.4 m 程度の円形で、深さは 0.35 ~ 0.5 m である。柱間寸法は東西 2.6 m、南北 2.2 m を測る。3058 土坑は径 1.15 × 0.9 m、深さは 0.73 m の台形を呈する。埋土は 4 層に分層でき、いずれの層も炭を包含する。

竪穴内の北端に 3945 土坑が位置する。周溝と重複する土坑で周溝を切る。平面形は径 1.1 × 0.85 m の楕円形で、深さは 0.2 m を測る。

中央の 3058 土坑からは中期後半の壺・甕小片が出土しており、3945 土坑からは V 様式の甕口縁片が出土している。

**竪穴建物 6 (図 63・77)** 集落内北寄りで検出した 3013 溝の南側に近接する。平面形は東西 4.5 m、南北 3.5 m の長方形を呈する特異な竪穴である。周囲には幅 0.25 ~ 0.3 m の壁溝(3080 溝)がめぐり、高さ 0.2 m ほどの壁も僅かに残っている。棟持柱 2 本(3078・3079 柱穴)の構造で、建物の軸は北側の 3013 溝とほぼ平行する。柱穴は直径 0.3 m 程度の楕円形と隅丸方形で、深さは 0.05 m ほどで非

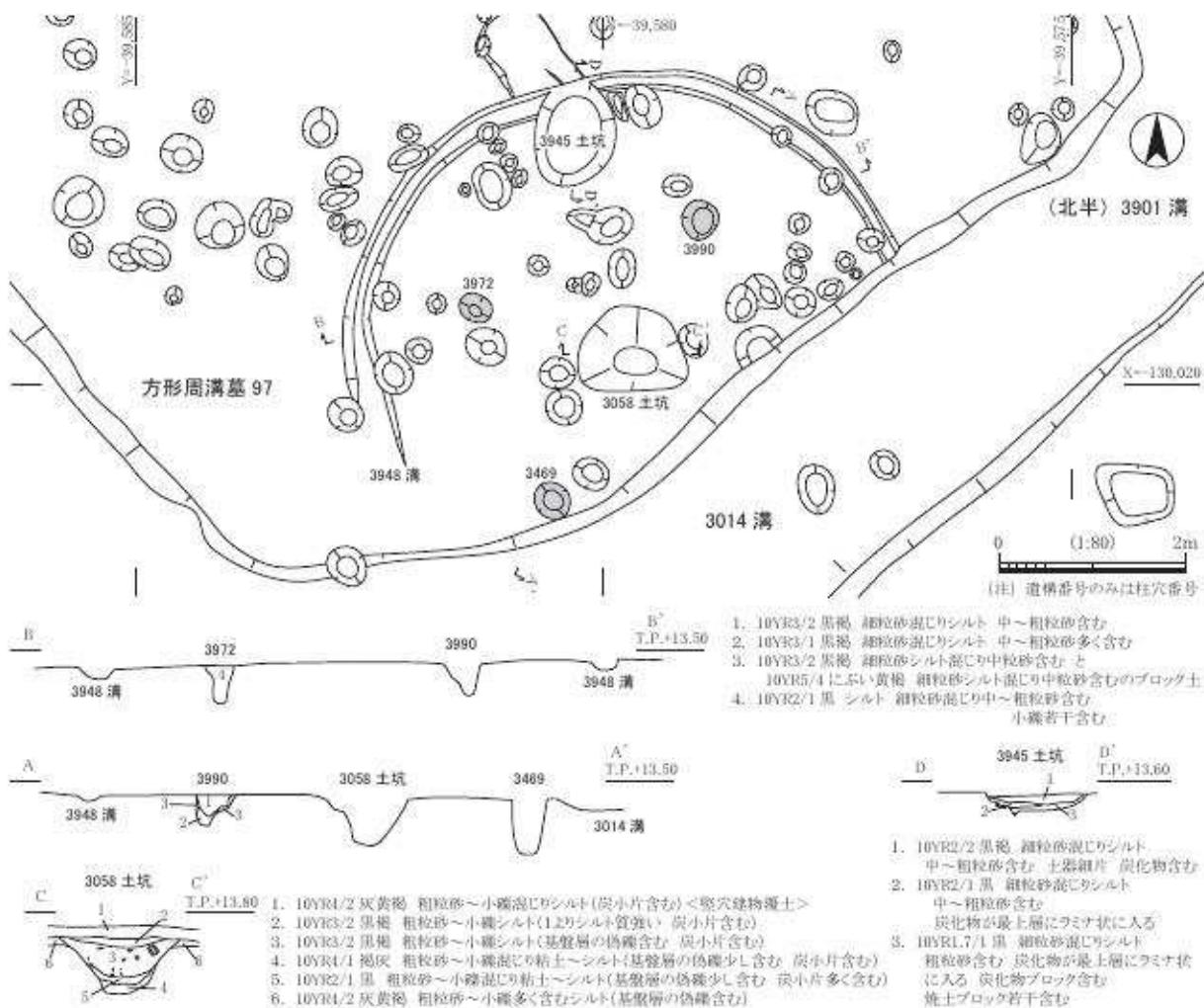


図 62 竪穴建物 5 平面・断面

常に浅い。柱間寸法は 1.1 m を測る。中央土坑はない。竪穴の形状から後期のものと考えているが、遺物は出土していない。

なお、この竪穴建物のすぐ南側、竪穴建物 7 と切り合って長方形の窪み (3057 四み) を検出している。南辺以外は直線的で整った長方形を呈すること、また竪穴建物 6 とほぼ向きを揃えていることなどから竪穴建物の可能性が考えられる。長辺 7.2 ~ 7.4 m、短辺約 5 m で、深さは北東隅で 0.15 m を測る。

3057 四みから斑レイ岩製の敲石 (220) が出土した。生駒山西麓産の石材であろうか。側縁部には全周する細かい敲打痕が認められるが、大きな割れは 1箇所。その側縁部を掌で覆うように握った場合、広面中央には両面ともに指の当たりにフィットする小さな凹凸が見られる。

**竪穴建物 7 (図 63・72)** 竪穴建物 6 の南側に位置する。調査区東壁際のため西半部のみの検出となつた。平面形は円形を呈し、周囲には幅 0.25 ~ 0.3 m の壁溝 (3467 溝) がめぐる。平面規模は直径約 6.5 m に復原できる。おそらく 4 本主柱の構造と考えられるが、どれが柱穴であったのかは不明。3083 柱穴がそれにあたるか。3083 柱穴は径 0.37 × 0.32 m の隅丸方形で、深さは 0.36 m を測る。

3083 柱穴からⅢ様式後半からⅣ様式初頭頃の広口壺 (199) が出土した。

**竪穴建物 8 (図 64・72)** 集落の西端、竪穴建物 2 の南側に位置する。方形の竪穴建物と切り合っており、方形側を竪穴建物 23 とした。平面形は直径 5.8 m の円形を呈するが、北半は竪穴建物 23 と重複しており、輪郭は明らかでない。周囲には幅 0.15 ~ 0.3 m の壁溝 (3257 溝) がめぐる。中央土坑 (3335

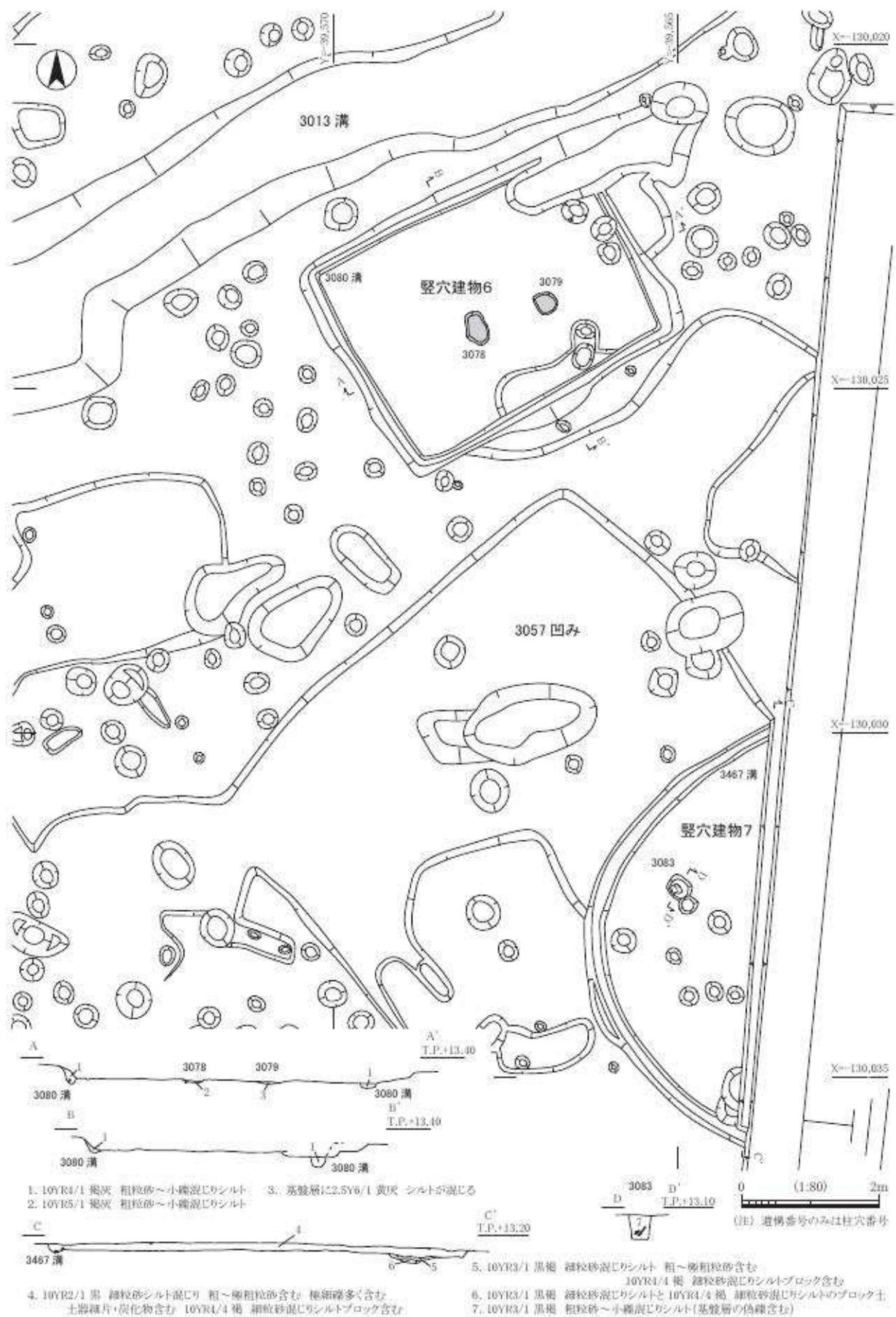
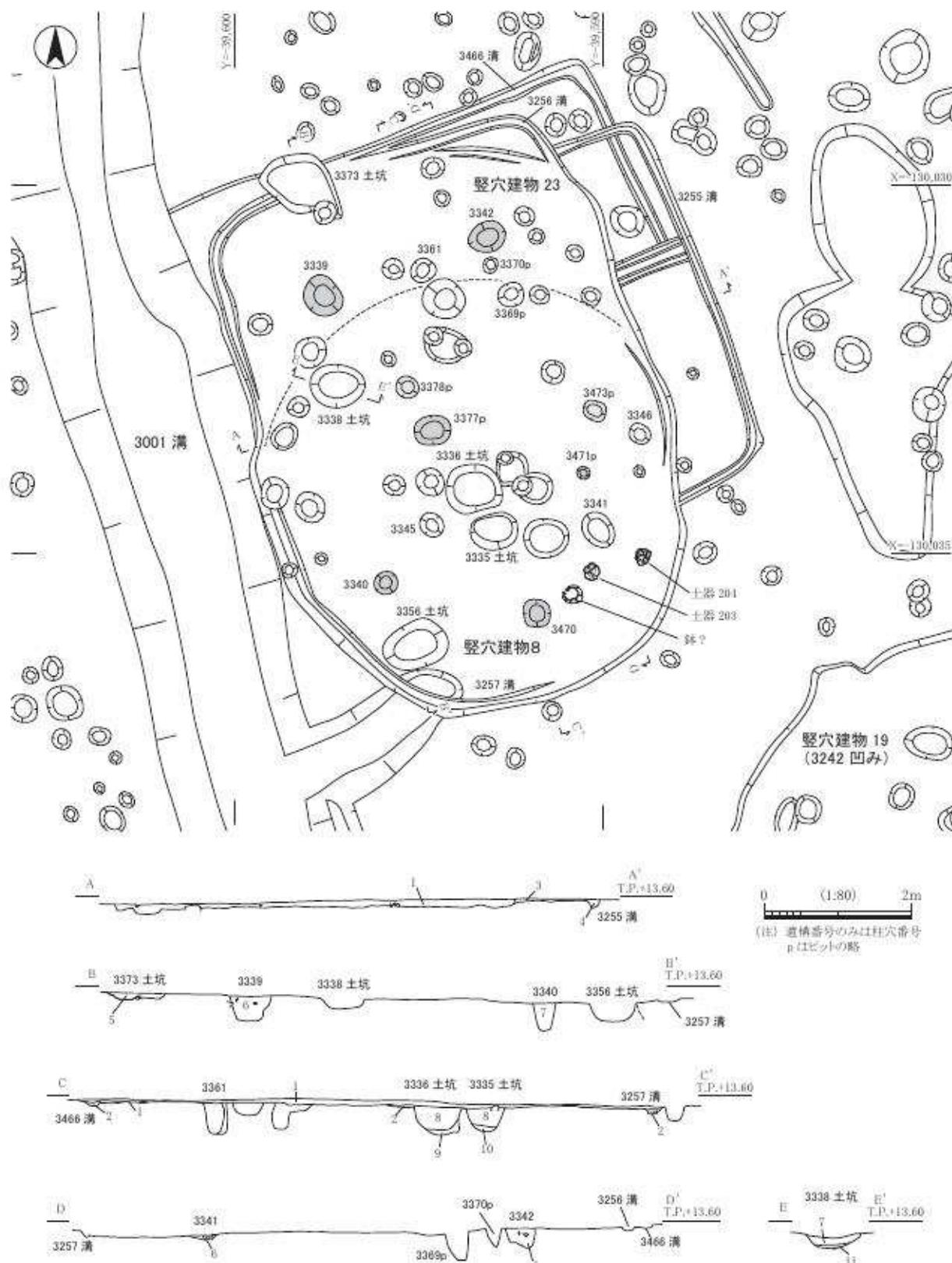


図 63 肇穴建物 6・7・3057 凹み平面・断面



1. 10YR2/2 黒褐色 細粒砂混にシリルト 中～極粗粒砂含む
  2. 10YR3/3 黄褐色 細粒砂混にシリルト 中～極粗粒砂含む ブロック入る
  3. 10YR4/2 暗黄褐色 細粒砂混にシリルト 中～極粗粒砂含む
  4. 10YR5/6 黄褐色 細粒砂混にシリルト 中～極粗粒砂含む
  5. 10YR4/2 暗黄褐色 細粒砂混にシリルト 中～極粗粒砂含む
  6. 10YR3/2 黑褐色 粗粒砂～小礫混にシリルト (基盤層の偽礫を含む)
  7. 10YR3/2 黑褐色 粗粒砂～小礫混にシリルト (炭小片を含む)
  8. 10YR3/1 明褐色 粗粒砂～小礫混にシリルト (炭片及び硫化土を含む)
  9. 10YR2/1 黑褐色 粗粒砂～小礫混に粘土～シルト (炭小片を多く含む)
  10. 10YR3/1 黑褐色 粗粒砂～小礫混に粘土～シルト (炭小片を含む)
  11. 10YR2/1 黑褐色 粗粒砂～小礫混にシリルト (炭小片を含む)

図 64 積穴建物 8・23 平面・断面

土坑)を有する4本主柱(3340・3470柱穴・3377・3471ピット)の建物で、柱間寸法は東西・南北とも2.1mを測る。南西隅の3340柱穴は直径0.28m、深さ0.37mの円形を呈するが、柱穴の規模は大小まちまちである。3335土坑は径約0.63×0.5m、深さは0.28mの楕円形を呈する。埋土は2層に分層でき、両層には炭が、上層には焼土片が混入する。この3335土坑の北側に接してほぼ同規模の土坑(3336土坑)が並ぶ。径0.78×0.6mの楕円形で、深さは0.37mを測る。埋土が3335土坑とほぼ同じで焼土や炭を包含していることから、中央土坑をつくり替えた可能性が高い。これにより北側の柱との距離が短くなつたため、おそらく北側の柱のみやや北側(3378・3473ピット)に移動したと考えられる。

竪穴内の北西隅に位置する3338土坑は、平面形が径0.75×0.59mの楕円形で、深さは0.21mを測る。埋土は2層に分層でき、両層とも炭を包含する。

床面からⅡ様式と思われる中期の壺(203)や鉢(204)が出土した。このほかⅡ様式の広口壺(202)やサヌカイト製の凸基式打製石鐵が2点(200・201)出土している。

**竪穴建物23(図64)** 竪穴建物8の北側で重複する平面方形の竪穴建物である。おそらく竪穴建物23が新しいと思われるが、現地調査の段階では3256溝付近までが竪穴建物8になると想っていたため、3256溝を壁溝とする方形の竪穴建物と竪穴建物8との切り合い関係を、平面および断面で検証しておらず、先後関係は明らかでない。壁溝が3重(3255・3256・3466溝)に重なっていることから、少

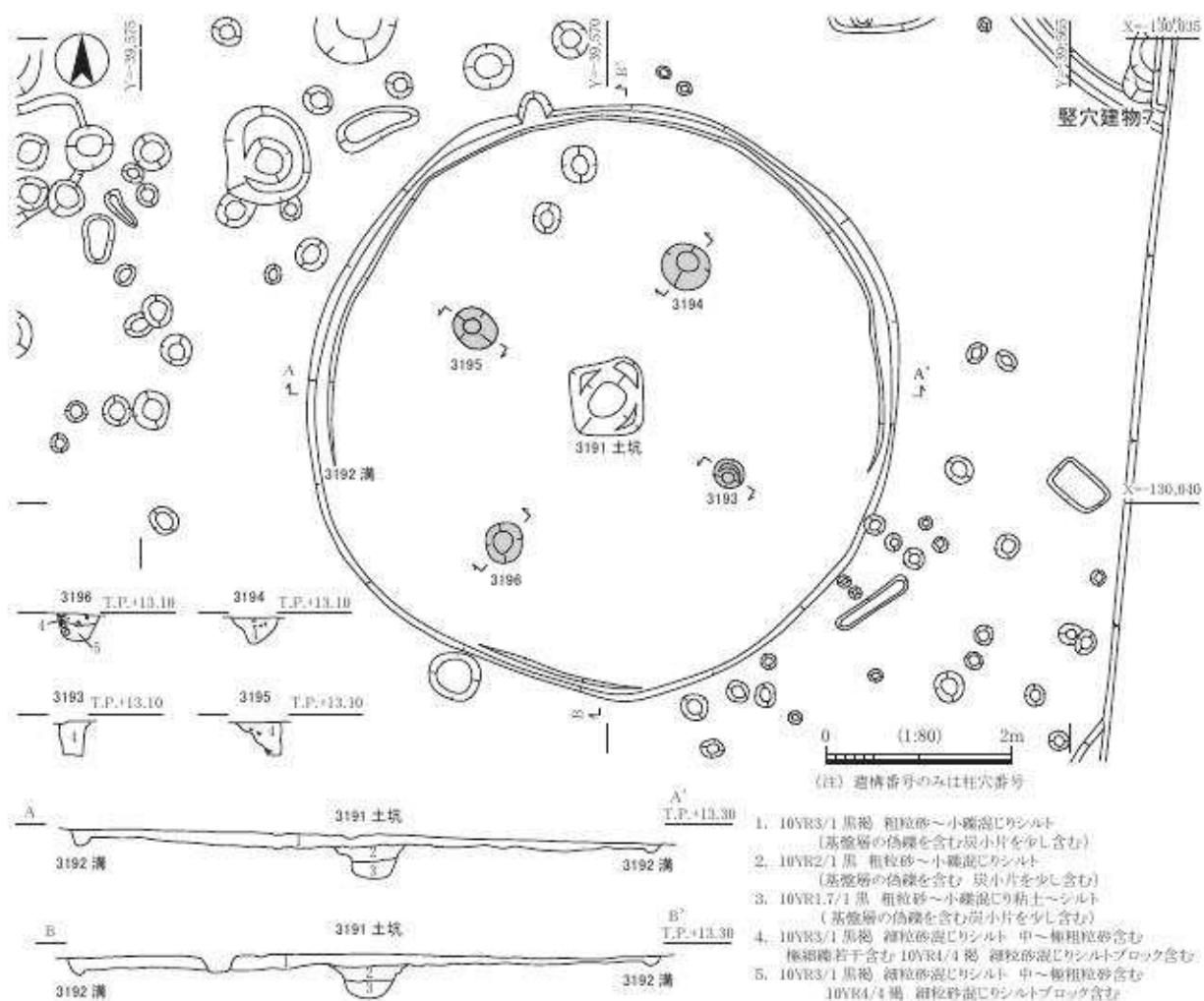


図65 竪穴建物9平面・断面

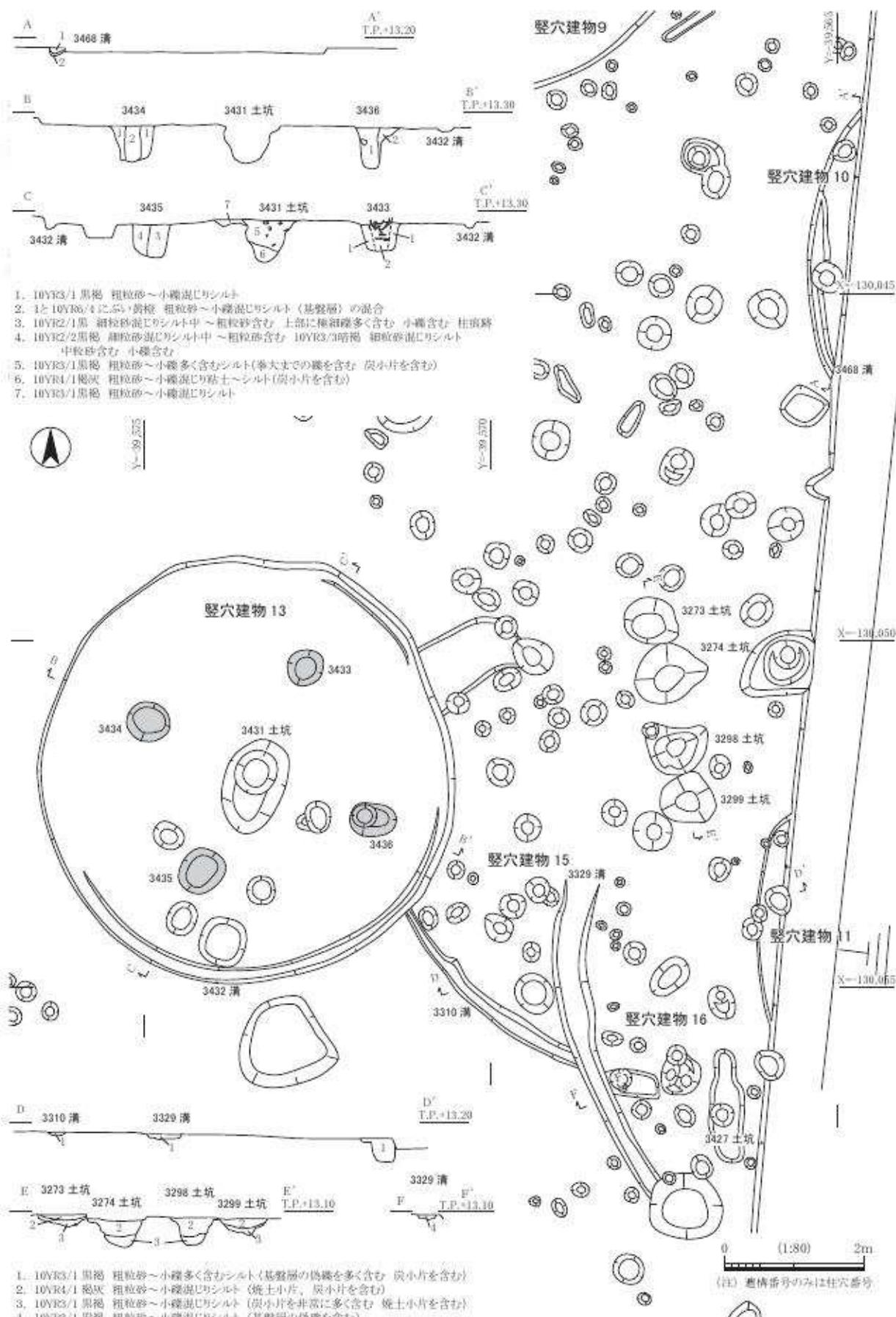


図 66 縱穴建物 10・11・13・15・16 平面・断面

なくとも2回の建て替えが行なわれたと考えられ、その切り合い関係は古い順に3466溝→3255溝→3256溝である。壁溝の幅はいずれも幅0.15m程度で、竪穴の規模は、3466溝を壁溝とする竪穴が東西6.0m以上、南北3.0m以上。3255溝を壁溝とする竪穴が南北5.2m。3256溝を壁溝とする竪穴が東西5.3m、南北4.0m以上である。いずれもおそらく4本主柱の構造と考えられ、3339・3342柱穴は3256溝もしくは3466溝を壁溝とする竪穴建物に伴うものと考えられる。南の柱穴は検出できなかった。3339・3342柱穴は、直径約0.4～0.55mの歪んだ楕円形で、深さは3339柱穴が0.35m、3342柱穴が0.27mを測る。

**竪穴建物9**（図65・72） 竪穴建物7の南西側に隣接する。平面形は直径6.3～6.5mの円形を呈し、周囲には幅0.15～0.3m弱の壁溝（3192溝）がめぐる。中央土坑（3191土坑）を有する4本主柱（3193・3194・3195・3196柱穴）の建物で、柱間寸法は東西2.5m、南北2.4mを測る。柱穴は直径0.3～0.5m程度の円形や楕円形で、深さは約0.3～0.35mである。3191土坑は径0.95×0.8mの隅丸方形を呈する。深さは0.48mで、埋土は2層に分層でき、両層とも炭を包含する。

3196柱穴からIV様式の甕（205）が出土したほか、3195柱穴からもIV様式の甕が出土している。

**竪穴建物10**（図66） 竪穴建物9の南東側に隣接するが、調査区東壁際のため、壁溝の西端部のみの検出である。壁溝（3468溝）は幅約0.2mを測る。

**竪穴建物11**（図66） 竪穴建物10の南側に位置する。竪穴建物10と同じく調査区東壁際のため、西壁の一部のみの検出である。壁は0.05m程度の僅かな段を成す。竪穴建物15・16と重複するが、切り合いがなく先後関係は不明。

**竪穴建物12**（図67・72） 3区の南端、環濠3001溝よりも外側に位置する。周溝墓30の墳丘上に築かれた竪穴で、周溝と重複する。切り合い関係が不明瞭であったため、図示したように周溝が切っているように掘削したが、実際には竪穴が周溝を切っていたことが出土遺物から判明した。平面形は東西4.75m、南北5.0m以上の南北にやや長い角張った楕円形を呈し、周囲には幅約0.2mの壁溝（3395溝）がめぐる。中央土坑（3394土坑）を有する4本主柱（3396・3397・3398・3399柱穴）の建物で、柱間寸法は3396柱穴から時計回りに2.5m、2.7m、2.8m、2.6mである。柱穴は直径0.2～0.35m程度の円形で、深さは0.12m（3399柱穴）のものから0.37m（3398柱穴）のものまでまちまちである。3394土坑は直径0.5mのほぼ円形を呈する。深さは0.46mを測る。埋土は3層に分層でき、いずれの層も炭を包含する。

3394土坑からV様式の高杯（207）・器台（208）のほかタタキ甕が出土している。

**竪穴建物13**（図66） 竪穴建物4の東側に位置する。竪穴建物15と重複し、竪穴建物15を切る。平面形は直径6.0～6.1mの整った円形を呈し、周囲には幅0.2～0.25mの壁溝（3432溝）がめぐる。中央土坑（3431土坑）を有する4本主柱（3433・3434・3435・3436柱穴）の建物で、柱間寸法は東西2.4m、南北2.3mを測る。柱穴は直径0.55～0.65m程度の円形で、深さは0.4～0.6mである。3431土坑は1.4×0.9mの楕円形を呈する。深さは0.6mで、埋土は2層に分層でき、両層とも炭を包含する。

中央の3431土坑から中期後半の甕や凹線紋をもつ口縁部小片、生駒山西麓産胎土の壺小片などが出土している。

**竪穴建物14**（図67・72） 竪穴建物3と4との中間に位置する。平面形は直径4.4～4.6mの五角形に近い円形を呈し、壁際で約0.05～0.1mの段を成して窪む。壁溝は残っていない。中央土坑（3450

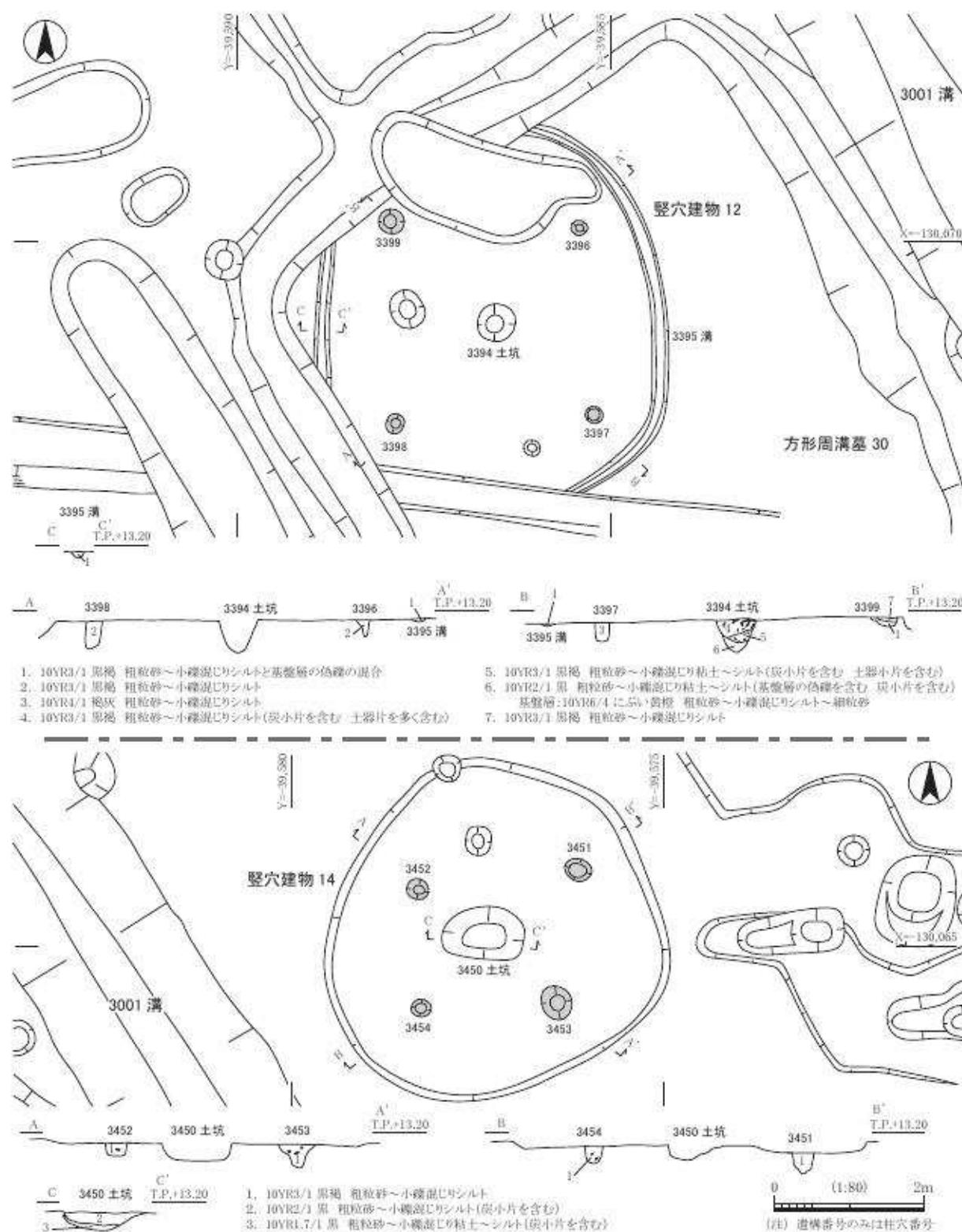


図 67 窪穴建物 12・14 平面・断面

土坑) を有する 4 本主柱 (3451・3452・3453・3454 柱穴) の建物で、柱間寸法は 3451 柱穴から時計回りに 1.8 m、1.9 m、1.6 m、2.1 m である。柱穴はいずれも円形で、直径は 0.25 m (3454 柱穴) のものから 0.5 m (3453 柱穴)、深さも 0.17 m (3452 柱穴) のものから 0.31 m (3453 柱穴) のものまでまちまちである。3450 土坑は径 1.1 × 0.7 m の楕円形を呈する。深さは 0.25 m で、埋土は 2 層に分層でき、両層とも炭を包含する。

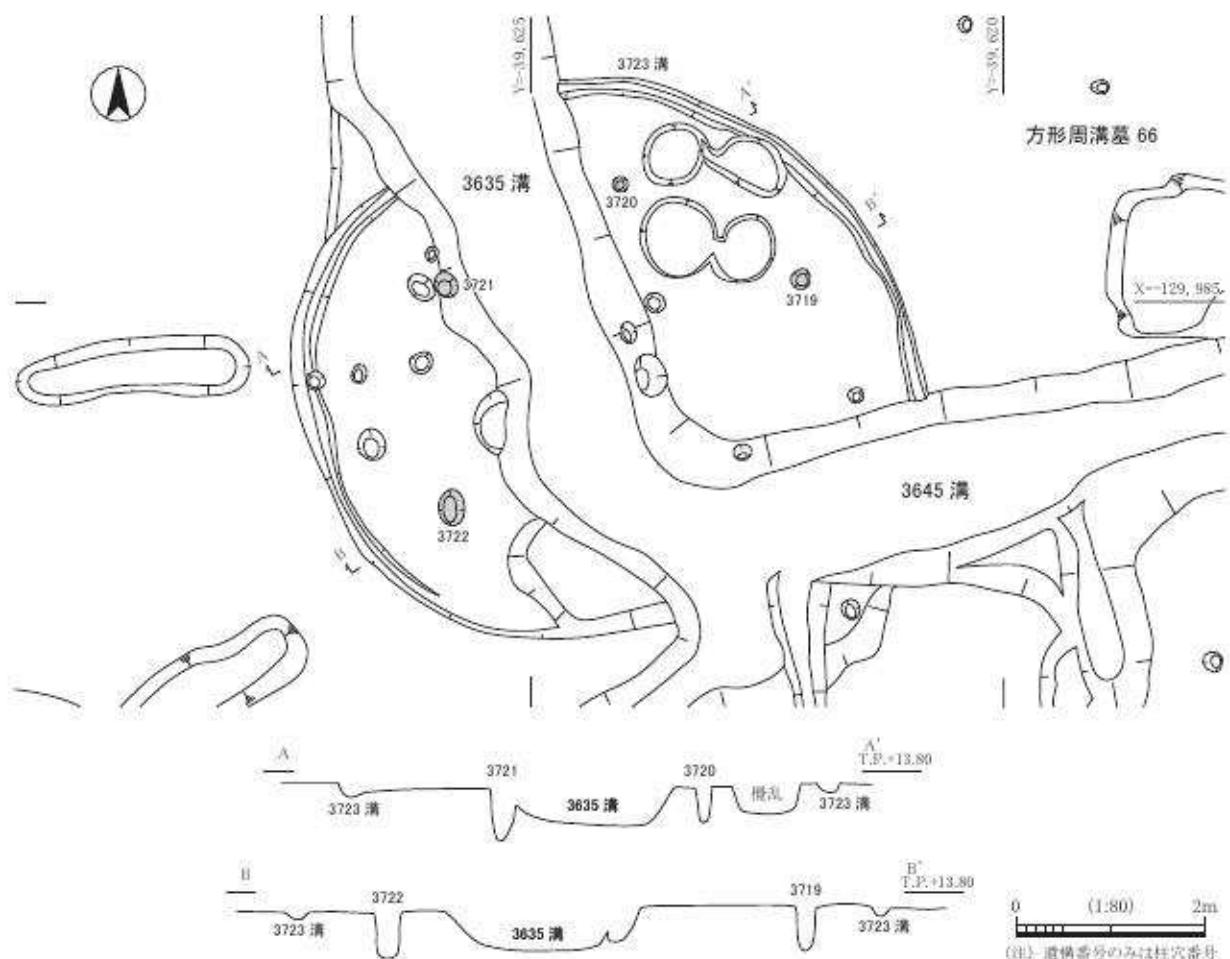


図 68 竪穴建物 17 平面・断面

3452 柱穴から中期前半の甕（206）が出土した。

**竪穴建物 15**（図 66）竪穴建物 13 の東側で、竪穴建物 11・13・16 と重複し、竪穴建物 13・16 に切られる。竪穴建物 11 との先後関係は不明。壁溝（3310 溝）は南西側の一部のみの検出であるが、弧を描いており、竪穴の平面形は円形と考えられる。直径は不明。壁溝は幅 0.1～0.3 m を測る。壁溝の北東側で検出した 3298・3299 土坑が中央土坑になると想われる。埋土は 2 層に分層でき、両層は焼土や炭を包含する。おそらく竪穴建物 8 同様につくり替えが行なわれたと考えられるが、切り合っておらず先後関係は不明。規模は 3298 土坑が 0.7×0.9 m の歪な台形で、深さは 0.4 m。3299 土坑は 0.8×0.7 m の歪な五角形で、深さ 0.25 m を測る。主柱穴は特定できなかった。

**竪穴建物 16**（図 66・72）竪穴建物 13 の南東側に隣接する。竪穴建物 11・15 と重複し、竪穴建物 15 を切る。竪穴建物 11 との先後関係は不明。周溝（3329 溝）西辺の一部のみの検出であるが、竪穴建物 15 と同じく弧を描いていることから、竪穴の平面形は円形と考えられる。直径は不明。壁溝は 0.3～0.5 m を測る。中央土坑は調査区外で、主柱穴も特定できなかった。

竪穴内で検出した 3427 土坑から IV 様式末頃の広口壺（209）が出土している。瀬戸内の影響を受けていると考えられる。土坑は長さ 1.65 m、幅 0.5 m の歪な梢円形で、深さ 0.1 m を測る。

**竪穴建物 17**（図 68）この 1 棟のみ集落域から離れた 2 区の中央に位置する。周溝墓 66 の周溝と重複するが、調査後半の空撮直前まで竪穴の存在にはまったく気付かなかつたため、周溝埋土上面での切り合い関係は検証できていない。ただし周溝 3635 溝の上面で、位置的に重なる中央土坑に気付い

ていないことから、竪穴より周溝が新しいと考えている。竪穴の平面形は東西 6.5 m、南北 5.85 m の僅かに東西に長い円形を呈し、周囲には幅 0.2 ~ 0.3 m の壁溝（3723 溝）がめぐる。3719・3720・3721・3722 柱穴を主柱穴とする 5 本ないしは 6 本柱の構造であったと考えている。柱間寸法は 3719 柱穴から反時計回りに 2.15 m、2.1 m、2.3 m である。柱穴は直径 0.2 ~ 0.3 m 程度の円形や楕円形で、深さは約 0.4 ~ 0.5 m である。

**竪穴建物 18 (図 69・73)** 1 区中央部、環濠 3001 溝の外側に位置する。周溝墓 99 と重複し、周溝に切られる。また竪穴建物 24 とも重複する。壁溝（3964 溝）は西辺と北辺の一部のみを検出した。幅は 0.15 ~ 0.2 m である。竪穴の平面形はやや角張った円形で、中央土坑（3958 土坑）や主柱穴（3952・3966・3984・3985・3985・3980・3969 柱穴）の位置から直径約 7.7 m に復原できる。6 本主柱の建物で、柱間寸法は 3969 柱穴から時計回りに 2.7 m、1.9 m、3.0 m、2.7 m、3.1 m、2.7 m である。柱穴は

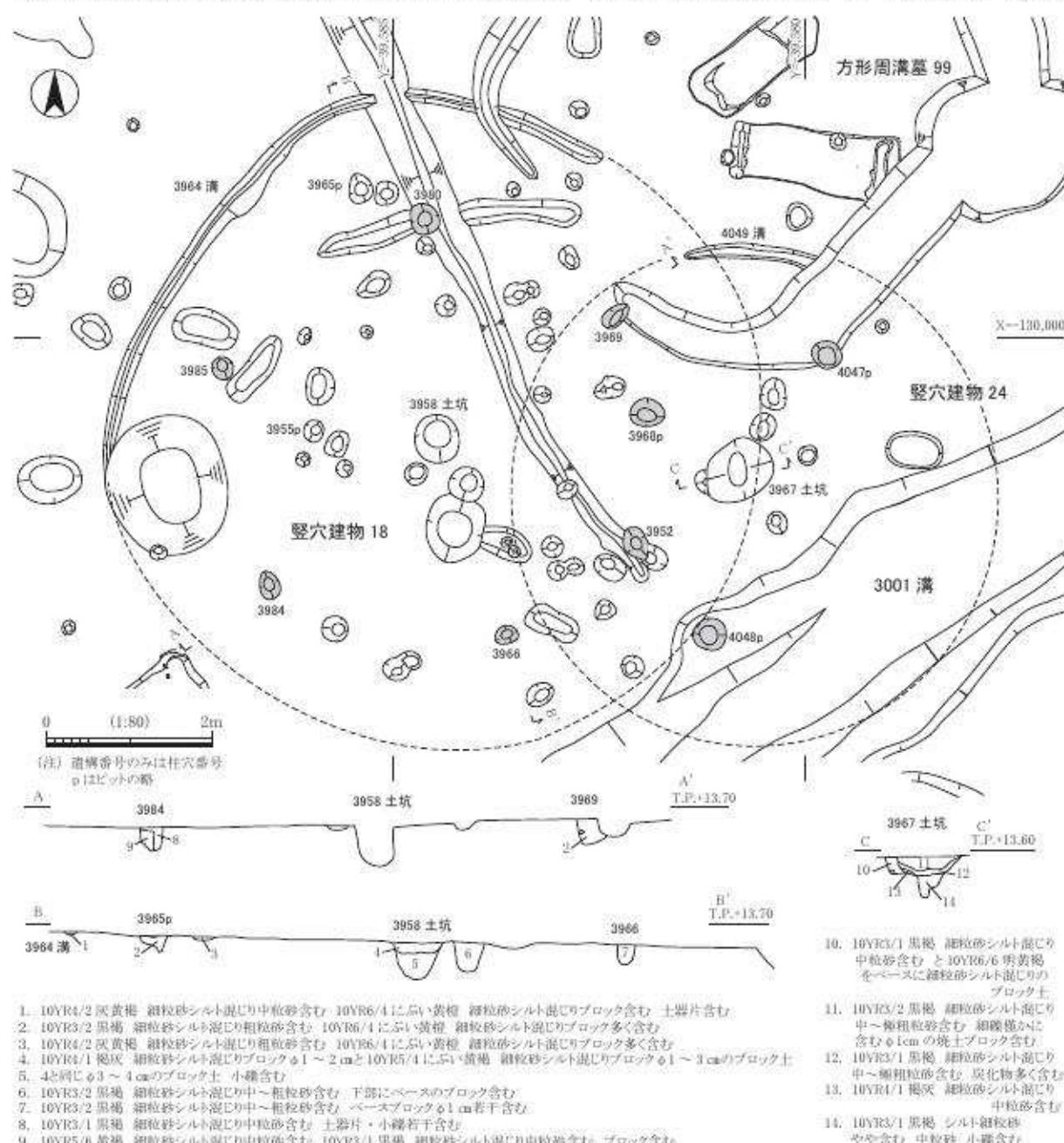


図 69 竪穴建物 18・24 平面・断面

直径 0.2 ~ 0.35 m 程度の円形や楕円形で、深さは約 0.2 ~ 0.3 m を測る。3958 土坑は径 0.6 × 0.55 m のほぼ円形で、深さは 0.45 m を測る。

3952 柱穴から V 様式の高杯（213・214）と広口壺（215）が、3955 ピットからは IV 様式末～V 様式初頭頃の甕（217）と石皿（216）が出土した。216 は砂岩製で、3 面を使用し、上面と裏面は窪む。

**竪穴建物 24**（図 69）竪穴建物 18 の東側で重複するが、周溝や柱穴が切り合っておらず、先後関係は不明。周溝墓 99 と環濠 3001 溝と重複し、両者に切られる。壁溝（4049 溝）は北端の 1.6 m 程の長さしか残っていないが、中央土坑（3967 土坑）や主柱穴（3968・4047・4048 ピット）の位置から、直径約 6 m の円形の竪穴建物に復原できる。4 本主柱の建物であるが、南東隅の柱穴は 3001 溝によって失われている。柱間寸法は東西 2.3 m、南北 2.8 m である。柱穴はいずれも直径 0.4 m 前後の円形で、深さは 0.35 ~ 0.45 m である。土坑は径 0.93 × 0.72 m の台形を呈する。深さは 0.5 m で、埋土上層には焼土や炭を包含する。

**竪穴建物 19**（図 70・73）竪穴建物 8 の南東側に隣接する。現地調査の段階では竪穴建物と認識せず、「3242 四み」として調査を進めたが、その輪郭や中央土坑（3283 土坑）を有している点など、竪穴建物であった可能性が高いため、整理の段階で竪穴建物として番号を振ることとした。竪穴の規模は直径約 8.7 m で、壁際で 0.1 m 弱の段を成して窪む。壁溝は残っていない。3280 ピット、あるいは 3282 ピッ

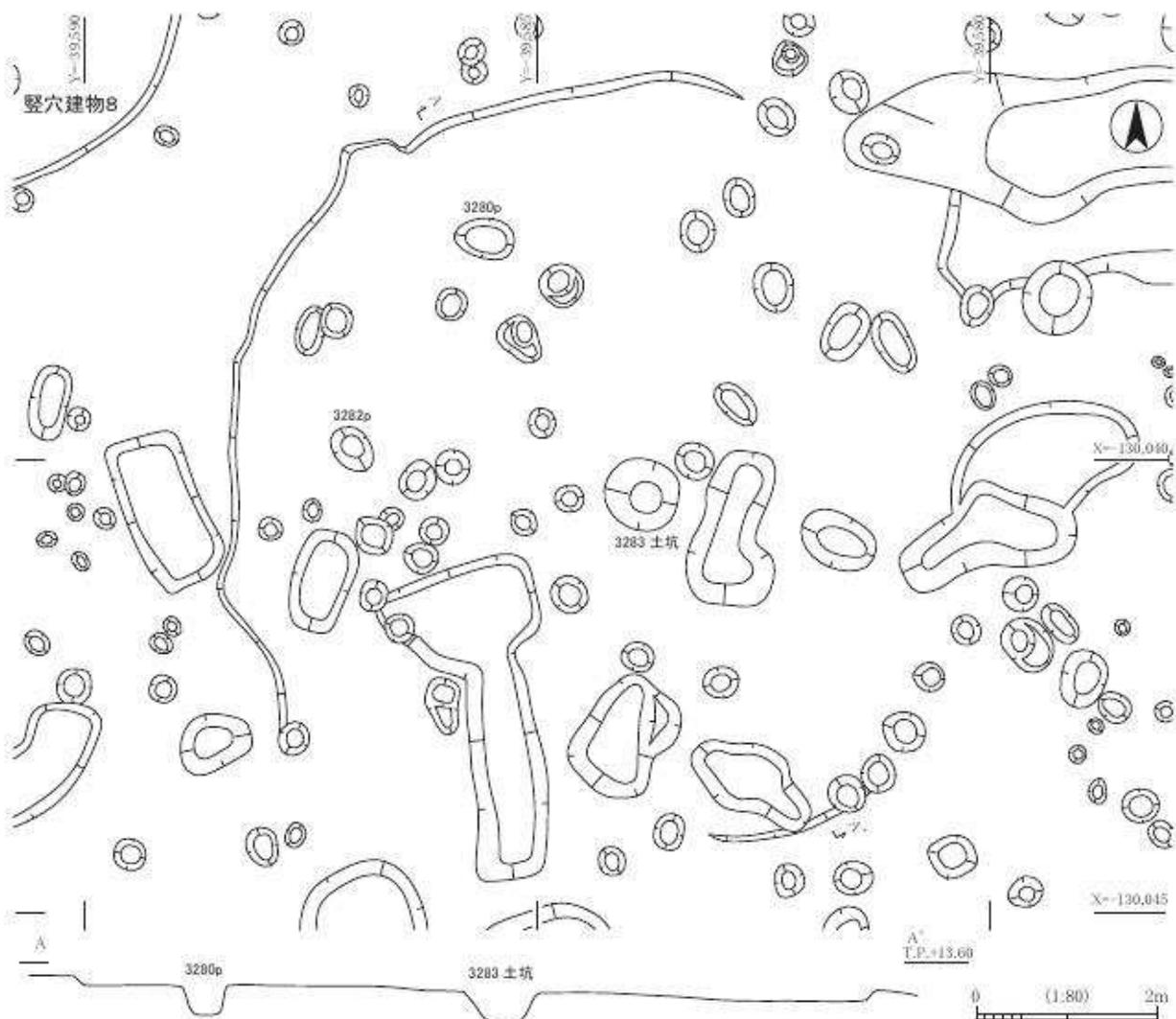


図 70 竪穴建物 19 平面・断面

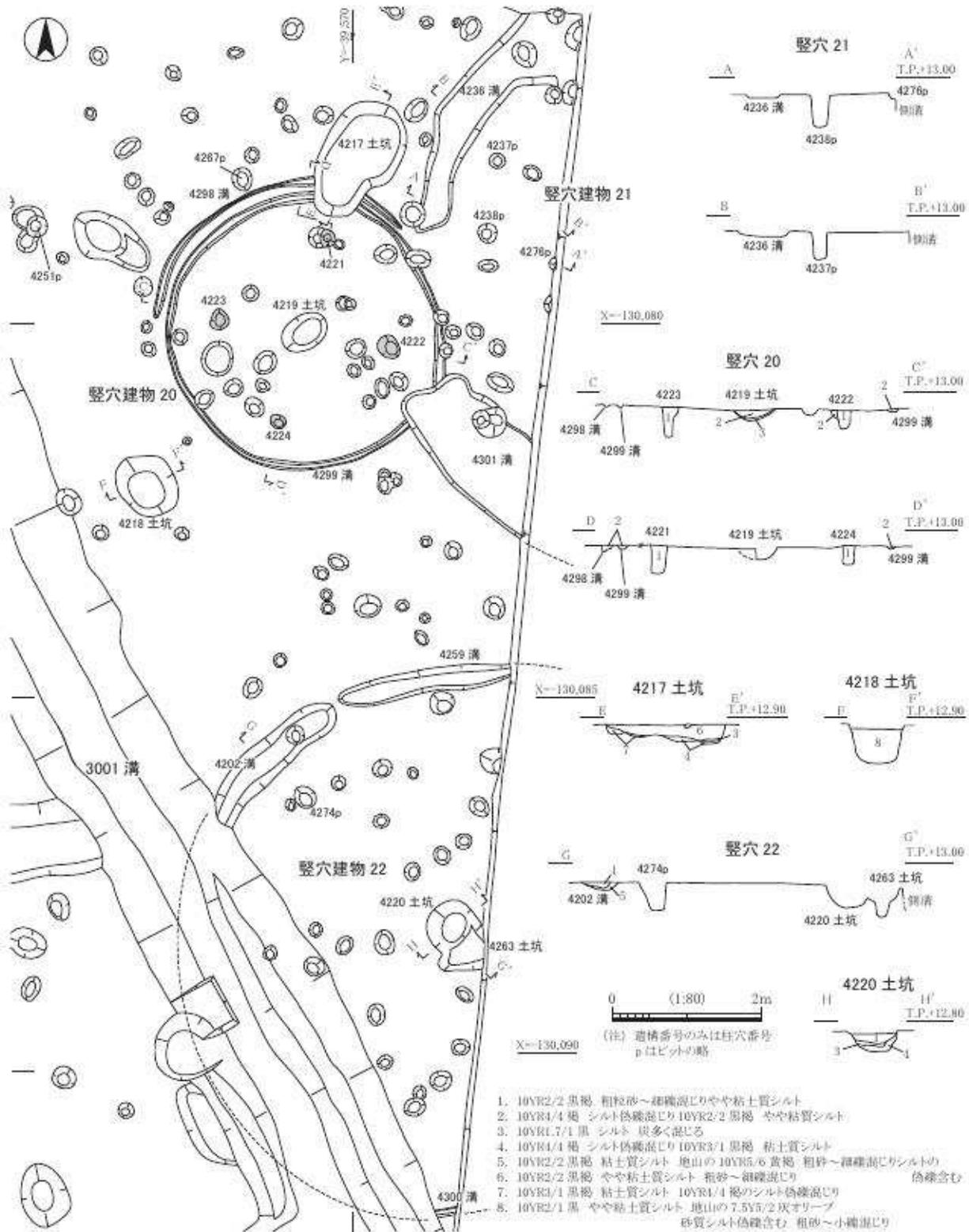


図 71 竪穴建物 20・21・22 平面・断面

トなどが柱穴であったと思われるが、現地調査の段階で検証していなかったため詳細は不明。3283 土坑が中央土坑と考えられる。直径 0.83 m のほぼ円形で、深さは 0.3 m を測る。

3282 ピットからは小型の鉢（211）やV様式の甕（212）が出土している。

竪穴建物 20（図 71） 5 区の北東隅、竪穴建物 3 の南側に位置する。平面形は直径 3.7 m の円形を呈し、周囲には幅約 0.1 m の壁溝（4299 溝）がめぐる。他の竪穴建物に比べ小型である。中央土坑（4219 土坑）

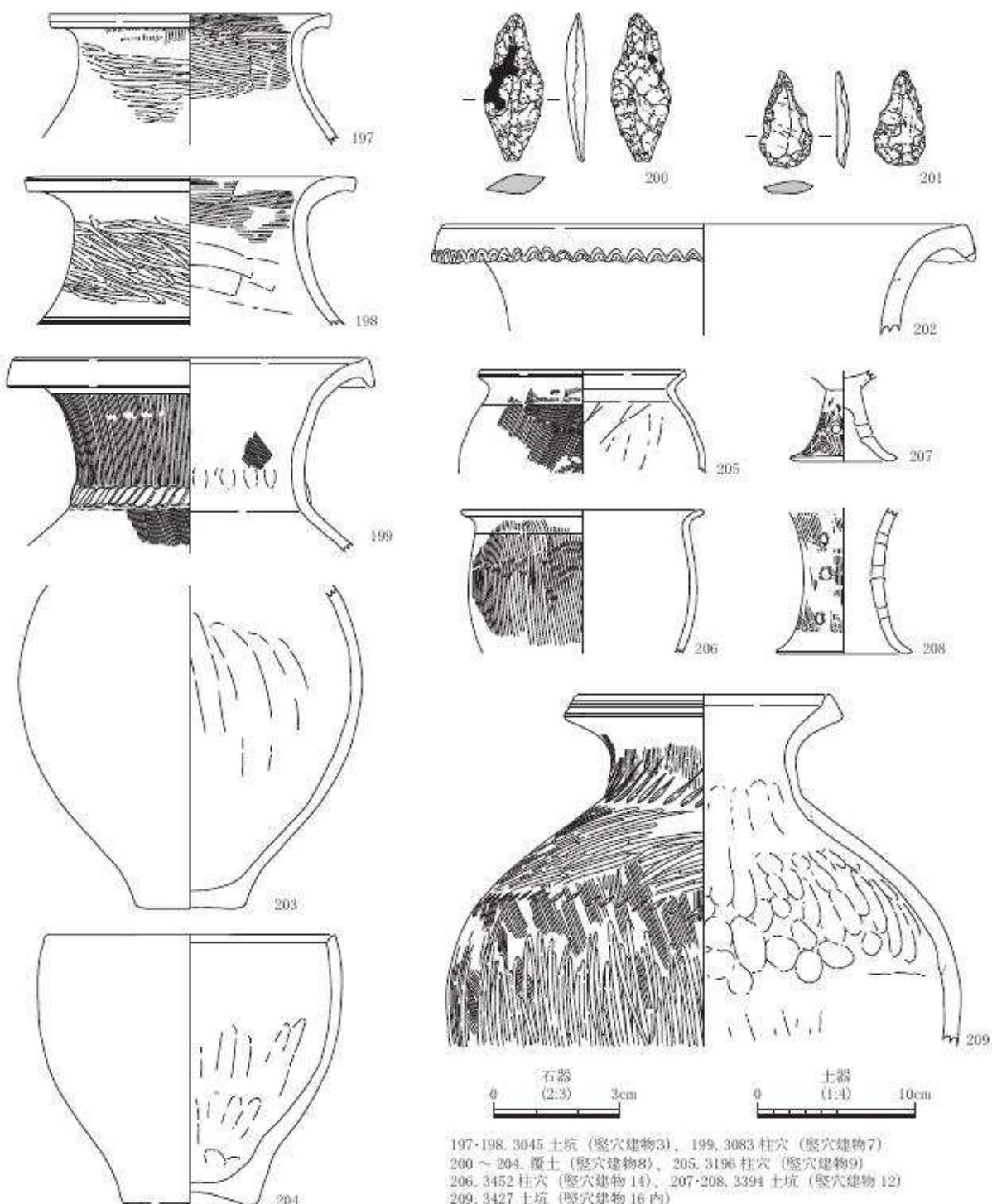


図 72 積穴建物出土遺物

を有する4本主柱（4221・4222・4223・4224柱穴）の建物で、柱間寸法は東西1.8m、南北1.6mを測る。柱穴は直径0.15～0.3m程度の円形や楕円形で、深さは0.25～0.4mである。4219土坑は径0.65×0.48mの楕円形を呈する。深さは0.14mで、土坑底に炭が多く堆積する。壁溝の北外側に接して4298溝がめぐっていることから、建て替えが行なわれたことがうかがえるが、中央土坑にはつくり替えは認められない。

4221・4222柱穴からⅡ様式の甕口縁小片が出土している。

積穴建物21（図71） 積穴建物20の東側で重複するが、調査区東壁際のため西側の一部のみの検出

となった。竪穴の平面形は円形で、周囲には幅 0.6 ~ 1.15 m の幅の広い窪み状の壁溝 (4236・4301 溝) がめぐる。深さは 0.1 m 程度である。4301 溝の一部が竪穴建物 20 の壁溝と切り合い、4301 溝が切っているように検出・掘削しているが、実際の切り合い関係は非常に不明瞭で、不確実である。竪穴の直径は約 8.5 m に復原できる。柱穴や中央土坑は調査区外のため不明。

**竪穴建物 22 (図 71)** 検出できた集落域の中ではもっとも南側の、竪穴建物 20・21 の南側に位置する。東半は調査区外で、西側は 3001 溝と重複し、大きく削られている。平面形は直径 7.4 m の円形を呈し、周囲には幅 0.3 ~ 0.5 m のやや幅の広い壁溝 (4202・4259 溝) がめぐる。南辺はやや狭く 0.1 m 程度 (4300 溝) である。中央土坑 (4220 土坑) を有するが、主柱穴は特定できなかった。4220 土坑は直径 0.7 m 弱のほぼ円形を呈する。深さは 0.28 m で、3 層に分層でき、中層に炭が多く堆積する。

**竪穴建物以外のピット (図 73・74)** 環濠 3001 溝で囲まれた集落域はもちろん、3 区北半から 1 区に

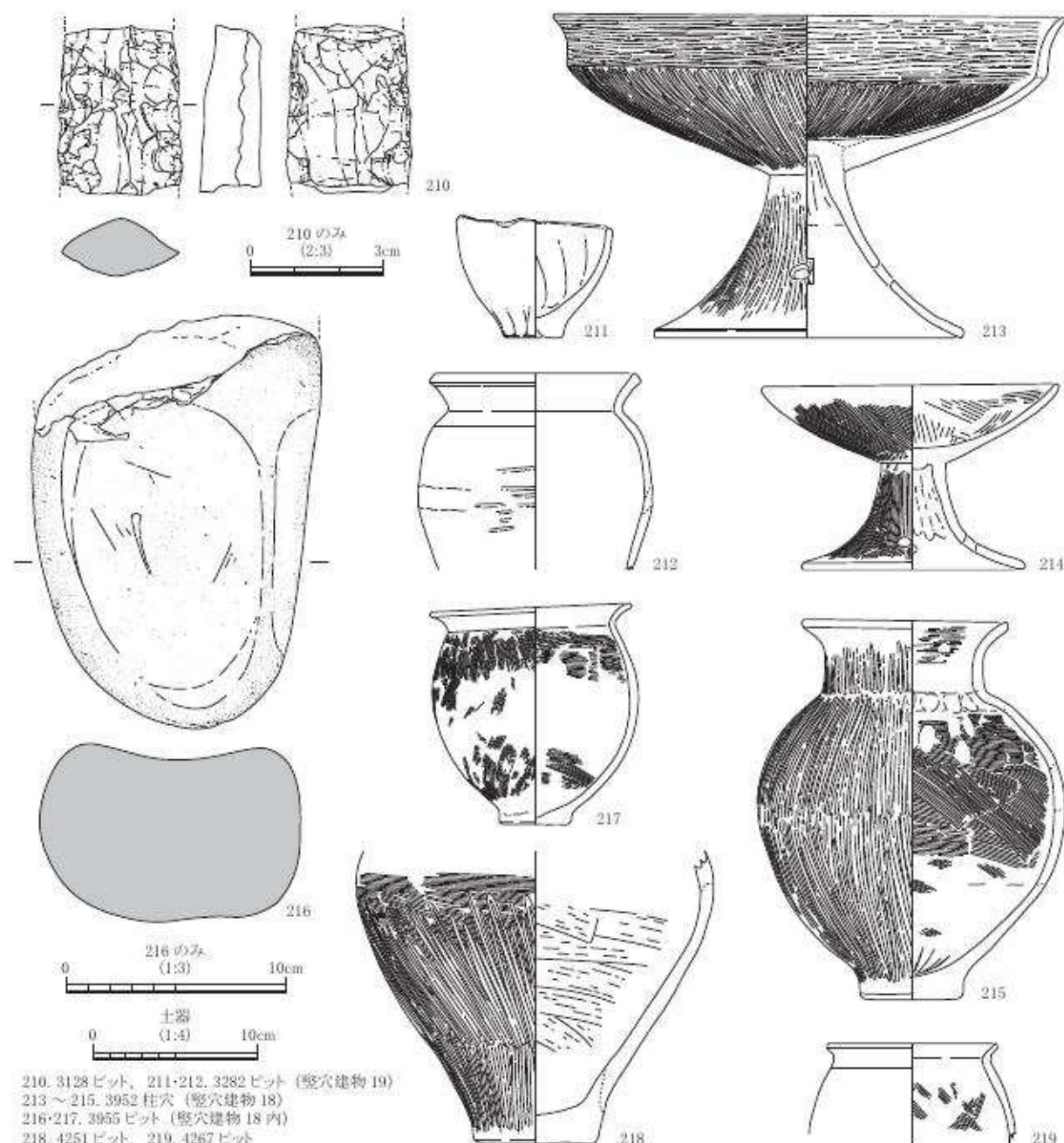


図 73 竪穴建物・ピット出土遺物

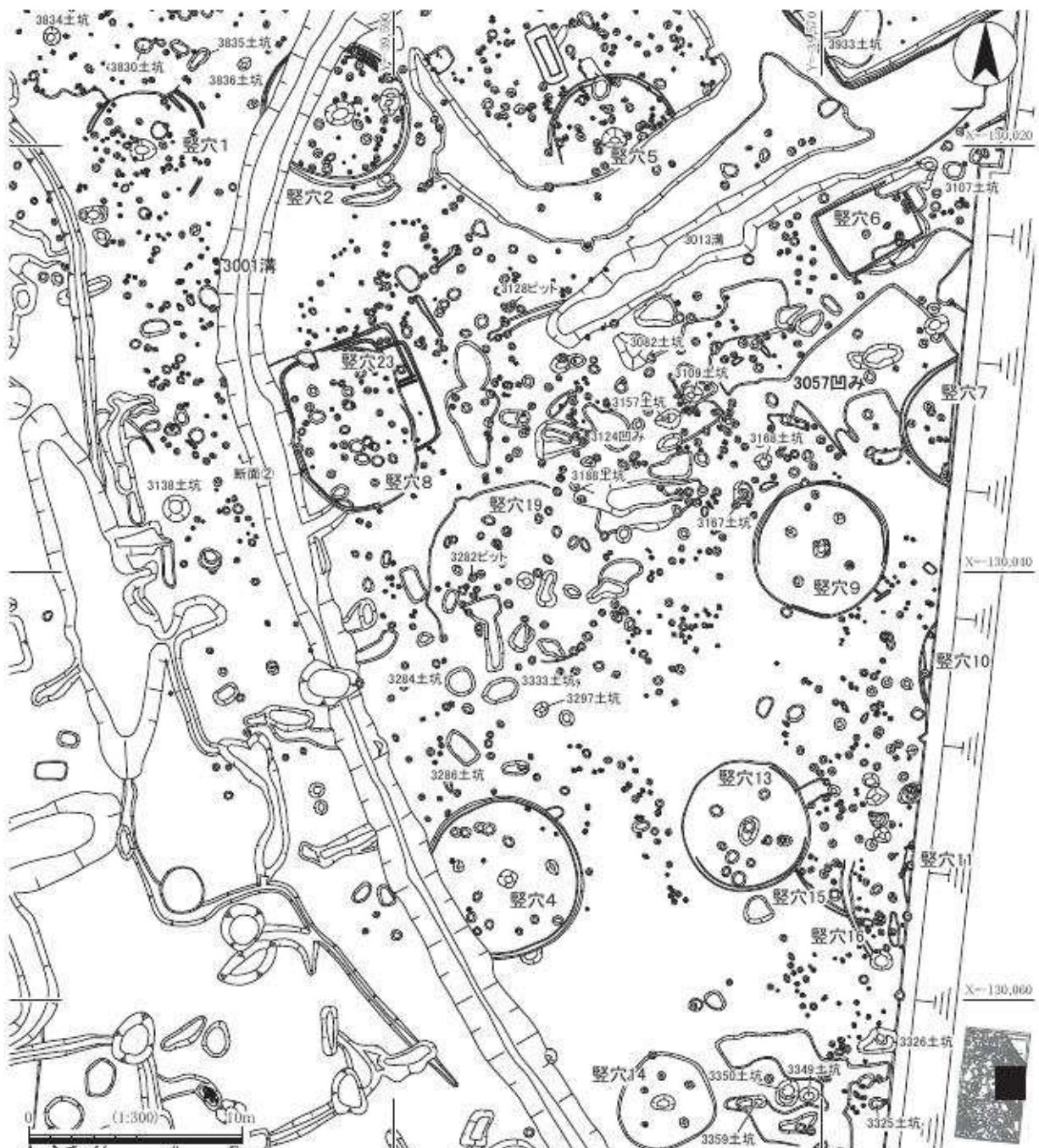


図 74 集落域 4 層下面遺構平面

かけては3001溝の外側でも竪穴建物には伴わないピットが多数広がっている。また2区や6区でも疎らではあるが検出している。集落の周辺で検出したものの中には、倉庫などの掘立柱建物の柱穴が含まれているかもしれないが、ランダムに広がっており、建物として認識できるようなまとまりを見つけることができなかった。

ピットから出土する土器は小片が多いが、図化できたものには、竪穴建物 20 の北や西側に近接する 4251・4267 ピットから出土した壺（218）や甕（219）などがある。218 はⅡ 様式、219 はⅣ 様式のものであり、ピットも一時期のものばかりではないことが分かる。また 3013 溝の西側に近接する 3128 ピットからはサヌカイト製の打製石剣もしくは石槍（210）の身部小片が出土している。肉厚で刃部は鋭く、断面形は菱形を呈する。

**3082 土坑（図 75・79）** 3013 溝の南側に近接する。平面形は径  $1.86 \times 1.55$  m の一部が張り出した隅丸方形で、深さは 0.9 m を測る。2 層に分層でき、上層は土器を多く包含する。

V 様式に属する壺・甕・鉢・高杯・器台（258～273）などが出土した。261 の甕には体部下半に大きな穿孔が見られる。271 は近江・山城系の甕である。

**3107 土坑（図 75）** 壁穴建物 6 の東側に近接する。平面形は径  $0.95 \times 0.8$  m の梢円形で、深さは 0.2 m を測る。埋土は 2 層に分層でき、下層は炭を包含する。

**3109 土坑（図 75）** 3082 土坑の南東側に位置する。平面形は径  $0.92 \times 0.76$  m の梢円形で、深さは 0.45 m を測る。埋土は 2 層に分層でき、下層は炭を包含する。

**3124 凹み（図 74・77）** 壁穴建物 19 の北東側に位置する。平面形は大きな梢円形に小さな方形土坑が合体したような形状である。長さは 2.8 m、幅 1.5 m で、深さは 0.2 m を測る。

IV 様式の把手付鉢（221）や中期前半の甕（222）など時期の異なる遺物が出土している。

**3138 土坑（図 75・77）** 今回の調査で検出した唯一の古墳時代の遺構である。壁穴建物 8 の西側の環濠 3001 溝よりも外側に位置する。平面形は直径 1.3 m の整った円形を呈する。深さ 0.96 m を測る深い井戸状の土坑である。埋土は 3 層に分層でき、上 2 層は炭や焼土・土器を包含する。

布留 1 式の小型丸底壺（223）と吉備型甕（224）が出土した。223 は体部外面がハケ、内面がケズリ調整の山陰系の製作技術である。224 は口縁部を短く上方に拡張する。屈折は鈍い。口縁部外面には明瞭な擬凹線や櫛描沈線は見られず、ごく弱い横方向のハケ目が残る。

**3157 土坑（図 75）** 3109 土坑の南西側に隣接する。平面形は径  $1.06 \times 0.78$  m の卵型で、深さは 0.33 m を測る。埋土は 3 層に分層でき、3 層とも炭や焼土を包含する。

**3167 土坑（図 75）** 壁穴建物 9 の北西側に近接する。平面形は径  $1.1 \times 0.84$  m の隅丸方形気味の梢円形を呈する。深さは 0.57 m で、埋土は 3 層に分層できる。

**3168 土坑（図 75）** 壁穴建物 9 の北西側、3167 土坑の北東側に近接する。平面形は径  $0.85 \times 0.74$  m の歪んだ台形を呈する。深さは 0.3 m で、埋土は 3 層に分層でき、3 層とも炭、あるいは焼土を包含する。

**3188 土坑（図 74・77）** 壁穴建物 19 と 3124 凹みの間に位置する。平面形は  $0.7 \times 0.5$  m の卵型で、深さは 0.33 m を測る。

中期の蓋（225）が出土している。

**3273・3274 土坑（図 66）** 壁穴建物 15 の中央土坑と考えられる 3298・3299 土坑の北側に並ぶ。3273 土坑は径  $0.8 \times 0.65$  m、深さは 0.18 m。3274 土坑は径  $1.08 \times 0.85$  m、深さ 0.45 m を測る。平面形は両者とも歪んだ梢円形で、埋土は炭や焼土小片を含む粗粒砂～細礫混じりの褐灰～黒褐色シルトである。

**3284・3286・3297・3333 土坑（図 74・75・77）** 壁穴建物 4 と 19 との間にまとまる。3284 土坑は径  $1.4 \times 1.3$  m のほぼ円形で、深さは 0.2 m。3286 土坑は長さ 1.8 m、幅 1.0 m の隅丸長方形を呈する。深さは 0.33 m で、埋土は 3 層に分層できる。3297 土坑は径  $0.76 \times 0.61$  m の卵型を呈する。深さは 0.36 m で、埋土は 3 層に分層できる。3333 土坑は径  $1.8 \times 1.1$  m の梢円形で、深さは 0.2 m を測る。

3284 土坑から IV 様式末～V 様式初頭の高杯（226）が、3286 土坑からは II 様式前半の甕（227～229）が、3333 土坑からは II 様式の鉢（231）が出土している。

**3325・3326・3349・3350・3359 土坑（図 74・75・77・写真図版 32）** 壁穴建物 3 北側の、壁穴建

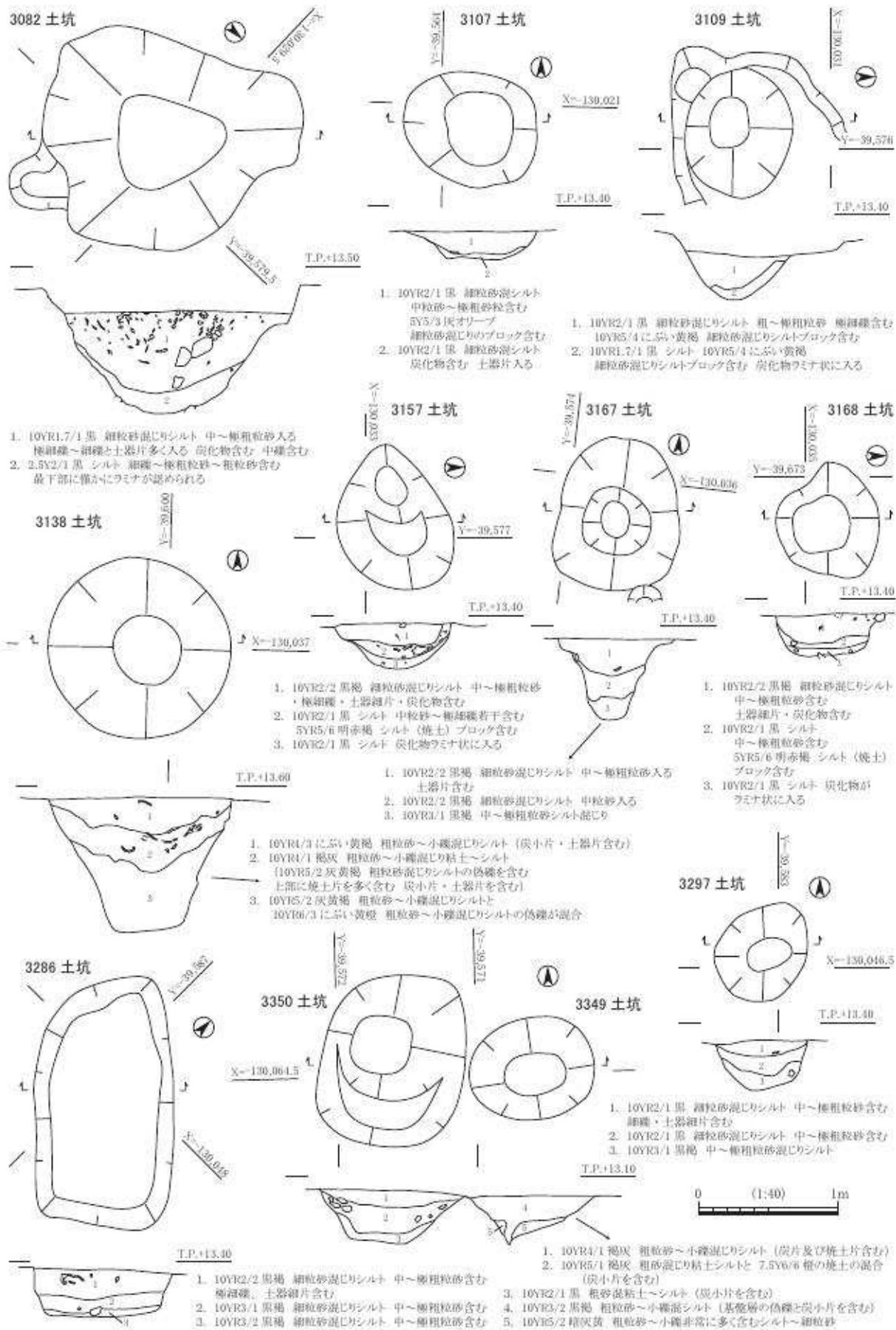


図 75 4層下面土坑平面・断面 (1)

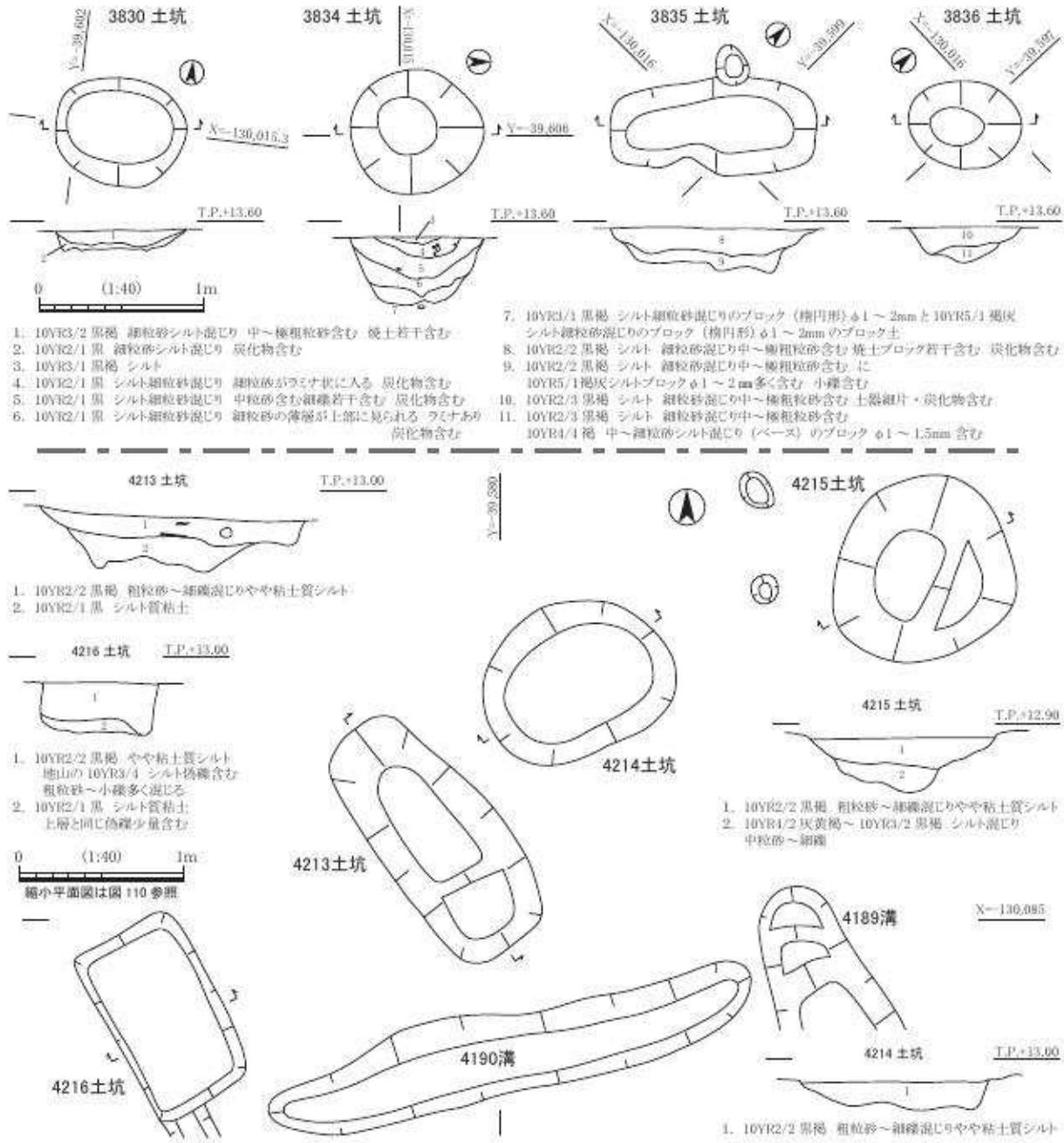


図 76 4層下面土坑平面・断面 (2)

物 14 の東側に並ぶ。3325 土坑は径約  $0.75 \times 0.58$  m の卵形で、深さは 0.16 m。3326 土坑は径  $1.9 \times 1.2$  m の歪んだ台形で、深さは浅い箇所で 0.3 m、もっとも深い箇所で 0.45 m を測る。3349 は径  $0.9 \times 0.73$  m の楕円形で、深さは 0.35 m。3350 土坑は径  $1.27 \times 1.03$  m の隅丸長方形で、深さは 0.38 m。3359 土坑は  $1.45 \times 0.58$  m の楕円形で、深さは東側がやや深く 0.45 m を測る。3349・3350 土坑の埋土には炭や焼土を包含する。

3326 土坑から II 様式の甕 (230) が、3359 土坑から V 様式の器台 (232) や壺 (233) が出土している。233 は体部下方に穿孔が見られる。

3513 土坑(図 97) 4 区南端の周溝墓 8 の墳丘中央に位置する。平面形は径  $2.2 \times 1.9$  m のほぼ円形で、深さは 0.43 m を測る。埋土は黒色のシルト質粘土である。

3524 土坑(図 58) 周溝墓 10 の北側に位置する。平面形は直径約 0.8 m の円形で、深さは 0.26 m を

測る。埋土は下層が粘土質シルト混じりの細粒砂～細礫、上層が細～小礫を多く含む黒褐色のやや粘土質シルトである。

**3545 土坑(図94・97)** 周溝墓1の北辺3502溝内で検出した。周溝内の埋葬施設か。平面形は $1.7 \times 1.0$ mの楕円形で、深さは周溝底から0.55mを測る。埋土は黒～黒褐色の粘土質シルトで、木棺等の痕跡は認められなかった。

**3579 土坑(図77・94・97)** 周溝墓4の周溝南東隅外側に接する。周溝墓構築時に壊されずに幸うじて残った唯一の前期の遺構である。周囲が周溝の影響で浅く広がるが、中心部は径 $0.47 \times 0.42$ mの楕円形に掘り込まれている。深さは0.48mで、その中にI様式末の広口壺(234)を埋納する。埋土は黒色粘土質シルトである。

**3700 土坑(図78・120)** 2区の周溝墓73の墳丘内に位置する。平面形は径 $0.76 \times 0.41$ mの歪んだ楕円形で、深さは0.07mを測る。

II様式の甕(235)が出土した。

**3701 土坑(図126)** 2区の周溝墓59の墳丘内に位置する。平面形は径 $1.11 \times 0.79$ mの楕円形で、深さは0.25mを測る。埋土は2層に分層でき、炭を少量包含する。

**3830・3834・3835・3836 土坑(図76)** 堪穴建物1の北側に並ぶ。3830土坑は径 $0.8 \times 0.65$ mの楕円形で、深さは0.12m。3834土坑は径 $0.81 \times 0.76$ mのほぼ円形で、深さは0.41m。3835土坑は長さ1.25m、幅0.59mの隅丸長方形で、深さは0.27m。3836土坑は径 $0.7 \times 0.53$ mの楕円形で、深さは0.22mを測る。いずれの土坑も埋土に炭や焼土を含んでいる。

**3933 土坑(図78・134)** 周溝墓98の墳丘内南西隅に位置する。周溝や4040墓壙と切り合っており、両者に切られる。周溝墓構築以前の土坑と考えられる。平面形は東西約2.8m、南北3.2mの太いL字状で、深さは0.15mを測る。

II様式の広口壺(236)、台付鉢(237)が出土した。

**3970 土坑(図133)** 周溝墓95の墳丘内で、南辺周溝3920溝と重複し、溝に切られる。3933土坑と同様の周溝墓構築以前の遺構である。平面形は東西5.6m、南北2.6mの不整形な土坑である。埋土は黒色シルトで、上層には遺物を含んでいたが、途中から遺構ではない無遺物の黒色土層となつたため、約0.16mの深さで掘削を中断した。

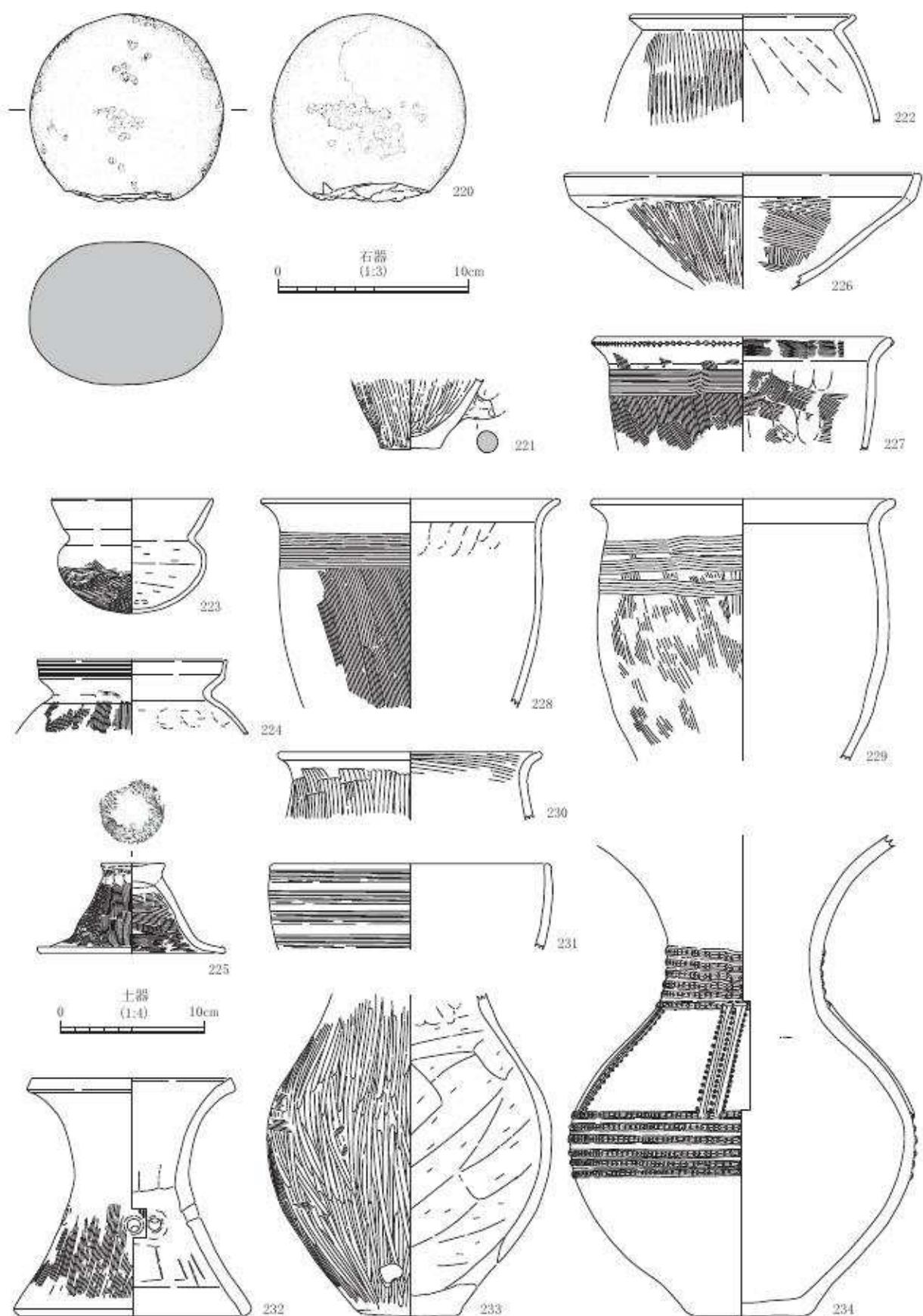
**4029 土坑(図78・134)** 周溝墓97の墳丘内で、西辺周溝3900溝と重複し、溝に切られる。平面形は長さ1.2m以上、幅1.1mの隅丸方形で、深さは0.23mを測る。埋土は単層である。

匙形土製品(256)が出土している。両端が欠損するため全容は不明。柄の断面形は直径 $1.7 \times 1.4$ cmの楕円形を呈する。

**4036 土坑(図122・126)** 周溝墓87の墳丘内に位置する。平面形は長さ2.28m、幅0.55mの長い楕円形で、深さは0.2mを測る。埋土は単層である。

**4045 土坑(図134)** 堪穴建物2の北東側、周溝墓97の周溝が陸橋状に途切れた部分に位置する。平面形は径 $1.33 \times 0.7$ mの楕円形で、深さは0.27mを測る。埋土は黒褐色のシルト混じり細粒砂で、2層に分層できる。

**4170 土坑(図78・144・153)** 5区の北半中央に位置する。周溝墓100の南辺4195溝や周溝墓117東辺の4168溝の埋土上面から検出できる周溝墓廃絶後の遺構である。大型の土坑で、平面形は長辺5.25m、短辺3.1～3.3mの隅丸長方形で呈する。深さは0.35～0.45mと平面規模の割に浅い。下層には



220. 3057 回み、221・222. 3124 回み、223・224. 3138 土坑、225. 3188 土坑、226. 3284 土坑  
227～229. 3286 土坑、230. 3326 土坑、231. 3333 土坑、232・233. 3359 土坑、234. 3579 土坑

図 77 4 層下面土坑・凹み出土遺物

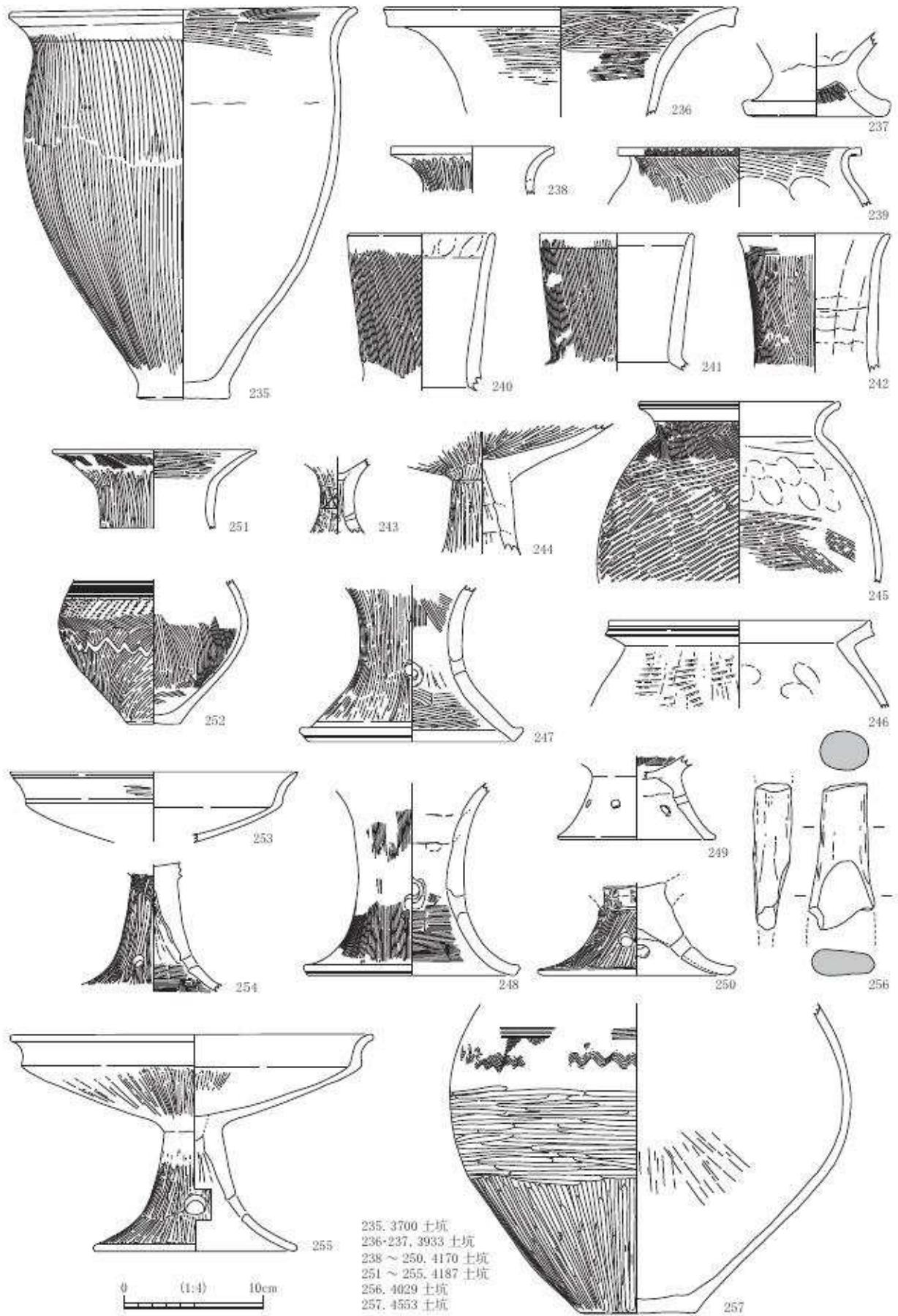


図 78 4層下面土坑出土遺物

黄灰色の粘土や植物遺体を多く含む薄層が見られる。

出土した土器（238～250）は壺・甕・鉢・高杯・器台などで、239の甕のようなⅡ様式のものも含まれているが僅かで、ほとんどがⅤ様式前半のものであった。

**4187 土坑**（図78・80）5区の竪穴建物22の西側で、環濠3001溝と切り合う。3001溝の埋土上面から掘り込まれていることが確認できた唯一の遺構である。平面形は径0.88×0.7mの楕円形で、深さは0.5mを測る。埋土は黒色の粘土質シルトや粘土などで、4層に分層できた。

広口壺（251）、近江型甕（252）、高杯（253～255）などⅤ様式前半の土器が出土しており、3001溝の埋没時期を知る上で非常に重要な遺構である。

**4203・4204 土坑**（図153）4170土坑の南西側に近接する。4203土坑は径1.9×1.3mの楕円形で、深さは0.35m。4204土坑は1.55×0.9mの歪んだ楕円形で、深さは0.3mを測る。両者とも埋土が同じで、切り合い関係の判断が難しかったが、平面では4204土坑が切っているように観察できた。

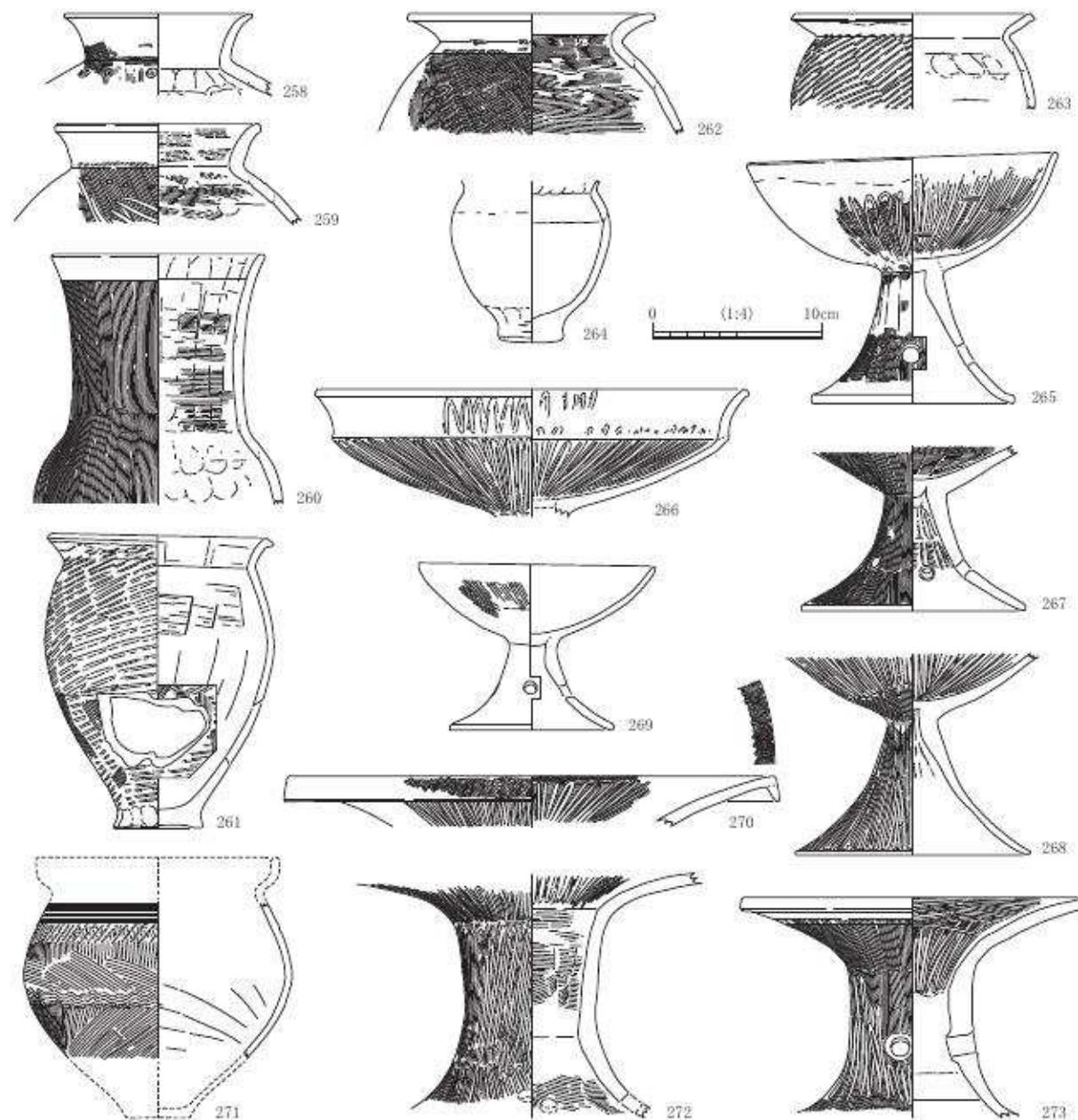


図79 3082土坑出土遺物

**4208 土坑（図 152）** 周溝墓 119 の北辺周溝 4184 溝の埋土上面から掘り込まれた土坑である。平面形は径  $1.12 \times 0.78$  m の隅丸長方形で、深さは 0.25 m を測る。埋土は 3 層に分層できる。

**4213～4216 土坑（図 76）** 周溝墓 121 の北側に並ぶ。4213 土坑は長さ 1.6 m、幅 0.75 m の長い隅丸長方形で、深さは 0.33 m。4214 土坑は径  $1.14 \times 0.94$  m の楕円形で、深さは 0.17 m。4215 土坑は径  $1.14 \times 1.08$  m のほぼ円形で、深さは 0.33 m。4216 土坑は周溝墓 121 の西辺周溝 4191 溝の埋土上面で検出できる土坑である。平面形は長さ 1.15 m、幅 0.7 m の整った長方形で、深さは 0.31 m を測る。埋土は 4214 土坑が単層、そのほかは 2 層に分層できる。

**4217 土坑（図 71）** 竪穴建物 20 の北側に位置する。竪穴建物 20 の周溝と切り合い周溝を切る。平面形は  $1.6 \times 1.0$  m の楕円形で、深さは 0.17～0.25 m を測る。

**4218 土坑（図 71）** 竪穴建物 20 の南西側に位置する。平面形は径  $0.9 \times 0.75$  m の歪んだ隅丸方形で、深さは 0.5 m を測る。埋土は地山の砂質シルト偽礫を含む粗粒砂～小礫混じりの黒色やや粘土質シルトである。

**4289 土坑（図 98・99）** 5 区と 6 区の境、周溝墓 11 の南側に位置する。平面形は径  $1.5 \times 0.9$  m の楕円形で、深さは 0.36 m を測る。埋土は 2 層に分層できる。

**4290 土坑（図 153）** 5 区北東隅、周溝墓 120 墳丘内に位置する。平面形は径  $0.72 \times 0.57$  m の隅丸方形を呈し、深さは 0.14 m を測る。埋土は 2 層に分層できる。

**4539 土坑（図 163・166）** 周溝墓 150 の南東側で、周溝墓 159 との間に位置する。平面形は径  $1.9 \times 1.2$  m の楕円形を呈する。深さは 0.3 m で、埋土は 2 層に分層できる。

**4543 土坑（図 98・99）** 5 区北端、周溝墓 11 の西側に位置する。平面形は径  $1.7 \times 1.35$  m の隅丸方形気味の楕円形を呈する。深さは 0.38 m で、埋土は 2 層に分層できる。

**4547 土坑（図 98・99）** 周溝墓 159 の南東側に位置する。大型の土坑で平面形は長さ 2.98 m、幅 1.68 m の隅丸長方形を呈する。深さは 0.6～0.67 m で、底面は水平である。

**4550 土坑（図 97）** 6 区の北西隅、3510 溝の肩部に位置する。土坑というよりも非常に浅い窪みに土器が溜まったような遺構であった。平面形は径  $0.6 \times 0.54$  m のほぼ円形を呈する。

出土した土器はⅡ様式の壺片であったが、細片化しており復原・図化できなかった。

**4551 土坑（図 163・166）** 周溝墓 151 の墳丘中央に位置する。平面形は長さ 2.0 m、幅約 1.5 m の歪んだ隅丸方形を呈する。深さは 0.38 m で、埋土は 4 層に分層できる。位置的には周溝墓 151 の埋葬施設と考えられるが、壁の立ち上がりは緩やかで底も丸い。

**4553 土坑（図 78・99）** 6 区の北端、周溝墓 11 の南辺周溝付近に位置する。中期後半の壺（257）を埋設しており、土器棺であった可能性が高いが、上部が削られて失われており、底部しか残っていない。遺構の平面形は土器がちょうど納まる程度の直径  $0.4 \times 0.35$  m の円形で、深さは 0.15 m を測る。埋土は黒褐色のシルト混じり細粒砂である。

**4569 土坑（図 161）** 周溝墓 35・135 上に位置する。4568 墓壙と重複し、墓壙に切られる。平面形は径  $0.59 \times 0.41$  m の一部張り出した隅丸方形で、深さは 0.17 m を測る。埋土は黒褐色のやや粘土質のシルトである。

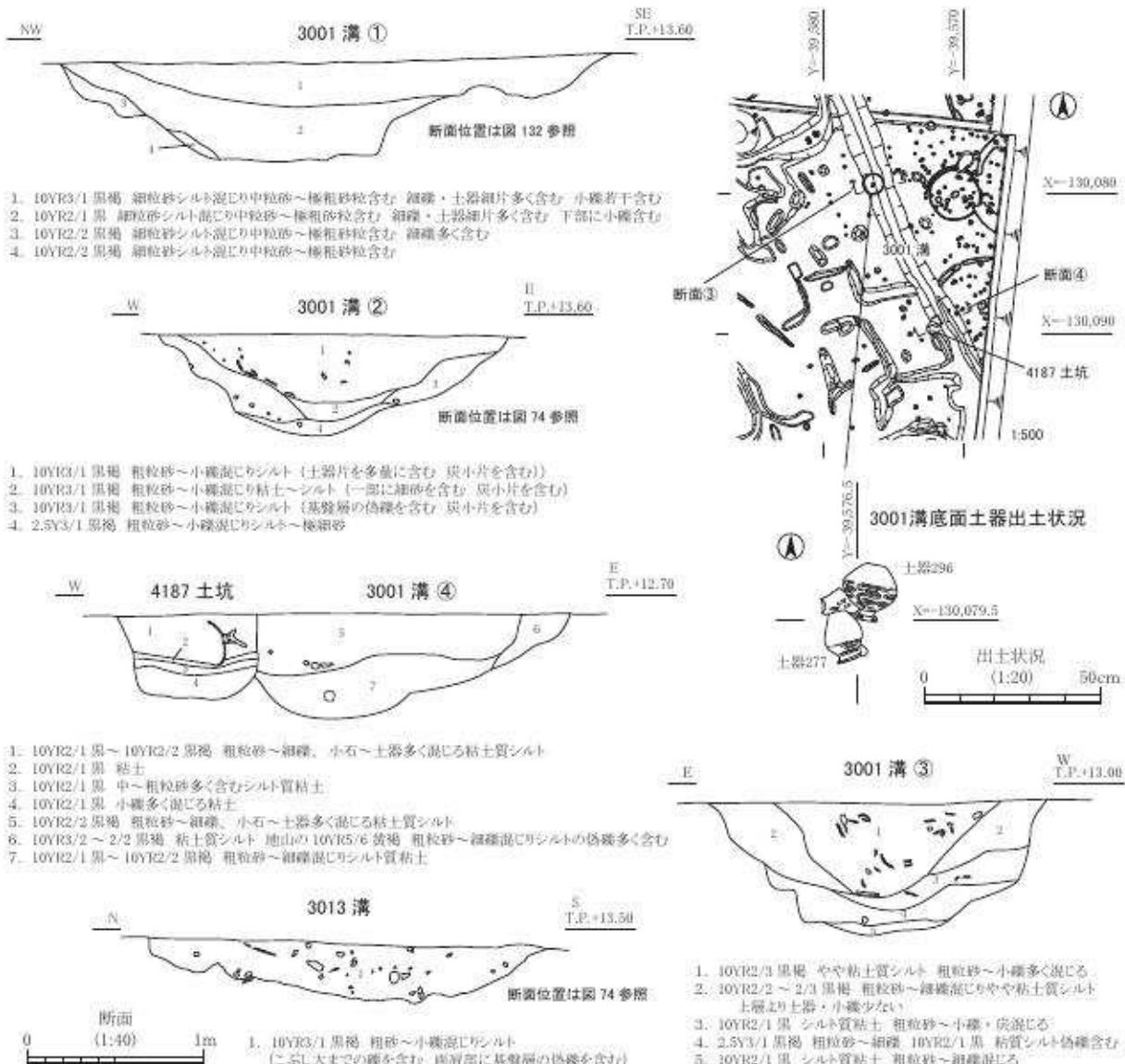


図 80 3001・3013 溝・4187 土坑断面及び土器出土状況

**3001 溝 (図 80 ~ 88・111)** 調査区の東半に位置する。集落域と墓域とを画する大溝で、これを境に東側が集落域、西側が方形周溝墓の広がる墓域となる。弧を描くように調査区の東側に向かって続いており、集落域を囲む環濠と考えられる。ただし溝の北端は、後世に形成された落ち込みによって削られており残っていない。溝の幅は約 2.0 ~ 2.5 m、広い箇所でも 2.7 m で、深さは北方が 0.5 m 前後、南方が約 0.7 ~ 1.0 m を測る。数箇所で竪穴建物と重複しており、竪穴建物を切る。北方では周溝墓 97 の北辺周溝と切り合うが、先後関係は不明瞭。断面の観察では、少なくとも 3001 溝が周溝を切っておらず、3001 溝と周溝が同時に機能しており、最終埋没も同時であったような状況を示していた。また南方では周溝墓 30 の東辺周溝 3363 溝と僅かに重複しており、3001 溝が周溝を切っている状況が断面で観察できた。埋没時期については 5 区で検出した 4187 土坑が手掛けりとなる。この土坑は 3001 溝の埋土上面から掘り込まれており、V 様式前半の土器が含まれていた。つまりこの土坑が掘られる時点では既に完全に埋まっていたことになる。開削時期については、出土遺物の時期をどう解釈するかにもよるが、竪穴建物や土坑・ピット等の遺構を破壊している点、特に IV 様式の遺構と考えられる竪穴建物 4 を切っていることや、上記のような周溝墓との切り合い関係から、IV 様式の中で開削されたと考え

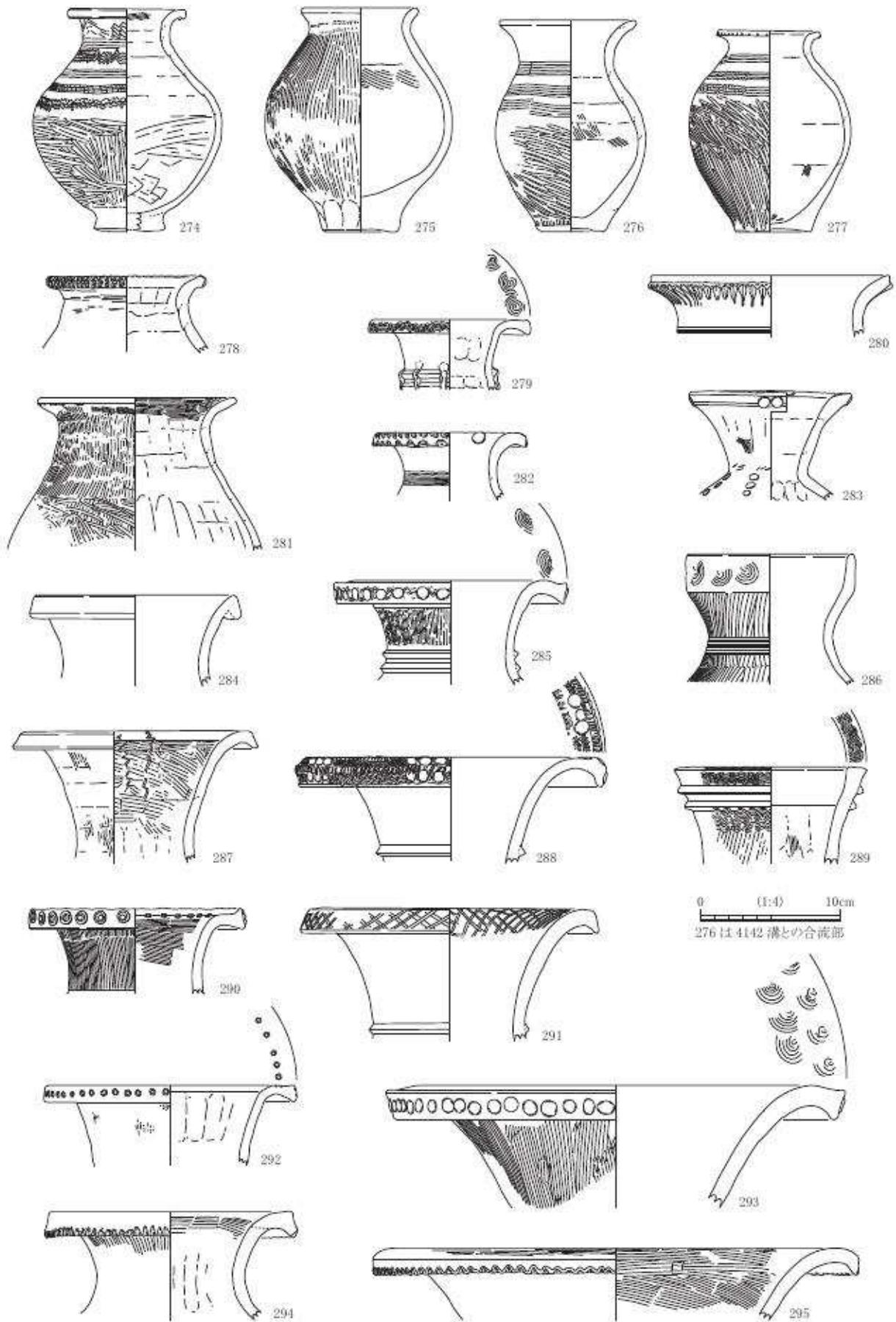


図 81 3001 溝出土遺物 (1)

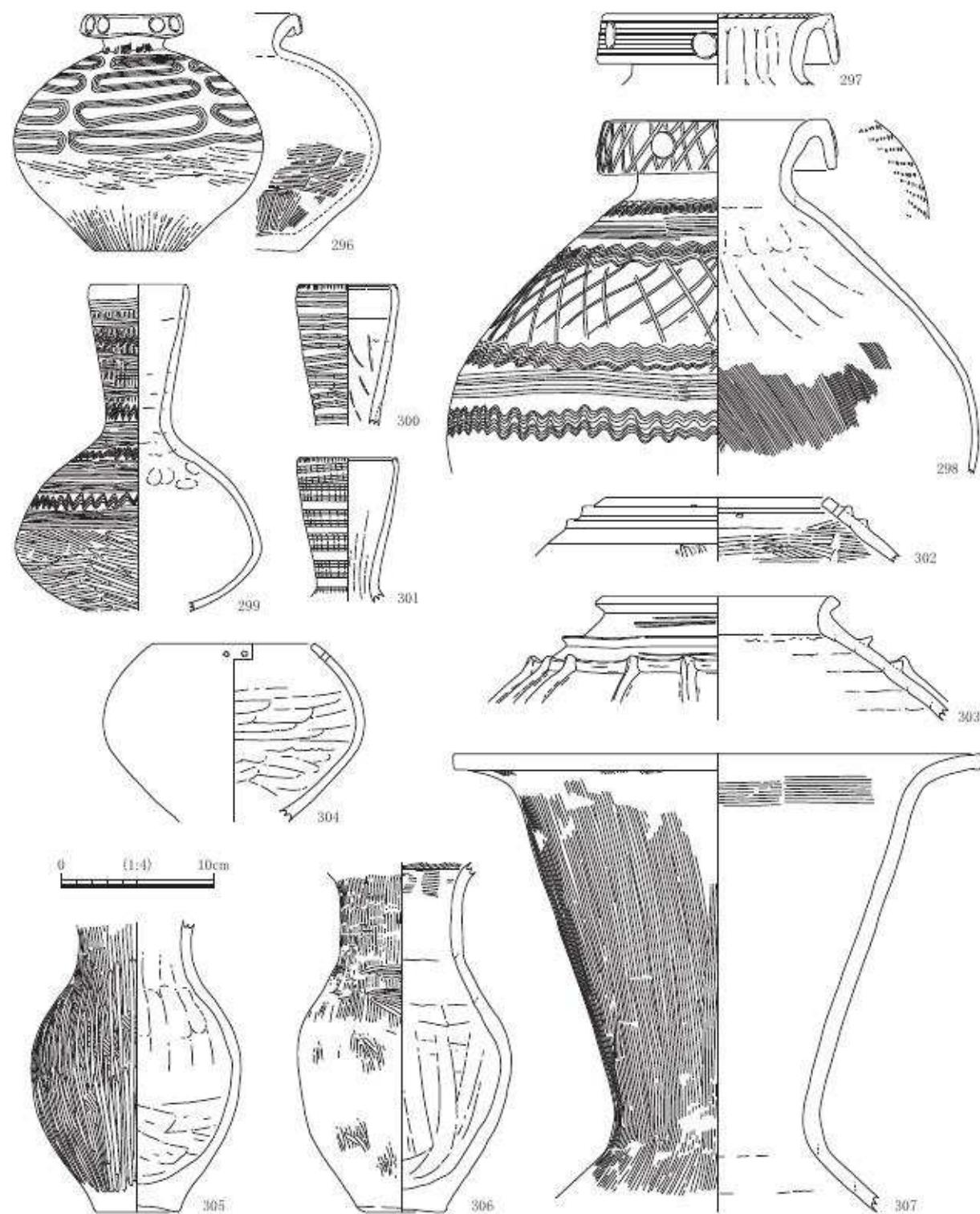


図82 3001溝出土遺物(2)

ている。上層には粗粒砂～小礫が混じるシルトや粘土質シルトが堆積しており、それには多くの遺物が包含されていた。

溝からは広口壺・細頸壺・長頸壺・短頸壺・無頸壺・甕蓋・甕・鉢・台付鉢・水差・高杯・台形土器・ミニチュア土器(274～360)などの土器のほか、石製品(361～367)や銅鐸形土製品(368)など多種多様な遺物が多数出土した。その時期もまちまちで、II・III様式のものからIV・V様式初頭のものまで時期幅がある。

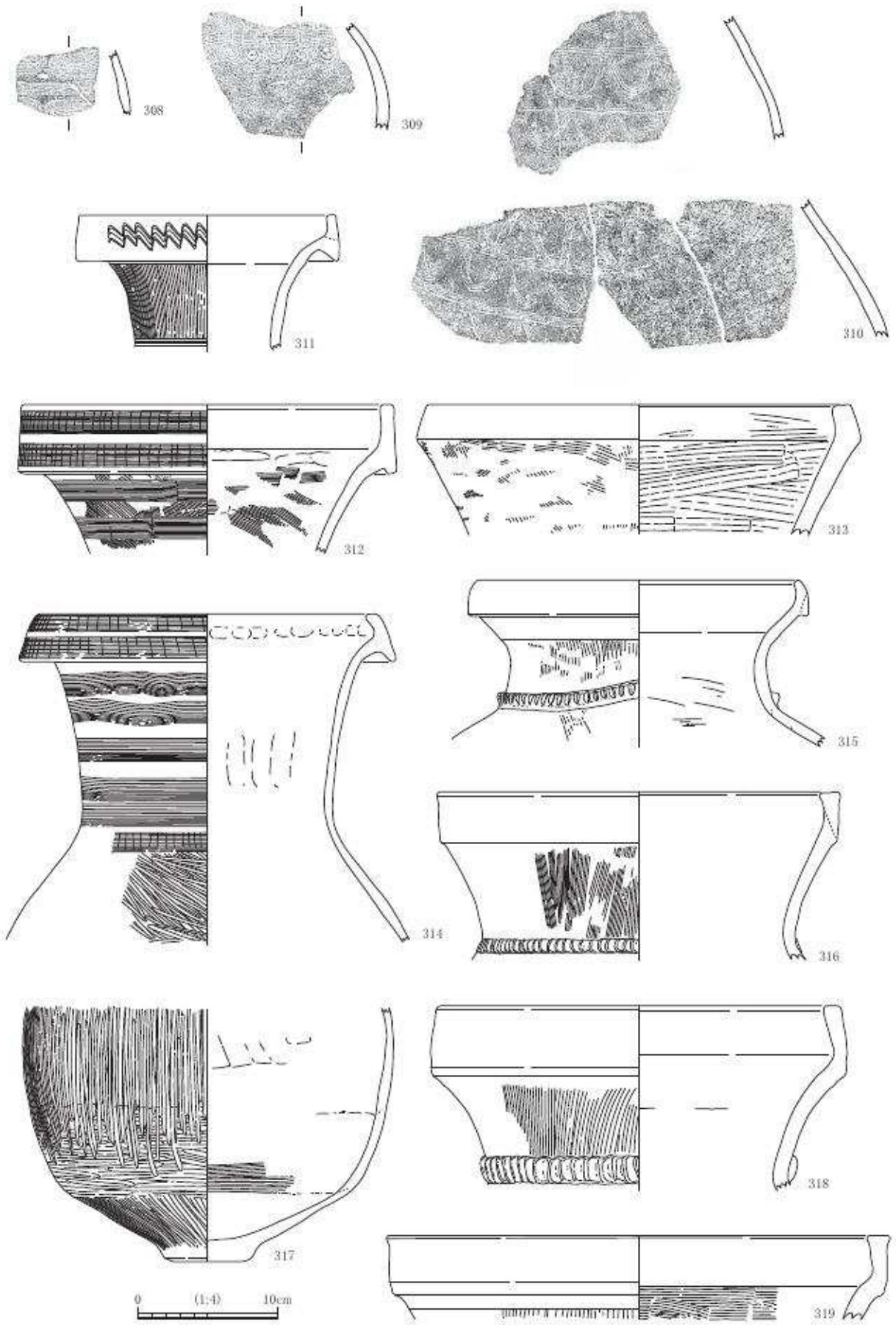


図 83 3001 溝出土遺物（3）

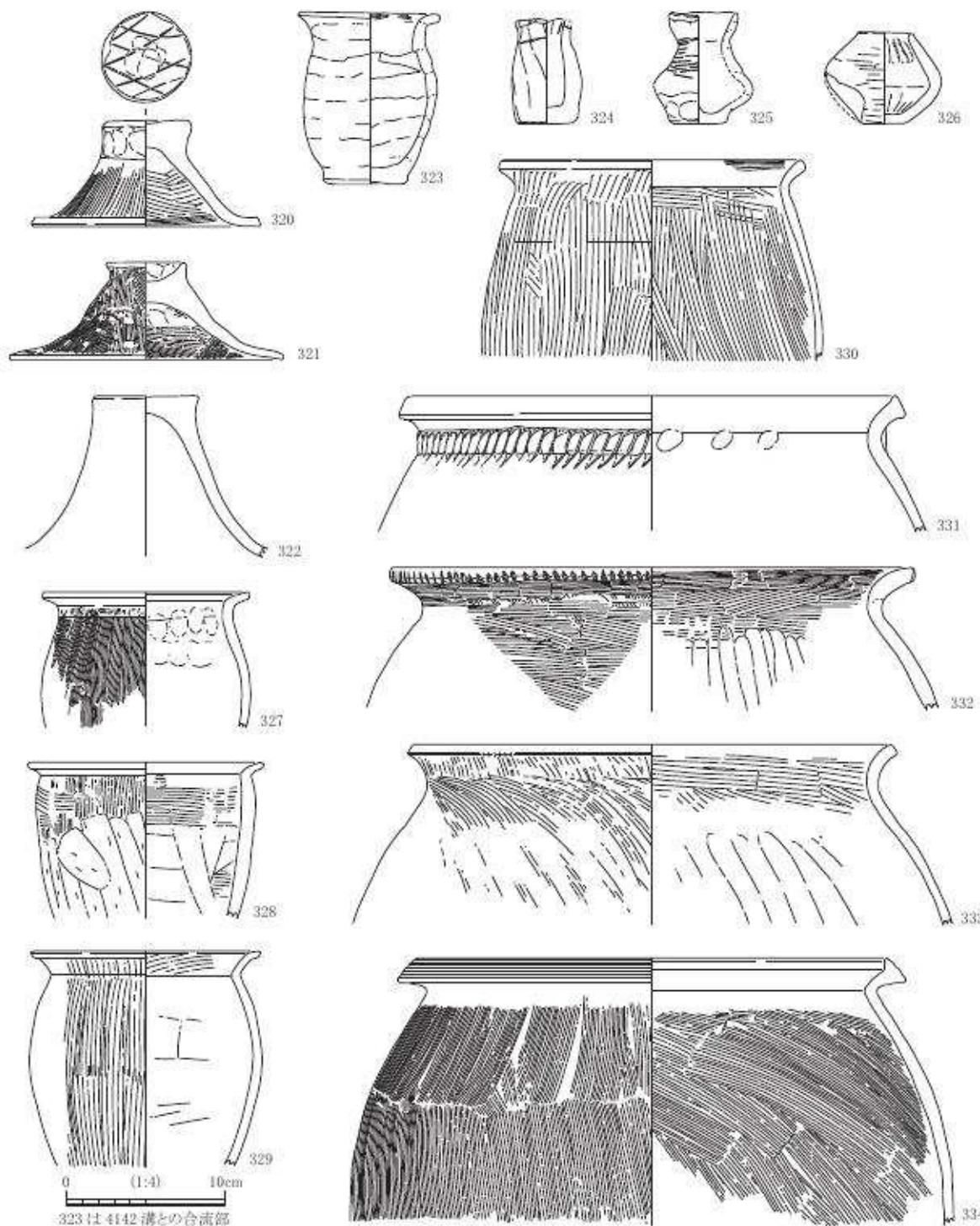


図 84 3001 溝出土遺物 (4)

277 は溝底から完形の状態で出土した広口壺である。口縁端部下端にキザミを入れ、肩部に幅の狭い櫛描直線紋 1 帯と波状紋 2 帯を描く。ただし波状紋は上下の振れ幅が狭いため、簾状紋風の施文となっている。形態や紋様から II 様式の所産と考えているが、これと並んで IV 様式の細頸壺 (296) が出土している (図 80、写真図版 36-4) ことから、その所属時期が IV 様式まで下るのではないかという意見もある。296 も完形品で、口縁端面に 2 個一対の円形浮紋を四方に付し、体部上半は 4 段 5 連の複合縦型流水紋で飾る。この土器が溝の底から、それも完形の状態で出土したことは、溝の開削時期を考える上で非常に重要で、これによって IV 様式の段階ではほとんど埋まることなく機能していた、つまりこの

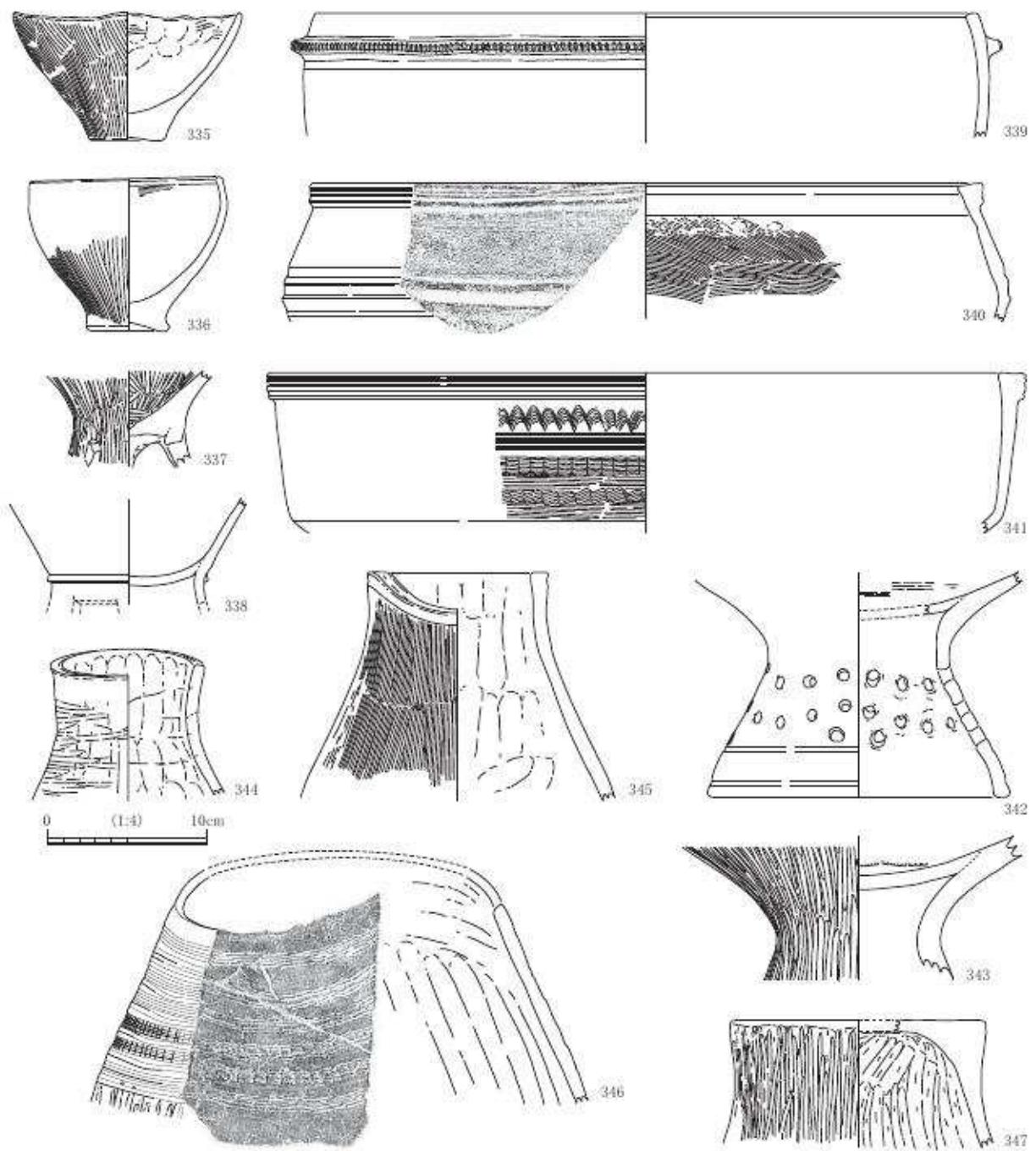


図 85 3001 溝出土遺物 (5)

頃に開削されたのではないかと考えている。

279はⅢ様式後半の広口壺。口縁部上面に櫛描同心円紋、端面に波状紋を描き、頸部には断面三角形の貼付突带上に縦位の棒状浮紋を付す。284は生駒山西麓産胎土の広口壺。口縁部は下方から粘土を充填し断面三角形とするV様式初頭の特徴を示す。286はやや特異な形の口縁を呈する中期前半の細頸壺で、頸部は粗いハケの後櫛描直線紋、口縁部外側には半月状の扇形紋を施す。287はⅢ様式前半の広口壺。内面にはハケ後に縦位の櫛描波状紋2帯を対面に一対（計4帯）描く。289はⅢ様式前半の長頸壺で、口縁部直下外側に断面三角形の突帶を2条めぐらした後に、櫛描波状紋を3帯施す。290はV様式の特徴である竹管円形浮紋を付す広口壺で、口縁部内面にも竹管紋を押す。299～301はⅢ様式初頭の細頸壺。299は頸部から体部上半にかけて櫛描直線紋5帯と波状紋4帯を交互に描き、それぞれの間

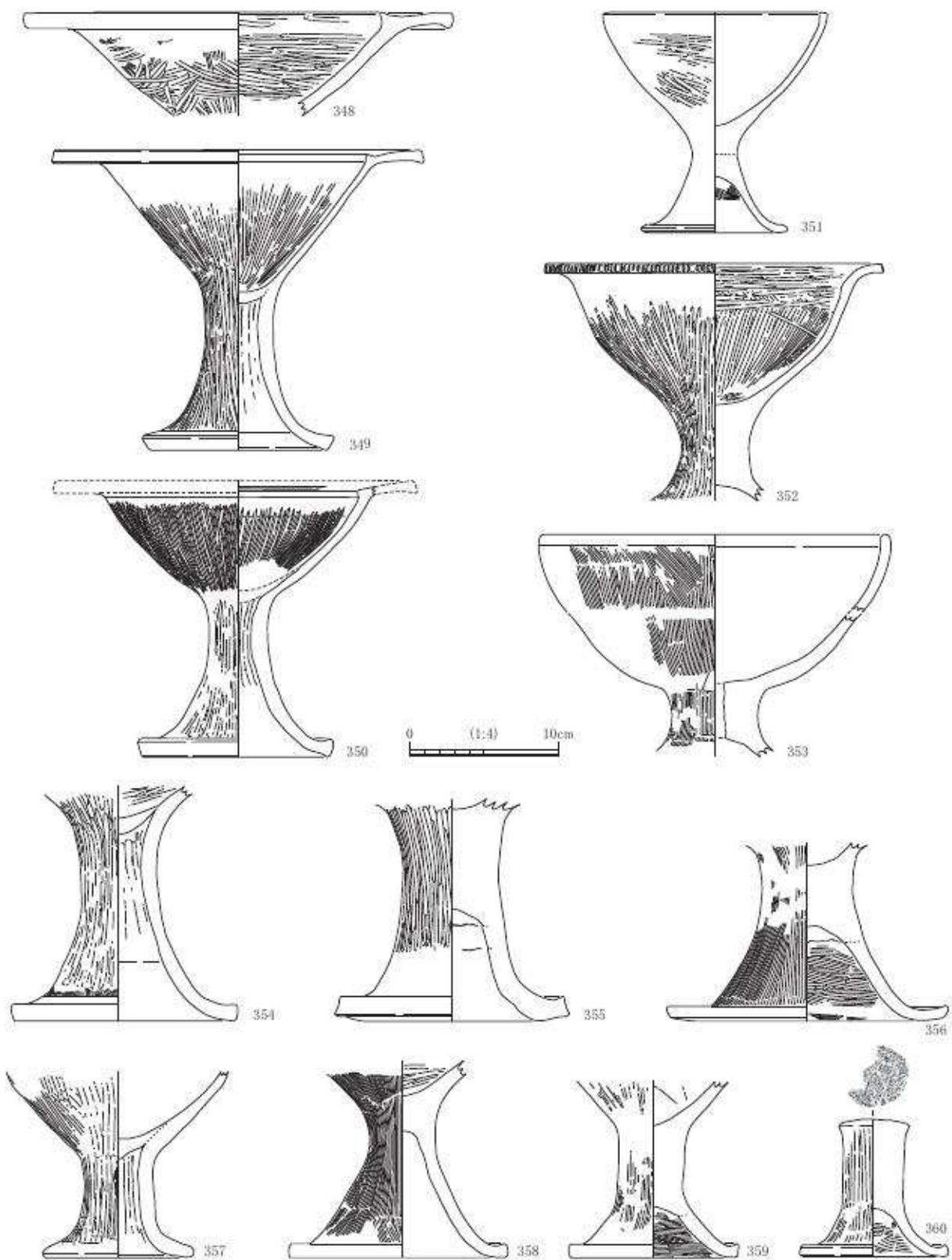


図 86 3001 溝出土遺物 (6)

にミガキを施す。300は口縁端部にキザミを入れ、頸部に複合櫛による直線紋を7帯引く。直線紋は簾状紋風に施文途中で止める箇所が見られる。301は簾状紋6帯を刻むが、紋様の中心が不明瞭で、複合櫛による施文のように見える。303は東海からの搬入品と考えられる無頸壺である。外面には被籠状突帶と呼ばれる横位と縦位の突帶を付し、横位突帶間にミガキを施す。V様式頃のものと考えてい

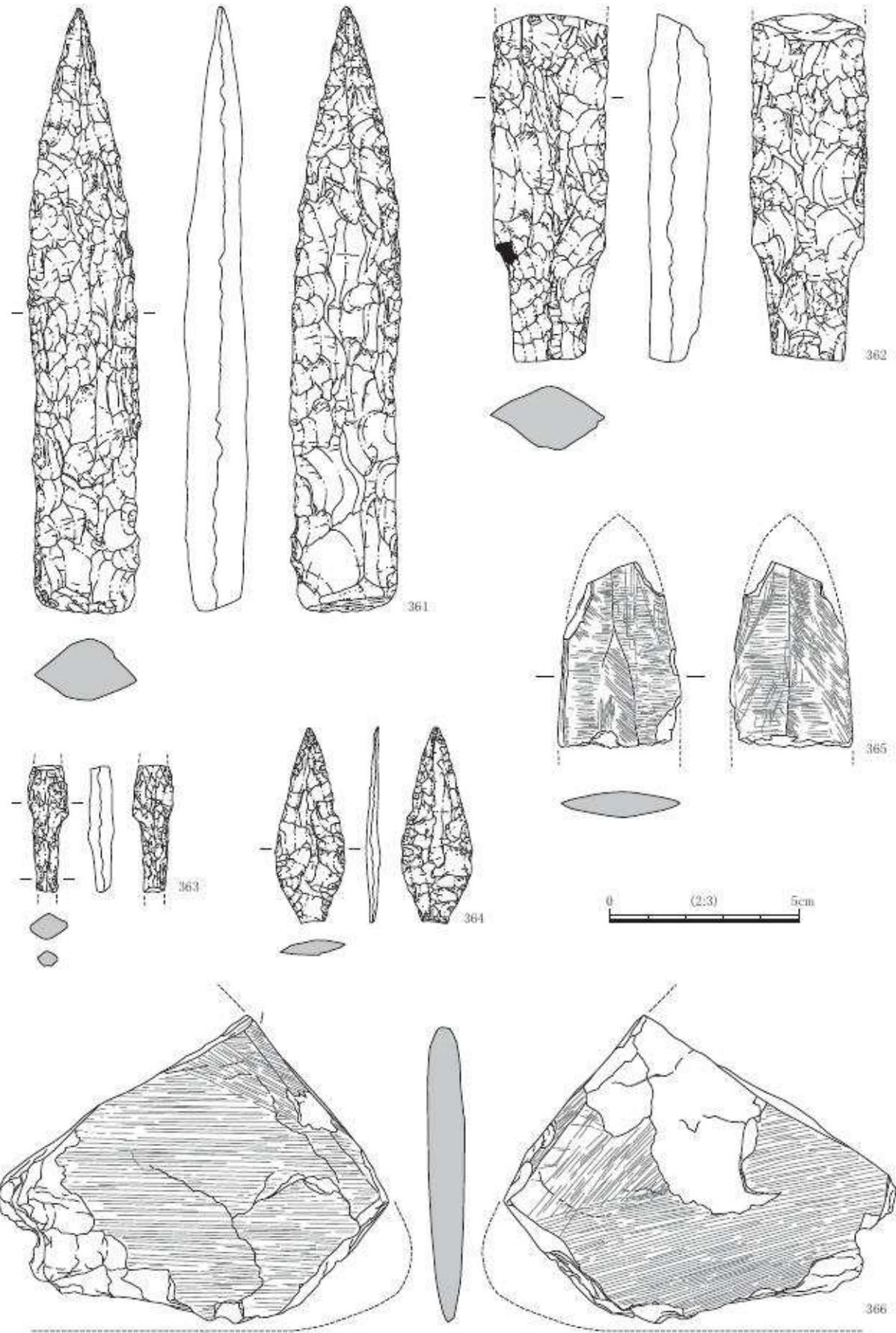


図 87 3001 溝出土遺物 (7)

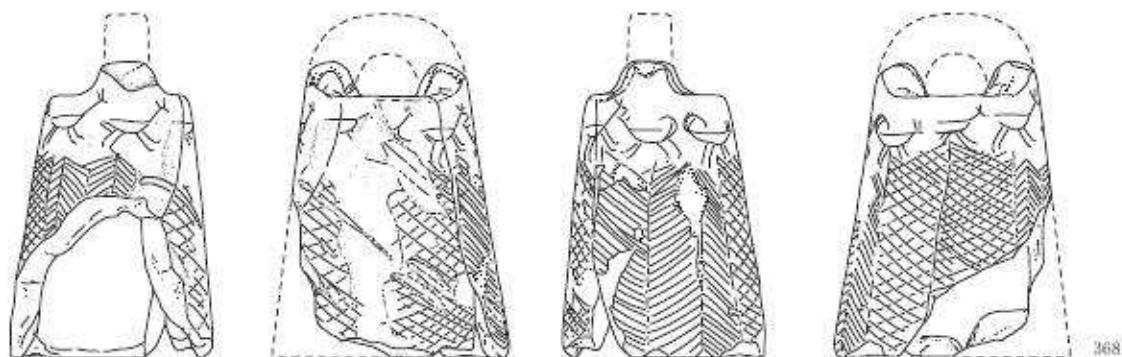
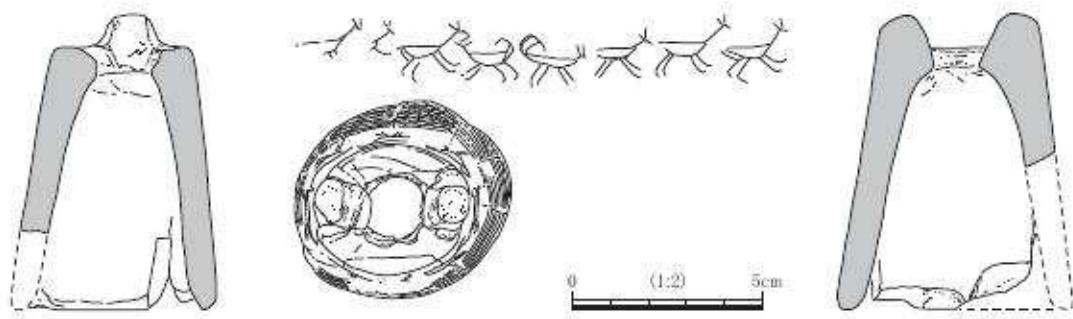
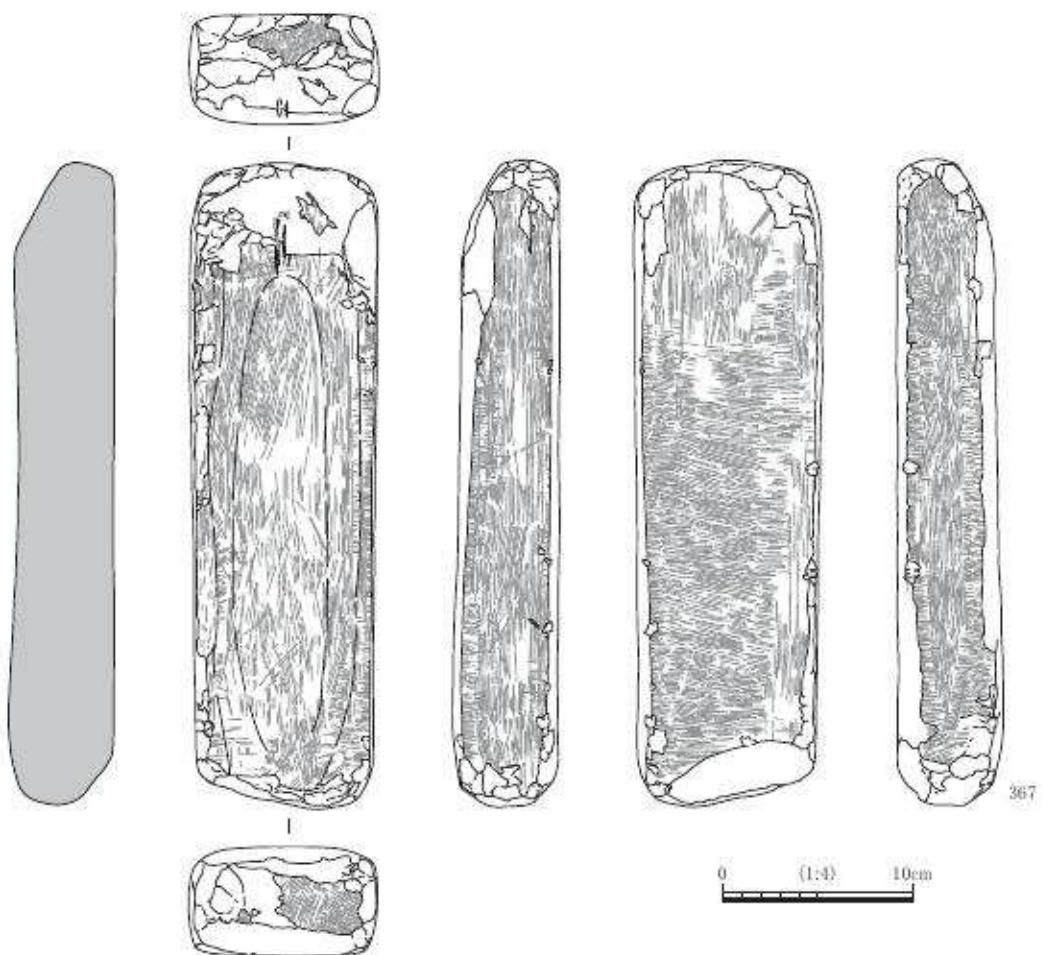


図 88 3001 溝出土遺物 (8)

る。307はV様式初頭の大型の長頸壺である。312・314・317はⅢ様式後半からⅣ様式の生駒山西麓産胎土の広口壺で、古い順に314—312—317である。312・314は有段口縁で、外面に2帯の簾状紋を施す。頸部は直線紋で、314は頸部最下端にも簾状紋1帯を施す。320は中期の甕蓋で、天井部外面にヘラ描の斜格子紋を刻む。338は中期後半の台付鉢。脚部との接合部外面に断面三角形の突帯をめぐらし、脚部には方形の透孔を開ける。瀬戸内の影響が考えられる。360は高杯の未成品か。上端は杯部と分離した破面ではなく、木葉紋が残る。344～346は摺津型の水差である。346は櫛描直線紋4帯と簾状紋2帯を引き、それぞれの間に1～2条のミガキを施す。

石製品としては打製石劍もしくは石槍（361・362）、石錐（363）、打製石鎌（364）、磨製石劍（365）、大型石庖丁（366）、砥石（367）などが出土している。361～364はサヌカイト製。361は身部中央が肉厚で刃部は鋭く、断面形は菱形を呈する。基部端面には自然面が残る。362は下半に闇を作り出す。身部中央は肉厚で刃部は鋭く、断面形は菱形を呈する。363は棒状で頭部と錐部の境を作る。364は凸基式。365は泥質片岩製。先端部の破片で、中央に鎌が認められ、鋭い刃部をもつ。366は泥質片岩製。破片のため全容は不明。背部に面をもつ。367は凝灰岩製の大型の柱状砥石。側面も多少使用されているが、上面の使用が主で僅かに窪む。下面是未使用。鉄器用と思われる。

このほか掲載していないが、被熱痕跡のある細粒砂岩製の砥石片が2点と三波川帶の泥質片岩、いわゆる結晶片岩の小片が出土している。後者は長さ約12cm、幅約3cm、厚さ約1cmを測る。

土製品としては銅鐸形土製品（368）が出土している。実際には4層上面で検出した343ピットから出土したものであるが、その場所はちょうどこの3001溝の真上に位置していた（図14）。ピットを掘削する際、その埋土と下面の溝埋土とを区別できず、溝の埋土まで深く掘り過ぎ、3001溝に包含している遺物を取り上げてしまった可能性が非常に高い。実際に343ピットの底は周辺のピットよりも0.5m程深くまで掘り下がっていた。したがって、この銅鐸形土製品は上層の遺構に伴うものではなく、3001溝に伴う遺物として扱うこととする。

鉢と身の側面裾部が大きく欠損しているが、全容を復原できる資料である。鐸身高は6.9cmで、その上に欠損した鉢の基部が高さ0.9cmだけ突出する。これを復原すると総高は9cm強ほどのものとなる。鉢の断面形は角がとれた方形であるが、おそらく欠損している上部では円形になっていたと思われる。正面の幅は裾部で6.2cmに復原でき、身頂部（舞部）で4.5cm、側面の幅（厚み）は裾部で5.3cmに復原でき、身頂部（舞部）で3.6cmを測る。鐸身横断面の形はやや丸味のある梢円形で、正面観は実際の銅鐸によく似たバランスである。器壁の厚みは約0.7～0.8cmを測る。

舞を表現した盛り上がりではなく、裾部の内面突帯もない。身には型持孔を模した孔はないが、舞の中央には直径1.3×1.6cmの円孔が開く。鉢を接合する際の粘土がこの円孔の縁にかかっていることから、当初からほぼ現状と同規模の孔が開いていたものと考えられる。実際の銅鐸同様に舞にも型持孔を表現するものは多いが、型持孔にしてはやや大きく、型持孔を意識して表現したものなのかは疑問である。

身の全面には鋭利な工具による非常に細い線刻紋様がある。針のような細い工具が想定できるが、その場合、粘土を引っ張った際の滓が線の両肩部や終点に残りそうだが、その状況はまったくなく、取り除いた痕跡もない。カッターの刃のような鋭い刃物で描いた可能性が高いのではないかと考えている。

紋様の最大の特徴は、身上部を一周するように描かれた鹿の表現である。8頭が描かれており、そのうち7頭は右向きで1頭のみ左向きとする。胸部は下向きの弓形に背部と腹部を描き、その片方の端から続いた1本の線を頸部とし、その先端に頭部と2本の角（あるいは耳か）を短い線で表現する。枝角

の表現は見られない。脚の先は屈曲させ、8頭中2頭には、大きく跳ね返ったように誇張された尻尾も描く。単純ではあるが丁寧に描かれている。

この鹿の下方には、斜格子紋と平行斜線紋（綾杉紋）の縦位紋様帶で構成された線刻が全面にめぐる。裾部には無紋帶ではなく、紋様は裾下端にまで達する。ここでは欠損の少ない側をA面、その裏側をB面とするが、その両面にはそれぞれ幅の広い斜格子紋帶を2区画ずつの計4区画描き、本来鰐が付く側面には幅の狭い平行斜線紋帶を計7区画配置する。A面に向かって右側面は、右下がりの斜線紋帶2区画と、左下がりの斜線紋帶1区画を交互に計3区画配置しており、別の見方をすれば綾杉紋1帶と、右下がりの斜線紋1帶という紋様構成となっている。これに対しA面に向かって左側面は、割り付けの間違えを修正するかのように狭い紋様帶を詰め込み、無理矢理4区画の紋様帶としている。斜線紋が交互に施されており、いわゆる綾杉紋が2帶という紋様構成となっている。おそらく、鰐を盛り上げる代わりに、斜格子紋とは異なる平行斜線紋（綾杉紋）をあえて描くことにより、鰐を表現したものと考えられる。これらの紋様は、縦横帶に斜格子紋が多用される袈裟襴紋銅鐸の影響が強いのではないかと考えている。

以上の身に描かれた紋様の大まかな線刻順は、①上部に鹿を8頭配置する。→②鹿の下方に縦線を11本引き、11区画の縦位紋様帶をつくる。→③斜格子紋・平行斜線紋（綾杉紋）を施す。の順である。①の鹿については、一見一連の線のようにつながって見える胸部と頸部の線が、実際には別々に描かれたものであり、その先後関係は唯一左向きの1頭から、胸部背面→頸部→頭部の順であったことが観察できた。また数頭から、腹部の線の後に脚を描いていることも観察できたが、それ以上の情報は得られなかった。③の斜格子紋・平行斜線紋（綾杉紋）については、向かって右側の紋様帶から左の紋様帶へと描いていたこと、また斜格子紋については、どれも左下がりの線をすべて描き終えた後に、右下がりの線を重ねていることが線の切り合いから判明するが、どの紋様帶から描き始めたのか、また線刻の1本1本がどちらからどちらに向かって引かれたのかまでは特定できなかった。

胎土中には最大2mm程度の砂粒を含み、焼成はやや軟質。外面の色調は灰黄褐色で、外面裾部から内面が黒褐色から黒色を呈する。

3013溝（図80・89・90）集落域の北方、周溝墓97・98の南側に近接する。両周溝墓の南辺周溝および3001溝とほぼ並行し、東端は周溝墓98の南辺周溝3904溝と合流する。西端は周溝墓97の西辺付近までで、長さは20m強を測る。幅は1.6～2.5m、深さは約0.2～0.4mで、埋土は粗粒砂～拳大の礫を含む黒褐色シルトである。

溝からは広口壺・甕・壺蓋・台付無頸壺・把手付鉢・台付鉢・高杯・器台（369～388）など多くの土器が出土した。どれもIV様式末～V様式初頭頃のもので、それらの中に生駒山西麓産胎土のものが数多く含まれていることが特徴的である。

369～371はV様式初頭の広口壺で、いずれも生駒山西麓産胎土である。369・371は頸部下端に突帶をめぐらすこの時期の特徴を示している。371の突帶と口縁部の円形浮紋には薄っすらと赤色顔料が認められる。赤色顔料の付着はこれ以外に376の壺蓋と379の台付無頸壺にも認められる。372の広口壺は頸部に2条1単位とするヘラ描沈線を2帯めぐらす。379は生駒山西麓産胎土の台付無頸壺小片である。外面に櫛描流水紋を描いた後、縦位の棒状浮紋を付す。382は有段口縁の高杯。388は円孔を上下2段に施す器台である。

これら以外に特異な遺物として、青銅製品の鋳造に関わる高杯形土製品（389）や送風管（390）が

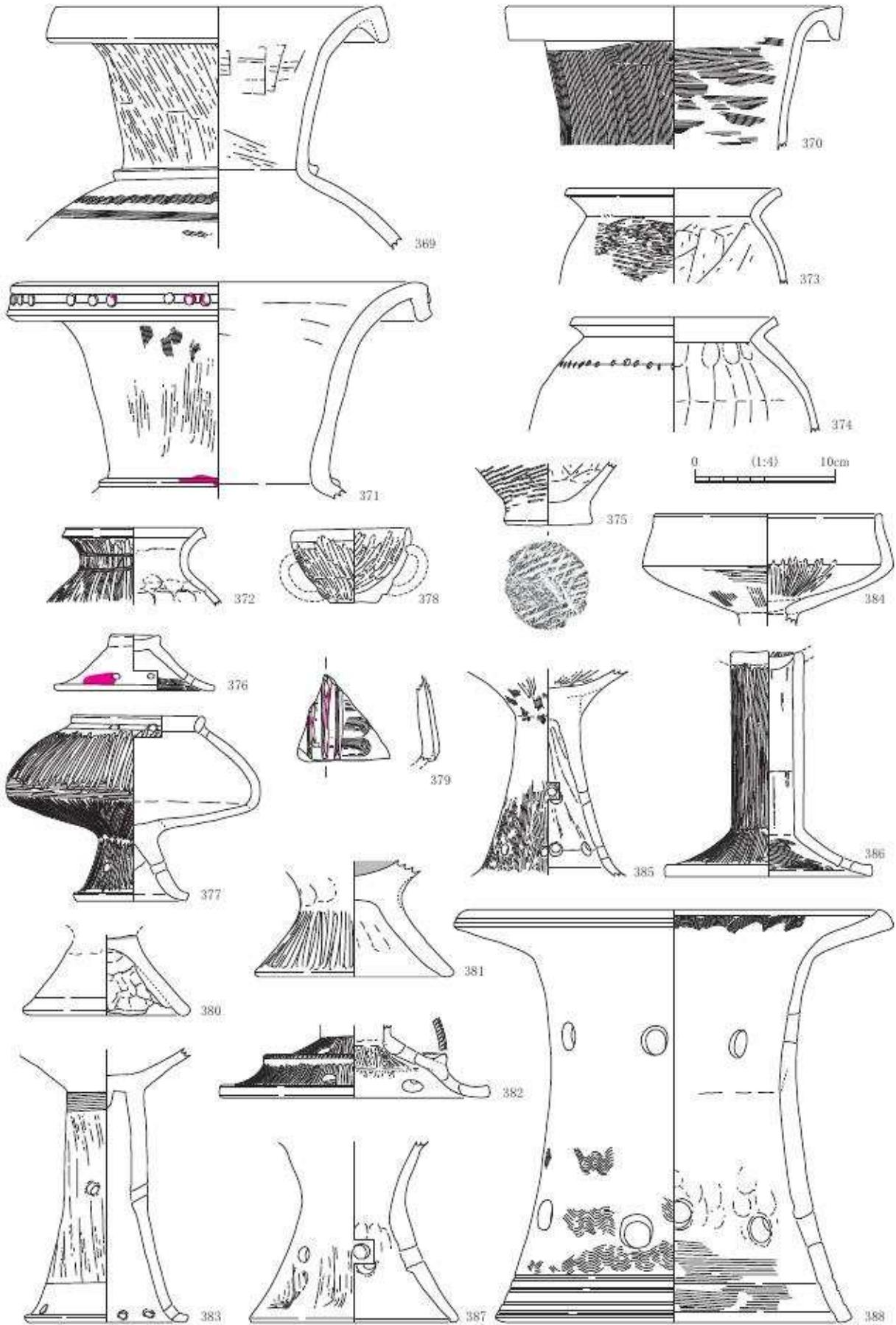


図 89 3013 溝出土遺物 (1)

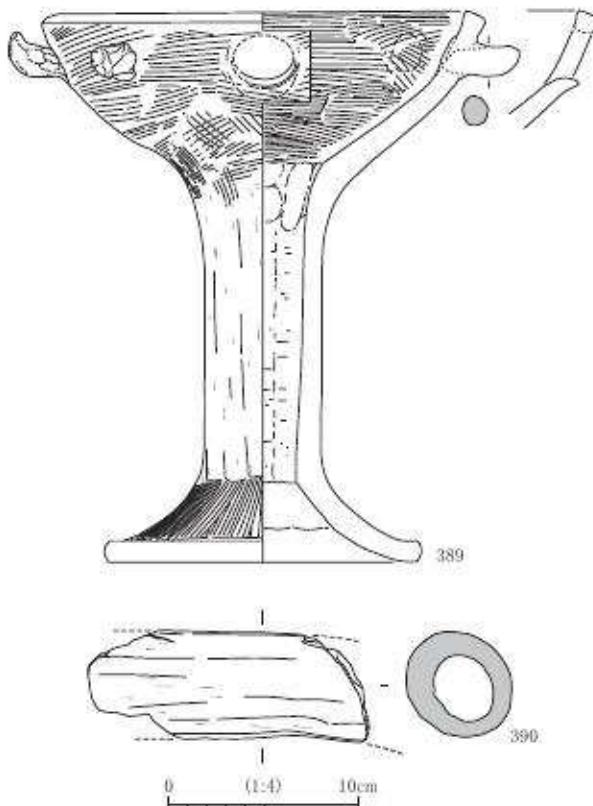


図90 3013溝出土遺物（2）

出土している。389は青銅製品の鋳造に用いられた取瓶、あるいは坩堝と考えられている土製品であり、当遺跡内で青銅製品の鋳造が行なわれていたことを示す貴重な資料である。部分的に大きく欠損するが、杯部から脚部まで接合するため、全容が復原可能である。高杯によく似た形状であるが、脚柱部が長いためやや安定感に欠ける。総高は29.1cmを測る。杯部は楕円形に内湾し、端部は外傾する面となる。その外径は23.6cm、内径は21.6～22.0cmを測る。器壁は1.0～1.4cmと厚手で、側面には縦3.0cm、横3.3cmの僅かに梢円形に復原できる注口が開く。楠遺跡（大阪府寝屋川市）<sup>2)</sup>や明和池遺跡（大阪府摂津市）<sup>3)</sup>出土品のような口縁部を広げて片口とするタイプではなく、唐古・鍵遺跡（奈良県田原本町）<sup>4)</sup>出土品のように側面に口を開けるタイプである。唐古・鍵遺跡出土品ほどではないものの、口の下端部が外側へ僅かに摘み出されており、注ぎ口としての機能がうかがえる。また外面には上向きの鉤状突起を6箇所に付ける。うち4箇所は欠損するが、2箇所は残存する。器壁に穴を開けて挿入する方法で接合されている。内面見込み部分は、脚部とつながる円孔が開いたままで、円盤充填の痕跡は認められない。内外面ともに粗いハケで仕上げる。なお、明和池遺跡出土の高杯形土製品に見られたような、外面口縁部直下の紐が焦げたような痕跡は認められなかった。

脚部は杯部まで抜ける中空である。脚柱部は外径6.0～6.7cm、内径は杯部側が4.2cm、裾部側が3.2cmと裾部側がやや細い。共伴した送風管と同様の作りで、竹輪状に棒状工具に粘土を巻き付けて成形したものと考えられる。外面も送風管と同様にケズリで、杯部・裾部が接合しないと送風管との区別が難しい。裾部はハの字状に開き、端部は面を成す。外面は縦方向のハケ。

どの部位も表面はきれいで、二次的に焼けた、あるいは焦げたような痕跡は認められない。

390の送風管は高杯形土製品の脚柱部と同じ作りで、竹輪状に棒状工具に粘土を巻き付けて成形したものと考えられる。断面形はきれいな円形ではなく、僅かに梢円形で、外径は5.3×6.0cm、内径は3.0×3.5cmを測る。器壁の厚みは0.9～1.5cmである。外面はケズリで整える。両端が欠損しており全容は不明だが、明らかに緩やかに湾曲している。被熱の痕跡は認められない。

なお、前記の土器の中には高杯形土製品の可能性が考えられる土器が2点ある。台付鉢とした380・381である。380は厚手で重量感のある脚台部で、内面には粘土を貼り足して厚くし補強している。非常に雑な作りで、杯部と接合する部分の断面は被熱により黒変している。381も外面に粘土を貼り足して補強しており380に似る。厚手で重く、杯部内面は被熱により黒変する。外面にはミガキが施されているが、高杯形土製品の脚部である可能性は否定できない。

図示した遺物以外に、3013溝からは他とはやや異質の灰白色の石庖丁が1点見られる。直線刃半月形の片刃で、石材は凝灰岩質流紋岩である。

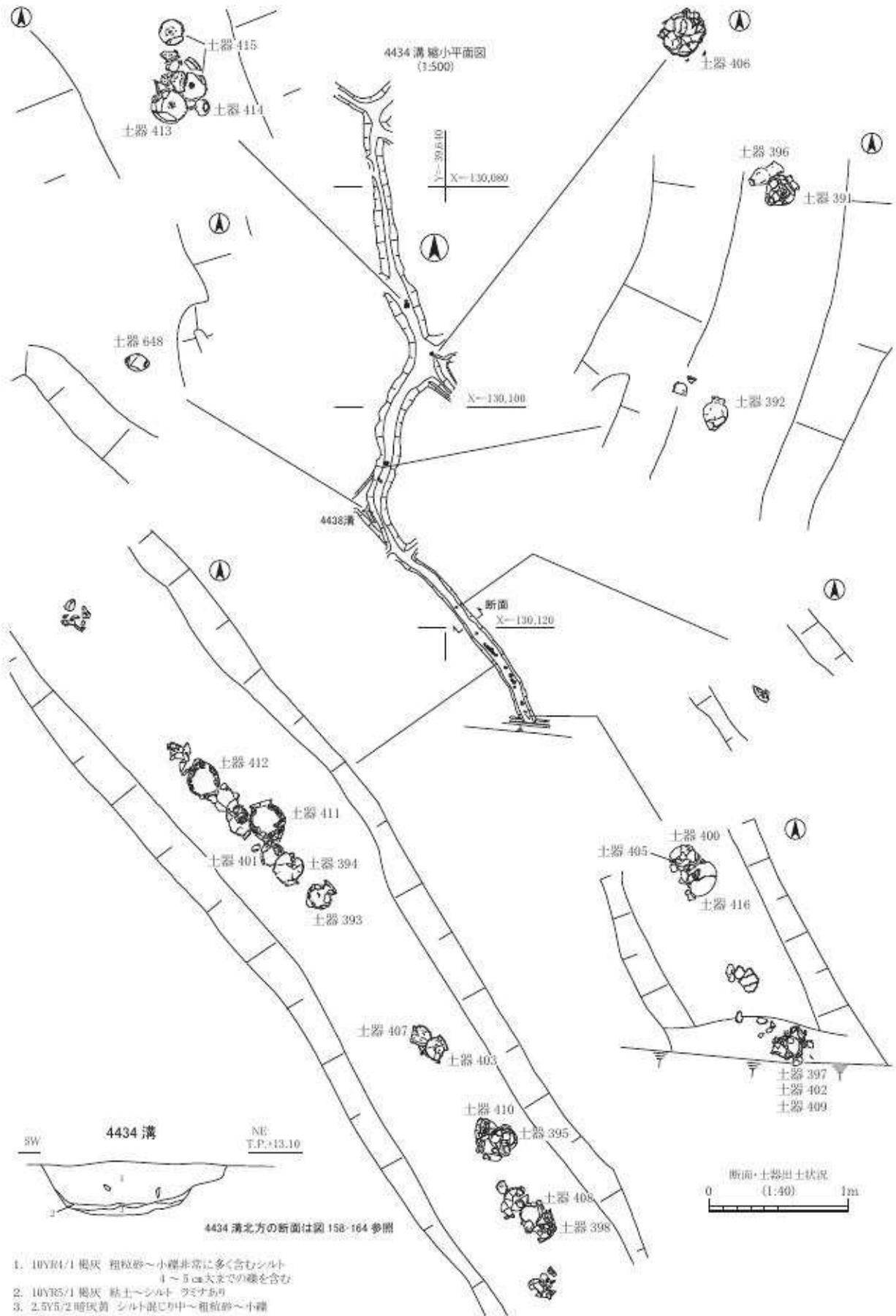


図 91 4434 溝土器出土状況及び断面

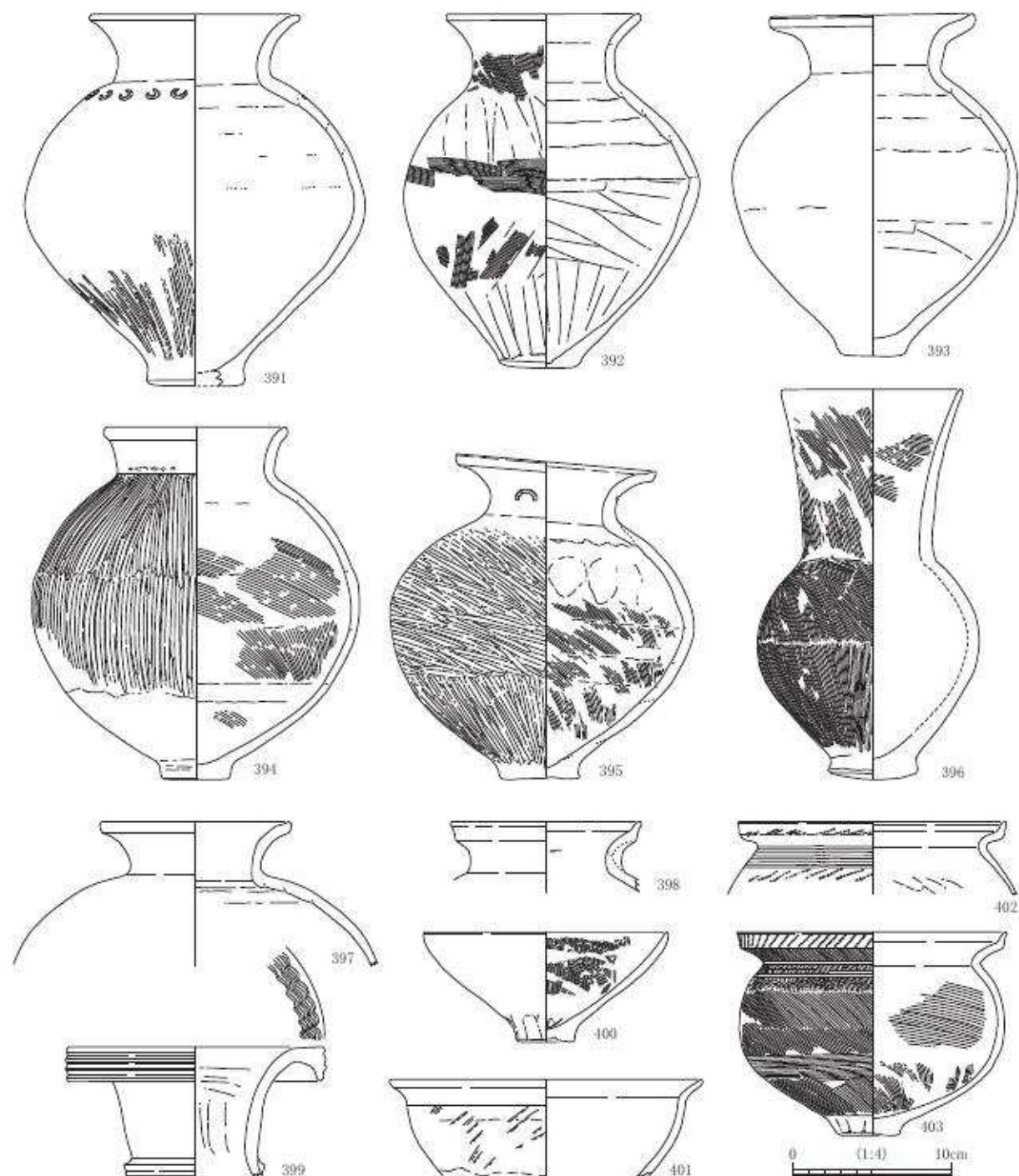


図92 4434溝出土遺物（1）

3600溝（図121・122・127） 2区西半に位置する南北溝である。周溝墓73の北辺周溝3640溝から調査区北端の周溝墓45南東隅までのびる。そこで一旦途切れ、さらに北方へのびるが、両者が一連の溝であったのか（遺構番号は同じ3600溝としている）は北方の様子が分からぬいため判断できない。溝の規模は場所によって大きく異なり、南端部では幅0.95m、深さ0.45m。周溝墓65西辺では幅2.32m、深さ0.72m。周溝墓42・59共有部では幅1.18m、深さ0.48m。周溝墓55西辺では幅0.55m、深さ0.23m。周溝墓48・49共有部では幅1.4m、深さ0.47mを測る。途切れた箇所より北側の周溝墓45・46共有部では、幅は1.0～1.5mほどあるが、深さは0.1～0.15m程度と南方より浅い。以上のような規模の違いは、接する周溝墓の大きさの違いによるものと考えられる。周溝墓がこの溝の左

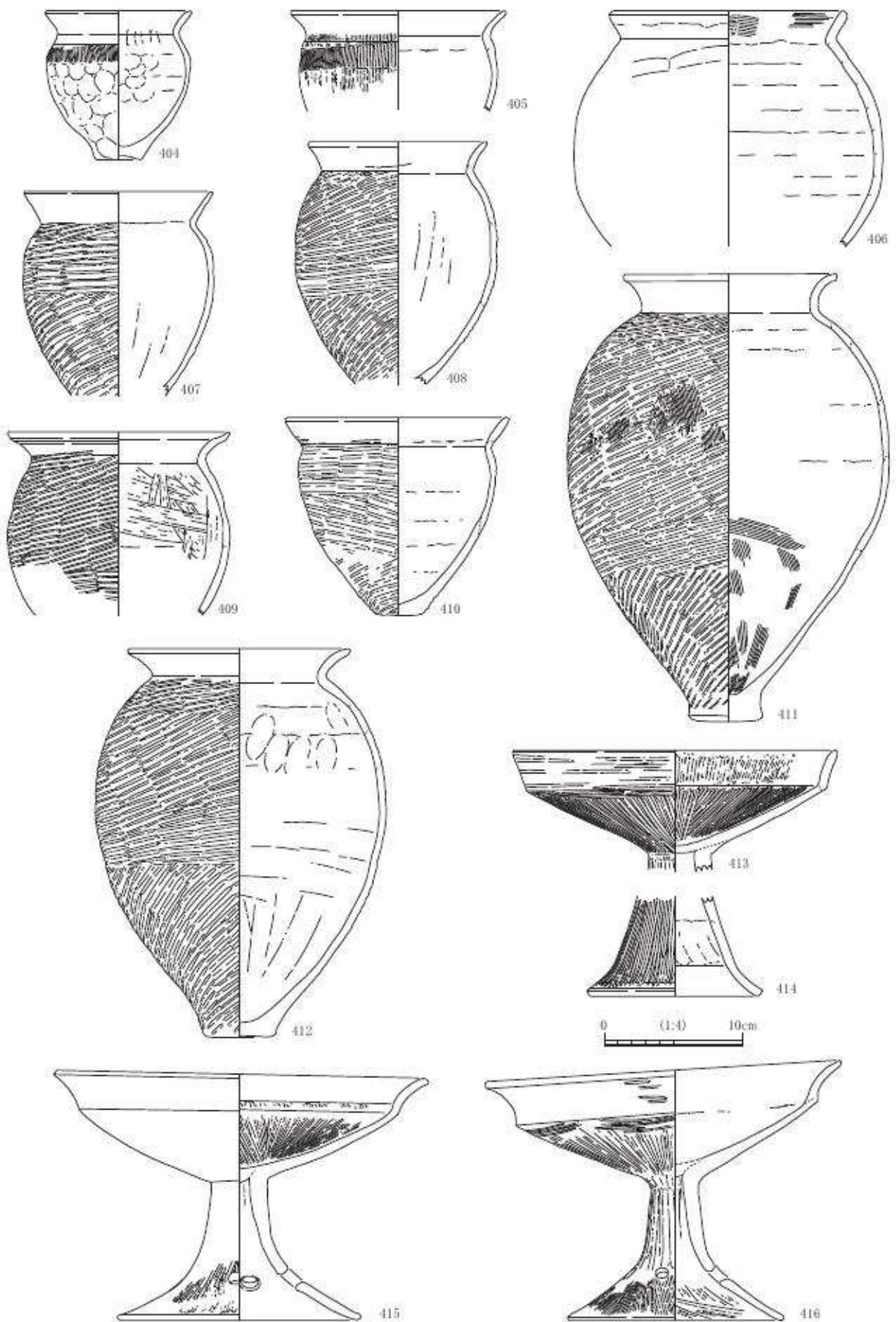


図 93 4434 溝出土遺物（2）

右に列状に並んでいることから、現地調査の段階では、周溝墓を築く際の基準となる溝だったのではないかと考えたが、周辺の周溝よりも新しい時期の遺物が出土していることから、下記の 4434 溝のように、周溝の窪みを再利用して後に掘り直された溝であったと考えられる。

周溝墓 65 の西辺付近からはIV 様式の台付鉢（521）やIV 様式末～V 様式初頭の短頸壺（520）が、また北方の周溝墓 45 の東辺付近からはサヌカイト製の凸基式打製石鐵（519）が出土している。

**4434 溝（図 91～93・158・164）** 6 区中央で検出した。蛇行する南北溝で、4 区と 6 区との境に位置する周溝墓 5 の南東隅を起点に 6 区の南壁まで達し、さらに南側へと続く。出土遺物から周溝墓よりも新しい時期の溝であることが分かるが、周溝墓を完全に壊して開削されているわけではなく、ある程度周溝墓の墳丘を残すように蛇行していることから、完全に埋まり切っていない状態の周溝の窪みを利用して掘り直されたと考えられる。溝の幅は北方では 1.7～2.5 m、南方では 1.1～1.5 m で、深さは北方が 0.55～0.7 m、南方が 0.3～0.4 m である。埋土は粗粒砂～細礫を多く含む褐灰～灰黄褐色のシルト～細粒砂などである。

溝底には、広口壺・長頸壺・甕・鉢・高杯（391～416）など完形に近い土器が多数点在していた。どれも V 様式のもので、特に V-2 から V-3 といった時期のものが多い。391 の広口壺は肩部に一部が欠けた C 形の竹管紋を押す。402・403 は近江・山城系の甕である。口縁部を上方に摘み上げて受口状とし、外面に列点紋を押す。407～412 は外面タタキの甕で、411 はタタキ後上半の一部にハケ状のナデが認められる。

**方形周溝墓と出土遺物** 集落域の西側で方形周溝墓を 164 基検出した。しかしそれ以外にも、周溝墓の可能性が高いが、後世の削平などの影響により周溝が一部しか検出できず、周溝墓としてカウントすることに躊躇するものもいくつかある。それらについては本報告では周溝墓の数に含めていない。したがって、本来は 164 基よりももう少し多い 170 基程度の周溝墓が今回の調査区内に広がっていたと考えている。

検出した周溝墓は、一辺 3 m 程度のものから 18 m もある大型のものまで大小様々である。それら個々の規模や振れ、周囲の周溝墓との関係などについては周溝墓一覧表に記載しているので本文では割愛し、ここでは埋葬施設についてと、周溝墓のある程度のまとまりごとに出土遺物についてのみを記す。ただし土器の製作技法や特徴などについての詳細は一覧表に譲り、本文中では出土位置や出土状況、またその所属時期など全体に関わる事柄や、人形土製品・大型石庖丁・管玉など特記すべき遺物やその特徴などについてのみを記すこととする。

**周溝墓 1～6・150（図 94～96・100・163・164・168）** 調査区西壁際にまとまる東南東～西北西を軸とする一群である。周溝を共有し、きれいに列状に並ぶ。

3500 溝からは II 様式の甕（417）、3502 溝からは II 様式の台付鉢（419）、4506 溝からは II 様式の広口壺（660）、4515 溝からは供獻土器と考えられる III 様式前半の広口壺（661）が出土している。なお周溝墓 6 の西辺にあたる 3510 溝は、壁際のため詳細な調査ができなかったが、本来の周溝の向きとは異なり、周溝墓 6 の南西隅部を壊していることから、前記 4434 溝と同様、後期になってから周溝の窪みを利用して掘り直したものと考えられる。V 様式末頃の丹後から北陸系のものと考えられる脚付の壺（418）が出土している。

**3575 墓壙（図 94・97）** 周溝墓 3 の埋葬施設で、墳丘の中央やや西寄りに位置する。墓壙の平面形は長さ 1.84 m、幅 0.71～0.82 m の長方形を呈する。非常に浅く、全体を 1～2 cm ほど掘り下げた段階で、

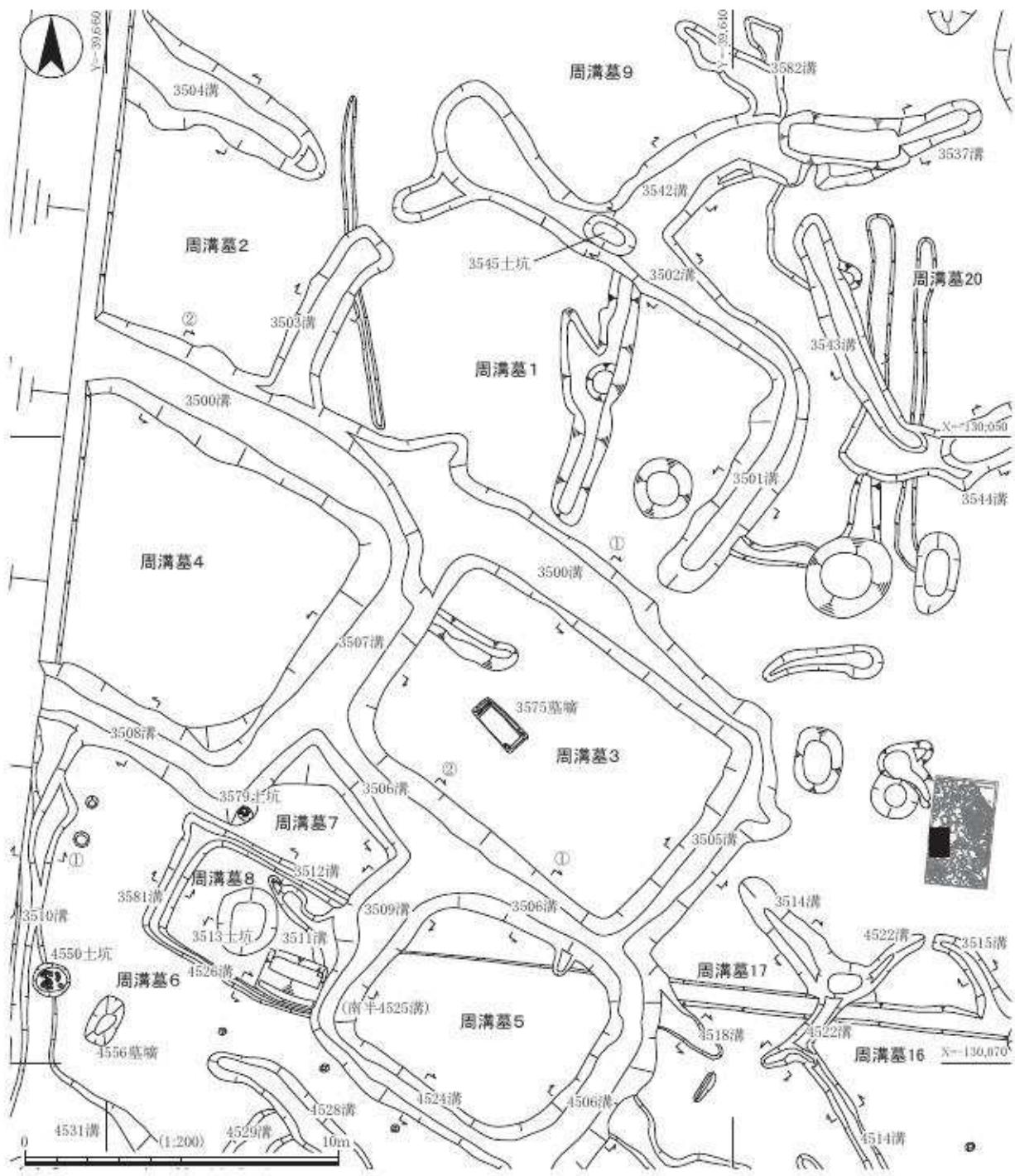


図 94 周溝墓 1～9 周辺 4 層下面遺構平面

側板と小口板の据え付け穴（以下、側板穴・小口穴と省略）が検出できた。ただし南側の側板穴は検出できなかった。据え付け穴の幅は0.15～0.18m程度で、深さは北側の側板穴が墓壙底部から0.02m、東側小口穴が0.3m、西側小口穴が0.15mで、小口板が深く固定されていたことが分かる。なお西側小口板については、墓壙の壁際と壁からやや隔てた位置に同様の窪みが認められることから、小口板を埋め込む際に他の木棺材の長さに合わせて微調整し、小口板の位置を0.1mほど外側にずらしたのではないかと考えている。以上から、木棺は底板を挟むように小口板を墓壙底部に埋め込む構造であったことが復原できる。側板と小口板との関係は判断し難いが、側板先端にあたる部分の墓壙輪郭がやや外側に張り出していることから、H字状に側板が小口板を挟む構造であったと考えられる。主軸はW-44°

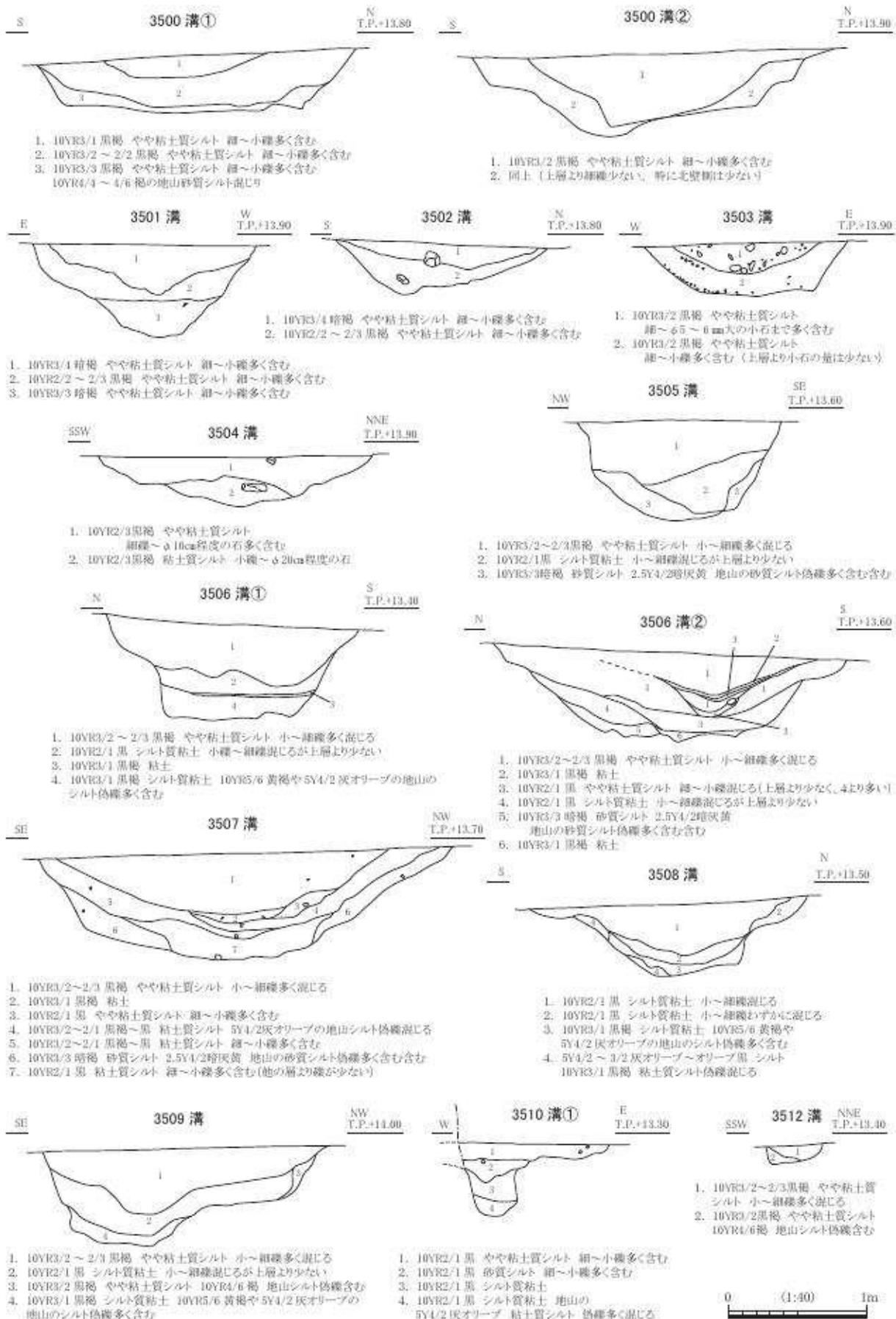


図 95 周溝墓 1～9 周辺周溝断面 (1)

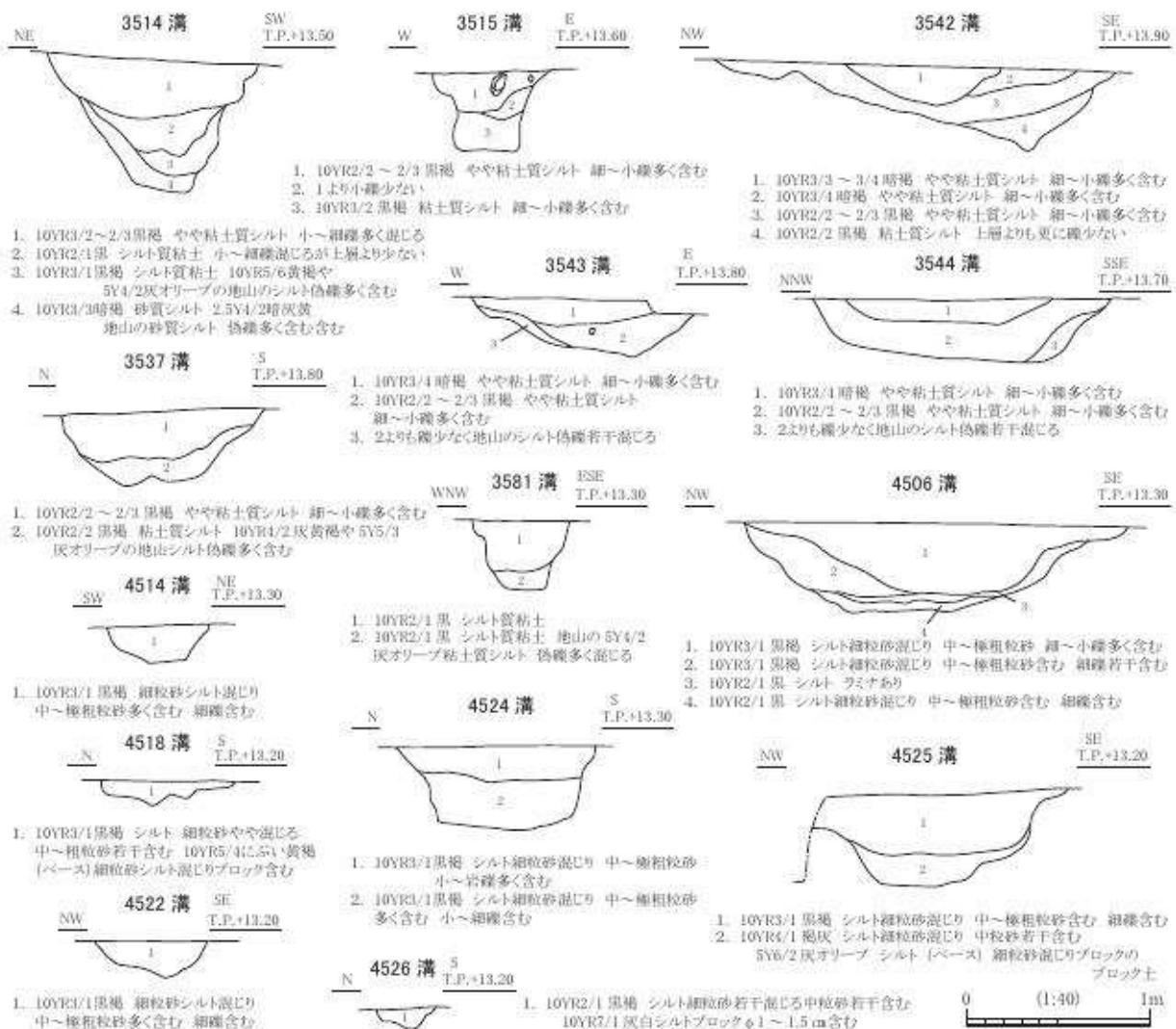


図 96 周溝墓 1～9 周辺周溝断面 (2)

—Nである。

**4556 墓壙** (図 94・97) 周溝墓 6 の墳丘上、南辺周溝寄りに位置する。墓壙の平面形は長さ 1.62 m、幅 0.92 m の楕円形気味の隅丸長方形で、深さはもっとも深い箇所で検出面から 0.36 m を測る。壁は緩やかな傾斜で、断面形状は浅い鉢状を呈しており、埋葬施設であったかは疑問。埋葬施設とすれば、木棺墓ではなく土坑墓ということになる。主軸は墳丘の主軸にほぼ直交する N-31°-E である。埋土は黒褐色～黒色の粘土質シルト～粘土で、3 層に分層できる。

**3576 墓壙** (図 98・99) 周溝墓 10 の埋葬施設である。おそらく墳丘の中央に位置していると思われるが、北辺の周溝が検出できていないため断定はできない。墓壙の平面形は長さ 1.45 m、幅 0.7 m の長方形を呈する。非常に浅く深さは北側で検出面から約 0.07 m 程度である。主軸は N-57°-E で、埋土は小礫混じりの黒褐色やや粘土質シルトである。木棺の痕跡は認められなかった。

**周溝墓 12** (図 101～103) 調査区中央やや南寄りに位置する。この周溝墓の周溝からは時期を特定できるような遺物は出土していないが、南辺の 3520 溝から南に分岐する 4212 溝から、供献土器と考えられる潰れた状態の壺が出土した (図 103・写真図版 55-5)。ただし周溝墓 12 の南側には 4212 溝以外に方形にめぐる溝が検出できていないため、現時点では周溝とはしなかった。土器が出土した付近では幅 0.9 m、深さ 0.4 m で、埋土は 2 層に分層できた。

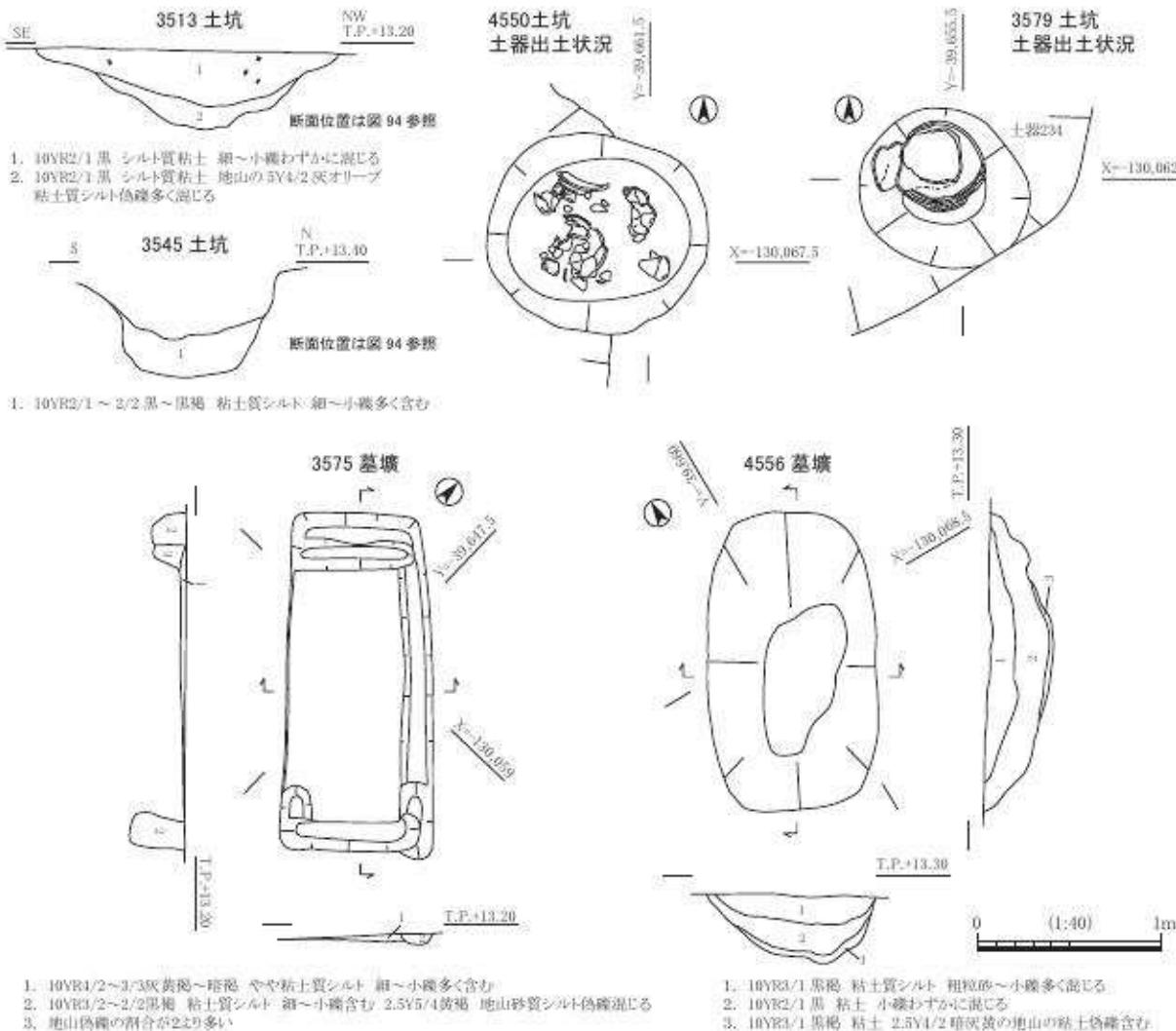


図 97 周溝墓 1～9 周辺遺構平面・断面及び土器出土状況

土器はⅢ様式初頭頃の壺だが、現地から取り上げた段階で細片化してしまい復原・図化することができなかった。

**3577 墓壙**（図 101・103）周溝墓 13 の埋葬施設で、墳丘のやや南寄りに位置する。墓壙の平面形は長さ 1.22 m、幅 0.77 m の長方形を呈する。非常に浅く、深さは北小口側で検出面から約 0.06 m 程度である。埋土は細～小礫混じりの黒褐色やや粘土質シルトで、木棺の痕跡は認められなかった。主軸は N - 44° - E である。

**周溝墓 14**（図 100～102）調査区中央やや南寄り、前記周溝墓 12 の北側に位置する。下記周溝墓 15 構築の際に壊される周溝墓である。

北辺の 3529 溝からⅡ様式の鉢（421）が出土した。

**周溝墓 15・18**（図 100～105）調査区の中央に位置する。周溝墓 18 は今回の調査で検出した方形周溝墓の中でも最大規模で、墳丘は検出面で南北 18.0 m、東西 12.3 m を測る。単葬で、墳丘中央に木棺据え付け穴が残る。周溝墓 15 は 18 の南側に一部周溝を共有して並ぶ。前記周溝墓 14 を壊して構築されている。

3527・3531・3533～3535 溝からは広口壺・甕・鉢・水差・高杯など多数の土器（420・422～449）が出土した。なお 3533～3535 溝の遺物はそのほとんどが埋土上半からの出土であった。ヘラ

描沈線紋を刻むI様式末～II様式初頭の広口壺（434）もあれば、竹管円形浮紋を付すV様式の広口壺（448）も含まれているが、II様式からIV様式のものが大半を占めている。おそらく周溝墓18の埋没時期はIV様式末～V様式初頭頃と考えられる。築造時期についても埋没の時期からそれほど遡るものではなく、IV様式に入ってからと考えている。

牛角状の432は杯部接合前の高杯脚部片と考えたが詳細は不明。442はII様式の水差である。肩部に突帯が剥離した痕跡が見られ、それより上にランダムに扇形紋を施す。449は器台と鉢を合わせたIV様式の複合土器である。

土器以外に、3533溝から打製石錐（433）が、3534溝からは打製石鎌（450）・石錐（451）のほか磨製の石棒と考えられる石製品（452）が、3535溝からは磨製石剣（453）が出土した。433はサヌカイト製で、頭部と錐部の境が明瞭である。450はサヌカイト製の凸基式。451は三角形の剥片の一隅を片側から数回敲打し錐として加工したもので、基部端面には自然面が残る。452は欠損部が多

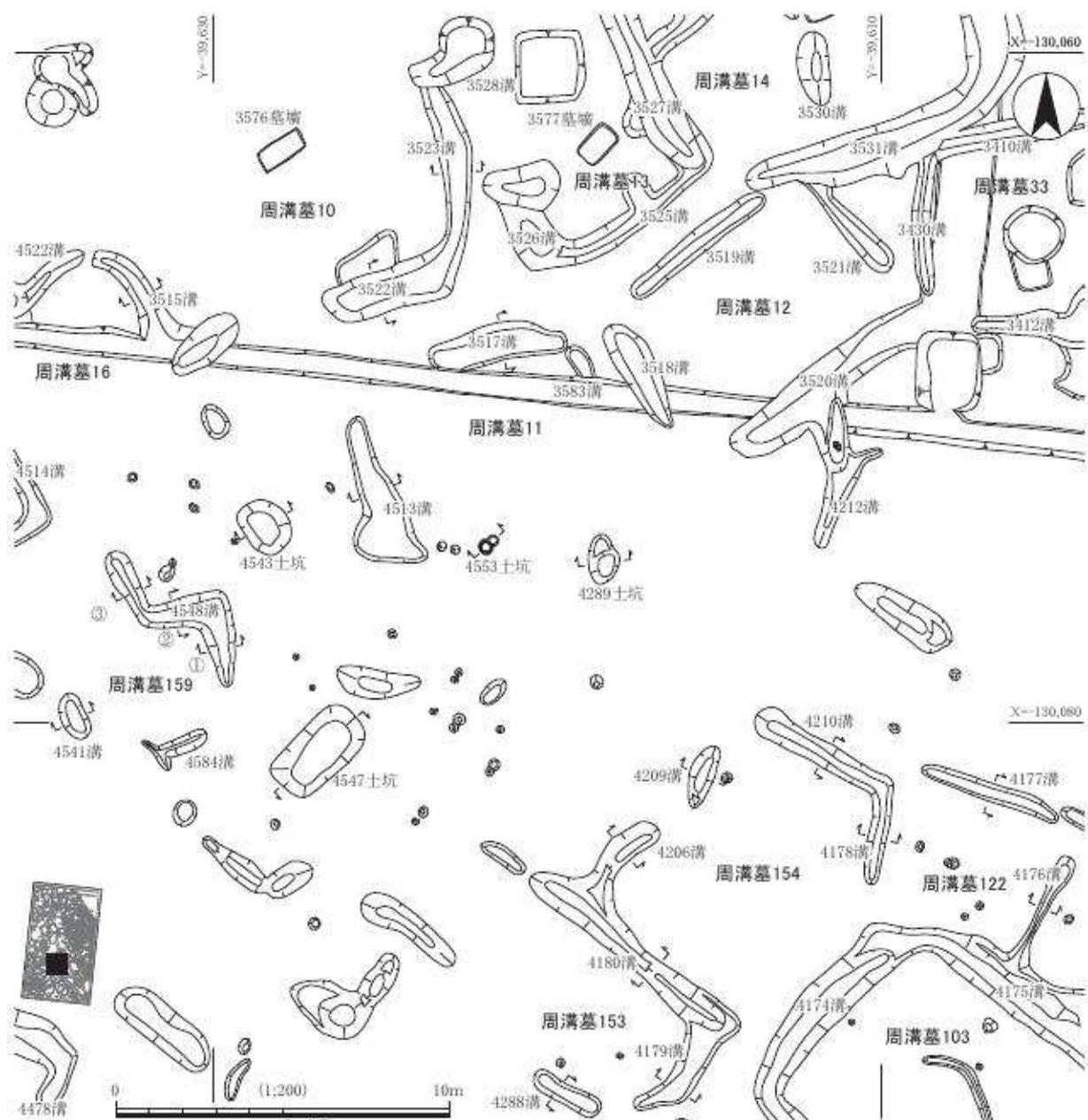


図98 調査区中央南寄り4層下面遺構平面

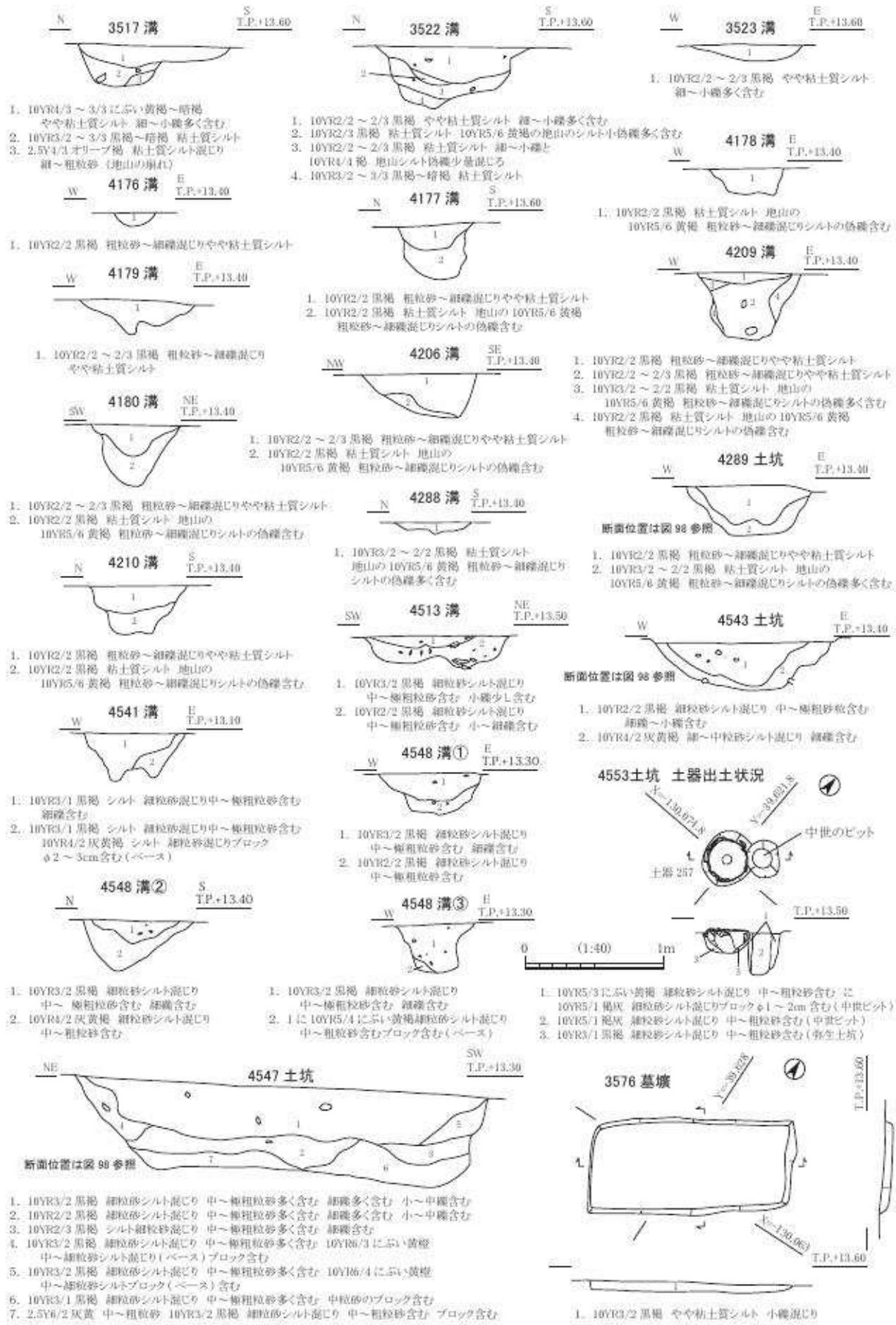


図 99 調査区中央南寄り遺構平面・断面及び土器出土状況

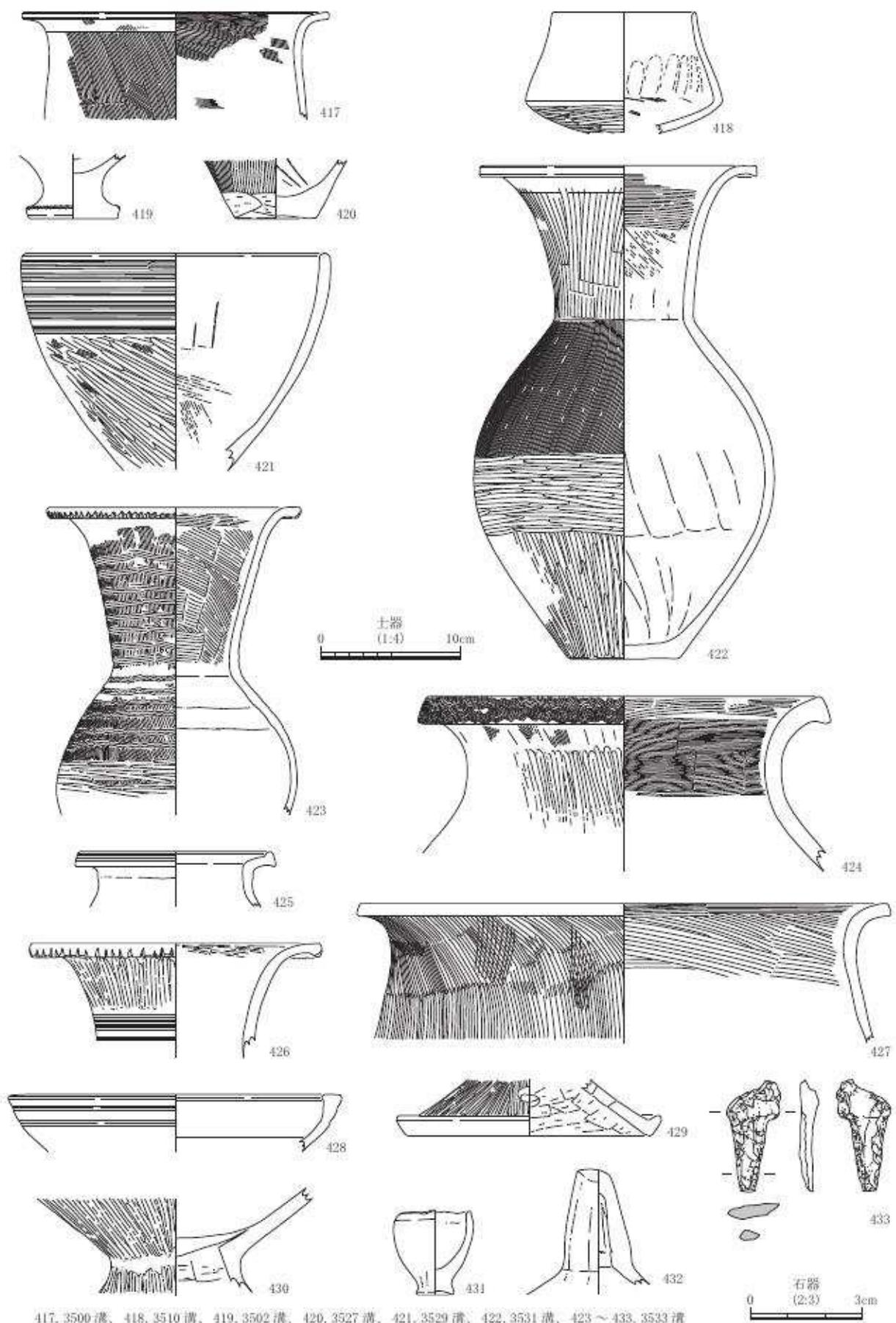


図100 周溝出土遺物（1）

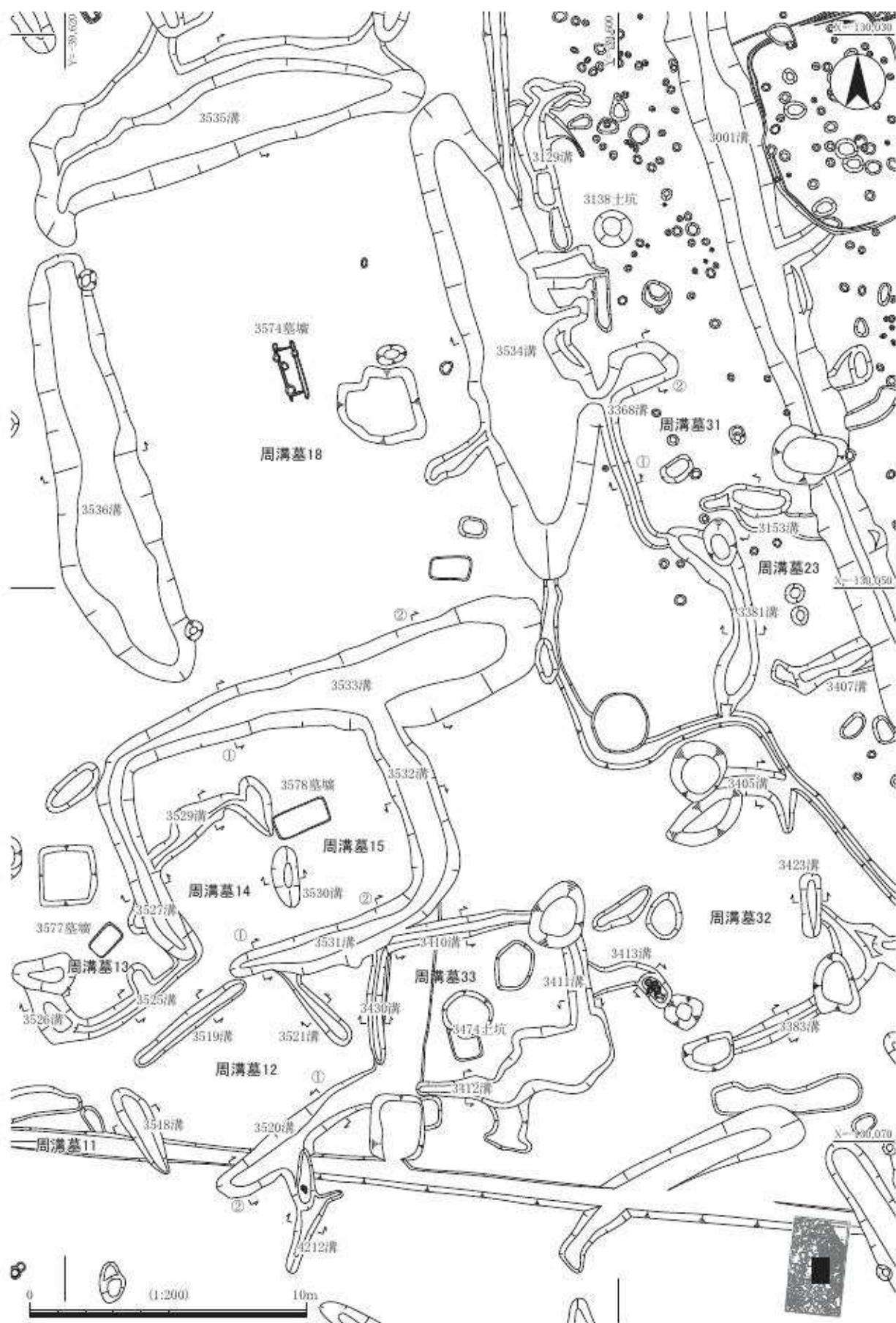


图 101 周溝墓 18 周辺 4 層下面遺構平面



図 102 周溝墓 18 周辺周溝断面及び土器出土状況

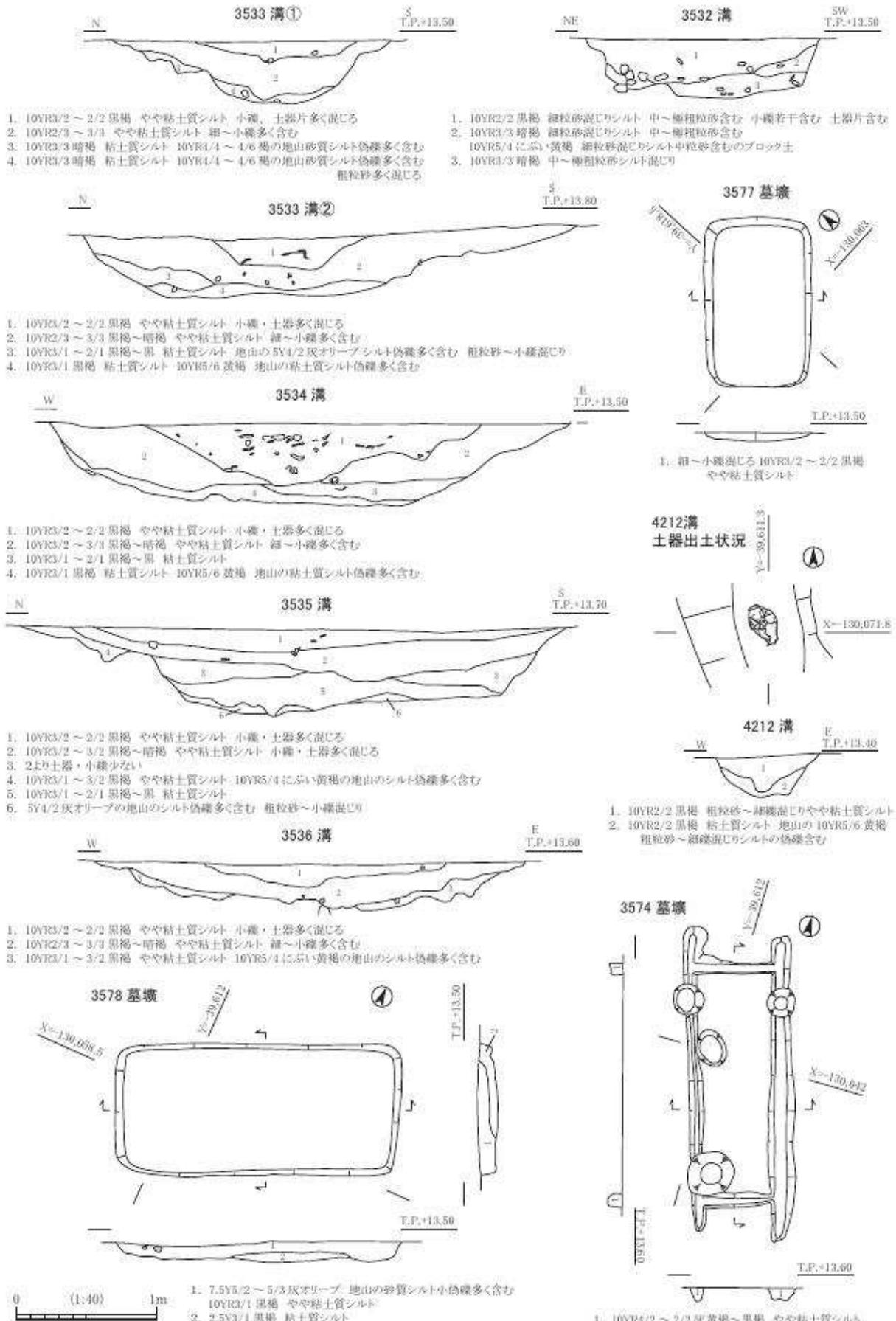


図 103 周溝墓 18 周辺遺構平面・断面及び土器出土状況

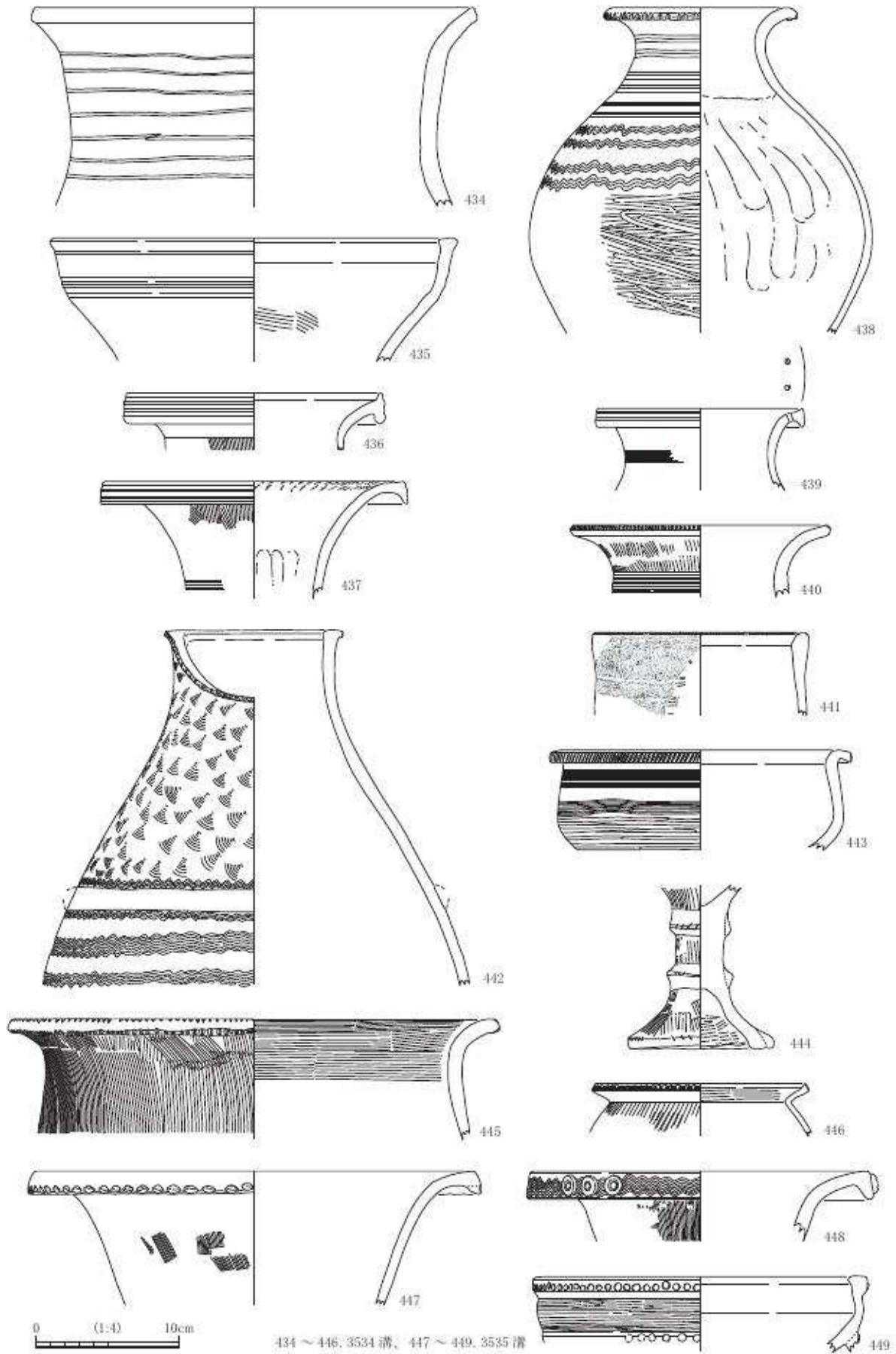


図104 周溝墓18出土遺物(1)

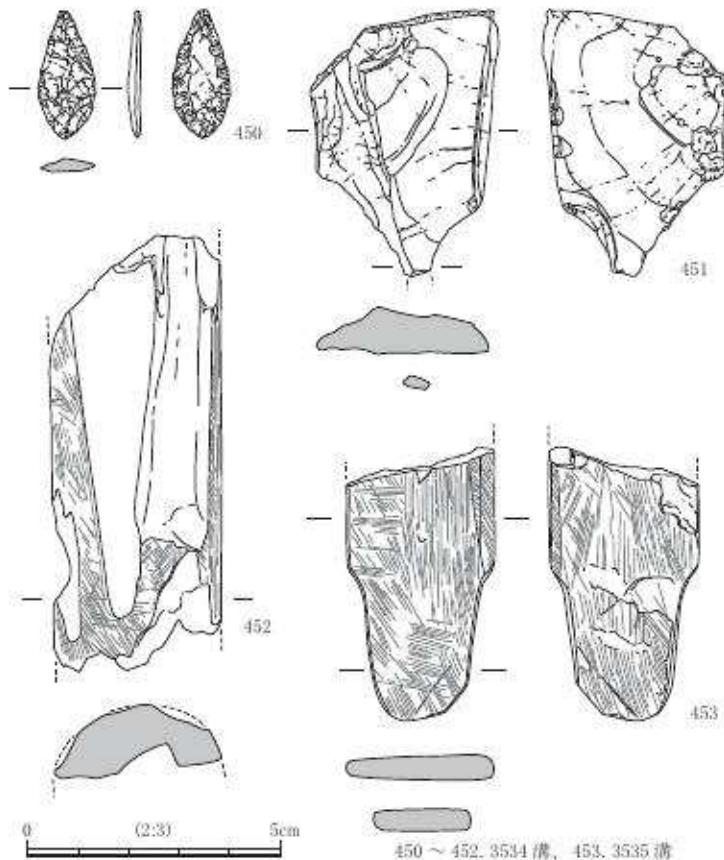


図 105 周溝墓 18 出土遺物 (2)

く全容は不明。断面形が円形である蓋然性が高いことから石棒と判断した。黒色の泥質片岩製。453は黒色粘板岩製で、下半に闇を作り出し、身部は薄い板状で刃が認められない。

3574 墓壙 (図 101・103) 周溝墓 18 の埋葬施設で、墳丘の中央に位置する。墓壙掘方ではなく、木棺の側板と小口板の据え付け穴だけが明瞭に検出できた。H字状に側板が小口板を挟むタイプの木棺で、小口穴の長さ(=木棺の内法幅)は北側が 0.54 m、南側が 0.46 mで、小口穴間の内法(=木棺の内法長)は 1.57 m を測る。側板穴の長さは両側とも 2.18 m で、深さはどこも 0.1 m であった。据え付け穴の幅は東側の側板穴が 0.14 ~ 0.19 m とやや広いが、それ以外は 0.07 ~ 0.1 m 程度である。

主軸は墳丘の振れとほぼ同じ W - 17°

-N である。側板穴と小口穴が残っていることから、底板はこの両者の内側におさまる大きさであったと考えられるが、当初からなかった可能性も考えられる。

3578 墓壙 (図 101・103) 周溝墓 15 の埋葬施設で、墳丘の中央やや東寄りに位置する。墓壙の平面形は長さ 2.04 m、幅約 0.95 m の長方形を呈する。深さは検出面から約 0.12 ~ 0.15 m で、埋土は 2 層に分層できた。主軸は墳丘の振れとほぼ同じ N - 67° - E である。木棺の痕跡は認められなかった。

周溝墓 20・27 (図 94・96・109・118・119) 周溝墓 18 の西側に位置する一群で、周溝墓 18 とほぼ同じ振れをもつ。

両者が共有する 3537 溝から中期の甕蓋 (454) が出土している。

周溝墓 23・31・32・161 (図 101・102・116・117) 環濠 3001 溝の西側、周溝墓 18 と周溝墓 30・100との間に位置する。

3368・3381・3383・3405・3413・3423 溝からは広口壺・短頸壺・甕・鉢・台付鉢・高杯 (499 ~ 518) などが出土した。特に 3413 溝からは完形に復原できる土器がまとまって出土している。どれも II 様式のものである。

周溝墓 22・63・64 (図 109・118・119・128・129) 2・4 区の西壁際に位置する一群で、周溝を共有して並ぶ。

3617・3618 溝からは II 様式の広口壺・無頸壺・甕・甕蓋・台付鉢・高杯・台形土器 (462~465・527~543) などが出土した。特に 3618 溝からは破碎した状態の土器が多量に出土した。

周溝墓 26 (図 106・107・109) 周溝墓 18 の北側に隣接する。

東辺 3568 溝から II 様式の広口壺 (459 ~ 461)・高杯 (458) が出土している。

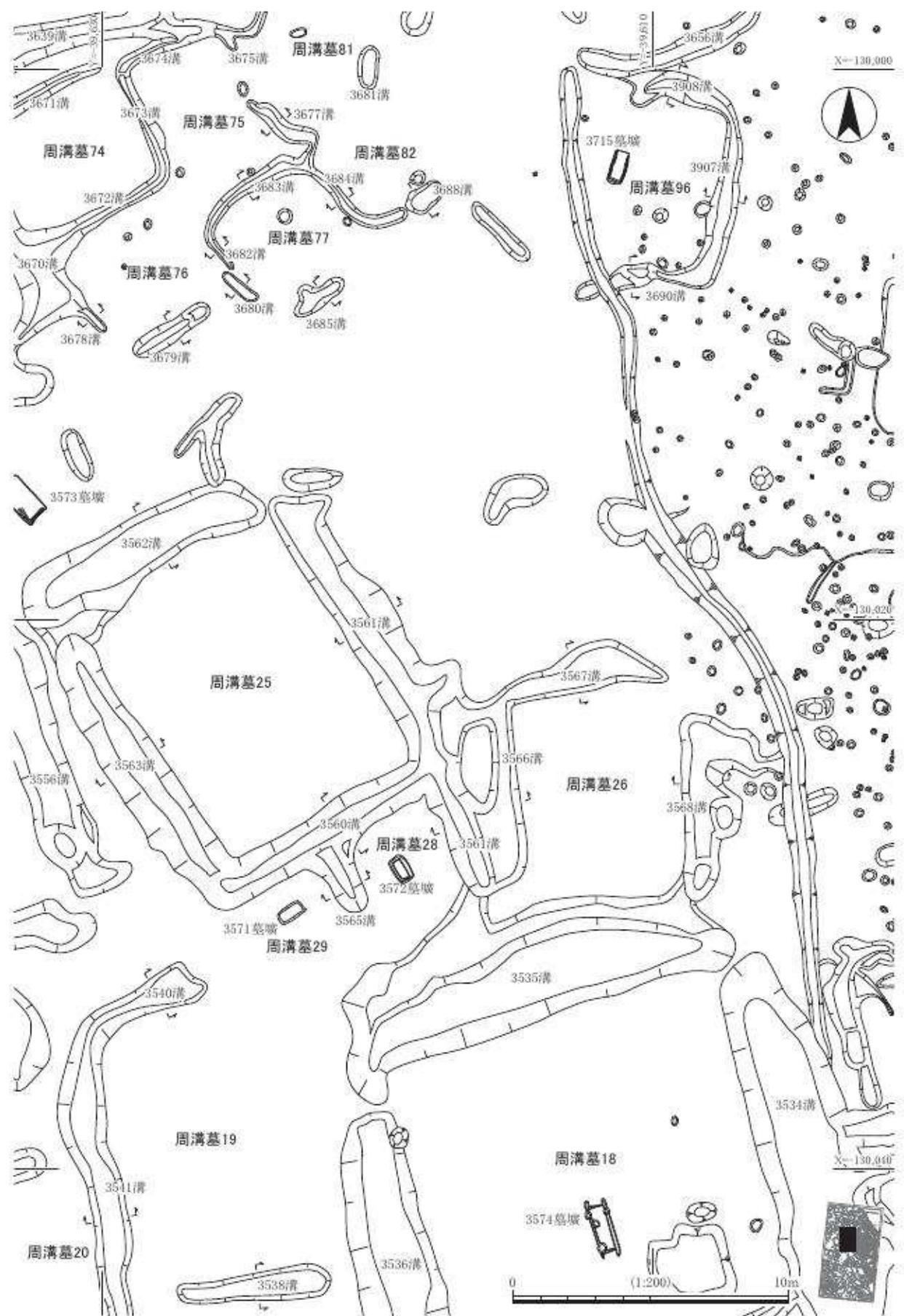


図 106 調査区中央北寄り4層下面遺構平面

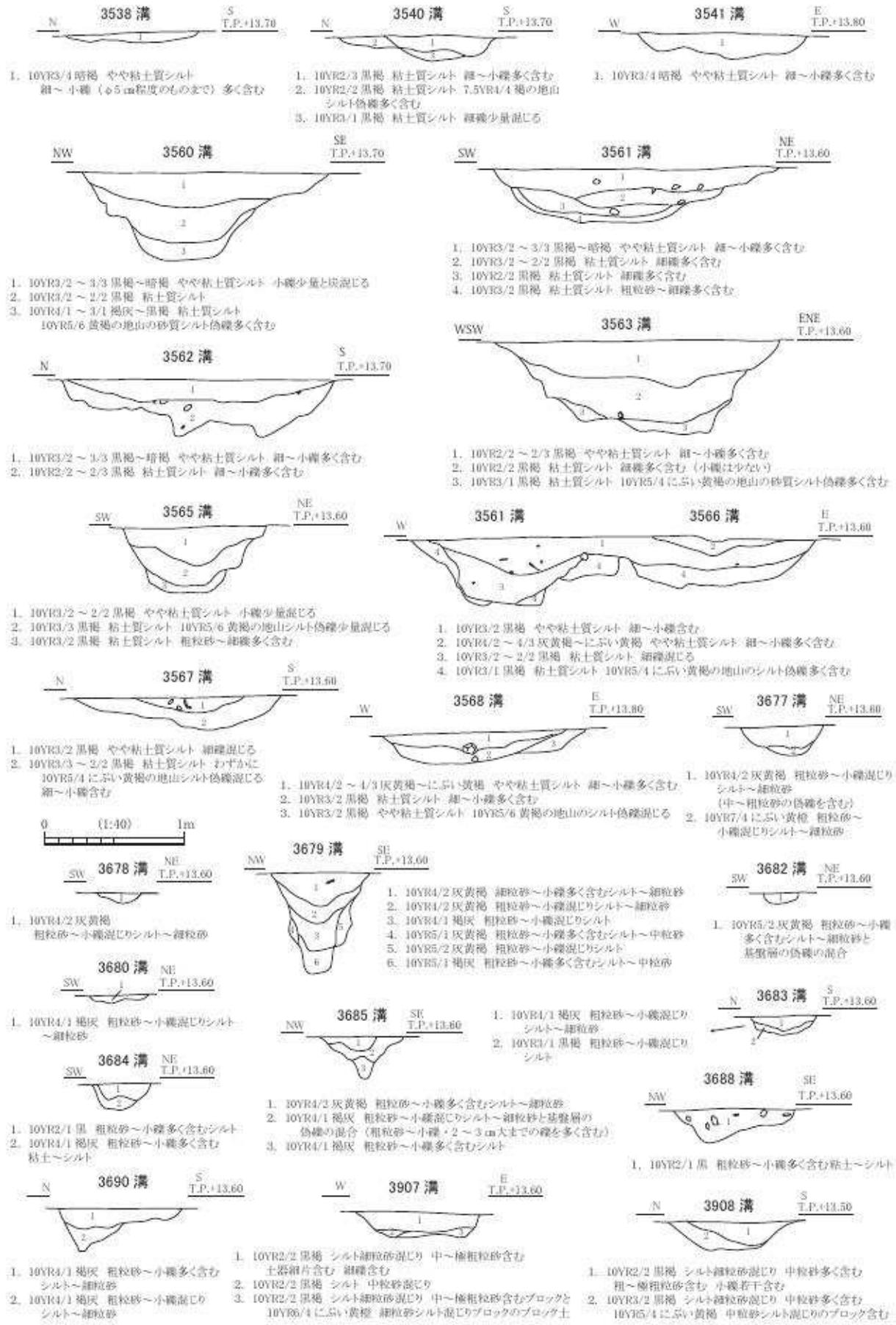


図 107 調査区中央北寄り周溝断面



図 108 3571・3572・3715 墓壙平面・断面

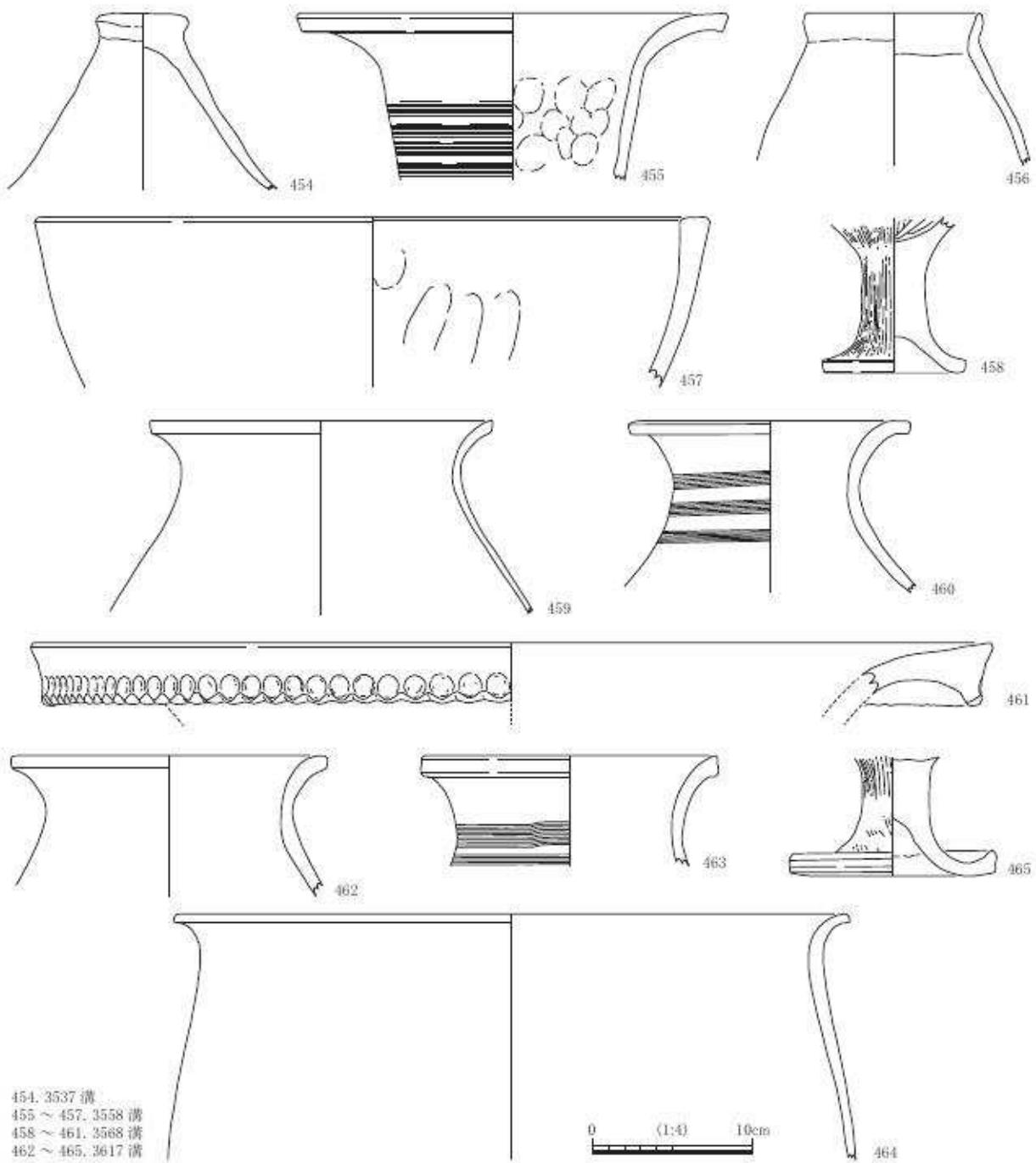


図 109 周溝出土遺物 (2)

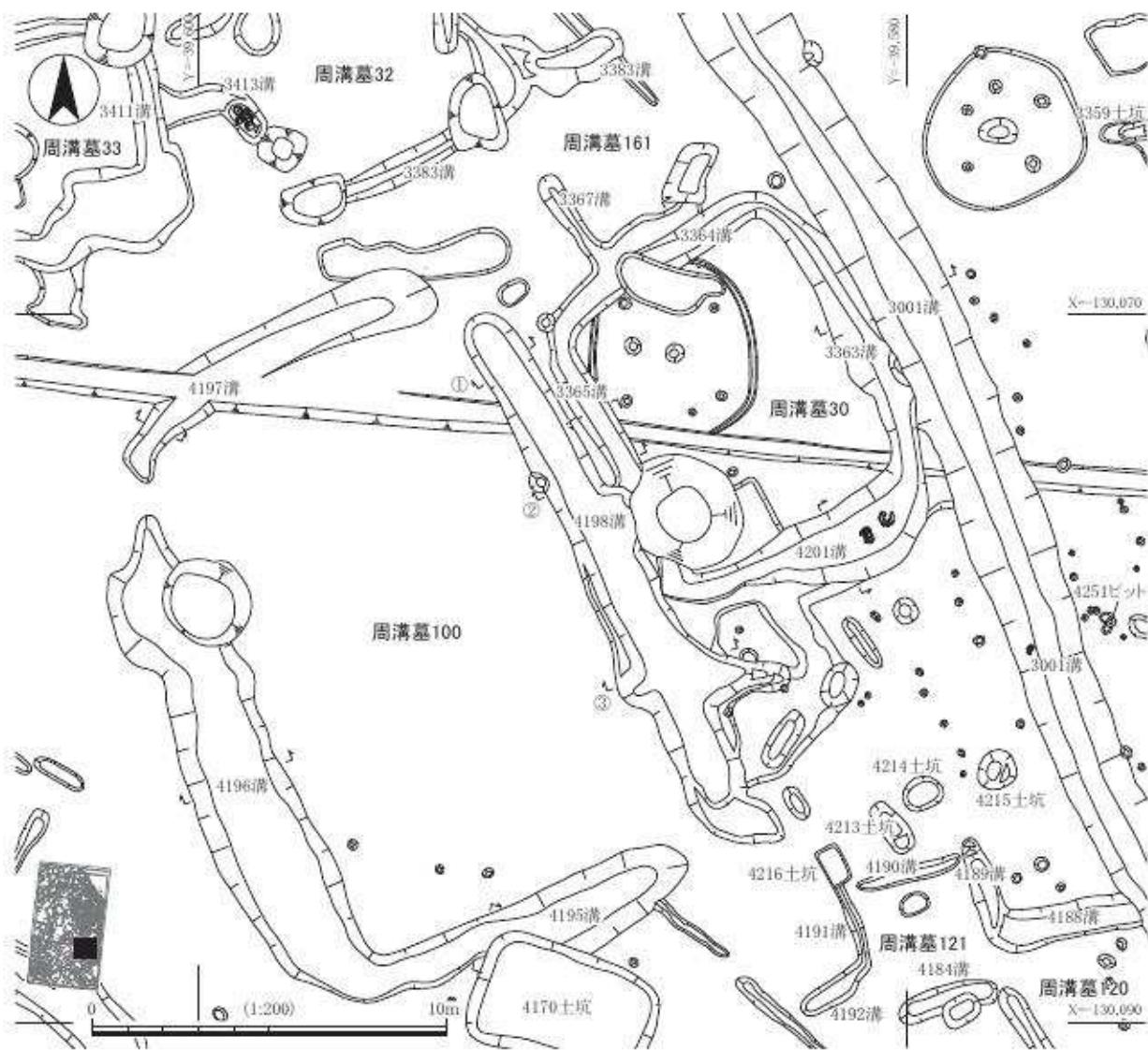


図 110 周溝墓 30・100 周辺 4 層下面遺構平面

3571 墓壙（図 106・108） 周溝墓 29 の埋葬施設である。おそらく墳丘の中央に位置していると思われるが、南・西辺の周溝が検出できていないため断定はできない。墓壙の平面形は長さ 1.01 m、幅 0.52 m の小型の隅丸長方形で、小児用と考えられる。深さは検出面から 0.07 m を測る。東側に接する周溝墓 28 上のほぼ同規模の埋葬施設は南北方向を主軸とするが、この墓壙はそれと直交する N-57°-E を軸とする。埋土は粗粒砂～小礫を多く含む黒褐色の粘土質シルトの単層で、木棺の痕跡は認められなかった。

3572 墓壙(図106・108) 周溝墓28の埋葬施設で、墳丘の中央に位置する。墓壙の平面形は長さ1.0m、幅0.64mの小型の隅丸長方形で、上記周溝墓29の墓壙3571と同様、小児用と考えられる。全体を2cmほど掘り下げた段階で、周間に側板と小口板の据え付け穴が検出できた。据え付け穴の幅は0.14～0.19mで、深さは墓壙底部から0.05～0.08mであるが、南側の小口穴は側板穴よりもやや深く0.12mを測る。また南側の小口穴は側板の間におさまっていることから、木棺は底板を挟むように小口板を墓壙底部に埋め込んで固定し、さらにその両者を側板が挟む構造であったことが復原できる。小口穴間の内法は0.7mで、側板穴間は0.28～0.3mである。埋土は黒褐色のやや粘土質シルトで、主軸は墳丘の振れとほぼ同じW-31°-Nである。

周溝墓 30（図 110～115） 3区と5区の調査区境に位置し、環濠3001溝に接する。時期の新しい周溝墓 100が西側に並ぶが、周溝を共有せず、破壊もされていない。墳丘の規模は検出面で 8.0 × 6.4 mを測る。

東辺 3363 溝からⅡ様式の広口壺（466～468）とともに半磨製の石劍（493）が、北辺 3364 溝からはⅡ様式の鉢（469）が出土した。468は上下2連の横型流水紋とその間に1帯の直線紋で飾る。流水紋は直線紋の途中に扇状のつなぎを入れて反転させ、ミガキによって反転部からはみ出した部分を消す。櫛描紋間には1条のミガキを入れる。生駒山西麓産胎土。493の上半は刃部を作り出し、下半は側縁が内湾し、刃を潰して丸く仕上げ柄とする。両面ともに研磨面が認められ、基部端面には自然面が残る。

南辺の 4201 溝からはコンテナ 20 箱に及ぶ多量の土器が出土した。この南辺周溝は広い箇所で幅 2.3 m、深さは 0.7 mを測るが、掘削が困難なほど埋土の上面から土器が詰っていた。ただしもっとも下部の土器（476～479）でも溝底から約 0.25～0.3 mほど浮いた状態であり、周溝墓が完成して直ちに破碎した土器が混入したのではなく、完成後溝底に 0.3 mほどの土砂が堆積する時間を経過してから遺物の混入が始まったことがうかがえる。それらの土器は完形のものではなく、どれも破碎していた。広口壺・鉢・高杯・甕蓋・甕（470～490）などで、ほぼすべてがⅡ様式のものである。482は細頸壺、あるいは水差の頸部片である。外面には複合櫛による直線紋が4帯描かれているが、所々途中で止めて間隔の長い簾状紋風の紋様となっている。

4201 溝からは土器以外にも大型石庖丁 2点(491・492)・石槍(494)・磨製石劍(495)・石錐 2点(496・497)・人形土製品(498)など特異な遺物が多数出土している。491・492の大型石庖丁は2枚が重なった状態で出土した。残念ながら詳細な出土状況についてはそれ以上分からない。491は灰色の粘板岩製で、平面形は直線刃の半月形を呈し、A面右寄りに若干偏って2孔の穿孔がある。両刃で、体部A面は刃部側の半分を磨き背部側には剥離面を残す。B面は背部側まで磨くが、左半には研磨が及ばない部分が多く残る。背部にも部分的に研磨面が認められるが、打ち欠いたままの部分の方が多い。A面左半の刃縁には使用に伴うとみられる細かい刃こぼれが認められる。492は緑色片岩製で、平面形は杏仁形を呈し、A面右寄りに僅かに偏って1孔の穿孔がある。両刃で、体部A・B面および背部ともに全面を研磨し、背部は面を成す。A面側の刃縁に使用痕とみられるにぶい光沢が肉眼で観察できる。A面左半の刃縁には刃こぼれとまでは言えないが細かい凹凸が見られる。緑色片岩製の石庖丁は、これ以外に3001溝から破片が1点出土しているのみである。494は両面に若干の研磨面が認められる半磨製の石槍で、刃部が厚い。495は有柄式磨製石劍の柄部である。刃部が欠損するため全容や柄の長さは不明。柄の断面形は菱形に近い楕円形で、柄尻を扇形に作り出している。サヌカイト製で、全面を丁寧に研磨する。496は先端を欠損するが、その周囲に摩耗した箇所が認められ、実際に使用したことがうかがえる。基部端面に自然面が残る。497も先端を欠損する。頭部と錐部の境が明瞭である。

498は円筒形の胴部と球形の頭部からなる小さなこけし状の土製品である。右耳たぶの一部を小さく欠くが、ほぼ完存品である。中実で、胴部末端が平らなため自立する。総高は 5.9cmで、頭部と胴部とのバランスはほぼ 3 頭身である。胴部最大径は 3.0cm、頸部径は 1.9cm、頭部径は 2.4cmを測る。胴部は無紋で、手足の表現はない。頭部については、一つの円筒形の粘土から作り出されたものなのか、円筒形の粘土に球形の粘土を接合して作ったものなのかは判断できなかった。頸部のくびれは指おさえの後、横ナデによって整形しており、接合痕はまったく見られない。人面の各部位は立体的で、眉・鼻・

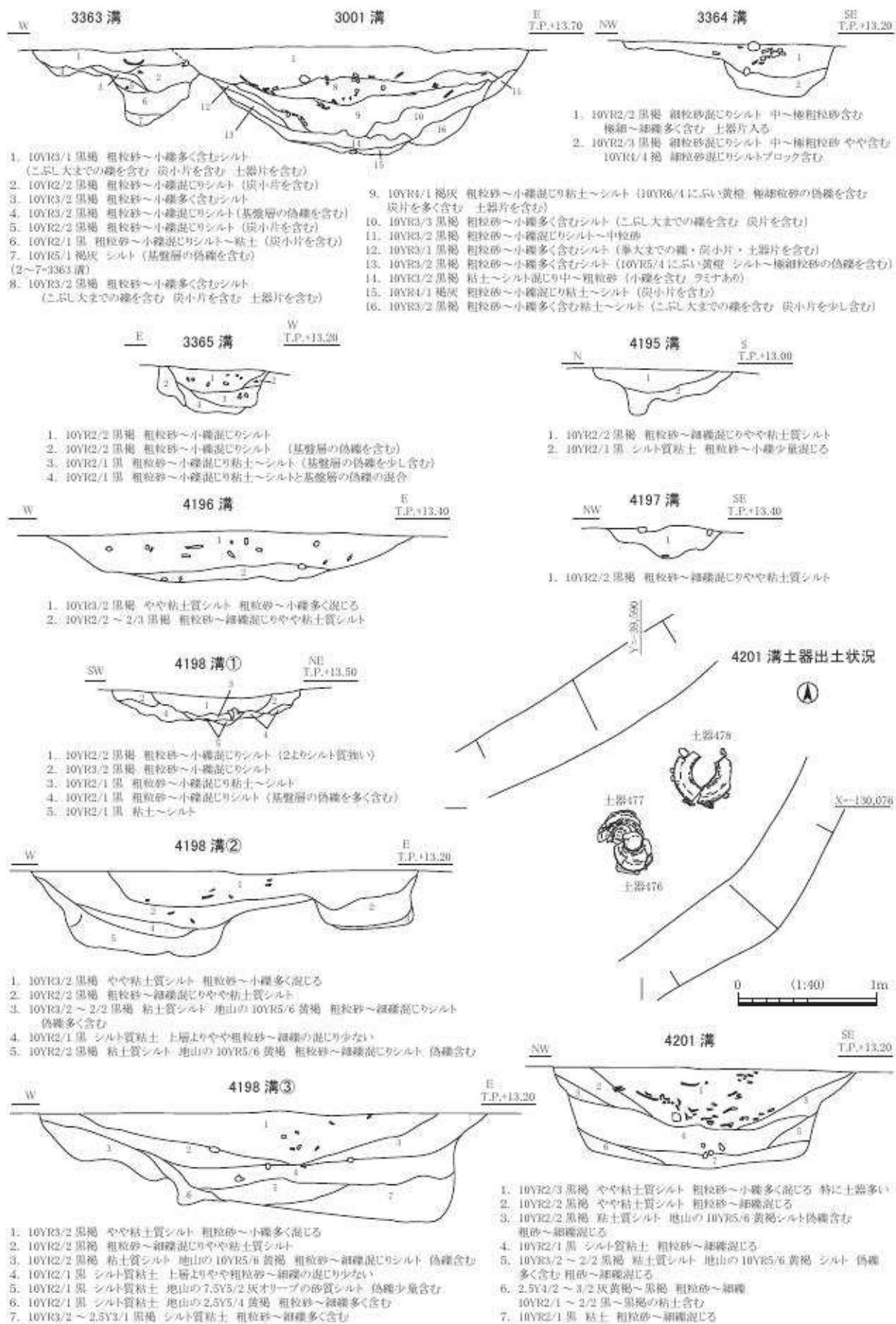


図 111 周溝墓 30・100 周辺周溝・3001 溝断面及び土器出土状況

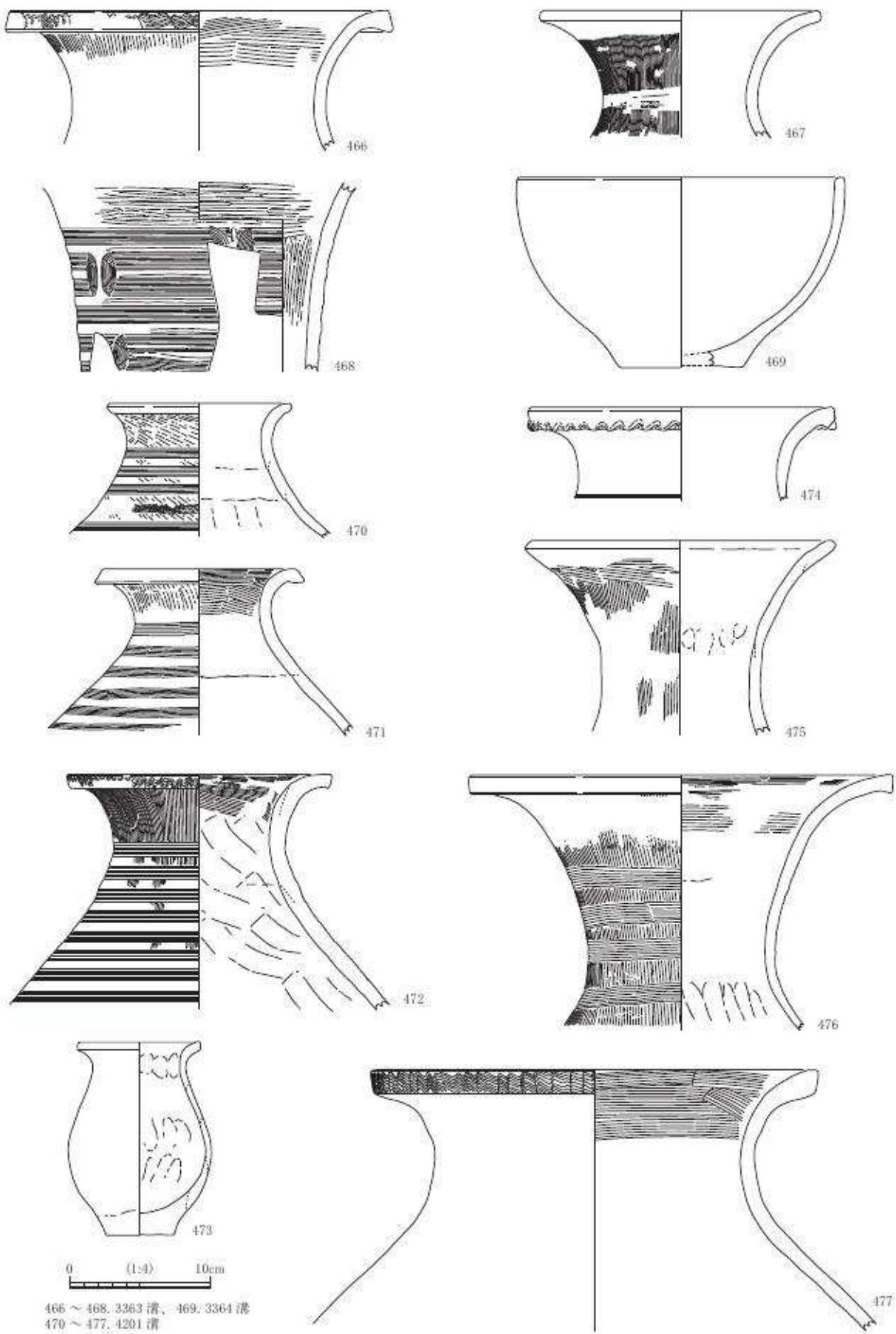
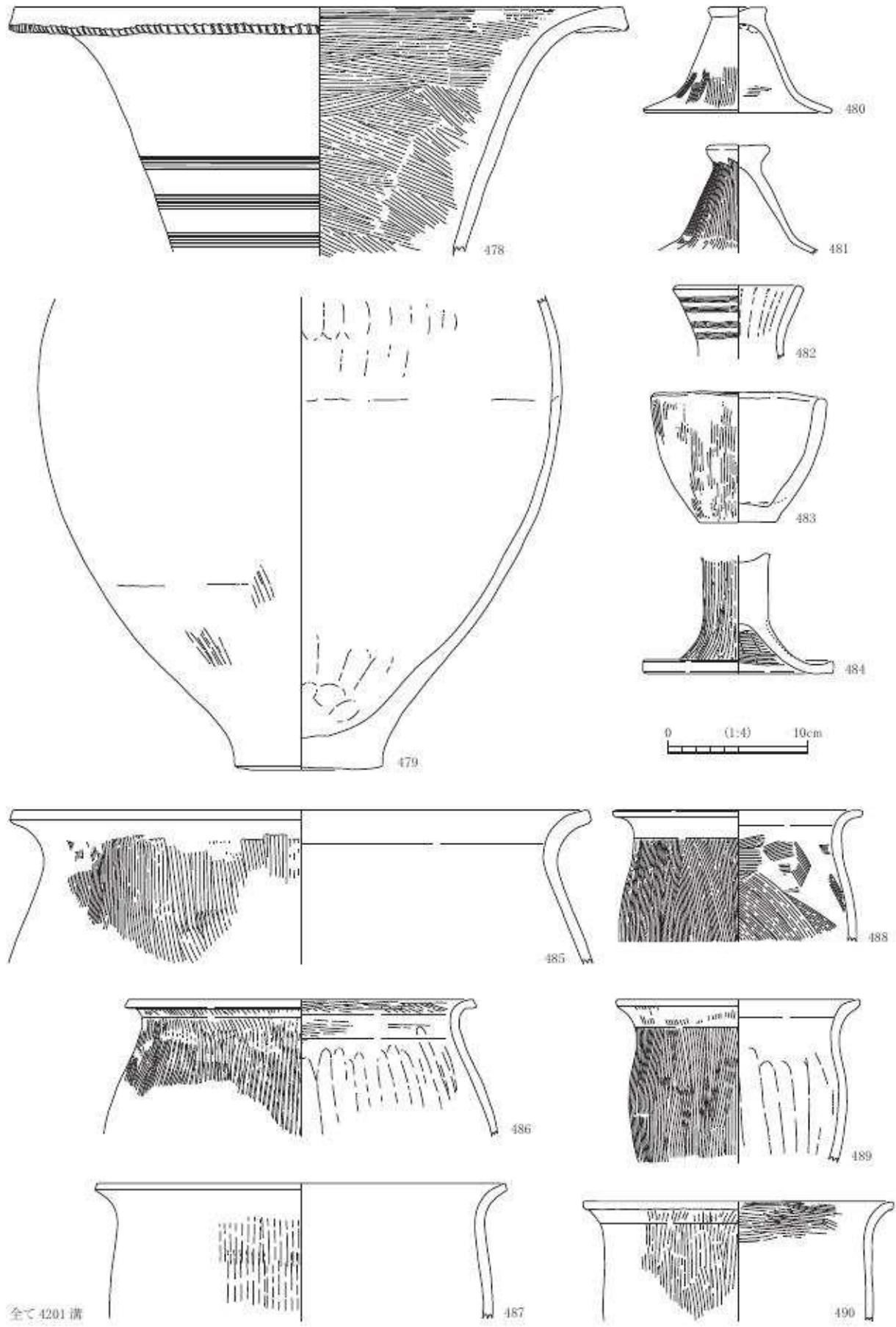


図112 周溝墓30出土遺物（1）



耳には小さな紐状の粘土を貼り足して盛り上げ、鼻孔・両目・口は細い工具を突き刺す、あるいは抉るようにして小孔をあけて表現する。特に両目については鋭い工具で抉られており、目尻が尖ったシャープな表情となっている。両耳の耳たぶにも分銅形土製品の表現と共通する小孔が貫通する。このピアス孔ともいるべき小孔は、耳の粘土紐を貼り付けた後に細い工具を突き刺して開けたものなのか、細い工具の上から粘土を貼り付け、後から工具を抜き取ったものなのか判断しかねるが、穿孔の際の工具痕が両耳ともに明瞭に残っていることから、前者の可能性が高いと考えている。色調は淡い黄橙色を呈するが、右側面が焼成時の影響で黒変する。

弥生時代の人形土製品については東奈良遺跡をはじめ各地でいくつか見つかっているが、中期のものは少ない。また同じ茨木市内の目垣遺跡では中期の人の顔を表現したものが見つかっているが、こちらは人面付土器と呼ばれるものの一部で、人形土製品とは異なるものである。中期の出土例として、また全形が完存しているものとしても稀少である。

以上のように、南辺周溝には他の周溝墓では見られないほどの多量の土器が包含されており、それとともに特異な遺物も多数含まれていた。この周溝周辺で何らかの特別な儀式が行なわれたことがうかがえる。

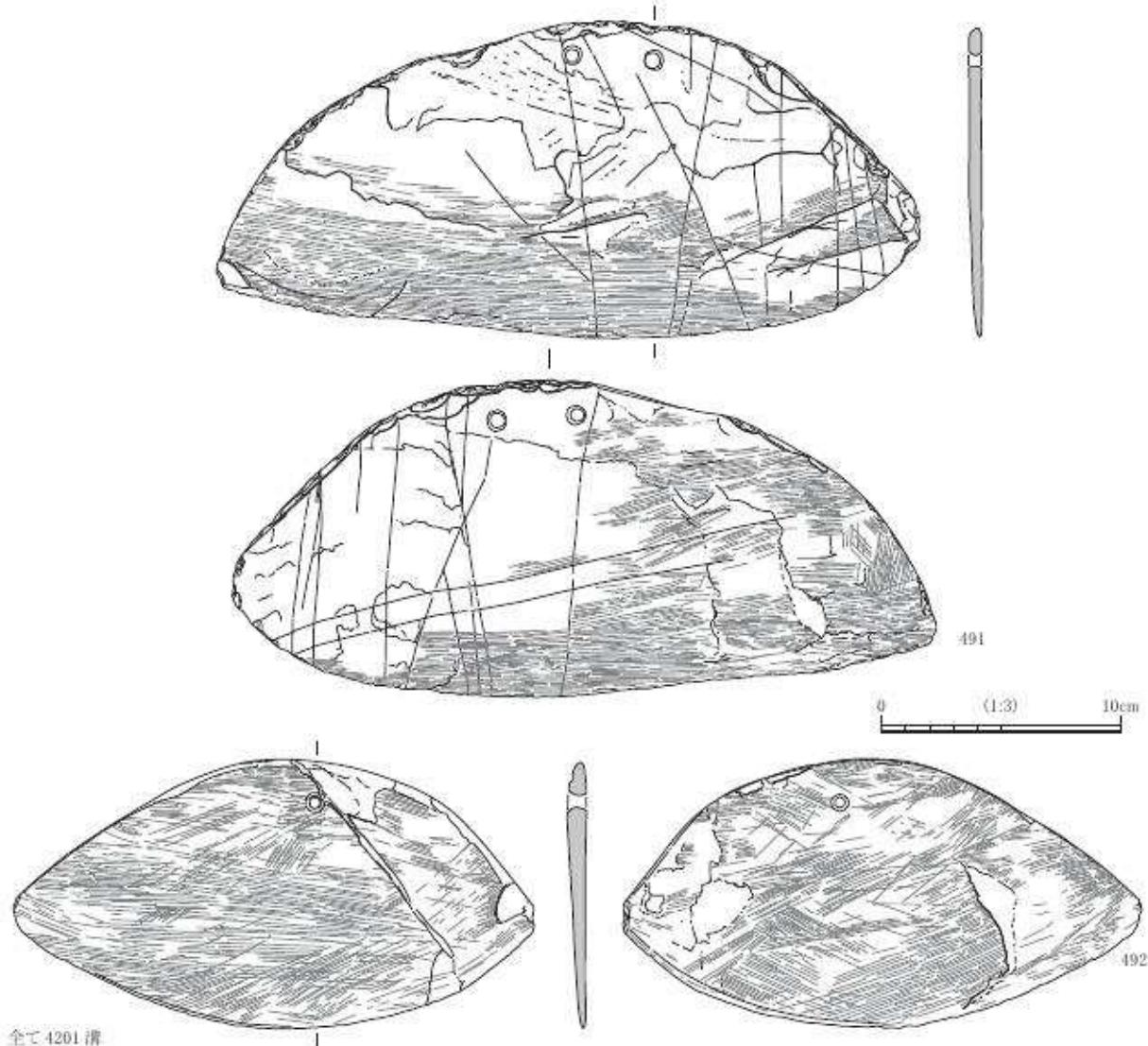


図114 周溝墓30出土遺物（3）

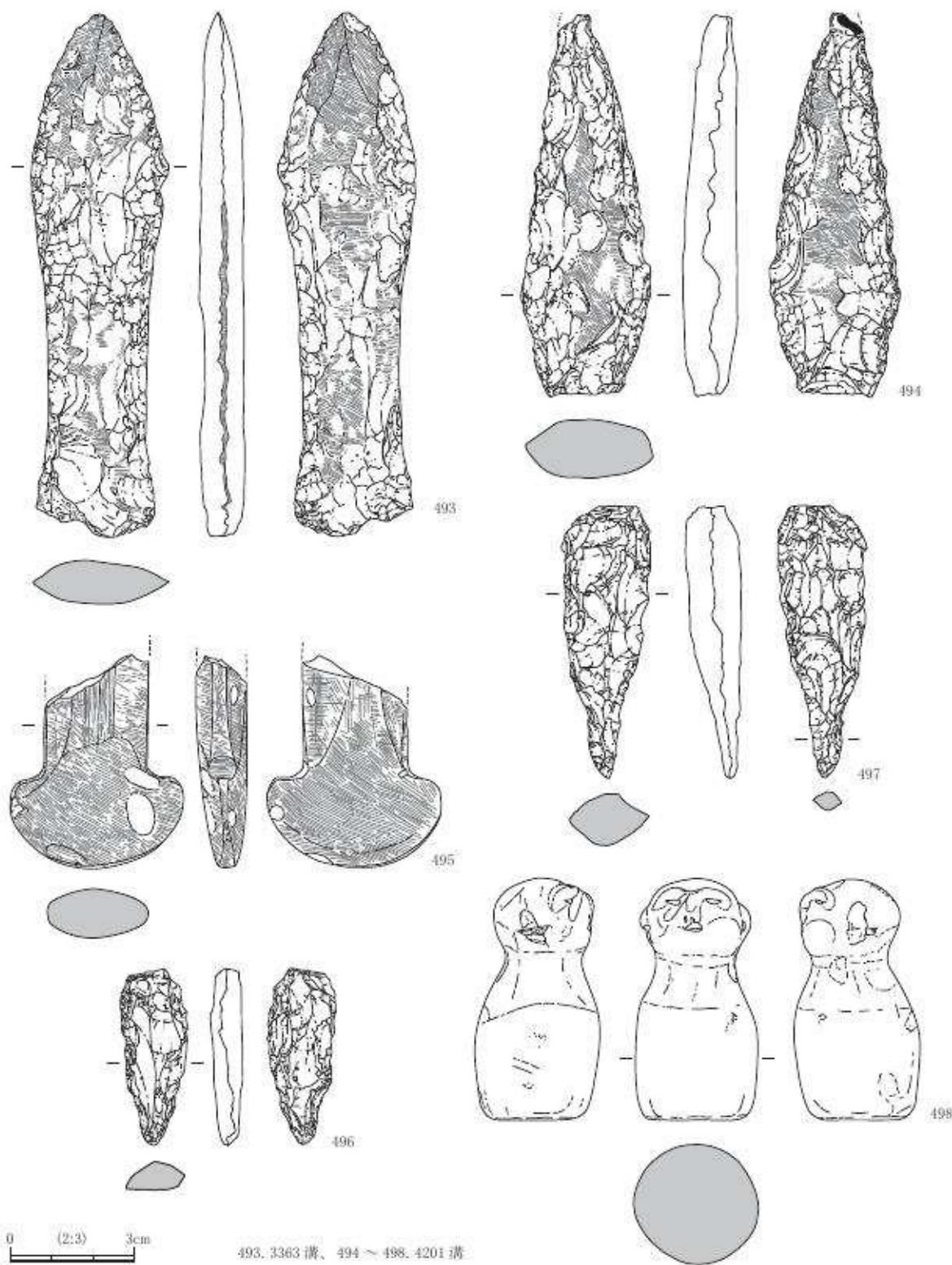


図 115 周溝墓 30 出土遺物 (4)

周溝墓 34 (図 109・118・119) 2 区と 4 区の調査区境に位置し、南側の周溝墓 24・25 と周溝を共有する。3573 墓壙を埋葬施設とする。

北辺 3558 槽から広口壺 (455)・無頸壺 (456)・鉢 (457) が出土している。455・456 は II 様式のものであるが、457 は IV 様式の所産で、埋没時期を示すものと考えられる。

3573 墓壙 (図 118・120) 周溝墓 34 の埋葬施設で、墳丘の中央に位置する。墓壙の平面形は東辺の

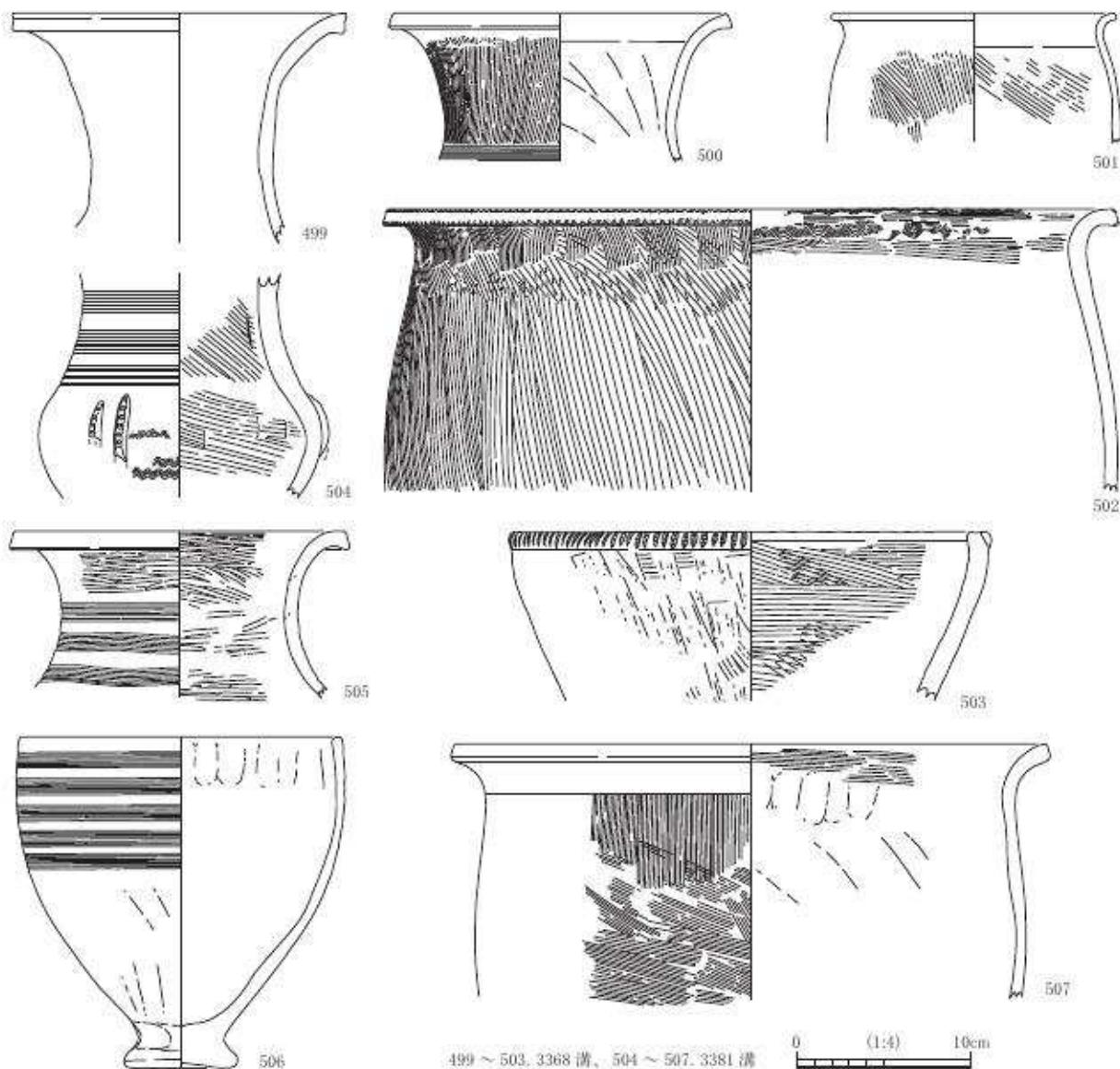


図 116 周溝出土遺物（3）

長さが 1.7 m、西辺が 1.92 m、幅は 0.9 ~ 0.93 m の僅かに歪んだ長方形で、墓壙底部の深さは検出面から約 0.07 ~ 0.1 m を測る。さらに墓壙の短辺壁際には小口穴を設けており、底板を挟むように小口板を墓壙底部に埋め込み固定するタイプの木棺が埋設されていたことが分かる。小口穴は両側とも長さ 0.65 m、幅は 0.09 ~ 0.1 m で、深さは北側が墓壙底部から 0.25 m、南側が 0.2 m である。小口穴間の内法は東側が 1.47 m、西側が 1.55 m を測る。側板についても、南西部のように墓壙底部より若干窪んだ箇所が認められることから、底板上にのっていなかったことがうかがえる。小口穴はこの側板の窪みまでおさまっていることから、3574 墓壙のように側板が底板と小口板を挟む構造であったと考えられる。主軸は墳丘の振れとほぼ同じ W - 40° - N である。

周溝墓 35 ~ 37（図 157 ~ 161） 調査区の南西隅に位置する南西 - 北東方向を軸とする一群である。周溝墓 35 と 37 は周溝を共有するが、36 と 37 は共有しない。それぞれ墳丘中央に 1 基の埋葬施設をもつ。

周溝墓 37 北辺の 4460 溝から、中期前半のものと思われる器壁が薄い甕片が出土しているが、それ以外時期を特定できる遺物は出土していない。

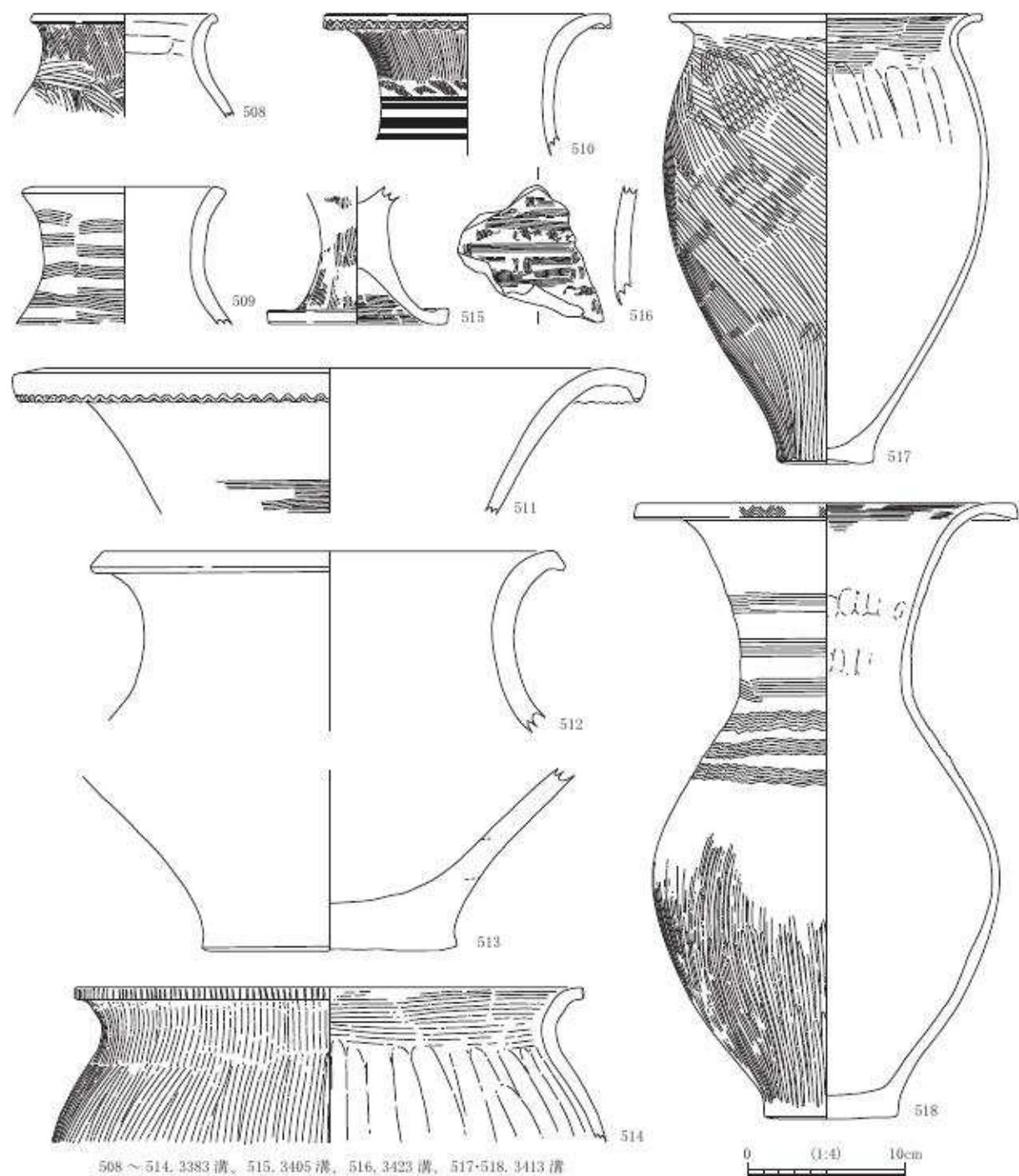


図 117 周溝墓 32 出土遺物

**4537 墓壙（図 157・160）** 周溝墓 36 の埋葬施設である。周溝墓全体を検出できていないが、墳丘の中央に位置していると思われる。墓壙は調査区西側溝に大部分を切られており、全容は不明。長方形に復原できる墓壙で、深さは検出面から 0.14 m を測る。北端壁際で小口穴が検出できたことから、木棺は底板を挟むように小口板を墓壙底部に埋め込む構造であったことが復原できる。小口穴は長さ 0.27 m、幅 0.1 m 弱、深さは墓壙底部から 0.05 m で、墓壙の幅に対してやや小さいことから、逆凸形に切り欠く小口板が使われていた可能性も考えられる。主軸は N-42°-E である。

**4559 墓壙（図 157・160）** 周溝墓 39 の埋葬施設で、墳丘の中央に位置する。墓壙の平面形は長さ 1.3 m、幅 0.65 ~ 0.71 m の長方形で、主軸は W-48°-N である。深さは 0.05 ~ 0.07 m で、東半部に

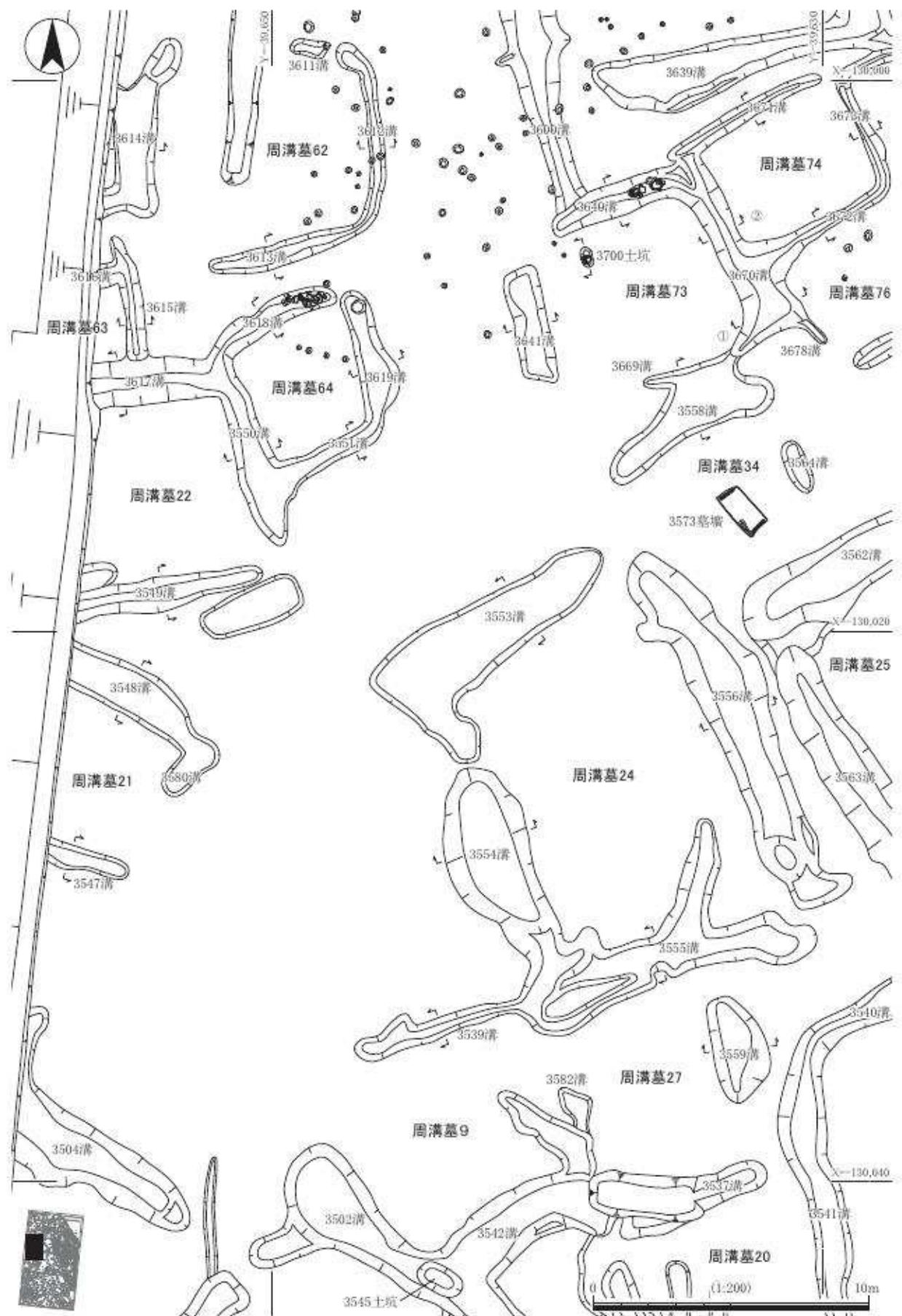


図 118 調査区西端中央北寄り 4 層下面遺構平面

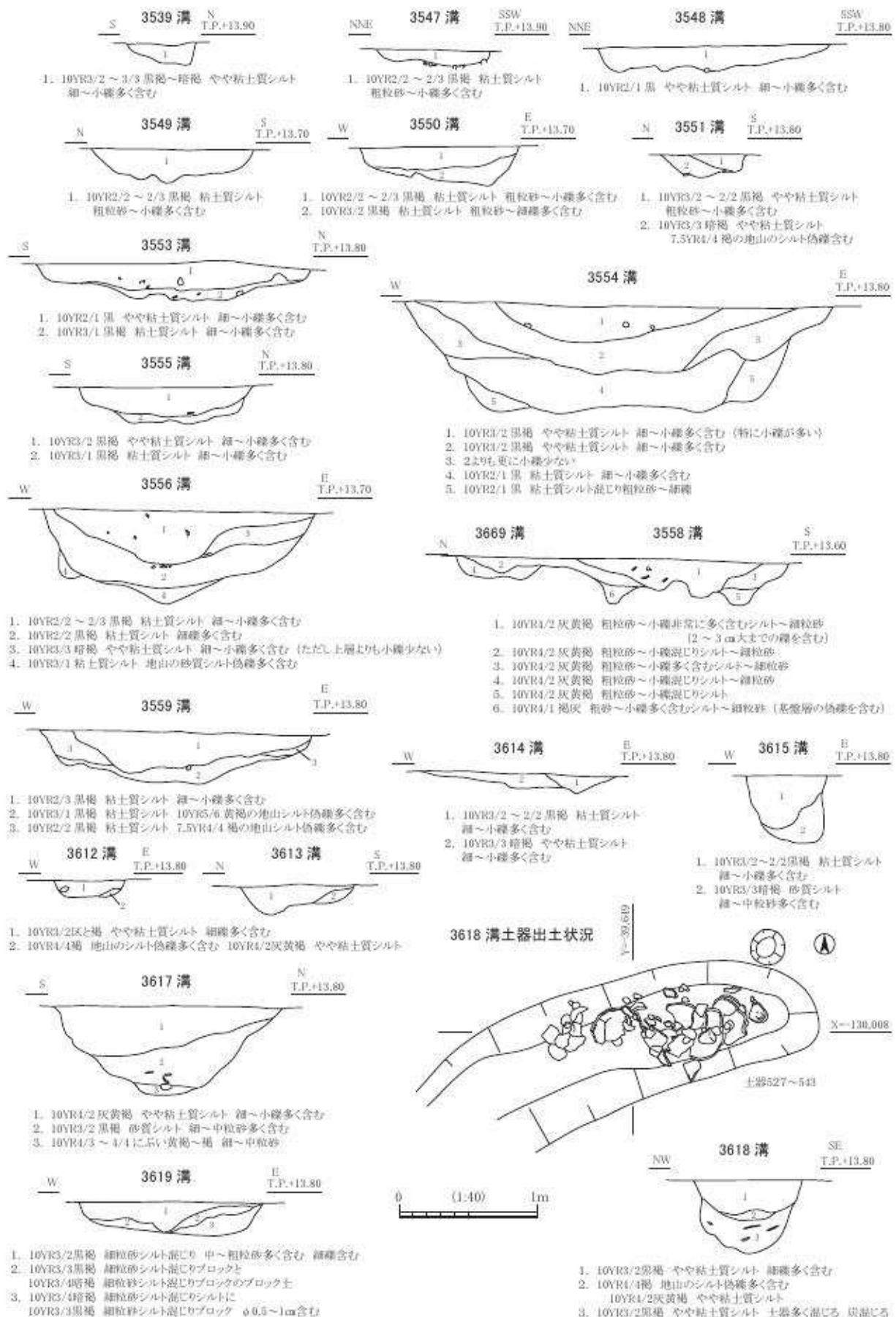


図 119 調査区西端中央北寄り周溝断面及び土器出土状況

はさらに深さ 0.01 ~ 0.02 m 程度の浅い窪みが認められる。埋土はオリーブ褐色の偽礫を含む暗オリーブ褐色のやや粘土質シルトで、窪み内は暗灰黄～オリーブ褐色のやや粘土質シルトである。木棺の痕跡は認められなかった。

4567 墓壙（図 157・160） 周溝墓 37 の埋葬施設で、墳丘の中央に位置する。墓壙の平面形は長さ 1.9 m、幅 0.85 ~ 0.94 m の長方形で、墓壙底部までの深さは検出面から 0.16 ~ 0.23 m を測る。その墓壙底部の両端には小口穴が設けられており、底板を挟むように小口板を墓壙底部に埋め込む構造の木棺が据えられていたことが分かる。東側の小口穴は長さ 0.58 m、幅 0.11 m、深さは墓壙底部から 0.06 m、西側の小口穴は長さ 0.55 m、幅約 0.08 ~ 0.1 m、深さは墓壙底部から 0.11 m である。小口穴間の内法は 1.25 m で、この小口板間の木棺が据えられていた範囲が若干窪んでいる。なお非常に不明瞭ではあったが、断面の観察で側板と小口板、および底板の痕跡が検出でき、底板の幅が約 0.45 m であったこと、また側板が底板を挟む構造であったことが確認できた。木棺痕跡は粗粒砂～小礫混じりの灰黄褐色

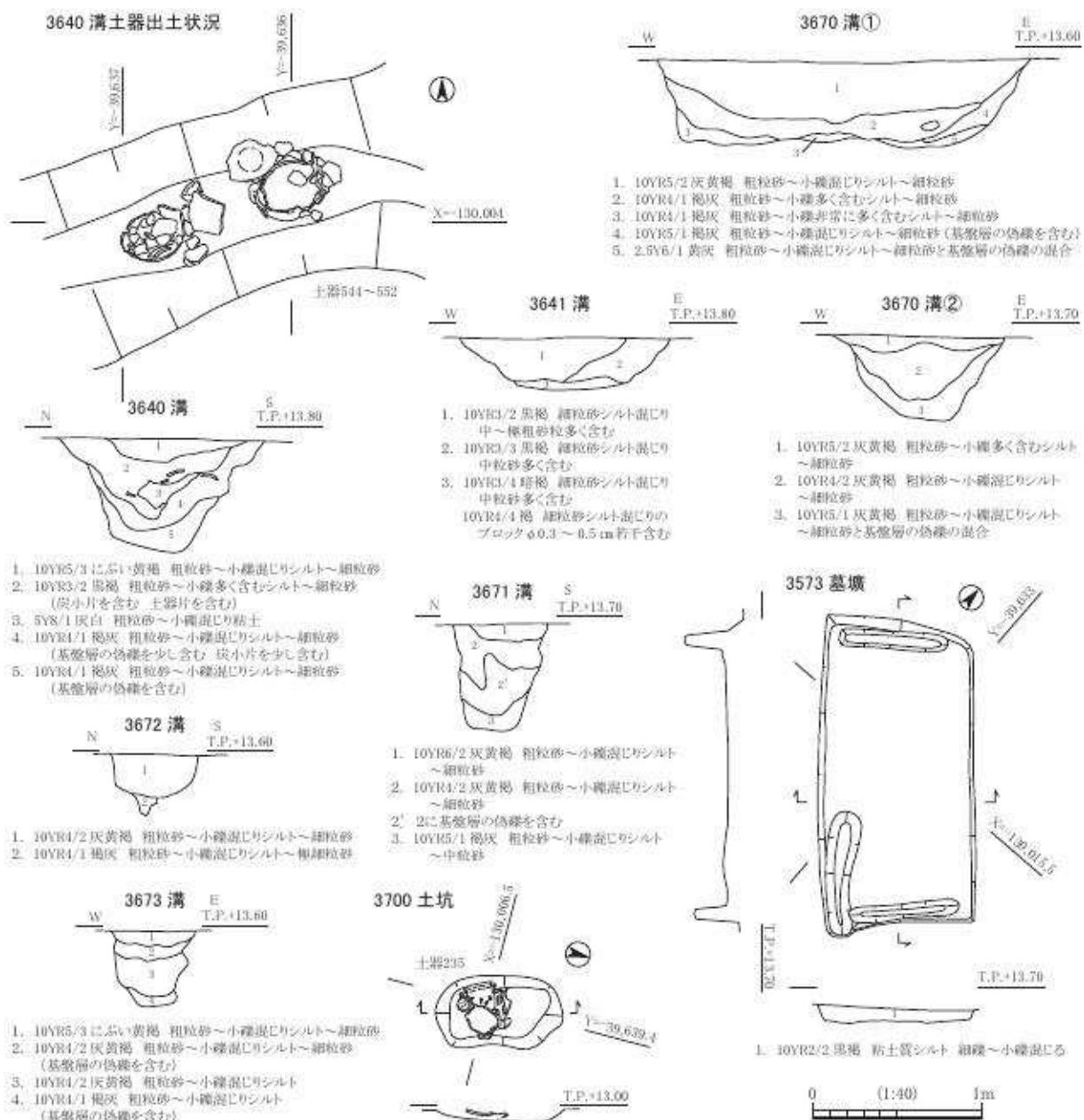


図 120 調査区西端中央北寄り遺構平面・断面及び土器出土状況

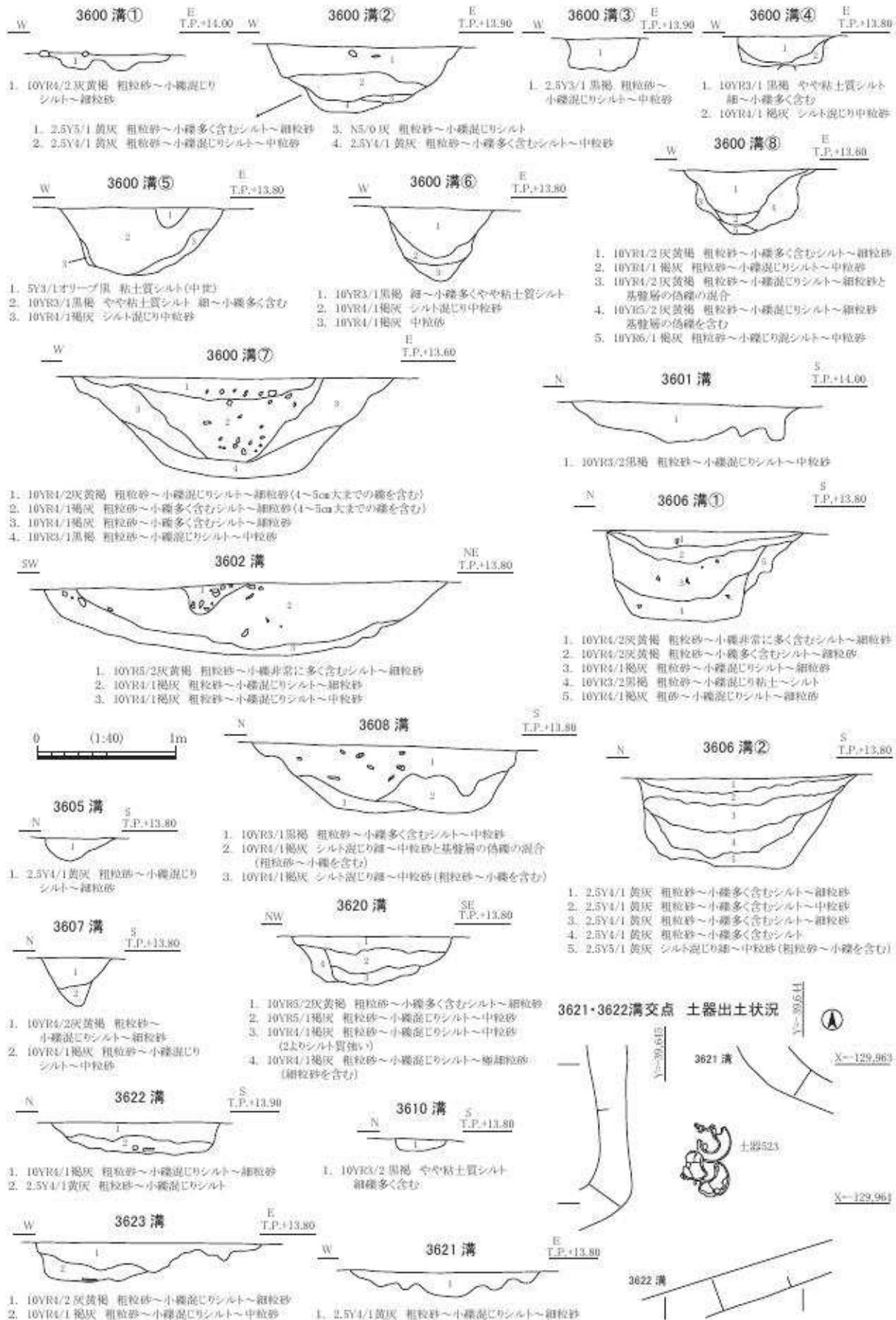


図 121 調査区北方周溝・3600 溝断面及び土器出土状況



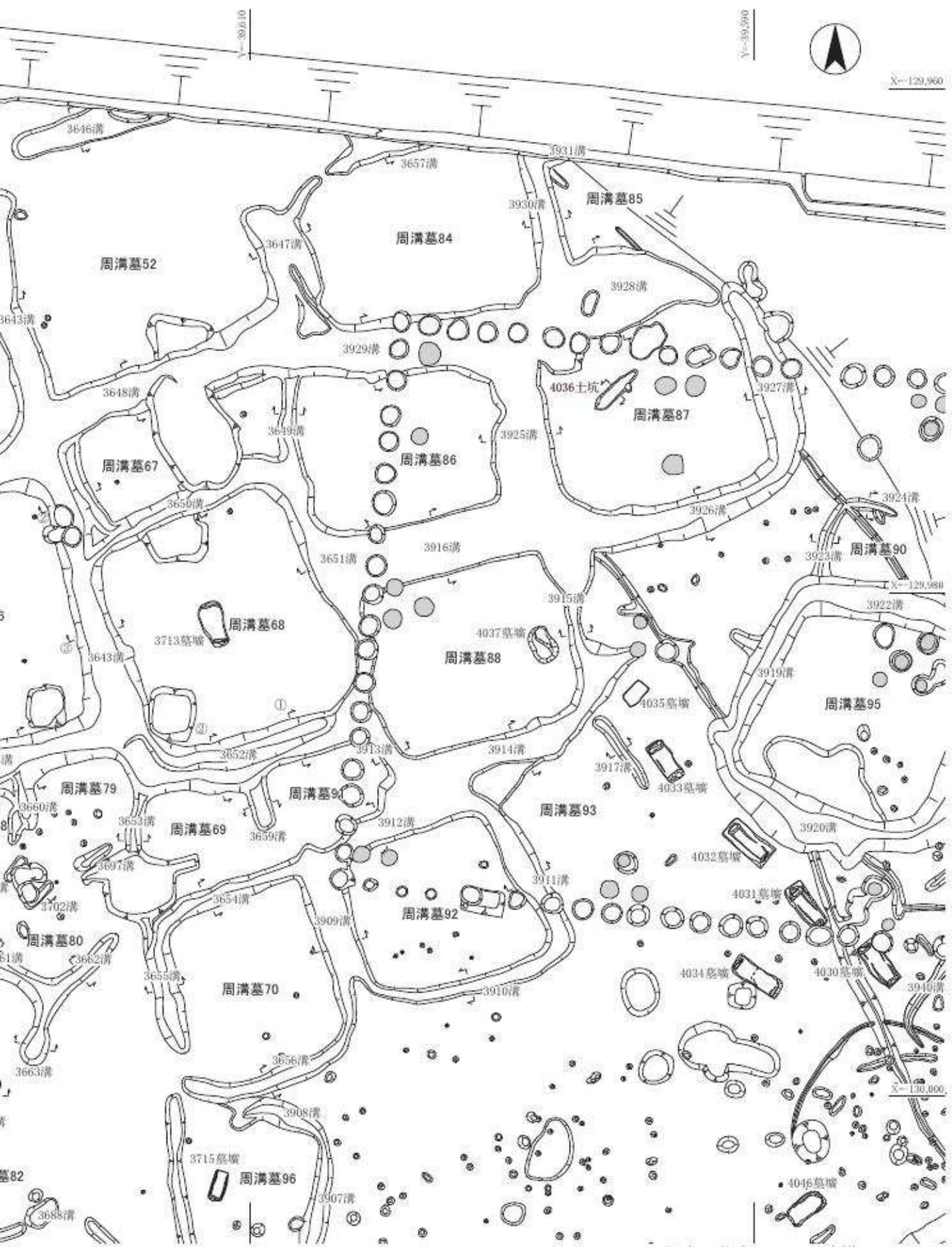


図 122 調査区北方4層下面遺構平面

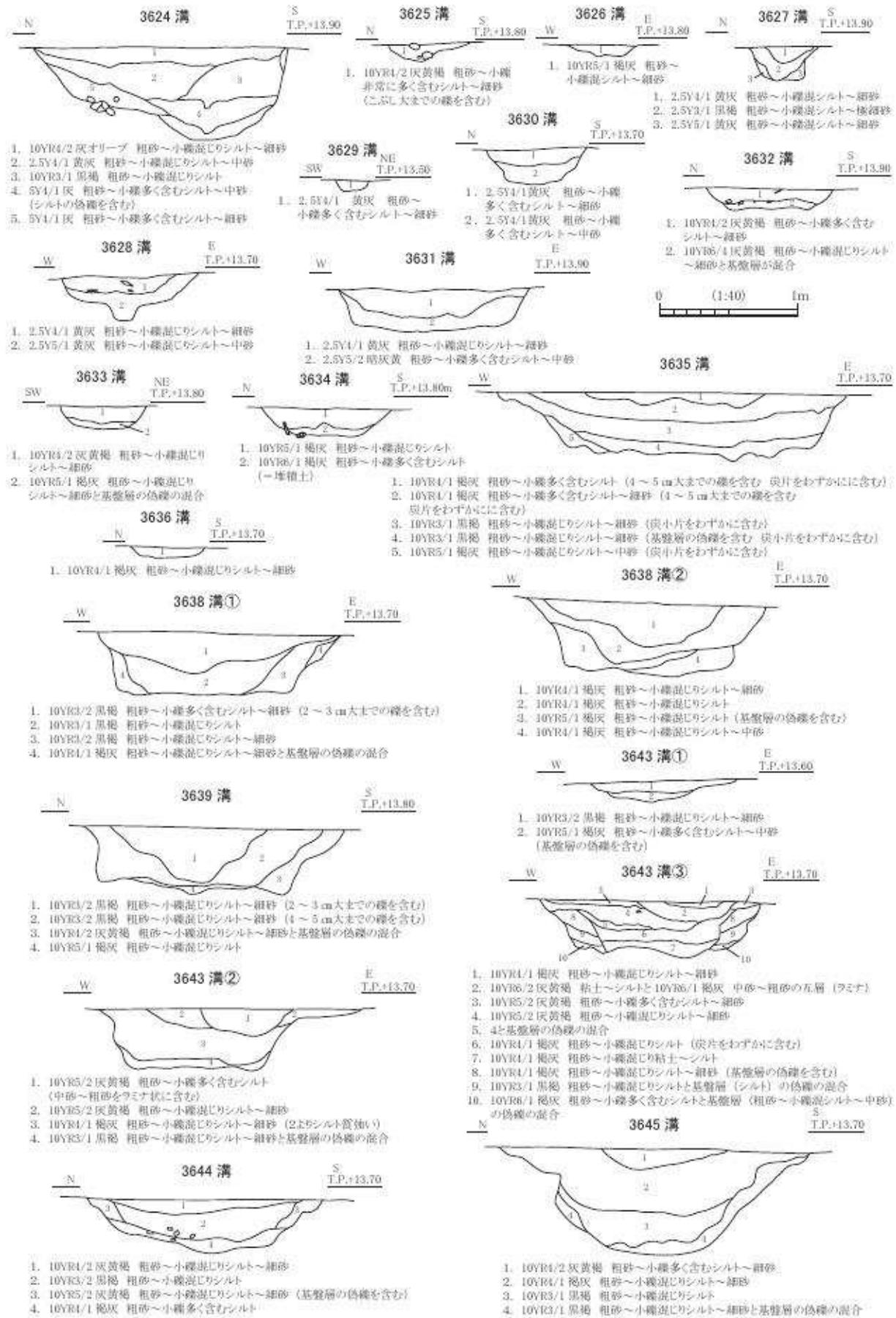


図 123 調査区北方周溝断面 (1)

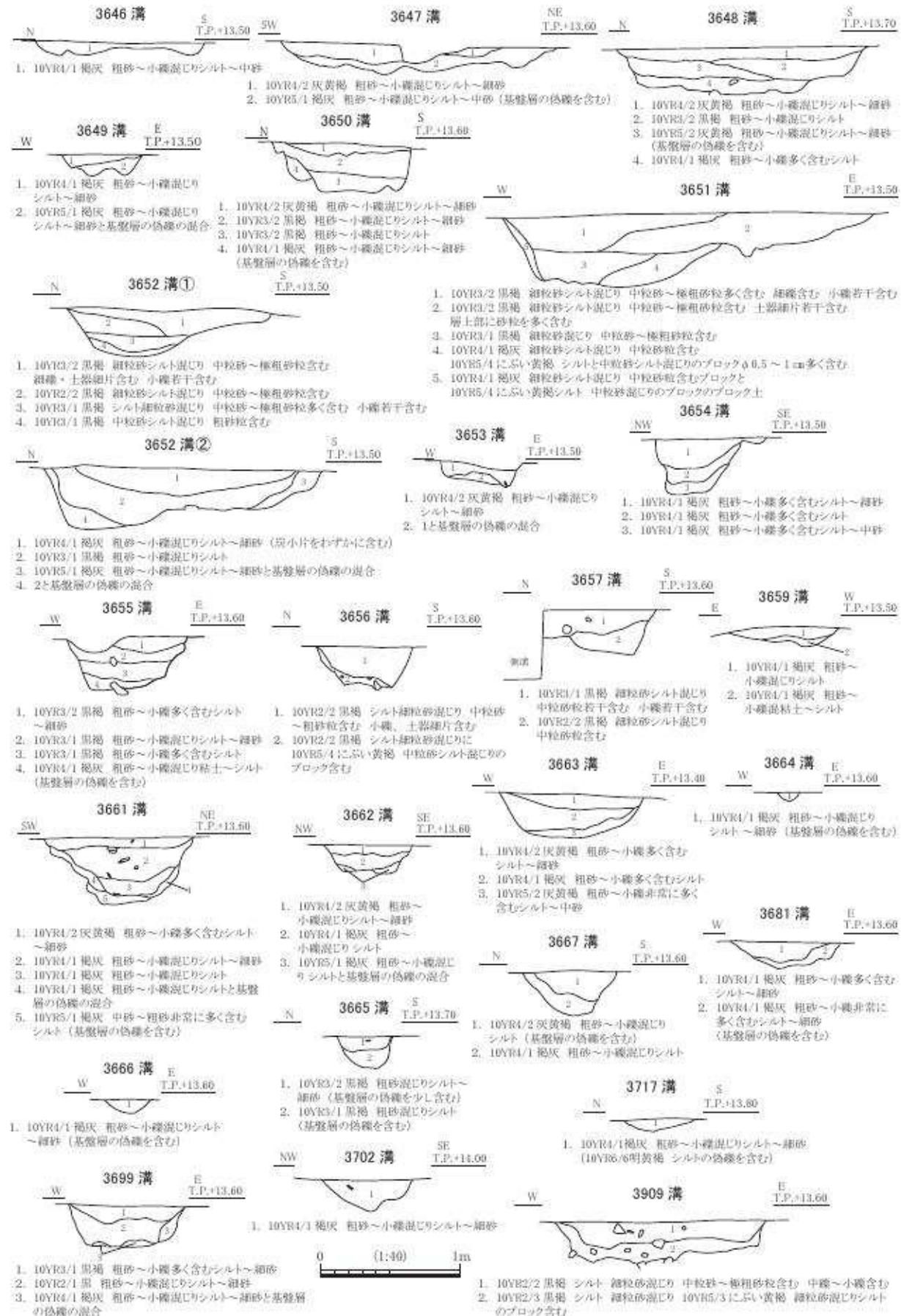


図 124 調査区北方周溝断面 (2)

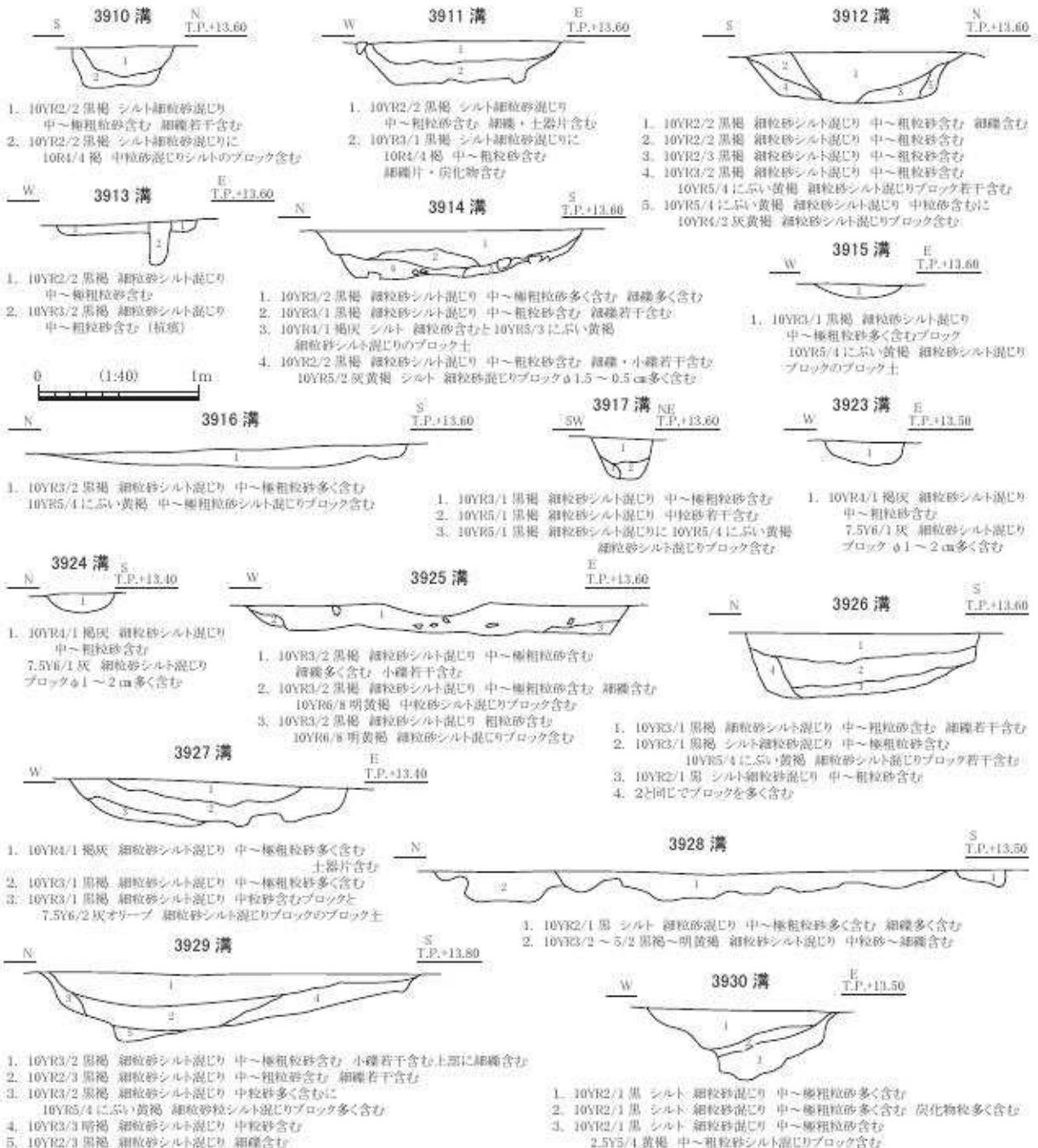


図 125 調査区北方周溝断面 (3)

～黒褐色のやや粘土質シルトやにぶい黄橙の粘土質シルトで、木棺内の埋土は粗粒砂～小礫や偽礫を含む黒褐色のやや粘土質シルトである。主軸は墳丘の振れと同じN $^{\circ}$  67-Eである。

**4568 墓壙 (図 157・161)** 周溝墓 35 の埋葬施設で、墳丘の中央に位置する。墓壙の平面形は長さ 1.85 m、幅 0.62 m の長方形で、墓壙底部までの深さは検出面から 0.07 ~ 0.1 m を測る。その墓壙底部の両端には小口穴を設けるが、他の墓壙のような溝状の小口穴とは異なり、幅の狭い梢円形を呈している。東側の小口穴は周囲が若干乱れるが、長さ 0.38 m、幅 0.25 m、深さは墓壙底部から 0.14 m、西側の小口穴は長さ 0.23 m、幅約 0.18 m、深さは墓壙底部から 0.15 m で、小口穴間の内法は約 1.25 m を測る。この墓壙に埋設された木棺も、小口板下端を墓壙底部に埋め込み固定する構造であるが、その小口板は逆凸形に切り欠いた形状で、その形状に対応する凹状の切り欠きをもった底板上にのっていたと考えら

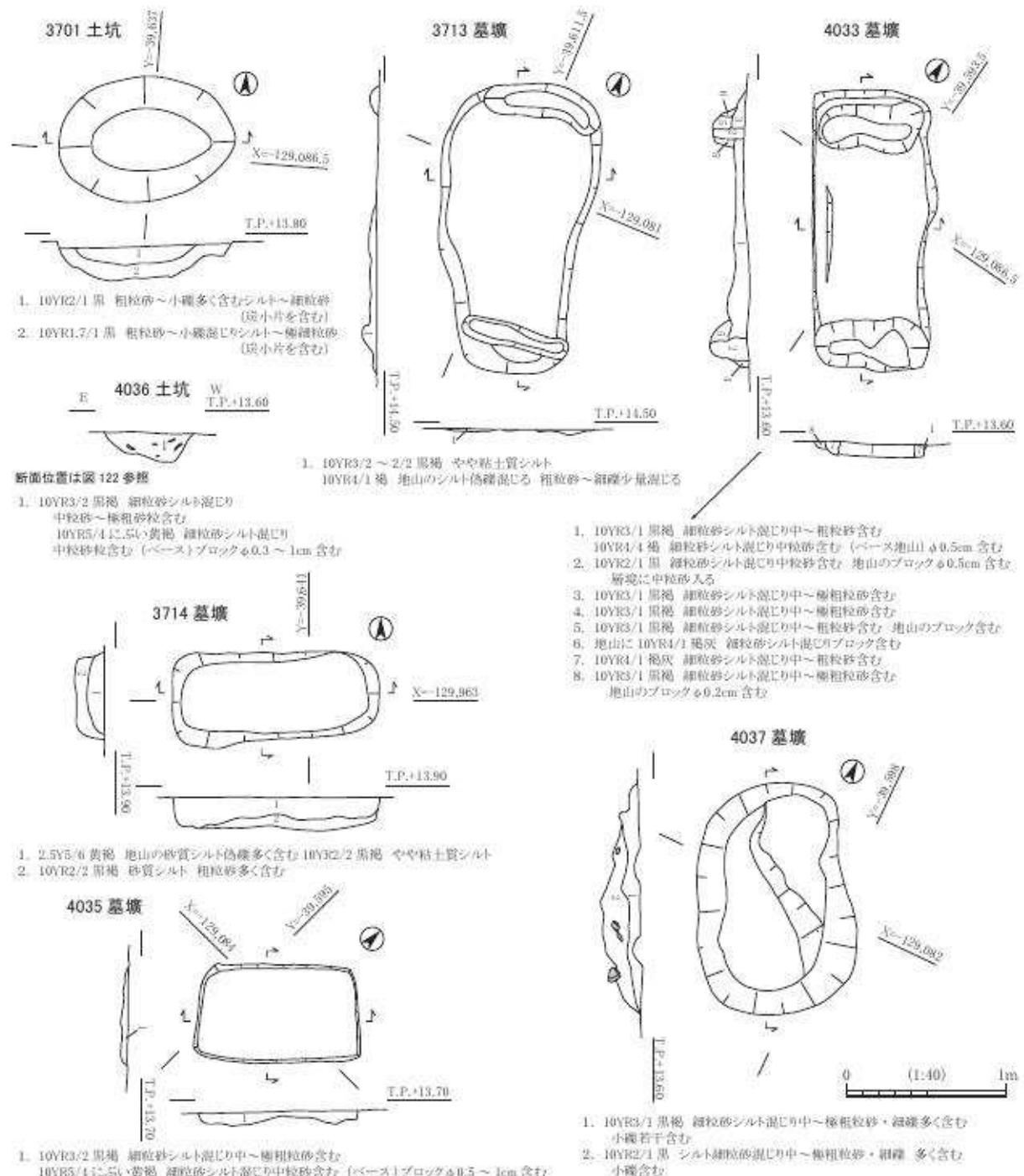


図 126 調査区北方遺構平面・断面

れる。また側板先端が当たる部分の墓壙輪郭が若干外側に張り出していることから、H字状に側板が小口板を挟む構造であったことがうかがえる。埋土は粗粒砂～小礫を含む黒褐色のやや粘土質シルトなど3層である。主軸は墳丘の振れと同じN-58°Eである。

周溝墓 46・47・49・50 (図 121～123・127) 調査区北西隅にまとまる一群である。周溝を共有して列状に並ぶ。

3621・3622溝の交点や3623溝からII様式の広口壺(523・524)が出土している。前者は供獻土器と思われる。

3714墓壙(図 122・126) 周溝墓46の埋葬施設で、墳丘のはば中央に位置する。墓壙の平面形は長さ1.3

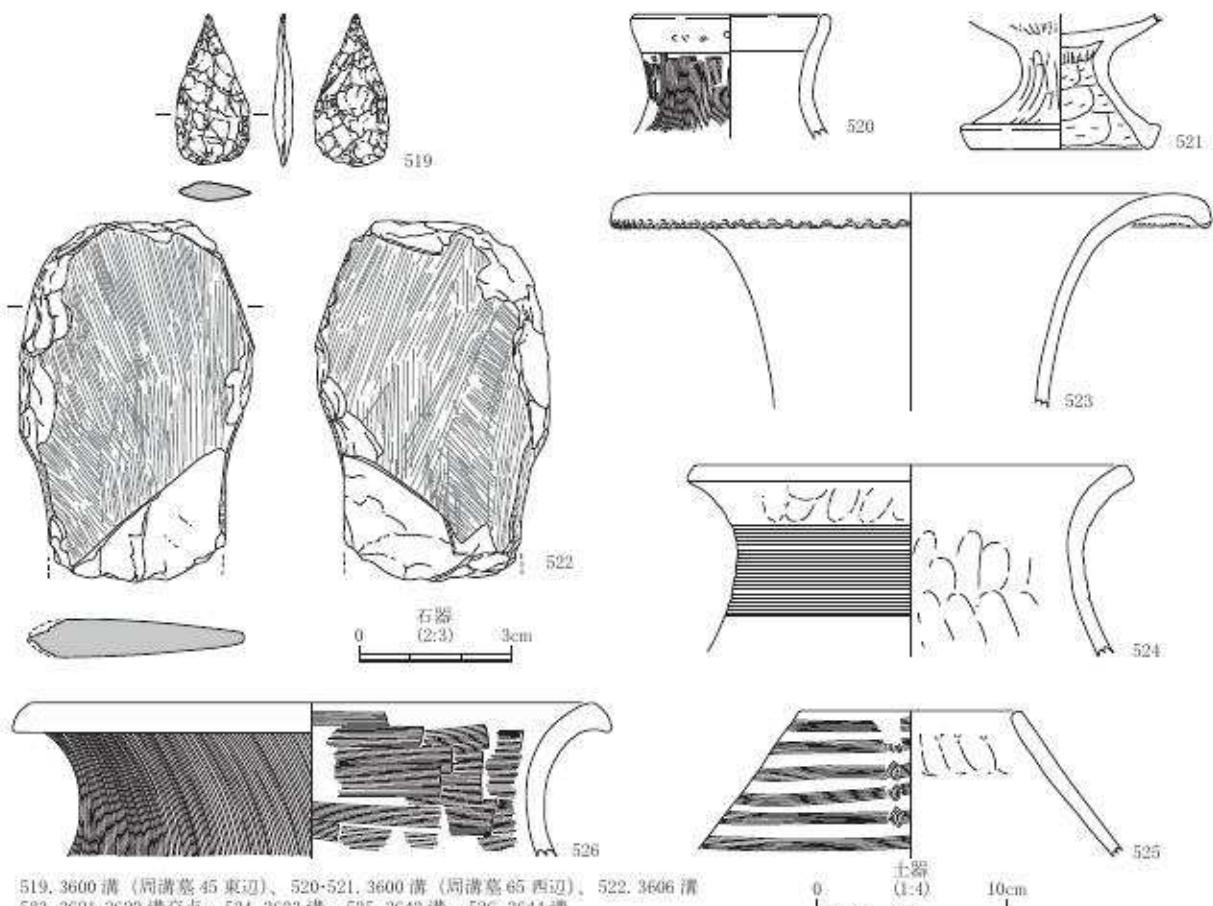


図 127 3600 溝・周溝出土遺物

m、幅 0.55 m の隅丸長方形を呈する。墓壙の壁はほぼ垂直で、深さは検出面から約 0.2 m を測る。埋土は下層が粗粒砂を多く含む黒褐色の砂質シルト、上層が地山の偽礫を多く含む黒褐色のやや粘土質シルトである。主軸は墳丘の主軸にほぼ直交する N—90°—E である。木棺の痕跡は認められなかった。

周溝墓 51・52・66～68・84・86（図 121～125・127・131） 調査区の北端部にまとまる南南東—北北西を軸とする一群である。周溝を共有し、きれいに綱の目状に並ぶ。

3643・3644・3651 溝からは II 様式の無頸壺（525）・広口壺（526・555）が出土している。525 は櫛描直線紋の途中に扇形紋を追加している。このほか周溝墓 86 の北辺 3929 溝からは大型器台に付けられていた直径 4.4cm の大型の竹管円形浮紋（557）が出土している。V 様式のもので、おそらく埋没最終段階の混入と考えられる。

3713 墓壙（図 122・126） 周溝墓 68 の埋葬施設で、墳丘の中央に位置する。墓壙の平面形は北西部がやや張り出しているため茄子形を呈するが、本来は長方形であったと思われる。現状では長さ 1.84 m、幅 0.7～1.0 m を測る。深さは南半では約 0.05 m を測るが、北半は非常に浅く既に墓壙底部が現れている部分もあった。その墓壙両端で小口穴を検出した。北側の小口穴は長さ約 0.75 m、幅約 0.2 m、深さ 0.06 m で、南側の小口穴は長さ 0.68 m、幅 0.12～0.16 m、深さは墓壙底部から 0.04 m を測る。小口穴間の内法は約 1.3 m である。この小口穴の存在から、木棺は底板を挟むように小口板を墓壙底部に埋め込む構造であったことが復原できるが、側板と小口板との関係は明らかでない。小口穴が墓壙の幅いっぱいまで及んでいることから、小口板が側板も挟む構造であったかもしれない。主軸は墳丘の振れとほぼ同じ W—20°—N である。

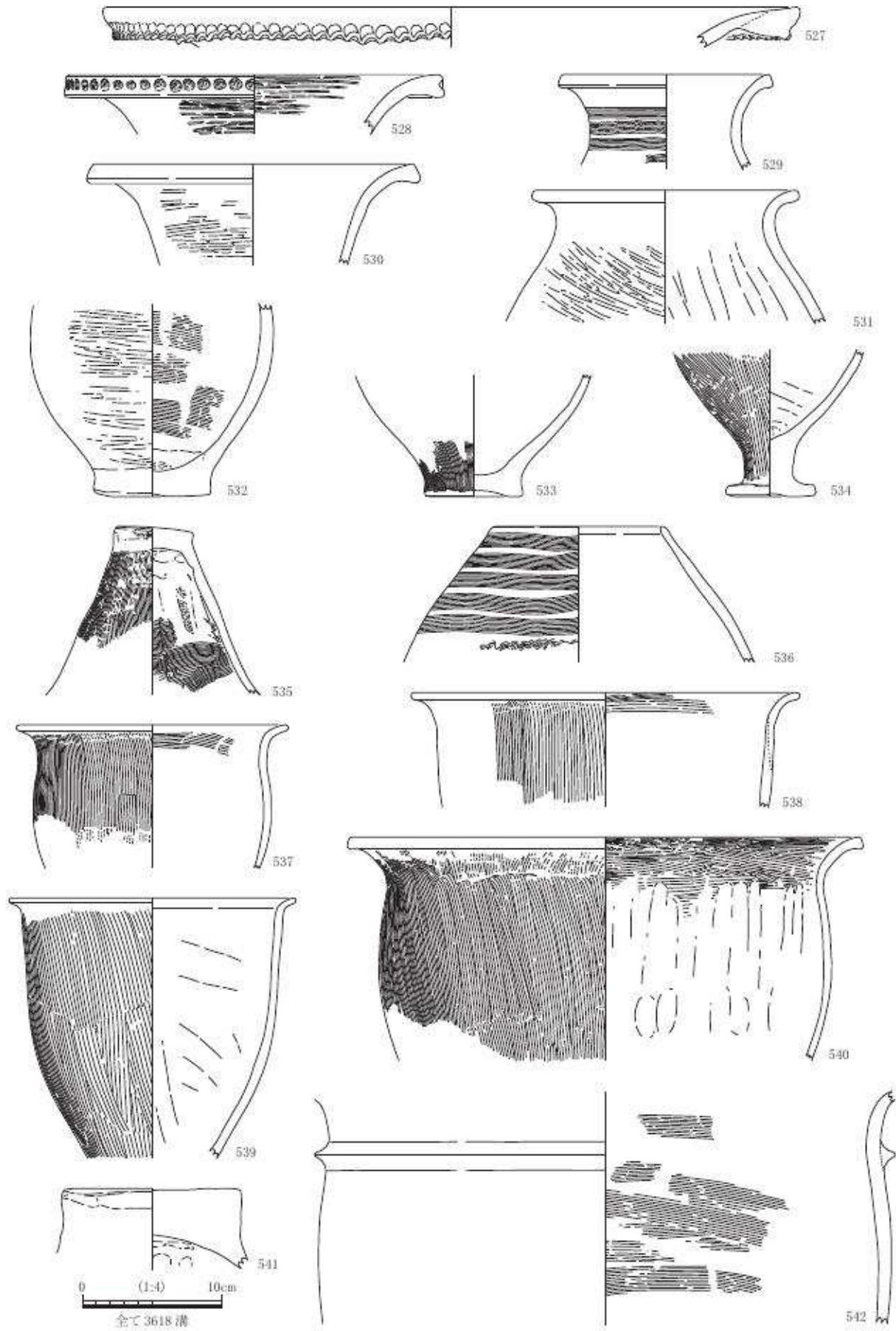


図 128 周溝墓 64 出土遺物 (1)

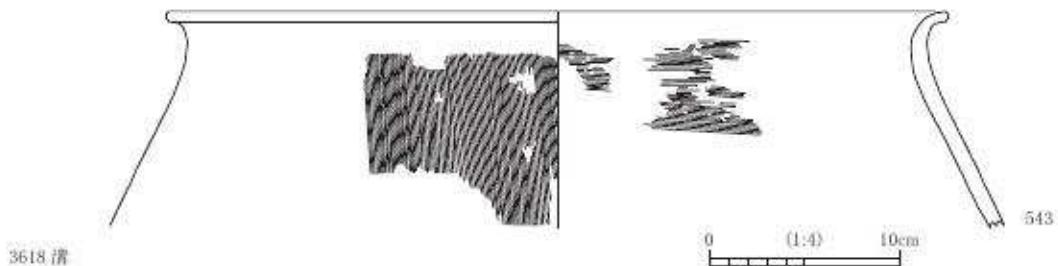


図 129 周溝墓 64 出土遺物（2）

周溝墓 59・65（図 121～123・127）2 区の中央に位置する。周囲の周溝墓と周溝を共有してきれいに列状に並ぶ。

3600 溝の報告でも記したとおり、周溝墓 65 西辺付近の 3600 溝からはIV 様式の台付鉢（521）や IV 様式末～V 様式初頭の短頸壺（520）が出土している。これは周溝墓の時期を示すものではなく、後に掘り直された 3600 溝の時期を示すものと考えている。このほか 3606 溝からは磨製の石剣（522）が出土している。522 は下半に闊を作り出していることから剣形と判断したが、横断面形は片側が身厚で、もう一方が薄く剣とは言い難い。石庖丁を転用したためか。

周溝墓 73・74・76（図 118～120・130・131）3600 溝の南端にまとまる一群である。周溝を共有して列状に並ぶ。

3640・3641・3670・3679 溝から広口壺・甕・台形土器・ミニチュアの鉢（544～554・556・558・559）などが出土している。特に 3640 溝からは破碎した状態の土器が多量に出土した。時期が特定できるものについてはどれも II 様式のものである。551 は最終調整を施さない雑な作りの土器である。鉢として作ったのか、あるいは壺の作りかけか。土器以外には 3640 溝から凝灰岩製の扁平片刃石斧（550）が出土している。刃部は約 40 度の片刃である。

周溝墓 95（図 132・133・138・139）調査区北東部に位置する。西側に列状に並ぶ周溝墓群とは振れが異なっており、明らかに西側とは別の群に属していることが分かる。小型の周溝墓 90 とのみ周溝を共有する。

南辺の 3920 溝から II 様式の広口壺（560～563）・甕（566～568）・鉢（569）などのほか、サヌカイト製の打製石錐（564）が出土している。また東辺 3921 溝からは粘板岩製の磨製石剣（565）が出土した。切先を欠く先端部片で、身部には鏽が認められるが、両面とも中心軸から僅かにずれる。刃部両側縁はともに 1 mm 程度の面を持ち、刃とは言い難い。大形で幅が広く石戈の可能性も考えられる。

3715 墓壙（図 106・108）周溝墓 96 の埋葬施設で、墳丘の中央に位置する。墓壙の平面形は長さ 1.17～1.24 m、幅 0.6 m のやや小型の長方形で、小児用と考えられる。全体を 1～2 cm ほど掘り下げた段階で、側板穴と小口穴が検出できた。ただし北側の小口穴は検出できなかった。これにより、底板を挟むように小口板と側板を墓壙底部に埋め込む構造の木棺が埋設されていたことが復原できる。据え付け穴の幅は南側の小口穴部が少々乱れるが、0.08～0.11 m 程度で、深さは 0.04～0.09 m、側板穴間の内法は約 0.4 m を測る。埋土は粗粒砂～細礫を少量含む黒褐色のやや粘土質シルトである。主軸は墳丘の振れとほぼ同じ N—17°—E である。

周溝墓 97・98（図 132～137・141～143）墓域と集落域とを画する環濠 3001 溝よりも内側の集落域側にある。両者は周溝墓 18 に次ぐ大型の周溝墓で、97 の墳丘は 11.7 × 11.6 m、98 の墳丘は

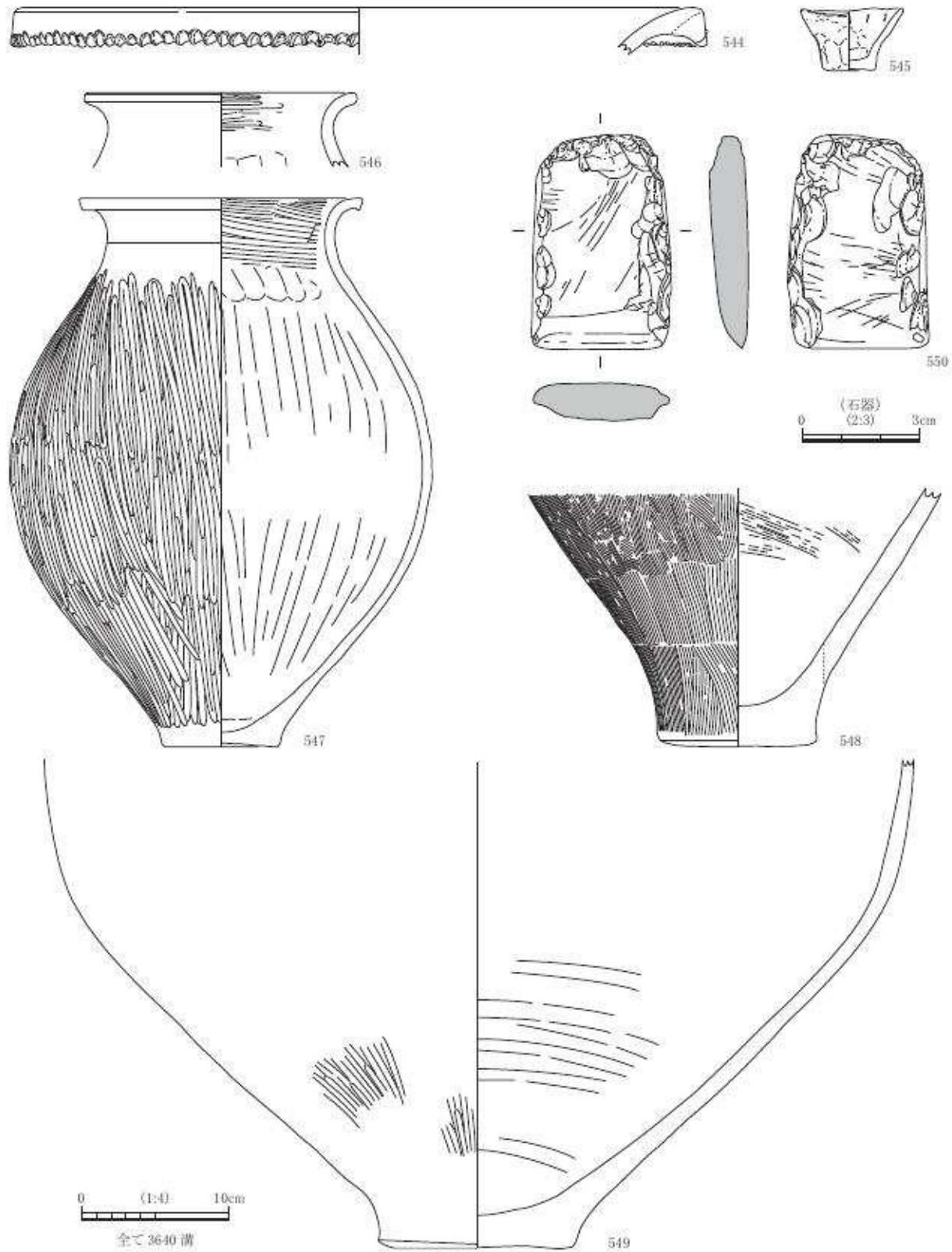


図 130 周溝墓 73 出土遺物

12.8 × 10.0 m以上（東辺未検出）を測る。3001 溝は周溝墓 18 の東側で大きく折れて北東へと向きを変えるが、周溝墓 97・98 もそれに呼応するように周溝墓 18 の北東側に、しかも 3001 溝に沿って並んでおり、その密接な関係がうかがえる。両者の周溝は幅が 2.5 mほどあるにもかかわらず、他の周溝墓の周溝に比べ非常に浅く、深さ 0.2 m程度しかない。また周溝墓 98 の墳丘裾には幅 0.2 m程度の

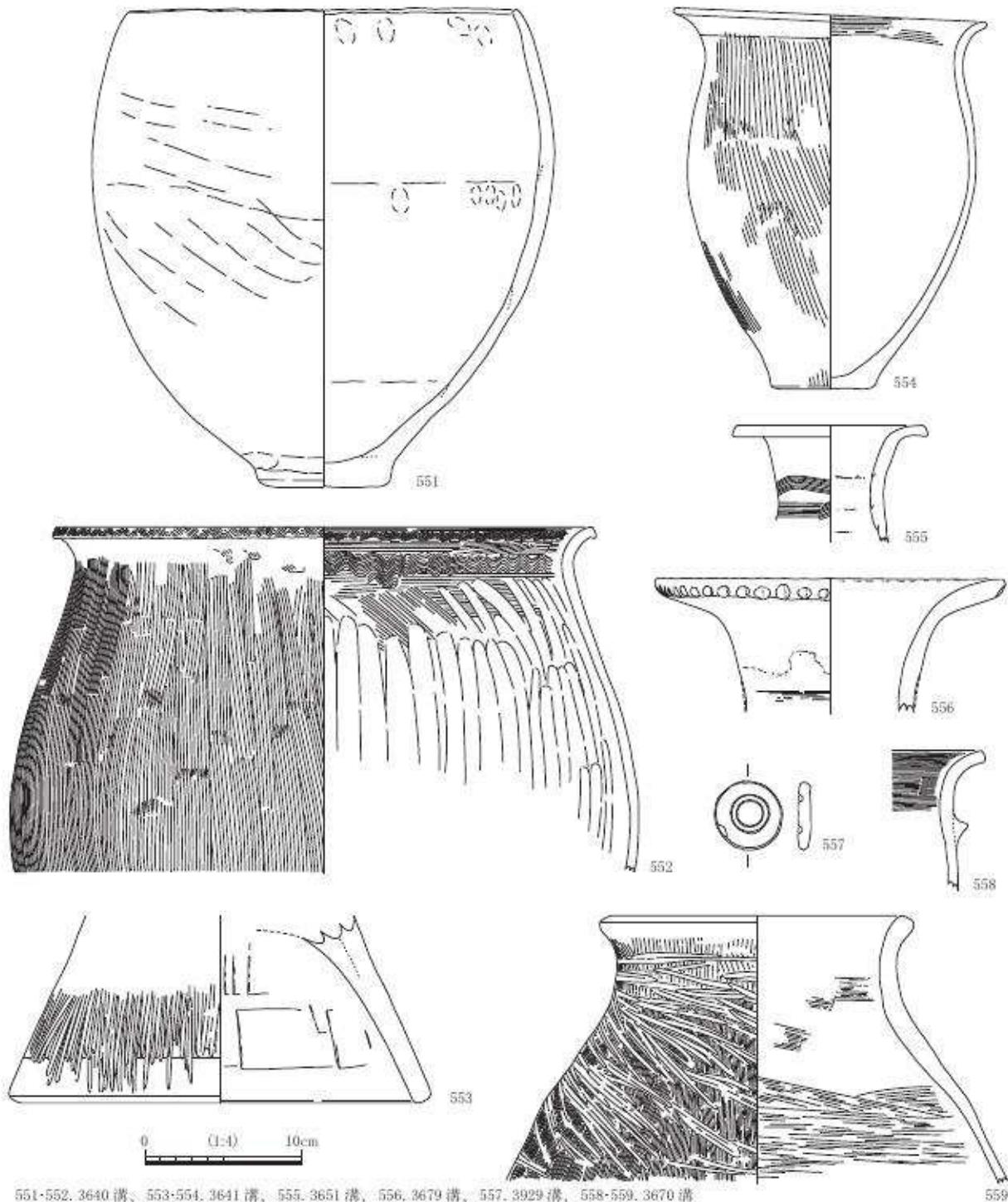


図131 周溝出土遺物（4）

細溝がめぐっている。墳丘を構築する際の基準溝のようなものかとも考えたが、その性格は不明。今後の類例の増加を待ちたい。

3900・3014・3901・3902・3903・3904・3905溝から広口壺・短頸壺・台付壺・甕・鉢・台付鉢・高杯器台（576～607）などが多数出土した。すべてIV様式のもので、中でも前半のものが多い。590は外面上半に左上がりのタタキを施す鉢。594・604は大型の器台で、供獻用と考えられる。3903溝からやや小型の太形蛤刃石斧（608）も出土している。凝灰岩製。

4027墓壙（図132・134）周溝墓97の埋葬施設で、墳丘の中央やや南寄り、4028墓壙の南東側に

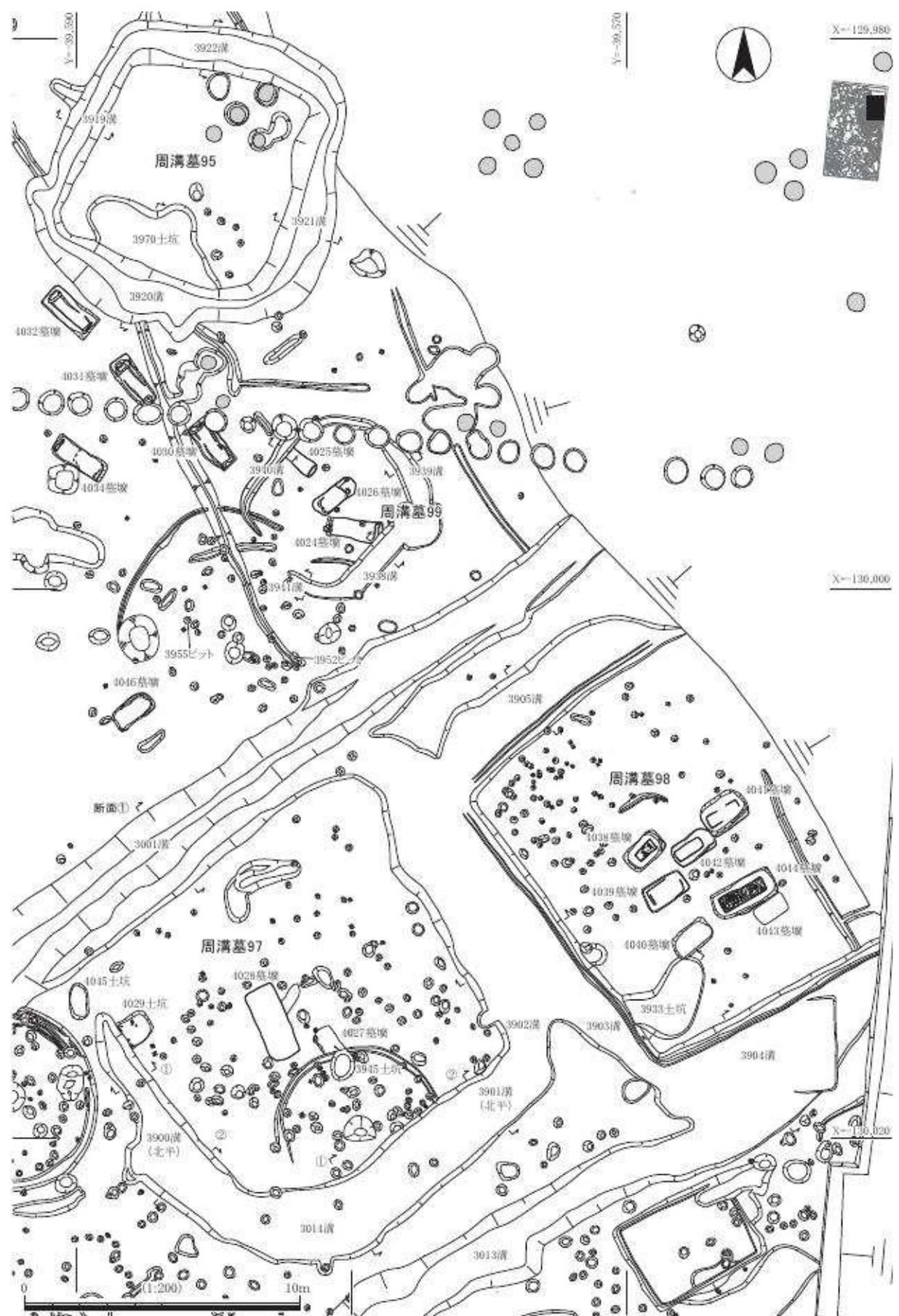


図 132 周溝墓 95・97～99 周辺 4 層下面遺構平面

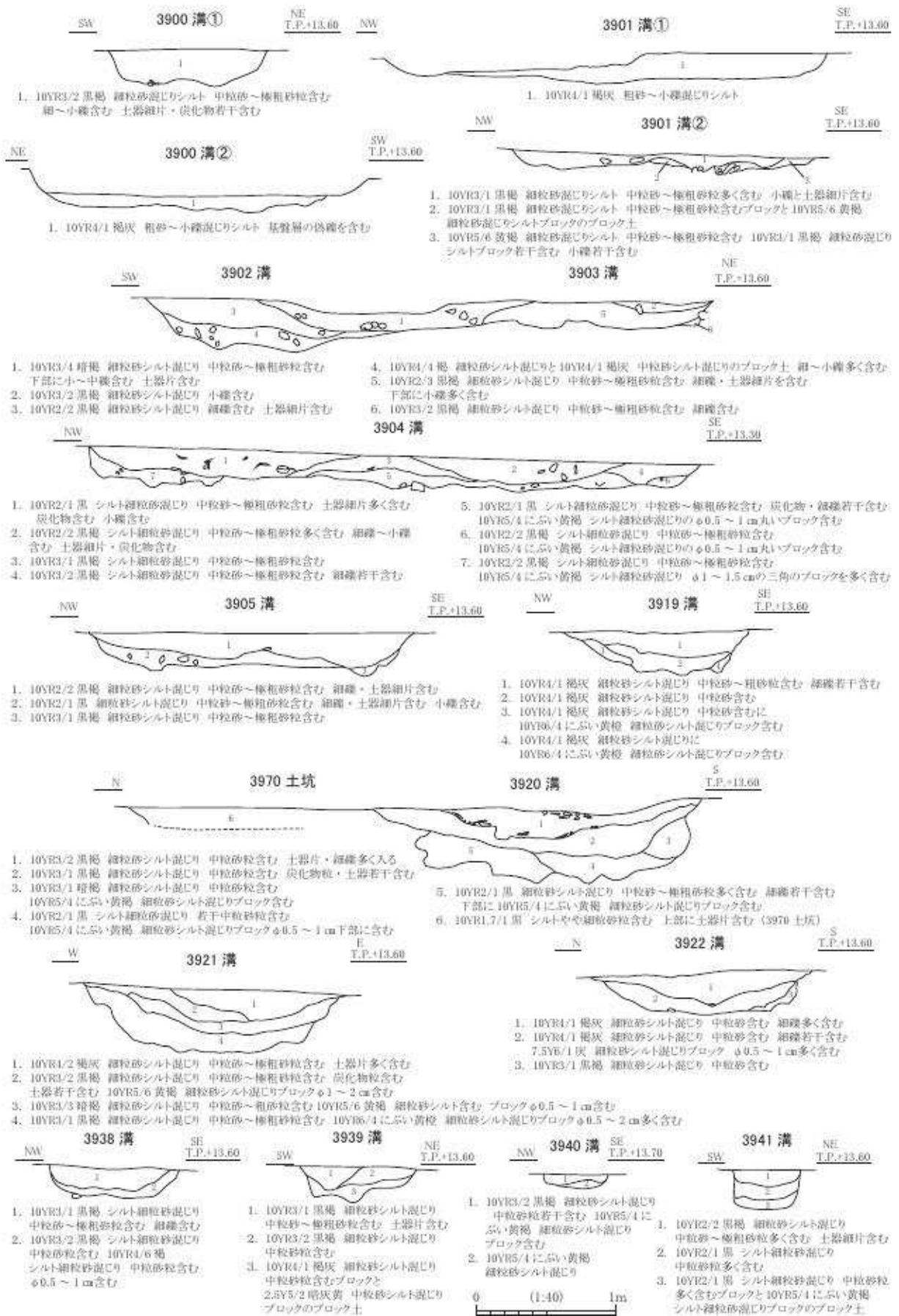


図 133 周溝墓 95・97~99 周辺周溝・土坑断面

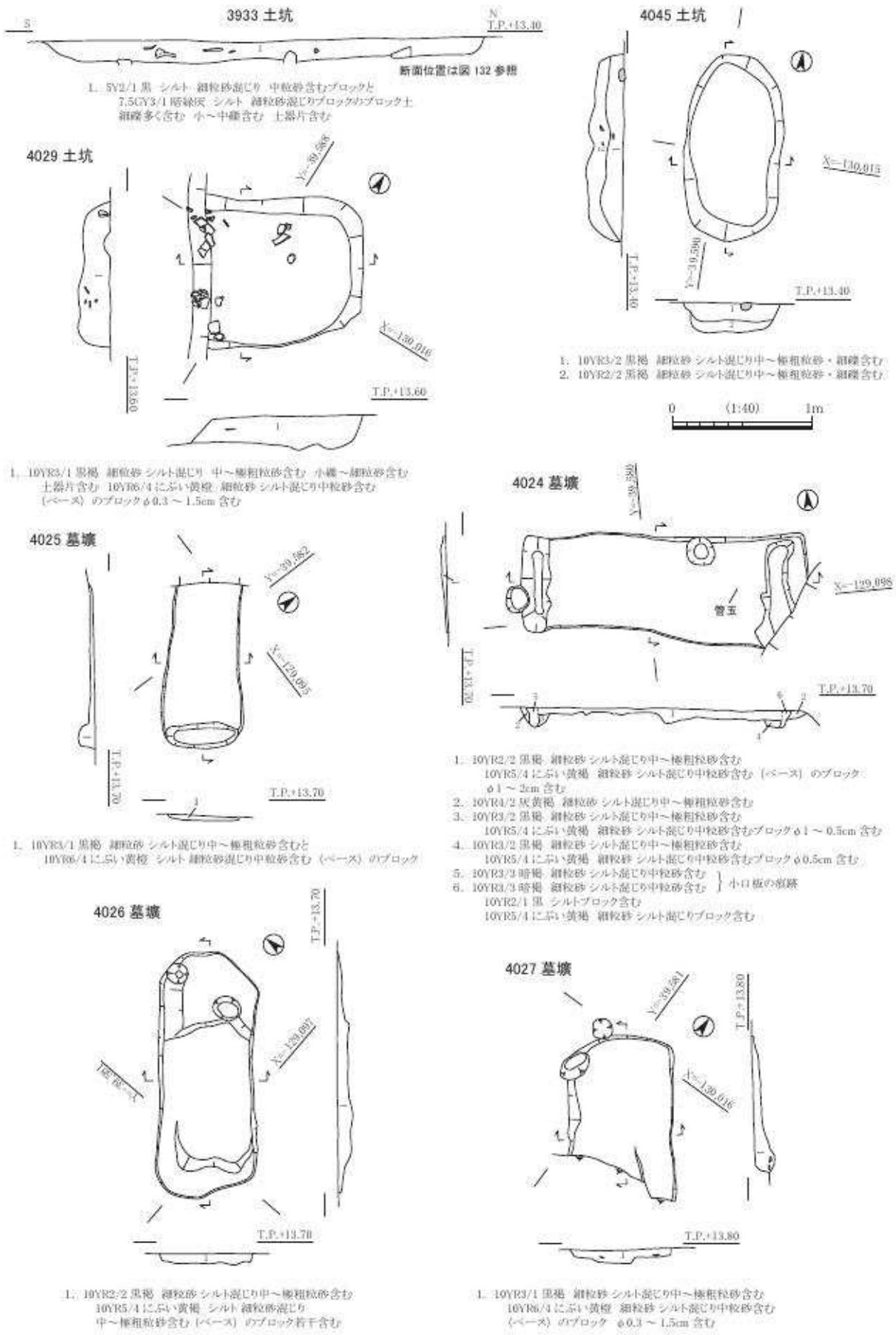


図 134 周溝墓 95・97～99 周辺遺構平面・断面

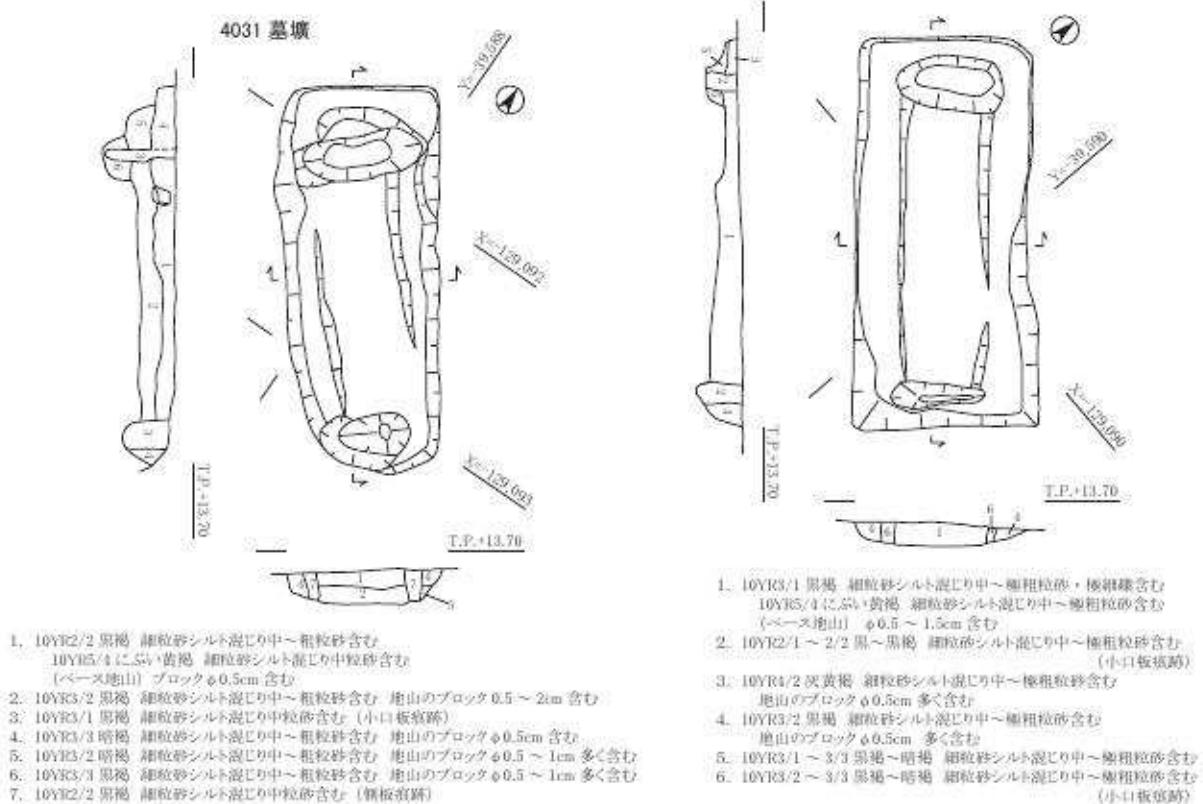
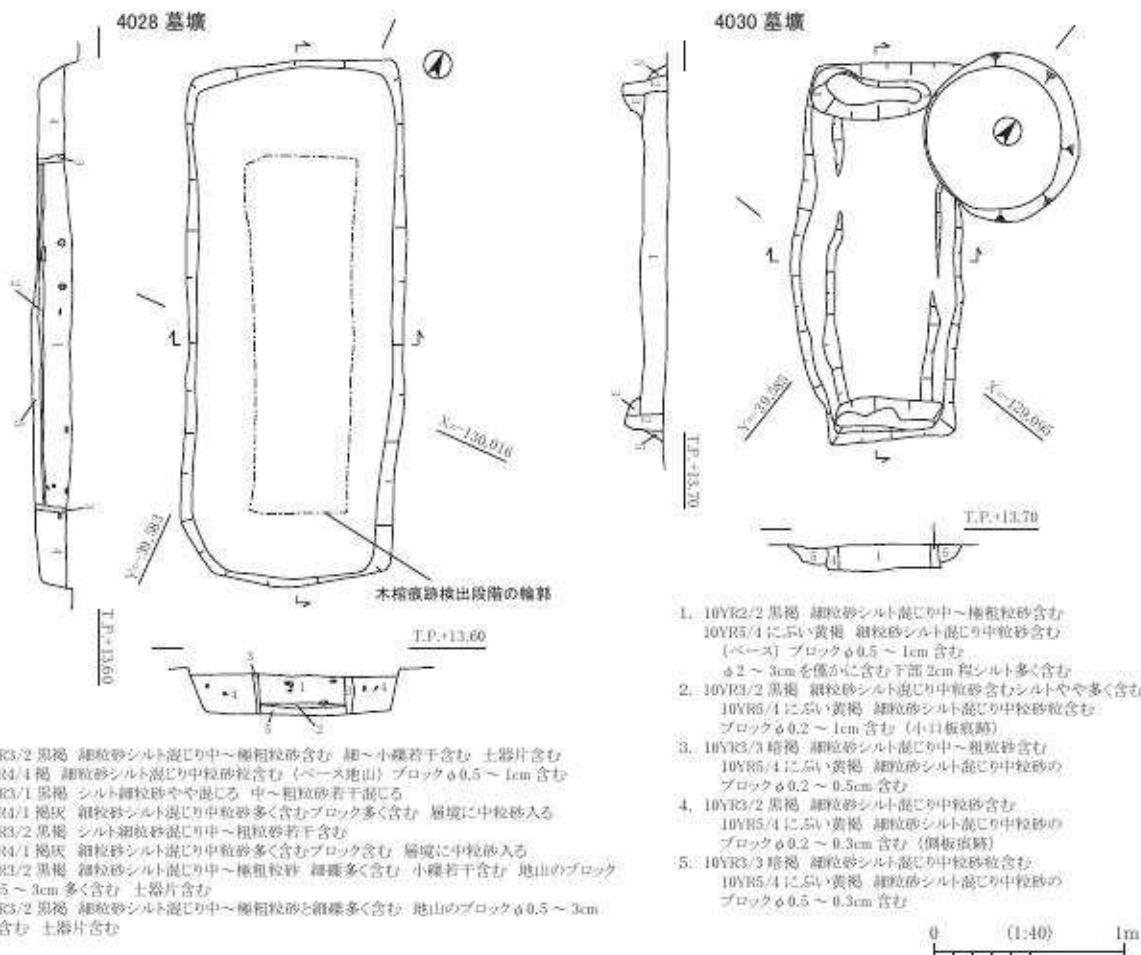


図 135 4028・4030～4032 墓壙平面・断面

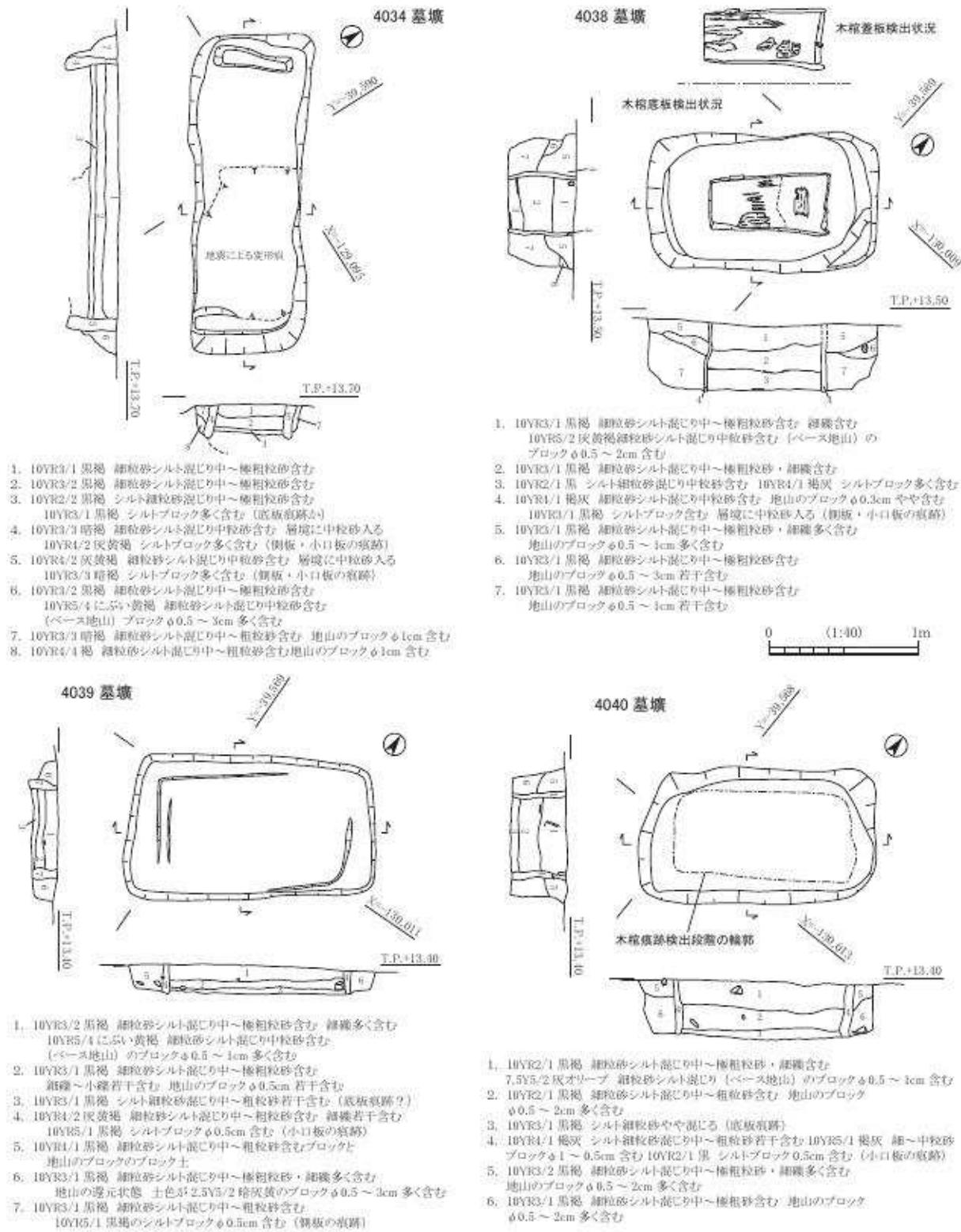


図 136 4034・4038～4040 墓壙平面・断面

隣接する。南半部が竪穴建物 5 と重複し、図面上は壁溝に切られたような表現になっているが、竪穴建物よりも後に周溝墓が構築されていることから、実際には逆の切り合い関係であったはずである。竪穴建物内の 3945 土坑とも重複し、切られていたため、竪穴建物との切り合い関係は非常に狭い範囲で不明瞭であったため検証できなかった。墓壙の平面形は長さ 1.2 m 以上、幅 0.75 m の長方形である。深さは 0.05 m と浅い。埋土は地山の偽礫や中～極粗粒砂を含む黒褐色のシルト混じり細粒砂である。木

棺の痕跡は認められなかった。主軸は墳丘の振れとほぼ同じW—36°—Nである。

**4028 墓壙**（図132・135・142）周溝墓97の埋葬施設で、墳丘の中央やや西寄りに位置する。墓壙の平面形は長さ2.78m、幅1.15mの大型の長方形で、墓壙底部までの深さは検出面から0.18～0.25mを測る。遺構検出段階から木棺痕跡が平面検出でき、断面でも垂直に立ち上がる側板や小口板が確認できた。底板も確認できたが、墓壙底部よりも僅かに浮いた状態であった。側板や小口板の痕跡は底板痕跡を挟んでおり、墓壙底部まで達していたことから、側板・小口板を組みながら裏側や内側に土を入れて固定し、水平になった内部に底板を据えたと考えられる。その底板の寸法は長さ1.8m、幅0.45mである。墓壙底部には側板や小口板の据え付け穴はない。木棺痕跡は細～粗粒砂混じりの黒褐色シルトで、木棺内の埋土は地山のブロック土やシルト・中～極粗粒砂・細～小礫などを含む黒褐色の細粒砂である。主軸は墳丘の振れに近いW—24°—Nである。

石鋸と考えられる三波川帶の（黒色）泥質片岩、いわゆる結晶片岩の薄片（595）が1点出土した。土器小片も多数出土している。Ⅲ様式のものもあるが、もっとも新しいものとしてはⅣ様式前半の甕片が見られる。

**4038 墓壙**（図132・136・143）周溝墓98墳丘上で検出した7基の埋葬施設のうちの一つで、墳丘西寄りの、7基の中ではもっとも北西側に位置する。墓壙の平面形は長さ1.55m、幅0.9mのやや小型の長方形で、墓壙底部までの深さは検出面から0.45mと深い。主軸は他の7基とほぼ同じN—47°—Eである。遺構検出段階から木棺痕跡が明瞭に平面検出できた。内部には落ち込んだ蓋板の一部が認められたが、側板・小口板は褐灰色に変色した痕跡のみであった。底板も一部が残っていたが、北側の約3分の1の範囲には横方向の板材が置かれていた。これにより底板は一枚の板ではなく、向きが異なる板材を2枚継ぎ接ぎしていたことが判明した。その底板の寸法は長さ0.76m、幅0.32mで、その底板を挟むように底板の幅と同じ長さの小口板を立て、さらにその両者を挟むように側板が立てられていた。木棺内の埋土は3層に分層できた。

中期後半の土器片が多数出土しているほか、サヌカイト製の凸基式打製石鎌（609）が1点出土している。先端及び基部を欠損する。

**4039 墓壙**（図132・136・143）周溝墓98墳丘上で検出した7基の埋葬施設のうちの一つである。墳丘西寄りの4038墓壙の南側に隣接する。墓壙の平面形は長さ1.55～1.69m、幅0.88～0.98mの長方形を呈する。深さは検出面から0.2mで、木棺が据えられていた範囲が若干窪んでいる。非常に不明瞭ではあったが、断面観察によって垂直に立ち上がる木棺側板と小口板の痕跡が確認できた。共に底板を挟む構造で、側板間の内法は0.53m、小口板間の内法は1.18mを測る。木棺痕跡は灰黄褐～黒褐色で、木棺内の埋土は3層に分層できた。このうち最下層の細～粗粒砂混じりの黒褐色シルトは底板痕跡の可能性が考えられる。主軸は他の7基とほぼ同じN—58°—Eである。

中期後半の土器片が多数出土しているほか、サヌカイト製の平基式打製石鎌（610）が1点出土している。断面形が歪で刃部の調整が雑である。

**4040 墓壙**（図132・136・143）周溝墓98墳丘上で検出した7基の埋葬施設のうちの一つである。墳丘西寄りの、7基の中ではもっとも南西側に位置する。3933土坑と重複し、土坑を切る。墓壙の平面形は長さ1.58m、幅0.9mの長方形で、深さは検出面から0.38mと深い。遺構検出段階から木棺痕跡が平面検出でき、断面でも垂直に立ち上がる木棺の側板・小口板や底板の痕跡が確認できた。側板と小口板は底板を挟む構造で、側板間の内法は0.49m、小口板間の内法は1.05mを測る。主軸は他の

7基とほぼ同じN-54°-Eである。側板・小口板の痕跡は細粒砂・中～粗粒砂・シルトブロックなどを含む褐灰色シルトで、底板痕跡は細粒砂がやや混じる黒褐色シルト。木棺内の埋土は地山のブロック土やシルト・中～粗粒砂を含む黒褐色の細粒砂など2層に分層できた。

中期前半の土器片が多数出土しているほか、石鋸片と考えられる紅簾石片岩の小片(612)が1点出土している。

**4041 墓壙**(図132・137) 周溝墓98墳丘上で検出した7基の埋葬施設のうちの一つである。墳丘東寄りの、7基の中ではもっとも北東側に位置する。墓壙の平面形は長さ1.73m、幅1.26mの幅の広い長方形を呈する。深さは検出面から約0.3mと深く、木棺が据えられていた範囲が長方形に若干窪んでいる。その窪みの大きさは長さ1.33m、幅0.48mである。断面観察によって垂直に立ち上がる木棺の側板・小口板と底板の痕跡が確認できた。側板と小口板の痕跡は褐灰色を呈し、底板を挟む構造であった。側板間の内法は0.41m、小口板間の内法は1.25mを測る。底板痕跡は黒色シルトで、僅かに木質も認められた。木棺内の埋土は黒～黒褐色のシルト混じり細粒砂で2層に分層できた。主軸は他の7基とほぼ同じN-59°-Eである。

**4042 墓壙**(図132・137) 周溝墓98墳丘上で検出した7基の埋葬施設のうちの一つである。墳丘のほぼ中央、4041墓壙の南西側に位置する。墓壙の北東端が僅かに4041墓壙と重複しており、4041墓壙に切られる。墓壙の平面形は長さ1.62m、幅0.87～0.9mの長方形を呈する。深さは検出面から約0.2mで、墓壙の西に偏って木棺が据えられていた範囲が長方形に僅かに窪んでいる。その窪みの大きさは長さ約1.1m、幅約0.45mである。断面観察によって垂直に立ち上がる木棺の側板・小口板と底板の痕跡が確認できた。側板と小口板の痕跡は黒褐色を呈し、底板を挟む構造であった。側板間の内法は0.4m、小口板間の内法は0.99mを測る。底板痕跡は細～中粒砂を含む褐灰色シルトで、木棺内の埋土は地山のブロックやシルト・中～極粗粒砂・細礫などを含む黒褐色細粒砂である。主軸は他の7基とほぼ同じN-57°-Eである。

櫛描簾状紋で飾るⅢ様式後半の鉢小片が出土している。

**4043 墓壙** 周溝墓98墳丘上で検出した7基の埋葬施設のうちの一つである。墳丘南東寄りの、4044墓壙の南側に接する。墓壙の平面形は長さ1.25m、幅0.7mのやや小型の長方形で、主軸は他の7基とほぼ同じN-56°-Eである。北側の4044墓壙と接して黒褐色の墓壙輪郭が明瞭に検出できたが、全体を1～2cmほど掘り下げた段階で、墓壙底に達してしまったため、詳細な調査ができていない。木棺の痕跡は認められなかった。

**4044 墓壙**(図132・137・143) 周溝墓98墳丘上で検出した7基の埋葬施設のうちの一つで、墳丘南寄りの、4039・4040墓壙の東側に位置する。今回の調査で唯一人骨が発見された墓壙である。墓壙の平面形は長さ2.5m、幅1.1mの大型の長方形で、墓壙底部までの深さは検出面から0.33～0.41mと深い。主軸は他の7基とほぼ同じN-60°-Eである。遺構検出段階から木棺痕跡が平面検出できた。内部には落ち込んだ蓋板の一部が認められたが、側板・小口板は褐灰色に変色した痕跡のみであった。底板は表面に木質が残っていたが、ほとんど土と同化しており取り上げはできなかった。底板の寸法は長さ1.73m、幅0.48～0.54m、厚さ0.03～0.05mで、その底板を挟むように底板の幅と同じ長さの小口板を立て、さらにその両者を挟むように側板が立てられていた。側板の長さはちょうど底板の長さと小口板の厚みを合わせた長さで、小口板より外側にはみ出してはいない。木棺内の埋土は3層に分層できた。

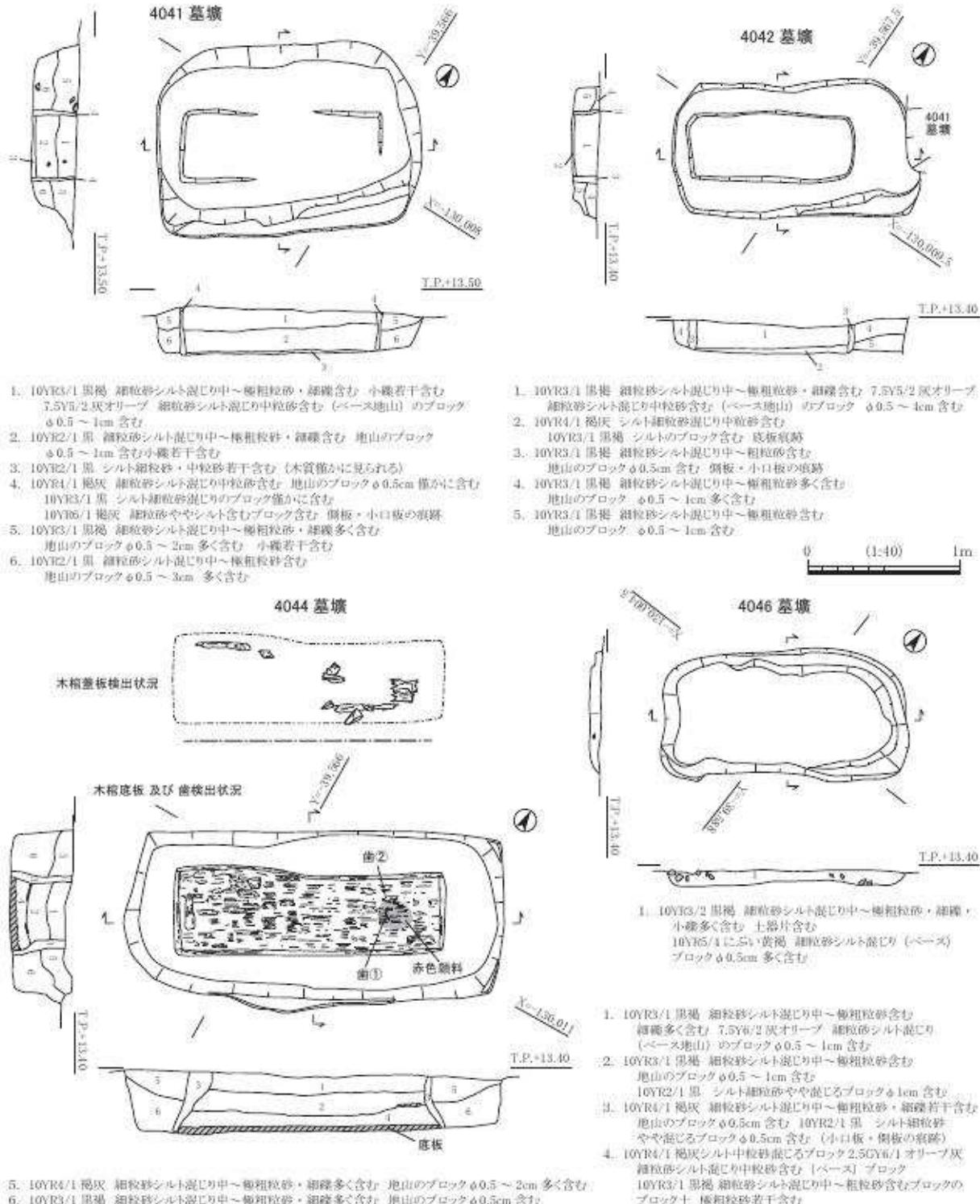


図 137 4041・4042・4044・4046 墓壙平面・断面

被葬者は東頭位で、頭部には赤色顔料の塗布が見られた。人骨は非常に残りが悪く、歯のみが見つかった。以下、安部考古動物学研究所の安部みき子氏による鑑定結果を記す。

「出土状況は非常に悪く、弓型の土塊（図 137 - 歯①）と直線状の土塊（図 137 - 歯②）の中に歯冠および歯根が観察され、いずれの土塊も歯根が整列して釘植していた。弓状の土塊は下頸骨の歯槽で、正中部に右中切歯が同定され、右側の歯槽には歯列の順に従って小白歯と第 1 および第 2 大白歯の歯冠が遺存している。これらの歯冠は咬耗が見られず、萌出直後または未萌出であり、未成人と推察され

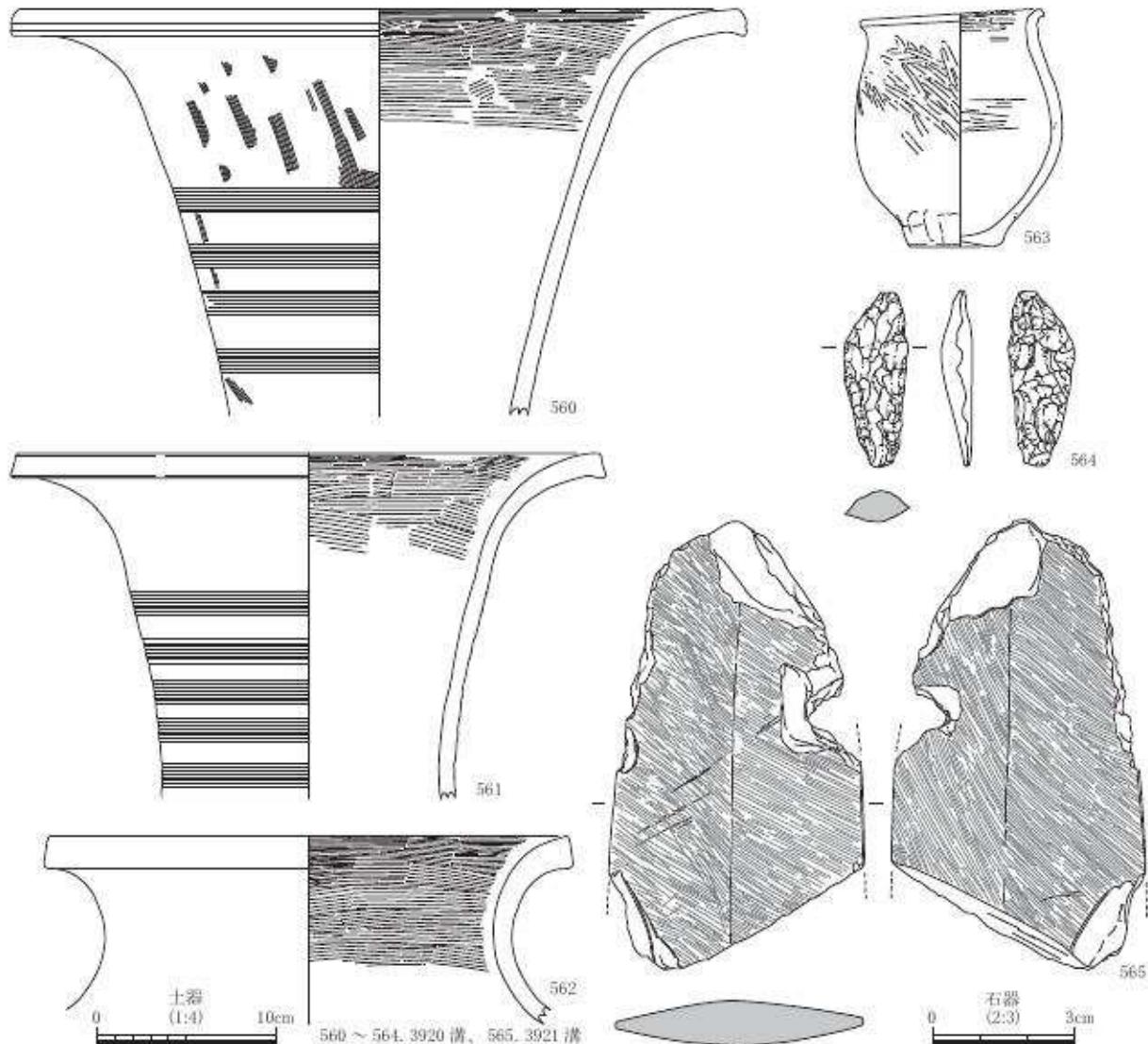


図 138 周溝墓 95 出土遺物（1）

る。一方直線状の土塊は歯槽の一端から上顎大臼歯の歯冠の破片が遺存していることより、上顎骨の歯槽の可能性が高いと推察される。」

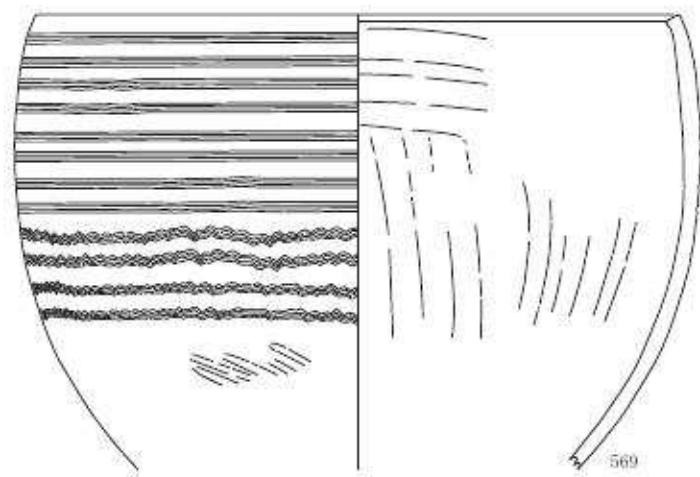
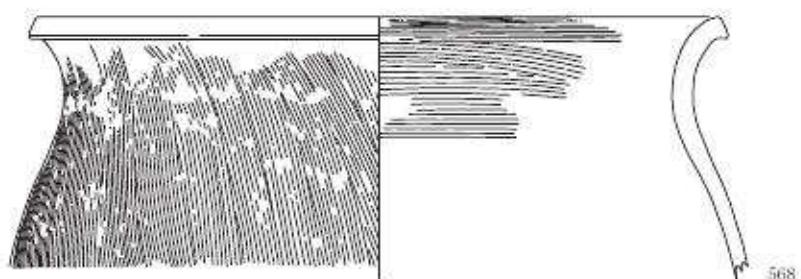
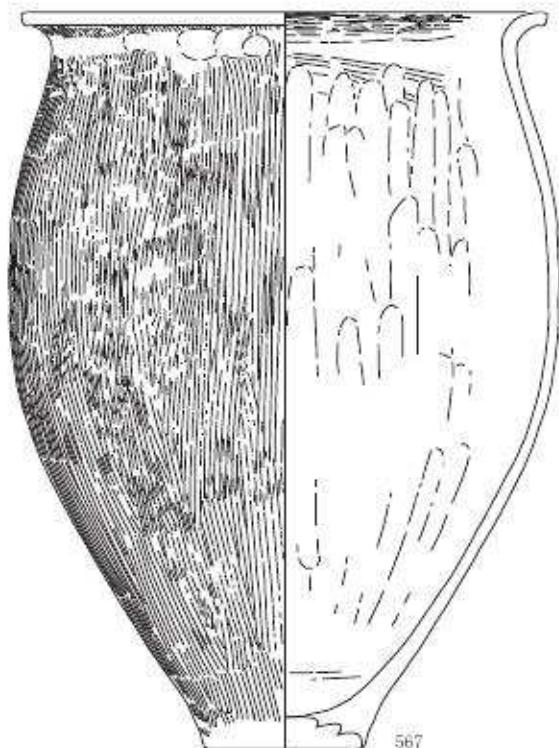
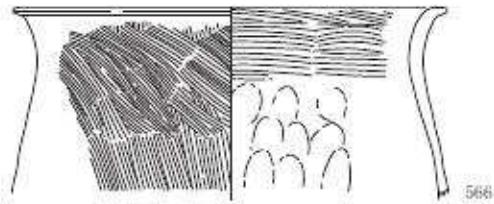
なお、「未成人」とあるが、歯が生え始める頃の乳幼児ではなく、また 15 歳よりも若年とのこと。

中期前半の土器片が多数出土している。なかには口縁端面に雑な櫛描流水紋を刻む広口壺片も見られる。このほかサヌカイト製の平基式打製石鏃（611）が 1 点出土している。

**周溝墓 99（図 132～134・140）** 周溝墓 95 の南側に位置する。単独墳で、周囲の周溝墓と振れも異なる。周溝は共有しないが、墳丘の振れがよく似ている上記周溝墓 95 と同じ群の可能性が高い。

北辺の 3939 溝から II 様式の広口壺（573）・高杯（574）とともにサヌカイト製の打製石劍（575）が出土している。575 は身部の破片で、同種の石器に比べ幅が広くて大形であることから、石戈の可能性も考えられる。

**4024 墓壙（図 132・134・140）** 周溝墓 99 の墳丘東端に位置するが、墓壙の一部が東辺周溝に切られ、主軸も墳丘の振れとはまったく異なること、また周溝墓 99 付近から北西方向に並ぶ周溝墓外埋葬墓の列上にほぼ位置していることなどから、周溝墓 99 の埋葬施設ではなく、周溝墓外埋葬墓のうちの一つと考えている。墓壙の平面形は長さ 2.05 m、幅 0.65～0.8 m の長方形で、墓壙底部までの深さは検



全て3920溝

0 (1:4) 10cm

図139 周溝墓95出土遺物(2)

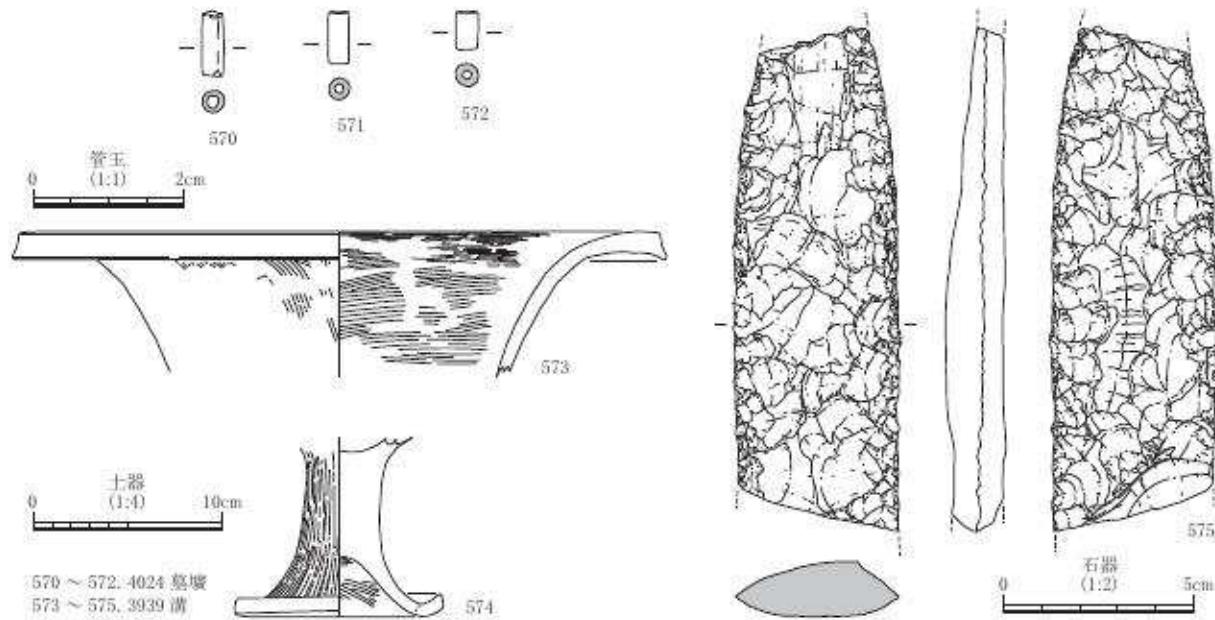


図 140 周溝墓 99 出土遺物

出面から 0.02 ~ 0.06 m と浅い。その墓壙底部の両端には小口穴が設けられており、底板を挟むように小口板を墓壙底部に埋め込む構造の木棺が据えられていたことが分かる。東側の小口穴は長さ約 0.75 m、幅 0.16 m、深さは墓壙底部から 0.04 m で、西側の小口穴は長さ 0.68 m、幅約 0.2 m、深さは墓壙底部から 0.09 m を測る。また非常に不明瞭ではあったが、断面の観察で小口穴内に木棺の痕跡が検出でき、それにより底板の長さが 1.74 m であったことが確認できた。なお側板の痕跡は検出できず、底板・小口板との関係は明らかでない。木棺痕跡はシルトや中粒砂を含む暗褐色の細粒砂で、木棺内の埋土は地山のブロック土や中～極粗砂粒・シルトを含む黒褐色の細粒砂である。主軸は墳丘の振れとはまったく異なる W-83°-N である。

墓壙の中から非常に小さな管玉が 3 点出土した。1 点 (570) は遺構検出面で見つかったが、残り 2 点 (571・572) は遺構埋土の水洗によって発見することができた。570 は東側小口穴の西側約 0.2 m の中軸線上で見つかった。おそらく埋葬者の頭部付近にあったものと思われる。3 点とも硬質のグリーンタフで、570 は直径 3.0mm、長さ 8.5mm、571 は直径 3.2mm、長さ 7.0mm、572 は直径 3.0mm、長さ 5.0mm である。いずれも両側穿孔である。

**4025 墓壙 (図 132・134)** 4024 墓壙と同様、周溝墓 99 の墳丘北西端に位置するが、墓壙の一部が西辺周溝に切られている。主軸が周溝墓 99 の北西方向に並ぶ周溝墓外埋葬墓とほぼ揃っていることから、これも周溝墓 99 の埋葬施設ではなく、周溝墓外埋葬墓のうちの一つと考えている。墓壙の平面形は長さ 1.18 m、幅 0.48 ~ 0.58 m の長方形で、墓壙底部までの深さは検出面から 0.02 ~ 0.04 m と浅い。その墓壙底部の東端には小口穴が設けられており、底板を挟むように小口板を墓壙底部に埋め込む構造の木棺が据えられていたことが分かる。小口穴は長さ約 0.51 m、幅 0.18 m、深さは墓壙底部から 0.07 m を測る。側板の痕跡は検出できず、底板・小口板との関係は明らかでない。埋土は中～極粗砂粒・シルトなどを含む黒褐色の細粒砂とにぶい黄橙色のシルトのブロックである。主軸は墳丘の振れにほぼ直交する W-50°-N である。

**4026 墓壙 (図 132・134)** 周溝墓 99 の墳丘の中央に位置する。この墓壙が周溝墓 99 に伴う唯一の埋葬施設と考えている。墓壙の平面形は長さ 1.76 m、幅 0.67 ~ 0.72 m で、北側の隅が浅く検出でき

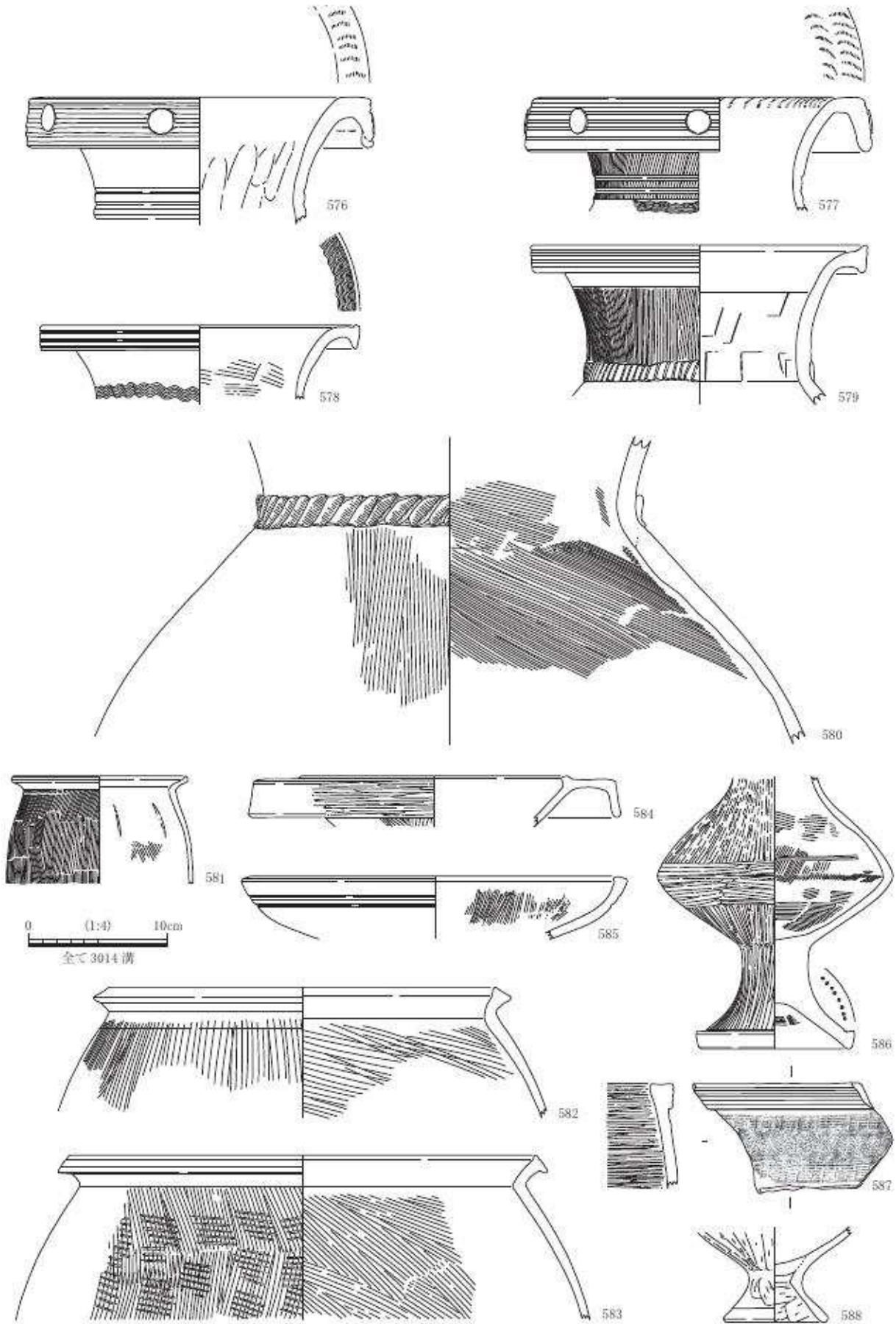


図 141 周溝墓 97 出土遺物 (1)

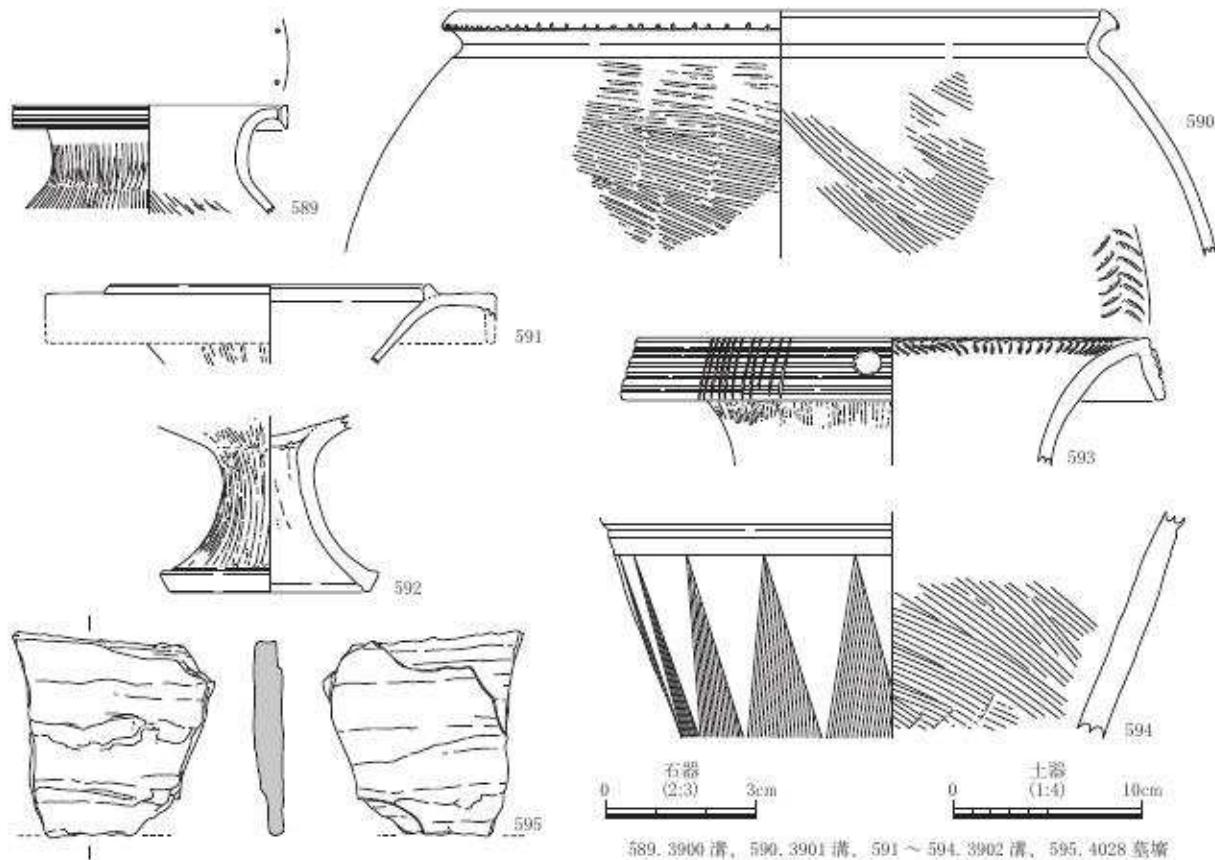


図 142 周溝墓 97 出土遺物（2）

ないが、本来は長方形であったと思われる。深さは北側が浅く検出面から約 0.03 m、南側が若干窪んでおり 0.08 ~ 0.1 m である。小口穴等や木棺痕跡は検出できなかった。埋土は地山のブロック土や中～極粗砂粒・シルトを含む黒褐色の細粒砂である。主軸は墳丘の振れに近い N - 51° - E である。

**4030 墓壙（図 132・135）** 周溝墓外の埋葬施設である。周溝墓 99 の西側に位置する。墓壙の平面形は長さ 2.0 m、幅約 0.9 m の長方形で、墓壙底部までの深さは検出面から約 0.13 m を測る。その墓壙底部の両端には小口穴が設けられており、底板を挟むように小口板を墓壙底部に埋め込む構造の木棺が据えられていたことが分かる。またその木棺が据えられていた範囲が僅かに窪んでいる。北側の小口穴は長さ 0.63 m、幅約 0.2 m、深さは墓壙底部から 0.12 m、南側の小口穴は長さ 0.57 m、幅約 0.15 ~ 0.18 m、深さは墓壙底部から 0.8 m を測る。なお断面の観察によって、垂直に立ち上がる黒褐色の木棺の側板と小口板の痕跡が確認できた。側板間の内法は 0.49 m、小口板間の内法は 1.7 m を測る。底板の痕跡は認められなかった。木棺内の埋土は地山のブロック土やシルト・中～極粗粒砂を含む黒褐色細粒砂である。主軸は 4031 ~ 4033 墓壙などの他の周溝墓外埋葬墓の振れとほぼ同じ W - 37° - N である。

**4031 墓壙（図 132・135）** 周溝墓外の埋葬施設である。周溝墓 95 の南側で、4030 墓壙の北西側に並ぶ。墓壙の平面形は長さ 2.04 m、幅約 0.85 m の長方形で、墓壙底部までの深さは検出面から約 0.18 m を測る。墓壙底部の両端には小口穴が設けられており、底板を挟むように小口板を墓壙底部に埋め込む構造の木棺が据えられていたことが分かる。北側の小口穴は長さ 0.63 m、幅約 0.23 m、深さは墓壙底部から 0.15 m、南側の小口穴は長さ 0.38 m、幅約 0.22 m、深さは墓壙底部から 0.08 m を測る。なお断面の観察によって、垂直に立ち上がる黒褐色の木棺側板と小口板の痕跡が確認できた。側板間の内法は 0.48 m、小口板間の内法は 1.36 m で、側板・小口板痕跡よりの内側が僅かに窪んでいる。ただ

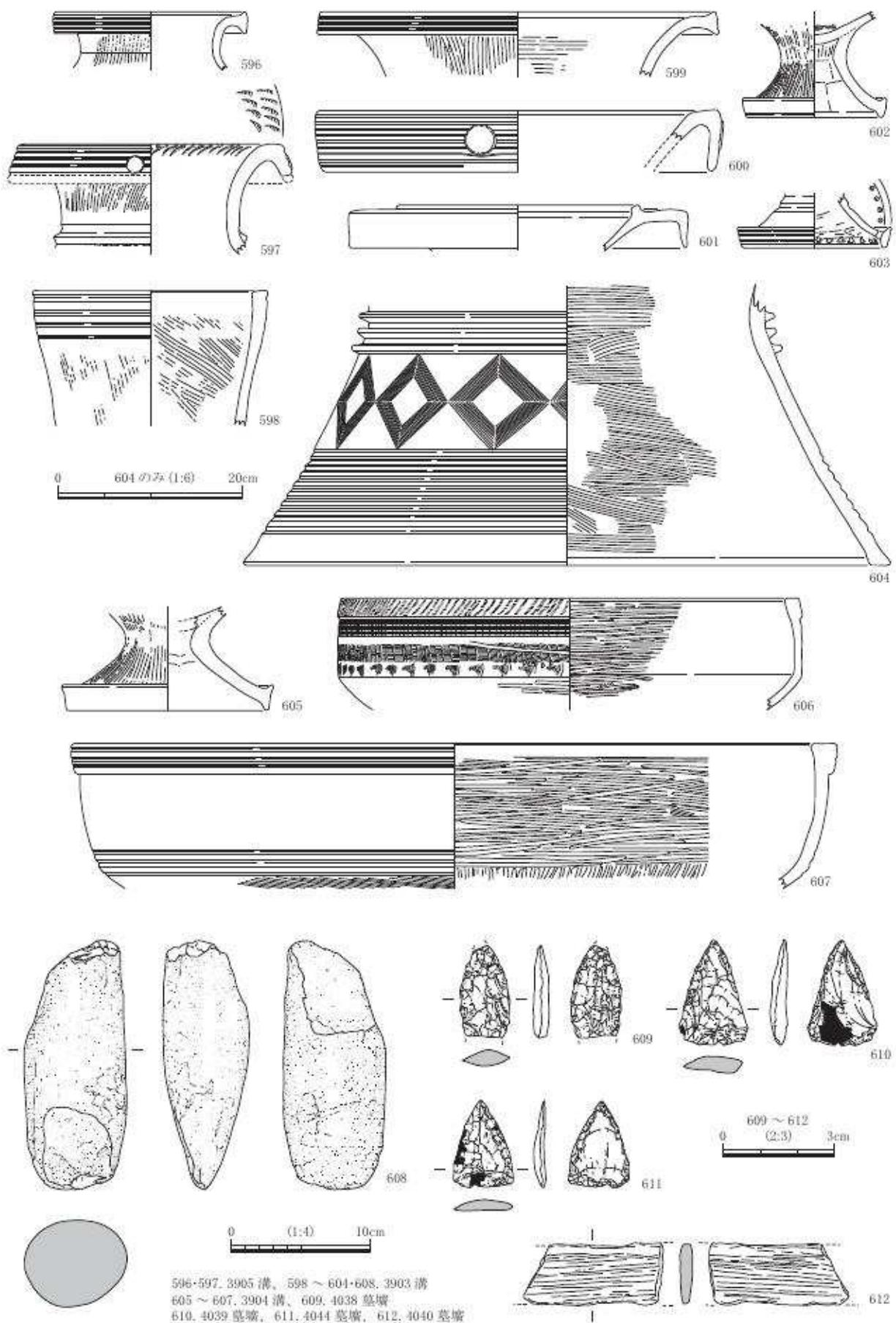


図143 周溝墓98出土遺物

し底板の痕跡は認められなかった。木棺内の埋土は地山のブロック土やシルト・中～粗粒砂を含む黒褐色細粒砂など2層に分層できた。主軸は4030・4032・4033墓壙など他の周溝墓外埋葬墓の振れとほぼ同じW-37°-Nである。

**4032墓壙（図132・135）** 周溝墓外の埋葬施設である。周溝墓95の南側で、4031墓壙の北西側に一列に並ぶ。墓壙の平面形は長さ2.05m、幅約0.9～0.98mの長方形で、墓壙底部までの深さは検出面から約0.12～0.17mを測る。墓壙底部の両端には小口穴が設けられており、底板を挟むように小口板を墓壙底部に埋め込む構造の木棺が据えられていたことが分かる。北側の小口穴は長さ0.56m、幅約0.28m、深さは墓壙底部から0.05m、南側の小口穴は長さ0.5m、幅約0.07～0.14m、深さは墓壙底部から0.06mを測る。なお断面の観察によって、垂直に立ち上がる木棺側板と小口板の痕跡が確認できた。側板間の内法は0.49m、小口板間の内法は1.55mで、側板・小口板痕跡よりの内側が僅かに窪んでいる。ただし底板の痕跡は認められなかった。木棺痕跡は黒～黒褐色、あるいは黒褐色～暗褐色を呈していた。木棺内の埋土は地山のブロック土やシルト・中～極粗粒砂・極細礫などを含む黒褐色細粒砂である。主軸は4030・4031・4033墓壙など他の周溝墓外埋葬墓の振れとほぼ同じW-48°-Nである。

**4033墓壙（図122・126）** 周溝墓外の埋葬施設である。周溝墓95の西側で、4032墓壙の北西側に一列に並ぶ。墓壙の平面形は長さ1.75m、幅0.72mの長方形を呈する。墓壙底部までの深さは検出面から約0.08mで、さらにその墓壙底部両端に小口穴を設ける。北側の小口穴は長さ0.65m、幅0.27～0.29m、深さは墓壙底部から0.14mで、南側の小口穴は長さ0.72m、幅約0.3m、深さは墓壙底部から0.11mを測る。断面観察によって、非常に不明瞭ではあったが、この小口穴から垂直にのびる黒色の木棺痕跡が認められた。また側板についても壁際で褐灰色の木棺痕跡が認められ、これらの痕跡から木棺の内法が長さ1.3m、幅0.48mであったことが明らかとなった。小口穴や側板の痕跡から、木棺は小口板を墓壙底部に埋め込み底板を挟むタイプで、側板も底板にのらない構造であったことが復原できるが、側板と小口板との関係は不明。主軸は4030～4032墓壙など他の周溝墓外埋葬墓の振れとほぼ同じW-35°-Nである。

**4034墓壙（図132・136）** 周溝墓外の埋葬施設で、4030・4031墓壙の西側に並列する。墓壙の平面形は長さ2.13m、幅0.7～0.8mの長方形を呈する。墓壙底部までの深さは検出面から0.19mで、さらにその墓壙底部両端に小口穴を設ける。側板の据え付け痕跡も残っていたと思われるが、地震による地層の変形痕跡と重なっており、注意せず間違って掘削してしまったため確認できていない。北側の小口穴は長さ0.53m、幅0.13m、深さは墓壙底部から0.17mで、南側の小口穴は長さ約0.65m、幅約0.18m、深さは墓壙底部から0.14mを測る。断面観察によって、垂直に立ち上がる木棺の側板・小口板や底板の痕跡が確認できた。側板と小口板は底板を挟む構造で、側板間の内法は0.46m、小口板間の内法は1.7mを測る。側板・小口板の痕跡はシルト・中粒砂やシルトブロックを含む暗褐～灰黄褐色の細粒砂で、底板痕跡はシルトブロックや細粒砂・中～極粗粒砂を含む黒褐色シルトである。木棺内の埋土はシルトや中～極粗粒砂を含む黒褐色細粒砂で2層に分層できる。主軸は4030～4033墓壙など他の周溝墓外埋葬墓の振れに近いW-56°-Nである。

**4035墓壙（図122・126）** 周溝墓外の埋葬施設で、4033墓壙の北側、周溝墓88と95との間に位置する。墓壙の平面形は長さ1.02m、幅0.62mのやや小型の長方形で、深さは検出面から約0.04～0.08mを測る。主軸は他の周溝墓外埋葬墓の振れと直交するN-45°-Eである。埋土は地山の偽礫や中～

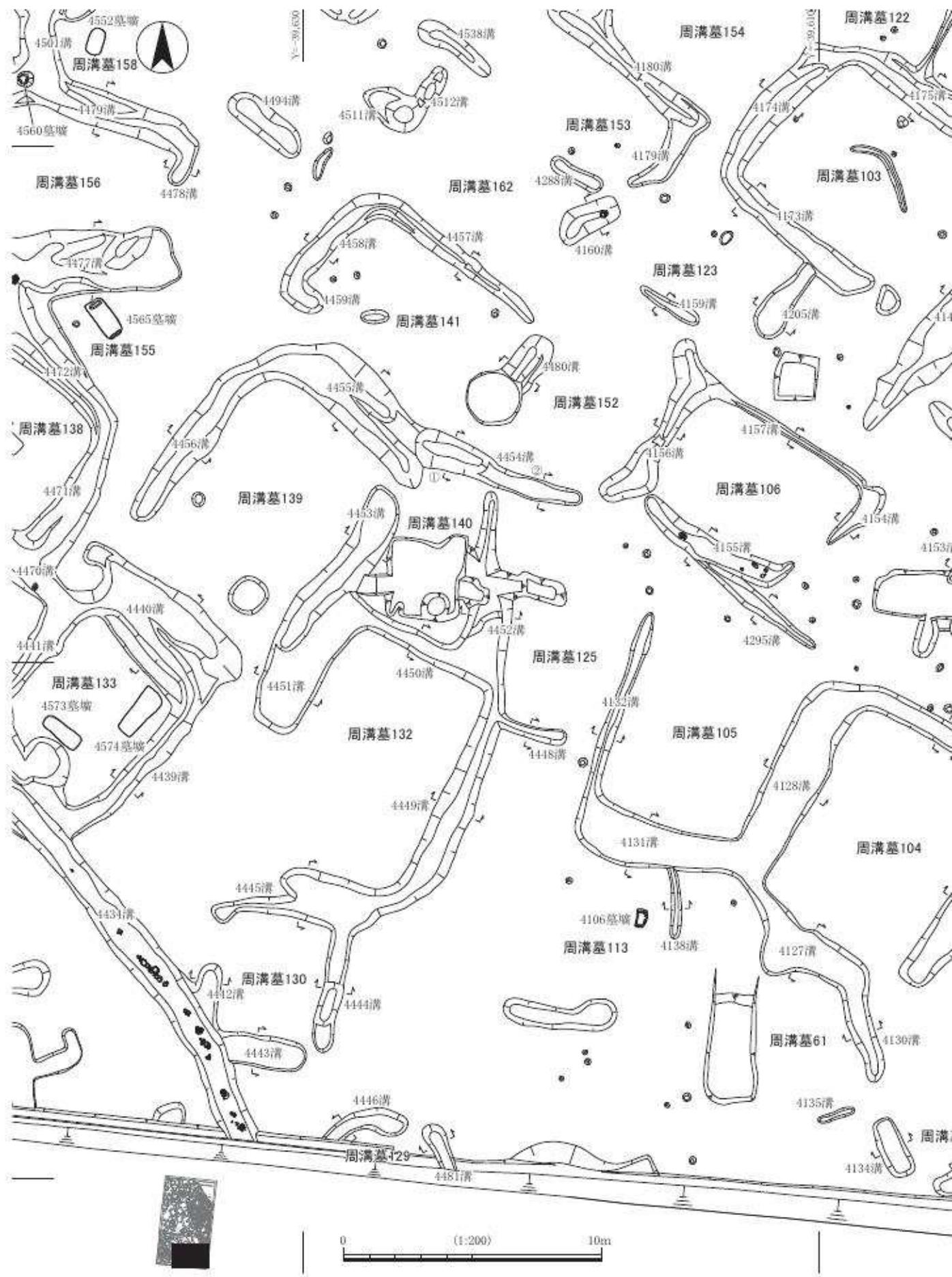




図 144 調査区南方 4 層下面遺構平面

極粗粒砂を含む黒褐色のシルト混じり細粒砂の単層である。木棺の痕跡は認められなかった。

**4037 墓壙**（図 122・126）周溝墓 88 の墳丘上東端に位置するが、前記周溝墓外埋葬墓の列上に位置していることから、周溝墓 88 の埋葬施設ではなく、周溝墓外埋葬墓のうちの一つと考えている。墓壙の平面形は長さ 1.45 m、幅 1.0 m の太い楕円形を呈する。底面は中央に向かって緩やかに窪んでおり、もっとも深い箇所で検出面から約 0.25 m を測る。主軸は W-28°-N である。埋土は中～極粗粒砂・細礫を多く含む黒～黒褐色のシルト混じり細粒砂、あるいは細粒砂混じりのシルトである。木棺の痕跡は認められなかった。

**4046 墓壙**（図 132・137）3001 溝を挟んで周溝墓 97 の北側に位置する。周囲に周溝が見られないことから、周溝墓外埋葬墓の一つと考えられる。墓壙の平面形は長さ 1.63 m、幅 0.78～0.87 m の長方形を呈する。深さは検出面から 0.09 m で、北東側底部が若干窪んでいる。埋土は地山のブロックやシルト・中～極粗粒砂～小礫を多く含む黒褐の細粒砂である。木棺の痕跡は認められなかった。主軸は北側に並ぶ周溝墓外埋葬墓 4030～4034 墓壙の振れと直交する N-53°-E である。

中期前半の土器片が多数出土している。

周溝墓 100・101（図 110・111・144～148・150） 最大規模の周溝墓 18 の南東側に並ぶ。両者は周溝墓 18 に次ぐ大型の周溝墓で、100 の墳丘は検出面で  $16.5 \times 9.9$  m、101 の墳丘は  $17.8 \times 10.3$  m を測る。周溝墓 18 から 100、101 と、同規模の周溝墓が環濠 3001 溝のすぐ外側に沿って整然とほぼ等間隔に並んでおり、その密接な関係が読み取れる。

周溝墓 100 の西辺 4196 溝からは太形蛤刃石斧（617）・サヌカイト製の有茎式打製石鏃（618）が出土した。617 は斑レイ岩製で、刃部は片刃気味である。東辺 4198 溝からは中期の広口壺（613・614）・甕（615）・高杯（616）などが出土している。このうちもっとも新しいものはIV様式に属す 614 である。これ以外に実測図を掲載していないが、被熱痕跡のある細粒砂岩製の砥石片が 1 点出土している。

周溝墓 101 の西辺 4140 溝の西壁からは大型石庖丁 2 枚（623・625）を含む石庖丁 7 枚（626～630）が、大きなものが上になるよう重なった状態で出土した。周溝の埋土掘削中に見つかったものであるが、黒褐色の溝埋土を完全に取り除いた段階でも、まだ黄褐色の周溝壁面に対してほぼ垂直方向に 7 枚の石庖丁が突き刺さった状態で埋まっていた。周溝や竪穴建物などの弥生時代の遺構は、地山と遺構埋土の色が明らかに異なっていたため、遺構の輪郭が明瞭で、比較的検出が容易であったが、この石庖丁の周囲では石庖丁を埋納したような土坑状の遺構は検出できなかった。周溝の埋土を完全に取り

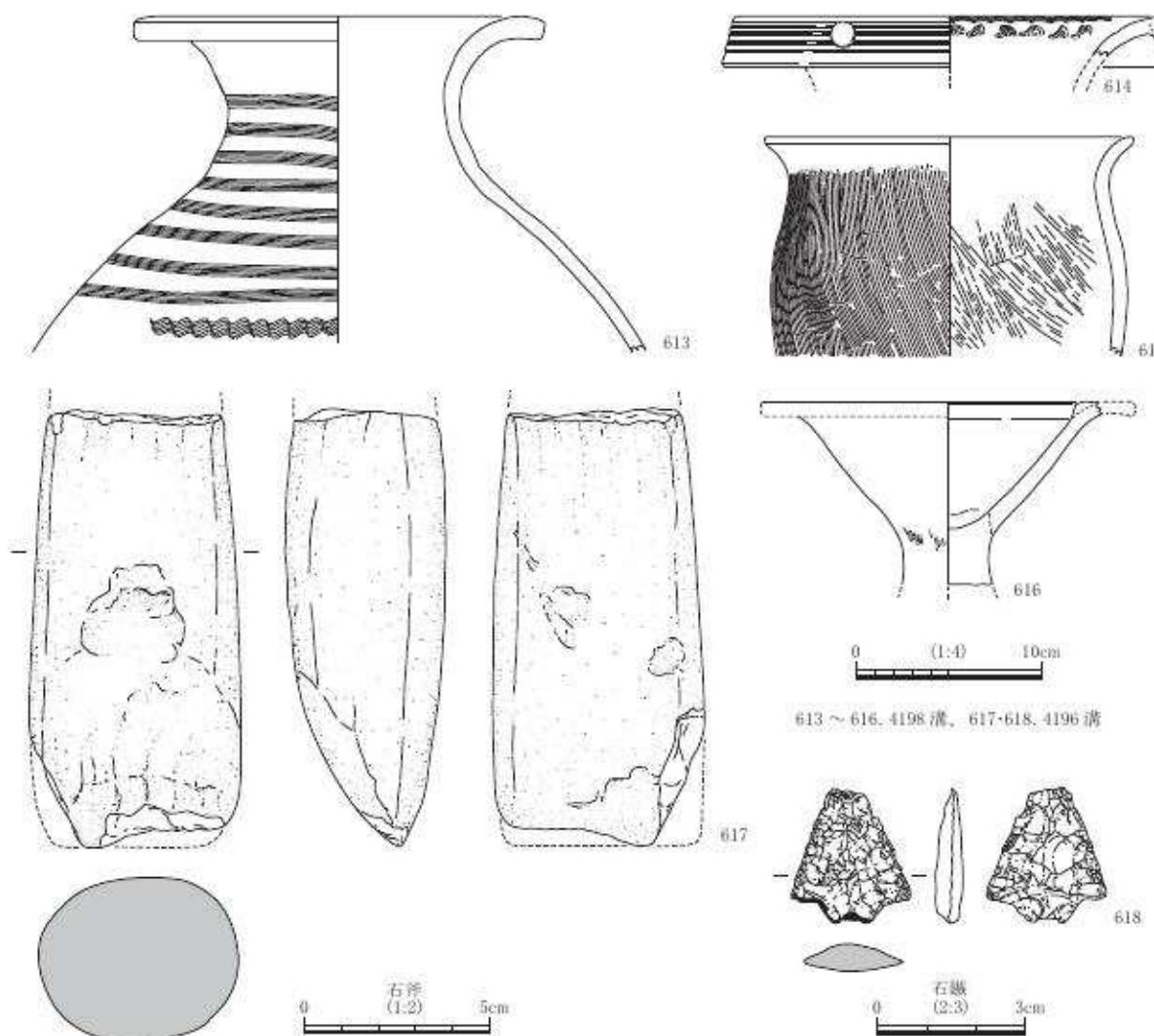


図 145 周溝墓 100 出土遺物

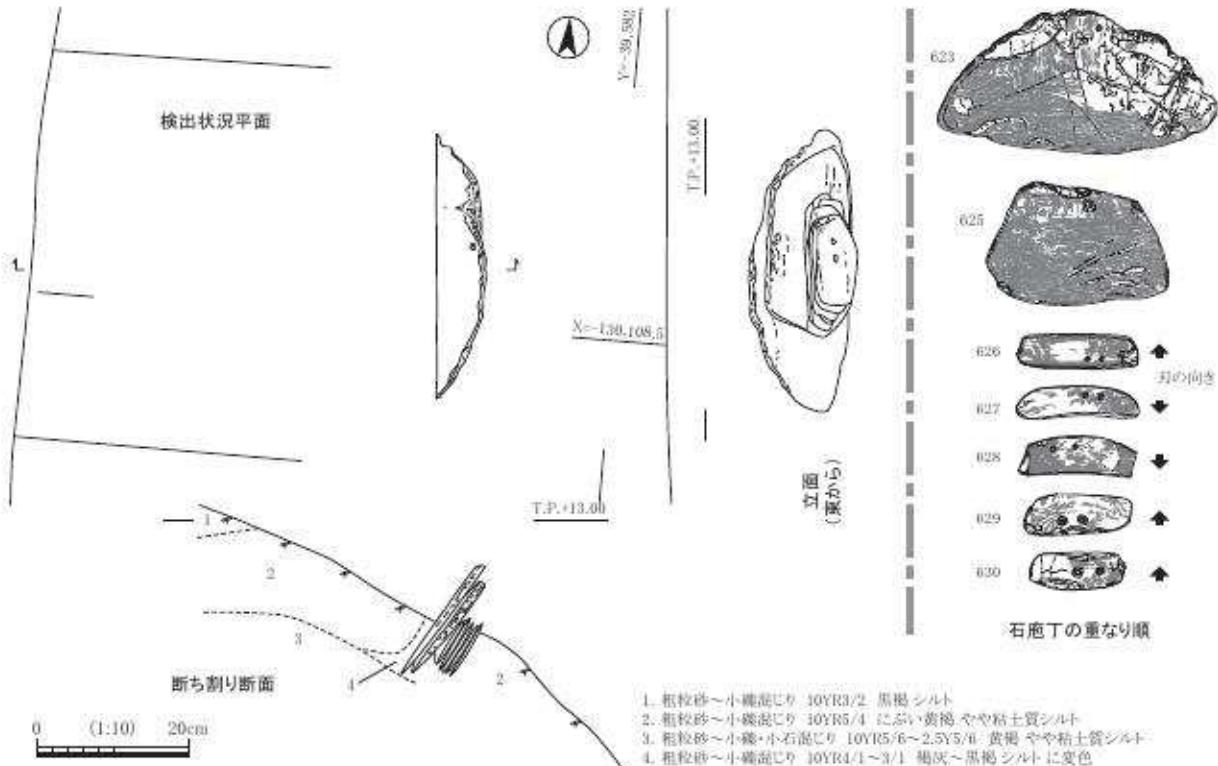


図 146 4140 溝石庖丁出土状況

除いて以降に再度石庖丁の周囲を精査し、埋納土坑の検出に努めたが、周辺には若干の土の汚れが認められる程度で、周溝以外の別の遺構は平面および断面の観察で認識できなかった。土坑の掘削と埋納・埋め戻しが短時間で行なわれたために、埋土に大きな変化が起こらず、遺構を認識できなかったという可能性も十分考えられるが、現時点では石庖丁 7 枚は周溝壁面に突き刺すように埋納されたと考えておきたい。

623 は全国的にも最大規模の石庖丁で、中屋サワ遺跡（石川県金沢市）で見つかっている長さ 36.2 cm のものよりもさらに一回り大型の、長さ 37.0cm、幅 18.8cm を測る。石材は黒色の粘板岩で、体部 A 面右半の表面広範囲に白雲母とみられる二次生成物、もしくは石英脈が見られる。平面形は刃部が若干外反気味の半月形を指向し、A 面右寄りに若干偏って 1 孔の穿孔がある。両刃で、体部 A 面は全体を磨くが、二次生成鉱物が付着する範囲は磨き切れていない。B 面は刃部側の約半分を磨き、背部側には剥離面を残す。背面の大部分は打ち欠いたままで、A 面左半端部の 5 cm 程度の範囲のみ研磨面が認められる。刃縁には使用に伴って生じたと思われるにぶい光沢が肉眼で観察でき、全体に細かい刃こぼれが認められる。

625 は黒色の粘板岩製で、厚さ 1.3cm とやや厚手のつくりである。平面形は直線刃の台形を呈し、A 面右寄りに僅かに偏って 1 孔の穿孔がある。その穿孔の周囲には A・B 面ともに穿孔前の敲打痕が認められる。両刃で、体部 A 面は全体を磨き、B 面は刃部側の約半分と背部側の一部を磨くが、背部側の約半分には剥離面が残る。背面の大部分は打ち欠いたままであるが、B 面右半の背頂部の非常に狭い範囲に数箇所の研磨面が認められる。ちょうど握った際に掌が当たる部分であり、打ち欠いた際の鋭い凹凸を処理したのかもしれない。刃縁には使用痕と思われるにぶい光沢が肉眼で観察でき、全体に細かい刃こぼれが認められる。

626 は黒色の粘板岩製で、平面形は直線刃の長方形を呈し、A 面左半寄りに偏って 2 孔の穿孔がある。

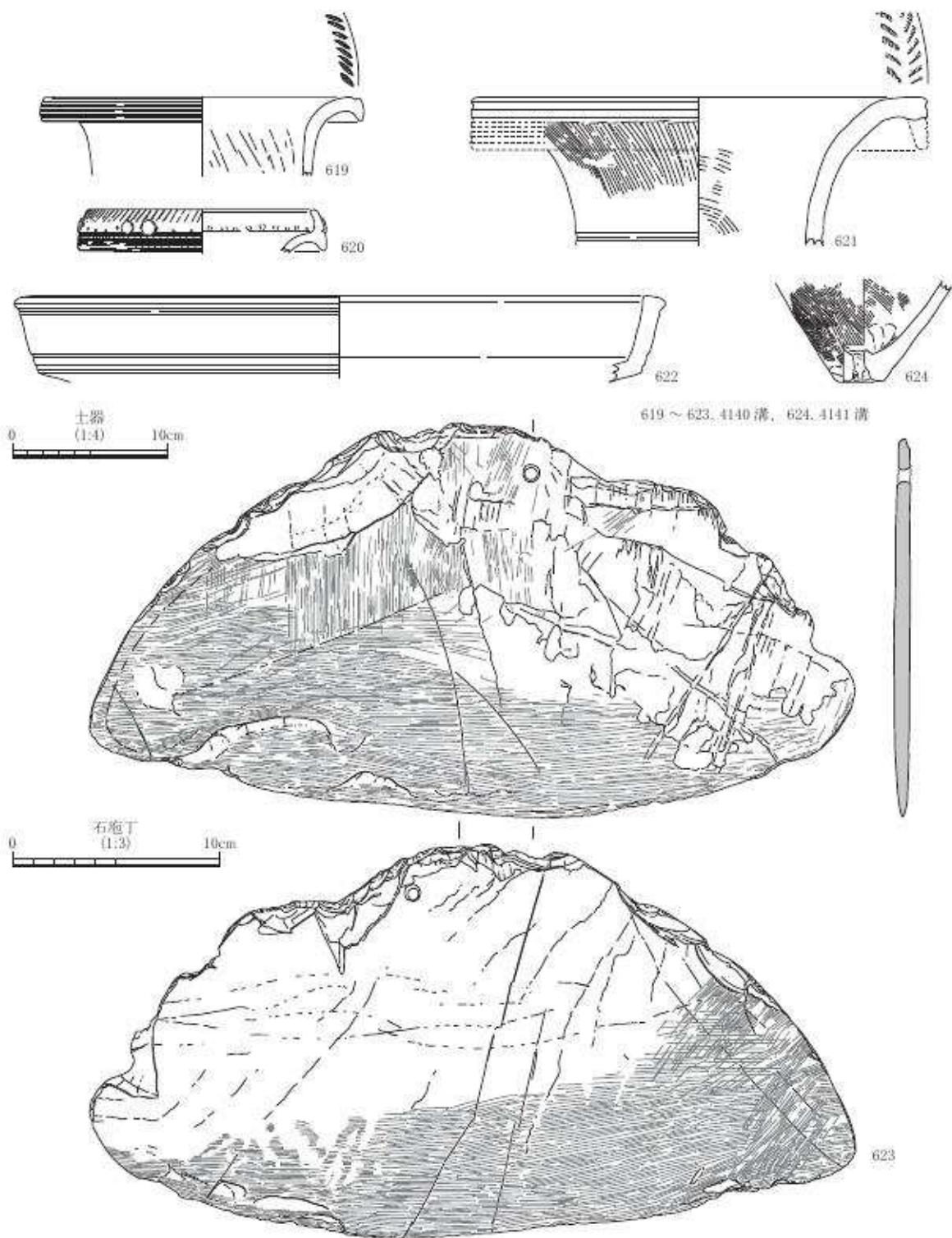


図 147 周溝墓 101 出土遺物 (1)

A面側の背部際には、石材を切断する際に生じたと思われる浅い溝状の凹みが認められる。大まかな形を作り出す際、擦切りによる施溝分割が行なわれたことを示す貴重な資料である。片刃で、体部A・B面および背面ともに全面を磨く。刃縁に使用痕と思われる光沢が肉眼で認められる。

627は黒色の粘板岩製で、平面形はやや内湾刃の長い三日月形を呈し、A面左半寄りに偏って2孔の穿孔がある。片刃で、A面の刃部幅は狭く、B面側からも僅かに傾きをつけて刃部を研ぎ出している。もとは直線刃半月型だったものが、使い込まれて内湾刃を呈するに至ったとみられる。体部A・B面と

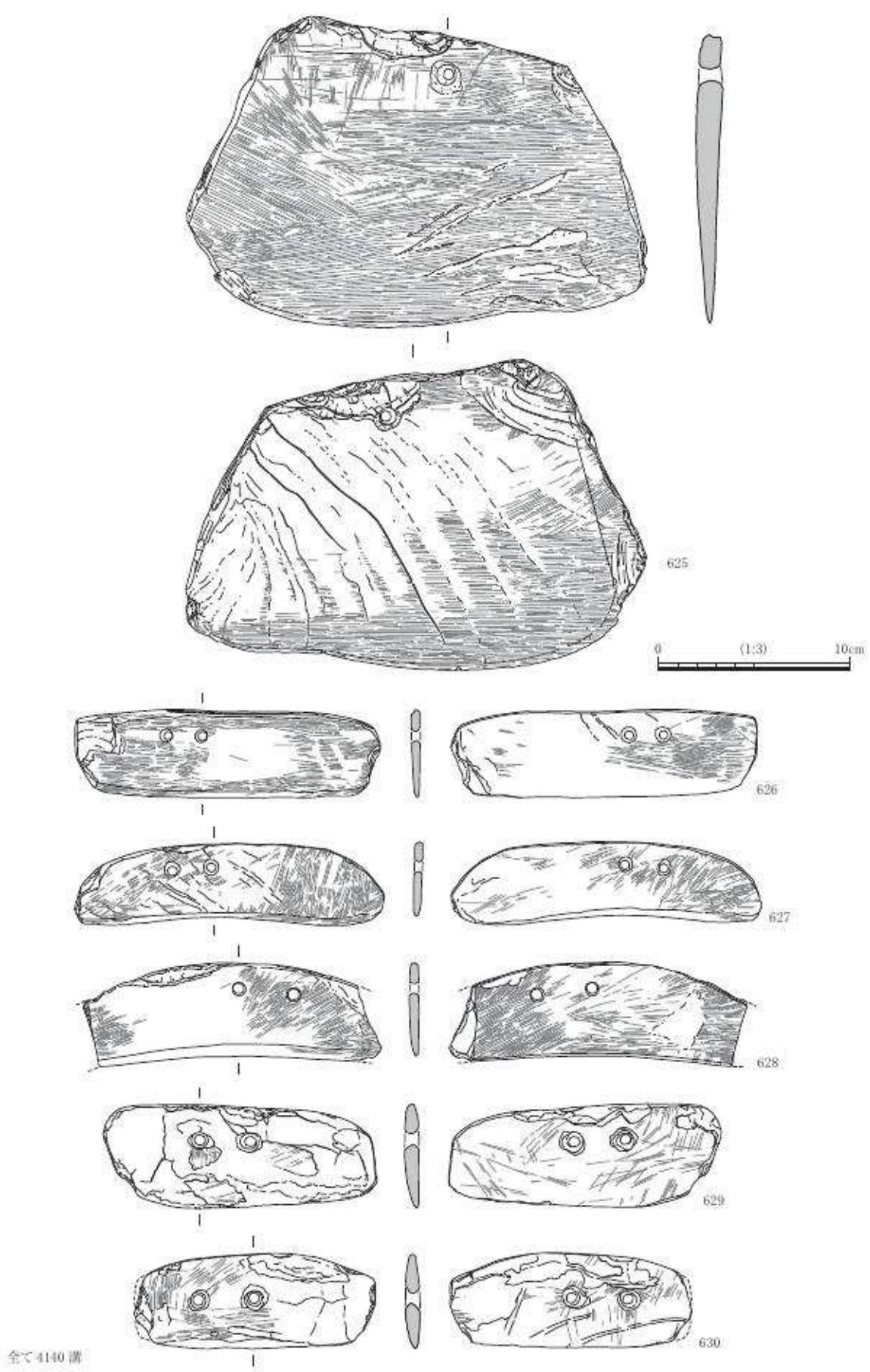


図 148 周溝墓 101 出土遺物（2）

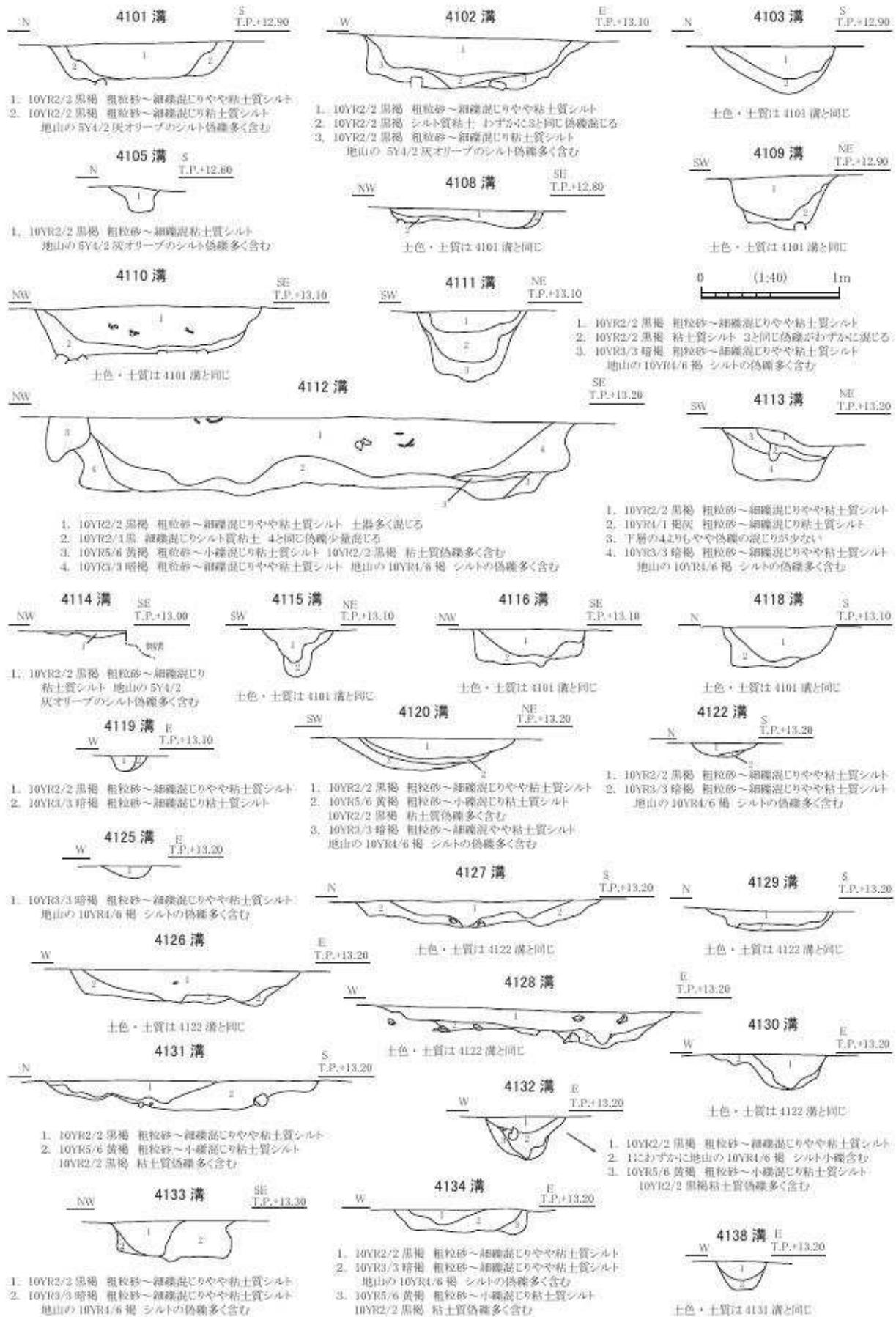


図 149 調査区南方周溝断面 (1)

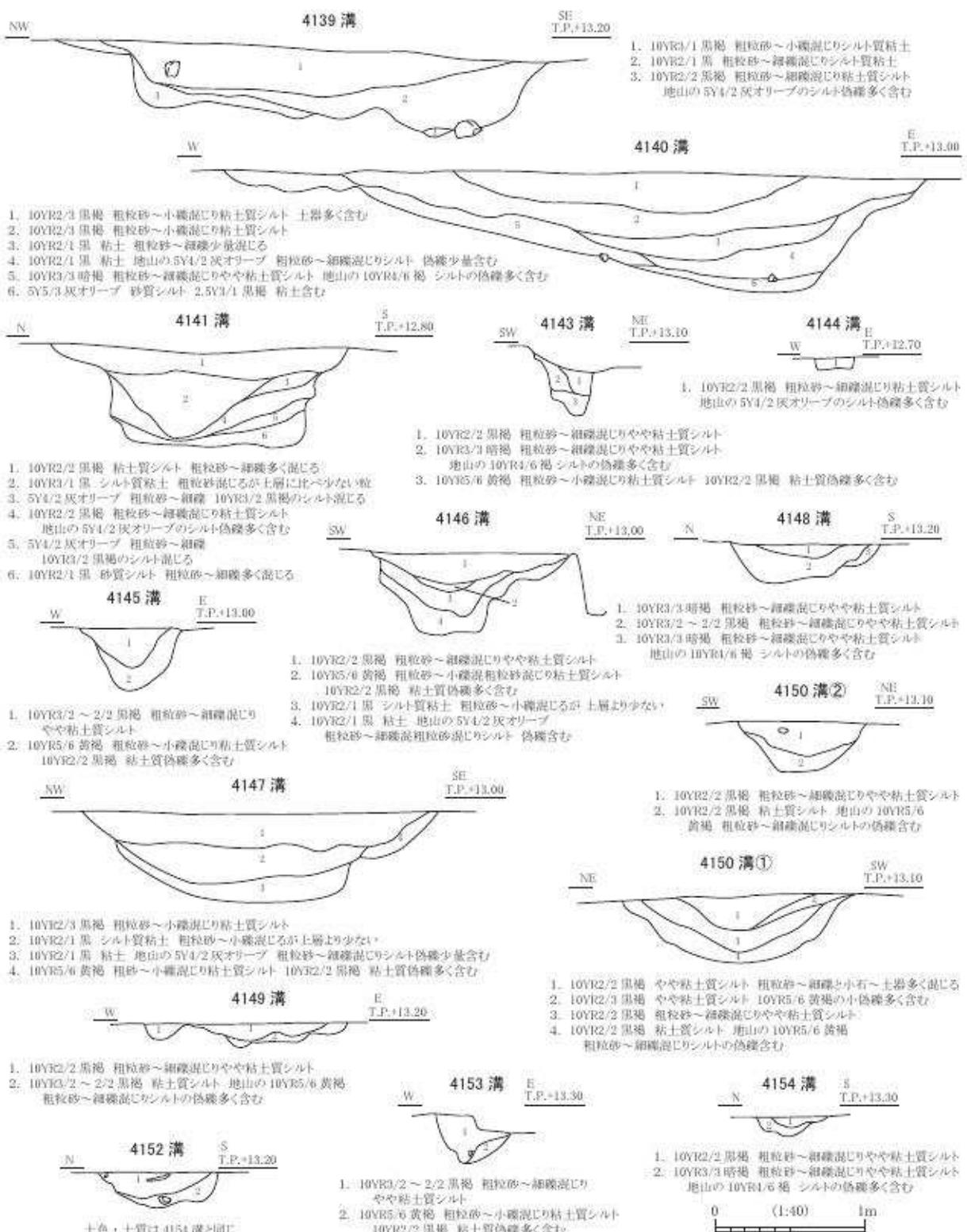


図 150 調査区南方周溝断面 (2)

もに全面を磨くが、剥離痕跡を完全に消し切れてはいない。背部も研磨し、面を成す箇所もある。刃縁はシャープさを欠き、使用痕と思われる光沢も肉眼で認められる。

628は黒色の粘板岩製である。平面形はやや内湾刃の三日月形を呈するが、両端が欠損するため全容は不明。他の石庖丁とは異なりA面右半寄りに偏って2孔の穿孔がある。片刃とみられるが、刃部の稜線は緩やかで、B面側も僅かに傾きを付けて研ぎ出している。体部はA・B面ともに全面を丁寧に研

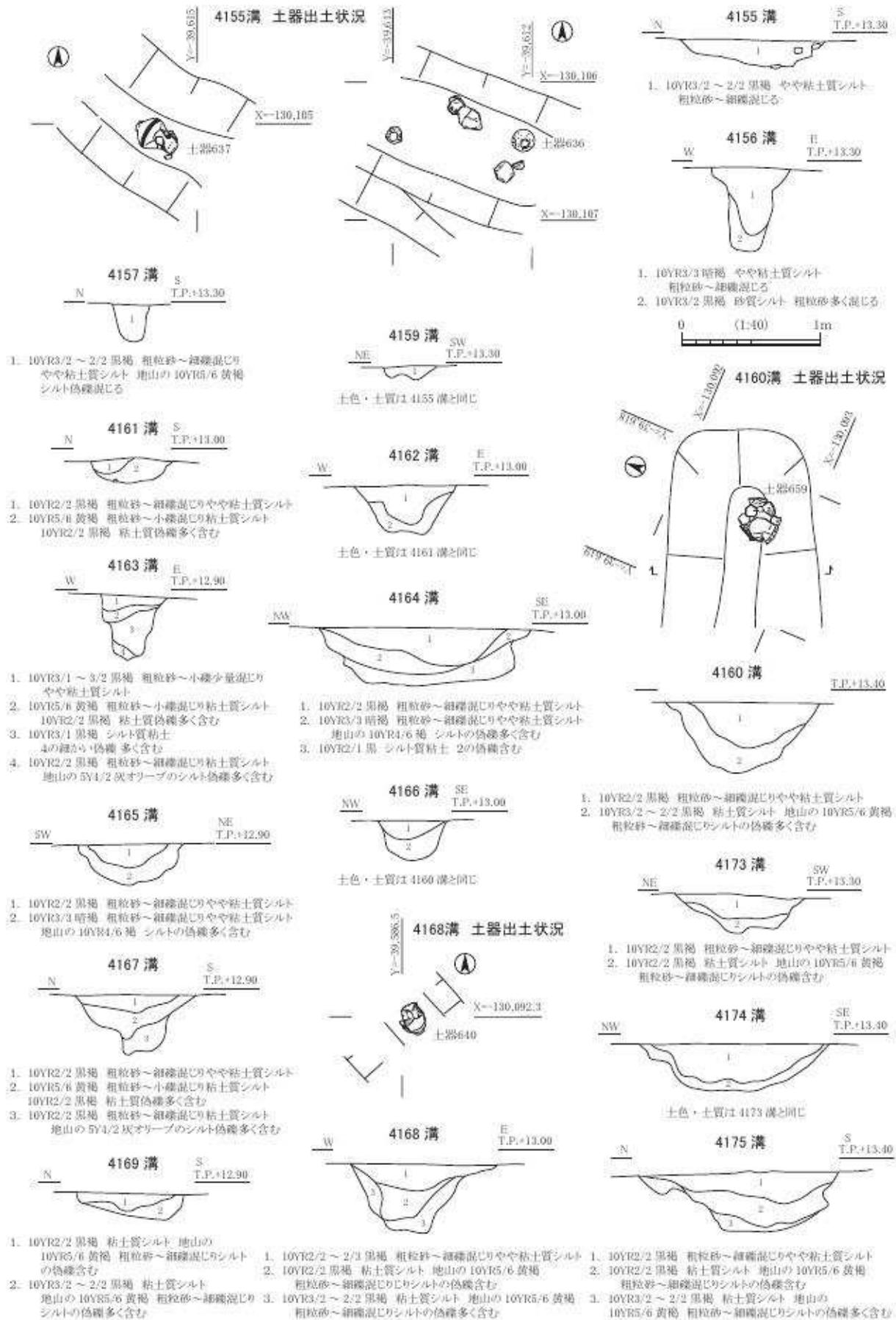


図 151 調査区南方周溝断面及び土器出土状況

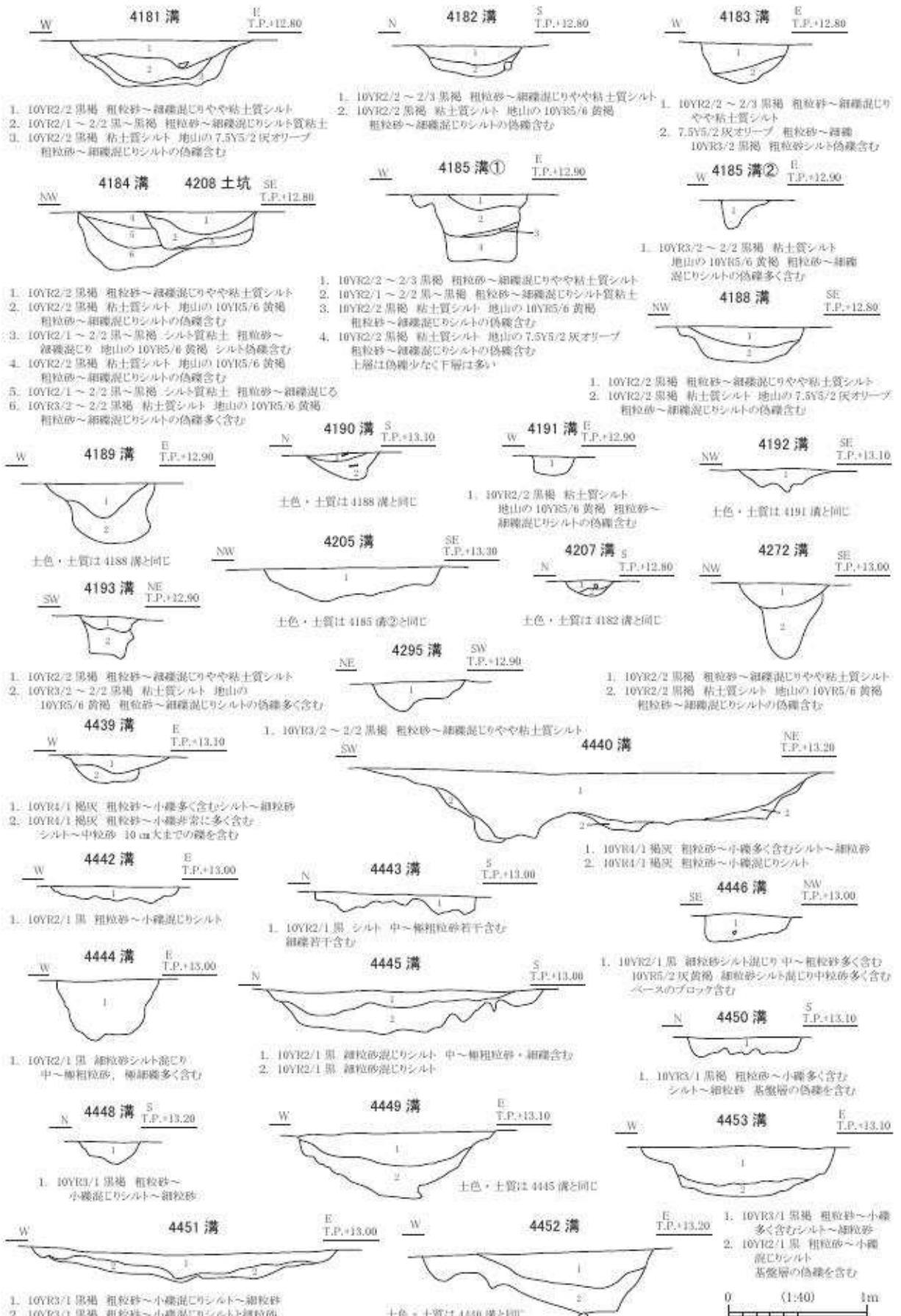


図 152 調査区南方周溝・土坑断面

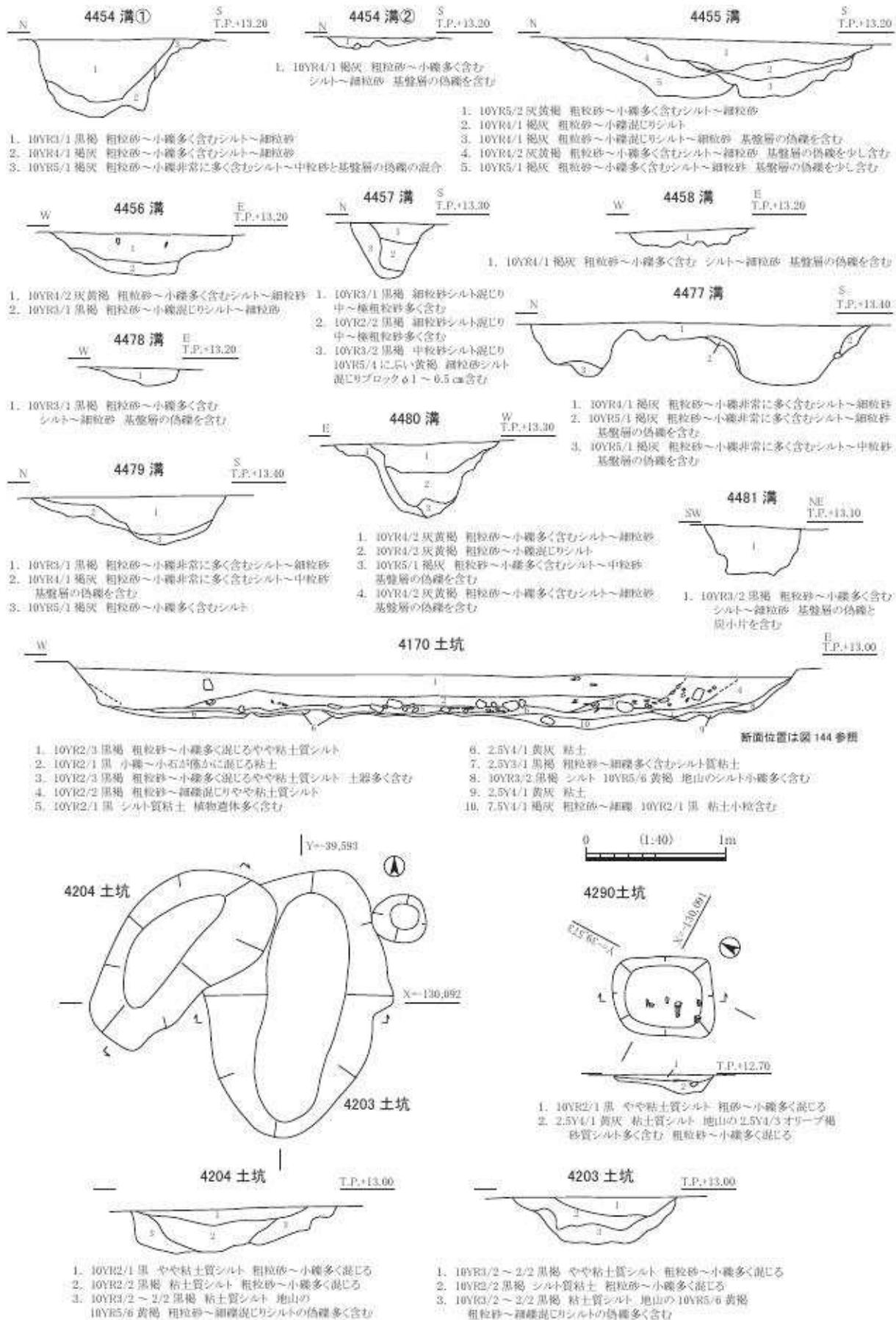


図 153 調査区南方遺構平面・断面

磨し、背部も丸く磨く。

629は灰色を呈する特異な石庖丁である。石材は凝灰質片岩である。平面形は直線刃の長方形を呈し、A面左半寄りに偏って2孔の穿孔がある。石質が軟らかいためか、穿孔の外径が大きい。片刃で、体部A・B面ともに全面を磨くが、風化のため表面は荒れている。背部も研磨し、面を成す箇所もある。

630はやや灰色の泥質片岩製で、平面形は直線刃のやや短い長方形を呈し、体部のほぼ中央、A面左半寄りに偏って2孔の穿孔がある。629同様に穿孔の外径が大きい。片刃で、体部A・B面及び背部も研磨し、背部には面を成す箇所もある。

同じ4140溝からはIV様式の広口壺や高杯（619～622）が出土した。620は生駒山西麓産胎土の広口壺である。北辺4141溝からはV様式の有孔鉢（624）が出土しているが、埋没最終段階の混入品と思われる。

**周溝墓104・105（図144・149・154）** 調査区南端中央に位置する。南南西—北北東を軸とする一群に属す。

両者が共有する4128溝からV様式の高杯（634）や器台（635）が出土しているが、埋没過程での混入と考えられる。

**周溝墓106（図144・151・154）** 5区西端に位置する。東南東—西北西を軸とする一群のうちの一つである。

南辺4155溝からI様式末～II様式初頭の広口壺（637）やII様式の台付壺（636）が出土した。637はほぼ完形で、供献土器と考えられる。頸部と体部に雑な沈線紋が施されており、一見3条1単位の櫛描直線紋のようにも見えるが、沈線間の幅がどこも一定でなく、途中でなくなる沈線も見られることから、ヘラ描紋と判断した。

**周溝墓107（図144・149・154）** 調査区南東隅に位置する。墳丘の振れに直交する向きの1230墓壙を埋葬施設とする。

南辺4101溝からはIII様式後半の甕（631）が出土した。

**1230墓壙（図144・155）** 周溝墓107の埋葬施設で、墳丘の中央に位置する。4層が非常に薄く、4層上面の調査時に既に遺構の輪郭が見えていた。このため4層上面遺構として若い番号を振って事前に掘削してしまったが、後にその位置や大きさから周溝墓107の埋葬施設であることが判明した。墓壙の平面形は長さ1.9m、幅0.93mの梢円形気味の隅丸長方形で、深さは検出面から0.4mを測る。主軸は墳丘の主軸にほぼ直交するN-25°-Eである。埋土は底の一部に薄く灰オリーブ色の粘土質シルトが見られるが、全体的には灰オリーブ色の小偽礫を多く含む黒褐～暗オリーブ褐色のやや粘土質シルトの单層である。木棺の痕跡は認められなかった。

II様式の鉢小片が出土している。

**周溝墓112（図144・149・150・154）** 調査区南東隅に位置する南東—北西を軸とする周溝墓である。

周溝墓94と重複するが先後関係は不明。

土坑状に広がる北辺の4112溝からI様式末～II様式初頭の広口壺（632）やII様式の広口壺（633）が出土している。632は頸部に6条2帯の沈線紋を刻み、633は複合櫛による櫛描紋を施す。

**4106墓壙（図144・155）** 周溝墓113の埋葬施設であるが、南・西辺の周溝が検出できておらず、周溝墓の規模や形状の詳細は明らかでない。このため墳丘との位置関係は明らかでない。墓壙の平面形は長さ0.73m、幅0.4mの小型の長方形で、小児用と考えられる。深さは約0.1mで、その墓壙底部壁

際でさらに側板穴と小口穴が検出できた。これにより底板を挟むように側板と小口板を墓壙底部に埋め込む構造の木棺が据えられていたことが復原できるが、側板と小口板との関係は不明。据え付け穴の内法は長さ約0.45m、幅0.25mを測る。埋土は黒褐色の偽礫を多く含む、粗粒砂～小礫混じりの黄褐色粘土質シルトである。主軸はN-10°-Eである。

**周溝墓 117～120・160（図144・151・152・156）** 周溝墓100と101との間に位置する小型の一群である。

4168溝からはⅡ様式の無頸壺（640）や流水紋が描かれた壺あるいは鉢の小片（639）が、4185溝からは頸部に多条沈線紋を施すⅠ様式末の広口壺（641）が出土している。4182溝からは時期のや

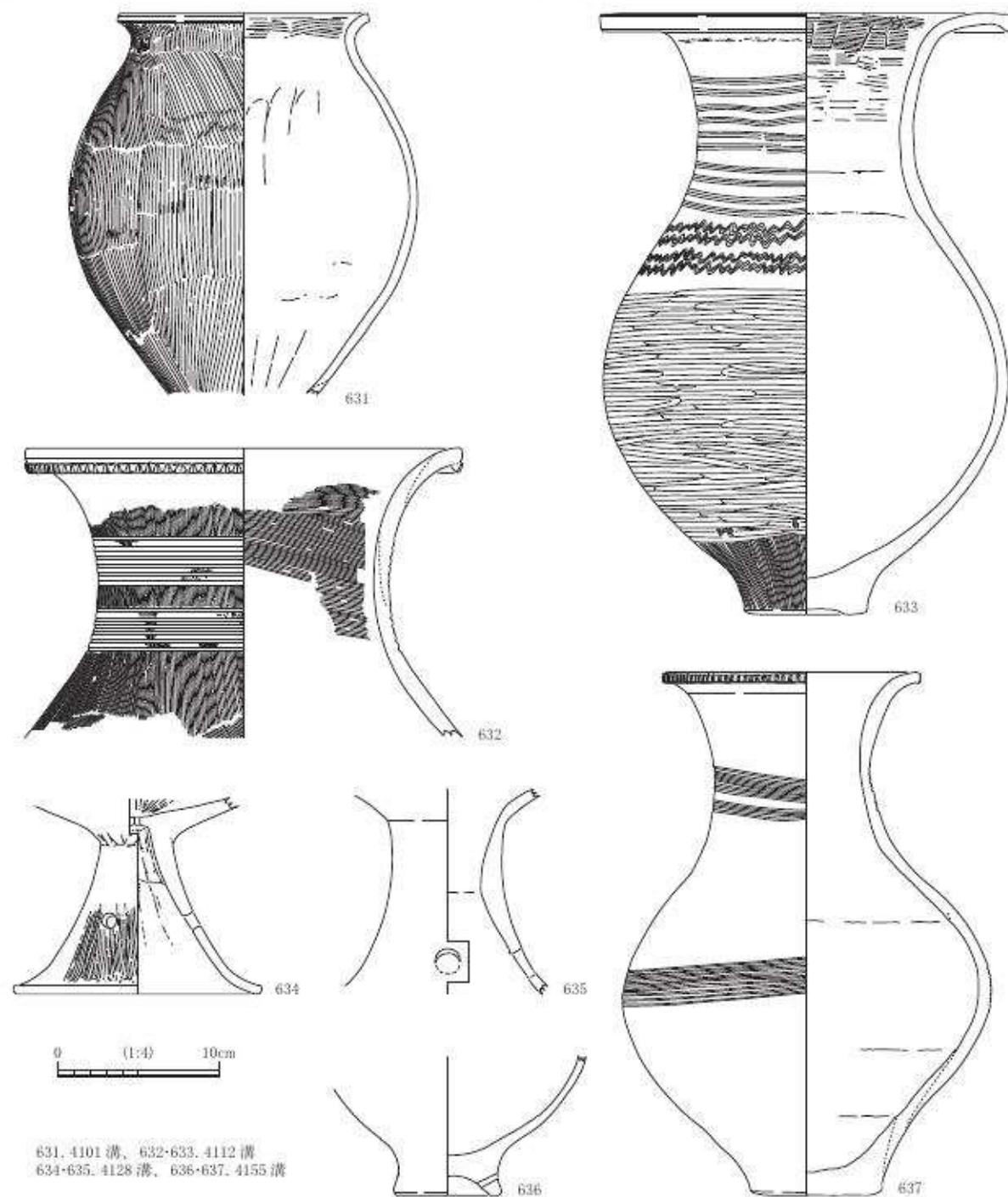


図154 周溝出土遺物（5）

や下がる中期後半の壺（642）が出土しているが、これはおそらく3001溝の影響により混入したものと考えられる。

周溝墓 123・162（図144・151～153・168） 5・6区の調査区境に位置し、東南東—西北西を軸とする一群に属す。

4160溝からは供献土器と思われるII様式の甕（659）が、4512溝からはI様式末～II様式初頭の短頸の広口壺（658）が出土している。658は頸部にヘラ描沈線紋を5条施す。

周溝墓 124（図144・150・156） 周溝墓106の南東側に位置し、106と同じ東南東—西北西を軸とする。

南辺 4152溝から天井部に穿孔がある中期の蓋（638）が出土している。

周溝墓 126・128（図157・158・162） 調査区南西隅に位置する。周溝を共有していることからまとめて報告するが、両者は墳丘の振れが若干異なっており、別々の群に属していたと考えられる。

共有する4427溝からはII様式初頭の甕（643）が出土している。

周溝墓 132・133・134・137（図144・152・157～159・162） 調査区南西部に広がる南西—北東を軸とする一群である。

4451溝からはI様式末の甕（644）、4438溝からはII様式の壺（648）、4441溝からはII様式の広口壺（646・647）や甕蓋（645）が出土している。このほか周溝墓137の北辺4470溝から、供献土器と考えられる潰れた状態の甕が出土している（図159・写真図版55-6）。中期前半のものと思われるが、細片化しており復原・図化できなかった。

4570墓壙（図157・161） 周溝墓134の埋葬施設で、墳丘の中央に位置する。墓壙の平面形は長さ1.84m、幅0.88mの長方形で、墓壙底部までの深さは検出面から0.35mと深い。その墓壙底部の両端には小口穴が設けられており、底板を挟むように小口板を墓壙底部に埋め込む構造の木棺が据えられていたことが分かる。北側の小口穴は長さ0.58m、幅0.08m、深さは墓壙底部から0.09m、南側の小口穴は長さ0.58m、幅約0.13m、深さは墓壙底部から0.07mで、両者とも墓壙の幅よりも狭いことから、側板が小口板を挟む構造の木棺であったと考えられる。なお非常に不明瞭ではあったが、断面の観察で側板と小口板、および底板の痕跡が検出でき、底板の大きさが長さ1.48m、幅0.61mであったこと、また側板が底板を挟む構造であったことが確認できた。木棺痕跡は粗粒砂～小礫混じりの黒褐色やや粘土質シルトで、木棺内の埋土は褐色の偽礫を含む粗粒砂～小礫混じりの暗褐色シルトである。主軸はN-49°-Eである。

4571墓壙（図157・161・162） 周溝墓137の埋葬施設で、墳丘の南辺周溝寄りに位置する。4572墓壙との複数埋葬である。墓壙の平面形は長さ1.14m、幅0.55mのやや小型の長方形で、墓壙底部までの深さは検出面から0.06～0.09mを測る。その墓壙底部の両端には小口穴を設けており、底板を挟むように小口板を墓壙底部に埋め込む構造の木棺が据えられていたことが分かる。東側の小口穴は長さ0.28m、幅0.08m、深さは墓壙底部から0.06m、西側の小口穴は長さ0.37m、幅約0.1m、深さは墓壙底部から0.07mで、両側とも墓壙の幅よりも狭いことから、側板が小口板を挟む構造の木棺であったと考えられる。なお非常に不明瞭ではあったが、断面の観察で木棺材の痕跡が検出でき、底板の大きさが長さ0.84m、幅0.37mであったこと、また側板が底板を挟む構造であったことが確認できた。木棺痕跡は粗粒砂～小礫混じりの灰黄褐～黒褐色のシルトで、木棺内の埋土は粗粒砂～小礫混じりの暗褐色シルトである。主軸は4572墓壙と直交するW-57°-Nである。

サヌカイト製の打製石鏃（651）が1点出土している。四基無茎式で、他の石鏃に比べ表面の風化が

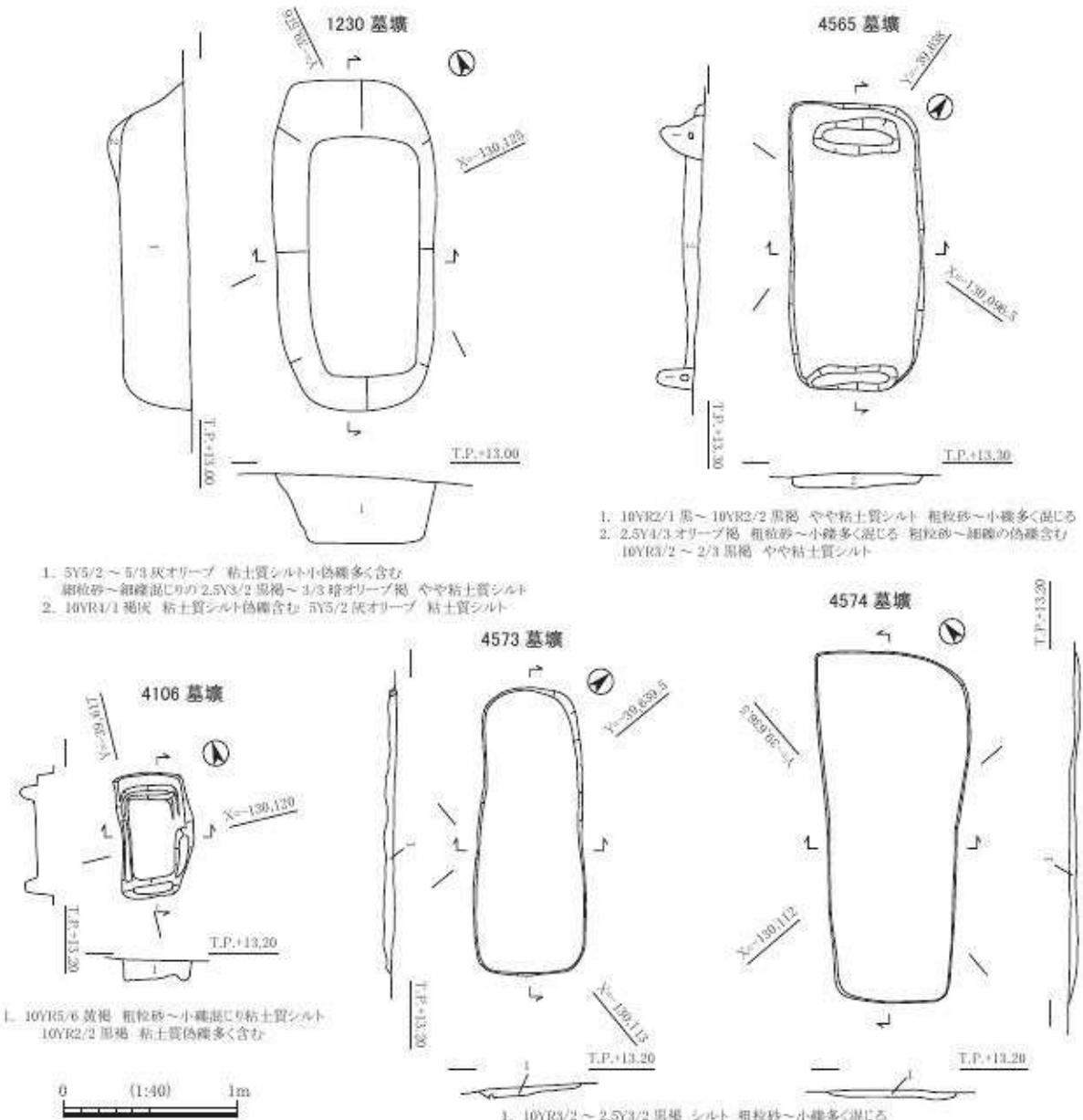


図 155 調査区南方墓壙平面・断面

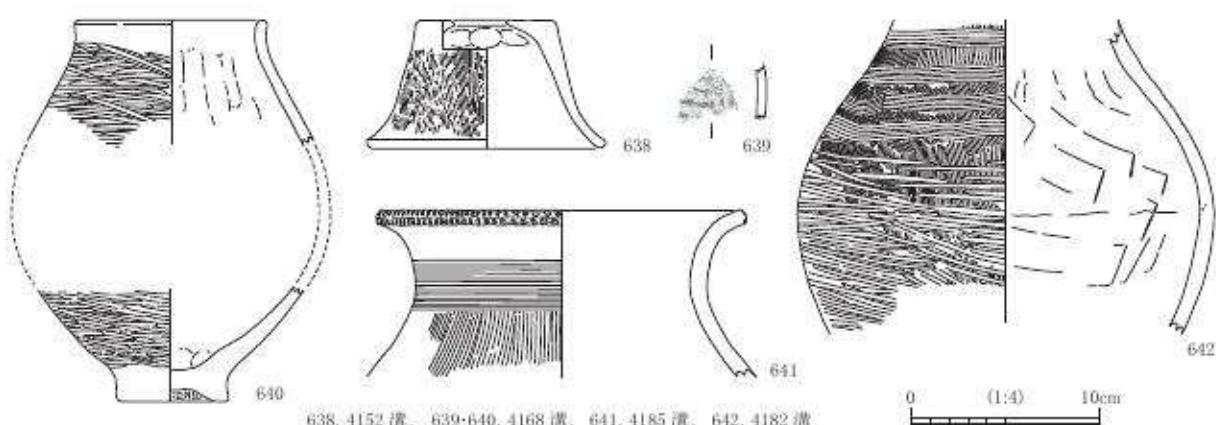


図 156 周溝出土遺物 (6)

著しい。縄文時代の所産が。

4572 墓壙（図 157・161）周溝墓 137 の埋葬施設で、墳丘の中央やや東寄りに位置する。4571 墓壙との複数埋葬である。墓壙の平面形は長さ 1.75 m、幅 0.8 m の長方形で、墓壙底部までの深さは検出面から約 0.15 m を測る。その墓壙底部の両端には小口穴を設けており、底板を挟むように小口板を墓壙底部に埋め込む構造の木棺が据えられていたことが分かる。北側の小口穴は長さ 0.58 m、幅約 0.1 m、

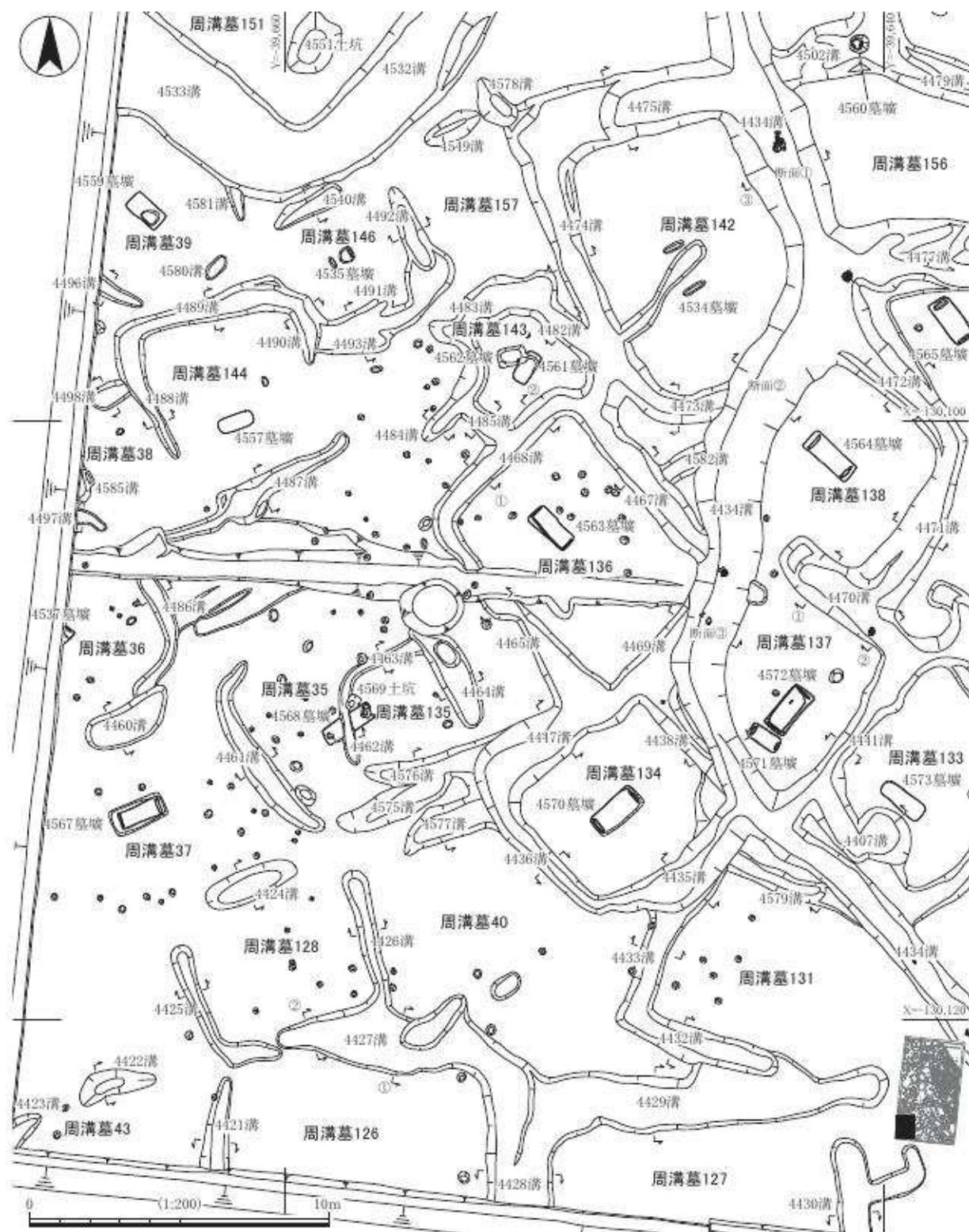


図 157 調査区南西隅 4 層下面遺構平面

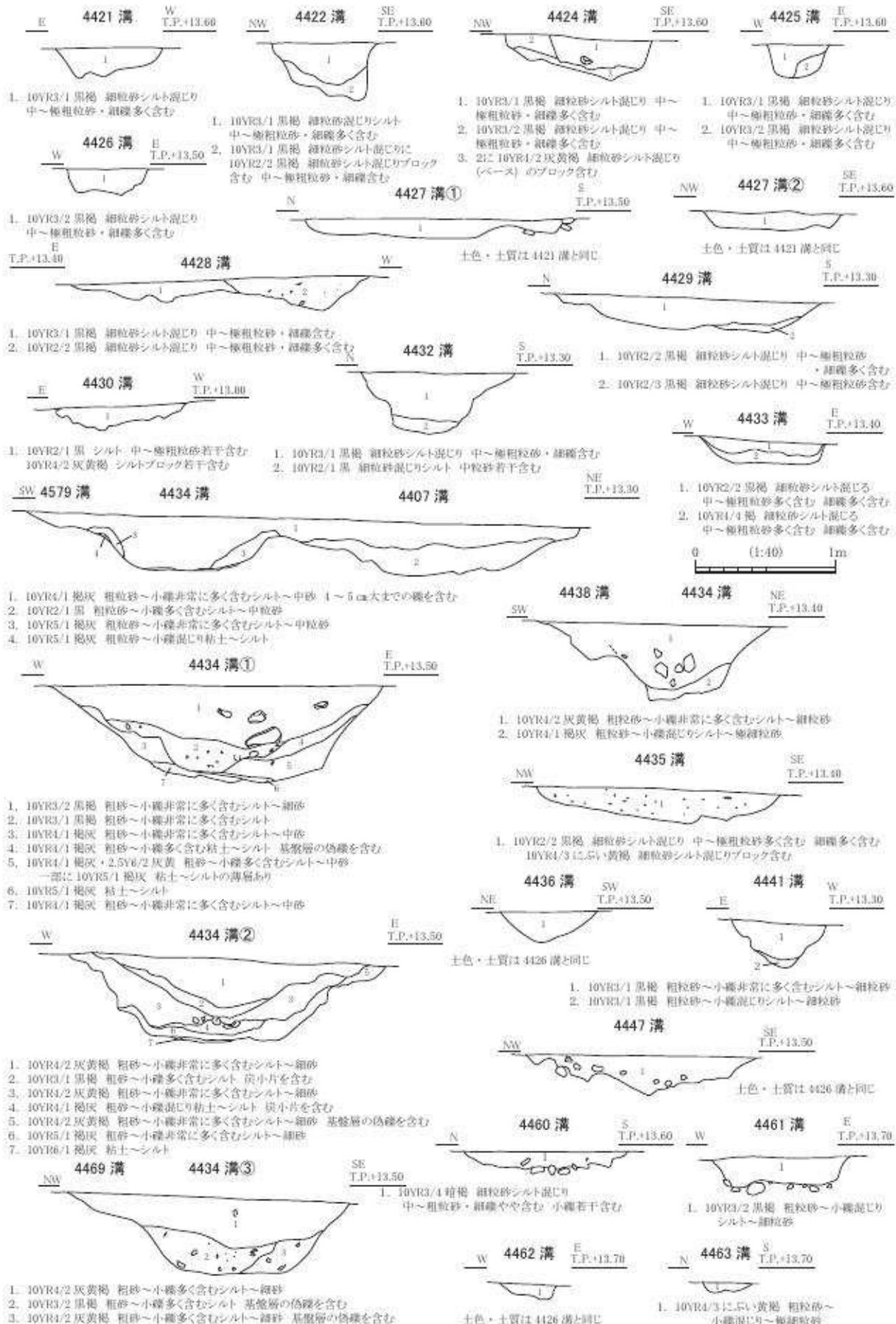


図 158 調査区南西隅周溝・4434 溝断面

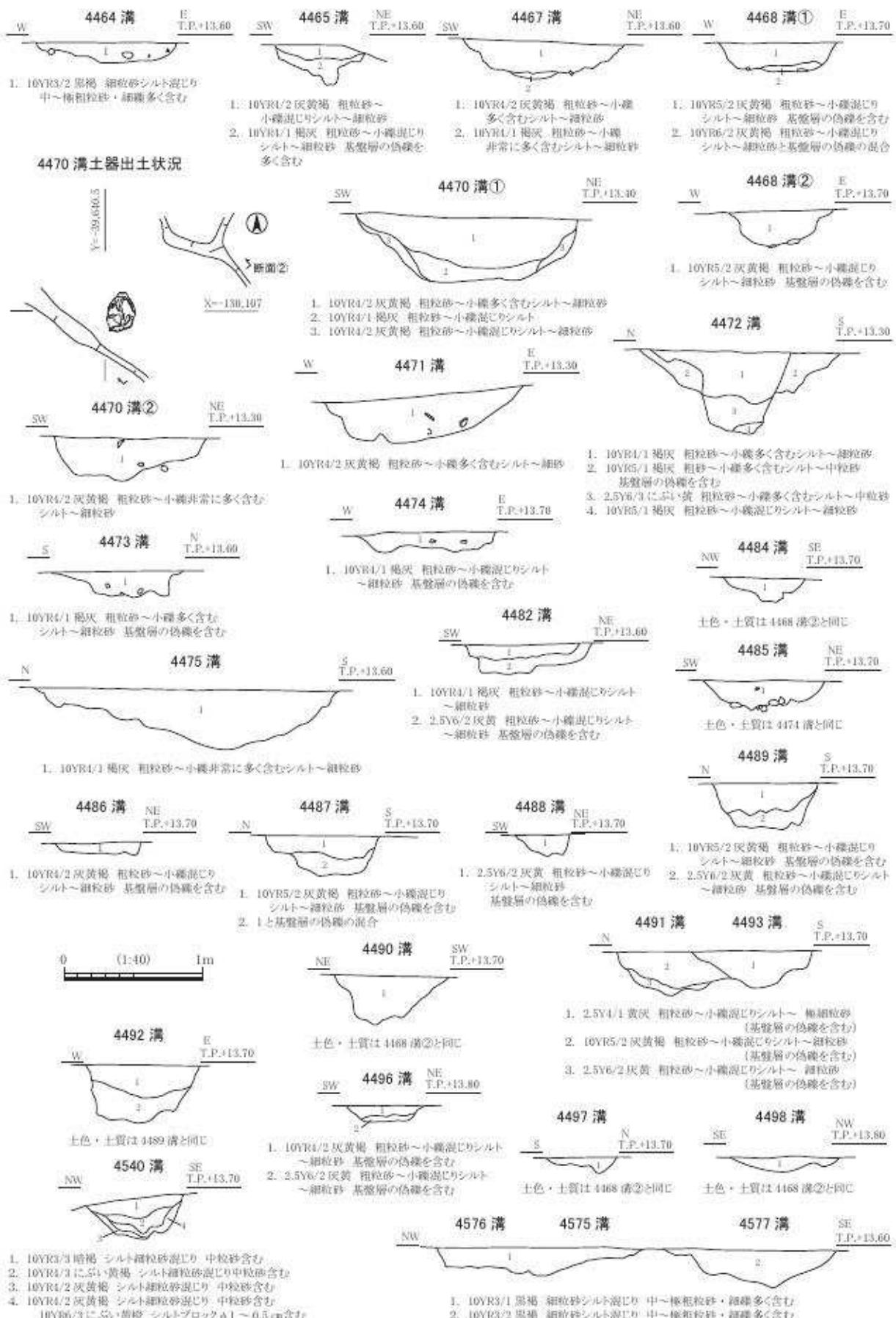


図 159 調査区南西隅周溝断面及び土器出土状況

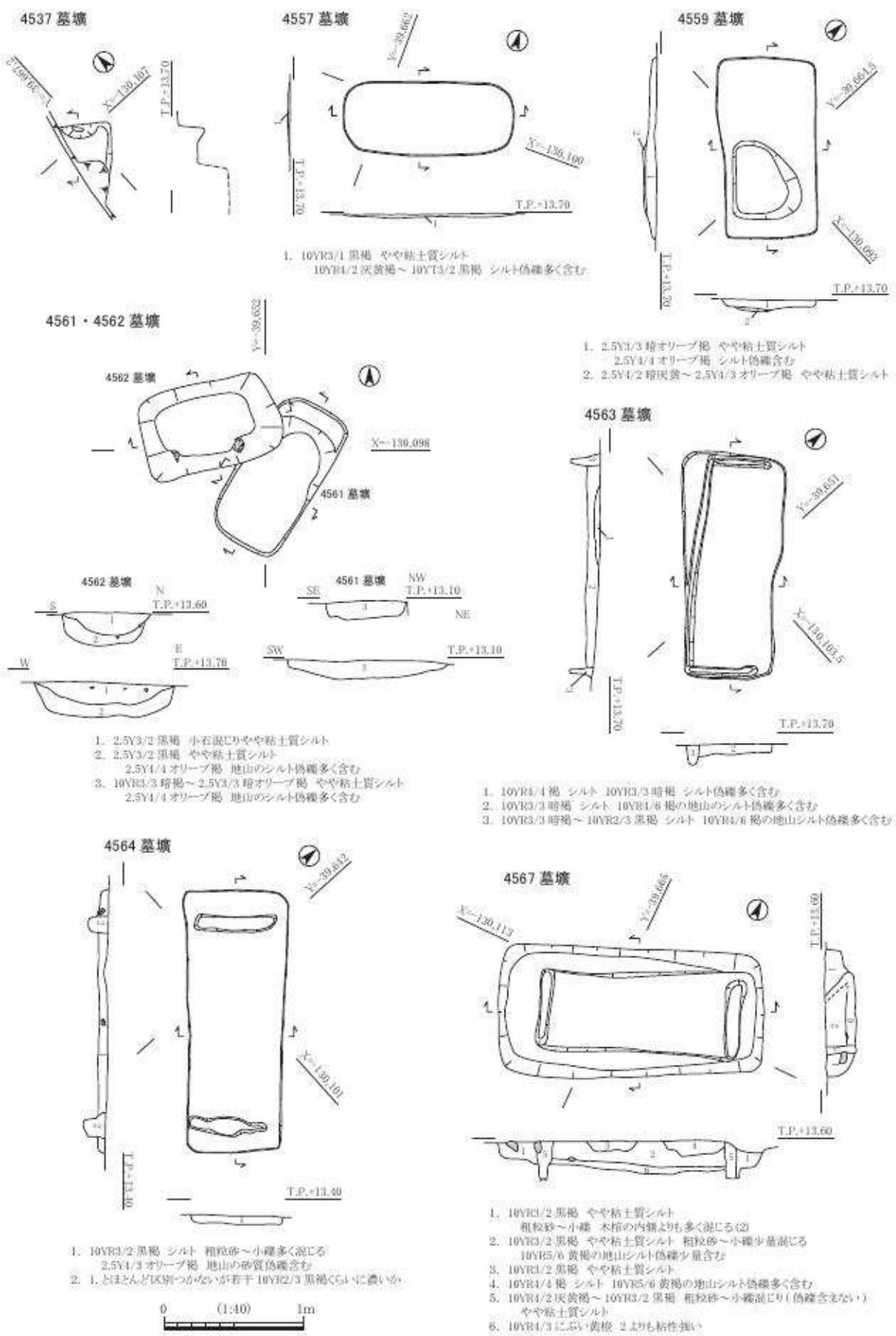


図 160 調査区南西隅墓壙平面・断面

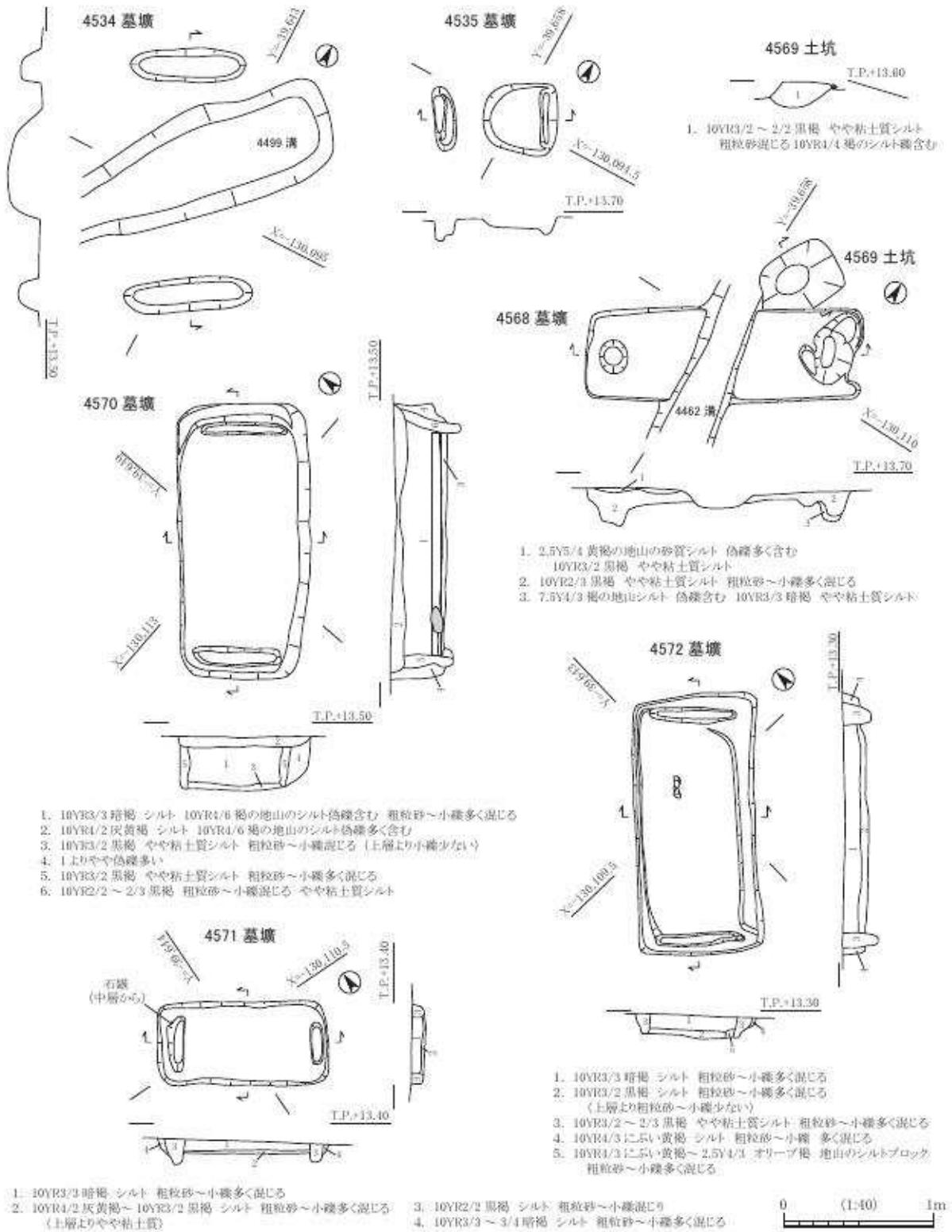


図 161 調査区南西隅墓壙・土坑平面・断面

深さは墓壙底部から 0.07 m、南側の小口穴は長さ 0.6 m、幅約 0.08 m、深さは墓壙底部から 0.09 m で、両側とも墓壙の幅よりも狭いことから、側板が小口板を挟む構造であったと考えられる。なお非常に不明瞭ではあったが、断面の観察で木棺材の痕跡が検出でき、底板の大きさが長さ 1.39 m、幅 0.56 m であったこと、また側板が底板を挟む構造であったことが確認できた。木棺痕跡は粗粒砂～小礫混じりの黒褐色のシルト、またはやや粘土質のシルトで、木棺内の埋土は粗粒砂～小礫が多く混じる暗褐色

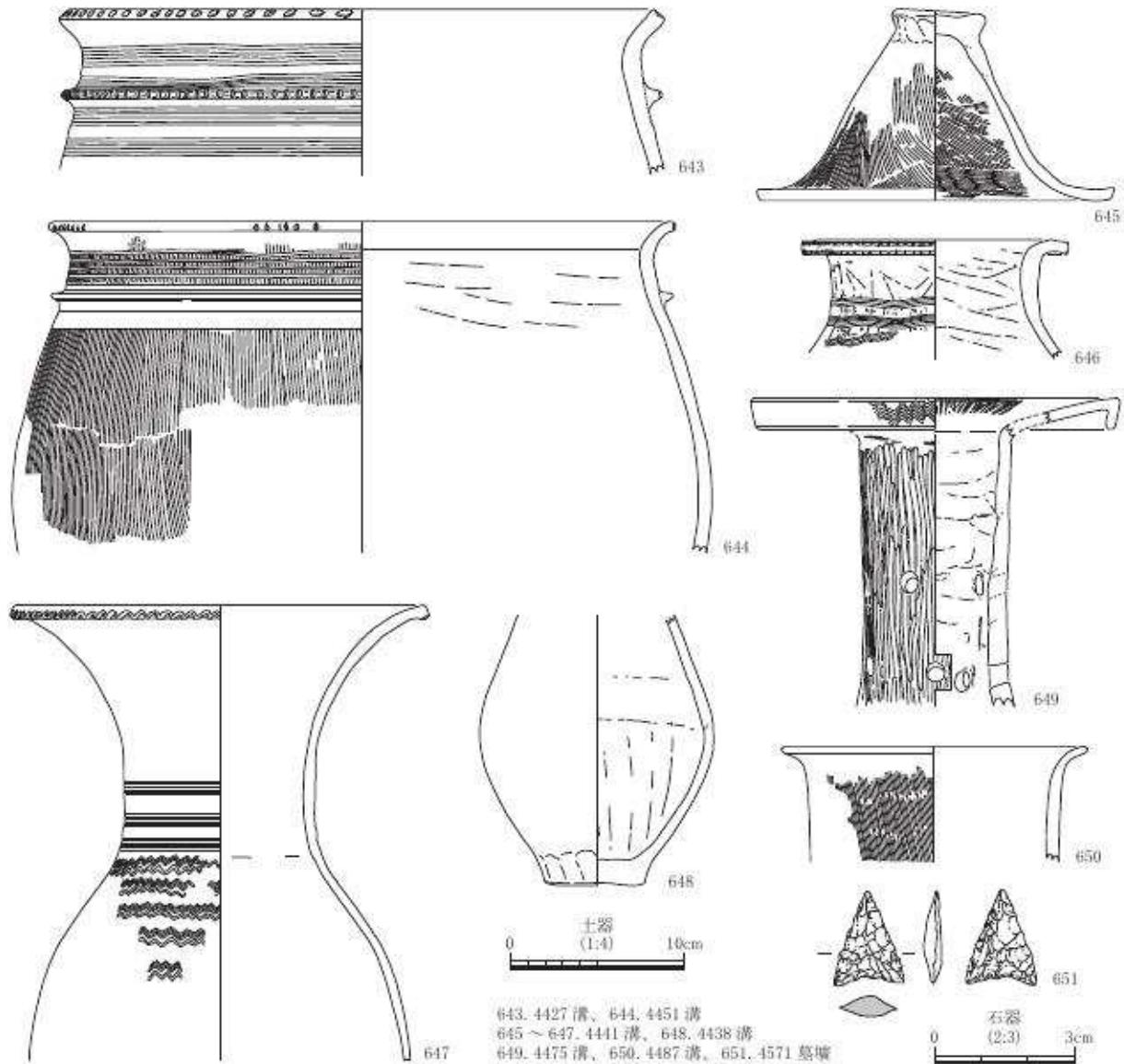


図 162 周溝・墓壙出土遺物（1）

シルトである。主軸は 4571 墓壙と直交する N-41°-E である。

底板痕跡の上面から壺体部の細片が出土した。外面はミガキ。時期は不明。

**4573 墓壙（図 144・155）** 周溝墓 133 の埋葬施設で、墳丘の中央南周溝寄りに位置する。4574 墓壙との複数埋葬である。墓壙の平面形は長さ 1.66 m、幅 0.56 ~ 0.64 m の隅丸長方形で、深さは検出面から約 0.05 m と非常に浅い。埋土は粗粒砂～小礫が多く混じる黒褐色シルトの単層で、木棺の痕跡は認められなかった。主軸は 4574 墓壙と直交する W-50°-N である。

**4574 墓壙（図 144・155）** 周溝墓 133 の埋葬施設で、墳丘の北東隅寄りに位置する。4573 墓壙との複数埋葬である。墓壙の平面形は長さ 2.04 m、幅 0.67 ~ 0.88 m のやや歪んだ長方形を呈する。深さは 4573 墓壙と同じく検出面から約 0.04 m と非常に浅い。埋土は粗粒砂～小礫が多く混じる黒褐色シルトの単層で、木棺の痕跡は認められなかった。主軸は 4573 墓壙と直交する N-40°-E である。

**4563 墓壙（図 157・160）** 周溝墓 136 の埋葬施設で、墳丘の中央やや西寄りに位置する。墓壙の平面形は長さ約 1.6 m、幅 0.62 ~ 0.75 m のやや歪んだ長方形で、墓壙底部までの深さは検出面から約 0.1 m を測る。その墓壙底部で側板と小口板の据え付け穴を検出した（写真図版 52-4）。ただし北側の側板

穴は検出できなかった。据え付け穴の幅は0.05～0.06m程度と細く、深さは小口穴が墓壙底部から0.12mと深い。側板穴の深さは0.05mである。東側小口穴の長さは0.52m、西側小口板は0.42mで、小口穴間の内法は1.43mを測る。以上から、底板を挟むように小口板と側板を墓壙底部に埋め込む構造の木棺が据えられていたことが復原できる。側板と小口板との関係については、西側小口穴が側板穴までおさまっていることから、側板が小口板を挟む構造であったと考えられる。なお非常に不明瞭ではあったが、小口穴から上方にのびる木棺の痕跡が確認できた。木棺痕跡は地山の偽礫を多く含む暗褐～黒褐色のシルトで、木棺内の埋土は地山の偽礫を多く含む暗褐のシルトなど2層に分層できた。主軸は墳丘の振れとほぼ同じW-42°-Nである。

4564 墓壙(図157・160) 周溝墓138の埋葬施設で、墳丘の中央に位置する。墓壙の平面形は長さ1.88m、幅0.67～0.75mの長方形で、墓壙底部までの深さは検出面から0.07mを測る。その墓壙底部の両端には小口穴を設けており、底板を挟むように小口板を墓壙底部に埋め込む構造の木棺が据えられていたことが分かる。東側の小口穴は長さ0.57m、幅0.06～0.13m、深さは墓壙底部から0.1m、西側小口穴は長さ0.59m、幅約0.11m、深さは墓壙底部から0.07mで、小口穴間の内法は約1.35mを測る。両者とも墓壙の幅よりも狭いことから、この木棺は側板が小口板を挟む構造であったと考えられる。なお非常に不明瞭ではあったが、小口穴から上方にのびる木棺の痕跡が確認できた。ただし側板の痕跡については検出できなかった。埋土は地山の偽礫を多く含む粗粒砂～小礫混じりの黒褐色シルトで、木棺痕跡は若干黒色が強い。主軸は墳丘の振れと同じW-48°-Nである。

周溝墓139・141(図144・152) 周溝墓139は南西一北東を主軸とし、周溝墓141は南東一北西を主軸とする。周溝も共有していない。他の周溝重複箇所では同時に埋まっているような状況が多く、ほとんど先後関係を明らかにできなかったが、両者が接する4455溝は切り合い関係が明瞭で、断面観察から南側に位置する周溝墓139が新しいことが確認できた。

周溝墓142(図157・159・162) 後述の周溝墓145の南東側に近接するが、墳丘の振れが異なっており、周溝墓145とは明らかに別の群に属していることが分かる。

北辺4475溝からV様式の器台(649)が出土しているが、東側に掘り直された4434溝の影響で混入したものと考えられる。

4534 墓壙(図157・161) 周溝墓142の埋葬施設で、墳丘の中央に位置する。墓壙掘方はなく、木棺小口板の据え付け穴だけが二状に明瞭に検出できた。これにより、底板を挟むように小口板を墓壙底部に埋め込む構造の木棺が据えられていたことが判明した。小口穴の長さは北側が0.76m、南側が0.86mで、幅は両側とも約0.22m、深さも両側とも0.13mである。小口穴間の内法は約1.3mを測る。主軸は墳丘の振れとほぼ同じW-27°-Nである。

4561 墓壙(図157・160) 周溝墓143の埋葬施設で、墳丘の中央に位置する。4562墓壙と重複し、切られる。墓壙の平面形は長さ1.14m、幅0.58mのやや小型の長方形で、深さは検出面から約0.13mを測る。埋土は地山の偽礫を多く含む暗褐～暗オリーブ褐色のやや粘土質シルトの单層である。木棺の痕跡は認められなかった。主軸はN-31°-Eである。

4562 墓壙(図157・160) 周溝墓143の埋葬施設である。4561墓壙の北側に重複し、4561墓壙を切る。墓壙の平面形は長さ1.0m、幅0.62mの隅丸長方形で、深さは検出面から約0.25mを測る。埋土は下層が地山の偽礫を多く含む黒褐色のやや粘土質シルト、上層が小石混じりの黒褐色やや粘土質シルトである。木棺の痕跡は認められなかった。主軸はN-76°-Eである。

周溝墓 144（図 156・157・159・162）後述の周溝墓 145 の南側に近接するが、墳丘の振れが異なつておらず、周溝墓 145 とは明らかに別の群に属していることが分かる。

南辺 4487 溝から II 様式の甕（650）が出土している。

4557 墓壙（図 157・160）周溝墓 144 の埋葬施設で、墳丘の中央やや南寄りに位置する。墓壙の平面形は長さ 1.23 m、幅 0.53 m の梢円形気味の隅丸長方形を呈する。深さは非常に浅く検出面から 1 ~ 2 cm 程度掘り下げた段階で直ちに墓壙底部となった。埋土は灰黄褐～黒褐色の偽礫を多く含む黒褐色のやや粘土質シルトで、木棺の痕跡は認められなかった。主軸は N - 70° - E である。

周溝墓 145（図 163 ~ 165・167）調査区南西部の西壁際に位置する。周溝墓 100・101 に次ぐ大型の周溝墓で、墳丘の規模は検出面で 13.0 × 10.9 m を測る。北側に並ぶ周溝墓群とほぼ同じ振れであることから、一見同じ群で、同時期の構築のように見えるが、周溝墓 151 を壊して構築しており、出土遺物も新しい。

北辺 4531 溝からは、底から 0.2 m ほど浮いた状態で中期後半の広口壺（653）が出土した。頸部より上を欠損する。供献土器で、体部下半に穿孔が、肩部に「×」の線刻が見られる。

1519 墓壙（図 163・166）周溝墓 145 の埋葬施設で、墳丘の中軸線上やや西寄りに位置する。ちょうどこの墓壙付近を境に北東側に 4 層が堆積していた。このため 4 層上面の遺構と間違え事前に若い番号を振って掘削してしまったが、後にその位置や大きさから周溝墓 145 の埋葬施設であることが判明した。墓壙の平面形は長さ 2.18 m、幅 1.22 m の長方形で、深さは検出面から約 0.4 ~ 0.45 m を測る。

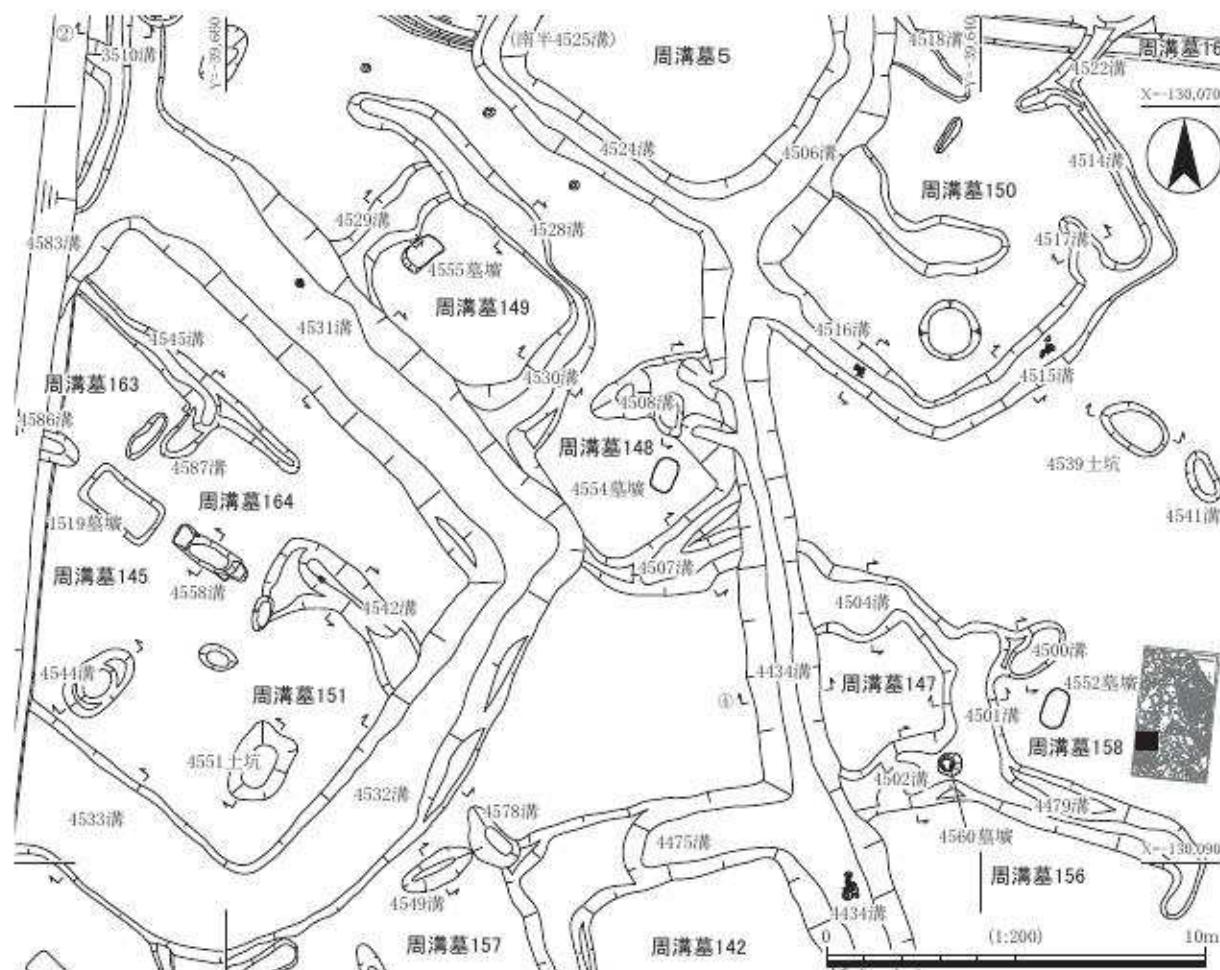


図 163 周溝墓 145 周辺 4 層下面遺構平面

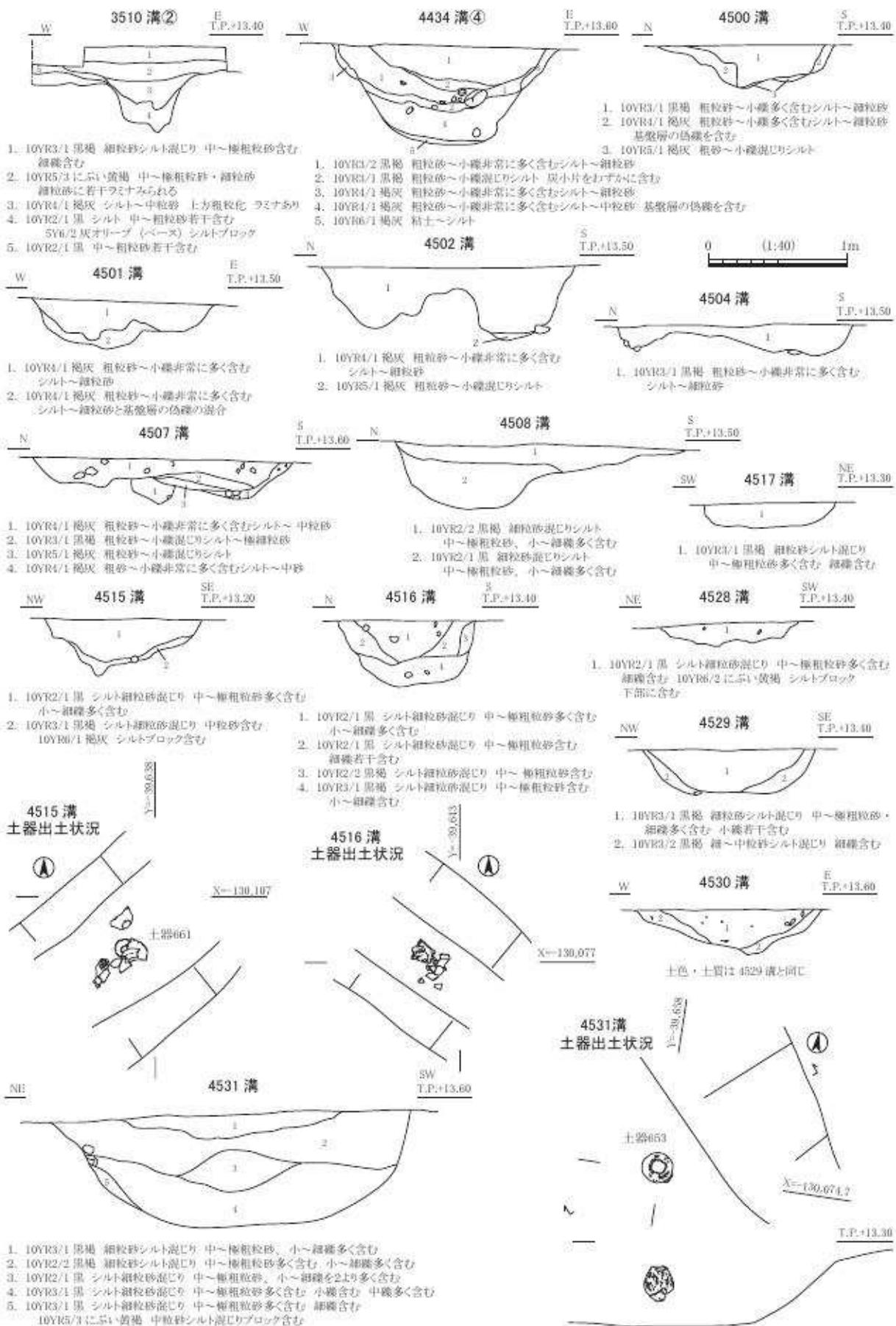


図 164 周溝墓 145 周辺周溝・4434 溝断面及び土器出土状況

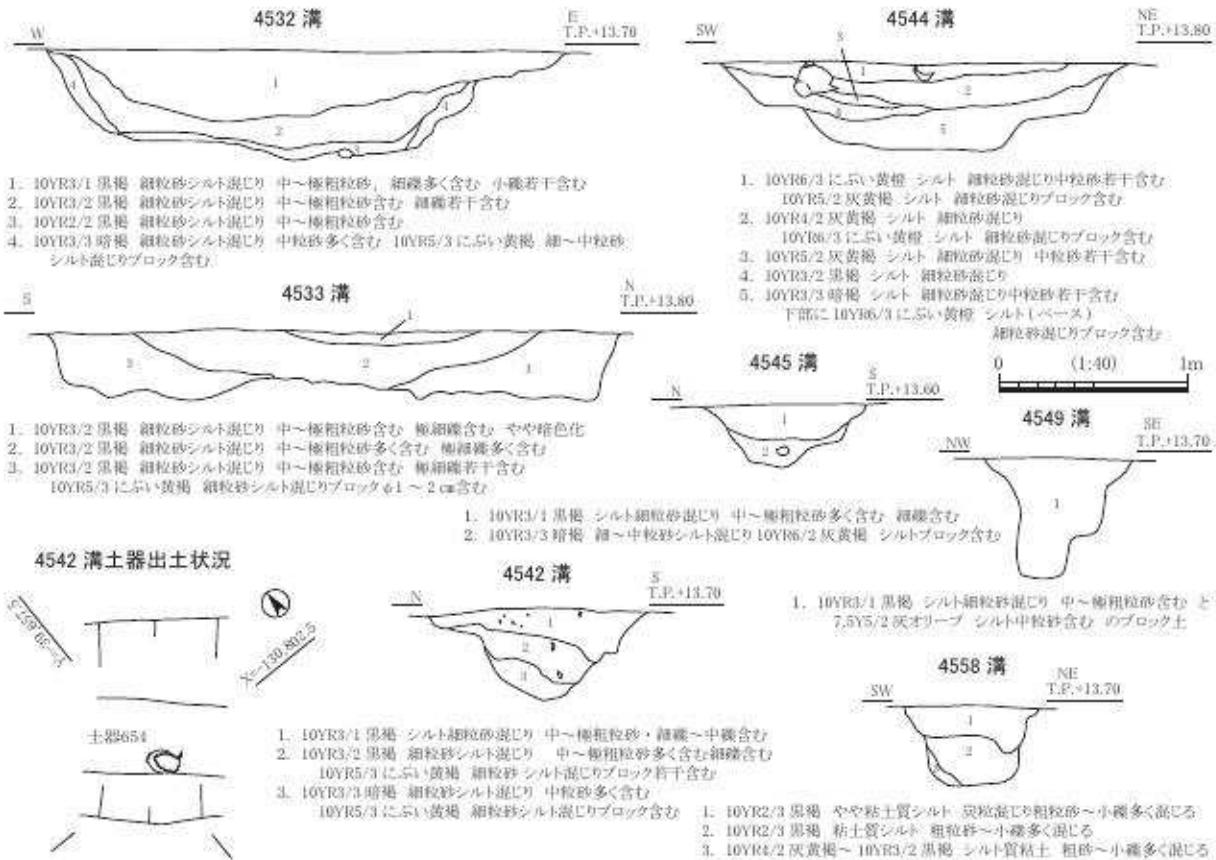


図 165 周溝墓 145 周辺周溝断面及び土器出土状況

壁はほぼ垂直で、主軸は墳丘の振れとほぼ同じW-51°-Nである。埋土は4～5層に分層できたが、どの層も基盤層の偽礫を多く含んでおり、木棺の痕跡は認められなかった。

**4535 墓壙** (図 157・161) 周溝墓 146 の埋葬施設で、墳丘の中央に位置する。墓壙掘方は東半にのみ認められ、西半には残っていない。東半では0.06 mほど掘り下げる段階で、西半では遺構検出面で小口穴が検出できた。これにより、底板を挟むように小口板を墓壙底部に埋め込む構造の木棺が据えられていたことが判明した。東側の小口穴は長さ0.4 m、幅0.11 m、深さは検出面から0.12 mで、西側が長さ0.43 m、幅0.14 m、深さ0.14 mである。西側小口穴は2段に掘られており、深い側に小口板が据えられていたと考えられる。小口穴間の内法は0.62 m(西側小口穴は深い側で計測)と小型であり、小児用と考えられる。主軸はN-62°-Eである。

**周溝墓 148・149** (図 163・164・167) 周溝墓 145 の北側に周溝を共有して並ぶ。両者が共有する4530溝からは中期前半の広口壺(652)が出土している。

**4554 墓壙** (図 163・166) 周溝墓 148 の埋葬施設で、墳丘の東隅寄りに位置する。墓壙の平面形は長さ0.92 m、幅0.61 mの隅丸長方形を呈する。深さは検出面から0.05～0.09 mで、埋土は粗粒砂～小礫が多く混じる黒褐色シルトである。木棺の痕跡は認められなかった。主軸は墳丘の主軸に直交方向のN-22°-Eである。

**4555 墓壙** (図 163・166) 周溝墓 149 の埋葬施設で、墳丘の西端に位置する。墓壙の平面形は長さ1.1 m、幅0.67 mの歪んだ隅丸長方形を呈する。深さは検出面から0.07～0.09 mで、埋土は粗粒砂～小礫が多く混じる黒褐色のやや粘土質シルトである。木棺の痕跡は認められなかった。主軸は墳丘の主軸にはば直交するN-49°-Eである。

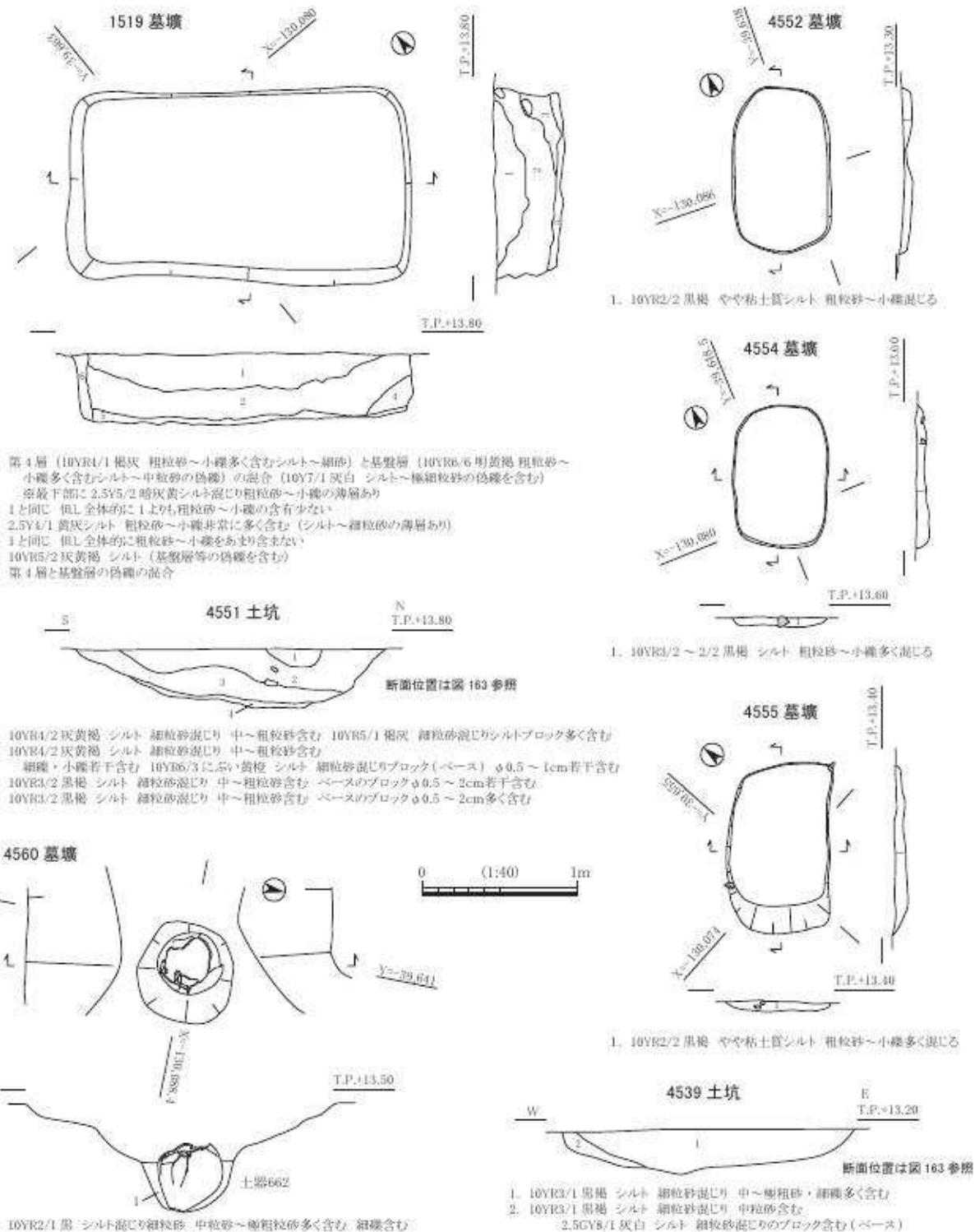


図 166 周溝墓 145 周辺遺構平面・断面

周溝墓 151（図 163・165～167） 調査区の西壁際、大型の周溝墓 145 に壊された周溝墓である。

北辺 4542・4544 溝からⅡ様式の広口壺（654）・細頸壺（655）・鉢（656・657）などが出土している。654は周溝北東隅にあり、供獻土器と考えられる。655は櫛描直線紋に扇形紋を加えた疑似流水紋を刻む。

4552 墓壙（図 163・166）周溝墓 158 の墳丘上に位置するが、周溝が一部のみの検出で、周溝墓の規模が明らかでないため、墳丘と墓壙との位置関係は不明。墓壙の平面形は長さ 1.07 m、幅 0.63 m の

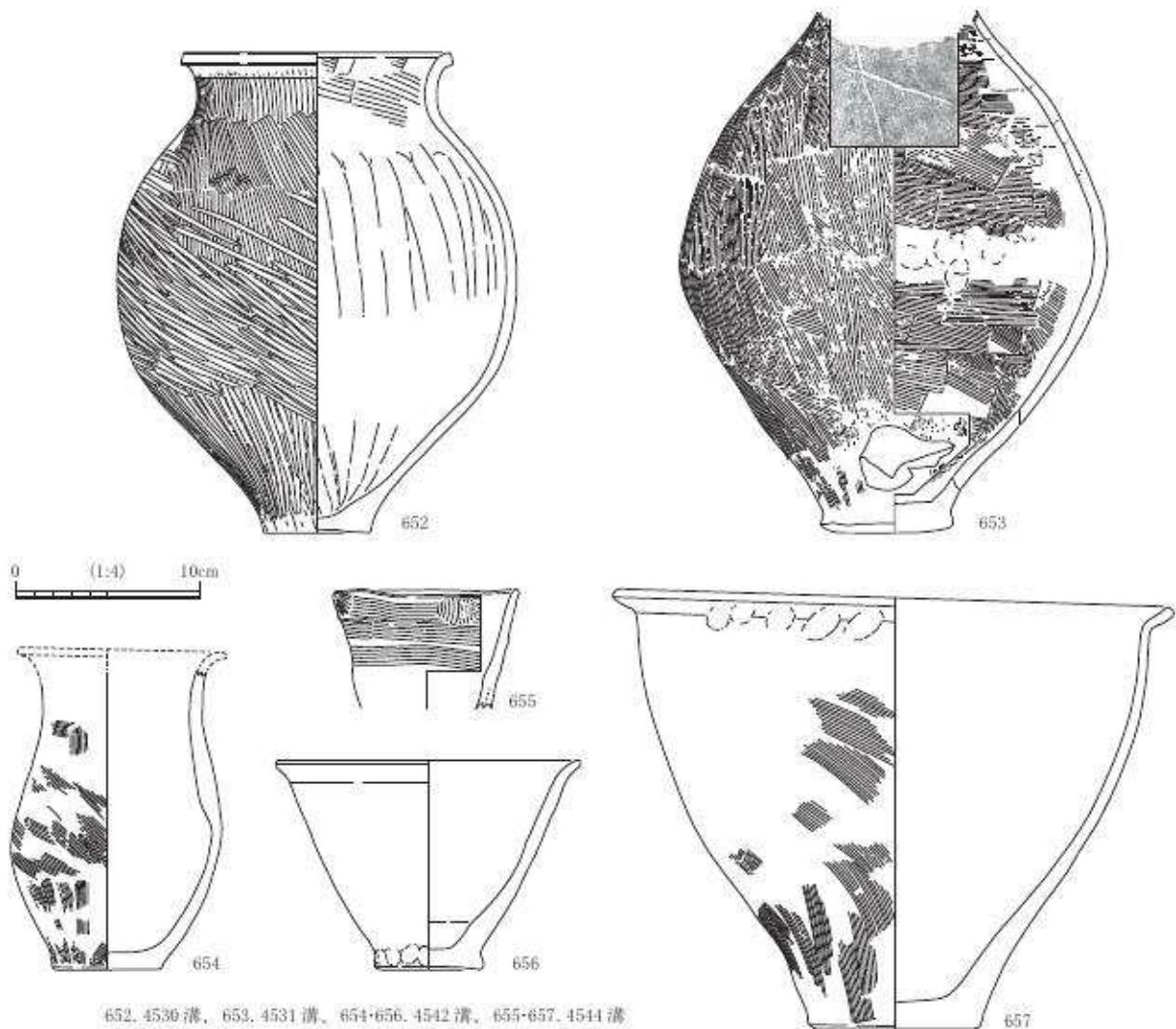


図 167 周溝出土遺物 (7)

梢円形に近い隅丸長方形を呈する。深さは検出面から 0.06 ~ 0.08 m で、埋土は粗粒砂～小礫混じりの黒褐色のやや粘土質シルトである。木棺の痕跡は認められなかった。主軸は N - 19° - E である。

**4560 墓壙** (図 163・166) 周溝墓 156 の北辺 4479・4502 溝と周溝墓 147 の東辺 4501 溝の交点に位置する周溝内の埋葬施設である。隅丸方形に近い円形の墓壙掘方に大型の壺を据える土器棺墓で、墓壙の掘方は直径 0.62 m、深さは周溝底から約 0.4 m を測る。裏込め土は中～極粗粒砂・細礫を含むシルト混じりの細粒砂である。埋設された土器は IV 様式後半の短頸壺 (662) で、僅かに傾いた正位で据えられていた。頸部より上は欠損し、蓋に用いられた土器も確認できなかった。

**4565 墓壙** (図 144・155) 周溝墓 155 の埋葬施設で、墳丘の北辺周溝寄りに位置するが、北辺周溝がやや乱れており、また東辺周溝も検出できていないことから、周溝墓の規模や形状の詳細は明らかでない。墓壙の平面形は長さ 1.65 m、幅 0.76 m の長方形で、墓壙底部までの深さは検出面から 0.05 ~ 0.1 m を測る。その墓壙底部の両端には小口穴が設けられており、底板を挟むように小口板を墓壙底部に埋め込む構造の木棺が据えられていたことが分かる。北側の小口穴は長さ 0.5 m、幅 0.2 m、深さは墓壙底部から 0.15 m、南側の小口穴は長さ 0.52 m、幅約 0.14 m、深さは墓壙底部から 0.16 m で、小口穴間の内法は 1.23 m を測る。両者とも墓壙の幅よりも狭いことから、側板が小口板を挟む構造の木棺であったと考えられる。主軸は W - 36° - N である。

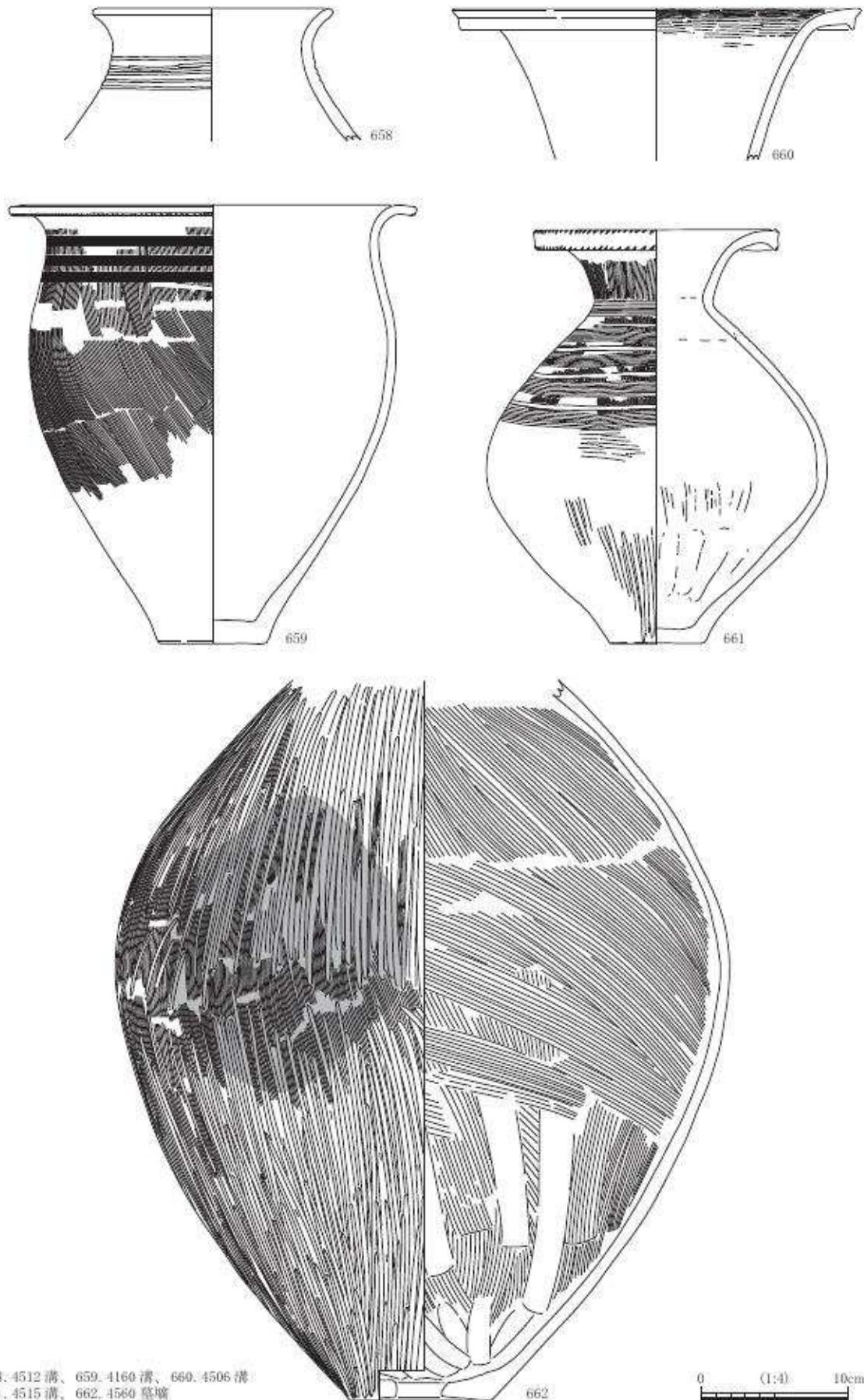


図 168 周溝・墓壙出土遺物（2）

註・参考文献

- 1) 粘板岩と泥質片岩とは同じ泥起源の岩石であり、肉眼ではまったく区別がつかないが、顕微鏡観察によって表面に白雲母が生成されていることが確認できるものがある。変成度の違いによるものであるが、厳密に分類するため、白雲母の生成が見られるものを「泥質片岩」、見られないものを「粘板岩」とした。
- 2) 寝屋川市教育委員会 2001『楠遺跡Ⅱ』
- 3) 摂津市教育委員会・公益財団法人大阪府文化財センター 2017『明和池遺跡5』
- 4) 田原本町教育委員会 1997『唐古・鍵遺跡 第61次発掘調査概報』
- 5) 設楽博己・石川岳彦 2017『弥生時代人物造形品の研究』同成社
- 6) 茨木市 2012『新修 茨木市史』第一巻 通史I 茨木市史編さん委員会編
- 7) 北陸中日新聞 2001.11.13「国内最大の石庖丁」記事

# 第5章 総 括

調査区内には4層と呼んだチョコレート色をした遺物包含層が広く分布しており、その上面では古代末～中世前半期の屋敷の跡を、下面では弥生時代の群集する方形周溝墓と環濠で囲まれた集落を検出した。出土遺物も非常に多く、収納コンテナ約500箱に及んでおり、その中には大型石庖丁や銅鐸形土製品などの特異なものも多く含まれていた。今回の成果はこれまでの周辺の調査成果に付け加えられる新しい知見が多く、摂津地域の歴史解明に欠くことのできない重要な資料になるものと考えている。

以下、時代ごとに遺構の変遷について触れ、遺物については箇条書きにはなるが個々について若干の考察を加え、調査のまとめとする。

## 第1節 古代末～中世前半期の村落

4層上面で掘立柱建物と井戸、また墓などから成る屋敷の跡を検出した。遺構の分布状況から、そのほぼ中心部を調査したと考えられる。掘立柱建物には廂や縁が付属する非常に立派なものが多く、なかには細溝によって周りを方形に区画しているものも見られた。特に初期の建物には、一般的な農村集落の建物というよりは、集落内の人々を束ねるクラスの、まさに「屋敷」というべき建物が多い。ただしすべての建物が廂をもつわけではなく、農小屋程度の非常に簡易なものも含まれている。調査区内には合計で38棟が広がっており、それ以外には井戸が9基、墓が3基、細溝による方形の区画が2区画など見つかっている。これらは一見一つのまとまりのように見えるが、実は3・4区の南半、4区で検出した方形区画のすぐ南面を東西に横断する坪境の溝（畦畔）を境に大きく北と南の2群に分かれている。以下、柱穴出土の遺物をもとに、建物を時期ごとに分けその変遷を見てみることとする。

検出した建物群の中で最初に建てられるのは、出土遺物から坪境より北側の掘立柱建物1であることは間違いない。その時期は10世紀後葉で、この建物を核にして13世紀前半までの間、周辺に掘立柱建物が建てられていく。掘立柱建物1は東西7間、南北4間の3面廂建物で、今回検出した掘立柱建物の中では最大規模を誇る。これにつづいて11世紀前～中葉にかけて、掘立柱建物1のすぐ南側に掘立柱建物5や6が建てられる。この2棟もまた掘立柱建物1に次ぐ規模で、廂や縁が付き、屏が伴う立派な建物である。ただし以上の3棟に伴う井戸は調査区内では見つかっていない。なお、掘立柱建物9～11や18～24などについては正確な時期を特定できないが、掘立柱建物9～11・18～20については柱穴から出土している遺物が黒色土器A類椀やての字状口縁皿、あるいは灰釉陶器など古手のものであること、また掘立柱建物21～24については柱穴から時期を特定できる遺物は出土していないが、周辺の遺構から黒色土器A類椀やての字状口縁皿が出土していることから、掘立柱建物1・5・6に並行する時期の建物であった可能性が高い。

井戸が造られ始めるのはつづく11世紀中～後葉の216井戸が最初であり、この段階でようやく坪境より南側にも屋敷が展開し始める。建物が多数建てられたもっとも賑やかな時期であるが、建物の規模はこれまでより小さい。掘立柱建物2～4・7・(8)・25・(29)・30～33・35・(37・38)などがあり、坪境より北側では掘立柱建物2～4・7・(8)が掘立柱建物1を解体した跡地付近に展開する。それらのいくつかは近接し、また重複しているものもあることから、若干の時期差があったと思われる。なおこの時期の建物はどれも前段階に建てられた掘立柱建物5・6とは重複しておらず、北や西

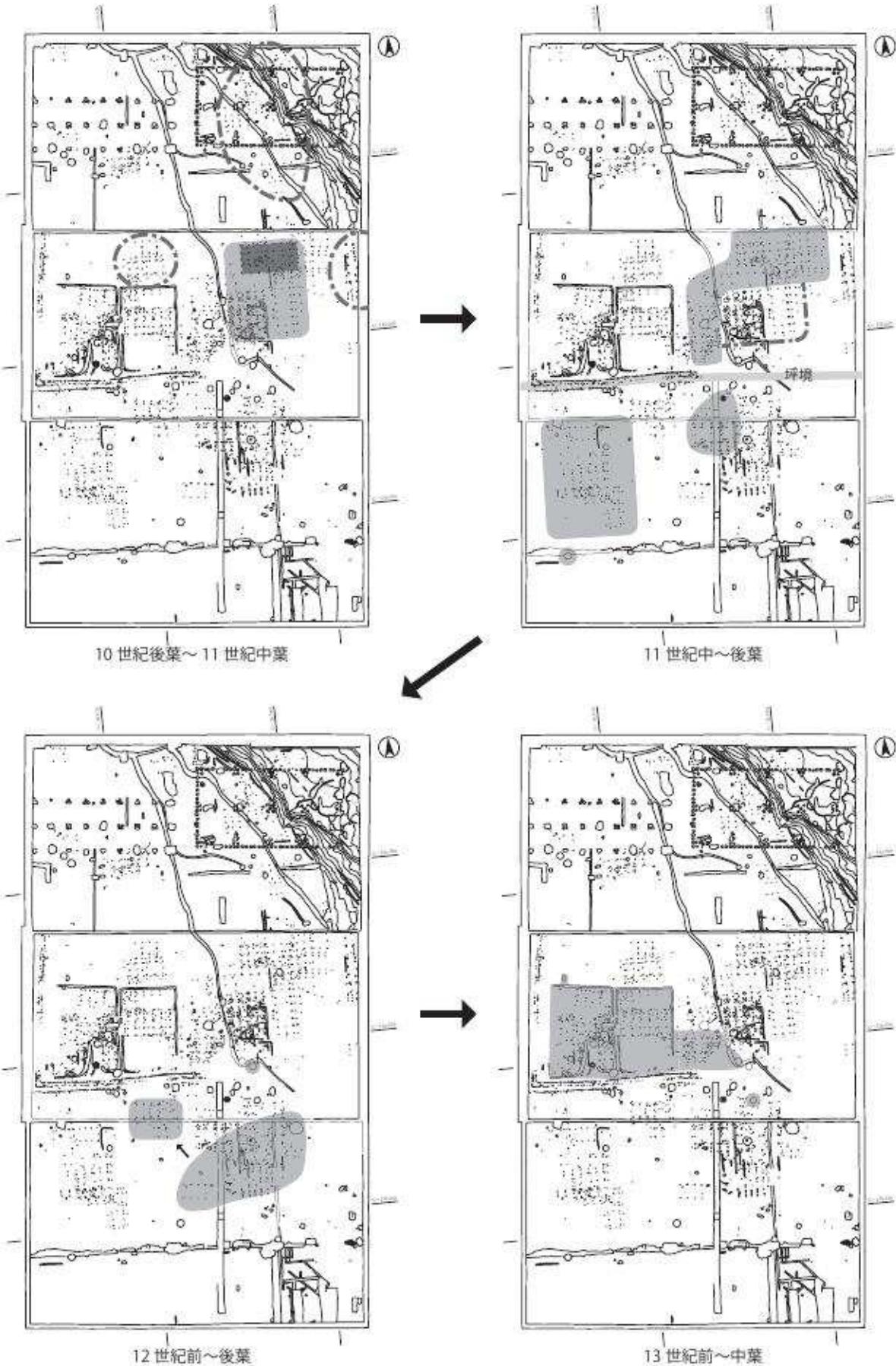


図 169 4層上面遺構の変遷

側の掘立柱建物 35・37 については、あえて 5・6 を避けるように建てられていることから、掘立柱建物 5・6 はこの時期にも建っていた可能性が考えられる。坪境より南側では 5 区の北端部に上記 216 井戸とともに掘立柱建物 25 が、6 区北半部に南方の 1525 井戸を伴い掘立柱建物 (29)・30～33・(38) が建てられるが、掘立柱建物 31 については掘立柱建物 30・32 と重複しており、11 世紀後半内での建て替えが考えられる。

つづく 12 世紀になると、屋敷の中心は完全に坪境より南へと移り、北側からは次第に建物が姿を消す。ただし南群の建物も小規模なもので、しかも数棟しかなく、前段階に比べ非常にさびしい景観となる。12 世紀前半には 5 区の北半部に 1215 井戸とともに掘立柱建物 26・27・(28) が建てられるが、26・27 は住居とは言い難い小規模で簡易なものである。12 世紀中～後葉になると北西側に若干ずれて掘立柱建物 14・(34) が建てられる。14 は小規模であるが 4 面に縁がめぐる建物である。34 は柱穴から時期を特定できる遺物が出土していないが、その並びからおそらく掘立柱建物 14 とセットになると考えられる。

13 世紀に入ると、今度は坪境より南側から建物が消え、北側に方形区画を伴った立派な屋敷が構えられる。坪境の溝に沿って築かれた区画で、ほぼ同規模の区画が東西に二つ並ぶ。建物は方形区画の南東外側にも井戸 217・264 を伴った掘立柱建物 36 が 1 棟あるが、基本的には区画溝より内側に井戸と共に築かれている。東側の区画内には掘立柱建物 15～17 があるが、互いに重複しており、同時併存ではない。3 棟とも区画の北側に偏っており、南側にはまったく遺構がない空白地が広がっている。屋敷内の小さな菜園として利用していたのであろうか。西側の区画内には重複する掘立柱建物 12・13 があるが、これ以外にも多数のピットを検出しており、少なくともあと 2 棟は建っていたと考えられる。これらに伴う井戸は 511・512 井戸で、512 井戸は唯一の石組井戸である。このほか西側区画の北西隅に木棺墓 592・599 墓が近接して築かれる。いわゆる「屋敷墓」と呼ばれるもので、592 墓は区画溝と切り合うが、辛うじて区画の内側、599 墓は完全に区画の外側に位置する。592 墓から出土した瓦器椀は、今回の調査で出土したものの中ではもっとも新しい 13 世紀中葉のものであり、またこの墓が造られて以降は周辺に他の遺構が築かれていないことから、この 592 墓の構築をもって方形区画の屋敷が廃絶したと考えられる。

東側の 217 井戸に近接して青白磁の合子が出土した 471 墓 (592・599 墓と同時期と考えられる) も検出しているが、調査区内からはそれ以外の墓は確認できていない。10 世紀後葉から人々が生活していたにもかかわらず、この村落では屋敷の近くに墓が造られるようになるのは 13 世紀になってからであり、おそらくそれ以前は屋敷地から離れた別の場所に形成された集団の墓地に埋葬されていたと考えられる。なぜ 13 世紀になって屋敷近くに少数で葬られるようになったのか、その背景には何があつたのか、墓や屋敷に対してどのような考え方の変化が生じたのか、たいへん興味深く、周辺の調査例もあわせて注意して見る必要がある。

当遺跡で検出した村落は、10 世紀後葉に掘立柱建物 1 から始まり、13 世紀前半の方形区画をもつものまで、300 年近くもの間建て替えを繰り返しながらつづいてきたが、13 世紀中葉に築かれた 592 墓を最後にそれ以降この地から完全に姿を消すこととなる。この村落が営まれた時期は、まさに初期荘園から寄進による中世荘園へと支配体制が大きく移り変わる転換期にあたる。その動向は、周辺の荘園、具体的には垂水東牧の動きと密接な関係にあるものと考えられるが、本書ではそこまでの検討はできなかつた。村落の発生や発展・衰退の契機が何であったのか、また墓制の変化の背景に何があったのか、

今後周辺の遺跡や同時期の村落と比較しながら解明していく必要がある。

## 第2節 弥生時代の遺構と遺物

調査地東半の一部で竪穴建物が広がる集落を、その西側で群集する方形周溝墓を約160基検出した。集落は3001溝によって周囲を囲まれており、いわゆる環濠集落となっている。ただし完全に竪穴建物や土坑・ピットが環濠よりも内側にあるわけではなく、一部は環濠3001溝の外側に若干はみ出すよう広がっている。これは集落が築かれ始めた当初から環濠があったわけではなく、途中の段階で環濠が設けられたことを示している。集落域の外側にはほとんど隙間なく、周溝を共有しながら網の目状に方形周溝墓が広がっているが、それらには主軸の方向を共にするいくつかのまとまり=群が見られる。

まず、これらを時期ごとに分け、集落や周溝墓がどのように展開していったのかを明らかにした上で、個々の遺構や遺物についても簡単に触れてみるとこととする。

### 方形周溝墓と集落の変遷

確實に弥生時代前期の遺構と言えるものは、周溝墓に破壊されずに辛うじて残ったI様式末頃の3579土坑だけであり、この段階にはまだ集落も方形周溝墓も築かれていません。この地に本格的にそれらが広がり始めるのはつづくII様式になってからのことになる。竪穴建物は調査地の東半部からおそらく東の茨木川にかけて建ち始め、集落としてある程度まとまり始める。この段階にはまだ環濠がなく、集落域と墓域との境界は不明瞭であるが、周溝墓30のように集落に近接するものはあるものの、集落内に入り込む周溝墓がないことから、集落の範囲は既にある程度決まっていたと考えられる。この段階に建てられた竪穴建物は1・2・8・14・20などであるが、おそらくやや離れた17についてもこの頃のものと考えられる。

この段階の方形周溝墓は、集落の範囲を侵さないよう集落の西側にいくつかの群に分かれて分布している。大きくは調査区北半に見られる北北西方向に連なる北群と、南半に見られる北西方向に連なる南群の二つの群に分けることができるが、主軸の向きや周溝の共有関係、また周溝墓のまとまり具合などから、北群はさらに6群に、南群は5群に細分することができる。これ以外に北群には周溝墓外に埋葬施設をつくる一群が見られるが、ここでは周溝墓の群には含めず個別に検討することとする。

北群について詳しく見てみると、長軸が北北西方向に向くA群とそれとほぼ直交する向きのB群があり、A群は調査区北西隅に周溝を共有して網の目状に広がるA-1群と、周溝墓30を中心に集落の西側に沿って造られたA-3群、またその間にまとまるA-2群に分かれる。B群はA-1群の南側のB-1群と東側のB-2群、A-2群の南側のB-3群がある。

南群を見てみると、長軸が北西方向に向くC群とそれとほぼ直交する向きのD群、またその両者に含まれないE群が見られる。C群は北群との境付近に広がっており、西壁際で周溝を共有して整然と並ぶC-1群と調査区南東隅寄りのC-2群、C-1群の南側にまとまるC-3群から成る。D群はC-2・C-3群の南側にあり、E群はさらにその南側の調査区南辺部に広がっている。

この11群に分けた方形周溝墓のうち、どの群から造営が始まったのかは、すべての周溝墓から供献土器などが見つかっているわけではなく、また新しい時期の破片が周溝の埋没過程で混入する場合もあり、特定が難しい。強いて言うならば、調査区南半の周溝墓106・128(126)・132・162の周溝からI様式末～II様式初頭の古手の土器が出土していることから、南群の周溝墓から造営が始まり、北に向かって広がっていったと言うこともできるが、どの群が古く、どの群が新しいとまでは判断すること

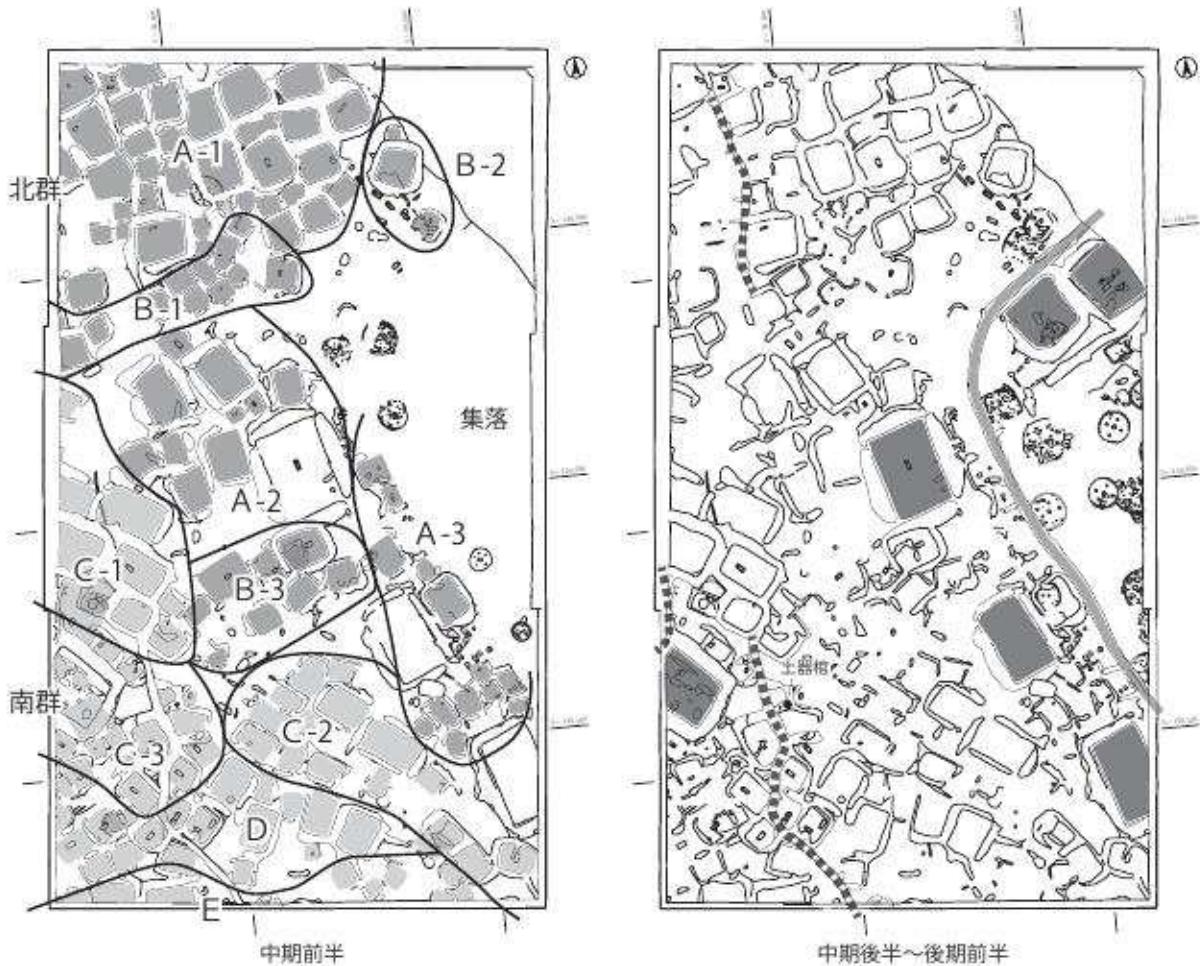


図 170 方形周溝墓の群と遺構の変遷

はできない。C-2群の周溝墓 141 と D 群の周溝墓 139 の切り合い状況から、周溝墓 139 が新しいと判明する例もあるが、これはⅡ様式の早い段階に築かれた周溝墓 141 とそれよりも後に築かれた周溝墓 139 の切り合いであって、群同士の先後関係を示すものではないと考えている。どの群にもⅡ様式の周溝墓が存在していることから、おそらくそれぞれのグループがほぼ同時に造墓活動を開始したと考えられる。その最初の周溝墓を核としてグループごとに徐々にその範囲を広げていった結果、最終的に隣の群とも接し、隙間なく網の目状になったと考えている。その際、周辺の周溝墓を壊していないことは注目される。造墓の期間は、どの群の出土遺物もほぼⅡ様式に収まっていることから、それほど長い期間にわたるものではなく、中期初頭の 100 年足らずの期間であったと考えられる。

Ⅲ様式と特定できる土器は、次の段階に築かれる環濠からは出土しているが、周溝や集落域からの出土数は少ない。周溝からは 4101・4515 溝から僅かに出土している程度であり、この段階のムラの様相は判然としない。前記のとおり、調査区内の墓域はⅡ様式の段階に既に多くの周溝墓で埋まっており、飽和状態となっている。調査地南西側や西側で行なわれた茨木市の調査では、Ⅲ様式の方形周溝墓がいくつも発見されていることから、Ⅲ様式にはおそらく造墓活動の範囲が調査区より外側に移っていったと考えられる。そこではⅡ様式とほとんど変わることなく同様の造墓活動が続いていたと考えている。

Ⅳ様式になるとムラの様相が一変する。集落の周りには墓域と画する環濠が、前段階の竪穴建物を壊して築かれ、墓域には一辺十数メートルの大型方形周溝墓が単独で築造され、中には集落内に取り込まれるものも出現する。この段階の周溝墓も、一部には周溝墓 145 のように前段階の周溝墓と重複する

ものもあるが、基本的には前段階の墓を壊すことなく築かれていることに注意したい。この時期の周溝墓は 18・97・98・100・101・145 の 6 基で、大型化とともに数の減少も顕著となる。大庭重信氏が「IV 期から V 期前半にかけての墓の規模の大型化と数の減少傾向は、階層分化に伴って墓の造営が特定集団に限定されていく過程と理解できよう」と指摘しているとおり、この段階になり、方形周溝墓を造ることが許された者と、そうでない人々との階層差がより明確となったことがうかがえる。また周溝墓 145 以外の集落に近接する 5 基については、環濠 3001 溝の向きと軸を揃え、また 3001 溝に沿って集落を取り囲むように配置されており、環濠との、また集落との密接な関係を読み取ることができる。なお上記 6 基の周溝墓以外に、周溝墓 156 の北辺周溝内からこの時期の土器棺が 1 基見つかっている。

V 様式になると II 様式から続いた周溝墓の造営はほとんど停止する。調査地西側の茨木市による調査では、後期後半～古墳時代前期初頭の方形周溝墓が 1 基発見されているが<sup>3)</sup>、それ以外に周囲に展開している様子はまったくない。調査区西半では埋まり始めた周溝の窪みを利用して、新たに 4434 溝や 3600 溝・3510（4583）溝が掘られるが、それ以外の遺構は広がらない。集落域では V 様式の早い段階で環濠が完全に埋められる。その後周辺には 3082 土坑や 4170・4187 土坑などが築かれるが、集落は次第に解体に向かい、V 様式後半には完全に姿を消す。古墳時代布留式期の遺構もわずかに 1 基のみ 3138 土坑が確認されているが、それ以外にはまったくなく、人々が生活していた様子はうかがえなくなる。

以上、弥生時代の集落と方形周溝墓の変遷を簡単に見てみたが、今回検出した方形周溝墓がすべて東側の集落の人々の墓であったのかは議論の余地がある。IV 様式の大型方形周溝墓については、集落と密接な関係にあることが分かるが、II 様式に築かれた 11 群から成る方形周溝墓については、そのうちのいくつかは近隣のムラ人の墓であったとも考えられる。この遺跡の墓域は周辺のムラ人も共同で造墓ができる、現代でいう靈園のような場所だった可能性もあり、慎重に判断する必要がある。

#### 集落内の方形周溝墓

中期後半の築造と考えられる周溝墓 97・98 は、他の周溝墓とは異なり環濠 3001 溝で囲まれた集落内に位置する。出土遺物から、環濠も周溝墓とほぼ同時期の開削であることが分かっており、上記周溝墓 2 基は意図的に集落内に築かれたと考えられる。

ではなぜこの 2 基のみ集落内に築かれたのか。それを理解する上で手掛かりとなるのは周溝墓 98 に築かれた 7 基の埋葬施設である。今回の調査では、埋葬施設が検出できた周溝墓が 34 基見つかっているが、そのうち墓壙が 1 基のみの単数埋葬は 29 基で、2 基以上の複数埋葬は僅か 5 基しかない。さらにこの 5 基のうち、4 基が墓壙 2 基のもので、周溝墓 98 のように 7 基もの埋葬施設をもつものはこの 1 基だけであり、明らかに他とは異質であることが分かる。また墳丘の構造を見ても、裾部に細溝をめぐらしており、これも他の周溝墓とは異なる構造である。ただし墳丘規模についてはこれだけ多くの埋葬施設が築かれているにもかかわらず、なぜか環濠外の周溝墓 18・100・101 よりも小さい。

墳丘上の墓壙 7 基を見てみると、ほぼ墳丘中央部に位置するのは 4042 墓壙あるいは 4041 墓壙であるが、最も規模が大きいものはやや南寄りの 4044 墓壙になる。この 4044 墓壙と北西寄りのやや小型の 4038 墓壙には木棺が遺存しており、4044 墓壙についてはその底板上の被葬者の頭部周辺から赤色顔料が確認できた。他の遺跡では、赤色顔料が認められる墓壙が複数検出される事例がよく見られるが、当遺跡では赤色顔料が見られる墓壙はこの 4044 墓壙が唯一であり、数多い被葬者の中でも特に手厚く葬られていたことがうかがえる。4024 墓壙のような玉類などの装飾品は見つかっていないが、明らか

に他の被葬者とは異なる特別な扱いを受けており、そこに、よく言われる階層の違いを読み取ることができる。

このような、集落内の階層上位の者の中でも、特に上位クラスの特別視されるような人物については、死後も常にムラの人々を見守ることができるよう、生きている民衆の近くにとどめておく必要があったのではないか。このために周溝墓 98 は集落内に築かれたのだろう。大型の周溝墓 18・100・101 が環濠 3001 溝に沿って築かれているのも、そういう理由があったからではないだろうか。

なお、今回のような集落内に大型の周溝墓が築かれる例は、南関東地方でも見られると安藤広道氏が報告している。それによると、大型方形周溝墓は居住域の内部あるいは集落にごく近接して築かれるものが多く、特に地域の中心的な集落で見られると指摘している<sup>4)</sup>。当遺跡で検出した大型方形周溝墓はこれによく似た事例であり、近畿地方でも同様の状況が見られるのか注意したい。

ところで上記のように、周溝 98 には階層上位の者が埋葬されているとしたが、今回の調査で最大規模の墓は周溝墓 18 である。この中央の 3574 墓壙に単独で葬られている人物はどの程度の立場の人物だったのだろうか。周溝墓 98 の 4044 墓壙に葬られた人物と比較した場合、どちらを階層上位と判断するのか。その判断基準は墳丘規模なのか、墳丘内の埋葬施設の数なのか、それとも赤色顔料の有無なのか。ここでは明確な答えは出ないが、これまでの多くの成果を精査することによって、ある程度の約束事が見えてくるかもしれない。

#### 小児埋葬と階層

では、その特別扱いを受けた 4044 墓壙の被葬者は、どのような人物だったのか。

この墓壙には赤色顔料の中央に辛うじて歯だけが残っており、その鑑定から被葬者は 15 歳以下の未成人であることが判明した。木棺の大きさ、また赤色顔料の存在から、墓主にふさわしい成人をイメージしていたが、鑑定結果はその期待にまったく反するものであった。

上記のとおり、4044 墓壙は周溝墓 98 に築かれた墓壙 7 基の中では最大規模の墓壙であり、木棺の長さは約 1.7 m もある大人用である。さらに頭部には赤色顔料が施され、今回検出した墓壙の中ではもっとも手厚い埋葬方法がとられている。その被葬者がなぜ未成人なのだろうか。それを理解するヒントが河内地域の方形周溝墓に見られる。

その一つは巨摩廃寺遺跡第 1 次調査で検出した第 2 号方形周溝墓である。後期初頭に位置する一辺 15 m 以上の周溝墓で、中央付近に 2 体の 1 次埋葬、続いて約 0.9 m の盛土の後 11 体の 2 次埋葬、さらに約 0.25 m の盛土の後 2 体の 3 次埋葬がみられる。この 1 次埋葬 2 体のうちのほぼ中央に設けられた、つまり造墓の契機となった第 10 号埋葬施設が 3～5 歳の幼児埋葬であると報告されている。さらにその頭部周辺には赤色顔料が認められ、装着品と考えられるガラス製の勾玉 1 点と小玉 13 点も見つかっている。それに対しこの南側に隣接する第 1 次埋葬第 15 号埋葬施設は、成人を埋葬しているにもかかわらず赤色顔料も装着品もない。ちなみに 2 次埋葬のうちの墳丘北寄りの第 3 号埋葬施設は 40 歳代の男性を埋葬したものであるが、これには頭部周辺に赤色顔料が多量に塗ってあり、頭部両側から耳への装着品と考えられる管玉が 1 個ずつ出土している。<sup>5)</sup>

もう 1 例は、同じ巨摩廃寺遺跡第 4 次調査で検出した 10 号方形周溝墓である。中期末～後期初頭のもので、墳丘規模はその上面で南北約 9.5 m、東西約 7.5 m を測る。埋葬施設は 5 基を検出し、そのうちの 4 基が小児用と確認されている。唯一の大入用の第 5 主体部は長さ 1.9 m の木棺をもつが、小児用の第 4 主体部を切っていることから、造墓の契機は小児の埋葬—おそらく中央の第 3 主体部—という

ことになる。この大人用に切られた第4主体部は長さ0.89mの小児用木棺であり、その内部からは柄を外した柱状片刃石斧が出土している。木棺の蓋が完存していたことから流入は考えられず、小児用木棺に副葬品が伴う稀少な事例として注目される。<sup>6)</sup>

このように、幼児・小児にもかかわらず玉類を身に着け、赤色顔料が塗られるものや、副葬品をもつもの、またそれが造墓の契機となる事例も、今回の成果も含め少ないながら確実に見られた。これらの未成人が集団内でどのような立場にあったのか、手厚く葬られる理由は何だったのか。これが解明されれば、弥生時代の階層構造の理解も更に一步進むものと思われる。今後更なる検討が加えられることを期待したい。

現時点では、4044墓壙の被葬者は「集団内の最上位階層の子供で、将来その地位を約束された子供」であったと解釈しておくが、今後の資料の蓄積により再考することになるかもしれない。

#### 周溝墓外埋葬墓と管玉

調査区北東部の周溝墓95の西側では方形周溝墓に伴わない墓壙を10基検出した。4030～4035・4046墓壙のように完全に周溝墓外にあるものもあれば、4037・4024・4025墓壙のように周溝墓の墳丘上にあるものの、周溝に切られるなどその周溝墓に伴うものではないと判断できるものも含んでいる。出土遺物が少なく、墓壙の時期を特定することが難しいが、4046墓壙から中期前半の土器が出土していること、また4024・4025墓壙がⅡ様式の周溝墓99に切られていることなどから、どれも中期前半の中での構築と考えている。なお多くの墓壙には小口穴など木棺の据え付け穴が検出できることから、単なる土坑や土坑墓ではなく、木棺墓であったことは間違いない。ではなぜ周囲に多数の周溝墓が広がっているにもかかわらず周溝墓を造らず墓壙のみを築いたのか。

そこには「階層差」があったのではないかとよく言われるが、果たしてそうだろうか。確かに周溝墓を築くとなればそれなりの労働力が必要となる。しかし一辺数メートル程度の周溝墓なら1人でも数日もあれば造ることができるものと想定すれば、大型の墳墓を築くのとは比較にならない。また今回の調査では、周溝墓外埋葬墓の一つと考えている4024墓壙から、装着品と考えられる小型管玉が3点出土している。弥生時代の埋葬施設から管玉が出土した例は、やや離れて神戸市玉津田中遺跡の2例もあるが、近隣では前記の巨摩廃寺遺跡の例と、632点が出土した尼崎市田能遺跡の例しかなく、非常に稀な事例である。これまで言われてきたように、周溝墓外に埋葬される人物は方形周溝墓を造ることができる人物よりも下位の者とした場合、この管玉3点をどう理解したらよいのか。被葬者が管玉を身に着けている以上、たとえ周溝墓外に埋葬されていたとしても、彼を下位の者とすることはできないのではないか。

少なくとも今回の調査では、方形周溝墓の被葬者と、周溝墓外の被葬者との間に階層差を読み取ることはできなかった。むしろ周溝墓外の墓壙から管玉が出土したことから、周溝墓外に埋葬される人物=周溝墓に埋葬される人物よりも下位、との従来の考え方があまり当てはまらない状況になった。周溝を伴っていないから下位ランクと単純に結び付ける考え方は今後再検討が必要と思われる。

では周溝墓内の被葬者と周溝墓外の被葬者との間にはどのような違いがあったのか。それは周溝墓を築く集団に属していたか、そうでなかったかという単純なものであったのかもしれないが、これについても今回の調査では明らかにすることはできなかった。今後の資料の蓄積を期待したい。

#### 方形周溝墓の祭祀と農具

今回の調査では、二つの方形周溝墓の周溝から、大型石庖丁が完存状態で出土した。一つは人形土製品も出土した方形周溝墓30の南辺4201溝から2枚が重なった状態で出土し、もう一つは周溝墓101

の西辺 4140 溝から、大型石庖丁 2 枚と一般的な大きさの石庖丁 5 枚が壁に突き刺さったような状態で重なって出土した。大型石庖丁が完存状態で出土すること自体稀であるが、4 枚もの大型石庖丁が周溝の中から、それも後者については明らかに据えられた状態で出土しており、そこに偶然ではない何らかの共通の意図がうかがえる。

石庖丁ではないが、同じ農具が方形周溝墓の周溝から発見された例が、多数の方形周溝墓が発見された愛知県の朝日遺跡や大阪府の巨摩廃寺遺跡などでも見られ、当遺跡の大型石庖丁との関連が注目される。朝日遺跡では、SZ208 の西辺周溝底面から着柄の鍬が 2 点、SZ301 北辺周溝西部上層から広鍬の未成品が 2 点と同じ溝の東端底部から鍬が 4 点まとめて出土し、隣接する SZ303 の西辺周溝からは着柄の鍬が 2 点出土している。<sup>10)</sup> 巨摩廃寺遺跡では、第 4 次調査で検出した前記 10 号方形周溝墓の北・東側周溝底部から、完形の石庖丁 1 点と直柄平鍬が 1 点着柄の状態で見つかっている。これらは一見、周溝掘削工事後にそのまま放置したもののようにも思われるが、完成したばかりのきれいな墓に大事な道具を置きっぱなしにするはずもなく、万が一放置してあれば、誰が見ても気付くはずで、回収されるはずである。そのような農具が後世まで残っているということは、うっかりした置き忘れでは決してなく、意図的に置いたとしか考えられない。しかも朝日遺跡では未成品も含まれている。今回の大型石庖丁についても、他地域の石材を使ったものであり、それを分割することによって、通常サイズの石庖丁を数枚作り出すことも可能な當時でもたいへん貴重な財である。持ち去ろうと思えば簡単に持ち去ができる状況にあったにもかかわらず、当時の人々はそうしていない。おそらくそこには持ち去ることさえためらうような意味が込められていたと推測できる。どのような思想にもとづき農具を供えるのかは不明だが、この時期の葬送儀礼にとって農具が欠かせない重要な役割を担っていたことがうかがえる。

なお、供えられる農具は鍬や鍬の場合もあれば、大型石庖丁の場合もある。それはそれぞれの地域による違いなのかもしれない。

### 青銅器製作工人の交流

摂津地域で作られたとされる縦型流水紋で飾る恩智垣内山銅鐸が、横型流水紋の銅鐸が作られた河内地域で見つかっていることは以前よりよく知られているが、その背景にはどのような人や物の動きがあったのだろうか。かつて春成秀爾氏が「摂津の縦型流水文銅鐸は河内平野中央部の横型流水文銅鐸、袈裟襷文銅鐸は鬼虎川集団の系譜をひくことから、摂津での銅鐸の鋳造は、河内からの工人の一部移動または河内の工人の指導下で始まったのであろう」と非常に興味深い指摘をされているが、まさにそのとおりだったのではないかと思わせる具体的な資料が今回の調査で見つかっている。それが 3013 溝から発見された高杯形土製品と送風管、それと河内地域の土器として知られる「生駒山西麓産胎土」の土器である。

高杯形土製品や送風管は青銅器の製作に用いられた道具であり、これらの発見はすなわち当遺跡内で青銅器の生産が行われていたことを意味する。当遺跡は銅鐸鋳型の出土で知られる東奈良遺跡から茨木川に沿って 3 km ほど北上した地点に位置するが、そのような東奈良遺跡に近接した一つのムラでも青銅器を製作していたことを明らかにした点で、非常に重要な発見といえる。

生駒山西麓産胎土の土器については、環濠 3001 溝からも少々出土しているが、3013 溝からの出土がもっとも多い。3013 溝からは本書に掲載している土器以外に、コンテナ約 6 箱分の破片が出土しているが、そのうちの約半箱分をこの河内の土器が占めており、他の遺構と比較しても特異な出土状況といえる。この状況は明らかにこの地で行なわれた青銅器の生産に、河内の工人が関係していたことを示

すものであり注目される。春成氏が言うように、河内の工人が摂津に技術指導に来たのか、それとも河内の工人が技術研修に来たのか、あるいはまったく逆に、河内の工人が摂津に来たのではなく、摂津の工人が河内地域に行き、技術とともに河内の土器を持ち帰ったのか。今回の発見だけではそのあたりまで明らかにすることはできないが、少なくとも摂津の工人と河内の工人が青銅器を製作するにあたって共同作業していたということだけは間違いない。

使われている高杯形土製品や送風管などの道具だけを見れば、地域ごとに形状が異なっており、それぞれの地域が独立して排他的に青銅器生産を行なっていたようにも見えるが、実際にはそうではなく、今回の出土状況からは、摂津と河内程度の距離ならば、むしろ工人間の交流が盛んで、技術協力を惜しまず、青銅器製作技術の継承に努めていた様子がうかがえる。<sup>13)</sup>

摂津で製作された縦型流水紋銅鐸が、河内で出土した理由についても、このような工人間の交流があつたためと理解できる。おそらく摂津に作業に来ていた工人が、摂津で製作した銅鐸を地元河内に持ち帰ったのではないだろうか。

以上のように、今回の成果は出土遺物によって摂津の青銅器製作工人と河内の工人との交流が確認されたという点で、非常に重要であると考えている。

なお、当遺跡では鐸身に8頭の鹿が描かれた銅鐸形土製品が発見されているが、上記恩智垣内山銅鐸の裾部にも同様に列を成す鹿が描かれていることは大変興味深い。<sup>14)</sup>

#### 青銅器を製作する工房跡

上記3013溝に接して、平面長方形で2本主柱のやや特異な竪穴建物6が検出されているが、これとよく似た竪穴建物が、同様の高杯形土製品が出土した摂津市明和池遺跡でも発見されている。土製品が出土した171流路に接する竪穴建物4や10などがそれにあたり、そのうちの竪穴建物10からは「竪穴建物の性格を考える上で重要」と指摘された高杯形土製品や真土片が出土している。同様の事例は、神戸市の玉津田中遺跡でも見られ、高杯形土製品が出土した自然河道SR54001に接続するSD54001に接して平面長方形で2本主柱のSH64024が検出されている。<sup>15)</sup>このように、鋳造関連の遺物と共に平面長方形で2本主柱の竪穴建物が検出されることが多い。明和池遺跡の竪穴建物10から鋳造関連の遺物が出土していることからも、この種の竪穴建物は一般的な住居ではなく、工房として使われていた可能性が高いのではないかと考えている。

#### 銅鐸製作工人による銅鐸形土製品の製作について—利き手はどちらか—

今回発見した銅鐸形土製品には、鹿が8頭描かれており、うち7頭が右向き、1頭が左向きであった。これについては「左利きの工人が描いたのではないか」とよく言われるが、果たしてそうだろうか。例えば上記の恩智垣内山銅鐸の裾部には並んだ数頭の鹿（魚も）が描かれているが、それらは皆左向きに描かれている。当然その鋳型には逆の右向きの鹿（魚）が刻まれていたことになるが、この場合、鋳型側が右向きだから左利きの工人が作ったと単純に言えるだろうか。製品側を一般的に馴染みのある、違和感のない（現代的な考え方かもしれないが）左向きの鹿に仕上げるために、あえて鋳型には右向きの鹿を刻んだとは考えられないだろうか。遺物に動物が描かれていた場合、その体や頭が右に向いているか、左に向いているかによって、右利きの工人が描いたのか、左利きの工人が描いたのかよく議論になるが、銅鐸などのように反転した図柄を描く必要がある鋳型が伴うものについては、描かれた動物の向きで工人の利き手がどちらであったのかまでは厳密に特定することはできないのではないかと考えている。

仕上がりをイメージして反転した型をつくることは、現代でもよく経験する。例えば年賀状に干支の

版画を押そうとした場合、年賀状に押された時の動物の向きを気にするだろう。そしてきっと、年賀状側を違和感のない左向きの干支にするため、版側には苦労して逆の右向きの干支を刻み込むだろう。

銅鐸製作工人ともなれば、特殊な技術集団であり、日頃から反転を心得た集団である。右利きの工人であっても右を向く動物を描くことなど常に訓練されていたはずである。おそらく銅鐸の仕上がりをイメージして鋳型に逆向き図柄を描くことなど、身に沁みついた当然の、また容易い行為であったと思われる。すべての資料に対して言えるわけではないが、銅鐸製作工人は仕上がった銅鐸上の動物の頭や体の向きを常に意識しており、鋳型製作段階から仕上がりとは逆向きの動物を彫り込んでいたのではないかと考えられる。

今回の調査で、右向きの鹿が描かれた銅鐸形土製品が出土したが、これは左利きの工人によって製作されたものではなく、「反転」の仕事を常とする職人、つまり右向きの動物を描くことに慣れた銅鐸製作工人の手によるものではないかと考えている。前述のとおり、縦型流水紋で飾られた恩智垣内山銅鐸は揖津地域で作られたものであることが判明している。ひょっとすると、かつて恩智垣内山銅鐸に描かれていた鹿を実際に見たことのある、あるいはその鹿のことを伝え聞いたことがある銅鐸製作工人が、昔を思い出しながら銅鐸形土製品を作り、紋様の隙間に鹿を描いたのかもしれない。

ちなみに左利きの息子に鹿を描かせてみたが、期待に反し左向きの鹿を描いたことを付け加えておく。

## 小結

今回の調査によって、これまで知られていなかった弥生時代の新たなムラの存在が確認された。Ⅱ様式初頭からⅤ様式前半に営まれたムラで、その集落域と墓域を検出した。生産域については検出できなかったが、おそらく調査地東側の（旧）茨木川から安威川の周辺に水田が造られていたと推測できる。集落はⅣ様式になると周囲を環濠で囲まれ、墓域との境が明確になる。その環濠が設けられて以降には、集落内で青銅器の生産が行なわれていたことも明らかになった。集落西側の墓域にはⅡ様式初頭から方形周溝墓が造られ始め、最終的に160基以上が周溝を共有しながら網の目状に展開する。これまでの周辺調査の成果も合わせれば、この周辺には数百基の方形周溝墓が広がっていたことが復原でき、その数や墓域の広さは全国的に見ても突出した規模である。また造墓の際、前段階の周溝墓がほとんど壊されていないこともこの遺跡の特徴といえる。このように当遺跡は北揖津地域の中でも最大規模の墓域をもち、青銅器生産も行なわれるような拠点的な集落であったことが明らかとなった。

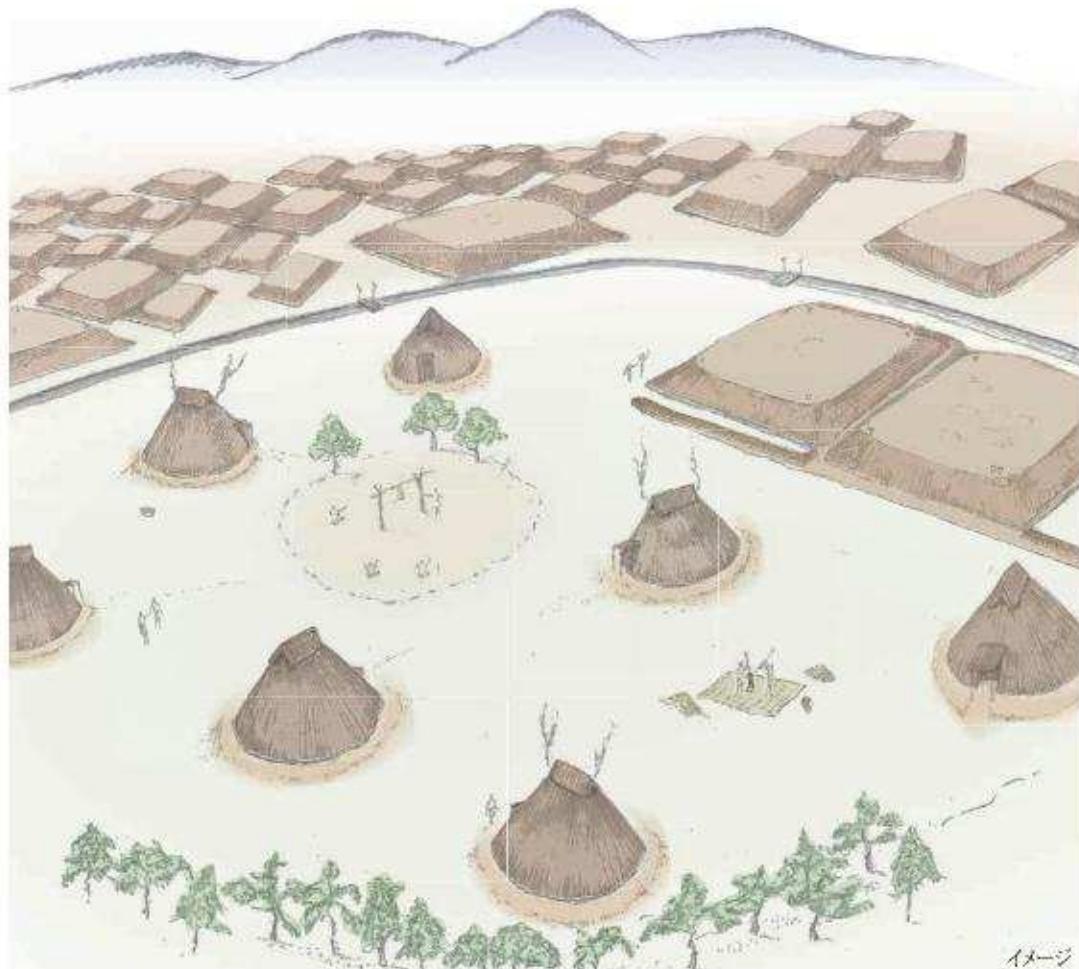
環濠によって集落と墓域とがこれほど明瞭に分かれる発掘事例はほとんどなく、今回の成果は弥生時代中期の一つのムラの景観を鮮やかに復原することができる貴重な資料である。

以上、各時代の遺構の変遷について簡単にまとめ、出土遺物についても遺構と絡め、問題提起も含めながら若干の考察を加えてみた。ただしあまりにも膨大な資料に対し、担当者の技量・知識のなさ、また時間的な制約から、十分な検討が加えられず、非常に浅い報告となってしまった。遺構や遺物については本文中で詳しく説明できず、一覧表での報告が多くなってしまい、土器の年代については、様式内のどのあたりなのか細かく分けることができず、大まかな時期区分となってしまった。また検出した遺構についても総合的な評価ができず、まとまりのないものとなってしまった。

総括にもいくつか羅列したとおり、今回の調査成果は古代・中世社会、弥生社会の解明にとって非常に重要な手掛かりとなる。今後、この遺跡の性格や地域の中での位置づけなど活発な議論がなされ、揖津地域の歴史解明が少しでも進むことを期待したい。本書がその一助となれば幸いである。

#### 参考文献・引用文献

- 1) 茨木市教育委員会 2005『郡遺跡発掘調査概要報告書』、同 1993『倍賀遺跡発掘調査概要報告書』平成4年度発掘調査概報
- 2) 大庭重信 2005「方形周溝墓制の埋葬原理」『考古学ジャーナル』No.534
- 3) 前掲載註1の前書
- 4) 安藤広道 1996「大型方形周溝墓から見た南関東弥生時代中期社会」『みずほ』第18号
- 5) 財団法人大阪文化財センター 1982『巨摩・瓜生堂』
- 6) 財団法人大阪文化財センター 1995『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告』第4次
- 7) 兵庫県教育委員会 1994－1996『玉津田中遺跡』第1～6分冊
- 8) 前掲載註5
- 9) 尼崎市教育委員会 1982『田能遺跡発掘調査報告書』
- 10) 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター 1991『朝日遺跡I』
- 11) 前掲載註6
- 12) 春成秀爾 1992「銅鐸の製作工人」『考古学研究』第39巻第2号
- 13) 清水邦彦 2017「弥生時代鋳造技術と工人集団—近畿地域出土送風管の検討を中心に—」『日本考古学』第44号
- 茨木市立文化財資料館 2017『銅鐸をつくった人々—東奈良遺跡の工人集団—』展示図録
- 14) 梅原末治 1927『銅鐸の研究』 大岡山書店発行、大阪府立泉北考古資料館 1986『大阪府の銅鐸図録』ほか
- 15) 摂津市教育委員会・公益財団法人大阪府文化財センター 2017『明和池遺跡5』
- 16) 前掲載註7



イメージ

# 遺構・遺物一覧表

## 一覧表凡例

1. 墳丘規模は、遺構検出面での周溝の内法（墳丘上面の内法）を計測。
2. 墳丘の振れは、主軸が座標北（N）から西（W）あるいは東（E）に何度も振れているかを示したものである。
3. 墳丘の振れが中間的で、各辺の方位を4方位で表現し難い場合は、「南西辺」などと8方位を用いて表現している。
4. 遺物番号は、挿図番号と一致する。本文に記載があっても、図化できず挿図に掲載のないものは一覧表にも記載していない。
5. 石庖丁や磨製石剣等の石材は、肉眼では「粘板岩」に見えるものでも、顕微鏡による観察で白雲母が生成されていることが確認された場合は「泥質片岩」とした。

周溝墓一覧表

周溝墓 番号	調査区	周溝	墳丘規模(m)	墳丘の形状 振れ(約)	周溝の形状	周囲の周溝墓との関係 特徴	埋葬施設	特記すべき 出土遺物	遺物の 時期
1	4区	3500・3501 3502・3503溝	13.1×8.0	長方形 W-59°-N	4隅のうち南北東隅のみ接続しない、 西辺周溝が途中で途切れれる	3500溝に沿って、周溝を共有して列状に並ぶ	北辺3502溝内 に3545上坑あり、埋葬施設あり		II
2	4区	3500・3503	8.0以上×6.5	長方形 W-64°-N	検出できた2隅のうち北東隅が途切れ る	3500溝に沿って、周溝を共有して列状に並ぶ			II
3	4区	3500・3505	10.5×6.7	長方形 W-53°-N	4隅が途切れることなく全周する	3500溝に沿って、周溝を共有して列状に並ぶ	中央やや西寄り に3575墓壙		II
4	4区	3500・3507 3508溝	10.0以上×8.2	長方形 W-60°-N	検出できた3隅は途切れることなく 全周する	3500溝に沿って、周溝を共有して列状に並ぶ 周溝南東隅に前期の3579上坑が重複する			II
5	4・6 区	3506 (3509-4525) 4506-4524溝	6.9×5.9	僅かに長方形 W-57°-N	僅かに途切れることなく全周する	隣接する周溝墓と周溝を共有して列状に並ぶ			II
6	4・6 区	(3508-3511) (3509-4525・ 4529) 3510-4531溝	10.5×9.4	僅かに長方形 W-51°-N	各隅は途切れず連続するが、南北辺と 北東辺は途中で途切れる。特に北東 辺については東半の3511溝と西半の 3508溝とでは、その規模が明らかに 異なり連続性が見られない	隣接する周溝墓と周溝を共有して列状に並ぶ ただしお記のとおり、計画的に配置されたもの に南寄りに 4556墓壙			
7	4区	3506-3507 3509-3511溝	4.2×3.5	僅かに長方形 W-39°-N	4隅のうち南北西隅のみ接続しない	周溝墓3と4との間にによって生じたスペース を利用して梁かれたもので、隣接する周溝墓と 周溝を共有して列状に並ぶ			
8	4区	(3509-4525) 3512・3581 4526溝	5.4×3.5	長方形 W-60°-N	4隅が途切れることなく全周する	周溝墓6・7を破壊して周溝を築き、東端を 周溝墓5の西辺周溝に接続させる			
9	4区	3502-3539 3542-3582溝	6.3×7.8	僅かに長方形 W-24°-N	4隅のうち北東・北西隅が接続しない	隣接する周溝墓と周溝を共有して列状に並ぶ 東辺周溝は他の溝と重複し、若干乱れる			
10	4区	3522-3523 (3515)溝	5.0以上×9.77 北辺未検出	正方形か N-70°-E	検出できた南北側の2隅とも連続する	西側の周溝墓16とは周溝を共有するが、東側 の周溝墓13や南側の周溝墓11とは周溝を共有 しない、3576墓壙の位置から、3515溝が西辺 周溝となると考えられる	ほぼ中央?に 3576墓壙		
11	4・6 区	3517-3583 4513溝	5.0以上×6.4 南辺未検出	長方形か N-73°-E	4隅とも接続せず、各辺(南辺は未検 出)が独立する	周間に周溝墓が近接するが、周溝を共有しない			
12	3・4 5・6 区	3518-3519 3520-3521溝	4.6×6.8 N-53°-E	長方形 N-53°-E	4隅とも接続せず、各辺が独立する	周間に周溝墓が近接するが、周溝を共有しない、 南辺から南にのびる4212溝からⅢ初の壺出土 供獻土器か			

13	4 区	3525・3526 3527・3528 溝	5.8 × 4.0	長方形 N - 59° - E	4 隅のうち南の2隅は連続し、北の 東側の周溝塁 14 とは隔離を共有するが、南側 の周溝塁 11・12 や西側の周溝塁 10 とは共有 しない、	やや南北に 3577 皇塚
14	3・4 区	3527・3529 3530・3531 溝	4.6 × 4.0	僅かに長方形 N - 53° - E	南の2隅は接続せず、東邊も途中で 途切れ 周溝塁 15 に切られる。西側の周溝塁 13 とは隔 離を共有するが、南側の周溝塁 12 とは共有し ない、	II (~V前)
15	3・4 区	3527・3531 3532・3533 溝	7.4 × 8.9	僅かに長方形 N - 71° - E	僅かに長方形のみ連続せず、他の 南側に接する周溝塁 18 とは隔離を共有するが、 南側に接する周溝塁 12・33 とは隔離を共有し ない、	中央やや東寄り に 3578 皇塚
16	4・6 区	3515・4514 4522 溝	3.0 以上 × 5.3 南邊未検出	不明 W - 32° - N	4 隅のうち北西隅のみ連続し、他の この南東側に接して周溝塁の存在が推定できる が未カウント	
17	4・6 区	3505・3514 4518・4522 溝	5.1 × 3.4	長方形 W - 40° - N	4 隅のうち北東隅と南西隅は接続せず 他の2隅は連続する	
18	3・4 区	3533・3534 (3535・3536) 3535・3536 溝	18.0 × 12.3 今回調査では 最大規模	長方形 W - 16° - N	4 隅とも接続せず、各辺が強独立する	周溝の一端を周辺の周溝塁と周溝を共有する 環濠 3001 溝と並行する
19	4 区	3538・3540 3541 溝	10.0 × 7.9	長方形 W - 8° - N	4 隅のうち北西隅のみ連続する	周溝塁と周溝を共有して列狀に並ぶ 東邊は周溝塁 18 と共有する
20	4 区	3537・3541 3543・3544 溝	8.4 × 6.1	長方形 W - 22° - N	4 隅とも接続せず、各辺が独立する	周溝塁と周溝を共有して列狀に並ぶ 北側に隣接する周溝塁 22 とは輪の張れを異に し、南方の周溝塁 1・2 と同じ振れとなる 調査区端のため列狀配置が不明
21	4 区	3547・3548 3580 溝	4.6 以上 × 5.1 西邊未検出	不明 W - 62° - N	東邊周溝は途中で途切れ南周溝と 接続しない、北邊周溝も北東隅付近 で若干溝幅を狭める	北側に隣接する周溝塁 22 とは輪の張れを異に し、南方の周溝塁 1・2 と同じ振れとなる 調査区端のため列狀配置が不明
22	2・4 区	3617 溝	6.3 × 6.4 以上	ほぼ正方形 W - 8° - N	検出できた東の2隅のうち、南東隅は 接続しない	周溝塁と周溝を共有する
23	3 区	(3001)・3153 3381・3407 溝	3.8 × 3.3 以上	長方形 W - 15° - N	4 隅のうち西の2隅は接続せず、西 方独立する。東の2隅は環濠 3001 溝 に切られる	北側に接する周溝塁 31 と周溝を共有する 東邊周溝は完全に環濠 3001 溝と重複する
24	4 区	3553・3554 3555・3556 溝	11.8 × 8.0	長方形 W - 22° - N	南東と北東隅は接続せず、南西隅部は 溝が交錯して乱れる 西邊周溝は途中で途切れ る	東側に周溝塁 25 が近接して並ぶが周溝を共有 しない、南側の周溝塁 27 とは共有する 北側の周溝塁 24 との間に周溝塁の存在が推定 できるが未カウント
25	4 区	3560・3561 3562・3563 溝	10.6 × 7.9	長方形 W - 32° - N	4 隅のうち北東隅のみ接続せず、他の 3 隅は連続する。ただし北西隅は溝底 が連結せず浅くなつており、別々の溝 として掘削されている。南西隅も溝底 に段ができる	西側に周溝塁 24 が近接して並ぶが周溝を共有 しない、北邊と南邊の周溝は他の周溝塁と共有 する。この東側に接して周溝塁の存在が推定で きるが未カウント

母指標 番号	調査区	周溝	墳丘規模(m)	墳丘の形状 崩れ(約)	周溝の形状	周囲の周溝墓との関係 特徴	埋葬施設	特記すべき 出土遺物	遺物の 時期	
26	3・4 区	3535・3566 3567・3568溝	7.4 × 5.8	長方形 W-3°-N	4隅のうち北西隅は完全に連続する 南東隅も一見連続するが、東辺が深く 掘られており連續性が見られない	一見南側の周溝墓18と周溝を共有しているよ うに見えるが、その重複部分は溝幅が広く2段 になつており、個々の溝として掘削されていた ことかうかがえる。この北側に接して周溝墓の 存在が推定できるが未カウント			Ⅱか	
27	4区	3537・3555 3559・3582溝	6.9 × 5.0	長方形 W-19°-N	4隅とも接続せず、各辺が独立する	隣接する周溝墓と周溝を共有して列狀に並ぶ			中期	
28	4区	(3535)・3560 3561・3565溝	4.0程度か×3.4	僅かに長方形 か W-30°-N	4隅のうち北の2隅は連続し、南の 2隅は接続しない、	隣接する周溝墓と周溝を共有する 南邊を3535溝とするか疑問	中央に小型の 3572墓壙			
29	4区	3560・3565溝	2.3程度か ×3.5程度か	長方形か W-31°-N	検出できた3隅のうち北東隅のみ連続 し、他の2隅は接続しない、 南西隅は未検出	隣接する周溝墓と周溝を共有する	小型の 3571墓壙			
30	3・5 区	3363・3364 3365・4201溝	8.0 × 6.4	長方形 W-31°-N	4隅が途切れることなく全周する	西側に周溝墓100が、北側に周溝墓161が近 接して並列するが周溝を共有しない、 南辺周溝の外側西寄りに島状に残る部分がある が周溝墓としては未カウント	南辺の4201 溝から多量 の土器とともに 人形土製品、 重なった 大型石庖丁、 磨製石剣等	Ⅱ		
31	3区	(3001)・3153 3368溝	5.2 × 6.0以上	ほぼ正方形 W-18°-N	西の2隅は連続するが、北辺・南辺 とも途中で途切れる 東邊は環濠3001溝と重複する	南側に接する周溝墓23とは周溝を共有するが、 西側に隣接する周溝墓18とは共有しない、 この北側に接して3129溝を西辺周溝とする周 溝墓の存在が推定できるが未カウント			Ⅱ	
32	3区	3383・3405 3413・3423溝	7.8 × 5.9	長方形 W-27°-N	4隅のうち東の2隅は連続するが、東 辺は途中で途切れる、西の2隅は接続 せず、西辺は土坑状に一部のみを検出 する	周間に周溝墓が近接するが、周溝を共有しない この東側に接して環濠3001溝との間に周溝墓 の存在が推定できるが未カウント	西辺3413 溝からまと まつた土器		Ⅱ	
33	3区	3410・3411 3412・3430溝	5.1 × 6.7	長方形 N-86°-E	南北隅は接続しない、 北西隅は周溝墓15の南邊3531溝と 接続 南東・北東隅は他の遺構や擾乱と重 なつており不明	中央の擾乱に重 なつて方形の 3474土坑の一端 が検出されたが、 非常に浅く、埋 葬施設かどうか 判断できなかつ た				
34	2・4 区	3556・3558 3562・3564溝	5.7 × 5.4	ほぼ正方形 W-35°-N	4隅とも接続せず北・東辺が独立する が、北辺は共有しない	南辺と西辺の周溝は南側の周溝墓と共有する が、北辺は共有しない	中央に 3573墓壙	Ⅱ (IV)		

35	6 区	4461・4464 4575 溝	5.8 × 6.2	ほぼ正方形 N - 58° - E	4 隣のうち北西隅のみ連続する。 他の 3 隅は接続せず、南辺・東辺が独立する。 北西隅は検出できたが、北辺 溝溝は未検出	西側に接する溝溝堀 37 とは溝を共有するが、 南側の溝溝堀 40 とは共有しない、溝溝堀 135 と重複し、塩堀が溝溝堀 135 の溝溝に切られる	中央に 4568 塩堀
36	6 区	4486・4497 溝	5.5 以上 × 5.0 以上 北・西辺調査区外	不明 N - 55° - E	検出できた南東隅は連続する 他の 3 隅は調査区外	南側に溝溝堀 37 が接するが、溝溝は共有しない 4537 塩堀	中央に 4537 塩堀
37	6 区	4424・4460 4461 溝	5.4 × 5.0 以上 西辺未検出	不明 N - 67° - E (西辺は未検出)	4 隅とも接続せず、各辺が独立する	東側に接する溝溝堀 35 とは溝を共有するが、 北側の溝溝堀 36 とは共有しない 4567 塩堀	中央に 4567 塩堀
38	6 区	4488・4498 4585 溝	4.5 × 2.6	長方形 W - 29° - N	4 隅のうち北東隅のみ連続し、他の 3 隅は接続しない	隣接する溝溝堀と溝溝を共有する	
39	6 区	(4533・4581) 4496・4580 溝	5.5 以上 × 4.8 北西辺調査区外	僅かに長方形 W - 48° - N	検出できた 3 隅のうち南東・南西隅は 接続せず、南東辺が独立する。北東隅 は溝の曲がり具合からおそらく連続し ていると思われる。北西隅は調査区外	北東辺は溝溝堀 145 の溝溝と共有し並列する 4559 塩堀	中央に 4559 塩堀
40	6 区	4426・4427 4436・4577 溝	4.9 × 4.7 ~ 6.8	台形 N - 70° - E	4 隅のうち北西隅と南東隅は接続しな い、南西隅は連続するが、南辺溝が 深く連続性が見られない	東辺と西辺は溝を共有するが、北辺は北側に 接する溝溝堀 35 と共有しない	
41	2 区	3600・3717 3718 溝	3.3 程度か × 3.0 南辺未検出	ほぼ正方形 0°	西の 2 隅は接続せず、北東隅は 3600 溝と接続する	3600 溝に沿って溝溝を共有して列状に並ぶ	
42	2 区	3600・3605 3717 溝	3.8 × 3.1 以上 西辺未検出	長方形 W - 1° - N	東の 2 隅は 3600 溝に接続するが、西 の 2 隅は接続しない (西辺は未検出)	3600 溝に沿って溝溝を共有して列状に並ぶ	
43	6 区	4421・4422 4423 溝	2.8 以上 × 6.0 以上 南・西辺調査区外	不明 W - 3° - N か	北の 2 隅は接続せず、北辺が独立する	東側に隣接する溝溝堀 126 と溝溝を共有する	
44	2 区	3600・3620 溝	1.0 以上 × 2.0 以上 南西隅のみ検出	不明 W - 18° - N	西辺の 3600 溝は幅が広がる、検出で きた南西隅は連続する	3600 溝に沿って溝溝を共有して列状に並ぶ	
45	2 区	3600・3601 溝	9.0 以上 × 9.0 以上 北・西辺調査区外	不明 W - 19° - N	北・西辺は未検出、東辺の 3600 溝は 当溝溝堀の南東隅で浅くなり一旦途切 れる 溝溝堀 48 と共有する南辺の 3601 溝 も東端は 3600 溝と接続しない	3600 溝に沿って溝溝を共有して列状に並ぶ	
46	2 区	3600・3620 3621・3622 溝	4.0 × 3.1	長方形 W - 18° - N	西辺の 3600 溝は当溝溝堀の西面側で一 旦途切れ、北東隅も接続せず、北辺 部はやや乱れており、直線的でない、 南西隅は連続するが、南辺は途中で途 切れ独立する	3600 溝に沿って溝溝を共有して列状に並ぶ 3714 塩堀	ほぼ中央に 3714 塩堀
47	2 区	3620・3621 3629・3630 溝	5.4 × 7.2	長方形 W - 19° - N	他の 3 隅は接続せず、東辺は独立する 溝溝堀 3601 溝は若干内側に広がってい る、北辺の 3601 溝は東端が 3600 溝 に接続せず、北西隅も南に屈曲せず直 進する、南辺の溝溝は両端のみの検出	3600 溝に沿って溝溝を共有して列状に並ぶ 未カウント	II
48	2 区	(3603・3604) 溝	10.0 × 6.6	長方形 W - 19° - N			

母指標 番号	調査区	周溝	墳丘規模(m)	墳丘の形状 振れ(約)	周溝の形狀	周囲の周溝ととの関係 特徴	埋葬施設	特記すべき 出土遺物	遺物の 時期
49	2区 3600-3622 3623-3624溝	6.0×6.4	ほぼ正方形 W-15°-N	北東隅と南西隅は接続しない、南辺側 は連続するが、南辺側が一段深い、 北辺は途中で周溝を共有して列状に並ぶ	3600溝に沿って周溝を共有して列状に並ぶ	周溝46と 共存する北 辺3622溝 に供献土器			II
50	2区 3623-3630 3631-3632溝	7.4×5.9	長方形 W-4°-N	4隅のうち西の2隅は接続しない 北辺は途中で途切れ独立 4隅のうち北東隅のみ接続しない 西側に接する周溝焼50・57の東辺が 接続する周溝と周溝を共有して列状に並ぶ	周溝を共有して列状に並ぶ	周溝を共有して列状に並ぶ			II
51	2区 3633-3643 3644溝	9.8×5.4～7.8	歪んだ長方形 W-10°-7°-N	歪んだ長方形 西側に接する周溝焼50・57の東辺が 接続しないため西辺は直線的でなく歪 心	周溝を共有して列状に並ぶ	周溝を共有して列状に並ぶ			II
52	2区 3643-3646 3647-3648溝	8.9×9.3	正方形 W-17°-N	南の2隅は連続するが、北の2隅は 接続せず、北辺が独立する	周溝を共有して列状に並ぶ	周溝を共有して列状に並ぶ			II
53	2区 3602-3608溝 北・西辺調査区外	6.5以上×5.0以上	不明	南東隅の特記は複数により不明	周溝を共有して列状に並ぶ	周溝を共有して列状に並ぶ			II
54	2区 (3603-3604) 3605溝	8.5×8.8	正方形 W-11°-N	検出できた3隅とも連続するが、各辺 は短く途切れ 僅かに長方形 か	周溝を共有して列状に並ぶ	周溝を共有して列状に並ぶ			
55	2区 3600-3624 3625溝	4.6×6.5程度か 東辺未検出	4.6×6.5程度か W-13°-N	僅かに長方形 か 4隅とも接合せず、南辺は独立する (東辺は未検出)	周溝を共有して列状に並ぶ	周溝を共有して列状に並ぶ			
56	2区 3626-3627溝	4.6×4.8	正方形 W-4°-N	4隅のうち北の2隅は接続せず、北辺 が独立する、南西隅は複数により不明	周溝を共有して列状に並ぶ	周溝を共有して列状に並ぶ			
57	2区 3632-3633 3634溝	4.9×5.2程度か 西辺未検出	ほぼ正方形か W-6°-N	4隅とも接合せず、南辺は接 続しない、 周溝を共有して列状に並ぶ	周溝を共有して列状に並ぶ	周溝を共有して列状に並ぶ			
58	2区 3607-3610 3718溝	3.5×4.1程度か 西辺未検出	ほぼ正方形か W-3°-N	4隅とも接合せず、各辺(西辺は木樁 接続する)が独立する	周溝を共有して列状に並ぶ	周溝を共有して列状に並ぶ			
59	2区 3600-3606 3627-3628溝	5.9×2.8～4.2 0°	歪んだ長方形 W-3°-N	4隅が途切れることなく全周するが、 南辺は一段深い、	周溝を共有して列状に並ぶ	周溝を共有して列状に並ぶ			
60	2区 3635-3636溝	7.4×5.0	長方形 W-3°-N	4隅のうち北東隅のみ連続する 南辺は独立する	周溝を共有して列状に並ぶ	周溝を共有して列状に並ぶ			
61	5区 4127-4130 4135溝	5.6×2.3以上	不明	周溝を共有する	周溝を共有する	周溝を共有する			
62	2区 3611-3612 3613-3614溝	6.5×7.8	ほぼ正方形 W-3°-N	4隅のうち西の2隅は接続せず、西辺 が独立する 北辺は途中で途切れ独立する	周溝を共有しない、この西側に接して調査区 外に周溝の存在が推定できるが未カウント	周溝を共有しない、この西側に接して調査区 外に周溝の存在が推定できるが未カウント			

63	2 区	3615・3616 3617 溝	2.6 × 1.3 以上 西刃未検出	不明 W-6° - N	東辺の 3615 溝は南辺の 3617 溝と接続するものの溝底が通らず、一旦浅くなる。	南側の周溝帯 22 と周溝を共有する		II
64	2 区	3550・3551 3618・3619 溝	4.6 × 4.1	ほぼ正方形 W-20° - N	4 隅のうち北東隅のみ接続しない、	西側の周溝帯 22 と周溝を共有する この南側の周溝帯 24 との間に周溝帯の存在が推定できるが未カウント	北辺 3618 溝に破片し た土器多數	II
65	2 区	3600・3606 3638・3639 溝	8.3 × 10.3	僅かに長方形 0°	僅かに長方形 1°、	この南側の周溝帯 24 との間に周溝帯の存在が推定できるが未カウント	北辺 3606 V 初に 溝から 振り直し	
66	2 区	3635・3643 3644・3645 溝	9.5 × 7.7	長方形 W-13° - N	4 隅が途切れることなく全周する	3600 溝に沿って周溝を共有して列狀に並ぶ ただし、南辺周溝は南側の周溝帯と共有しない	磨製石劍？	
67	2 区	3643・3648 3649・3650 溝	3.4 × 8.1	長方形 W-22° - N	4 隅が途切れることなく全周する	隣接する周溝帯と周溝を共有して列狀に並ぶ 隣接する周溝帯と周溝を共有して列狀に並ぶ 中央部に擾乱があり周溝の有無は不明 周溝帯 78・79 のように、東西に 2 つの周溝帯 が並んでいる可能性あり	II	
68	1・2 区	3643・3650 (3651・3913) 3652 溝	9.0 × 7.7	長方形 W-22° - N	4 隅が途切れることなく全周するが、 南辺は一段深く、	隣接する周溝帯と周溝を共有して列狀に並ぶ	中央に 3713 墓壙	II
69	2 区	3652・3653 3654・3659 溝	3.7 × 4.6	長方形 W-11° - N	4 隅のうち北の 2 隅は連続するが、南 東隅は接続しない、	隣接する周溝帯と周溝を共有して列狀に並ぶ 南西隅は擾乱と重複して不明		
70	1・2 区	3654・3655 3656・3909 溝	6.8 × 5.8	僅かに長方形 W-17° - N	僅かに長方形 W-17° - N	4 隅のうち南西隅のみ接続せず、他の 3 隅は連続する	隣接する周溝帯と周溝を共有して列狀に並ぶ	
71	2 区	3665 溝 (3637 溝?)	4.47 × 3.2	長方形 W-3° - N	4 隅のうち北西隅は連続するが、南東 隅と北西隅は接続しない、北東隅は擾 乱と重複して不明	4 隅のうち北東隅のみ接続するが、南東 隅と北西隅は接続しない、北東隅は擾 乱と重複して不明		
72	2 区	3666・3667 溝	2.9 × 3.4	僅かに長方形 N-8° - E	4 隅のうち北東隅のみ接続せず、他の 3 隅は連続する	隣接する周溝帯と周溝を共有して列狀に並ぶ		
73	2 区	3640・3641 3669・3670 溝	5.9 × 6.6	僅かに長方形 W-19° - N	4 隅のうち西の 2 隅は接続せず、西辺 が独立する、南東隅も接続するが、東 辺周溝より南辺の方方が浅いため、南辺 の途中で溝底に段ができる	隣接する周溝帯と周溝を共有して列狀に並ぶ V 初に 溝に破片し た土器多數、 扁平片刃石 斧も	II	
74	2 区	3670・3671 3672・3673 溝	4.5 × 5.4	長方形 W-27° - N	4 隅のうち北東隅のみ接続せず、他の 3 隅は連続するが、西辺周溝より北辺 の方が深く、北西隅で底に段ができる	北辺 3640 溝に破片し た土器多數		
75	2 区	(3675・3677) 3673・3674 溝 (3683 溝)	5.4 × 3.6	長方形 W-27° - N	4 隅のうち北の 2 隅は連続するが、東 辺は途中で途切れる、南東隅は周溝帯 75 の影響で斜行して接続しているが、接 続する周溝帯と周溝を共有して列狀に並ぶ その曲がり具合から本来は接続してい なかつたと判断できる			

母指標 番号	調査区	周溝	墳丘規模(m)	墳丘の形状 板れ(約)	周溝の形狀	周囲の周溝墓との関係 特徴	埋葬施設	特記すべき 出土遺物	遺物の 時期
76	2区	3672-3678 (3680-3682溝)	4.3×4.8	ほぼ正方形 W-35°-N	4隅のうち北西隅は連続するが、他の 3隅は接続せず、南辺は独立する	隣接する周溝墓と周溝を共有して列狀に並ぶ			日初
77	2区	3683-3684 3685溝	4.2×4.3	ほぼ正方形 W-37°-N	4隅のうち北の2隅は連続するが、 南の2隅は接続せず、南辺が独立する	隣接する周溝墓と周溝を共有して列狀に並ぶ			
78	2区	3699溝 (3676溝)	2.0以上×2.7 南辺未検出	正方形か W-8°-N	4隅のうち北の2隅は連続するが、 南の2隅は接続しない	隣接する周溝墓と周溝を共有して列狀に並ぶ			
79	2区	3645-3653 3660-3697溝	3.5×3.8	ほぼ正方形 W-13°-N	4隅のうち北の2隅は連続するが、 南の2隅は接続せず、南辺が独立する	隣接する周溝墓と周溝を共有して列狀に並ぶ			
80	2区	3661-3662溝 (3676溝)	4.1×3.5以上 東辺周溝未検出	長方形か W-48°-N	4隅のうち南西隅のみ連続する	隣接する周溝墓と周溝を共有して列狀に並ぶ が、南西側に接する周溝墓81とともに傍邊の 周溝墓より輪方が大きく西に振れる。			3702溝は埋葬 施設か?
81	2区	(3663-3681) 3666-3677溝	4.5×7.1	長方形 N-26°-E	4隅のうち南西隅のみ連続するが、 南東辺は途中で途切れる	隣接する周溝墓と周溝を共有して列狀に並ぶ が、北東側に接する周溝墓80とともに傍邊の 周溝墓より輪方が大きく西に振れる。			
82	2区	3684-3688溝 北・東辺周溝未検出	3.7程度か×3.0以上	不明 W-41°-N	4隅のうち西の2隅は連続する	隣接する周溝墓と周溝を共有して列狀に並ぶ			
83	5区	4125-4133 北辺未検出	2.9以上×3.4	正方形か W-21°-N	4隅とも接続せず、各辺が独立する	隣接する周溝墓と周溝を共有する、列狀配調の 縁邊か			
84	1・2区	3647-3657 3929-3930溝	6.4×8.6	長方形 W-9°-N	検出できた3隅のうち、南の2隅は 途切れず連続する、北西隅も連続する が北辺が途中で途切れる	隣接する周溝墓と周溝を共有して列狀に並ぶ			
85	1区	3928-3930 3931溝	3.6×2.5以上 東辺未検出	不明 W-14°-N	検出できず連続するが、南東隅は接続し ない	隣接する周溝墓と周溝を共有して列狀に並ぶ			
86	1・2区	3651-3916 3925-3929溝	5.8×7.5	長方形 W-7°-N	4隅が途切れることなく全周する	隣接する周溝墓と周溝を共有して列狀に並ぶ			埋没が V初か
87	1区	3925-3926 3927-3928溝	7.4×8.1	長方形 W-14°-N	4隅のうち北東隅のみ接続せず、他の 3隅連続する。	隣接する周溝墓と周溝を共有して列狀に並ぶ			
88	1区	3913-3914 3915-3916溝	6.6×8.0	長方形 W-15°-N	4隅が途切れることなく全周する	隣接する周溝墓と周溝を共有して列狀に並ぶ この東側に接して周溝墓の存在が推定できるが 未カウント			東端に4037墓 壁、この周溝墓 に伴うものでは ない可能性あり
89	5区	4122-4124 4125溝	2.0以上×4.7 南東辺未検出	不明 W-52°-N	検出できた2隅のうち、北東隅は連続 するが細く分離気味、北西隅は接続せ ず、南西辺が独立する	隣接する周溝墓と周溝を共有して列狀に並ぶ 側に接して周溝墓の存在が推定できるが未カウ ント、列狀配調の縁邊か			

90	1区	3922・3923 3924溝	2.7 × 2.2以上	正方形か N - 13° - E	検出できた2隅のうち、北西隅は西側に隔離され、この2基のみ他とは独立する。南西隅は西側に隔離され、他の2隅は連続する。		
91	1・2 区	3652・3659 (3654・ 3912)溝	2.9 × 4.8	長方形 W - 17° - N 3隅は連続する。	4隅のうち南北隅のみ接続せず、他の2隅は連続する。		
92	1区	3909・3910 3911・3912溝	6.1 × 6.4	(ほぼ)正方形 W - 18° - N	4隅が途切れることなく全周する。	隣接する西溝堀と西溝を共有して列狀に並ぶ。	
93	1区	3911・3914 3917溝	3.0以上 × 4.9 南辺未検出	不明 W - 31° - N	4隅のうち北西隅のみ連続する。 東辺は細く独立する。	隣接する西溝堀と西溝を共有して列狀に並ぶ。 この東側に接して西溝堀の存在が推定できるが、未カウント。	
94	5区	4113・4118 4296・4120溝	7.3 × 4.2	長方形 W - 44° - N 独立する	4隅とも接続せず、北東・南西辺が隣接する西溝堀と西溝を共有して列狀に並ぶ。	隣接する西溝堀と西溝を共有して列狀に並ぶ。	
95	1区	3919・3920 3921・3922溝	7.6 × 7.3	(ほぼ)正方形 N - 21° - E	4隅が途切れることなく全周する。	西溝堀90とのみ西溝を共有する。この2基のみ他とは独立する。	
96	1・2 区	3690・3907 3908溝	6.2 × 6.0以上 西辺未検出	正方形か N - 13° - E	検出できた東の2隅は連続する。	一見、列状配置をとっているように見えるが、明らかに軸を異にしており、西溝も共有していない。	中央に 3715墓壙
97	1区	(3001)・3900 3901・3902 (3900・3901溝の 両半分3014溝)	11.7 × 11.6	正方形 W - 34° - N	4隅のうち北西隅のみ接続せず、他の2隅は連続する。	環濠3001溝より内側の集落域に位置する。環濠3001溝とは並行し、北辺西溝が重複する。東側に接する西溝堀98と西溝を共有して並列するが、この2基のみ他の西溝堀から独立する。	中央に 4028墓壙か ら石錠? W
98	1区	(3902・3903) 3904・3905溝	12.8 × 10.0以上 東辺未検出	長方形 W - 35° - N	北東隅は接続しないが、西の2隅は連続する。 堤丘斜面に幅0.2m程度の細部があぐる。	環濠3001溝より内側の集落域に位置し、3001最も多7基の埋葬溝と並行する。西側に接する西溝堀97と西溝を共有して並列するが、この2基のみ他の西溝堀から独立する。	今回の調査では 4038-4039 ・4044墓壙 から石錠 4040墓壙 から石錠? W
99	1区	3938・3939 3940・3941溝	5.3 × 4.4	(ほぼ)正方形 N - 44° - E	4隅が途切れることなく全周する。 南西辺が途中で途切れる。	中央に 4026墓壙, 4024墓壙に塗 壁溝と切り合 う。4024-4025墓 壙もあるが、当周 溝系に伴うもの ではないと考え ている。	中央に 4026墓壙, 4024墓壙に塗 壁溝と切り合 う。4024-4025墓 壙もあるが、当周 溝系に伴うもの ではないと考え ている。

母指標 番号	調査区	周溝	墳丘規模(m)	墳丘の形状 振れ(約)	周溝の形狀	周囲の周溝墓との関係 特徴	埋葬施設	特記すべき 出土遺物	遺物の 時期
100 3・5 区	4195・4196 4197・4198溝	16.5 × 9.9	長方形 W-25°-N	南西隅のみ連続し、他の3隅は接続 しない、単独	環濠3001溝と並行する 東側に接するよう周溝墓30が並列するが、 周溝を共有しない、単独	西辺4196 溝から石礫・ 大型蛤貝石 斧	西辺4196 溝から石礫・ 大型蛤貝石 斧	IV	
101 5区	4139・4140 4141・4142溝	17.8 × 10.3	長方形 W-19°-N	東南隅は本確認。それ以外の3隅は 途切れず全周する	単独、環濠3001溝と並行する	大型石龜丁 を含む 石龜丁7枚 方、西辺 4140溝西壁 に刺さった ような状態 で出土	大型石龜丁 を含む 石龜丁7枚 方、西辺 4140溝西壁 に刺さった ような状態 で出土	IV	
102 5区	4147・4148 4149・4150溝	11.6 × 7.1	長方形 W-53°-N	4隅とも接続せず、各辺が独立する	隣接する周溝墓と周溝を共有して列狀に並ぶ				
103 5区	4149・4173 4174・4175溝	9.1 × 6.1	長方形 W-50°-N	4隅のうち東の2隅は接続せず、東辺 が独立する	隣接する周溝墓と周溝を共有して列狀に並ぶ				
104 5区	4126・4127 4128・4129溝	8.7 × 6.4	長方形 N-33°-E	4隅のうち東の2隅は接続せず、東辺 が独立する	隣接する周溝墓と周溝を共有して列狀に並ぶ この東側に接して周溝墓の存在が推定できるが 未カウント			埋没がV か	
105 5区	4128・4131 4132・4295溝	9.0 × 6.2	長方形 N-21°-E	4隅のうち北の2隅は接続せず、北辺 が独立する	隣接する周溝墓と周溝を共有して列狀に並ぶ			埋没がV か	
106 5区	4154・4155 4156・4257溝	7.1 × 4.8	長方形 W-57°-N	4隅のうち南の2隅は接続せず、南辺 が独立する、北東隅も途切れ気味に隣 接する周溝墓と周溝を共有して列狀に並ぶ	隣接する周溝墓と周溝を共有して列狀に並ぶ			南辺4155 溝に 供献土器	Ⅱ期
107 5区	(4103・4105) 4101・4102溝	5.6 × 7.0 程度か 東辺未検出	長方形 W-67°-N	検出できた西の2隅は連続する なくなる	他の周溝墓と接するが、振れを異にし、列狀に 並ばない				
108 5区	4108・4109 4110溝	7.0 × 5.5 南西辺未検出	長方形 W-29°-N	北西隅は連続する ほほ正方形 ではない、南西隅は調査区外	隣接する周溝墓と周溝を共有して列狀に並ぶ			南辺4155 溝に 供献土器	Ⅲ後
109 5区	4114・4115 4116溝	3.3 × 3.6 程度か 東辺未検出	長方形 W-28°-N	北西隅は連続する ほほ正方形 ではない、南西隅は調査区外	隣接する周溝墓と周溝を共有して列狀に並ぶ			南辺4155 溝に 供献土器	Ⅲ後
110 5区	4115・4119溝 南東・南西辺、調査区外	4.3以上×3.2以上 W-47°-7-N	不明	北方の1隅のみの検出、接続しない	隣接する周溝墓と周溝を共有して列狀に並ぶ				
111 5区	4116・4118 4144溝	4.4 × 4.0 程度か 東辺未検出	正方形か W-8°-N	4隅のうち北西隅のみ連続し、他の 3隅は接続しない	隣接する周溝墓と周溝を共有して列狀に並ぶ				
112 5区	4110・4111 4112・4143溝	6.2 × 5.2	僅かに長方形 W-39°-N	4隅のうち南北隅のみ接続せず、他の 3隅は連続する	隣接する周溝墓と周溝を共有して列狀に並ぶ 周溝墓94と重複する			Ⅰ	
113 5区	4131・4138溝	2.7以上×2.0以上 南・西辺未検出	不明 W-1°-N	北東隅は連続し、南東隅は接続しない 他の隅は周溝が検出できいため不明	北辺周溝を共有、周溝墓28・29程度の規模と 推定			4106墓號	

114	5 区	4145・4146 4147 溝	5.1 × 4.5 程度か 南西辺未検出	長方形 W-43° - N	4 隅のうち東隅のみ連続し、他の 3 隅 は接続しない、	隣接する周溝堀と周溝を共有して列狀に並ぶ		
115	5 区	4161・4162 4163・4167 溝	5.0 × 3.8	長方形 W-4° - N	4 隅とも接続せず、各辺が独立する	隣接する周溝堀と周溝を共有して列狀に並ぶ 東辺の一端が周溝堀 101 の端溝と重複する		
116	5 区	4150・4164 4165・4166 溝	3.8 × 3.9	正方形 W-40° - N	4 隅のうち南隅は連続し、東と西の隅 は接続しない、北隅は連続している が、北西辺より南東辺が深く掘られて おり、疎絆が見られない	隣接する周溝堀と周溝を共有して列狀に並ぶ この北西側に接して周溝堀の存在が推定できる が未カウント		
117	5 区	4165・4167 4168・4272 溝	6.4 × 3.9	長方形 W-34° - N	4 隅のうち南東隅のみ連続する、他の 3 隅は接続せず、北・西辺が独立する	隣接する周溝堀と周溝を共有して列狀に並ぶ	II	
118	5 区	4168・4169 4185・4192 溝	5.7 × 4.7	僅かに長方形 W-17° - N	4 隅のうち南西隅のみ連続し、他の 3 隅は接続しない	隣接する周溝堀と周溝を共有して列狀に並ぶ この北側および南側に接して周溝堀の存在が 推定できるが未カウント	I 末～ II 初	
119	5 区	(4186・4207) 4183・4184 4185 溝	3.2 × 3.1	正方形 W-25° - N	4 隅のうち南の 2 隅は連続するが、南 西隅は溝底が連続せず浅くなつており 個々の溝として掘削されていたことが うかがえる	隣接する周溝堀と周溝を共有して列狀に並ぶ この南側に接して周溝堀の存在が推定できるか 未カウント		
120	5 区	(3001)・4182 4183・4188 溝	5.5 × 3.8?	長方形 W-25° - N	東辺は環濠 3001 溝に切られ不明、西 の 2 隅のうち南西隅は連続するが、西 辺周溝側が深く、溝底に段ができる 北西隅は接続しない、	隣接する周溝堀と周溝を共有して列狀に並ぶ この北側に接して周溝堀の存在が推定できるか 未カウント	中期 後半? (混入か)	
121	5 区	4184・4189 4190・4191 溝	3.1 × 3.1	正方形 W-17° - N	僅かに接続せず、各辺が独立する	隣接する周溝堀と周溝を共有して列狀に並ぶ この北側に接して周溝堀の存在が推定できるが 未カウント		
122	5 区	4175・4176 4177・4178 溝	5.0 × 4.0	僅かに長方形 W-71° - N	4 隅のうち南東隅のみ連続する、他の 3 隅は接続せず、北辺周溝が独立する	隣接する周溝堀と周溝を共有して列狀に並ぶ		
123	5 区	4159・4173 4179・4205 溝	5.9 × 4.5	長方形 W-51° - N	4 隅のうち東隅のみ連続し、他の 3 隅 は接続しない、	隣接する周溝堀と周溝を共有して列狀に並ぶ 北東辺を 4148 溝とすれば、周溝堀 102 と周溝 を共有することになるが、北東辺が 4148 溝で あつたか疑問。	中期	
124	5 区	4148・4151 4152・4153 溝	4.0 × 5.5?	長方形 W-53° - N	4 隅とも接続せず、各辺が独立する	隣接する周溝堀と周溝を共有して列狀に並ぶ		
125	5・6 区	4132・4448 4452 溝	4.8 程度か × 4.6 北辺未検出	ほぼ正方形か N-13° - E	ほほのうち南西隅のみ連続し、他の 3 隅は接続しない、	隣接する周溝堀と周溝を共有して列狀に並ぶ 東側の周溝堀 127 と東辺周溝を共有するが、 126 側を深く掘り直している		
126	6 区	4421・4427 4428 溝	3.8 以上 × 8.7 南辺調査区外	不明 N-2° - E	検出できただけのうち、北西隅は接合 しない、	隣接する周溝堀と周溝を共有して列狀に並ぶ 西側の周溝堀 126 と周溝を共有するが、126 側 が深い、この東側に接して調査区際に周溝堀の 存在が推定できるが未カウント	日初	
127	6 区	4428・4429 4430 溝	4.0 以上 × 9.4 南辺調査区外	不明 W-4° - N	検出できただけのうち、北東隅は接合 しない、			

母指標 番号	調査区	周溝	墳丘規模(m)	墳丘の形状 振れ(約)	周溝の形狀 振れ(約)	周囲の周溝等との関係 特徴	埋葬施設	特記すべき 出土遺物	遺物の 時期
128	6区	4424・4425 4426・4427溝	4.3×5.6	長方形 N-72°-E が独立する。南辺は途中で途切れ 北隅のみの検出、接続しない	4隅のうち北の2隅は接続せず、北辺 隣接する周溝等と周溝を共有して列狀に並ぶ				日初
129	6区	4446・4481溝 南・西辺調査区外	2.8以上×3.0以上	不明 W-30°? - N	北側の周溝等とはやや隔てる	北側の周溝等132とは周溝の一端が重複する が、これより南には統かない、			
130	6区	4442・4443 4444・4445溝	4.7×3.8	僅かに長方形 N-10°-E	僅かに長方形 N-21°-E	北側の周溝等132とは周溝の一端が重複する が、これより南には統かない、 列狀配置の線辺が 近接する周溝等と周溝の一端が切り合うが、 共有しない			
131	6区	4432・4433 4579溝	5.1×5.6以上	僅かに長方形 N-21°-E	4隅のうち西の2隅は連続する				
132	6区	4445・4449 4450・4451溝	9.1×6.1	長方形 N-26°-E	4隅のうち南西隅のみ接続せず、他の 3隅は連続する	北側の周溝等140とは周溝を共有するが、南や 西の周溝等とは周溝の一端が切り合うが共有し ない、			I末
133	6区	4440南半 4441溝	6.1×5.1	長方形 N-43°-E	4隅が途切れることなく全周する	西側の周溝等137とは周溝を共有するが、北や 南の周溝等とは周溝の一端が切り合うが共有し ない、			II
134	6区	4435・4436 4438・4447溝	5.4×5.0	僅かに長方形 N-48°-E	4隅が途切れることなく全周する	隣接する周溝等と周溝を共有して列狀に並ぶ 中央を避けた 4573・4574墓壙			II
135	6区	4462・4463 4465・4576溝	6.5×3.3	長方形 N-71°-E	4隅のうち南西と北東隅は接続しない 平面検出段階でも35の東辺周溝4464を135 の北辺周溝4463が切っていたが、南辺での断 面観察では先後関係は不明瞭	隣接する周溝等と周溝を共有して列狀に並ぶ 周溝等35と重複し、35上の墓壙を切る 4563墓壙			
136	6区	4465・4467 4468・4469溝	7.5×5.2	長方形 W-43°-N	4隅が途切れることなく全周する	隣接する周溝等と周溝を共有して列狀に並ぶ やや西寄りに 4563墓壙			
137	6区	4438・4441 4470溝	5.9×5.2	僅かに長方形 N-40°-E	4隅のうち北西隅のみ接続せず、他の 3隅は連続する	隣接する周溝等と周溝を共有して列狀に並ぶ 4571墓壙か ら石躰 北辺4470 墓壙から 供献土器			中期前半
138	6区	4470・4471 4472・4582溝	5.2以上×5.3	正方形 W-48°-N (PGL)は4434溝に切られる)	4隅のうち北西隅のみ接続せず、他の 4隅は連続する	隣接する周溝等と周溝を共有して列狀に並ぶ 中央に 4564墓壙			
139	6区	4440北半 4453・4455 4456溝	9.0×6.4	長方形 N-40°-E	4隅のうち北西隅のみ連続し、他の 3隅は接続しない、	東側に接する周溝等140とは周溝を共有する が、北側の周溝等141とは軸の振れを異にし、 周溝も共有しない。また南側の周溝等133とは 軸の方向を同じくし列狀に並ぶが、周溝を共有 しない、断面観察の結果、周溝等141より新し いことが判明			

140	6 区	4450・4452 4453・4454 溝	6.2 × 2.6 ~ 4.2	長方形 N - 18° - E	4 閣のうち南北の 2 閣は連続するが、北東側の周溝堀 152 側まで続くが、当周溝堀北側だけ深く掘られており連續性が見られない、	隣接する周溝堀と周溝を共有して列狀に並ぶ
141	6 区	(4455・4459) 4457・4458 4480 溝	7.8 × 5.1	長方形 W - 50° - N	4 閣のうち北の 2 閣は連続し、南の 2 閣は接続しない、	東側に接する周溝堀 152 とは周溝を共有して列状に並ぶが、(南側に接する周溝堀 139 とは周溝を共有せず、幅の振れも異にする。断面觀察の結果、周溝堀 139 に切られることが判明この北西側に接して周溝堀の存在が確定できる)が未カウント
142	6 区	4434・4473 4474・4475 溝	8.6 × 6.1	長方形 W - 23° - N	西の 2 閣は途切れず連続する、東の 2 閣は 4434 溝に切られて不明だが、おそらく連続していたと思われる	東辺が 4434 溝と重複しており詳細不明。周辺の周溝堀とは周溝が互いに一端接するか共有しない、この北側に接して周溝堀の存在が確定できるが未カウント
143	6 区	4468・4482 4483・4484 4485 溝	3.3 程度か × 3.3	不整形 N - 45° 7 - E	周溝は途切れることなく全周する	隣接する周溝堀と周溝を共有して列状に並ぶが、ちょうど周溝堀のコーナーを共有しているため、平面形が方形にならず、規模や幅の振れなど判断が難しい、この西側の周溝堀 144 との間に周溝堀の存在が推定できるが未カウント
144	6 区	4487・4488 4489・4490 溝	5.3 × 5.1	正方形 N - 71° - E	4 閣のうち北の 2 閣は連続するが、南の 2 閣は途絶せず、南辺が独立する	東や西側に接する周溝堀とは周溝を共有して列状に並ぶが、北側の周溝堀 39 とは周溝の存在が判定できないが未カウント
145	6 区	4531・4532 4533・4583 溝	13.0 × 10.9	長方形 W - 49° - N	検出できた 3 閣とも途切れることなく全周する	この東側の周溝堀 143 との間に周溝の存在が判定できないが未カウント
146	6 区	4490・4491 4492・4540 溝	6.1 × 6.4	正方形 N - 63° - E	4 閣のうち北の 2 閣は接合せず、北辺が独立する。南東隅は接合するが、東辺のみ深く独立しており、本来は連続していかつたことが見える	北辺の周溝堀群とは幅の向きを異にする、大型で北側の周溝堀群とは幅をばら揃え、一群の核となるような存在に見えるが、北側のものより新しい、填丘内に周溝堀 151・163・164 が重複する
147	6 区	4434・4501 4502・4504 溝 西辺未検出	3.7 程度か × 3.3 程度か	不整形 W - 9° 7 - N	東の 2 閣は途切れず連続する、西の 2 閣は 4434 溝に切られるが、おそらく連続していたと思われる	南東隅の周溝内に土器棺 4560 墓壙
148	6 区	4507・4508 4530 溝	4.3 × 3.3	長方形 W - 37° - N	4 閣は途切れることなく全周するが、北西辺が途中で途切れる	南西辺の周溝が周溝堀 145 の周溝に切られる、北西側の周溝堀 149 と周溝を共有して並ぶ

母指標 番号	調査区	周溝	墳丘規模(m)	墳丘の形状 振れ(約)	周溝の形狀	周溝との関係 特徴	埋葬施設	特記すべき 出土遺物	遺物の 時期
149 6 区	4528・4529 4530・4531 溝	4.6 × 3.5	長方形 W-48°-N	4 隅が途切れることなく全周する	南西辺は周溝墓 145 の周溝と共有しているよう に見えるが、実際には周溝墓 148 と同じく、周 溝墓 145 の周溝に切られる。	西端に 4555 墓號			中期前半
150 6 区	4506・4515 (4517・4518) 溝	6.4 × 6.1	僅かに長方形 W-44°-N	僅かに長方形 4 隅とも途切れることなく全周する が、北東辺が途中で途切れる	南東側の周溝墓 148 と周溝を共有して列狀に並ぶ 隣接する周溝墓と周溝が途切れようとしている これより南側は周溝墓 141・153 との間を埋め が存在していたと推定できる	南東辺 4515 溝から 供輶土器			II ~ III 前
151 6 区	(4578・4542) (4540・4549) 4581・4544 溝	7.6 × 7.8	正方形 W-29°-N	4 隅とも接続せず、各辺が独立する 各辺も短く途切れる	隣接する周溝墓と周溝を共有して列狀に並ぶ 周溝墓 145 の南隅に重複し、145 に引られる	中央の 4551 土 坑が埋葬施設か			II
152 5・6 区	4156・4159 4454・4480 溝	4.7 × 8.2	長方形 W-57°-N	4 隅とも接続せず、各辺が独立する	隣接する周溝墓と周溝を共有して列狀に並ぶ				
153 5・6 区	4179・4180 4288 溝	6.5 程度か×3.9 北西刃未検出	長方形 W-51°-N	4 隅のうち北東隅は連続するが、他の 3 隅は接続しない	隣接する周溝墓と周溝を共有して列狀に並ぶ この北西側の周溝墓 159 との間に周溝墓の存在 が推定できるが未カウント				
154 5・6 区	(4174・4178) 4180・4210 (4206・4209) 溝	6.2 × 7.5	やや歪んだ 長方形 W-53°-N	4 隅のうち北東と南西の隅は連続するが、他の 2 隅は接続せず、西辺と東辺 も途中で途切れる	隣接する周溝墓と周溝を共有して列狀に並ぶ この北東側に接して周溝墓の存在が確定できる が未カウント				
155 6 区	4472・4477 (4456?) 溝	6.37 × 3.5 以上 東刃未検出	不整形 (竪牆の振れ)	4 隅のうち北西隅は連続するが、他の 3 隅は接続しない、北辺は周溝が広 がっており、本来の位置が不明	隣接する周溝墓と周溝を共有して列狀に並ぶ 南辺を 4456 溝までとするが蛇曲	4565 墓號			
156 6 区	4434・4477 4478・(4479・ 4502) 溝	13.0 程度か ×10.0 程度か	不整形 W-36°-N (竪牆の振れ)	4 隅のうち北西隅は連続するが、他の 3 隅は接続しない、本来の位置が不明	隣接する周溝墓と周溝を共有するが、周溝の幅 が広がり、西辺が 4434 溝に引られるなどして いるため、根模や袖の振れなど判斷できない、 縦壁	周溝墓 147 と共に 有する北辺周溝 内に土器棺 4560 墓號			IV 後半 (土器棺)
157 6 区	4474・4483 4492・4549 溝	4.8 × 3.7	長方形 W-14°-N	4 隅とも接続せず、各辺が独立する	隣接する周溝墓と周溝を共有して列狀に並ぶ				
158 6 区	4479・4500 4501 溝	2.5 以上×2.5 程度か	不明 N-19°-E (皇壁の振れ)	輸出できた 3 隅のうち、西の 2 隅は 途切れず連続する	隣接する周溝墓と周溝を共有するが、北辺や西 辺周溝の向きがやや振つており、根模や袖の振 れなど判斷できない	4552 墓號			IV 後半 (土器棺)
159 6 区	4548・4541 4584 溝	3.3 × 4.1	長方形 W-20°-N	北東隅のみ連続し、他の 3 隅は接続 しない	本来は、おそらく周辺の周溝墓と周溝を共有し、 列狀に並んでいたと考えられるが、未検出の周 溝が多く周溝の根模が認識できない、 北西側の周溝墓 150 との間や、南東側の周溝墓 141・153 との間に数基の周溝墓の存在が確定で きるが未カウント				

160	5 区	(3001)・4181 4182・4297 溝	2.8 × 4.8	長方形 W-5° - N	4 隅のうち南の 2 隅は接続せず、南邊、西側は連続するが、東邊は完全に隔離される。北側の隔離壁とは隔離を共有する。 南邊の 4297 溝は隔離壁 101 の隔離と重複する。		中期 後半? (混入か)
161	3 区	3364・3367 3383 溝	4.1 × 2.8 程度か	長方形 W-31° - N	4 隅のうち南西隅のみ連続し、他の 3 隅は接合しない。 南側に隔離壁 30 が近接して並列するが隔離を共有しない。		II
162	6 区	4160・4288 4457・4512 溝	6.6 × 4.5	長方形 W-51° - N	未検出の箇所が多い、4 隅とも接続しない。 隣接する隔離壁と隔離を共有して列狀に並ぶ。	東邊 4160 溝に 供献土器	I 末～ II 初
163	6 区	4545・4586 4587 溝	4.3 以上 × 3.0 西刃未検出	長方形 W-48° - N	検出できた 2 隅のうち、東隅は連続し、南隅は接続しない。 隣接する隔離壁と隔離を共有して列狀に並ぶ。		
164	6 区	4542・4545 4558・4587 溝	3.4 × 2.6	僅かに長方形 W-48° - N	僅かに長方形のうち北隅は連続するが、他の 3 隅は接続しない。 隣接する隔離壁と隔離を共有して列狀に並ぶ。		

土器一覧表

遺物番号	調査区	遺構・層	種類	器種	法寸量(cm)			時期	技法・特徴・備考
					口径	底径	器高		
1	3区	4層	弥生土器	高杯	(23.8)	杯部最大径 (31.2)	(3.3)	IV	杯部内面～口縁部外面：ミガキ、杯部外面：(タテ)ミガキ
2	5区	4層	弥生土器	高杯	17.6	杯部最大径 28.0	(9.5)	IV前	水平口縁部は磨滅のため調整不明瞭。内面突起部：ヨコナデ、杯部内外面：(タテ)ミガキ
3	5区	4層	弥生土器	壺	16.4		(11.6)	IV	表面摩滅のため調整不明瞭。口縁部：四線紋+細いキザミ状の縦線。(3～4条の縦線を間隔をおいて数ヶ所) 頸部外面：工具による沈擦状の凹窓紋6条 頸部内面中央付近：ハケ
4	5区	4層	弥生土器	器台	(37.4)		(3.0)	IV	口縁端面：四線紋+縦線紋+円形浮紋 口縁部上面：棱形状の列点紋
5	5区	4層	弥生土器	有段口縁壺	(41.2) (43.8)	口縁最大径 (43.8)	(9.2)	IV	表面摩滅のため調整不明瞭。口縁部外面：四線紋+下段側の四線紋間にキザミ、凹窓紋間にヘラ横斜格子紋
6	3区	4層	弥生土器	甕	(37.4)		(12.5)	IV	口縁部ヨコナデ、体部内外面：ハケ
7	5区	4層	弥生土器	甕	(36.0)		(13.1)	IV	口縁部ヨコナデ、頭部外面：キザミ目突槽、体部外面：ハケ、体部内面：板状工具によるナデ
8	3区	7柱穴(掘立1)	黒色土器	椀(A類)		高台径 (7.1)	(1.5)	10C	
9	3区	13柱穴(掘立1)	土師器	小皿			1.15	10C後葉	ての字状口縁III、器壁薄い
10	3区	20柱穴(掘立1)	綠釉陶器	碗	(15.5)		(5.0)	10C	近江產？ 内外面とも施釉、釉は濃緑色 胎土は浅黄褐色で軟質
11	3区	100柱穴(掘立2)	土師器	小皿	(9.0)		(1.3)	11C後半	ての字状口縁III、器壁薄い
12	3区	100柱穴(掘立2)	黒色土器	椀(B類)	(15.6)		(4.8)	11C後半	外面：分割ミガキ
13	3区	55柱穴(掘立4)	土師器	小皿	(9.4)		(1.0)	11C中～後葉	ての字状口縁III
14	3区	128柱穴(掘立5)	白磁	碗(XI類?)		高台径 (7.0)	(1.75)	10C後半 -11C中葉	IV類の可能性もあり
15	3区	128柱穴(掘立5)	黒色土器	椀(B類)	(15.8)	高台径 (6.4)	5.3	11C中葉	外面：分割ミガキ
16	3区	132柱穴(掘立5)	土師器	脚付杯	(15.0)	高台径 (7.6)	4.4	10C後半 ～11C	口縁部の強いヨコナデにより外面に段
17	3区	136柱穴(掘立5)	土師器	小皿	(9.0)		(1.6)	11C中～後葉	ての字状口縁III
18	3区	137柱穴(掘立5)	黒色土器	椀(B類)	(15.6)		(2.9)	11C中葉	外面：磨滅のためミガキ不明瞭
19	3区	173柱穴(掘立6)	土師器	小皿	(9.6)		(1.6)	11C前～中葉	ての字状口縁III、内面にハケ
20	3区	174柱穴(掘立6)	黒色土器	椀(A類)		高台径6.3	(1.9)	10C後半	内面のミガキ不明瞭
21	3区	174柱穴(掘立6)	黒色土器	椀(B類)		高台径 (6.6)	(1.8)	11C前～中葉	見込みにラセン状暗紋
22	3区	174柱穴(掘立6)	黒色土器	椀(A類)	(15.6)	高台径 (6.2)	(5.45)	10C後半	外面：表面磨滅のためミガキ不明瞭。内面：口縁直下にミガキが及ばない凹みあり、ミガキの単位は不明瞭
23	3区	184柱穴(掘立6)	土師器	小皿	(8.8)		1.4	11C前～中葉	ての字状口縁III
24	3区	185柱穴(掘立6)	黒色土器	椀(B類)		高台径 (5.1)	(2.1)	11C前～中葉	見込みに平行線暗紋
25	4区	530柱穴(掘立14)	土師器	小皿	(9.6)		(1.5)	12C中～後葉	口縁部二段ナデ
26	4区	537柱穴(掘立14)	土師器	小皿	(14.3)		(2.5)	12C中葉	口縁部二段ナデ
27	4区	604柱穴(掘立15)	土師器	小皿	8.8		1.65	13C前半	口縁部一段ナデ
28	4区	604柱穴(掘立15)	土師器	小皿	8.1		1.5	13C前半	口縁部面取り気味に二段ナデ
29	4区	604柱穴(掘立15)	瓦器	椀		高台径 (5.2)	(1.5)	13C前半	見込みに平行線暗紋
30	4区	698柱穴(掘立19)	土師器	小皿	(9.7)		0.8	11C7	回転台土師器、底部糸切り
31	5区	1318柱穴(掘立25)	土師器	小皿	(9.0)		(1.85)	11C後半	ての字状口縁III
32	5区	1319柱穴(掘立25)	瓦器	椀	(14.7)	高台径 (6.5)	(5.5)	11C後葉	輪葉型、内外面：密なミガキ、外面：分割ミガキ
33	6区	1459柱穴(掘立30)	黒色土器	椀(B類)		高台径 (5.7)	(1.5)	11C前～中葉	見込みにジグザグ状暗紋
34	6区	1459柱穴(掘立30)	土師器	小皿	(8.8)		(0.9)	11C中～後葉	ての字状口縁III
35	6区	1462柱穴(掘立30)	土師器	小皿	9.2		2.3	11C中～後葉	ての字状口縁III
36	5区	1428柱穴(掘立31)	土師器	小皿	9.1		1.7	11C後半	ての字状口縁III
37	6区	1434柱穴(掘立31)	土師器	小皿	(9.2)		(1.25)	11C中葉	ての字状口縁III
38	6区	1503柱穴(掘立31)	綠釉陶器	碗			(2.7)	9C後半	胎土：灰白色でやや軟質 内外面：施釉(灰オリーブ色)、内面に陰刻花紋
39	6区	1524柱穴(掘立31)	土師器	小皿	10.0		1.6	11C後～ 12C前半?	回転台土師器、底部ヘラ切り

遺物 番号	調査 区	遺構・層	種類	器種	法量(cm)			時期	技 法・特 徴・解 考
					口径	底径	器高		
40	6区	1488柱穴 (掘立33)	土師器	椀		高台径7.3 (3.5)		10C?	回転台土師器、底部糸切り後高台貼り付け
41	6区	1499柱穴 (掘立34)	土師器	小皿	10.2		2.3	12C	回転台土師器、底部ヘラ切り
42	4区	559柱穴(掘立35)	土師器	小皿	(10.5)		(1.3)	11C中 ～後葉	ての字状口縁皿
43	4区	767柱穴(掘立36)	土師器	小皿	8.4		1.6	13C前半	口縁部二段ナデ、底部凹む
44	3区	233柱穴(堀5)	土師器	小皿	9.1		1.7	12C後半	口縁部二段ナデ、底部凹む
45	5区	1225柱穴(堀5)	瓦器	椀		高台径 (4.8)	(0.65)	12C	和泉型。内面見込みに格子状の細い線刻の後、ラセン状暗紋
46	3区	110柱穴(掘立5)	須恵器	盤	(33.8)		(6.8)	11C後半	香川県綾川町産か。体部外面：格子目タタキ
48	3区	298ビット	土師器	小皿	(9.4)		(1.4)	11C後葉	ての字状口縁皿
49	3区	315ビット	土師器	小皿	(8.6)		1.0	12C後～ 13C前葉	口縁部一段ナデで外反
50	3区	325ビット	土師器	小皿	9.3		1.8	12C後半	口縁部二段ナデ、下段側のナデは強く、沈線状に凹む
51	3区	325ビット	須恵器	盤		(15.4)	(3.7)	古代？	焼成不良のため土師質で橙色を呈する
52	3区	349ビット	土師器	小皿	(8.5)		1.5	12C後葉	口縁部二段ナデ、底部凹む。外面に粘土接合痕あり
53	3区	364ビット	土師器	小皿	9.7		1.8	12C前 ～中葉	口縁部二段ナデ、外面に粘土接合痕あり
54	3区	364ビット	瓦器	椀	(15.2)		(4.3)	12C前半	輪葉型。外面：分割ミガキ。内面：密なミガキ
55	4区	554ビット	土師器	大皿	(15.2)		(2.8)	12C前半	口縁部一段ナデで外反
56	4区	554ビット	瓦器	椀	(15.4)	高台径 (6.3)	5.6	12C前半	輪葉型。外面：表面磨滅のためミガキ不明 内面：密なミガキ。見込みにジグザグ状暗紋
57	4区	554ビット	瓦器	椀	14.8	高台径 (外7.5) (内5.4)	5.4	12C前半	輪葉型。二重高台。外面：3分割ミガキ 内面：密なミガキ。見込みにジグザグ状暗紋
58	4区	554ビット	山茶碗	碗	15.8	高台径8.2	5.4	12C前葉	口縁部に輪花、底部糸切り後高台貼り付け
59	4区	629ビット	瓦器	椀	(13.5)	高台径 (4.6)	3.5	13C中葉	和泉型
60	4区	749ビット	土師器	小皿	8.5		1.4	13C前 ～中葉	口縁部一段ナデ、底部凹む
61	1区	1119ビット	黒色土器	椀(B類)	(15.5)		(4.0)	11C後半	内外面とも密なミガキ
62	5区	1240ビット	土師器	小皿	9.2		(1.8)	12C中 ～後葉	口縁部二段ナデ
63	5区	1240ビット	瓦器	椀	(15.6)	高台径 (5.1)	(5.1)	12C後半	和泉型。内面：見込みに複雑なジグザグ状暗紋
64	5区	1240ビット	瓦器	椀	14.8	高台径5.7	5.4	12C後半	和泉型。表面磨滅のため見込みの(平行線)暗紋以外の ミガキは確認できない
65	5区	1303ビット	土師器	大皿	(14.8)		(3.0)	11C前半	
66	6区	1515ビット	土師器	台付皿?		高台径 (8.4)	(3.0)	10C後葉?	回転台土師器。底部外面に押住痕。京都からの搬入品か？
67	6区	1420ビット	灰釉陶器	碗?			(1.6)	9C後～ 10C前半	全面に施釉(淡い薄黄色) 胎土：浅い褐色で軟質
70	3区	40土坑	黒色土器	椀(B類)		高台径6.5 (3.5)		11C前半	表面磨滅のため調整不明瞭。外面：分割ミガキ 内面：ミガキ
71	3区	41土坑	黒色土器	碗(B類)	(14.3)		(2.9)	11C	
72	3区	41土坑	土師器	皿	(9.9)		(1.2)	11C前半	ての字状口縁皿
73	3区	41土坑	灰釉陶器	碗		高台径7.45 (2.1)		11C前半	内面：重ね焼きの痕跡より外側に自然釉 底部糸切り後高台貼り付け。胎土緻密
74	3区	66土坑	黒色土器	椀(B類)		高台径 (6.9)	(2.55)	11C前半	
75	3区	158土坑	灰釉陶器	碗		高台径8.05 (3.6)		11C前半	内面：重ね焼きの痕跡より外側に自然釉 底部糸切り後高台貼り付け。胎土緻密
76	3区	461土坑	黒色土器	椀(A類)	(13.4)	高台径7.0	5.35	10C後半	表面磨滅のためミガキ等不明瞭
77	3区	461土坑	黒色土器	椀(A類)	(15.1)	高台径8.4	5.4	10C後半	内面：炭素吸着が強くミガキ不明瞭
78	3区	461土坑	黒色土器	椀(A類)	(13.7)	高台径 (7.1)	4.95	10C後半	外面：表面磨滅のため調整不明瞭。ミガキ 内面：やや太めのミガキ
79	4区	509土坑	瓦器	椀	13.0	高台径5.3	4.6	13C前葉	輪葉型
80	4区	509土坑	須恵器	片口鉢	(30.6)		(7.8)	12C末～ 13C初頭	束縛系
81	1区	1122土坑	黒色土器	椀(B類)		高台径 (5.6)	(1.9)	11C中葉	内面：密なミガキ。見込みに平行線暗紋 外面：分割ミガキ
82	1区	1159土坑	黒色土器	椀(A類)	(12.7)	高台径 (7.8)	6.6	10C後半	内面：密なミガキ。見込みに往復する密な暗紋
83	1区	1159土坑	須恵器	鉢	(22.4)		(6.8)	10C後葉	窯窓跡。口縁部は内側に丸く肥厚
84	6区	1476土坑	土師器	皿	(9.6)		1.4	11C中 ～後葉	ての字状口縁皿
85	1区	1192土坑	土師器	羽釜	(20.7)		(9.4)	10C後半	粗律C型。口縁部内面：ヨコナデ。体部外面：タタキ 体部内面：板状工具によるケズリ気味のナデ

遺物番号	調査区	遺構・層	種類	器種	法量(cm)			時期	技法・特徴・備考		
					口径	底径	器高				
86	6区	1494土坑	土師器	鍋	(34.3)		(7.9)	12C	体部外面：ハケ 口縁部内面：ハケ、体部内面：ナデ		
87	3区	471墓	青白磁	合子(身)	5.4	5.6	1.95	12C	淡青白色の釉、底面と口縁受部以外に施釉		
88	4区	592墓	瓦器	楕	13.3	高台径4.7	3.7	13C前半	和泉型、内面：見込みに平行線暗紋		
89	4区	599墓	白磁	碗(IV類)	15.2	高台径7.25	6.8	12C	内面～外面上半に施釉、外面上半：ケズリ。底部に刀が付着		
92	3区	216井戸	土師器	小皿	9.35		2.0	11C後半	ての字状口縁皿、外面上に粘土接合痕あり		
93	3区	216井戸	土師器	小皿	9.65		1.8	11C後半	ての字状口縁皿		
94	3区	216井戸	土師器	小皿	9.75		1.45	11C後半	ての字状口縁皿、外面上に粘土接合痕あり		
95	3区	216井戸	土師器	小皿	9.3		1.6	11C後半	ての字状口縁皿、外面上に粘土接合痕あり		
96	3区	216井戸	土師器	小皿	9.5		1.85	11C後半	ての字状口縁皿、外面上に粘土接合痕あり		
97	3区	216井戸	土師器	小皿	9.3		1.75	11C後半	ての字状口縁皿、外面上に粘土接合痕あり		
98	3区	216井戸	瓦器	楕	(15.4)		(4.85)	11C後葉	椭葉型、内面のミガキ隙間なく密、外面：分割ミガキ		
99	3区	216井戸	瓦器	楕	15.0	高台径6.0	6.1	11C後葉	椭葉型、内外面のミガキ隙間なく密、外面：3分割ミガキ 内面：見込みに平行線暗紋、外見は黒色土器		
100	3区	217井戸	土師器	小皿	(8.4)		(1.25)	13C前半	口縁部二段ナデ		
101	3区	217井戸	瓦器	小皿	8.75		2.1	13C前半	外面に粘土接合痕あり		
102	3区	217井戸	瓦器	楕	(13.6)		(4.1)	13C前葉	椭葉型、内面：ミガキ、見込みに平行線暗紋		
103	3区	217井戸	瓦器	楕	(14.7)	高台径 (5.0)	(4.3)	13C前葉	和泉型、内面：ミガキ、見込みに平行線暗紋		
104	3区	217井戸	瓦器	楕	(14.5)	高台径 (5.5)	3.75	13C前葉	和泉型、内面：ミガキ、見込みに平行線暗紋		
105	3区	217井戸	瓦器	楕	(13.6)	高台径 (4.6)	4.2	13C前葉	和泉型、内面：ミガキ、見込みに平行線暗紋		
106	3区	217井戸	瓦器	楕	14.3	高台径4.8	3.9	13C前葉	和泉型、内面：ミガキ、見込みに平行線暗紋		
107	3区	217井戸	瓦器	楕	14.7	高台径4.5	4.85	13C前葉	和泉型、内面：ミガキ、見込みに平行線暗紋		
108	3区	217井戸	瓦器	楕	(14.4)	高台径5.4	4.2	13C前葉	和泉型、内面：ミガキ、見込みに平行線暗紋		
109	3区	217井戸	常滑焼	甕			(22.7)	12C後半	外面に珠紋+巴紋の押目窓		
110	3区	217井戸	輸入陶器	水注			(7.2)	(9.95)	13C前半	外面のほぼ全面に施釉（ただし窓は剥落） 体部外面上半：ケズリ 施主は褐色、施釉が被っていない表面は赤褐色	
111	3区	217井戸	常滑焼	三筋壺	体部最大径 (19.8)		(12.25)	12C後半	外面：体部の沈線は複線		
113	3区	264井戸	土師器	羽釜	(28.0)	跨節径 (34.6)	(9.6)	13C	外面：ハケ（跨より下は縦位、上は横位） 内面：板状工具によるナデ		
114	3区	301井戸	土師器	小皿	9.45		1.75	12C後葉	口縁部二段ナデ		
115	3区	301井戸	土師器	小皿	9.0		2.2	12C後葉	口縁部二段ナデ		
116	3区	301井戸	土師器	小皿	9.55		2.25	12C後葉	口縁部四面に凹み		
117	3区	301井戸	土師器	小皿	9.15		1.7	12C後葉	口縁部二段ナデ		
118	3区	301井戸	土師器	小皿	9.6		2.0	12C後葉	口縁部二段ナデ、外面：粘土接合痕あり		
119	3区	301井戸	土師器	大皿	14.1		2.9	12C後葉～ 13C前葉	口縁端部面取り、端面少し凹む		
120	3区	301井戸	瓦器	小皿	8.95		2.1	12C後半	和泉型、外面に粘土接合痕あり		
121	3区	301井戸	瓦器	楕	15.4	高台径 (4.8)	5.2	12C後半	和泉型、見込みにジグザグ状暗紋		
122	3区	301井戸	瓦器	楕	14.5	高台径 (5.0)	5.05	12C後半	和泉型、見込みに平行線暗紋		
123	3区	301井戸	瓦器	楕	14.3	高台径4.4	5.9	12C後半	和泉型、外面上部にのみミガキ		
124	3区	301井戸	瓦器	楕	14.6	高台径4.7	5.2	12C後半	和泉型、見込みにジグザグ状暗紋		
125	3区	301井戸	瓦器	楕	(14.8)	高台径 (5.4)	5.25	12C後半	和泉型、見込みに平行線暗紋		
126	3区	301井戸	瓦器	楕	(15.7)	高台径 (4.7)	(4.8)	12C後半	和泉型、見込みに平行線暗紋		
127	3区	301井戸	瓦器	楕	15.3	高台径5.2	5.9	12C中～後葉	和泉型、見込みに細い平行線暗紋		
128	3区	301井戸	瓦器	楕	15.3	高台径5.0	5.4	12C中～後葉	和泉型、外面：2/3程度までミガキ		
129	3区	301井戸	瓦器	楕	(15.5)	高台径5.3	5.05	12C中～後葉	和泉型		
130	3区	301井戸	瓦器	楕	(15.5)	高台径 (5.0)	4.95	12C中～後葉	和泉型、外面：2/3程度まで粗いミガキ 内面：見込みに不定方向の暗紋		
131	3区	301井戸	瓦器	楕	15.3	高台径5.1	5.2	12C中～後葉	和泉型、外面：2/3程度までミガキ、口縁部ヨコナデなし 見込みにラセン状？の暗紋		
132	3区	301井戸	白磁	碗(VI-2類)	15.1	高台径6.9	5.2	12C中～後葉	外面下半：ヘラケズリ、内面：口縁内側に明瞭な段線 見込み部の目筋剥ぎ		
133	3区	301井戸	白磁	碗(VI類)	16.2	高台径6.85	6.5	12C	外面下半：ケズリ、体部下半に外側からの穿孔あり 内面～外面上半に施釉		
134	3区	301井戸	土師器	鍋	25.3	体部最大径 26.4	(14.5)	12C後半	体部外面：下半にハケ、全体に煤付着、体部内面：ハケ 口縁部内面：粗いハケ		

遺物 番号	調査 区	遺構・層	種類	器種	法量(cm)			時期	技法・特徴・解説
					口径	底径	器高		
135	3区	301 井戸	土師器	羽釜	(27.4)	体部最大径 (33.6)	(21.3)	12C後葉 ～13C	押津E型、口縁部内外面：ヨコナデ 胴部外面：ナデ。外面に煤付着
136	3区	301 井戸	土師器	羽釜	(27.2)	体部最大径 (34.8)	(17.9)	12C後葉 ～13C	押津E型、口縁部内外面：ヨコナデ 胴部外面：ナデ。外面に煤付着
137	4区	511 井戸	瓦質土器	鍋	(29.4)		(9.5)	13C	内面～口縁部外面：ヨコナデ。外面に炭化物多く付着
138	4区	512 井戸	白磁	碗(V類)	(16.0)		(4.2)	12C	内外面に施釉
139	4区	512 井戸	常滑焼	甕			(5.3)	12C後半	外面：珠紋+巴紋の押印紋。217 井戸出土品と同一個体か
140	4区	512 井戸	須恵器	片口鉢	27.1	8.55	10.7	12C末～ 13C初頭	東播系 内外面：ヨコナデ後斜め方向のナデ。底部糸切り
142	5区	1215 井戸	土師器	大皿	(15.2)		2.5	12C前葉	口縁部二段ナデ
143	5区	1215 井戸	瓦器	椀		高台径 (6.0)	(2.5)	12C前葉	和泉型。外面：高台近くまでミガキ 内面：見込みまで密なミガキ。見込みに×の線刻
144	5区	1215 井戸	瓦器	椀		高台径 (5.8)	(1.05)	12C前半	和泉型。底部外面に×の線刻
145	5区	1215 井戸	瓦器	椀	15.3	高台径 6.0	5.7	12C前半	和泉型。外面：3/4程度までミガキ 見込みにジグザグ状暗紋
146	5区	1215 井戸	綠釉陶器	羽釜？	(9.8)		(2.0)	9C？	胎土：灰白色で硬質 内外面に淡い黄緑色の釉
147	5区	1215 井戸	白磁	碗(V類?)		高台径 (7.4)	(2.7)	12C	底部外面以外に施釉
148	5区	1274 井戸	土師器	小皿	(8.8)		1.6	11C後半	ての字状口縁皿
149	5区	1274 井戸	土師器	小皿	9.0		1.6	12C後半	口縁部二段ナデ
150	5区	1274 井戸	土師器	小皿	9.3		1.6	12C後半	口縁部二段ナデ。外面に粘土接合痕あり
151	5区	1274 井戸	土師器	小皿	9.7		2.0	12C後半	口縁部二段ナデ。外面に粘土接合痕あり
152	5区	1274 井戸	土師器	小皿	9.4		2.0	12C後葉	口縁部二段ナデ
153	5区	1274 井戸	土師器	小皿	(9.0)		1.6	12C後葉	口縁部二段ナデ
154	5区	1274 井戸	瓦器	椀	(14.4)		(3.8)	12C後半	和泉型。外面上部にミガキ
155	5区	1274 井戸	瓦器	椀	(13.6)		(4.4)	12C後半	和泉型。外面上部に3条程度のミガキ 見込みに平行線暗紋
156	5区	1274 井戸	瓦器	椀	14.8	高台径 5.4	5.0	12C後葉	和泉型。外面上部に1本のミガキ。見込みに平行線暗紋
157	5区	1274 井戸	瓦器	椀	15.5	高台径 5.3	5.25	12C後葉	和泉型。外面：1/3～1/2程度まで粗いミガキ 内面：表面摩滅のためミガキ不明瞭
158	5区	1274 井戸	瓦器	椀	15.4	高台径 4.5	5.5	12C後半	和泉型。口縁部外面に明瞭な段。口縁部外面のヨコナデはその後まで及ばない
159	5区	1274 井戸	瓦器	椀	15.7	高台径 (5.4)	4.9	12C後葉	和泉型
160	5区	1274 井戸	瓦器	椀	14.7	高台径 5.0	5.5	12C後半	和泉型。見込みにジグザグ状暗紋
161	5区	1274 井戸	瓦器	椀	15.4	高台径 4.4	5.5	12C後半	和泉型。見込みに暗紋なし
162	5区	1274 井戸	瓦器	椀	(15.2)	高台径 (5.2)	5.0	12C後葉	和泉型
163	5区	1274 井戸	瓦器	椀	15.6	高台径 4.5	5.6	12C後葉	和泉型。外面上半に3条程度のミガキ
164	5区	1274 井戸	瓦器	小皿	8.7		1.7	12C後半	和泉型
165	5区	1274 井戸	瓦器	小皿	9.2		2.3	12C後半	和泉型
166	5区	1274 井戸	瓦器	小皿	8.6		2.1	12C後半	和泉型。見込みに平行線暗紋
167	5区	1274 井戸	白磁	碗(V類)			(4.2)	12C	内外面に施釉
168	5区	1274 井戸	白磁	碗(V類)			(3.5)	12C	内外面に施釉
169	5区	1274 井戸	白磁	碗(V類)	(15.9)		(2.9)	12C	内面～外面上半に施釉
170	5区	1274 井戸	白磁	碗(V類)	(15.9)		(2.9)	12C	内外面に施釉
171	5区	1274 井戸	白磁	碗(V類)		高台径 (7.2)	(2.2)	12C	高台～底部外面以外に施釉
172	5区	1274 井戸	土師器	鍋	(26.2)		(6.4)	12C後半	体部外面：ハケ。外面全体に厚く煤付着 口縁部内面～体部内面：ハケ
173	5区	1274 井戸	土師器	鍋	(27.8)		(7.8)	12C後半	口縁部内面～体部外面：ハケ。全体に煤付着 体部内面：板状工具によるナデ
184	3区	162溝	須恵器	椀		(7.0)	(1.6)	12C前半	底部系切り、側面未調整。内面の段は不明瞭
185	3区	162溝	土師器	皿	(10.2)		(1.3)	12C前半	口縁部二段ナデ
186	3区	162溝	白磁	碗(V類)			(2.9)	12C	内外面に施釉
187	3区	162溝	瓦器	椀	14.8	高台径 5.6	5.8	12C前半	和泉型。外面2/3程度までミガキ 見込みに密なジグザグ状暗紋
188	3区	162溝	瓦器	椀	15.8	高台径 5.6	6.0	12C前半	和泉型。外面2/3程度までミガキ 内面ミガキは隙間目立つ
189	4区	500溝	瓦器	椀	(14.5)	高台径 (4.7)	5.0	13C前半	和泉型。表面摩滅のためミガキ等不明
190	4区	500溝	土師器	小皿	8.0		1.6	13C	口縁部二段ナデ
191	4区	504溝	瓦器	椀	(13.4)	高台径 (4.0)	3.5	13C中葉	和泉型。見込みに平行線暗紋

遺物番号	調査区	遺構・層	種類	器種	法量(cm)			時期	技法・特徴・備考
					口径	底径	器高		
192	4区	504溝	瓦器	壺	14.3	高台径 5.0	3.7	13C前半	表面磨滅のためミガキ等不明瞭
193	4区	504溝	白磁	碗(Ⅵ類)			(3.9)	12C後~13C前葉	内面~外面上半に施釉 内面:草花紋、見込みに段
194	4区	586溝	瓦器	壺	(14.9)	高台径 (4.4)	3.75	13C前半	表面磨滅のためミガキ等不明
195	4区	587溝	土師器	大皿	(13.1)		(1.95)	13C前半	口縁部二段ナデ
196	4区	587溝	瓦器	壺			3.8	13C前半	
197	3区	3045土坑 (豊穴建物3)	弥生土器	広口壺	(17.8)		(8.3)	II	外面:ハケ後ミガキ、内面:(口縁部~頸部)ハケ
198	3区	3045土坑 (豊穴建物3)	弥生土器	広口壺	(21.2)		(9.7)	II	口縁部周辺:ヨコナデ。頸部外面:ミガキ。肩部にヘラ彫直線紋。頸部内面上半:ハケ。〃下半:板状工具によるナデ
199	3区	3083柱穴 (豊穴建物7)	弥生土器	広口壺	(22.4)		(12.45)	III後~IV初	口縁部:ヨコナデ。頸部~体部外面:ハケ。頸部に突帶 頸部内面:ハケ後ナデか?
202	3区	豊穴建物8	弥生土器	広口壺	(33.0)		(7.1)	II	表面磨滅のため調整不明。口縁端部下端:キザミ
203	3区	豊穴建物8	弥生土器	壺	体部最大径 (22.0)	6.7	(20.6)	中期	表面磨滅のため調整不明。内面:ナデ上げ
204	3区	豊穴建物8	弥生土器	鉢	(18.5)	8.3	17.3	中期前半?	表面磨滅のため調整不明。鉢の製作途中で鉢に変更か?
205	4区	3196柱穴 (豊穴建物9)	弥生土器	甕	(13.0)		(6.6)	IV	口縁部:ヨコナデ。外面:ハケ。内面:ナデ
206	3区	3452柱穴 (豊穴建物14)	弥生土器	甕	(15.2)		(9.2)	中期前半	外面:ハケ。内面:表面磨滅のため調整不明
207	3区	3394土坑 (豊穴建物12)	弥生土器	高杯		脚部6.8	(5.8)	V	脚部外面:ミガキ。円孔3方
208	3区	3394土坑 (豊穴建物12)	弥生土器	器台		脚部 (8.6)	(9.3)	V	外面:ハケ。3段の円孔が3方
209	3区	3427土坑 (豊穴建物16内)	弥生土器	広口壺	(16.0)	体部最大径 (32.6)	(22.4)	IV末	漸戻内の影響。口縁部:浅い凹線紋 外面:全体にハケ。頸部と肩部にキザミ、キザミを避けてミガキ。内面:指捺され明瞭。下半ケズリ
211	3区	3282ビット (豊穴建物19)	弥生土器	鉢	9.2	3.6	7.4	中期?	内外面:ナデ
212	3区	3282ビット (豊穴建物19)	弥生土器	甕	(11.9)		(11.9)	V	外面:タタキ後ナデか?(タタキ目不明瞭)
213	1区	3952ビット (豊穴建物18)	弥生土器	高杯	30.8	脚部 (18.6)	19.65	V	杯部内外面~脚部外面:ミガキ 脚部円孔4方か
214	1区	3952ビット (豊穴建物18)	弥生土器	高杯	(17.8)	脚部 (13.25)	11.2	V	杯部外面~脚部外面:細かいハケ 杯部内面:粗いハケ。脚部円孔4方
215	1区	3952ビット (豊穴建物18)	弥生土器	広口壺	(12.25)	5.75	23.05	V前	口縁部外面:ハケ。頸部外面~体部外面:ミガキ 体部内面上半ハケ。〃下半ハケ後ナデ
217	1区	3955ビット (豊穴建物18内)	弥生土器	甕	12.0	3.9	13.4	IV末~V初	口縁部ヨコナデ。体部内外面:細かいハケ
218	5区	4251ビット	弥生土器	壺	体部最大径 (21.6)	6.6	(17.7)	II	外面:ハケ後ミガキ 内面:板状工具によるナデ
219	3区	4267ビット	弥生土器	甕	(10.2)		(6.1)	IV	口縁部:ヨコナデ。内面:ハケ 外面:表面磨滅のため調整不明瞭。板状工具によるナデか?
221	3区	3124凹み	弥生土器	把手付鉢		4.2	(4.9)	IV	内外面:ミガキ
222	3区	3124凹み	弥生土器	甕	(15.2)		(7.55)	中期前半	口縁部:ヨコナデ。外面:ハケ。内面:板状工具によるナデ
223	3区	3138土坑	土師器	小型丸底甕	(11.2)		8.0	布留1式	口縁部:ヨコナデ。外面:下半ハケ。内面:ケズリ
224	3区	3138土坑	土師器	甕(吉蘭系)	(13.0)		(5.25)	布留1式	口縁部外面~体部外面:ハケ。体部内面:ケズリ後ナデ
225	3区	3188土坑	弥生土器	壺	13.0	天井部径 4.35	6.35	中期	内外面:ハケ。天井部に粗いハケ
226	3区	3284土坑	弥生土器	高杯	(24.0)		(8.1)	IV末~V初	口縁部:ヨコナデ。外面:ミガキ。内面:ハケ
227	3区	3286土坑	弥生土器	甕	(20.6)		(8.0)	II前	口縁部内外面:ハケ後ヨコナデ。口縁部下端にキザミ 体部外面:ハケ後櫛彫直線紋1帯。〃内面:ハケ後ナデ
228	3区	3286土坑	弥生土器	甕	(20.4)		(14.65)	II前	口縁部:ヨコナデ。体部外面:ハケ。頸部に櫛彫直線紋2帯 体部内面:ナデ
229	3区	3286土坑	弥生土器	甕	(21.0)		(18.3)	II前	口縁部:ヨコナデ。体部外面:ハケあるいは板状工具によるナデ。頸部に櫛彫直線紋3帯。体部内面:ナデ
230	3区	3326土坑	弥生土器	甕	(18.2)		(4.75)	II	口縁部内面:ハケ。体部外面:ハケ。〃内面:ナデ 生駒山西麓在胎上。外面:櫛彫直線紋4帯以上
231	3区	3333土坑	弥生土器	鉢	(19.0)		(6.0)	II	内面:表面磨滅のため調整不明
232	3区	3359土坑	弥生土器	器台	(13.8)	脚台径 (15.6)	16.6	V前	受部内外面:ナデ。部外面:細かいハケ 部内面:板状工具によるナデ。円孔一段5方
233	3区	3359土坑	弥生土器	壺	体部最大径 (19.9)	6.4	(22.5)	V	体部外面:ハケ後全面ミガキ。〃内面:ケズリ 体部下半に穿孔あり
234	4区	3579土坑	弥生土器	広口壺	体部最大径 (24.3)	(8.8)	(32.9)	I末	体部内外面:摩滅のためミガキかナデか不明瞭。外面頸部~ 体部に貼付突帶+キザミ。肩部の(縦)突帶間に小竹管紋
235	2区	3700土坑	弥生土器	甕	24.8	(6.75)	28.3	II	口縁部内面:ハケ。体部外面:ハケ。〃内面:ナデ
236	1区	3933土坑	弥生土器	広口壺	(25.4)		(7.95)	II	表面磨滅のため調整不明瞭。頸部外面:ハケ後ミガキ 頸部内面上半:ミガキ。〃下半:ハケか?
237	1区	3933土坑	弥生土器	台付鉢		脚台径 (10.3)	(6.1)	II	表面磨滅のため調整不明瞭。台部内面:ハケ

遺物 番号	調査 区	遺構・層	種類	器種	法量(cm)			時期	技 法・特 徴・解 考
					口径	底径	器高		
238	5区	4170土坑	弥生土器	広口壺	11.7		(3.4)	V	口縁部～頸部内面：ヨコナデ。頸部外面：ミガキ
239	5区	4170土坑	弥生土器	甕	(17.6)		(4.3)	II	口縁部端面に櫛描波状紋。口縁部内面：ハケ 頸部外面～体部外面：ハケ
240	5区	4170土坑	弥生土器	長頸甕	10.7		(11.35)	V	口縁部：ヨコナデ。頸部外面：ハケ。〃内面：ナデ
241	5区	4170土坑	弥生土器	長頸甕	(11.0)		(9.9)	V	口縁部：ヨコナデ（強く筋状に残る）。頸部外面：ハケ 〃内面：ナデ
242	5区	4170土坑	弥生土器	長頸甕	(10.8)		(10.0)	V	口縁部：ヨコナデ（一部に横方向のハケ）。頸部外面：ハケ 〃内面：ナデ（縱方向の細かなナデもあり）
243	5区	4170土坑	弥生土器	ミニチュア 高杯			(5.35)	中期	外面：ミガキ後脚柱部に線彫直線紋2帯 底部に2段の小円孔（上段8方、下段7方）
244	5区	4170土坑	弥生土器	高杯			(9.5)	V	杯部外面～脚部外面：ミガキ
245	5区	4170土坑	弥生土器	甕	(14.2)		(13.1)	V	口縁部：ヨコナデ。外面：タタキ。頸部附近はハケ 内面：板状工具によるナデ。下半は工具の目が明瞭～ハケか
246	5区	4170土坑	弥生土器	甕	(18.6)		(6.35)	V初	口縁部：ヨコナデ。〃端面四線紋。体部内面：ナデ 体部外面：タタキ後ナデか？
247	5区	4170土坑	弥生土器	器台		(14.8)	(11.3)	V前	外面：ミガキ。内面：ハケ。据端部ヨコナデ 端面に凸線状の深い溝み、円孔1段4方
248	5区	4170土坑	弥生土器	器台		(15.0)	(13.9)	V前	外面：ハケ。内面：下平ハケ。据端面に四線状の浅い溝み 円孔1段4方
249	5区	4170土坑	弥生土器	台付甕		脚台径 (11.4)	(6.5)	V	生駒山西麓産陶土、表面摩滅のため調整不明瞭 内面：脚部ハケ、円孔7方
250	5区	4170土坑	弥生土器	高杯		脚部径 (14.3)	(6.7)	V	外面：ハケ後ミガキ（削離した接合箇所にハケ目あり） 内面：削離のため調整不明瞭。粘土を薄く貼り足す。円孔4方
251	5区	4187土坑	弥生土器	広口壺	14.6		(5.8)	V前	口縁部内面：ミガキ。〃外面：ハケ。頸部外面：ミガキ
252	5区	4187土坑	弥生土器	甕 (近江型)	体部最大径 (13.7)	(3.7)	(10.45)	V	近江（山城）からの搬入。体部内面下半：ハケ 外面肩部：櫛描直線紋+列点紋。体部外面下半：ハケ。部分的に工具の目が不明瞭で板ナデ状になる箇所あり。 最大径付近に太い1条の波状紋
253	5区	4187土坑	弥生土器	高杯	(20.7)		(5.1)	V前	表面磨滅のため調整不明瞭。口縁部に浅い四線状の凹みあり
254	5区	4187土坑	弥生土器	高杯			(9.3)	V前	外面：ハケ後端などミガキ。円孔3方。据部内面：ハケ
255	5区	4187土坑	弥生土器	高杯	(26.0)	脚部径 (14.6)	15.65	V前	表面磨滅のため調整不明瞭。口縁部：ヨコナデ。杯部外面～脚部外面：ミガキ。杯部内面：ミガキ。脚部に円孔4方
257	6区	4553土坑	弥生土器	甕	体部最大径 28.95	7.9	(22.35)	中期後半	外面上半：ハケ後櫛描直線紋・波状紋 下面下半：ケズリ後ミガキ。内面：板状工具によるナデ
258	3区	3082土坑	弥生土器	広口壺	(11.0)		(4.9)	V	口縁部：ヨコナデ。体部外面～頸部：ハケ。肩部に竹管紋 体部内面：ハケ後ナデか？
259	3区	3082土坑	弥生土器	広口壺	(12.0)		(6.1)	V後	口縁部内外面：ハケ後ヨコナデ。体部外面：ハケ後ミガキ 肩部に竹管紋。内面：ハケ。内面：ハケ
260	3区	3082土坑	弥生土器	長頸甕	(12.5)		(14.8)	V	口縁部：ヨコナデ。頸部外面～体部外面：ハケ 頸部内面：ハケあるいは板状工具によるナデ。成形時のナデ痕明瞭。体部内面：ナデ
261	3区	3082土坑	弥生土器	甕	12.7	5.3	17.5	V	体部外面：タタキ。下平はタタキ後僅なハケ。穿孔あり 口縁部～体部内面：板状工具によるナデ
262	3区	3082土坑	弥生土器	甕	(14.4)		(7.2)	V	口縁部：ヨコナデ。体部外面：タタキ後ハケ。〃内面：ハケ
263	3区	3082土坑	弥生土器	甕	(14.0)		(5.7)	V	口縁部：ヨコナデ。体部外面：タタキ。〃内面：ナデ
264	3区	3082土坑	弥生土器	甕	体部最大径 (9.5)	3.9	(9.6)	V	口縁部内面に指圧圧痕残る。内外面：ナデ
265	3区	3082土坑	弥生土器	高杯	18.2	脚部径11.9	14.9	V	表面磨滅のため調整不明瞭。杯部内外面：ハケ後ミガキ（外 面ミガキはやや粗）。脚部外面：ハケ。円孔4方
266	3区	3082土坑	弥生土器	高杯	(25.6)		(7.6)	V	杯部内外面：ミガキ
267	3区	3082土坑	弥生土器	高杯		脚部径 (13.2)	(9.8)	V	杯部内面～外面全体：ハケ 脚肚部内面：一部ハケ。脚輪部内面：ナデ。円孔5方
268	3区	3082土坑	弥生土器	高杯			13.8 (11.9)	V	杯部内外面：ハケ後ミガキ。脚部外面：ミガキ 〃内面：ナデ
269	3区	3082土坑	弥生土器	高杯	14.0	脚部径9.6	9.9	V	表面磨滅のため調整不明瞭。杯部外面：ハケ。円孔4方
270	3区	3082土坑	弥生土器	器台	(28.8)		(3.0)	V	口縁部上面と端面：櫛描波状紋。内面：ハケ後粗いミガキ
271	3区	3082土坑	弥生土器	甕 (近江型)	体部最大径 (16.0)		(9.3)	V	近江（山城）からの搬入。外面：ハケ後櫛描直線紋+櫛描列 点紋+櫛描波状紋。内面：ナデ
272	3区	3082土坑	弥生土器	器台			(14.5)	V	受部上面～外面全体：ハケ後ミガキ 脚部内面～瓶部内面：ハケ。据部に円孔4方
273	3区	3082土坑	弥生土器	器台	(20.0)		(13.05)	V	受部内面：ハケ後ミガキ。外面：ハケ後脚柱部のみミガキ。口 縁部外面はヨコナデ。脚部内面～脚部内面：ナデ 瓶部内面下端はヨコナデ。円孔3方
274	5区	3001溝	弥生土器	広口壺	8.1	5.1	16.05	IV初	口縁部内面：ハケ後ナデ。体部内面：板状工具によるナデ 体部外面上半：櫛描波状紋・直線紋+蘭状紋 〃下半ミガキ。底部に木葉紋
275	3区	3001溝	弥生土器	広口（短颈） 壺	(8.0)	5.0	16.1	II	外面：ハケ。肩部内面：ハケ
276	5区	3001溝と4142溝 の合流部	弥生土器	広口壺	(9.4)	4.4	15.2	II	頸部～肩部外面：櫛描直線紋3帯（上2帯は途中蘭状紋 に静止する箇所あり）。体部下半：ハケ後ミガキ 内面：最大径付近にハケ

遺物番号	調査区	遺構・層	種類	基盤	法量(cm)			時期	技法・特徴・備考	
					口径	底径	器高			
277	5区	3001溝	弥生土器	広口壺	7.2	5.4	14.5	II	口縁端部下端:キザミ。肩部:櫛描直線紋1帯+波状紋2帯(波状紋は揺れ幅が狭いため巻状紋風となる)。体部下半:ミガキ。内面:(ハケ後?)ナデ(一部にハケ目が認められる)	
278	5区	3001溝	弥生土器	広口壺	10.9		(5.6)	II~III初	口縁部上・下端:キザミ、体部内面:ナデか? 外面及び頸部内面:板状工具によるナデ	
279	5区	3001溝	弥生土器	広口壺	11.1		(5.1)	III後	口縁部端面:櫛描波状紋。〃上面:櫛描同心円紋。 頸部:断面三角形の貼付突帯。縦位の棒状浮紋	
280	5区	3001溝	弥生土器	広口壺	(17.0)		(4.4)	III前	口縁部:ヨコナデ。〃端部下端:キザミ。 頸部:櫛描直線紋	
281	5区	3001溝	弥生土器	広口壺	13.9		(11.0)	II~III初	口縁部内面~頸部外面:ハケ。 体部外面:ハケ後ミガキ。 頸部内面~体部内面:ナデ	
282	3区	3001溝	弥生土器	広口壺	10.2		(4.9)	中期後半	口縁部上・下端:キザミ。 頸部:中央波打った櫛描直線紋。 口縁部内面に円形浮紋3箇所	
283	3区	3001溝	弥生土器	広口壺	11.45		(7.85)	V	表面磨滅のため調整不明瞭。 口縁部内外面:ヨコナデ後円形浮紋2個×4箇所。 頸部外面:ハケ。 肩部に円形浮紋3箇+π×6箇所	
284	3区	3001溝	弥生土器	広口壺	(14.2)		(6.55)	V初	生駒山西麓鹿島上。 外面:ナデ。 内面:磨滅のため調整不明	
285	3区	3001溝	弥生土器	広口壺	(16.6)		(7.5)	III後	口縁部:ヨコナデ後。 端面に櫛描波状紋+円形浮紋。 上面に巻形紋。 頸部:ハケ後。 断面三角形の貼付突帯2条	
286	3区	3001溝	弥生土器	細頸壺	(11.6)		(8.6)	中期前半	口縁部外側:ヨコナデ後。 半円状の巻形紋。 外面:粗いハケ後。 頸部に櫛描直線紋。 内面:表面磨滅のため調整不明	
287	5区	3001溝	弥生土器	広口壺	16.4		(9.5)	III前	口縁部:ヨコナデ。 外面:ハケ後複位の櫛描波状紋2帯を左右1対	
288	5区	3001溝	弥生土器	広口壺	(20.8)		(7.6)	III後	表面磨滅のため調整不明。 口縁端部内面~端面:櫛描波状紋+円形浮紋+キザミ。 頸部に貼付突帯	
289	3区	3001溝	弥生土器	長頸壺	(13.9)		(7.0)	III前	外面:ハケ後。 口縁部直下に断面三角形の貼付突帯2条(補修系?)。 口縁端面~突帯下にかけて櫛描波状紋3帯。 内面上端:ヨコナデ。〃下部:ハケ後ナデ	
290	3区	3001溝	弥生土器	広口壺	15.0		(6.1)	V初	口縁部内面~端面に斜格子紋。 頸部内外面:ナデ。 頸部に断面三角形の突帯	
291	1区	3001溝	弥生土器	広口壺	18.8		(9.6)	III前	口縁部内面~端面に斜格子紋。 頸部内外面:ナデ	
292	3区	3001溝	弥生土器	広口壺	17.6		(5.8)	V初	表面磨滅のため調整不明瞭。 口縁部:ヨコナデ後。 端面及び内面に小竹管紋。 頸部外面:ハケ後ナデ。〃内面:ナデ	
293	3区	3001溝	弥生土器	広口壺	(32.7)		(8.8)	III後	口縁部:ヨコナデ。 端面に円形浮紋。 上面に2重の巻形紋。 頸部内面:ナデ。〃外面:ハケ	
294	3区	3001溝	弥生土器	広口壺	17.3		(7.8)	III前	口縁部内面:ハケ。 下端にキザミ。 頸部外面:ハケ	
295	3区	3001溝	弥生土器	広口壺	(31.4)		(5.15)	II~III前	口縁部端面下端にキザミ。 外面:ナデ。 内面:ハケ	
296	5区	3001溝	弥生土器	細頸壺	5.9	5.9	15.6	IV	口縁端面:2個1対の円形浮紋が4箇所。 体部外面上半:4段5連の複合縦型流水紋。〃下半:ミガキ。 体部内面下半:ハケ	
297	1区	3001溝	弥生土器	広口壺	(13.2)		(4.7)	IV前	口縁端面:四線紋+円形浮紋。〃上面:櫛描列点紋。 頸部内面:ナデ	
298	1区	3001溝	弥生土器	広口壺	14.7	体部最大径 (35.0)	(23.3)	III後 ~IV前	口縁部外面:斜格子紋+円形浮紋。〃上面:櫛描斜突紋。 体部外面:櫛描波状紋+直線紋+斜格子紋。 体部内面下半:ナデ。〃下半:ハケ	
299	5区	3001溝	弥生土器	細頸壺	(6.2)	体部最大径 (16.2)	(21.5)	III前	頸部~体部外面上半:ハケ→櫛描直線紋+波状紋→櫛描斜間ミガキ。〃下半:ハケ後ミガキ	
300	5区	3001溝	弥生土器	細頸壺	(6.3)		(9.3)	III前	口縁部:ヨコナデ後。 端部にキザミ。 外面:複合櫛による直線紋7帯(巻状紋風に轡を静止する箇所あり)。 内面:ナデ(工具の研痕あり)	
301	1区	3001溝	弥生土器	細頸壺	(6.3)		(9.6)	III前	表面磨滅のため調整不明。 口縁端部にキザミ。 頸部外面:複合櫛による巻状紋6帯	
302	5区	3001溝	弥生土器	無頸壺	(14.7)		(4.3)	中期後半	口縁部:ヨコナデ。 箍用の小円孔あり。 口縁部直下に断面三角形の貼付突帯2条。 体部外面:ミガキか?〃内面:ハケ	
303	3区	3001溝	弥生土器	無頸壺	(14.8)		(8.15)	V前?	東海からの搬入品。 体部外面:横竪+縦位の突帯(被覆状突帯)。 横位の突帯間にミガキ	
304	3区	3001溝	弥生土器	無頸壺	(10.7)	体部最大径 (17.2)	(11.7)	V初	口縁部:ヨコナデ。 箍用の小孔2ヶ(片側のみ)あり。 外面:表面磨滅のため調整不明。 内面:ナデ	
305	3区	3001溝	弥生土器	短頸壺	体部最大径 (13.8)	(5.4)	(19.1)	IV末 ~V初	外面:ハケ後ミガキ(ミガキは上半は粗く、下半は密)。 内面上半:ナデ。〃下半:ケズリ	
306	5区	3001溝	弥生土器	広口壺?		5.0	(23.0)	II	口縁部内面:ハケ。 頸部~胴部外面:ハケ。 体部外面:ハケ後ミガキか?(表面磨滅のため不明瞭)。 体部内面:ナデ	
307	1区	3001溝	弥生土器	長頸壺	(24.6)		(30.0)	V初	口縁部内面:ハケ。 外面:ハケ。 内面:ナデ	
308	3区	3001溝	弥生土器	盛			(4.6)	IV前	外面:櫛描流水紋。 内面:ナデ	
309	3区	3001溝	弥生土器	盛			(7.7)	III前	外面:ハケ後。 櫛描斜紋+同心円紋。 内面:ハケ	
310	1区	3001溝	弥生土器	盛				IV後	外面:櫛描直線紋+波状紋。 U字状の連弧紋。 内面:ナデ	
311	5区	3001溝	弥生土器	広口壺	(18.4)		(9.7)	III前	口縁部:ヨコナデ。〃外面:櫛描波状紋。 頸部外面:ハケ後。 櫛描直線紋。〃内面:表面磨滅のため調整不明	
312	1区	3001溝	弥生土器	広口壺	(29.5)		(10.7)	IV前	生駒山西麓鹿島上。 口縁部内面:ヨコナデ。〃外面:櫛描巻状紋2帯。 頸部内面:ハケ。 外面:ハケ後櫛描直線紋	

遺物番号	調査区	遺構・層	種類	器種	法量(cm)			時期	技法・特徴・備考
					口径	底径	器高		
313	3区	3001溝	弥生土器	広口壺	(30.3)		(9.4)	III後	頸部外面：ハケ後ナデ消すが、ハケ目は完全に消えずには残る。 内面：粗いハケ。口縁部内外面：ナデ（内面にわずかにハケ目残る）
314	3区	3001溝	弥生土器	広口壺	(24.2)		(23.8)	III後	生駒山西麓產胎上。口縁部外面：櫛描織状紋2帯。 頸部：櫛描直線紋5帯+葉状紋1帯。体部外面：ミガキ
315	3区	3001溝	弥生土器	広口（有段口縁）壺	(23.0)		(12.0)	III後	口縁部：ヨコナデ。頸部～体部外面：ハケ。 内面：板状工具によるナデ。頸部にキザミ目突帯
316	3区	3001溝	弥生土器	広口（有段口縁）壺	(28.8)		(12.0)	III後	全体に表面磨滅のため調整不明瞭。口縁部：ヨコナデ 頸部外面：ハケ+突帶
317	3区	3001溝	弥生土器	広口壺		6.3	(18.2)	IV未	生駒山西麓產胎上。外面：ミガキ（接合部毎にミガキの方向を変える）。内面：一部にハケ目残る。中央部付近に板状工具の圧痕あり
318	1区	3001溝	弥生土器	広口（有段口縁）壺	(28.6)		(13.3)	IV	表面磨滅のため調整不明瞭。頸部外面：ハケ+突帶
319	5区	3001溝	弥生土器	広口（有段口縁）壺	(35.8)		(6.0)	IV前	口縁部：ヨコナデ。頸部内外面：ハケ
320	1区	3001溝	弥生土器	腰薪	(14.2)	天井部径 5.6	6.65	中期	天井潤ヘラ描斜格子紋。外面上部：ナデ 外面上半～内面：ハケ
321	5区	3001溝	弥生土器	腰薪	(17.0)	天井部径 5.0	6.1	中期前半	内外面：ハケ。指頭圧痕多くあり
322	5区	3001溝	弥生土器	腰薪		天井部径 6.65	(10.1)	中期前半	表面磨滅のため調整不明瞭
323	5区	3001溝と4142溝 の合流部	弥生土器	ミニチュア 壺？	8.4	5.1	10.8	II	内外面全体に粘土紐接合痕が明瞭に残る 口縁部内面：ハケ。底部：木葉紋
324	3区	3001溝	弥生土器	ミニチュア 壺	3.5	3.35	6.6	中期	
325	3区	3001溝	弥生土器	ミニチュア 壺	4.1	3.1	7.0	中期後半か	外面：工具の圧痕多數
326	5区	3001溝	弥生土器	ミニチュア 壺	3.2	2.35	5.7	中期後半か	外面：表面磨滅のため調整不明瞭。ミガキか？ 内面：ハケ後成形のためのナデ
327	5区	3001溝	弥生土器	鉢	(12.8)		(8.5)	III後	口縁部：ヨコナデ。体部外面：ハケ。内面：ナデ
328	5区	3001溝	弥生土器	鉢	(14.6)		(9.8)	IV	口縁部内面～体部外面：ハケ 内面：ハケ後下部は板状工具によるナデ
329	3区	3001溝	弥生土器	鉢	(14.1)		(13.4)	II	口縁部内面～体部外面：ハケ 体部内面：板状工具によるナデか？
330	3区	3001溝	弥生土器	鉢	(18.6)		(12.7)	III	内外面：ハケ
331	1区	3001溝	弥生土器	鉢	(30.5)		(8.6)	III後	表面磨滅のため調整不明瞭。口縁部：ヨコナデ。 頸部：キザミ目突帯（キザミの工具痕が体部にまで及ぶ）
332	5区	3001溝	弥生土器	鉢	(32.6)		(8.8)	II	口縁部下頸：キザミ 口縁部内面～体部外面：ハケ。体部内面：ナデ
333	1区	3001溝	弥生土器	鉢	(30.0)		(11.4)	中期後半	口縁部内面～体部外面：ハケ。体部内面：ナデ
334	1区	3001溝	弥生土器	鉢	(29.6)		(16.8)	IV後	口縁端部：凹線紋。体部内外面：ハケ
335	3区	3001溝	弥生土器	鉢	(13.9)		8.0	中期前半	口縁部内面：ハケ後ナデ。外面：ハケ
336	3区	3001溝	弥生土器	鉢	11.8	5.0	9.7	IV後	表面磨滅のため調整不明瞭。外面：ハケ。内面：ハケ後ナデ
337	5区	3001溝	弥生土器	台付鉢			(6.0)	IV後	内外面：ミガキ。脚台間に透孔5方
338	3区	3001溝	弥生土器	台付鉢	体部最大径 (14.8)		(6.7)	中期後半	潮戸内の影響か？ 内外面：ナデ。脚部上端に断面三角形の突帯。脚部に方形？の透孔
339	1区	3001溝	弥生土器	鉢	(41.2)		(7.7)	III後	外側：口縁部下にキザミ目突帯。 外外面：ナデか？（表面磨滅のため調整不明瞭）
340	3区	3001溝	弥生土器	鉢	(41.8)		(8.5)	IV前	口縁部：ヨコナデ。外側：凹線紋。体部外面：凹線紋後櫛描織状紋+波状紋。体部内面：ハケ
341	3区	3001溝	弥生土器	鉢	(46.9)		(10.1)	IV前	口縁部外側：凹線紋。体部外面：ハケ後櫛描波状紋2帯+直線紋1帯+纏状紋1帯。内面：ナデ
342	1区	3001溝	弥生土器	台付鉢		脚台径 (18.6)	(14.1)	IV	表面磨滅のため調整不明瞭。台脚間に凹線紋。小円の透孔
343	1区	3001溝	弥生土器	台付鉢			(9.0)	III後 ～IV初	鉢部外面：ケズリ後ミガキ。脚部外面：ミガキ 鉢部内面：ハケ後ナデ
344	5区	3001溝	弥生土器	水差	9.6		(8.9)	IV後か	外面：板状工具によるナデ後ミガキ。脚部に櫛描直線紋 内面：ナデ（指頭圧痕多）
345	1区	3001溝	弥生土器	水差	(10.0)		(14.3)	III前	口縁部：ヨコナデ。外面：ハケ。内面：ナデ
346	5区	3001溝	弥生土器	水差	(20.4)		(14.6)	III後	外面上半：櫛描直線紋4帯+纏状紋2帯。櫛描紋間に1～2条のミガキ。外面上半：ミガキ。内面：ナデ
347	5区	3001溝	弥生土器	台形土器	天井部径 15.8		(8.0)	III	外側：ケズリ後ミガキ 内面：ケズリ
348	3区	3001溝	弥生土器	高杯	(19.2)	口縁最大径 (29.0)	(7.1)	III前	杯部外面：ハケ後ミガキ 内面：ミガキ
349	5区	3001溝	弥生土器	高杯	(17.7)	脚幅径 11.8	20.2	III前	口縁部附近表面磨滅のため調整不明瞭 杯部外面と脚部外面：ミガキ。裾端部ヨコナデ
350	3区	3001溝	弥生土器	高杯		脚幅径 (12.5)	(18.2)	III前	杯部上端：ミガキ前にヨコナデ。杯部内外面：やや隙間空くミガキ。脚部外面：ミガキ 内面：ナデ
351	5区	3001溝	弥生土器	高杯	(14.4)	脚幅径 9.75	14.9	IV後	表面磨滅のため調整不明瞭。杯部外面：ミガキ 脚部内面：ハケ

遺物番号	調査区	遺構・層	種類	基盤	法量(cm)			時期	技法・特徴・備考	
					口径	底径	器高			
352	3区	3001溝	弥生土器	高杯	(22.5)		(16.0)	II	口縁端部：キザミ、杯部外面～脚部：ミガキ 杯部内面：ハケ、口縁部内面：ハケ後ミガキ	
353	3区	3001溝	弥生土器	高杯	(23.4)		(15.0)	II～Ⅲ前	口縁部：ヨコナデ、外面：ハケ 杯部内面：表面磨滅のため調整不明、ナデか？	
354	5区	3001溝	弥生土器	高杯		脚縫径(15.0)	(15.8)	Ⅲ後	外面：ハケ後ミガキ（脚柱部磨滅著しい） 脚縫部：ヨコナデ、杯部内面：ミガキか？	
355	3区	3001溝	弥生土器	高杯		脚縫径(15.6)	(15.0)	Ⅲ前	脚柱部外面：ミガキ、脚部内外面：ナデ	
356	3区	3001溝	弥生土器	高杯		脚縫径(19.0)	(12.0)	Ⅲ前	脚部内外面：ハケ	
357	3区	3001溝	弥生土器	高杯		脚縫径(10.2)	(12.5)	Ⅲ前	外面：ハケ杯部 内面：ナデ	
358	3区	3001溝	弥生土器	高杯		脚縫径(14.4)	(13.3)	Ⅲ前	外面：ハケ 杯部内面：ミガキ？	
359	5区	3001溝	弥生土器	高杯		脚縫径11.1	(12.0)	Ⅲ後	表面磨滅のため調整不明瞭、杯部外面：ミガキか？ 〃 内面：板状工具によるナデか？ 脚部内外面：ハケ	
360	3区	3001溝	弥生土器	高杯？		脚縫径(9.5)	(9.3)	II？	高杯の未製品か？ 上縁に木葉紋、外面～脚部内面：ハケ	
369	3区	3013溝	弥生土器	広口壺	23.0		(17.4)	V初	生駒山西麓在胎土、頸部内外面：板状工具によるナデ 頸部に突帯、肩部：櫛描波状紋+直線紋	
370	3区	3013溝	弥生土器	広口壺	(23.9)		(10.3)	V初	生駒山西麓在胎土、口縁部付近：ヨコナデ 頸部外面：ハケ	
371	3区	3013溝	弥生土器	広口壺	(30.0)		(15.5)	V初	生駒山西麓在胎土、表面磨滅のため調整不明瞭 口縁部外面：擬凹線紋+3個1対の円形浮紋 頸部外面：ハケ後ミガキ+突帯、所々に赤色顔料残る	
372	3区	3013溝	弥生土器	広口壺	(19.7)		(5.6)	V前	口縁部：ヨコナデ、外面：ハケ後粗いミガキ 頸部に細いハラ描沈線2条2帯、内面：ナデ	
373	3区	3013溝	弥生土器	甕	(15.0)		(6.85)	V	口縁部：ヨコナデ、外面：タタキ、内面：ケズリ	
374	3区	3013溝	弥生土器	甕	(14.3)	体部最大径(20.7)	(8.1)	V初	口縁部～頸部外面：ヨコナデ、外面：ナデ、肩部に爪状の キザミ、内面：板状工具によるナデ（頸部指おさえ）	
375	3区	3013溝	弥生土器	甕		(6.05)	(4.5)	V	外面～底部：タタキ、内面：ケズリ	
376	1区	3013溝	弥生土器	無頸壺蓋	(11.1)	天井部径(3.4)	(4.1)	IV末～V初	外面：表面摩滅のため調整不明、赤色顔料が僅かに残る 内面下半：ハケ	
377	3区	3013溝	弥生土器	台付無頸壺	9.15	脚台径7.8	13.3	V前	外面：ミガキ（体部周曲部のみ横位）、内面：調整不明 頸部に2孔1対の円孔と台部に透孔3方	
378	3区	3013溝	弥生土器	把手付鉢	8.2	3.4	5.4	IV末～V初	口縁部ヨコナデ後、外外面ミガキ、把手は灰割	
379	3区	3013溝	弥生土器	台付無頸壺			(6.2)	IV末～V初	生駒山西麓在胎土、赤色顔料櫻かに残る 外面：櫛描流水紋を施紋後、棒状浮紋を貼付け	
380	3区	3013溝	弥生土器	台付鉢？		脚台径11.1	(5.8)	後明初	高杯型土製品の可能性あり、脚台部外面：ミガキ 〃 内面：雄に粘土付け足し、上端断面は被熱により黒変	
381	3区	3013溝	弥生土器	台付鉢？		脚台径(13.6)	(8.3)	後明初	高杯型土製品の可能性あり、脚台部外面：ミガキ 〃 内面：ナデ、杯部内面：被熱により黒変	
382	3区	3013溝	弥生土器	高杯(有段口縫)		脚縫径19.0	(5.2)	V前	外面：ミガキ、段突帶部にキザミ2列 円孔：上段3方、下段4方 内面上段削：ミガキ、〃 下段削：表面磨滅のため不明	
383	3区	3013溝	弥生土器	高杯		脚縫径(11.8)	(19.65)	V初	杯部は表面磨滅のため調整不明、脚部外面：板状工具による ナデ後下半部ヨコナデ、上縁に凹線紋、2段の円孔があり 上段は3方、下段は2対1対で3方 脚部内面：ナデ、上縁は粘土が大きく突出	
384	3区	3013溝	弥生土器	高杯	(16.3)	杯部最大径(18.0)	(8.0)	V前	表面磨滅のため調整不明瞭、杯部上半内外面：調整不明 〃 下半内面：ミガキ、〃 下半外面：ハケ後ミガキか？	
385	3区	3013溝	弥生土器	高杯			(11.5)	V初	杯部外面：ハケ後ミガキ、〃 内面：ミガキ。脚部外面：ハケ。 2段の円孔があり、上段4方、下段7方。 脚部内面：しぼり、下端はヨコナデ	
386	3区	3013溝	弥生土器	高杯		脚縫径(14.8)	(16.1)	IV末～V初	杯部内面：ミガキ、脚柱部～脚部外側：ミガキ 脚縫部内面：ハケ、縫端部：ヨコナデ、縫部に円孔	
387	3区	3013溝	弥生土器	器台		14.7	(12.9)	V	表面磨滅のため調整不明瞭、外面：板状工具によるナデ 内面：ナデか？ 脚部に円孔5方	
388	3区	3013溝	弥生土器	器台	(29.4)	脚縫径(24.3)	29.6	V前	口縁端部：凹線紋、受御上面：櫛描波状紋、脚部外面：凹線 紋と3滑の櫛描波状紋、脚部内面：ハケ 2段の円形透孔（上下とも7方）、全体に表面磨滅	
391	6区	4434溝	弥生土器	広口壺	(13.0)	(5.8)	23.5	V	表面磨滅のため調整不明瞭、肩部に竹管紋 体部外面下半：ミガキ	
392	6区	4434溝	弥生土器	広口壺	12.1	4.8	22.35	V	外側：板状工具によるナデ（部分的に板の目がハケ目状に明瞭に見える）、体部二段成形、下半内面は板状工具によるナデ、 上半内面は粘土接合痕が明瞭	
393	6区	4434溝	弥生土器	広口壺	12.6	3.8	21.65	V	表面磨滅のため調整不明 内面下半：板状工具によるナデ	
394	6区	4434溝	弥生土器	広口壺	(11.4)	(4.2)	22.35	V	体部外面：ミガキ（接合痕より下部は不明） 〃 内面：ハケ	
395	6区	4443溝	弥生土器	広口壺	(12.6)	5.1	20.6	V	口縁部：ヨコナデ、頸部に半円の竹管紋1箇所 体部外面：ミガキ、内面：ハケ後ナデ消し	

遺物 番号	調査 区	遺構・感	種類	器種	法量(cm)			時期	技法・特徴・解説
					口径	底径	器高		
396	6区	4434溝	弥生土器	長頸壺	11.4	5.6	24.6	V	頭部内外面～体部外面：ハケ、底部丸く座りが悪い
397	6区	4434溝	弥生土器	広口壺	(11.8)		(9.1)	V	表面磨滅のため調整不明瞭(特に口縁部内面は剥離が著しい) 外面：ナデか？
398	6区	4434溝	弥生土器	広口壺	(12.0)		(4.4)	V	外面：ヨコナデ
399	6区	4434溝	弥生土器	広口壺	16.0		(8.3)	V前	口縁端面：凹線紋、口縁部上面：櫛描波状紋 底部外面：ナデ、頭部に突帯
400	6区	4434溝	弥生土器	鉢	(15.3)	3.4	6.95	V	外面：ナデ、内面：ハケ
401	6区	4434溝	弥生土器	鉢	(19.7)		(6.5)	V	口縁部：ヨコナデ、外面：タタキ後ナデ 内面：表面磨滅のため調整不明瞭、ナデか？
402	6区	4434溝	弥生土器	甕(近江型)	(16.8)		(4.6)	V	近江(山城)からの搬入。外面：口縁端面櫛描列点紋 頭部～肩部：櫛描直線紋と列点紋、受口状口縁
403	6区	4434溝	弥生土器	甕(近江型)	(17.0)	3.8	12.9	V	近江(山城)からの搬入。受口状口縁、底部：木葉紋 口縁部外面：櫛描列点紋、体部外面：ハケ後、肩部に櫛描直線紋と波状紋、最大径部に工具の圧痕、体部内面：ハケ
404	6区	4434溝	弥生土器	甕	(10.4)	3.2	10.7	V	口縁部：ヨコナデ、外面：タタキ後ナデ 内面：ナデ
405	6区	4434溝	弥生土器	甕	(15.5)		(7.3)	V	口縁部：ナデ 外面：ハケ(下半はハケ後ナデか又は磨滅)
406	6区	4434溝	弥生土器	甕	(16.5)	体部最大径 (22.3)	(17.0)	V	口縁部内面：ハケ、体部内外面：ナデか、内面は接合部明瞭 体部外面上半に工具の圧痕あり
407	6区	4434溝	弥生土器	甕	(13.4)		(14.7)	V	外面：タタキ、内面：ナデ
408	6区	4434溝	弥生土器	甕	(12.8)		(17.45)	V	口縁部：ヨコナデ、外面：タタキ、内面：ナデ
409	6区	4434溝	弥生土器	甕	(15.8)		(13.2)	V	口縁部：ヨコナデ、外面：タタキ 内面：板状工具によるナデ
410	6区	4434溝	弥生土器	甕	(15.3)	3.5	14.3	V	口縁部：ヨコナデ、外面：タタキ、内面：ナデ
411	6区	4434溝	弥生土器	甕	15.2	5.3	32.25	V	口縁部：ヨコナデ、外面：タタキ、内面下半：ハケ、上半はナデか？
412	6区	4434溝	弥生土器	甕	(15.8)	4.8	28.0	V	口縁部：ヨコナデ、外面：タタキ 内面下半：板状工具によるナデ
413	6区	4434溝	弥生土器	高杯	23.2		(8.8)	V	外面：ミガキ
414	6区	4434溝	弥生土器	高杯		脚幅径 12.05	(7.2)	V	外面：ミガキ、内面：ナデ、据端部：ヨコナデ
415	6区	4434溝	弥生土器	高杯	26.6	脚幅径 17.1	18.0	V	表面磨滅のため調整不明 杯部内面：ミガキ(口縁部はミガキの前にヨコナデ)、 脚幅部外面：(ハケ後？)ミガキか？、円孔4方
416	6区	4434溝	弥生土器	高杯	(25.5)	脚幅径 (15.2)	(18.7)	V	表面磨滅のため調整不明瞭、杯部内面：調整不明 口縁部外面：ミガキか？、杯部外面：ミガキ 脚幅部外面：ミガキか？、脚幅部外側：ハケ、円孔4方 脚幅部内面：板状工具によるナデ
417	4区	3500溝	弥生土器	甕	(22.0)		(7.7)	II	口縁部：ハケ後ヨコナデ、内面：ハケ 体部外面：ハケ、内面：ハケ後ナデか？
418	6区	3510溝	弥生土器	(脚付)甕	(10.2)	体部最大径 (14.2)	(8.7)	V末	丹後～北陸系、外面：表面磨滅のため調整不明瞭、下半は ミガキ、内面：ナデ及び圧痕
419	4区	3502溝	弥生土器	台付鉢		脚台径 (6.2)	(4.5)	II	表面磨滅のため調整不明瞭、底部側面上端にキザミ
420	4区	3527溝	弥生土器	甕		(5.4)	(4.3)	中期前半	体部外面：ハケ、下端部のみケズリ、底面：本革紋をケズリ 内面：板状工具によるナデ
421	4区	3529溝	弥生土器	鉢	(21.6)		(15.6)	II	外面上半：櫛描直線紋6帯、外底下半：ミガキ 内面：板状工具によるナデ
422	3区	3531溝	弥生土器	広口壺	(19.8)	7.6	(35.4)	II	口縁端面：凹線紋、口縁部内面：ハケ 体部外面下半：ミガキ、頭部～体部内面：板状工具による ナデ、頭部～肩部外面：ハケ(頭部は粗く、肩部細かい)
423	4区	3533溝	弥生土器	広口壺	(18.0)		(22.15)	II	口縁端部下端：キザミ、頭部外面：ハケ後、複合櫛による直 線紋4帯、内面：ハケ、体部上半外面：ハケ後、複合櫛 による波状紋3帯、下半外面：ハケ後ミガキ
424	3区	3533溝	弥生土器	広口壺	(28.2)		(12.6)	II	口縁端面：櫛描波状紋2帯 頭部～体部外面：ミガキ(頭部上端にハケわずかに残る) 口縁部～頸部内面：ハケ(頸部削は目が細かい)
425	3区	3533溝	弥生土器	広口壺	(13.8)		(4.0)	IV後	生駒山西麓産陶土、表面磨滅のため調整不明 口縁部：凹線紋
426	4区	3533溝	弥生土器	広口壺	(20.6)		(8.2)	II	口縁部下端：キザミ、口縁部内面：板状工具によるナデ 頭部外面：櫛描直線紋2帯以上、上半はミガキ
427	3区	3533溝	弥生土器	甕	(37.8)		(10.0)	II	外面：ハケ、口縁部～頸部内面：ハケ
428	3区	3533溝	弥生土器	高杯	(21.4)		(4.1)	IV	表面磨滅のため調整不明瞭、外面：凹線2条 口縁部内面：ヨコナデ
429	3区	3533溝	弥生土器	高杯		脚幅径 (17.4)	(4.1)	IV	外面：ミガキ、内面：ケズリ、据部に円孔(4～5方)
430	3区	3533溝	弥生土器	台付鉢			(7.7)	中期後半	表面磨滅のため調整不明瞭、外面：ミガキ 内面：杯部ミガキか？、據部内面：板ナデ
431	3区	3533溝	弥生土器	ミニチュア 鉢	5.0	(2.6)	6.0	中期後半か	磨滅のため調整不明
432	3区	3533溝	弥生土器	高杯？			(9.0)	V後？	高杯脚部の作りかけか？

遺物 番号	調査 区	遺構・層	種類	器種	法量(cm)			時期	技法・特徴・備考	
					口径	底径	器高			
434	3区	3534溝上層	弥生土器	広口壺	(30.8)		(13.9)	I末～II初	外面：ナデ 外面：ヘラ描沈線紋7条	
435	3区	3534溝上層	弥生土器	有段口縁壺	(28.2)		(8.6)	IV	表面磨滅のため調整不明瞭。口縁部外面：凹線紋 〃 内面：ヨコナデ、内面：ハケ	
436	3区	3534溝上層	弥生土器	広口壺	(17.8)		(4.0)	IV後	口縁部外面：凹線紋、頸部：ハケ後。上部はヨコナデ	
437	3区	3534溝上層	弥生土器	広口壺	(21.0)		(8.2)	IV前	口縁部外面：凹線紋、〃 上面：上部唇擗列点紋2帯 頸部外面：ハケ後ナデ。唇擗直線紋。〃 内面：ナデ	
438	3区	3534溝上層	弥生土器	広口壺	(12.4)	体部最大径 (24.0)	(22.9)	II	口縁端部下端：キサミ。頸部外面：櫛描直線紋3帯 体部外面上半：櫛描波状紋2帯 (いずれも複合繩による施紋) 体部外面下半：ミガキ。体部内面：ナデ	
439	3区	3534溝上層	弥生土器	広口壺	(14.3)		(5.8)	IV後	表面磨滅のため調整不明瞭。口縁部に小円孔2ヶ 口縁部外面：凹線紋。頸部外面：櫛描直線紋1帯	
440	3区	3534溝上層	弥生土器	広口壺	(18.0)		(5.1)	II初	口縁端部上端：キサミ。口縁部内面：ヨコナデ 外面：ハケ後ヨコナデ。粗い櫛描直線紋	
441	3区	3534溝上層	弥生土器	水差	(14.7)		(5.8)	II	口縁端部内外縁：キサミ。外面：櫛描直線紋4帯以上 直線紋間に櫛描山形紋。内面：ナデ	
442	3区	3534溝上層	弥生土器	水差	(12.5)	体部最大径 (30.0)	(25.0)	II	口縁端面外側：キサミ。肩部に突帯が剥離した痕跡あり 体部上外面：眉形状多。櫛描波状紋4帯 内面：表面磨滅のため調整不明	
443	3区	3534溝上層	弥生土器	鉢	(20.8)		(7.2)	III初	口縁端面：キサミ。体部外面上半：櫛描直線紋2帯 〃 下半：ミガキ。内面：表面磨滅のため調整不明	
444	3区	3534溝上層	弥生土器	高杯		(10.0)	(11.5)	中期後半か	外面：ハケ後。突帯(2箇所)や唇部點付け。その突帯や唇 端面にキサミ。頸部内面：ハケ	
445	3区	3534溝上層	弥生土器	甕	(33.9)		(8.5)	II	口縁端部上下端：キサミ。口縁部内面：ハケ 外面：ハケ	
446	3区	3534溝上層	弥生土器	甕	(14.8)		(3.7)	IV前	口縁端部：つまみ上げ。外面：口縁端面：キサミ 口縁部内面：ハケ。体部外面：ハケ	
447	4区	3535溝上層	弥生土器	広口壺	(30.8)		(9.4)	II	表面磨滅のため調整不明瞭。口縁端面下端：キサミ(指頭 圧痕)。頸部外面：ハケ後ナデか?	
448	4区	3535溝上層	弥生土器	広口壺	(23.7)		(4.9)	V	表面磨滅のため調整不明瞭 口縁端面：櫛描波状紋。背管円形浮紋。頸部外面：ハケか? 口縁部外面及び突帯に円形浮紋。その間にミガキ	
449	4区	3535溝上層	弥生土器	複合土器 (器台+鉢)	(23.1)		(5.3)	IV	口縁部下端：キサミ + 指頭圧痕。頸部外面：ハケ 内面：ナデ	
454	4区	3537溝	弥生土器	甕蓋	天井部径 5.3		(11.0)	中期	表面磨滅のため調整不明	
455	2区	3558溝	弥生土器	広口壺	(26.4)		(10.4)	II	内外面：ナデ (内面圧痕)。外面：櫛描直線紋4帯	
456	2区	3558溝	弥生土器	無縁壺	(10.8)		(9.5)	II	表面磨滅のため調整不明	
457	2区	3558溝	弥生土器	鉢	(41.6)		(10.6)	IV	内外面：ナデ	
458	4区	3568溝	弥生土器	高杯		脚柱径 (8.4)	(9.7)	II	表面磨滅のため調整不明瞭。外面：ハケか? 杯底内面：ミガキか?	
459	4区	3568溝	弥生土器	広口壺	(21.4)		(12.1)	II	表面磨滅のため調整不明	
460	4区	3568溝	弥生土器	広口壺	(17.6)		(10.4)	II	表面磨滅のため調整不明。頸部：櫛描直線紋3帯	
461	4区	3568溝	弥生土器	広口壺	(59.6)		(3.9)	II	表面磨滅のため調整不明瞭。口縁部：ヨコナデ 口縁部下端：キサミ + 指頭圧痕。頸部外面：ハケ	
462	2区	3617溝	弥生土器	広口壺	(19.4)		(8.8)	II	表面磨滅のため調整不明	
463	2区	3617溝	弥生土器	広口壺	(20.2)		(6.85)	II	表面磨滅のため調整不明。外面：頸部唇擗直線紋2帯	
464	2区	3617溝	弥生土器	甕	(41.5)		(15.3)	II	表面磨滅のため調整不明	
465	2区	3617溝	弥生土器	高杯		脚柱径 12.8	(7.85)	II	表面磨滅のため調整不明瞭 脚柱部：ハケ後ナデか? 唇柱部端：ヨコナデ	
466	3区	3363溝	弥生土器	広口壺	(27.0)		(10.0)	II	表面磨滅のため調整不明瞭。頸部外面：ハケ(磨滅) 口縁端面：櫛描波状紋。口縁部内面：ハケ	
467	3区	3363溝	弥生土器	広口壺	(19.6)		(9.1)	II	表面磨滅のため調整不明瞭。外面：ハケ (一部にナデ) 生駒山西麓を崩す	
468	3区	3363溝	弥生土器	広口壺			(13.5)	II	外面：櫛描横型流水紋 (直線紋の途中に辺状のつなぎを入れ 後にミガキにより直線部を消す)。上下の流水紋間に一帯の 直線紋。櫛描紋の間に一本ミガキを入れる 櫛描紋より上方はミガキ。内面：ミガキ	
469	3区	3364溝	弥生土器	鉢	(23.0)	(8.6)	13.6	II	表面磨滅のため調整不明	
470	5区	4201溝	弥生土器	広口壺	(12.8)		(9.6)	II	外面：ハケ後ナデ。櫛描直線紋4帯以上 + 波状紋1帯 内面：ナデ	
471	5区	4201溝	弥生土器	広口壺	14.0		(11.9)	II	外面：ハケ後ナデ。櫛描直線紋6帯以上 口縁部内面：ハケ。体部内面：ナデ	
472	5区	4201溝	弥生土器	広口壺	(18.8)		(16.8)	II	口縁端面：櫛描波状紋。口縁部内面：ハケ。頸部一部外側： ハケ後櫛描直線紋8帯。体部内面：板状工具によるナデ	
473	5区	4201溝	弥生土器	広口壺	(8.7)	4.8	13.8	II	表面磨滅のため調整不明	
474	5区	4201溝	弥生土器	広口壺	21.4		(6.7)	II	表面磨滅のため調整不明。口縁端部下端：波状のキサミ 頸部：櫛描直線紋	
475	5区	4201溝	弥生土器	広口壺	21.3		(13.9)	II	表面磨滅のため調整不明。外面：ハケ後ナデ 内面：ナデ	
476	5区	4201溝	弥生土器	広口壺	(30.0)		(18.3)	II	表面磨滅のため調整不明瞭。外面：ハケ後櫛描直線紋4帯 口縁部内面：ハケ	

遺物 番号	調査 区	遺構・層	種類	器種	法 量(cm)			時期	技 法・特 徴・解 考
					口 径	底 径	器 高		
477	5区	4201溝	弥生土器	広口壺	(32.0)		(18.2)	II	口縁部内面：ハケ、口縁端面：櫛描波状紋 頸部内外面：ナデ
478	5区	4201溝	弥生土器	広口壺	(43.8)		(17.8)	II	口縁下端：キザミ、頸部外面：櫛描直線紋 口縁部～頸部内面：ハケ
479	5区	4201溝	弥生土器	壺	体部最大径 (37.7)	10.6	(34.0)	II	表面磨滅のため調整不明。外面：ミガキか？ 底部：木葉紋
480	5区	4201溝	弥生土器	壺蓋	(13.2)	天井部径 4.25	7.6	中期	表面磨滅のため調整不明瞭。外面：ハケ。 内面：ハケ後ナデか？（一部にハケ目確認できる）
481	5区	4201溝	弥生土器	壺蓋		天井部径 4.7	(7.8)	II	外面：ハケ
482	5区	4201溝	弥生土器	肩頸壺？ 水差？	8.6		(5.3)	II	外面：複合轡による直線紋4帯（直線紋の所々を止めて簾状 紋風に施紋）。内面：ナデ
483	5区	4201溝	弥生土器	鉢	(12.6)	5.5	9.5	II	外面：ハケ 内面：表面磨滅のため調整不明
484	6区	4201溝	弥生土器	高杯		脚部径 13.7	(8.6)	II	脚部外面：ミガキ、脚部端部：ヨコナデ、脚部内面：ハケ
485	5区	4201溝	弥生土器	甕	(41.4)		(10.2)	II	表面磨滅のため調整不明瞭。外面：ハケ、内面：不明
486	5区	4201溝	弥生土器	甕	(24.8)		(9.9)	中期前半	口縁部内面：ハケ、颈部内面：ハケ後ヨコナデ 体部外面：ハケ、内面：ナデ
487	5区	4201溝	弥生土器	甕	(29.0)		(9.7)	II	表面磨滅のため調整不明瞭。外面：ハケか？ 内面：不明
488	5区	4201溝	弥生土器	甕	(18.0)		(9.5)	II	口縁部：ヨコナデ、体部内外面：ハケ
489	6区	4201溝	弥生土器	甕	(17.4)		(11.75)	II	口縁部ヨコナデ、体部外面：ハケ、内面：ナデ
490	5区	4201溝	弥生土器	甕	(22.2)		(8.6)	II	口縁部内面：粗いハケ、外面：粗いハケ、体部内面：ナデ
499	3区	3368溝	弥生土器	広口壺	19.2		(13.15)	II	表面磨滅のため調整不明
500	3区	3368溝	弥生土器	広口壺	19.0		(8.5)	II前	口縁部：ヨコナデ、外面：ハケ。頸部下端に浅い櫛描直線紋 内面：板状工具によるナデ
501	3区	3368溝	弥生土器	甕	(16.2)		(7.4)	中期前半	表面磨滅のため調整不明瞭。口縁部：ヨコナデか？ 体部外面：ハケ、内面：ハケか？
502	3区	3368溝	弥生土器	甕	(41.6)		(16.1)	II	口縁端部上下端：キザミ、口縁部内面：ヨコハケの間に 櫛描波状紋2帯。体部外面：ハケ（頸部のみ細かいハケ） 内面：表面磨滅のため調整不明瞭。ハケ後ナデか？
503	3区	3368溝	弥生土器	鉢	(25.2)		(9.7)	II	口縁端面：キザミ（ハケ目あり） 体部外面：ハケ後、板状工具によるナデ、内面：ハケ
504	3区	3381溝	弥生土器	甕？	体部最大径 (16.2)		(12.9)	II	表面磨滅のため調整不明。頸部外面：櫛描直線紋3帯 体部外面：櫛描波状紋3帯+棒状浮紋（キザミ有） 内面：ハケ
505	3区	3381溝	弥生土器	広口壺	(19.0)		(9.6)	II	内外面：ミガキ、頸部外面：櫛描直線紋3帯
506	3区	3381溝	弥生土器	台付鉢	(18.4)	脚台径 5.8	18.95	II	表面磨滅のため調整不明瞭。外面上半：櫛描直線紋5帯 下半：板状工具によるナデか？ 内面：ナデ
507	3区	3381溝	弥生土器	甕	(33.8)		(14.6)	II	表面磨滅のため調整不明瞭。口縁部内面：ハケ 体部外面：ハケ、内面：板状工具によるナデか？
508	3区	3383溝	弥生土器	広口（短頸） 壺	(11.2)		(6.6)	II	外面：ハケ後ミガキ。内面：板状工具によるナデか？
509	3区	3383溝	弥生土器	短頸壺	(11.4)		(8.7)	II	頸部：雑な櫛描直線紋、内面：ナデ
510	3区	3383溝	弥生土器	広口壺	(18.0)		(9.0)	II	口縁端面下端：キザミ、頸部外面：ハケ後櫛描直線紋3帯 内面：表面磨滅のため調整不明
511	3区	3383溝	弥生土器	広口壺	(39.6)		(9.2)	II	表面磨滅のため調整不明。口縁端部下端：キザミ 頸部：櫛描直線紋4帯
512	3区	3383溝	弥生土器	広口壺	28.4		(11.5)	II	表面磨滅のため調整不明。513と同一個体
513	3区	3383溝	弥生土器	甕		14.5	(11.5)	II	表面磨滅のため調整不明。底面に木葉紋（2枚重ね） 512と同一個体
514	3区	3383溝	弥生土器	甕	(32.0)		(9.8)	II	口縁端面：キザミ、口縁部内面：ハケ 頸～体部外面：ハケ。体部内面：ナデ
515	3区	3405溝	弥生土器	高杯		脚部径 11.4	(8.7)	II	外面～脚部内面：ハケ
516	3区	3423溝	弥生土器	甕			(7.5)	II	外面：櫛描波水紋（直線紋+扇形紋）と波状紋
517	3区	3413溝	弥生土器	甕	(19.8)	6.0	28.4	II	口縁部内面：ハケ、外面：ハケ、内面：ナデ、底部：木葉紋
518	3区	3413溝	弥生土器	広口壺	(24.0)	(8.4)	38.9	II	表面磨滅のため調整不明瞭。口縁端面：櫛描波状紋 口縁部内面：ハケ。頸部～肩部：上に櫛描直線紋3帯、下に 波状紋3帯。体部外下半：ミガキ
520	2区	3600溝 (周溝基65西辺)	弥生土器	短頸壺	(9.9)		(6.6)	IV末 ～V初	口縁部：ヨコナデ、口縁部外面：一部にコンバス状工具に よる筋形状の紋様。頸部外面：ハケ、内面：頸部ナデ
521	2区	3600溝 (周溝基65西辺)	弥生土器	台付鉢		脚台径 9.4	(7.15)	IV	表面磨滅のため調整不明瞭。外面：ミガキ 台部内面：ケズリ
523	2区	3621+3622溝	弥生土器	広口壺	(27.6)	口縁部最大径 (31.8)	(11.3)	II	表面磨滅のため調整不明。口縁端部下端：キザミ
524	2区	3623溝	弥生土器	広口壺	(22.8)		(10.1)	II	表面磨滅のため調整不明。頸部外面：櫛描直線紋4帯 内面：強いナデ
525	2区	3643溝	弥生土器	無頸壺	(11.6)		(7.7)	II	外面：櫛描直線紋+筋形紋、内面：表面磨滅のため調整不明
526	2区	3644溝	弥生土器	広口壺	(29.8)		(8.2)	II	頸部内外面：ハケ
527	2区	3618溝	弥生土器	広口壺	(49.4)		(2.9)	II	表面磨滅のため調整不明。口縁端部下端：キザミと圧痕
528	2区	3618溝	弥生土器	広口壺	(26.4)		(4.3)	II	口縁端面：櫛状工具による押圧紋様。内外面：横方向の ミガキ状の光沢が見られるが磨滅しており不明瞭

遺物 番号	調査 区	遺構・層	種類	基盤	法量(cm)			時期	技法・特徴・備考	
					口径	底径	器高			
529	2区	3618溝	弥生土器	広口壺	(14.7)		(6.8)	II	外面：櫛摺直線紋と波状紋(交互に) 内面：表面摩滅のため調整不明瞭	
530	2区	3618溝	弥生土器	広口壺	(22.9)		(7.25)	II	表面摩滅のため調整不明瞭。外面：ミガキ？ 内面：不明	
531	2区	3618溝	弥生土器	広口(短脚) 壺	(18.6)		(9.55)	II	表面摩滅のため調整不明瞭。内面：ナデ 外面：おそらくミガキ(單位不明瞭)	
532	2区	3618溝	弥生土器	壺？	体部最大径 17.4	8.2	(13.8)	II	外面：おそらくミガキ(單位不明瞭) 内面：ハケ後ナデ	
533	2区	3618溝	弥生土器	壺		6.95	(8.75)	II	表面摩滅のため調整不明瞭。内面：不明 外面：下縁ハケ(上部はミガキかナデが不明)	
534	2区	3618溝	弥生土器	台付鉢		脚台径 6.25	(10.55)	II	外面：ハケ、底部：木葉紋 内面：ナデ	
535	2区	3618溝	弥生土器	甕蓋	天井部径 5.4		(12.1)	中期前半 おそらくII	内外面：ハケ	
536	2区	3618溝	弥生土器	無柄壺	(12.2)		(9.75)	II	外面：櫛摺き直線紋5帯+波状紋1帯 内面：ナデ	
537	2区	3618溝	弥生土器	甕	(19.1)		(10.3)	II	口縁部内面：ハケ、外面：ハケ、内面：ナデ	
538	2区	3618溝	弥生土器	甕	(27.4)		(8.2)	II	外面：ハケ、口縁部内面：ハケ	
539	2区	3618溝	弥生土器	甕	(20.4)		(18.65)	II	外面：ハケ、内面：ナデ	
540	2区	3618溝	弥生土器	甕	(36.6)		(16.0)	II	口縁部内面：ハケ、体部外面：ハケ。〃内面：ナデ	
541	2区	3618溝	弥生土器	台形土器	天井部径 12.4		(5.8)	中期前半	表面摩滅のため調整不明瞭。内外面：ナデか？	
542	2区	3618溝	弥生土器	甕	体部最大径 (41.6)		(16.7)	I未 ～II初	表面摩滅のため調整不明瞭。外面：不明。頸部に貼付突帯 内面：ハケ	
543	2区	3618溝	弥生土器	甕	(41.0)		(11.45)	II	表面摩滅のため調整不明瞭。内外面：ハケ	
544	2区	3640溝	弥生土器	広口壺	(45.4)		(3.15)	II	口縁端部下端：波状のキザミ	
545	2区	3640溝	弥生土器	ミニチュア 鉢	6.75	3.4	4.2	中期	内外面：ナデ及び指押さえ	
546	2区	3640溝	弥生土器	広口壺	(17.9)		(5.05)	II	表面摩滅のため調整不明瞭。口縁部内面：ミガキか？ 体部内面：板状工具によるナデか？	
547	2区	3640溝	弥生土器	広口壺	(19.4)	(7.6)	37.1	II	口縁部内面：ハケ。〃外面：ナデ。体部外面：ミガキ 〃内面：ナデ	
548	2区	3640溝	弥生土器	甕		10.4	(17.5)	II	外面：ハケ 内面：ナデと板状工具によるナデ	
549	2区	3640溝	弥生土器	甕？	体部最大径 (59.0)	11.2	(33.0)	中期前半	表面摩滅のため調整不明瞭。外面：ミガキ 内面：ナデ	
551	2区	3640溝	弥生土器	亞?鉢?	体部最大径 (29.4)	8.4	(30.4)	中期	成形時の状態(ナデ)で最終調整なし。製作途中で焼成か	
552	2区	3640溝	弥生土器	甕	(34.0)		(22.0)	II	口縁端面：櫛摺波状紋。口縁部内面：櫛摺波状紋2帯施紋後 較線間にヨコハケ。口縁周囲はヨコナデ。体部外面：ハケ 〃内面：ハケ後ナデ(前の痕跡明瞭)	
553	2区	3641溝	弥生土器	台形土器		脚幅径 (25.2)	(12.0)	中期	外面：ミガキ(上半は表面磨滅)。板状部はミガキ前にヨコ ナデ。内面：板状工具によるナデ	
554	2区	3641溝	弥生土器	甕	19.6	6.55	24.3	II	口縁部内面：ハケ、外面：粗いハケ、内面：磨滅のため不明	
555	2区	3651溝	弥生土器	広口壺	(12.0)		(7.5)	II	内外面：表面摩滅のため調整不明瞭。外面：櫛摺直線紋2帯	
556	2区	3679溝	弥生土器	広口壺	(22.0)		(8.6)	II初	口縁部下端：指頭圧痕によるキザミ。 頸部内外面：ナデ、外面：櫛摺直線紋。	
557	1区	3929溝	弥生土器	大型器台の 装飾部品				V	竹管円形浮紋 直径4.4cm 厚さ0.8cm	
558	2区	3670溝	弥生土器	甕			(8.9)	II初	表面摩滅のため調整不明瞭。口縁部内面：ハケ。 外面及び体部内面：ハケ後ナデあるいは板状工具によるナデ 頸部に貼付突帯。	
559	2区	3670溝	弥生土器	広口(短脚) 壺	(18.2)		(17.2)	II	外面：ハケ後残るミガキ(頸部のハケは体部ハケより粗い) 内面：板状工具によるナデ(細かい板目がハケ状に見えるが 外面のハケ目とは異なる)	
560	1区	3920溝	弥生土器	広口壺	(40.2)		(22.8)	II	内面：口縁部ハケ。口縁端面に凹線状の凹み 頸部：細かいハケ後ナデ。櫛摺直線紋4帯	
561	1区	3920溝	弥生土器	広口壺	(32.6)		(19.4)	II	表面摩滅のため調整不明瞭。外面：櫛摺直線紋5帯 口縁部内面：ハケ、頸部ナデか？	
562	1区	3920溝	弥生土器	広口壺	(29.1)		(10.5)	II	表面摩滅のため調整不明瞭。口縁～頸部内面：ハケ	
563	1区	3920溝	弥生土器	広口壺	9.8	4.6	13.3	II	口縁部内面：ミガキ。体部外面：ミガキ(下半不明) 体部内面：ナデ、中央付近には板状工具による擦過痕あり	
566	1区	3920溝	弥生土器	甕	(22.8)		(10.1)	II	口縁部内面：ハケ、外面：ハケ、内面：ナデ	
567	1区	3920溝	弥生土器	甕	(27.6)	(7.85)	(38.85)	II	口縁部内面：ハケ、外面：ハケ 体部内面：表面摩滅のため調整不明	
568	1区	3920溝	弥生土器	甕	(36.0)		(14.05)	II	口縁部内面：ハケ、外面：ハケ 体部内面：表面摩滅のため調整不明	
569	1区	3920溝	弥生土器	鉢	(34.0)		(24.0)	II	表面摩滅のため調整不明瞭。外面上半：複合繩による直線紋 8帯+波状紋4帯。外面上半：ミガキ。内面：ナデ	
573	1区	3939溝	弥生土器	広口壺	(33.7)		(7.7)	II	口縁部：ヨコナデ。頸部外面：ハケ後ナデ 〃内面：ハケ(表面磨滅)	
574	1区	3939溝	弥生土器	高杯		櫛摺径 11.0	(9.5)	II	表面摩滅のため調整不明瞭。外面：ミガキ 御振部内面：ハケ	

遺物 番号	調査 区	遺構・層	種類	器種	法 量(cm)			時期	技 法・特 徴・解 考
					口径	底径	器高		
576	3区	3014溝	弥生土器	広口壺	(24.4)		(9.15)	IV前	口縁部外面：凹線紋+円形浮紋。(円形浮紋は突出せず潰す)上面に櫛描列点紋。頸部外面：凹線紋。内面：ナデ
577	3区	3014溝	弥生土器	広口壺	(22.3)		(8.2)	IV	口縁部外面：凹線紋+円形浮紋(8ヶ)。上面に櫛描列点紋2列。頸部外面：ハケ残凹線紋+櫛描波状紋
578	3区	3014溝	弥生土器	広口壺	22.5		(5.3)	IV	口縁部：ヨコナデ。リ縁面：凹線紋。口縁部上面と頸部に櫛描波状紋。頸部内面：ハケ
579	3区	3014溝	弥生土器	広口壺	(24.0)		(11.4)	IV	口縁部外面：ヨコナデ。リ縁面：凹線紋。頸部に突帯。頸部内面：板状工具によるナデ。リ外面：ハケ
580	3区	3014溝	弥生土器	広口壺	新口径 (26.8)		(22.1)	IV	外面：ハケ後ナデ。頸部にハケ圧痕突帯。内面：ハケ
581	3区	3014溝	弥生土器	甕	(12.5)		(7.8)	IV	口縁部：凹線紋。外面：ハケ。内面：ハケ後ナデ(工具の圧痕あり)
582	3区	3014溝	弥生土器	甕	(27.6)		(9.4)	中期後半	口縁部ヨコナデ。体部内外面：ハケ
583	3区	3014溝	弥生土器	甕	(33.7)		(11.8)	IV末 ～V初	口縁端面：凹線紋(磨滅のため不明瞭)。内面：ハケ。外側：タカキ後ハケ
584	3区	3014溝	弥生土器	高杯	(18.6)	口縁最大径 (26.8)	(3.6)	IV	表面摩滅のため調整不明。外側：ミガキ。内面：不明
585	3区	3014溝	弥生土器	高杯	(26.2)		(4.5)	IV	外側：凹線紋(表面磨滅のため調整不明)。内面：ミガキ
586	3区	3014溝	弥生土器	台付甕	体部最大径 (16.3)	脚台径 (10.6)	(19.6)	IV末 ～V初	外側：ミガキ。内面(底部内面含む)：ハケ。底部上面：小竹背紋
587	3区	3014溝	弥生土器	鉢			(7.6)	IV前	口縁部外面：凹線紋。体部外面：2帯の櫛描波状紋の間に波状紋。内面：ミガキ
588	3区	3014溝	弥生土器	台付鉢？		脚台径 (7.2)	(6.9)	IV	身部外面：ケズリ。リ内面：ナデ。台付内外面：ケズリ(下端部ヨコナデ)
589	1区	3900溝	弥生土器	広口壺	(14.5)		(5.8)	IV前	口縁端面：凹線紋。口縁部に収用の小孔あり。外側：ハケ。内面：体部内面：板状工具によるナデ？
590	1区	3901溝	弥生土器	甕	(34.2)		(13.1)	IV前	口縁部：ヨコナデ後。下端にキザミ。体部外面：タカキ。内面：ハケ
591	1区	3902溝	弥生土器	高杯	(16.9)	口縁最大径 (23.8)	(4.2)	IV	表面摩滅のため調整不明。杯部外面：ミガキか？
592	1区	3902溝	弥生土器	台付鉢		脚台径 (10.2)	(9.3)	IV	表面摩滅のため調整不明瞭。外側：ミガキ。脚端部：ヨコナデ
593	1区	3902溝	弥生土器	広口壺	(26.8)		(6.8)	IV	口縁部外面：凹線紋+円形浮紋+ヘラ描織線紋。口縁部上面：綾杉状の櫛描列点紋。頸部外面：ハケ後ナデ。内面：ナデ
594	1区	3902溝	弥生土器	器台	体部最大径 (30.9)		(11.4)	IV	外側：凹線紋と鋸歯紋。内面：ハケ
596	1区	3905溝	弥生土器	広口壺	(13.7)		(4.2)	IV前	口縁部外面：凹線紋。頸部外面：ハケ後ヨコナデ。リ内面：表面摩滅のため調整不明
597	1区	3905溝	弥生土器	広口壺	(19.0)		(7.95)	IV前	口縁部外面：凹線紋+円形浮紋。リ上面に櫛描扇形紋2列。頸部外面：ハケ後ナデと貼付突帯。(下端に舟跡状の圧痕あり)。リ内面：頸部ナデ
598	1区	3903溝	弥生土器	短縦甕	(16.8)		(9.8)	IV	口縁部：凹線紋。頸部内面：ハケ
599	1区	3903溝	弥生土器	広口壺	(28.4)		(4.65)	IV	口縁部：ヨコナデ。リ端面：凹線紋。頸部内面：ハケ
600	1区	3903溝	弥生土器	広口壺	(28.6)		(4.45)	IV	表面摩滅のため調整不明。口縁部：凹線紋+円形浮紋(1ヶのみ残存)
601	1区	3903溝	弥生土器	高杯	(17.2)	口縁最大径 (24.5)	(3.3)	IV	表面摩滅のため調整不明
602	1区	3903溝	弥生土器	高杯		脚台径 (10.0)	(3.95)	IV	表面摩滅のため調整不眞。身部内面：ハケ。脚台部内面：板状工具によるナデと沿端面に凹線紋。外側：ミガキ
603	1区	3903溝	弥生土器	台付鉢		脚台径 (9.6)	(7.6)	IV	脚台部外面：表面摩滅のため調整不明瞭。脚柱部と沿端面：四線紋。内面：ケズリ。柱部に小円孔多
604	1区	3903溝	弥生土器	器台		脚径(69.5)	(30.15)	IV	外側：表面摩滅のため調整不明。凹線紋と貼付突帯。その間にヘラ描きによる菱形紋。内面：ハケ
605	1区	3904溝	弥生土器	台付鉢		脚台径 (14.4)	(7.5)	IV	身部外面：ミガキか？ 脚台部外面：ハケ。脚端部：ヨコナデ
606	1区	3904溝	弥生土器	鉢	(33.0)		(8.1)	IV前	口縁部外面：櫛描列点紋。体部外面上半：櫛描扇状紋2帯+扇形紋。廉状紋と一縦のミガキ。リ下半：ミガキ。内面：ハケ後ミガキ
607	1区	3904溝	弥生土器	鉢	(55.0)		(10.45)	IV	口縁部及び体部中位に凹線紋。体部下半：ハケ。内面：ハケ後ミガキ
613	5区	4198溝	弥生土器	広口壺	22.0		(18.3)	II	頸部～肩部：櫛描直線紋8帯+波状紋1帯。内面：表面摩滅のため調整不明
614	5区	4198溝	弥生土器	広口壺	(22.8)	口縁最大径 (24.4)	(2.8)	IV	口縁部外面：凹線紋+円形浮紋。リ上面：櫛描波状紋+扇形紋
615	5区	4198溝	弥生土器	甕	(19.8)		(11.9)	II～III前	口縁部：ヨコナデ。外側：ハケ。内面：板状工具によるナデ
616	5区	4198溝	弥生土器	高杯	(15.0)		(9.9)	III前	表面摩滅のため調整不明。脚部上端外面にかすかにハケ目。脚柱部は中央
619	5区	4140溝	弥生土器	広口壺	(20.0)		(5.1)	IV前	口縁部外面：凹線紋。リ上面：櫛描列点紋。頸部内面：板状工具によるナデ
620	5区	4140溝	弥生土器	広口壺	(14.6)		(2.8)	IV	生駒山西麓産陶土。口縁部端面：櫛描列点(上半)+櫛描扇状紋(下半)+刺突紋+円形浮紋(中央)

遺物 番号	調査 区	遺構・層	種類	器種	法量(cm)			時期	技法・特徴・備考
					口径	底径	器高		
621	5区	4140溝	弥生土器	広口壺	(29.4)		(9.6)	IV	口縁部外面：凹線紋、口上面：櫛描列点紋 頸部外面：ハケ+凹線紋、口内面：ハケ後ナデ
622	5区	4140溝	弥生土器	高杯	(39.0)		(5.5)	IV	表面磨滅のため調整不明。口縁部外面：凹線紋
624	5区	4141溝	弥生土器	有孔鉢		2.9	(6.65)	V	内外面：ハケ
631	5区	4101溝	弥生土器	甕	(15.4)	体部最大径 (21.6)	(23.65)	Ⅲ後	外面：ハケ、内面：ナデ 口縁部内面：ハケ
632	5区	4112溝	弥生土器	広口壺	(27.0)		(17.95)	I末 ～Ⅱ初	口縁端部：1条の沈線紋と下端にキザミ 頸部外面：目の細かいハケ後、6条の沈線紋を2帯 頸部内面：ハケ又は板状工具によるナデ
633	5区	4112溝	弥生土器	広口壺	(25.6)	(7.4)	(37.4)	II	颈部～肩部外面：複合櫛による直線紋10帯+波状紋4帯 体部外面下半：ミガキ。下端にはミガキの前のハケが残る 口縁部～頸部内面：ハケ。体部内面：ナデ。底部に木葉紋
634	5区	4128溝	弥生土器	高杯		脚周径 (15.0)	(12.2)	Ⅳ後	表面磨滅のため調整不明瞭。脚部外面：ミガキ、円孔3方 脚部内面：ミガキか？ 脚部内上端から杯部に貫通する小孔あり
635	5区	4128溝	弥生土器	器台			(12.8)	Ⅴ前	表面磨滅のため調整不明。円孔4方
636	5区	4155溝	弥生土器	台付鉢		脚台径6.4	(8.7)	II	内外面：ナデ。台部に小孔2方
637	5区	4155溝	弥生土器	広口壺	(15.5)	6.1	32.5	I末 ～Ⅱ初	口縁端部：キザミ。体部外面：ミガキかナデかは不明瞭 口縁底面はヨコナデ。体部内面：ナデ。頸部と体部にヘラ指による多条沈線紋
638	5区	4152溝	弥生土器	壺	(12.2)	天井部径 7.0	6.8	中期	外面：ハケ後ナデ。内面：ナデ。天井部に穿孔
639	5区	4168溝	弥生土器	鉢 or 壺			(2.9)	II	外面：櫛描流水紋+波状紋。内面：ナデ
640	5区	4168溝	弥生土器	無頸壺	(9.8)		(6.6)	II	口縁部外面：ヨコナデ。外面：ミガキ。内面：ナデ
641	5区	4185溝	弥生土器	広口壺	(19.0)		(8.8)	I末	口縁端部上下端：キザミ。頸部：ヘラ指沈線紋8条 体部外面：ハケ。内面：表面磨滅のため調整不明
642	5区	4182溝	弥生土器	壺		体部最大径 (22.0)	(16.6)	中期後半	肩部外面：ハケ後櫛描直線紋4帯以上（下から3・4帯間に同じ櫛描工具による繩線）。体部外面下半：ハケ後ミガキ 内面：板状工具によるナデ
643	6区	4427溝	弥生土器	甕	(33.5)	跨節径 (34.7)	(9.5)	Ⅱ初	表面磨滅のため調整不明。口縁端面：キザミ 颈部：キザミ目突帶貼付後、櫛描直線紋4帯
644	6区	4451溝	弥生土器	甕	(35.4)	体部最大径 (36.0)	(19.0)	I末	口縁部：ヨコナデ。口縁端部下端：キザミ（底紋しない部分もあり）。外面：ハケ後頸部にヘラ指沈線紋4条と貼付突帶 内面：ナデ
645	6区	4441溝	弥生土器	甕蓋	20.0	天井部径 5.35	11.0	中期	内外面：ハケ
646	6区	4441溝	弥生土器	広口壺	(15.2)		(6.85)	II	口縁端部上下端：キザミ。頸部外面：板状工具によるナデ後複合櫛による直線紋と波状紋 内面：板状工具によるナデ後ナデ
647	6区	4441溝	弥生土器	広口壺	(23.4)		(26.1)	II	表面磨滅のため調整不明。口縁端部下端：キザミ 頸部：櫛描直線紋3帯。肩部：櫛描波状紋5帯
648	6区	4438溝	弥生土器	壺	体部最大径 13.4	(5.75)	(15.5)	II	外面：表面磨滅のため調整不明。底部：木葉紋 内面：ナデ
649	6区	4475溝	弥生土器	器台	(18.9)		(17.4)	Ⅴ	口縁部外面：櫛描波状紋。受部上面：ハケ後ミガキ リ裏面：ハケ。胴部：ミガキと円孔2段5方。内面：ナデ
650	6区	4487溝	弥生土器	甕	(17.6)		(6.6)	II	表面磨滅のため調整不明瞭。外面：ハケ
652	6区	4530溝	弥生土器	広口壺	(14.6)	(5.7)	26.2	Ⅲ前	口縁部内面：ハケ。口縁端部：ヨコナデ。体部内面：ナデ 体部外面上半：ハケ後ミガキ リ下半：ケズリ後ミガキ
653	6区	4531溝	弥生土器	広口壺	体部最大径 23.35	6.85	(28.3)	中期後半	内外面：ハケ。肩部に「×」のヘラ記号。下部側面に穿孔あり。 底部：木葉紋
654	6区	4542溝	弥生土器	広口壺	体部最大径 11.6	5.8	(16.5)	II	外面：ハケ後ナデ 内面：ナデ
655	6区	4544溝	弥生土器	細頸壺	9.85		6.55	II	表面磨滅のため調整不明瞭。内面：ナデか？ 外面：櫛描直線紋3帯（上1帯は眉形紋を加えた疑似流水紋）
656	6区	4542溝	弥生土器	鉢	(16.4)	6.0	11.4	II	表面磨滅のため調整不明
657	6区	4544溝	弥生土器	鉢	(30.0)	8.9	24.0	II	表面磨滅のため調整不明瞭。外面：ハケ。内面：ナデ
658	6区	4512溝	弥生土器	広口(短頸)壺	(16.0)		(9.0)	I末 ～Ⅱ初	表面磨滅のため調整不明瞭。口縁部：ヨコナデ 頸部：頸部ヘラ指沈線5条
659	5区	4160溝	弥生土器	甕	(27.4)	6.8	29.7	II	口縁端部下端：キザミ。体部上半ハケ後、3帯の櫛描直線紋 下半及び内面：表面磨滅のため調整不明
660	6区	4506溝	弥生土器	広口壺	(27.4)		(10.3)	II	表面磨滅のため調整不明瞭。口縁部内面：ハケ
661	1区	4515溝	弥生土器	広口壺	16.2	6.0	28.0	Ⅲ前	口縁端部上下端：キザミ。頸部～肩部：ハケ後。櫛描直線紋5帯。その後櫛描紋間にミガキ（肩部のハケは非常に細かい） 体部中央付近内面：板状工具によるナデ 接点が小さく復元できなかったため、図上で合成復元
662	6区	4560墓壙	弥生土器	短刻壺		体部最大径 (41.6)	(48.8)	Ⅳ後	外面上半：ハケ後ミガキ。径20cm程度の円形の黒斑あり。 リ下半：ケズリ後ミガキ。内面上半：粗いハケ リ下半：粗いハケ後一部ナデ。底部に穿孔

石製品一覧表

遺物番号	調査区	造様・層	種類	法量(cm)			重量(g)	技法・特徴・備考
				長さ	幅	厚さ		
69	4区	591 ピット	砥石	23.5	5.6	3.0	422.0	流紋岩質凝灰岩 黄白色
112	3区	264 井戸	磨製石剣	(9.45)	3.1	0.7	31.6	(灰色) 泥質片岩
200	3区	豊穴建物8	打製石鎌	3.5	1.4	0.5	2.2	サスカイト 凸基式
201	3区	豊穴建物8	打製石鎌	2.3	1.2	0.23	0.8	サスカイト 凸基式
210	3区	3128 ピット	打製尖頭器(石槍or石剣)	(3.8)	2.75	1.4	17.6	サスカイト
216	1区	3955 ピット (豊穴建物 18内)	石皿	(18.8)	13.0	10.5	319.5	砂岩 3面使用
220	3区	3057 凹丸	敲石	9.9	10.15	7.4	1244.7	焼レイ岩 生駒山西麓産か?
361	5区	3001溝	打製尖頭器(石槍or石剣)	16.1	2.8	1.7	83.5	サスカイト
362	5区	3001溝	打製尖頭器(石剣or石槍)	(9.2)	3.05	1.6	55.1	サスカイト
363	3区	3001溝	石錐	(3.3)	1.05	0.7	2.4	サスカイト
364	3区	3001溝	打製石鎌	(5.15)	1.8	0.4	2.8	サスカイト 凸基式
365	3区	3001溝	磨製石剣	(4.9)	3.2	0.7	14.0	(黒色) 泥質片岩
366	3区	3001溝	大型石庖丁	(10.4)	(8.1)	1.0	97.4	(黒色) 泥質片岩
367	5区	3001溝	(柱状) 砥石	34.1	10.0	5.7	364.0	凝灰岩
433	3区	3533溝	石錐	(3.0)	1.4	0.35	1.3	サスカイト
450	3区	3534溝	打製石鎌	(2.5)	1.1	0.25	0.6	サスカイト 凸基式
451	3区	3534溝	石錐	(5.1)	(3.7)	0.9	20.0	サスカイト
452	3区	3534溝	磨製石錐?	(8.6)	(3.3)	(1.3)	47.0	(黒色) 泥質片岩
453	4区	3535溝	磨製石剣	(5.4)	2.95	0.5	13.0	(黒色) 粘板岩
491	5区	4201溝	大型石庖丁	29.5	13.3	0.6	356.9	(灰色) 粘板岩
492	5区	4201溝	大型石庖丁	21.75	11.25	0.8	243.5	緑色片岩
493	3区	3363溝	半磨製尖頭器(石錐)	12.7	3.3	1.1	58.2	サスカイト 下半に刃潰し
494	5区	4201溝	半磨製尖頭器(石槍)	(9.3)	3.15	1.4	46.1	サスカイト
495	5区	4201溝	有柄式磨製石剣の柄	(5.2)	4.2	1.2	27.9	サスカイト 持ち手部分の幅は2.5cm
496	5区	4201溝	石錐	4.25	1.7	0.65	5.8	サスカイト
497	5区	4201溝	石錐	(6.6)	2.1	1.35	16.8	サスカイト
519	2区	3600溝 (周溝墓 45 東邊)	打製石鎌	3.0	1.45	0.4	1.4	サスカイト 凸基式
522	2区	3606溝	磨製石剣?	(7.1)	4.7	0.8	39.9	(黒色) 泥質片岩 片刃=石庖丁からの転用か?
550	2区	3640溝	扁平片刃石斧	5.5	3.5	0.95	36.2	凝灰岩 (鶴川石か)
564	1区	3920溝	石錐	3.65	1.3	0.6	3.0	サスカイト
565	1区	3921溝	磨製石剣(石戈?)	(9.4)	5.35	1.0	56.5	(やや灰色) 粘板岩
570	1区	4024 草塚	管玉	0.85	0.3	0.3	0.1	硬質のグリーンタフ 両側穿孔
571	1区	4024 草塚	管玉	0.7	0.32	0.32	0.1	
572	1区	4024 草塚	管玉	0.5	0.3	0.3	0.1	
573	1区	3939溝	打製尖頭器(石剣or石戈)	(13.2)	4.35	1.5	113.5	サスカイト
595	1区	4028 草塚	石錐?	(4.0)	4.0	0.6	13.4	三波川帶の(黒色) 泥質片岩 (いわゆる結晶片岩)
608	1区	3903溝	大型蛤刃石斧	(18.1)	7.25	6.3	1081.7	凝灰岩
609	1区	4038 草塚	打製石鎌	(2.5)	1.3	0.45	1.6	サスカイト 凸基式
610	1区	4039 草塚	打製石鎌	2.8	(1.85)	0.48	2.1	サスカイト 平基式
611	1区	4044 草塚	打製石鎌	2.35	1.6	0.28	1.1	サスカイト 平基式
612	1区	4040 草塚	石錐?	(3.8)	1.6	0.35	3.9	紅簾石片岩
617	5区	4196溝	大型蛤刃石斧	(11.85)	5.85	4.5	507.0	焼レイ岩 (針状の長石が特徴) 片刃気味の刃部
618	5区	4196溝	打製石鎌	(2.7)	2.4	0.5	2.9	サスカイト 有茎式
623	5区	4140溝	大型石庖丁	37.0	18.8	0.9	835.4	(黒色) 粘板岩 二次生成鉱物が付着
625	5区	4140溝	大型石庖丁	24.3	16.1	1.3	674.1	(黒色) 粘板岩
626	5区	4140溝	石庖丁	16.05	4.6	0.45	60.8	(黒色) 粘板岩 優溝分割
627	5区	4140溝	石庖丁	16.2	4.05	0.4	55.4	(黒色) 粘板岩
628	5区	4140溝	石庖丁	(15.6)	5.0	0.5	66.8	(黒色) 粘板岩
629	5区	4140溝	石庖丁	14.4	5.4	0.75	76.8	(灰色) 凝灰質片岩
630	5区	4140溝	石庖丁	12.65	4.95	0.8	72.0	(灰色) 泥質片岩
651	6区	4571 草塚	打製石鎌	2.0	1.5	0.4	0.9	サスカイト 四基無茎式

土製品一覧表

遺物番号	調査区	遺構・層	種類	法量(cm)			時期	技法・特徴・備考
				長さ	幅	厚さ		
256	1区	4029 土坑	匙形土製品	(5.3)	(2.4)	1.4	中期	柄の径は 1.7 × 1.4
368	3区	3001 潟 (上面の 343 ピット出土)	鋸鋸形土製品	残存高 (7.8)	復元 (6.2)	復元 (5.3)	(IV末～V初)	8頭の鹿・斜格子紋・斜線紋(絞杉紋)の線刻
389	3区	3013 潟	高杯形土製品	口(内)径 21.6～22.0	脚部径 (16.1)	器高 29.1	V初	杯部内外面：粗いハケ、外面に上向きの鉤状突起 6箇所(器壁に挿入)、側面に注口 脚柱部：棒に巻いて成形、外面：ケズリ 脚脚部：ハケ
390	3区	3013 潟	送風管	(14.8)	外径 5.3 × 6.0 内 径 3.0 × 3.5	器壁厚 0.9～1.5	V初	外面：ケズリ 内面：棒状工具へ巻き付け わずかに曲がる
498	5区	4201 潟	人形土製品	5.9	3.0	3.0	II	自立、右耳一部欠損、額部横ナデ、眉・鼻・耳 は粘土貼り付け

鉄製品一覧表

遺物番号	調査区	遺構・層	種類	法量(cm)			技法・特徴・備考
				長さ	幅	厚さ	
47	3区	19 柱穴(掘立1)	釘	(6.1)	0.55	0.55	
68	3区	364 ピット	刀子	(9.1)	(2.4)	(0.6)	両端欠損
90	4区	599 墓	釘	(3.15)	0.85	0.65	
91	4区	599 墓	釘	復元 (4.6)	0.5	0.65	直角に折れ曲がる

木製品一覧表

遺物番号	調査区	遺構・層	種類	法量(cm)					時期	技法・特徴・備考
				長さ	幅	厚さ	直径	高さ		
141	4区	512 井戸	曲物底板	11.6	10.9	0.7			12C～13C初	
174	5区	1274 井戸	曲物底板	(14.0)	(11.6)	0.5				
175	5区	1274 井戸	曲物底板	12.2	12.4	0.9				
176	5区	1274 井戸	下駄	24.3	12.9	3.1				通漬下駄
177	5区	1215 井戸	曲物(井戸枠)				46.8	22.6		
178	5区	1215 井戸	曲物(井戸枠)				46.0	22.6	12C前半	
179	5区	1274 井戸	曲物(井戸枠)				39.9	26.0		
180	5区	1274 井戸	曲物(井戸枠)				36.7	(17.0)		
181	5区	1274 井戸	曲物(井戸枠)				37.2	22.7		
182	5区	1274 井戸	曲物(井戸枠)				37.0	(22.4)		
183	6区	1525 井戸	曲物(井戸枠)				48.1	30.0	11C後葉	

# 写 真 図 版



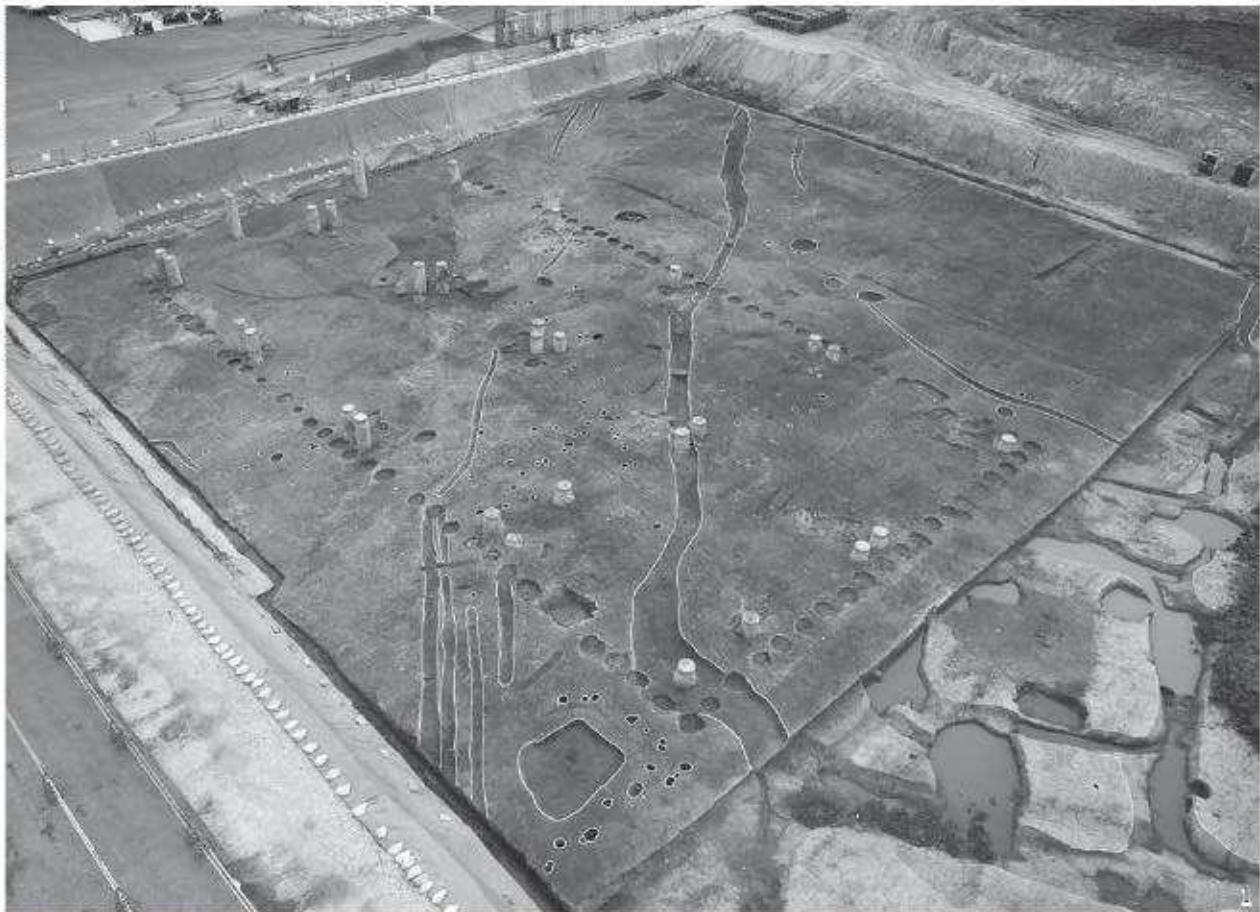
JR草木駅付近上空より北方を望む（中央やや下が調査地）



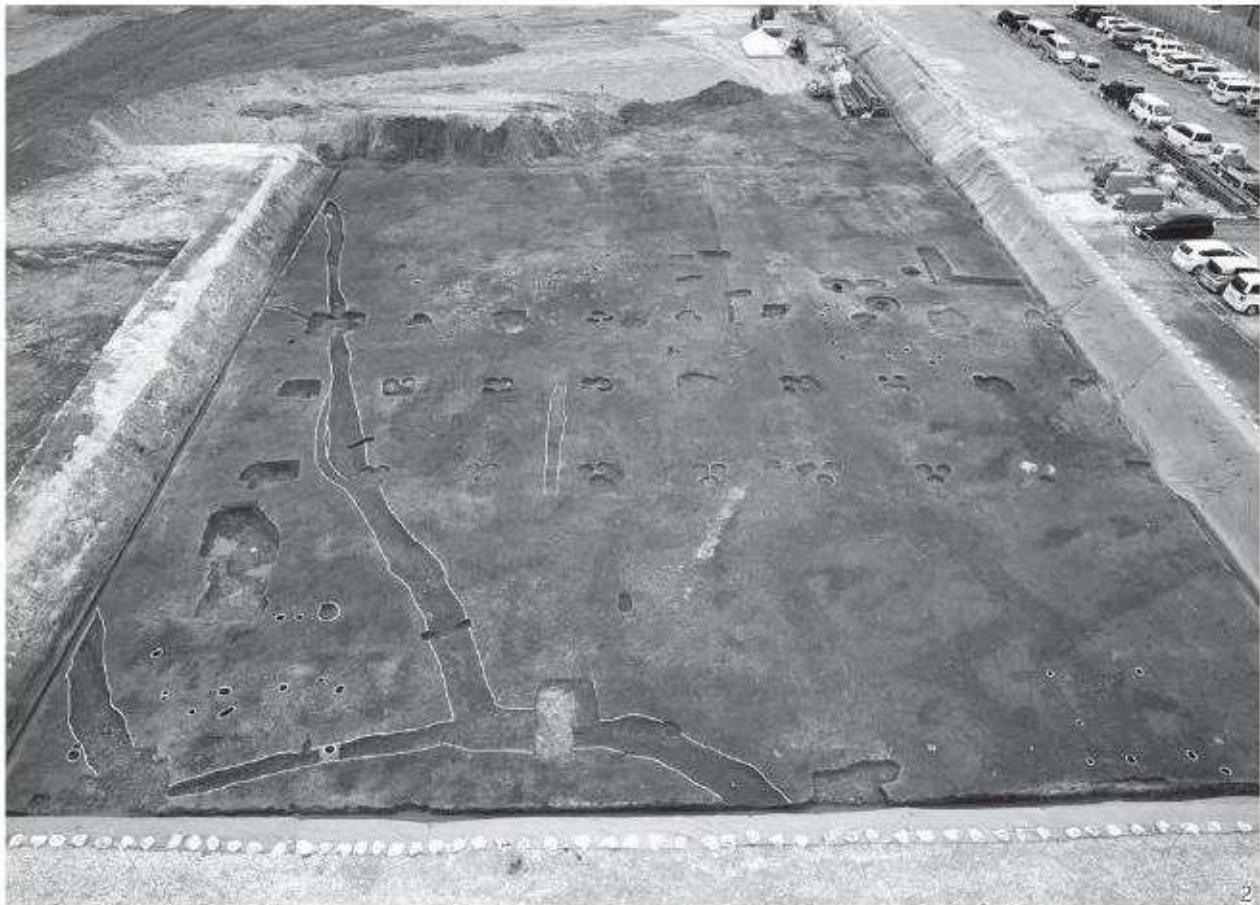
2区	1区
4区	3区
6区	5区



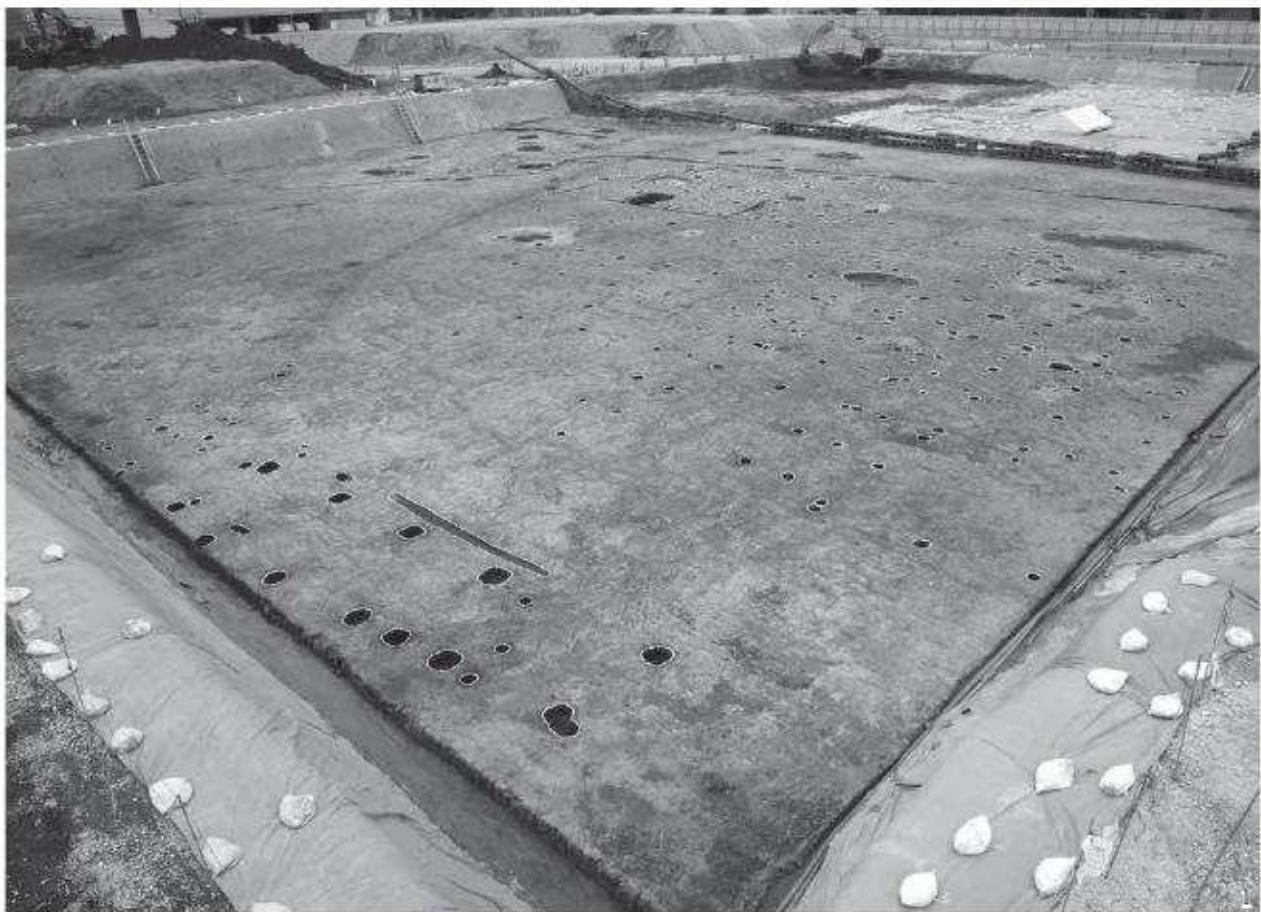
1. 4層上面遺構全景(空撮写真モザイク)



1. 1区全景〔北西から〕



2. 2区全景〔北から〕



1、3区全景〔北東から〕



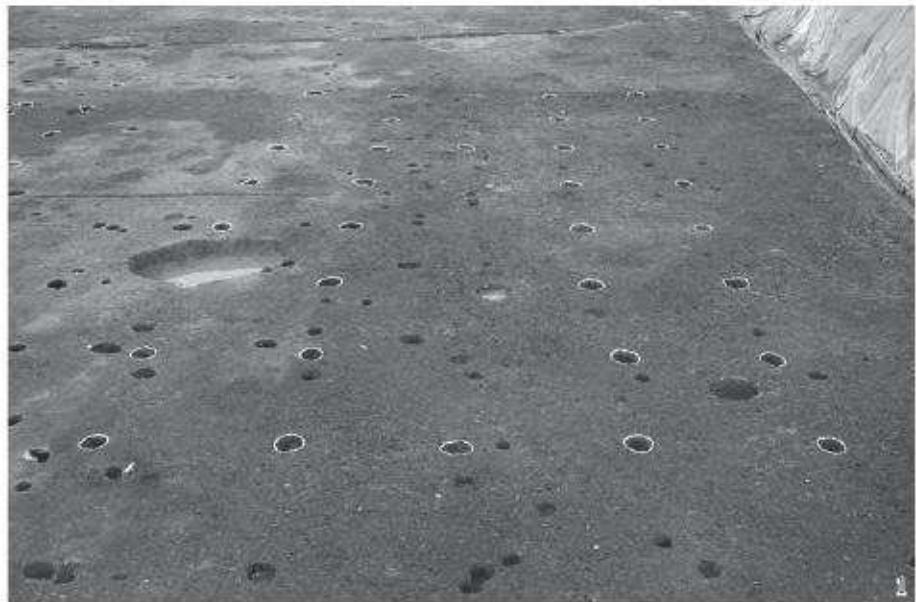
2、4区全景〔南から〕



1. 5区北端部全景〔東から〕



2. 6区北半部全景〔西から〕(手前には既に下層の方形周溝墓が見えている)



1. 掘立柱建物1 [東から]



2. 掘立柱建物5 [東から]



3. 掘立柱建物6 [南から]

(全て3区)

写真図版6  
4層上面遺構



1. 掘立柱建物 2・8 [北から] (3区)  
2. 掘立柱建物 7 [北から] (3区)

3. 掘立柱建物 9・10 [北から] (3区)  
4. 掘立柱建物 12・13 [東から] (4区)

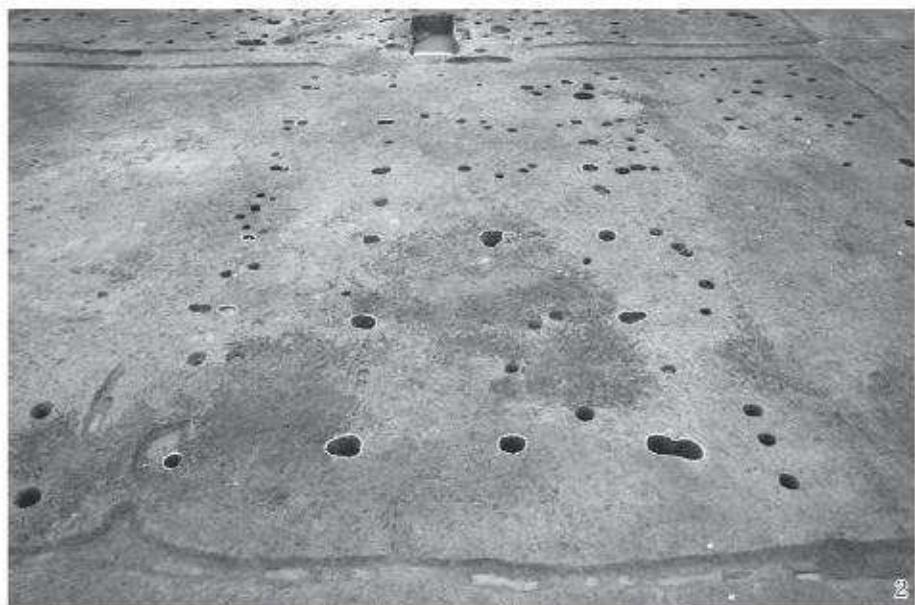


5. 掘立柱建物 14 [東から] (4区)  
6. 掘立柱建物 16・17 [東から] (4区)

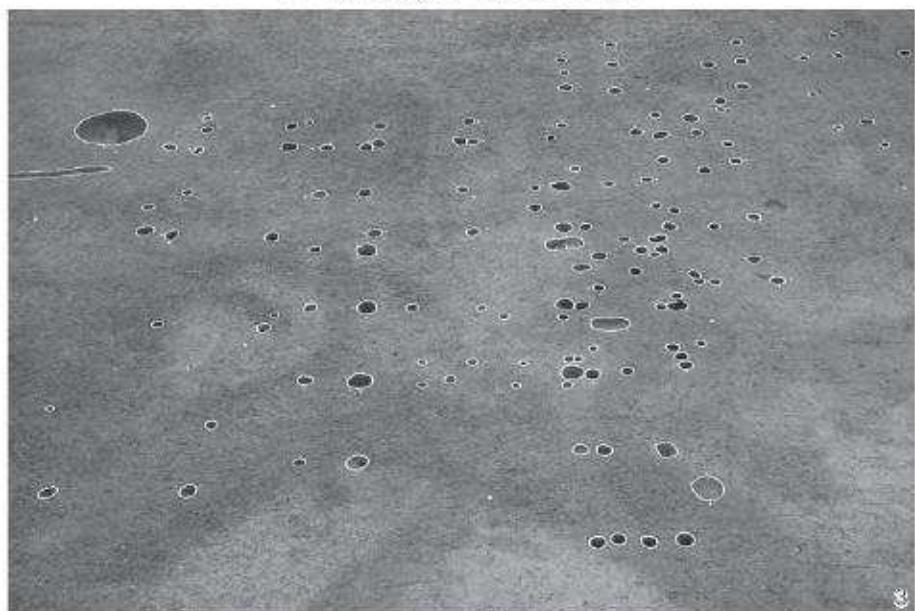
7. 掘立柱建物 18・19 [東から] (4区)  
8. 掘立柱建物 20 [東から] (4区)



1. 4区北半部調査風景〔東から〕

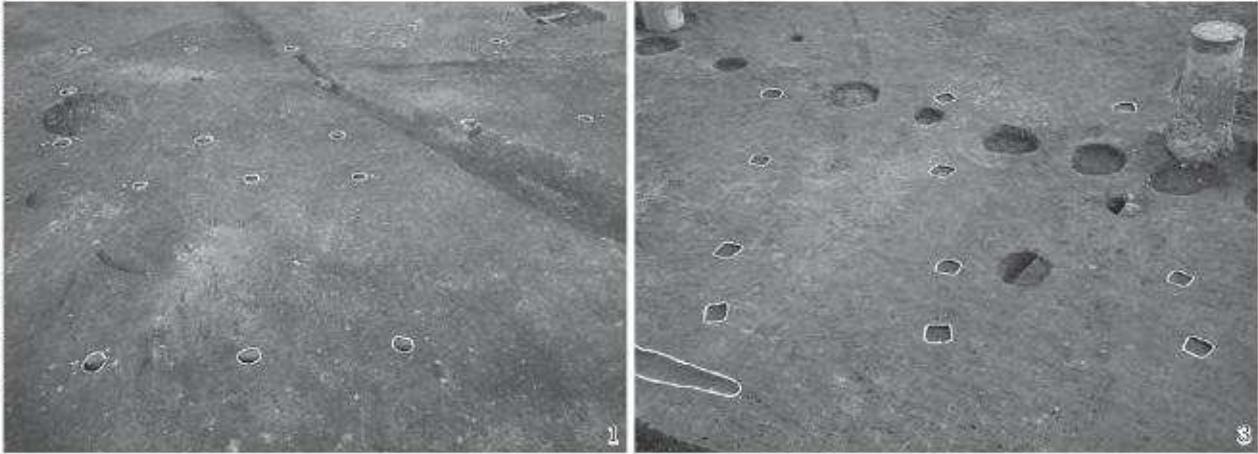


2. 掘立柱建物 15〔東から〕（4区）



3. 掘立柱建物 30・31・32〔西から〕（6区）

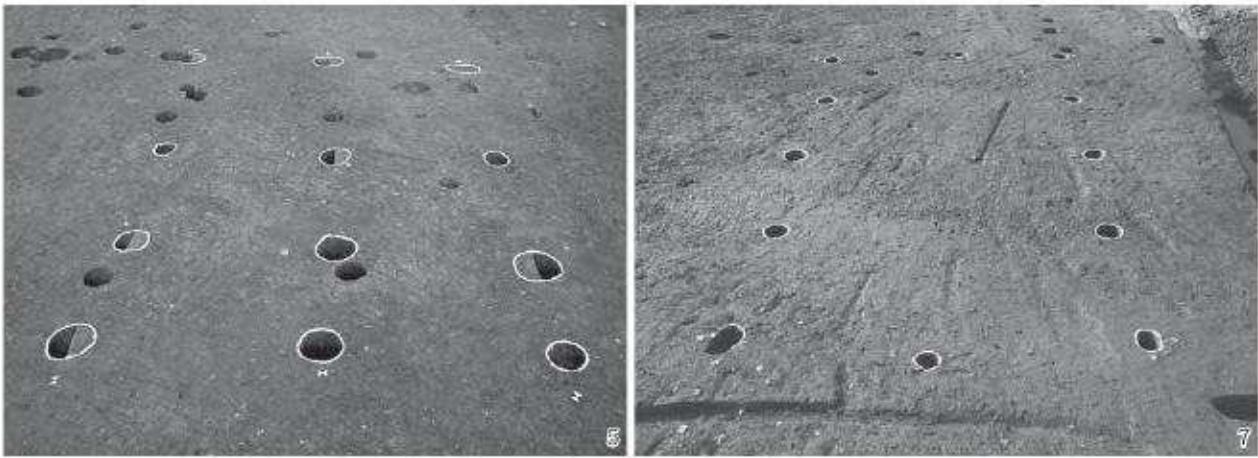
写真図版8  
4層上面遺構



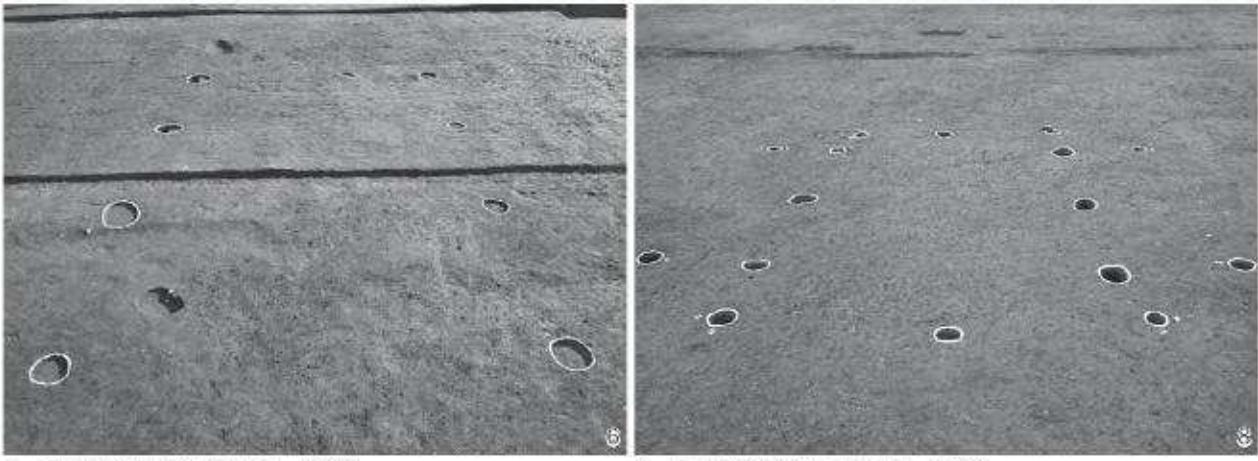
1. 掘立柱建物 21・24〔南から〕(1区)  
2. 掘立柱建物 22〔西から〕(1区)



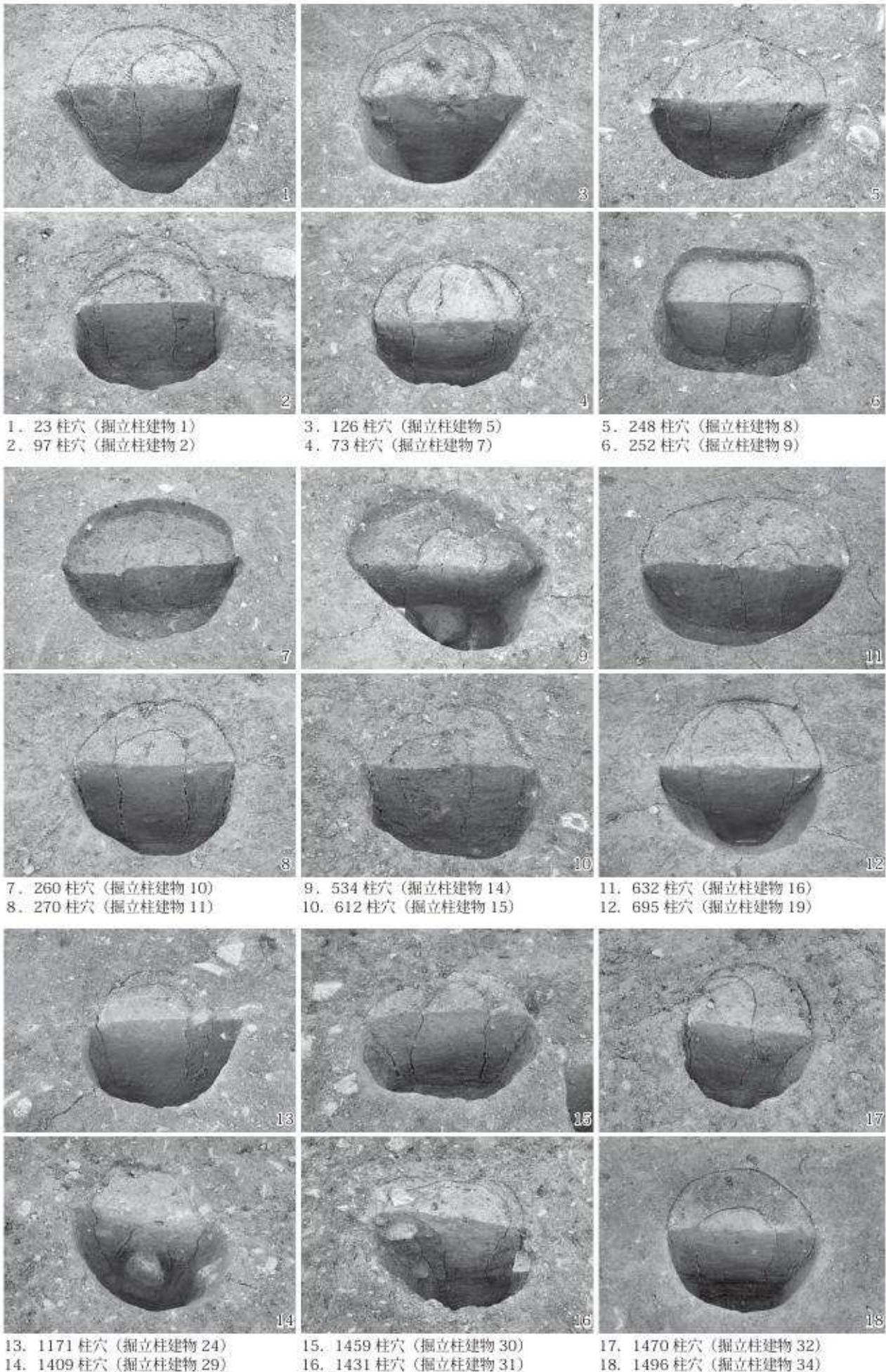
3. 掘立柱建物 23〔北から〕(1区)  
4. 掘立柱建物 25〔東から〕(5区)

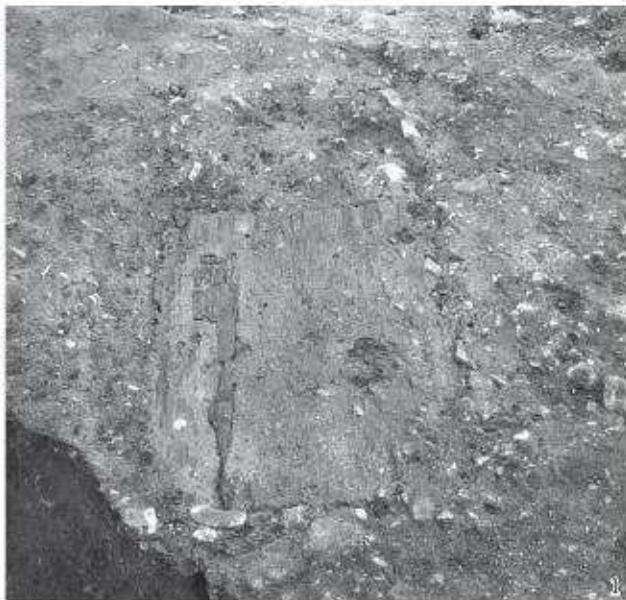


5. 掘立柱建物 27〔南から〕(5区)  
6. 掘立柱建物 28〔西から〕(5・6区)

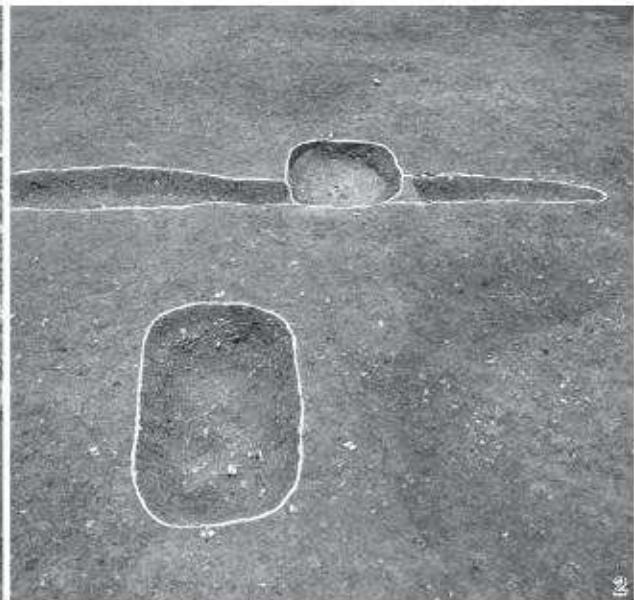


7. 掘立柱建物 29〔東から〕(6区)  
8. 掘立柱建物 33〔北から〕(6区)

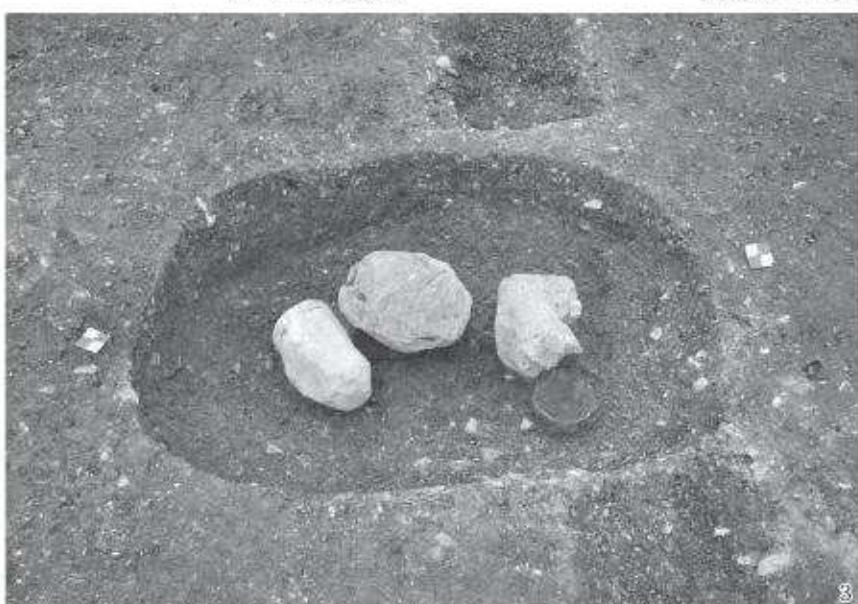




1. 471 墓 (3 区)



2. 592 墓 [奥]・599 墓 [手前] [北から] (4 区)



3. 592 墓



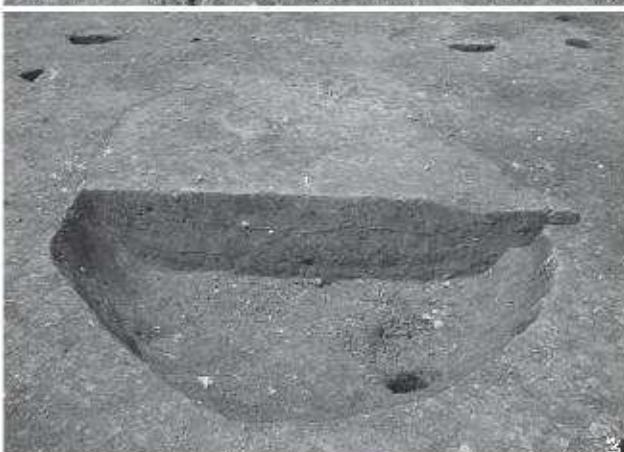
4. 592 墓木棺片出土状況



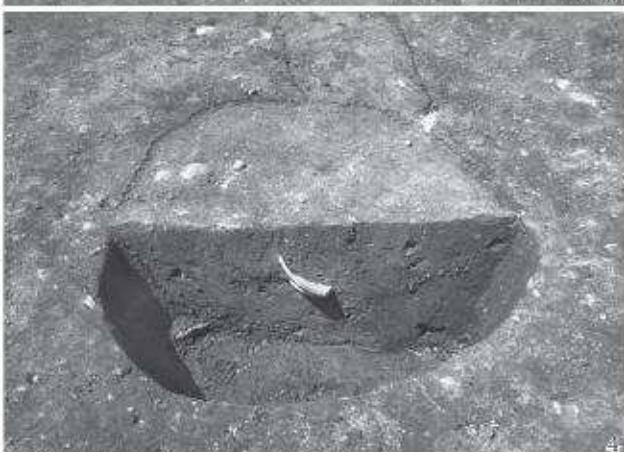
5. 599 墓



6. 599 墓白磁碗・短刀出土状況



1. 40 土坑 (3区)  
2. 41 土坑 (3区)



3. 67 土坑 (3区)  
4. 158 土坑 (3区)

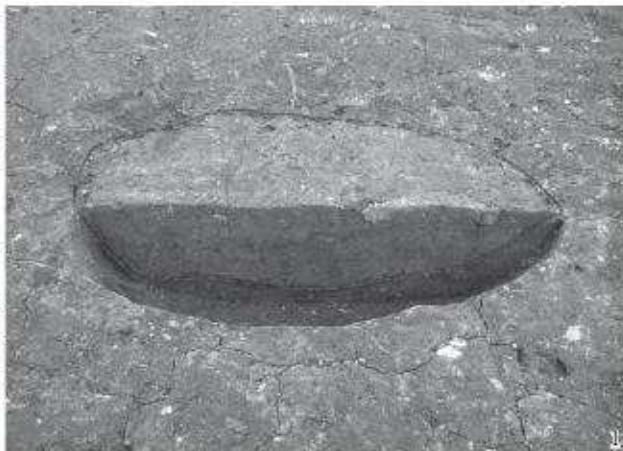


5. 461 土坑 (3区)  
6. 503 土坑 (4区)



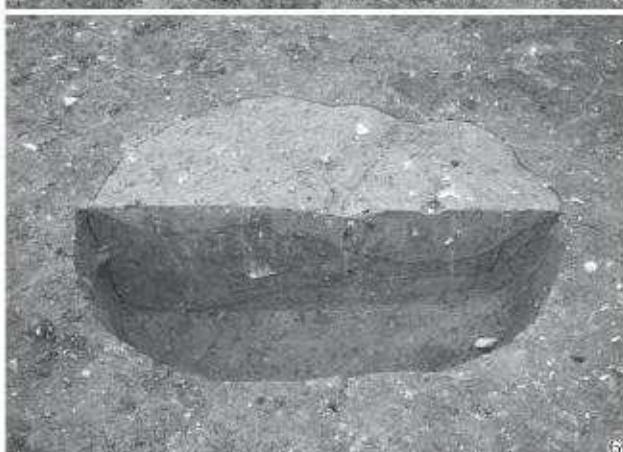
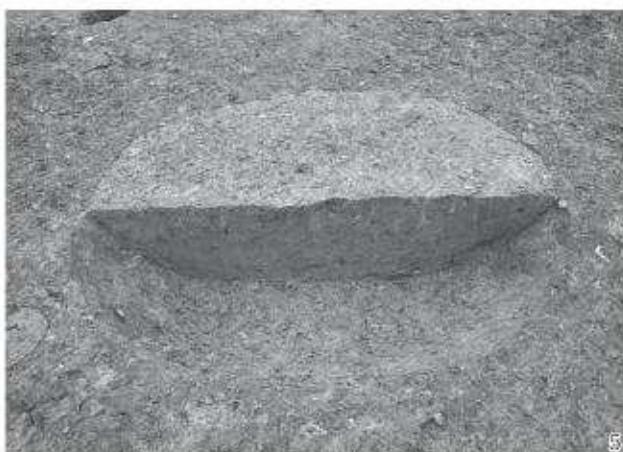
7. 516 土坑 (4区)  
8. 751 土坑 (4区)

写真図版 12  
4層上面遺構



1. 1004 土坑 (2 区)  
2. 1106 土坑 (1 区)

3. 1120 土坑 (1 区)  
4. 1121 土坑 (1 区)



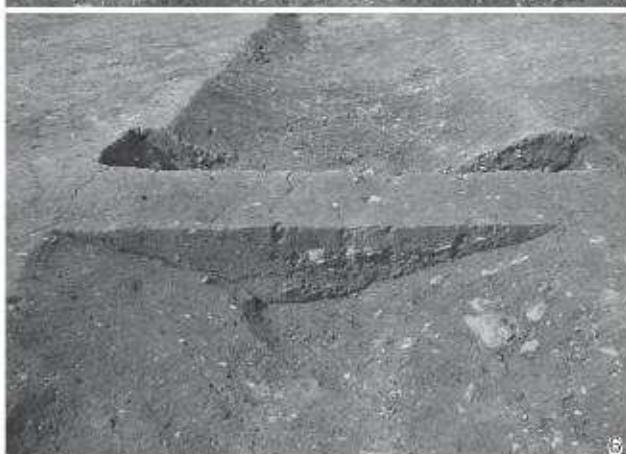
5. 1122 土坑 (1 区)  
6. 1217 土坑 (5 区)

7. 1218 土坑 (5 区)  
8. 1233 土坑 (5 区)



1. 1304 土坑 (5区)  
2. 1417 土坑 (6区)

3. 1445 土坑 (6区)  
4. 1494 土坑 (6区)



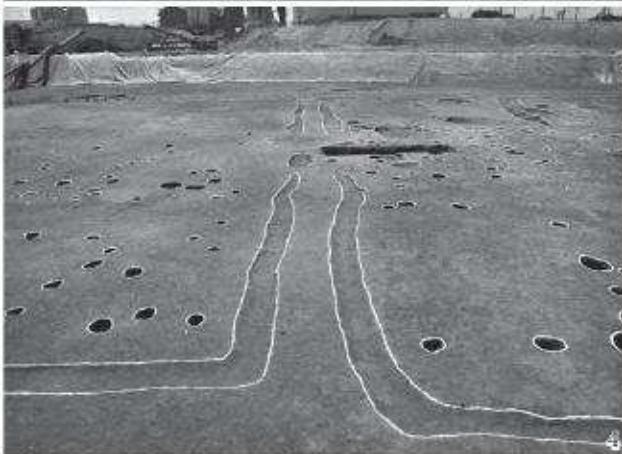
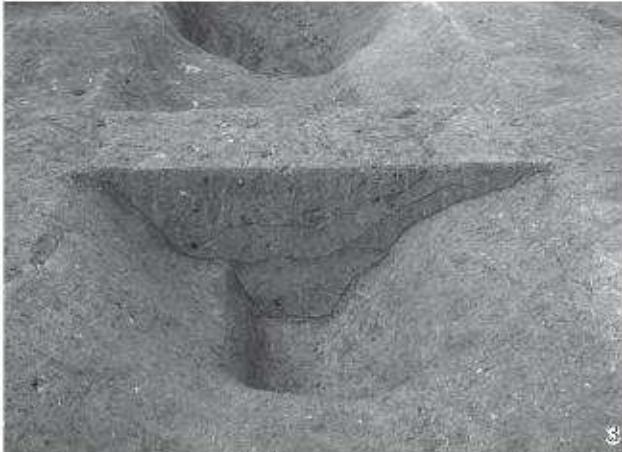
5. 162 溝 (3区)  
6. 307 溝 (2区側)

7. 307 溝 (3区北方)  
8. 307 溝 (3区南方)

写真図版 14  
4層上面遺構



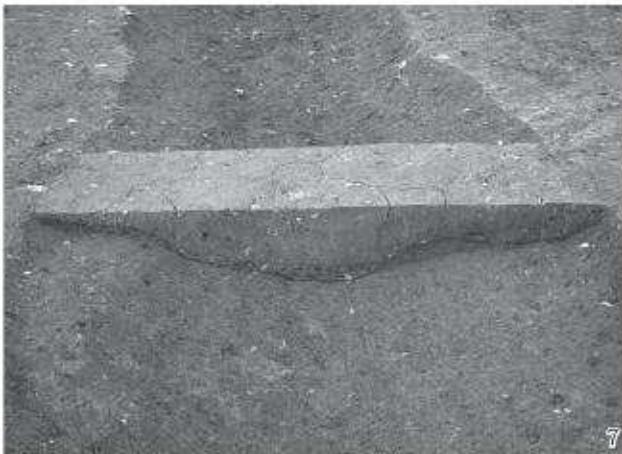
1. 381 溝 (3 区)  
2. 501 溝 (4 区)



3. 504 溝 (4 区)  
4. 586・587 溝 (4 区)



5. 586 溝 (4 区)  
6. 587 溝 (4 区)



7. 1000 溝 (1 区側)  
8. 1000 溝 (2 区側)



1



3



2



4

1. 1001 溝 (2区)  
2. 1108 溝 (1区)

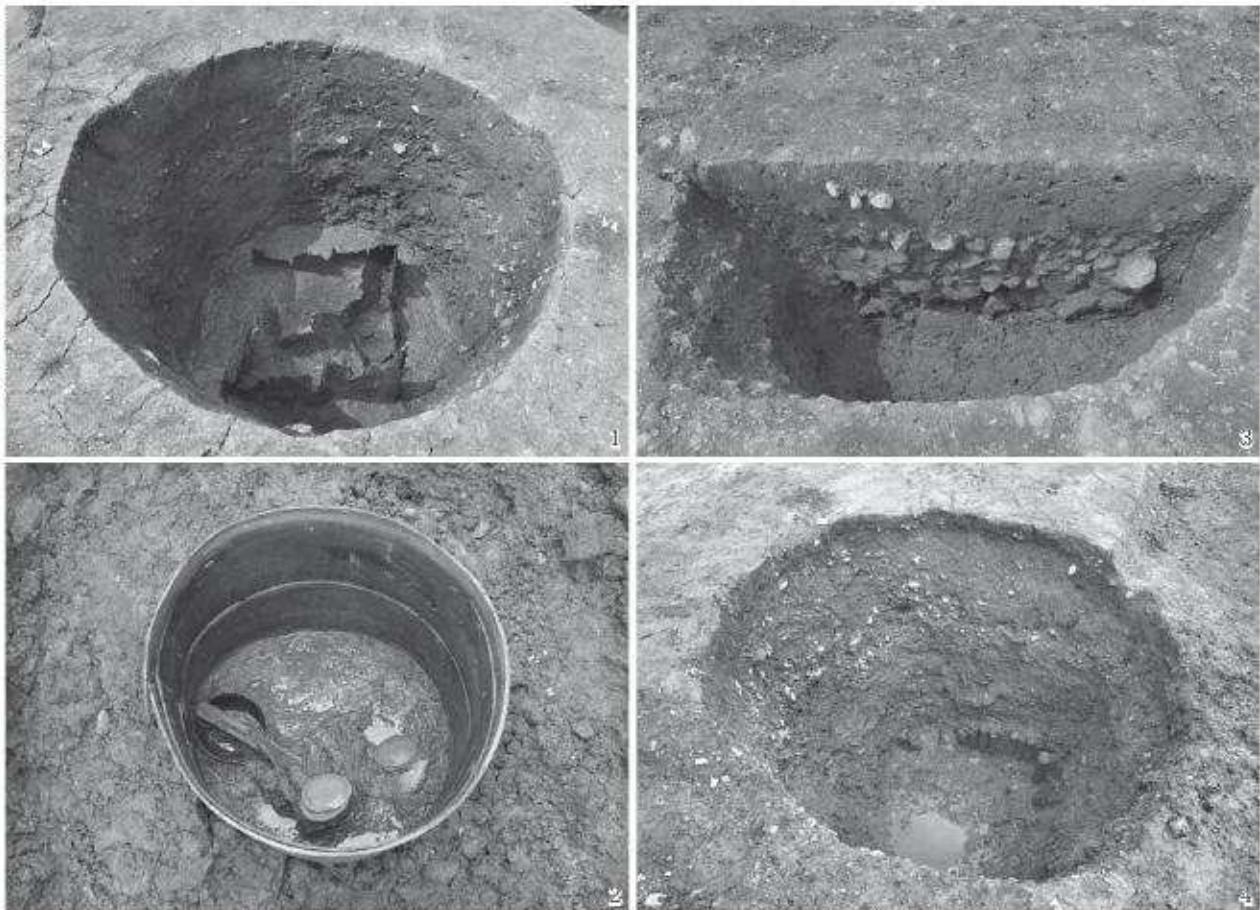
3. 1005 溝 (1区)  
4. 1464 溝 (6区)



5

5. 216 井戸 (3区)

写真図版 16  
4層上面遺構



1. 216 井戸枠板検出状況  
2. 216 井戸曲物内土器出土状況

3. 217 井戸  
4. 264 井戸

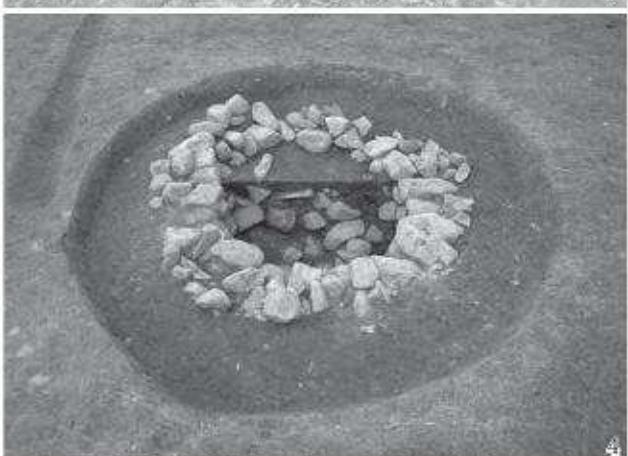


5. 301 井戸

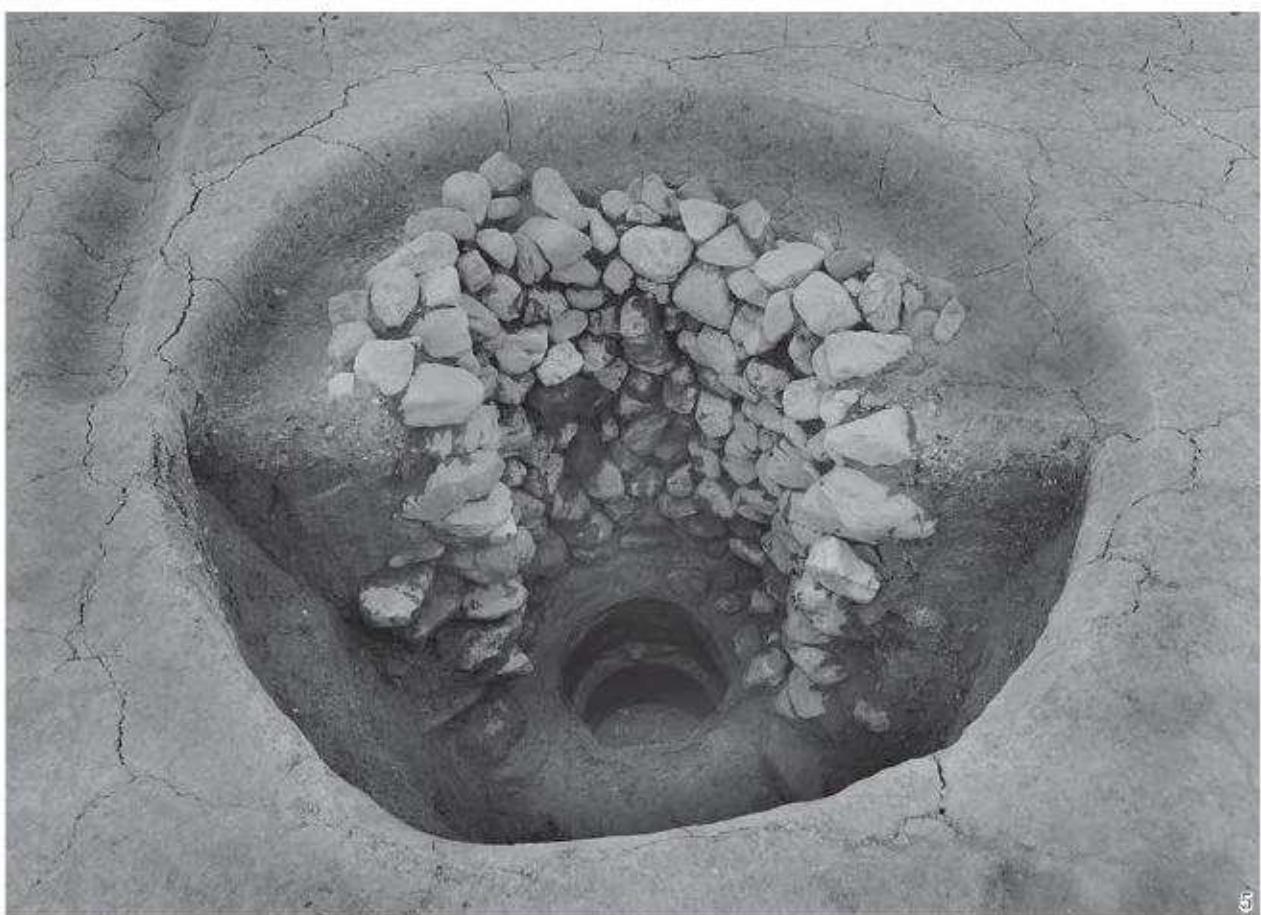
(全て3区)



1. 301 井戸上層土器出土状況  
2. 301 井戸中層土器出土状況



3. 511 井戸（4区）  
4. 512 井戸（4区）



5. 512 井戸（4区）

4層上面遺構



1



2



3

1. 1215 井戸（5区）  
2. 1215 井戸曲物



4



5



6



7

4. 1274 井戸曲物内下駄出土状況  
5. 1274 井戸曲物内土器出土状況

6. 1525 井戸（6区）  
7. 1525 井戸底曲物検出状況

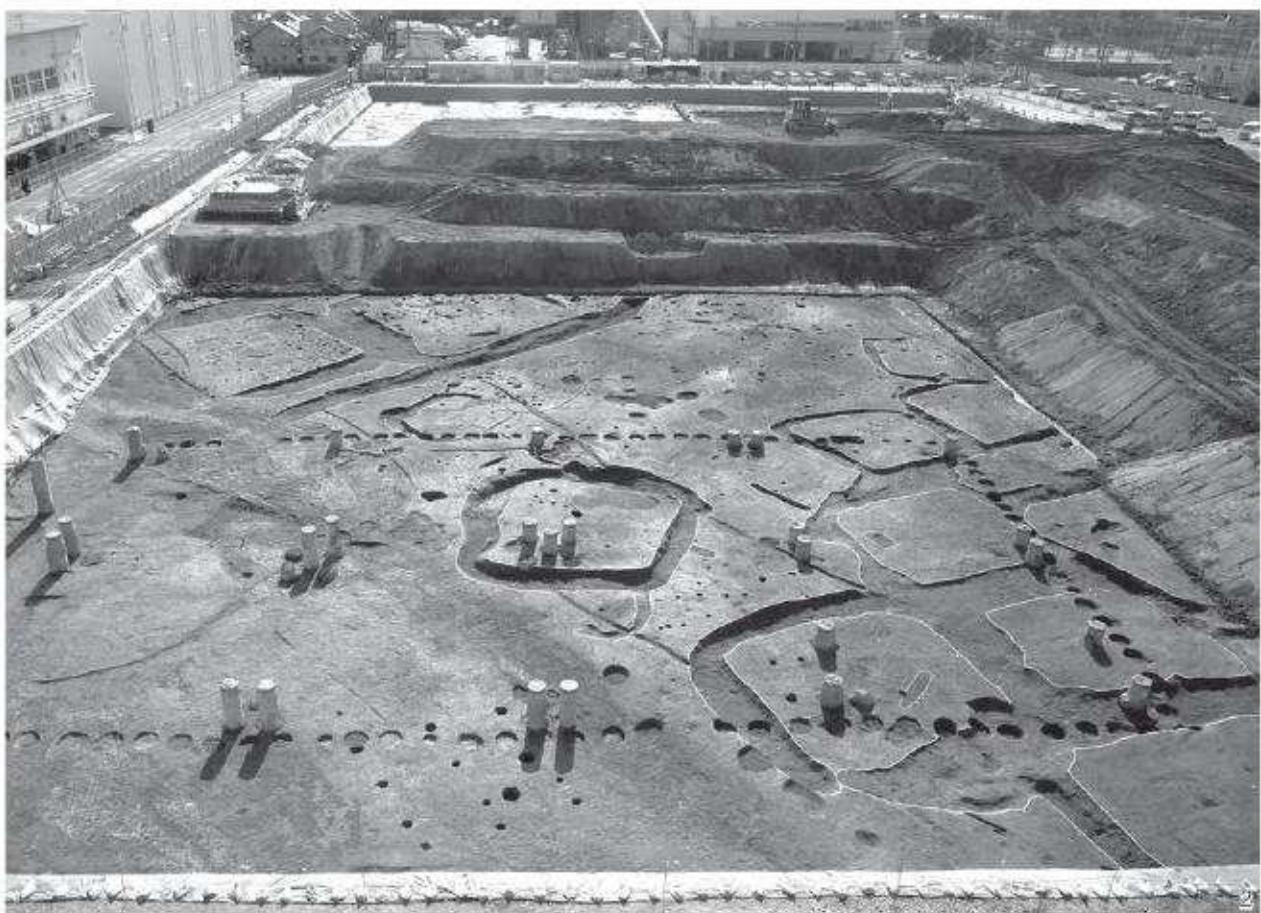
2区	1区
4区	3区
6区	5区



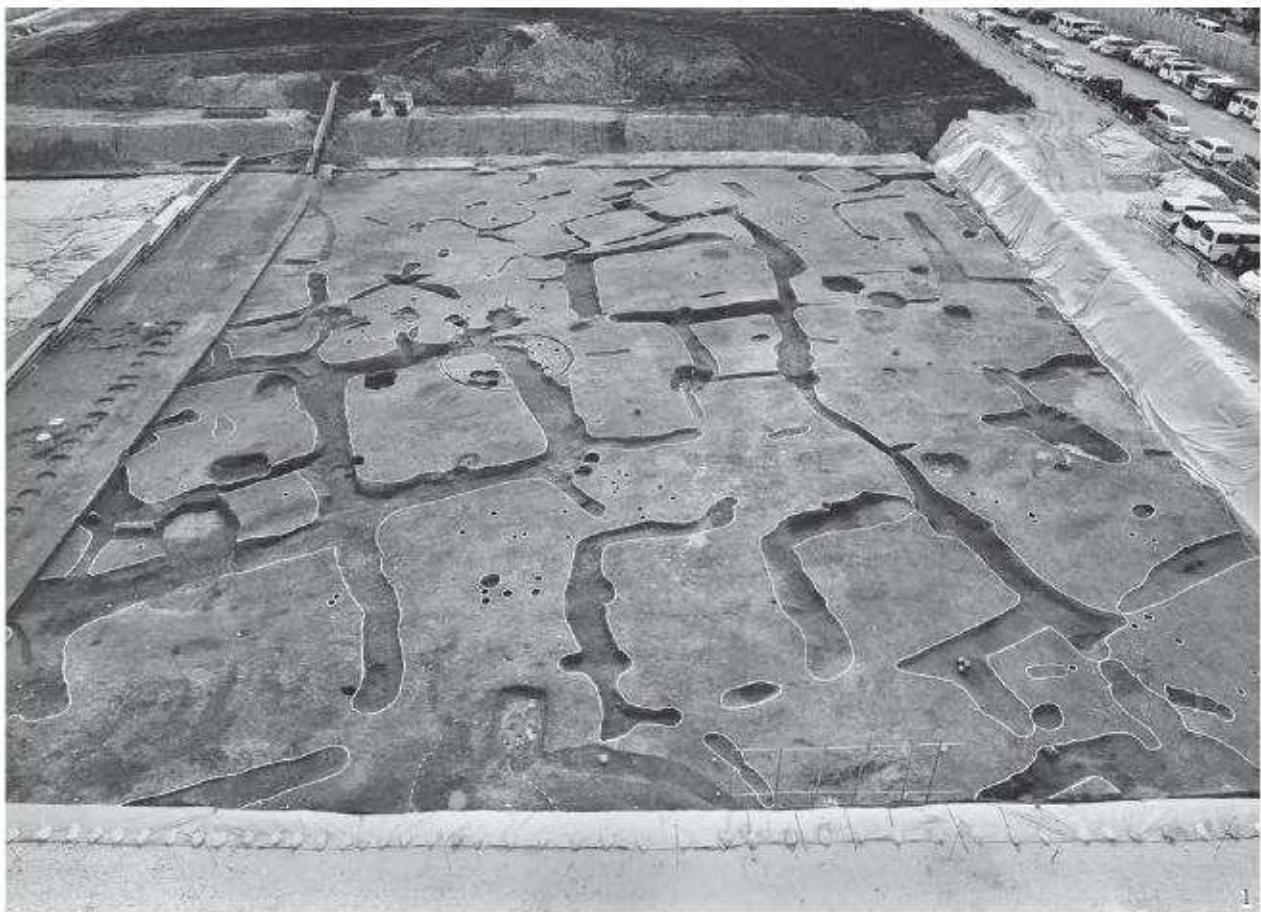
1, 4層下面遺構全景(空撮写真モザイク)



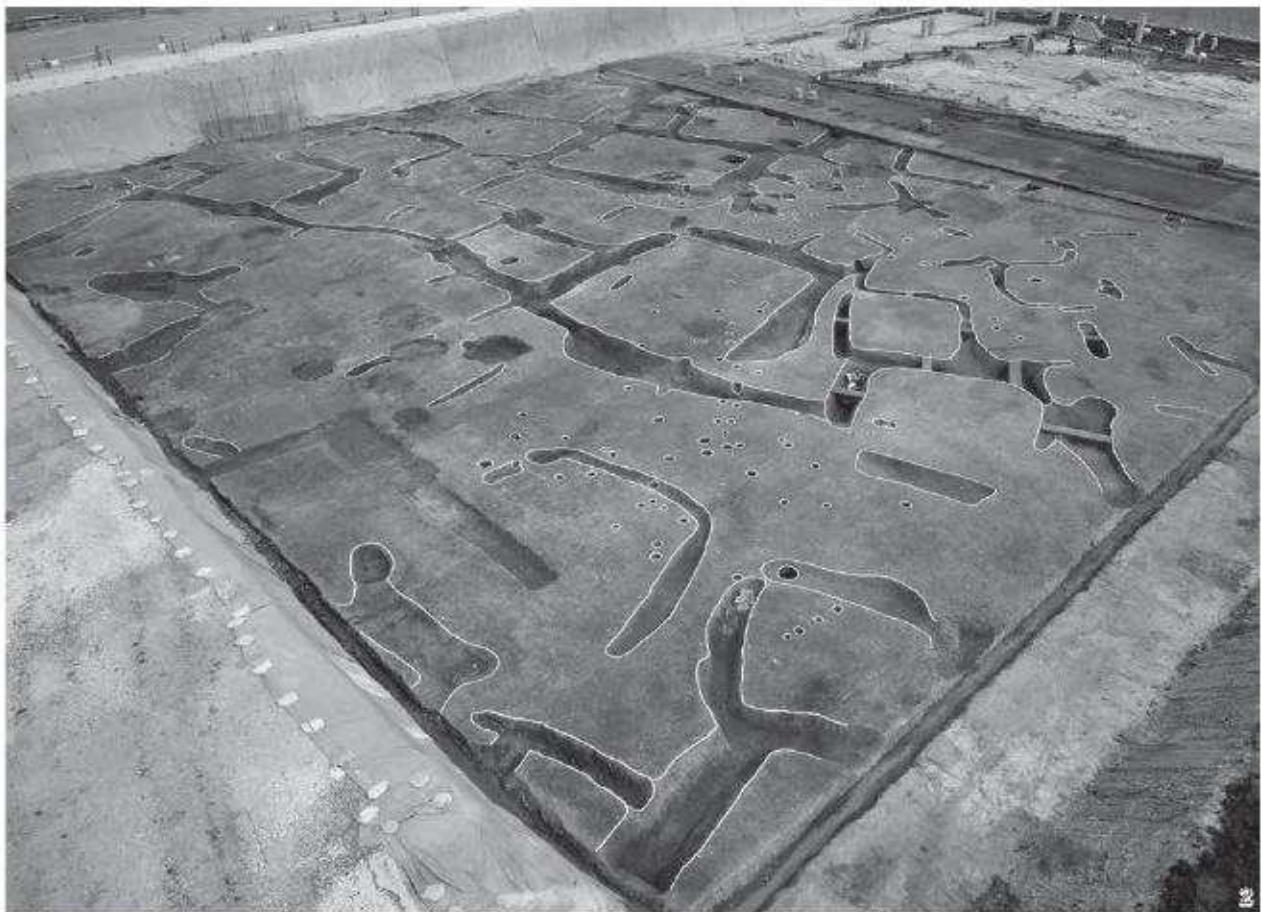
1. 1区全景〔東から〕



2. 1区全景〔北から〕



1, 2区全景〔北から〕



2, 2区全景〔南西から〕



1. 3・4区全景〔東から〕



2. 4区全景〔南東から〕



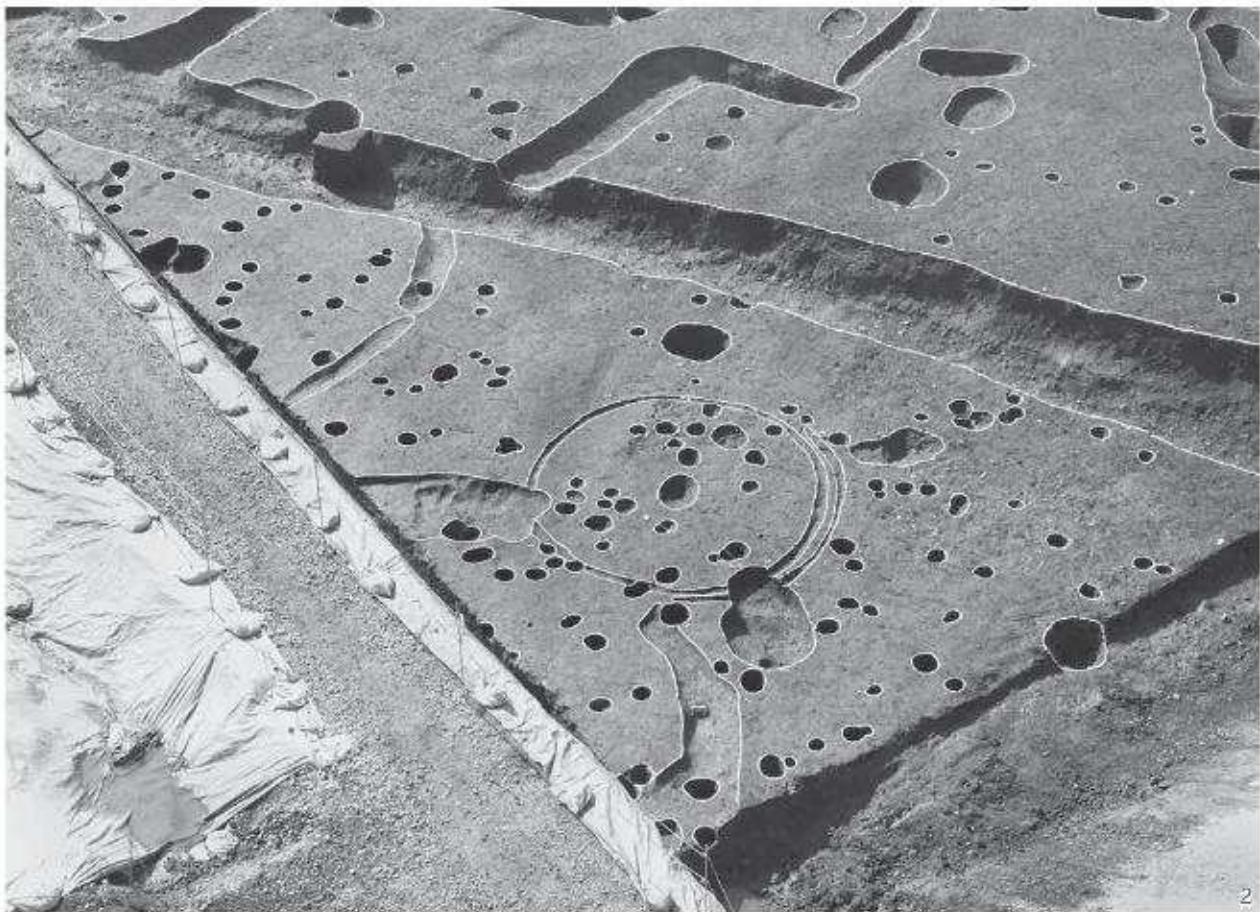
1, 5区全景〔北東から〕



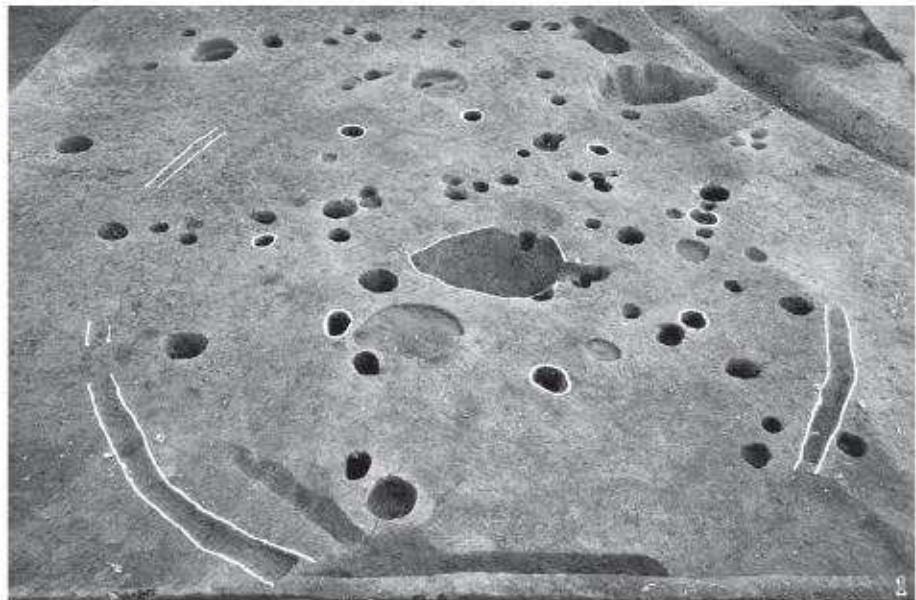
2, 5・6区全景〔西から〕



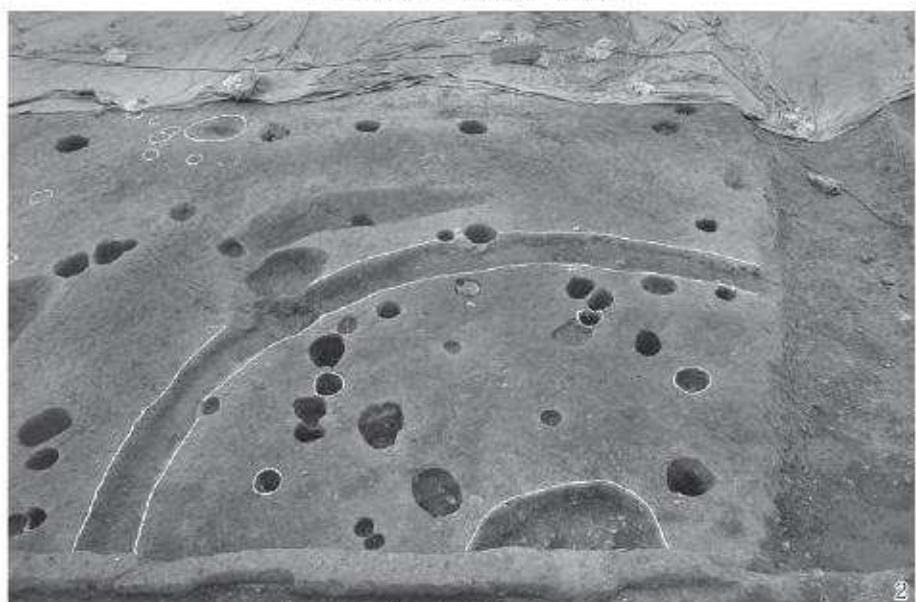
1. 集落〔奥〕と大型方形周溝墓〔手前〕〔3区南西から〕



2. 5区北東隅集落域〔北東から〕



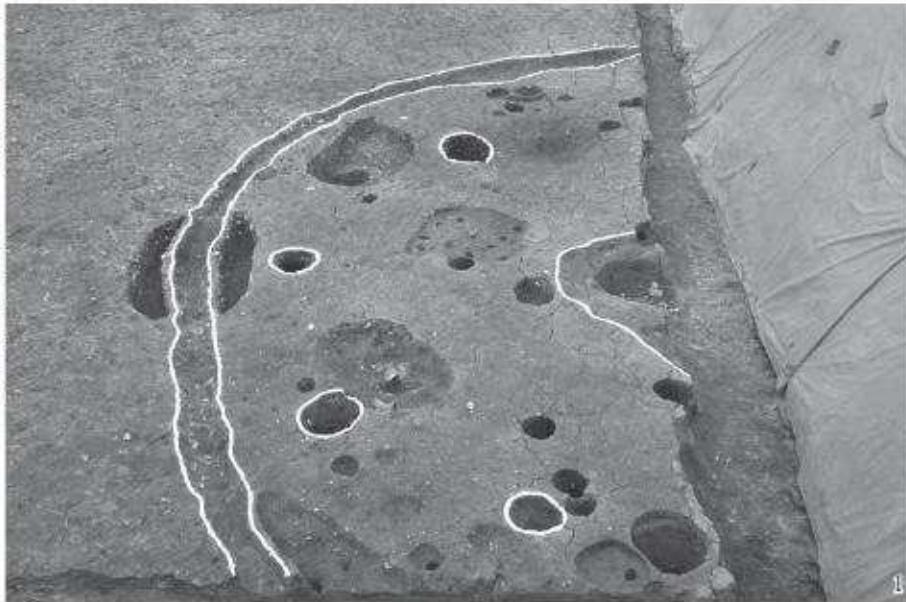
1. 竪穴建物 1 [北から] (3区)



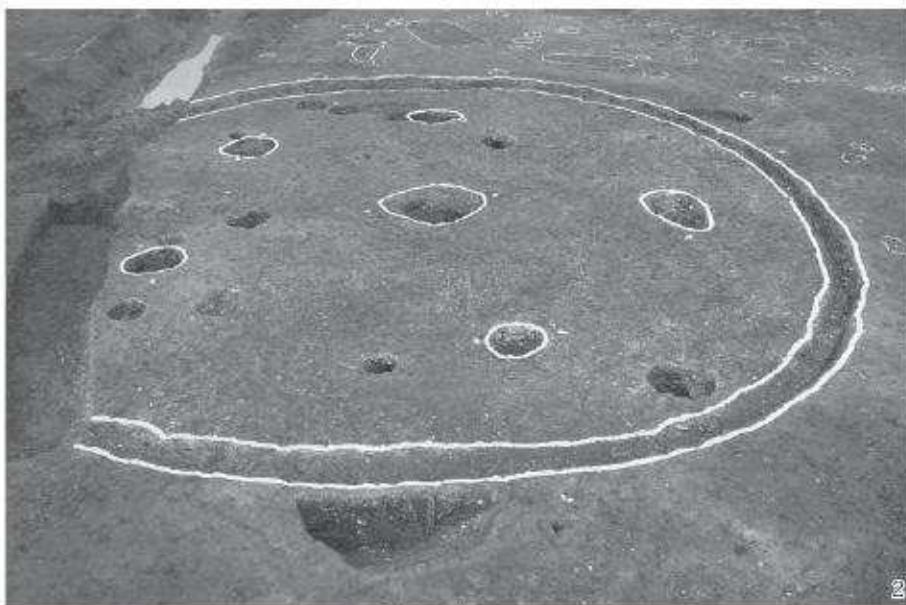
2. 竪穴建物 2 南半 [北から] (3区)



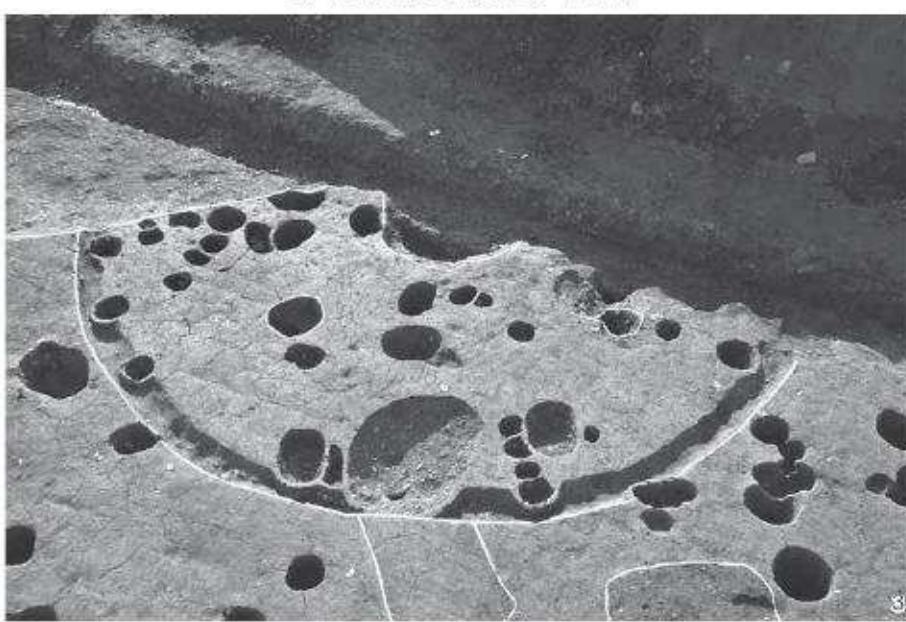
3. 竪穴建物 2 北半 [北東から] (1区)



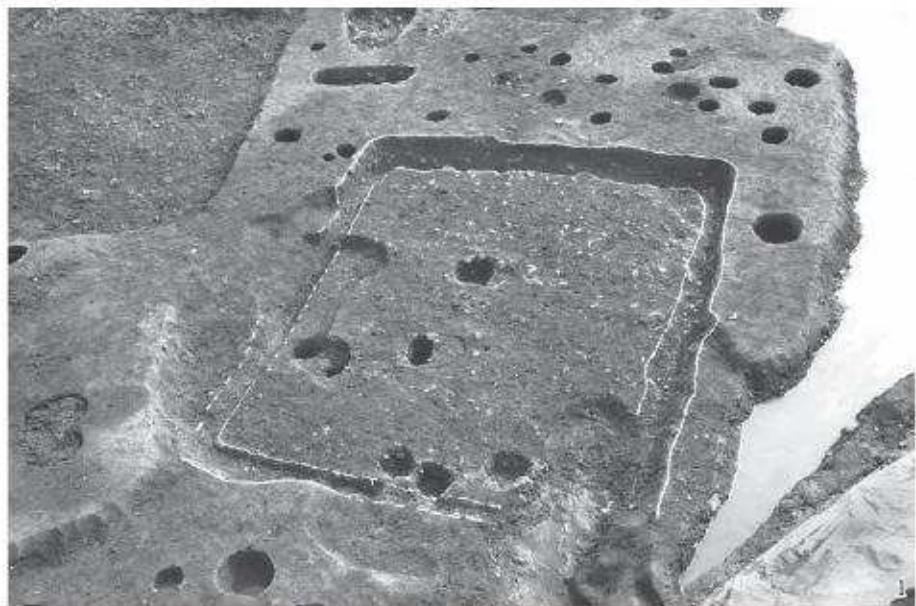
1. 竪穴建物 3 [南から] (3区)



2. 竪穴建物 4 [南東から] (3区)



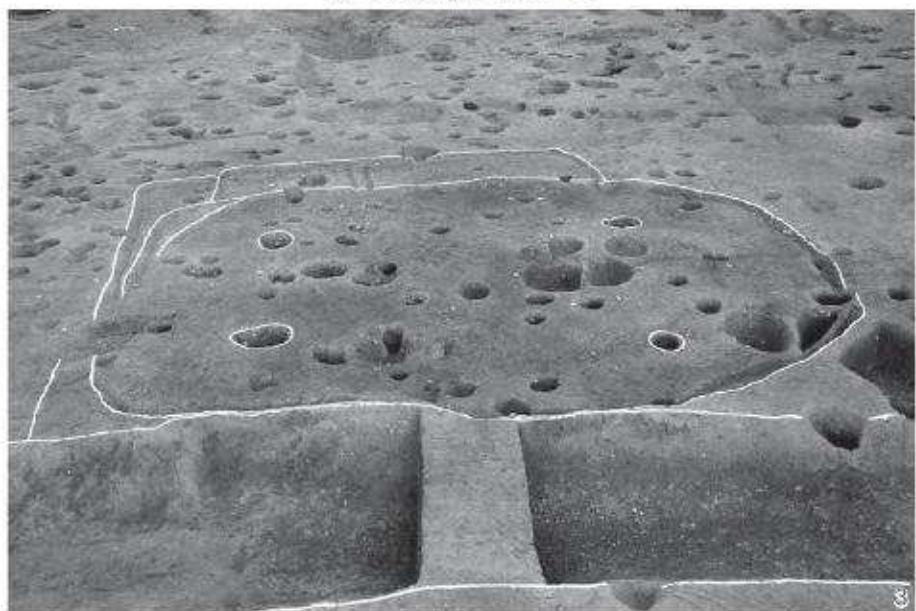
3. 竪穴建物 5 [北西から] (1区)



1. 縦穴建物 6 [南西から]



2. 縦穴建物 7 [南東から]

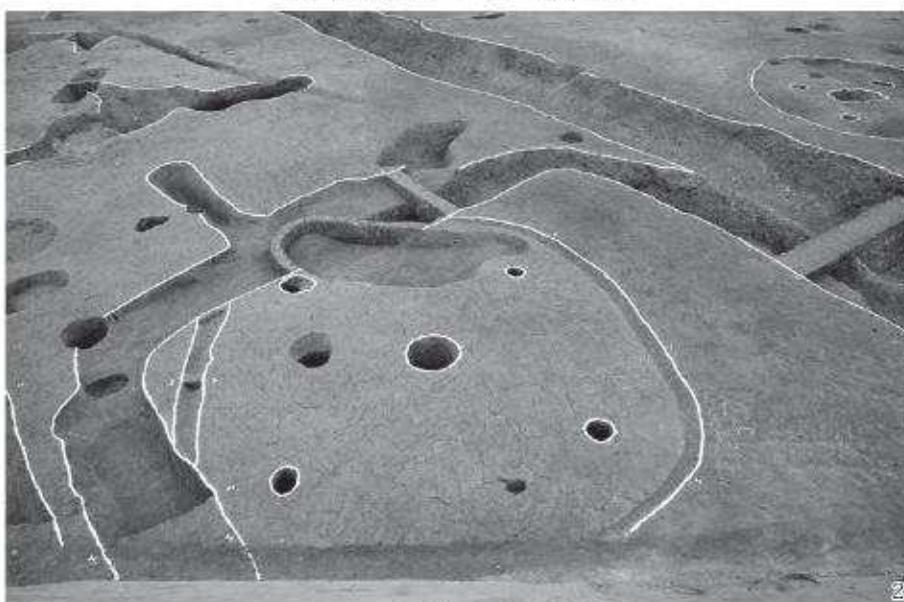


3. 縦穴建物 8 [西から]

(全て3区)



1. 壊穴建物 7・9・10 [南東から]

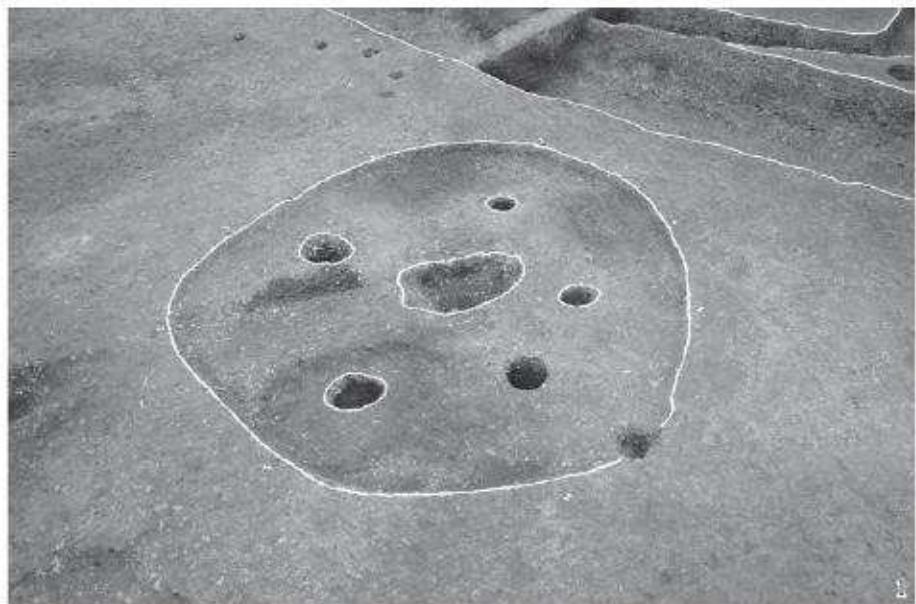


2. 壊穴建物 12 [南から]

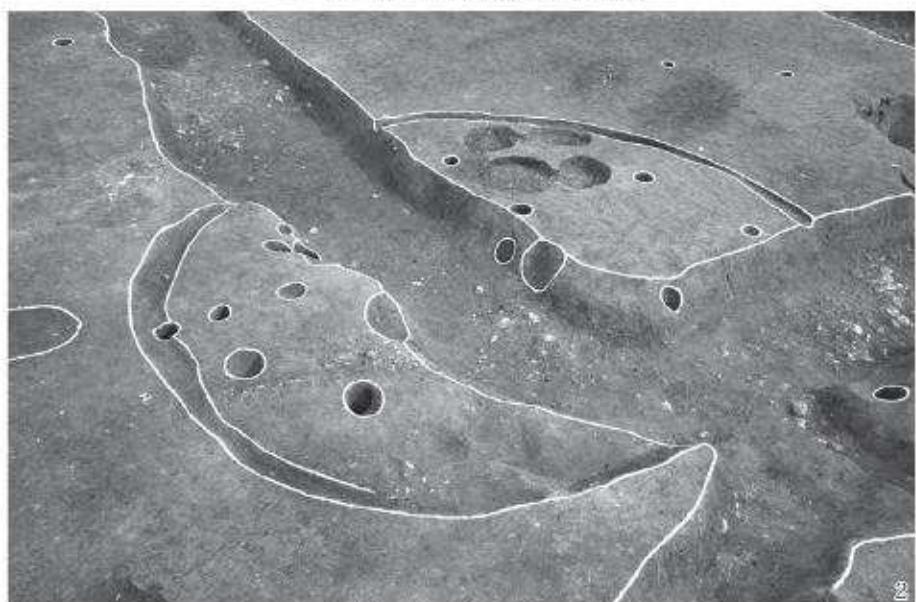


3. 壊穴建物 13 [南から]

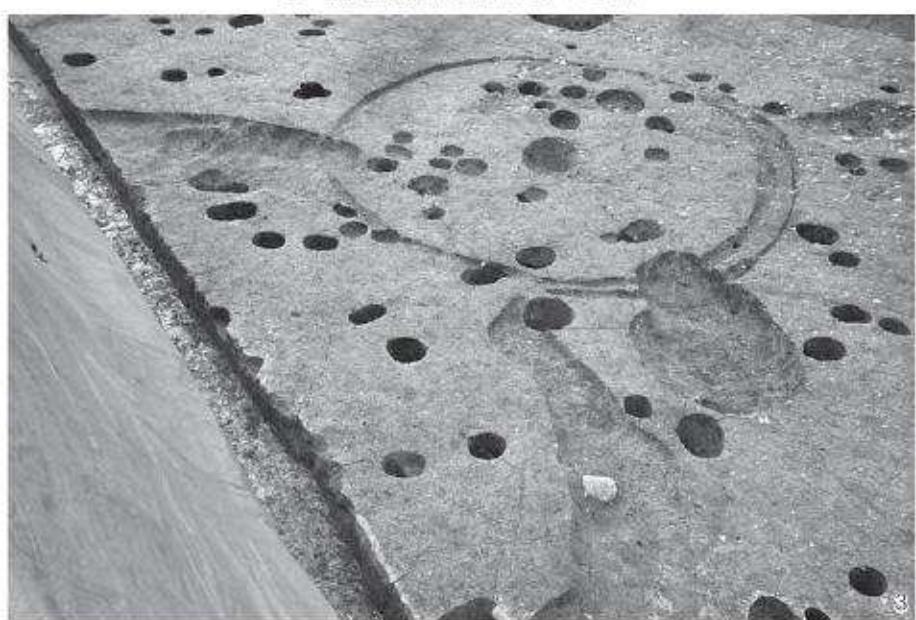
(全て3区)



1. 壁穴建物 14【北東から】(3区)

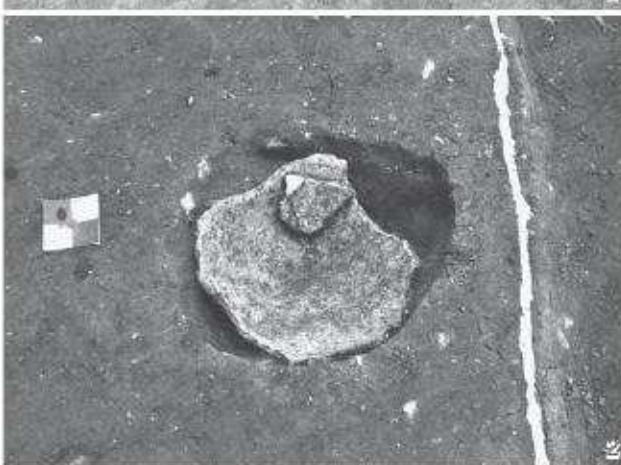


2. 壁穴建物 17【南西から】(2区)



3. 壁穴建物 20・21【北東から】(5区)

写真図版 30  
4層下面遺構



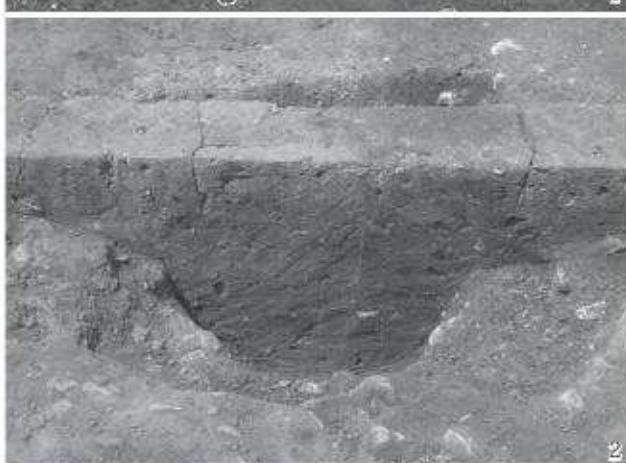
1. 3002 土坑（竪穴建物 1）  
2. 3054 ピット（竪穴建物 2）

3. 3045 土坑（竪穴建物 3）  
4. 3051 土坑（竪穴建物 3）



5. 3103 土坑（竪穴建物 4）  
6. 3058 土坑（竪穴建物 5）

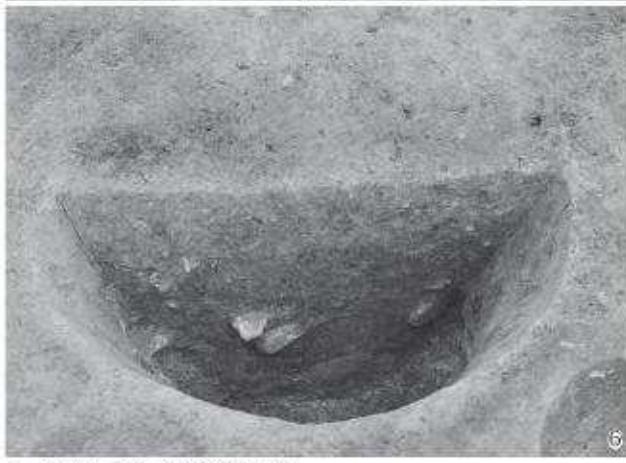
7. 3338 土坑（竪穴建物 8）  
8. 竪穴建物 8 内土器出土状況



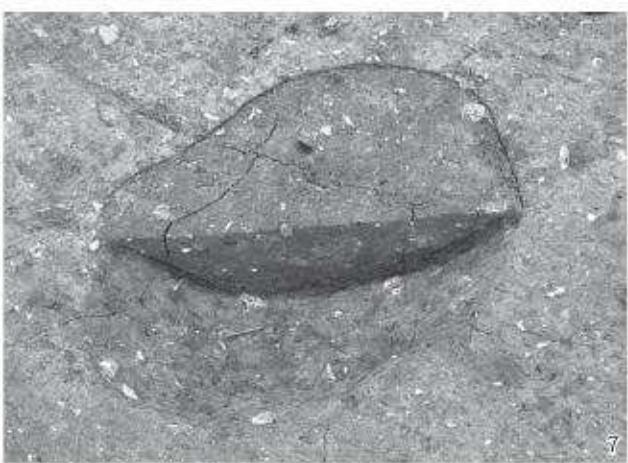
1. 積穴建物 9 検出状況  
2. 3191 土坑（積穴建物 9）



3. 3394 土坑（積穴建物 12）  
4. 3431 土坑（積穴建物 13）



5. 3450 土坑（積穴建物 14）  
6. 3958 土坑（積穴建物 18）

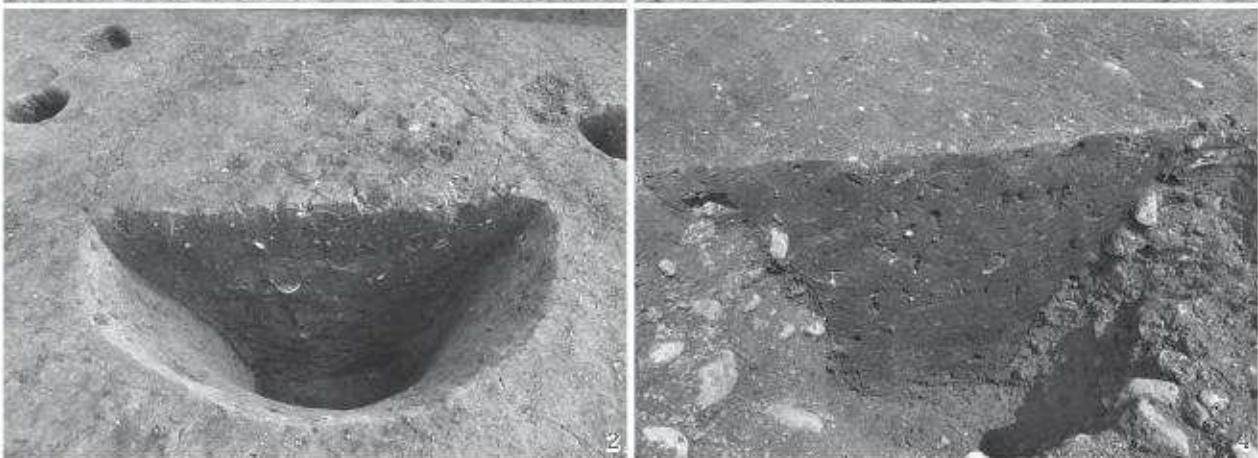


7. 4219 土坑（積穴建物 20）  
8. 4220 土坑（積穴建物 22）



1

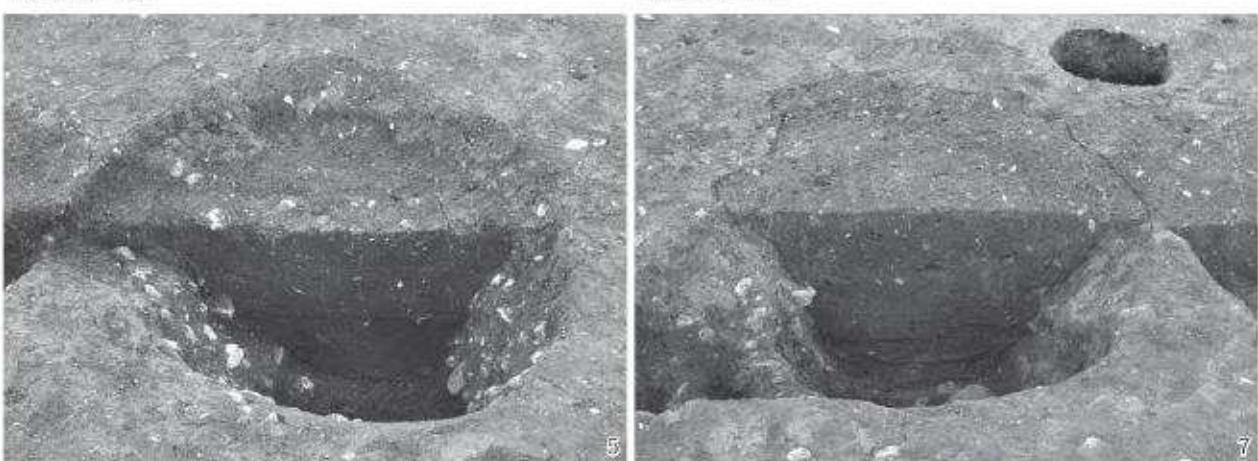
3



2

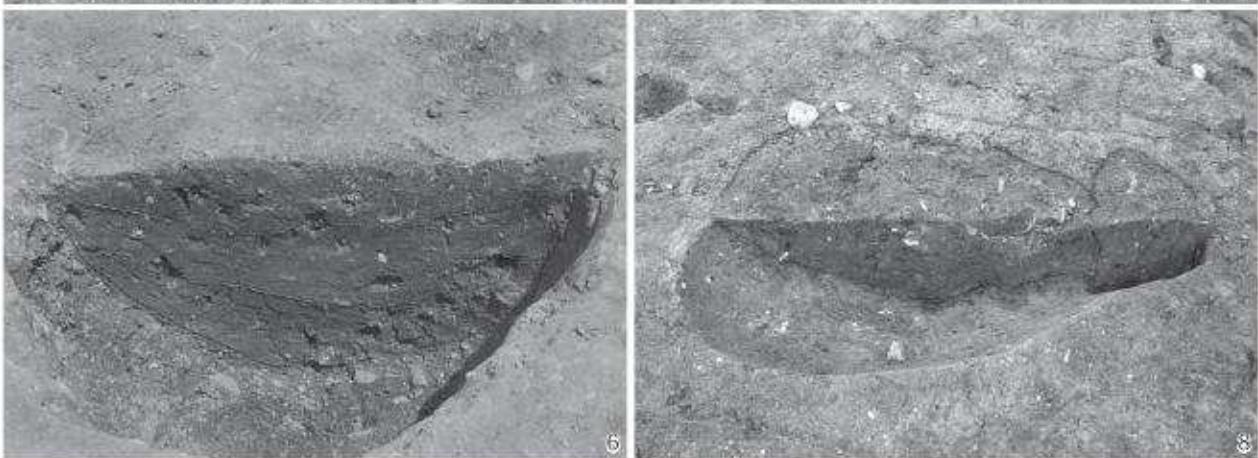
4

1. 3082 土坑  
2. 3138 土坑  
3. 3157 土坑  
4. 3167 土坑



5

7

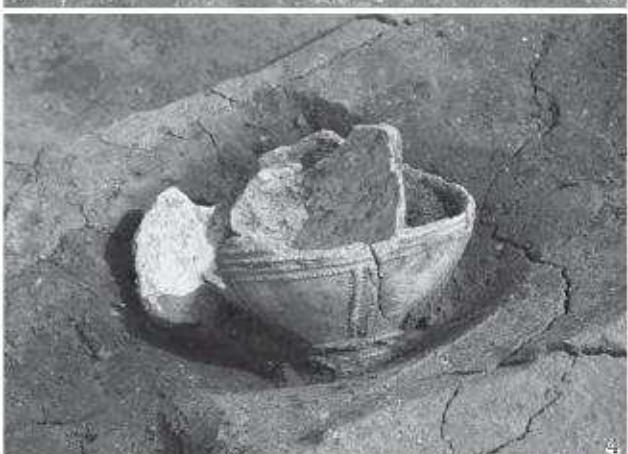
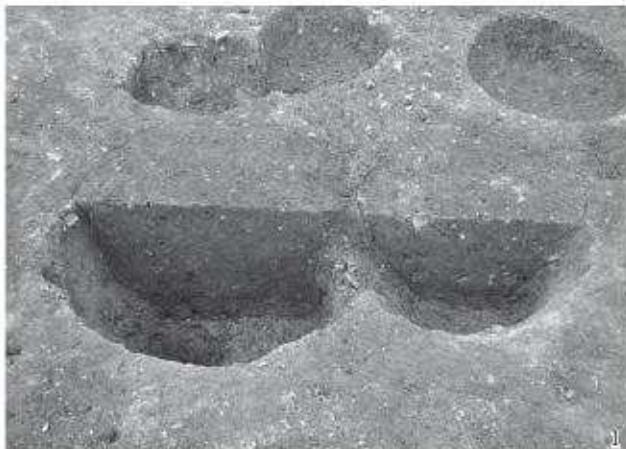


6

8

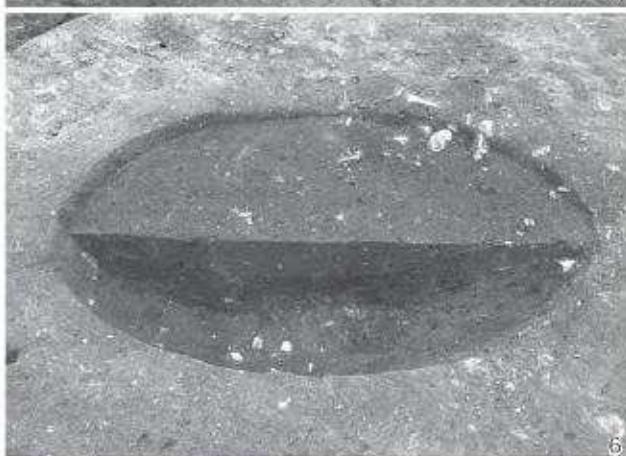
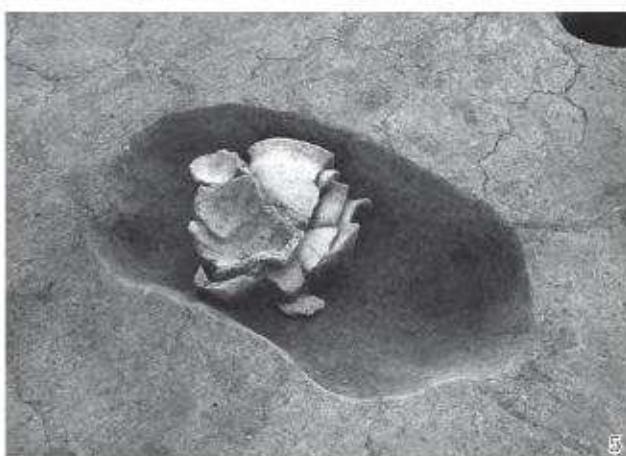
5. 3274 土坑  
6. 3297 土坑  
7. 3298 土坑  
8. 3325 土坑

(全て3区)



1. 3336 土坑 [左]・3335 土坑 [右] (3 区)  
2. 3350 土坑 (3 区)

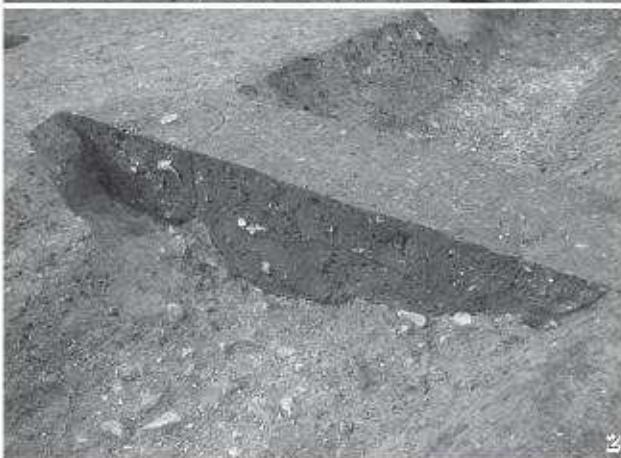
3. 3524 土坑 (4 区)  
4. 3579 土坑 (4 区)



5. 3700 土坑 (2 区)  
6. 3701 土坑 (2 区)

7. 3945 土坑 (1 区)  
8. 4029 土坑 (1 区)

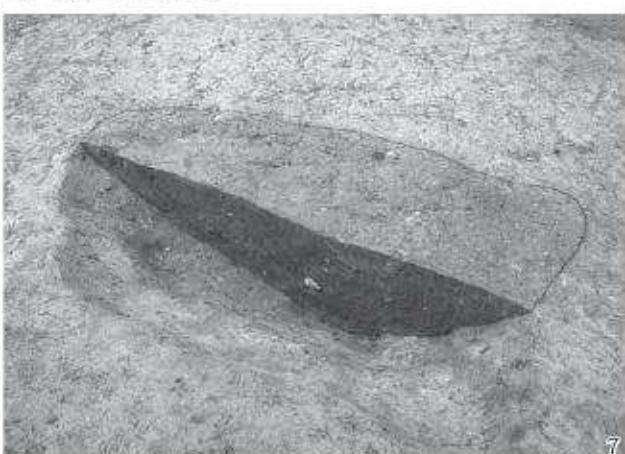
写真図版 34  
4層下面遺構



(全て 5 区)



4. 4543 土坑 (6区)



7. 4551 土坑 (6区)





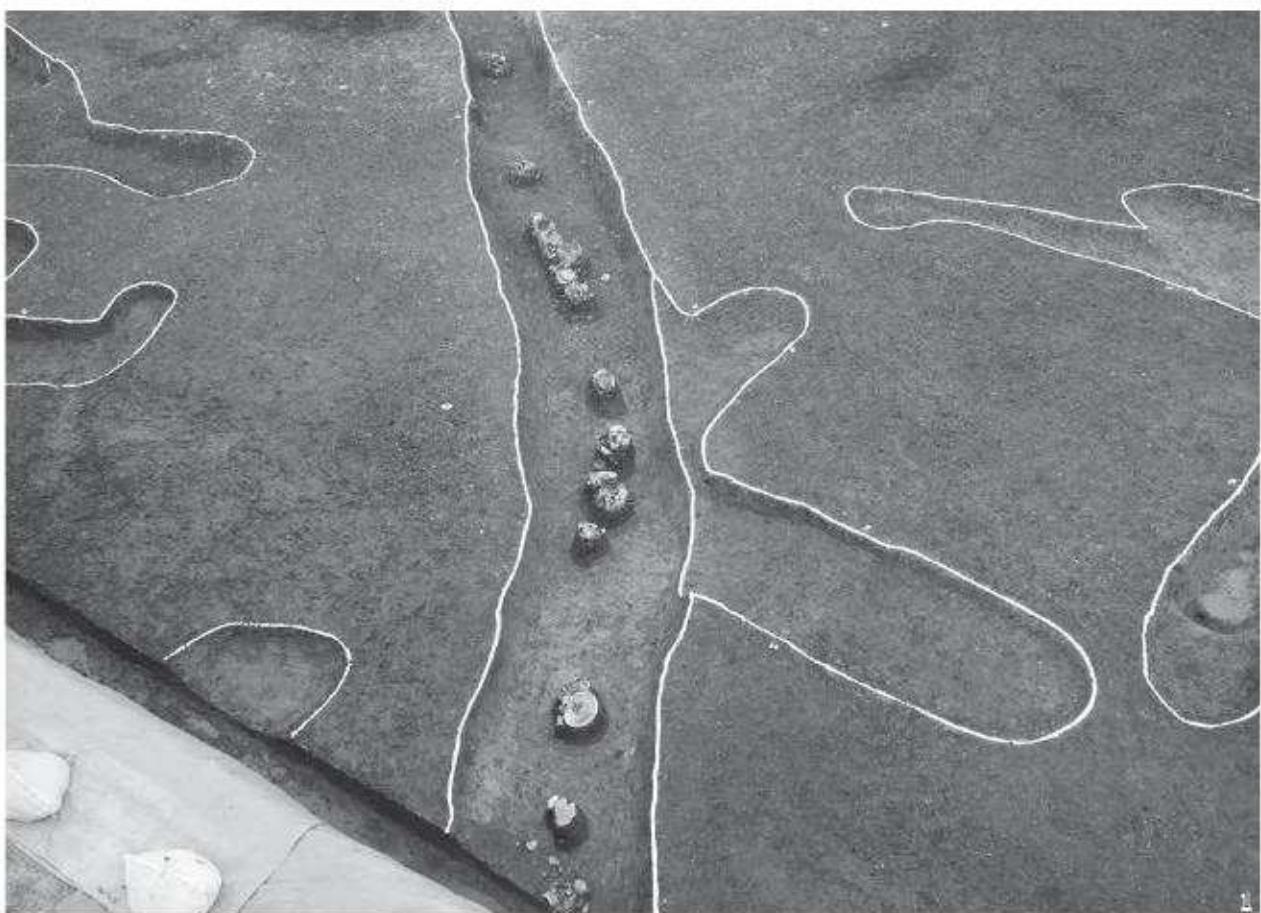
1. 3001 溝（1区側）  
2. 3001 溝（3区側）

3. 3001 溝（5区側）  
4. 3001 溝土器出土状況（5区）

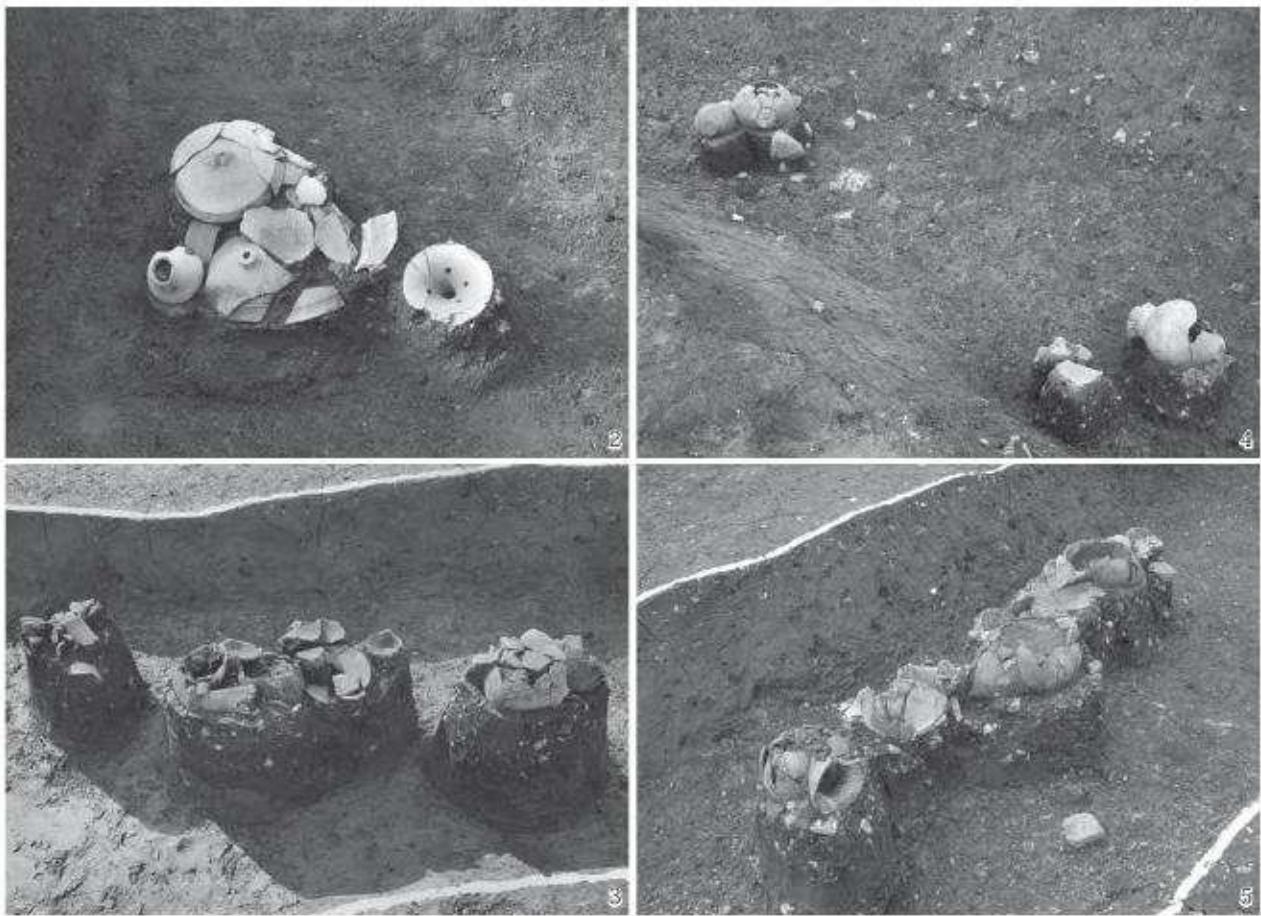


5. 3013 溝と竪穴建物 6（3区）  
6. 3013 溝

7. 4434 溝北半（6区）  
8. 4434 溝南半



1. 4434 溝〔南東から〕(6区)



2~5. 4434 溝土器出土状況



1. 周溝墓 98 [西から]



2. 周溝墓 97 [奥]・98 [手前] [東から]

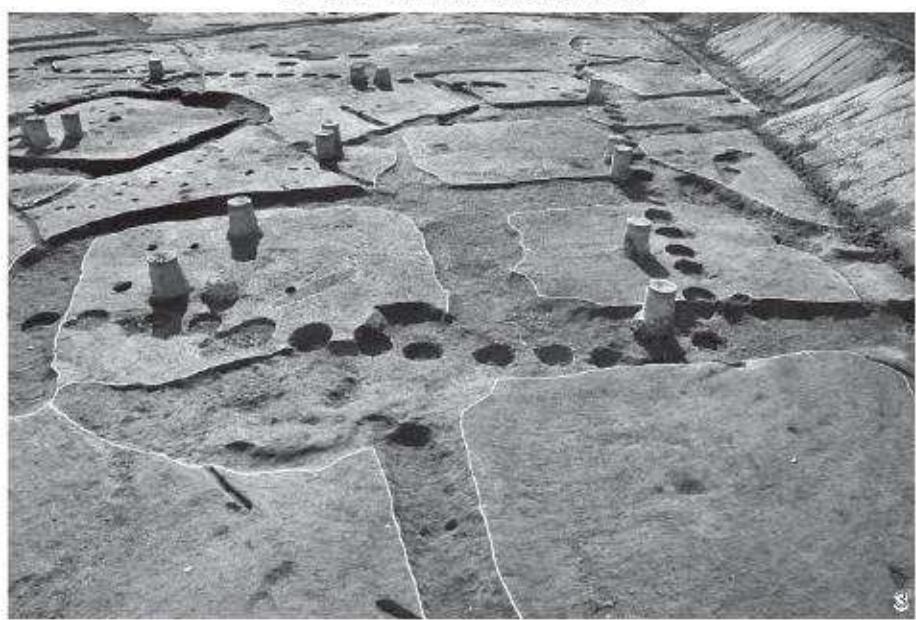
(全て1区)



1. 周溝墓 95 [奥]・98 [手前] [南東から]



2. 周溝外に並ぶ埋葬施設 [南東から]



3. 1区西辺方形周溝墓群 [北から]

(全て1区)



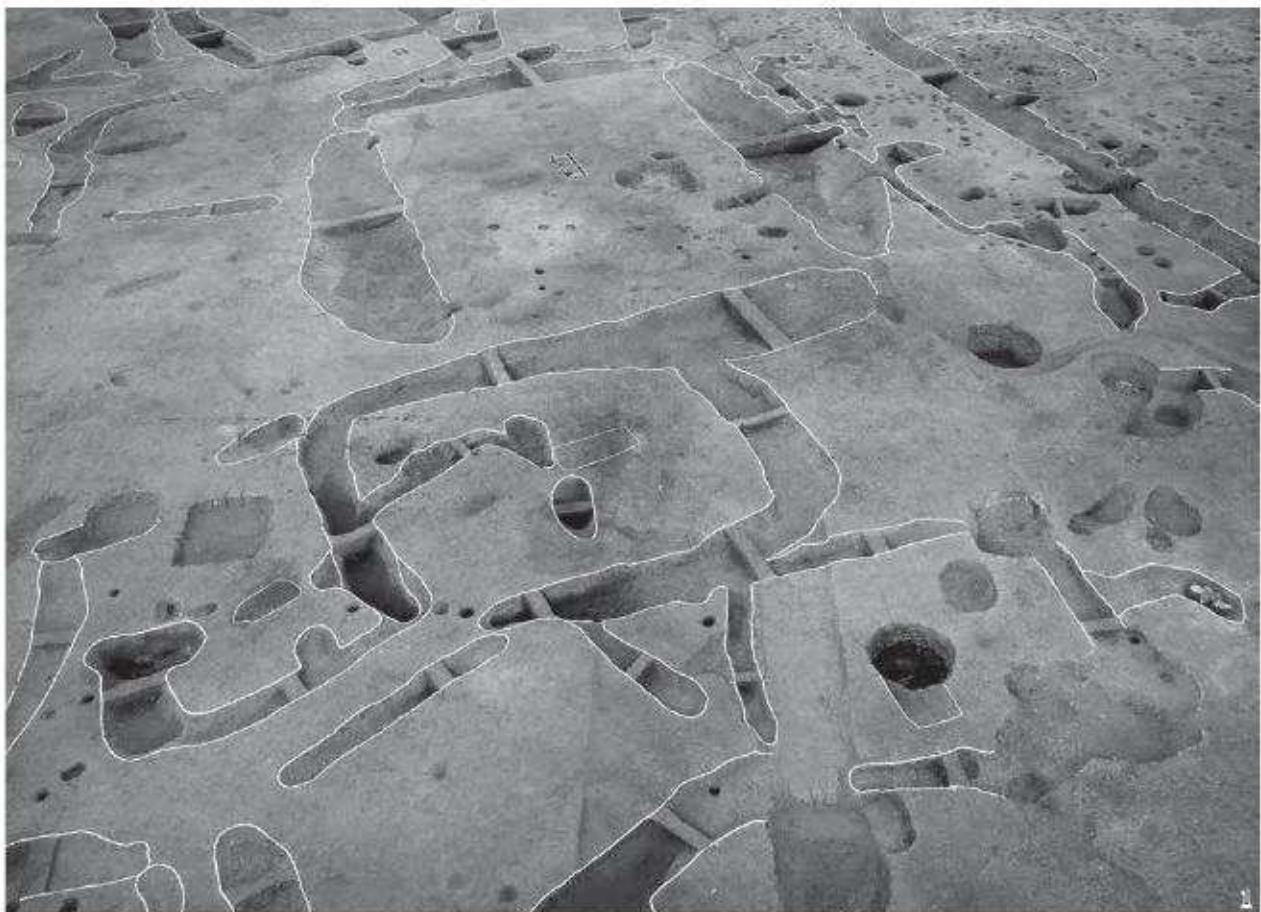
1. 2区中央部方形周溝墓群〔南から〕



2. 2区東半部方形周溝墓群〔南から〕



3. 周溝墓 24〔奥〕・25〔手前〕・28〔手前左〕〔東から〕(4区)



1. 周溝墓 18・15・33〔奥より〕〔南から〕（3・4区）



2. 4区南西隅部方形周溝墓群〔北西から〕



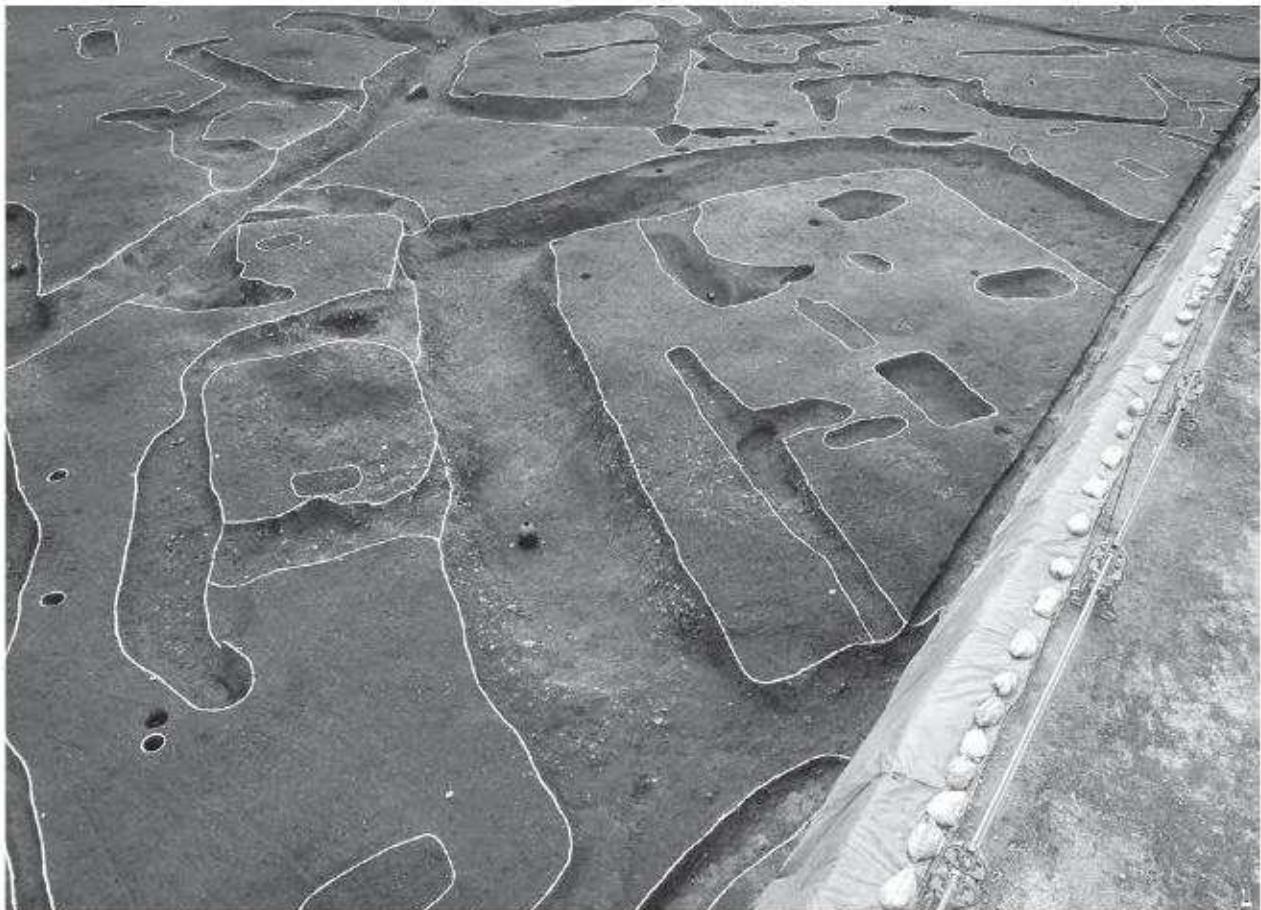
1. 5区東半部方形周溝墓群〔右端は周溝墓 101〕〔南から〕



2. 5区中央部方形周溝墓群〔東から〕



3. 周溝墓 100〔北東から〕（5区）



1. 6区北西部方形周溝墓群〔右端は周溝墓 145〕〔北から〕



2. 4434 溝〔中央〕と周辺の方形周溝墓群〔南から〕〔6区〕

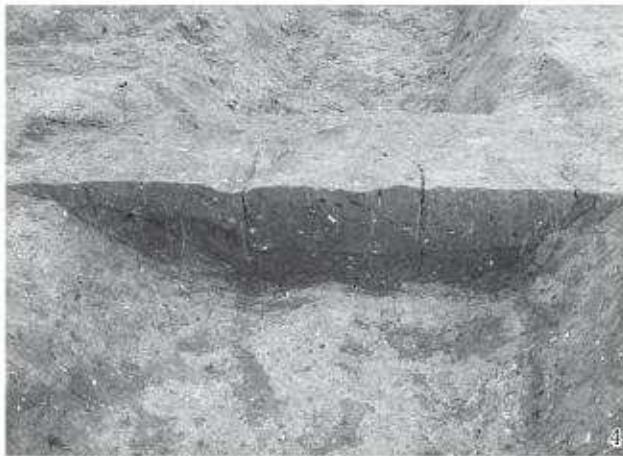


1. 周溝墓 98 墓丘裾の細溝（3904 溝）[東から]



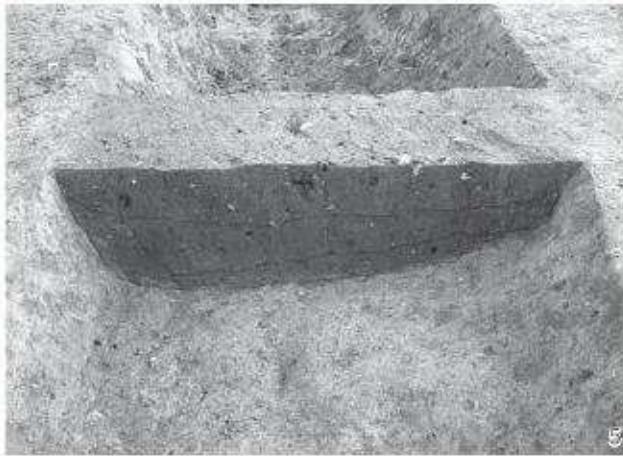
2. 3900 溝

3. 3912 溝



4

5



6

7

4. 3919 溝  
5. 3926 溝

6. 3930 溝  
7. 3938 溝

(全て 1 区)



1



2



2



3

1. 3600 溝  
2. 3606 溝

3. 3618 溝  
4. 3622 溝



4



5



6

5. 3640 溝  
6. 3643 溝



7

7. 3644 溝  
8. 3648 溝

(全て 2 区)

写真図版 46  
4層下面遺構



1. 3364 溝  
2. 3368 溝



3. 3381 溝  
4. 3383 溝



5. 3405 溝  
6. 3411 溝



7. 3533 溝  
8. 3534 溝

(全て 3 区)



1



3



2



4

1. 3501 溝  
2. 3506 溝

3. 3507 溝  
4. 3509 溝



5



7



6



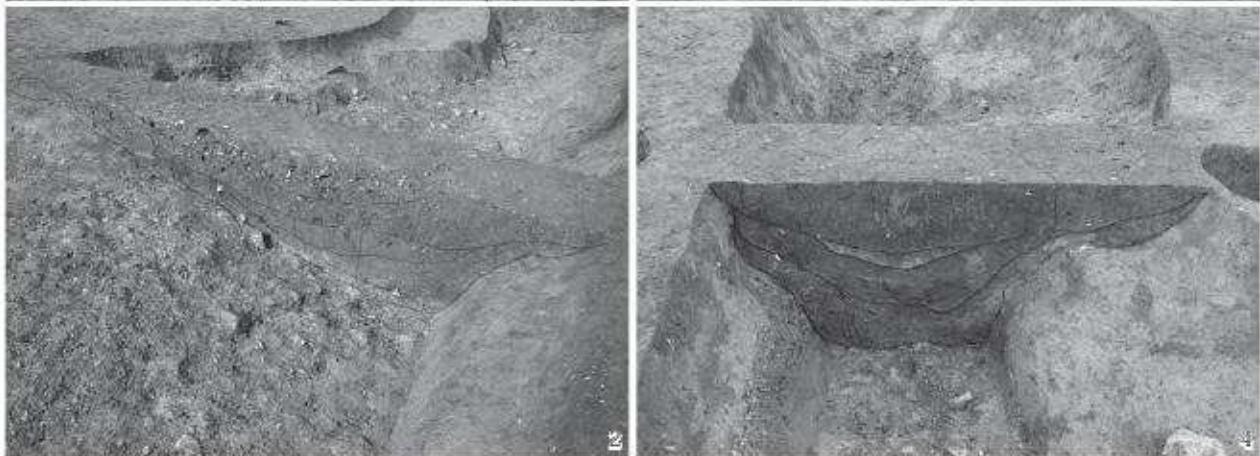
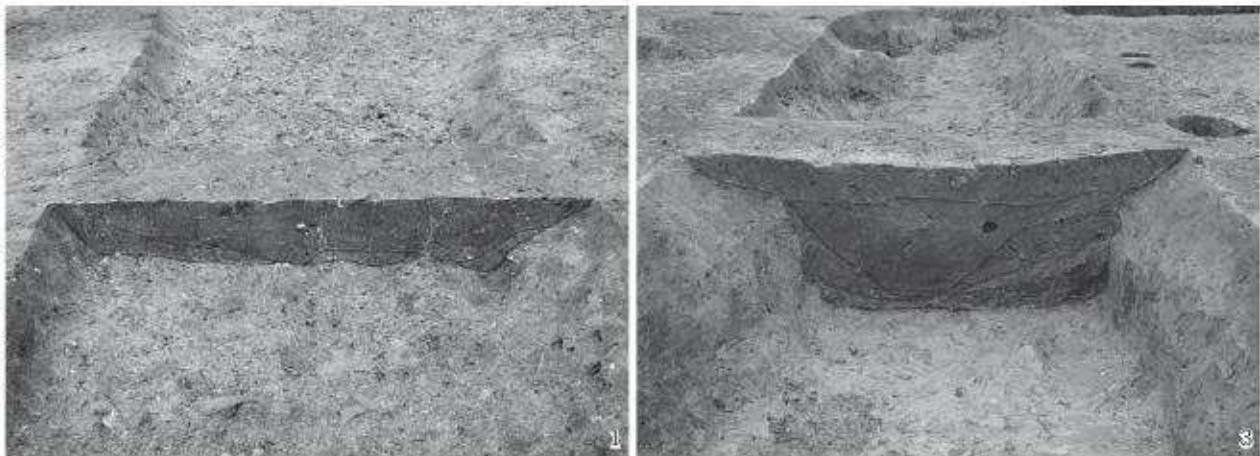
8

5. 3527 溝  
6. 3535 溝

7. 3556 溝  
8. 3563 溝

(全て 4 区)

写真図版 48  
4層下面遺構



1. 4126 溝  
2. 4140 溝

3. 4141 溝  
4. 4146 溝



5

7

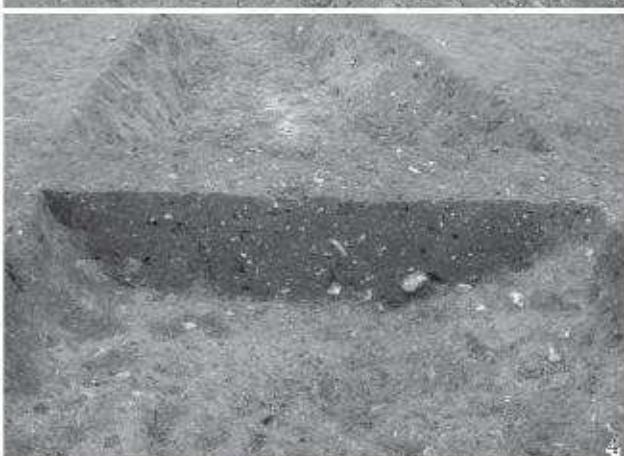


6

8

5. 4147 溝  
6. 4168 溝  
7. 4198 溝 [左]・3365 溝 [右]  
8. 4201 溝

(全て5区)



1. 4424 溝  
2. 4432 溝 [左]・4429 溝 [右]

3. 4455 溝  
4. 4471 溝



5. 4491 溝 [左]・4493 溝 [右]  
6. 4515 溝

7. 4525 溝  
8. 4532 溝

(全て 6 区)

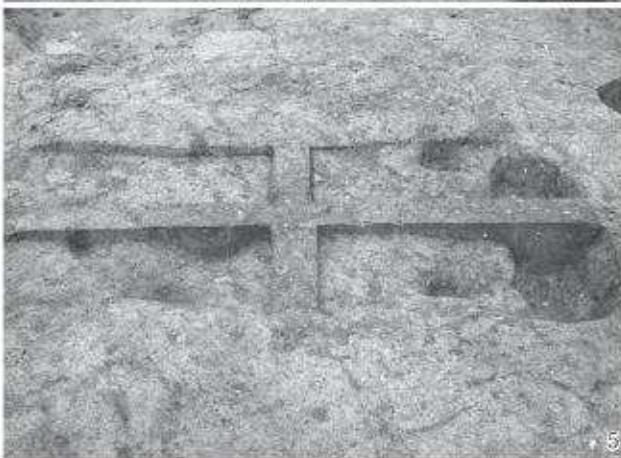
写真図版 50  
4層下面遺構



1. 3572 墓壙（4区）  
2. 3573 墓壙（4区）



3. 3574 墓壙木棺据え付け穴検出状況（4区）



4. 4024 墓壙（1区）  
5. 4025 墓壙（1区）



6. 4033 墓壙（1区）  
7. 4034 墓壙（1区）



2. 4028 墓壙木棺痕跡検出状況



1. 4028 墓壙



4. 4038 墓壙木棺痕跡検出状況



3. 4038 墓壙



6. 4044 墓壙木棺底板上人骨(歯)出土状況



5. 4044 墓壙

(全て1区)



1.



2.



3.



4.

1. 4106 墓壙 (5区)  
2. 4534 墓壙木棺小口穴検出状況 (6区)

3. 4535 墓壙 (6区)  
4. 4563 墓壙木棺据え付け穴検出状況 (6区)



5.



6.



7.



8.

5. 4564 墓壙 (6区)  
6. 4565 墓壙 (6区)

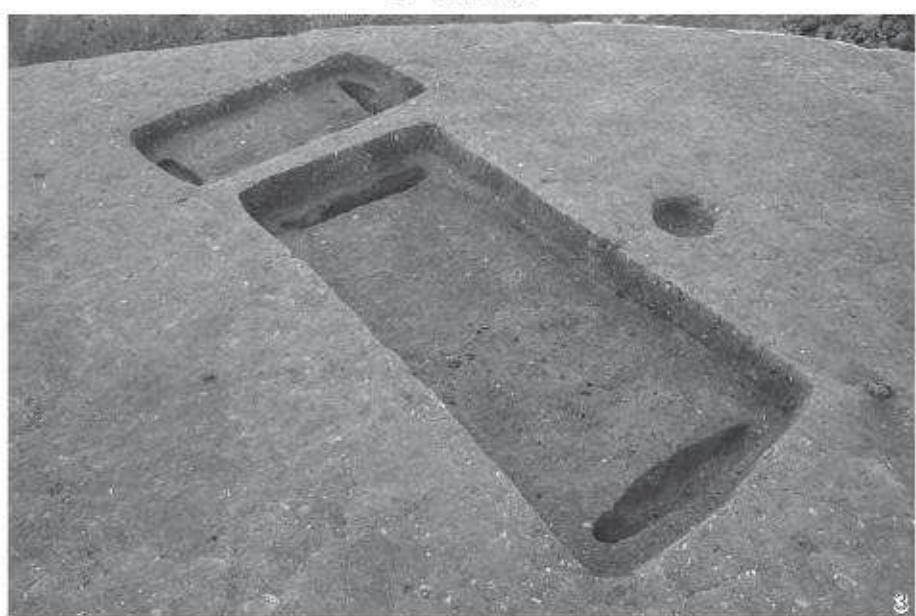
7. 4567 墓壙 (6区)  
8. 4568 墓壙 (6区)



1. 4560 墓壙



2. 4570 墓壙



3. 4571 墓壙 [奥]・4572 墓壙 [手前]

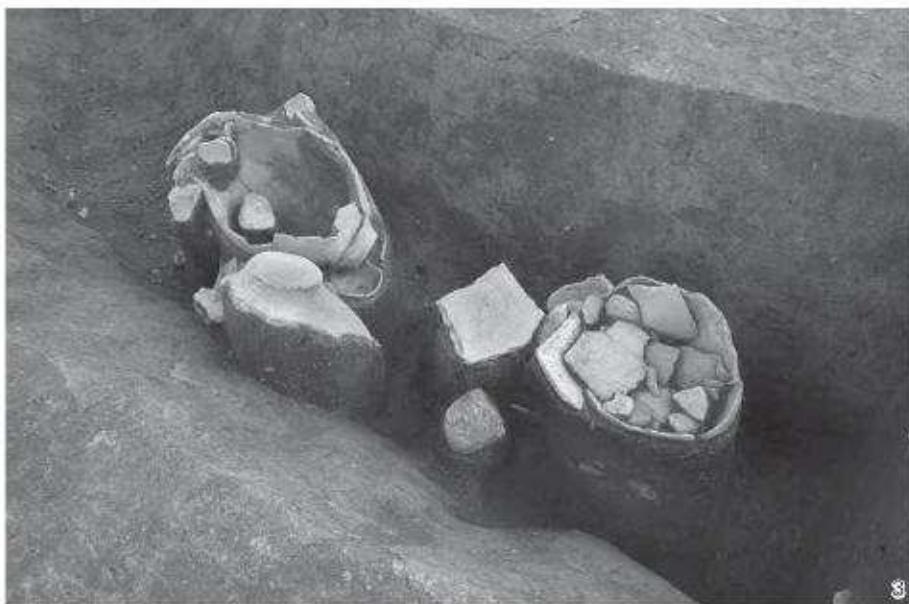
(全て6区)



1. 3413 溝土器出土状況（3区）



2. 3618 溝土器出土状況（2区）

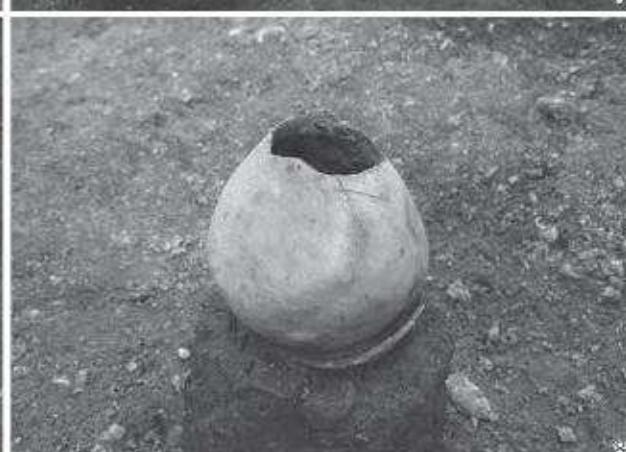


3. 3640 溝土器出土状況（2区）



1. 3621・3622 溝交点土器出土状況（2区）  
2. 4155 溝土器出土状況（5区）

3. 4160 溝土器出土状況（5・6区）  
4. 4168 溝土器出土状況（5区）



5. 4212 溝土器出土状況（5区）  
6. 4470 溝土器出土状況（6区）

7. 4515 溝土器出土状況（6区）  
8. 4531 溝土器出土状況（6区）



1. 4201 溝土器出土状況

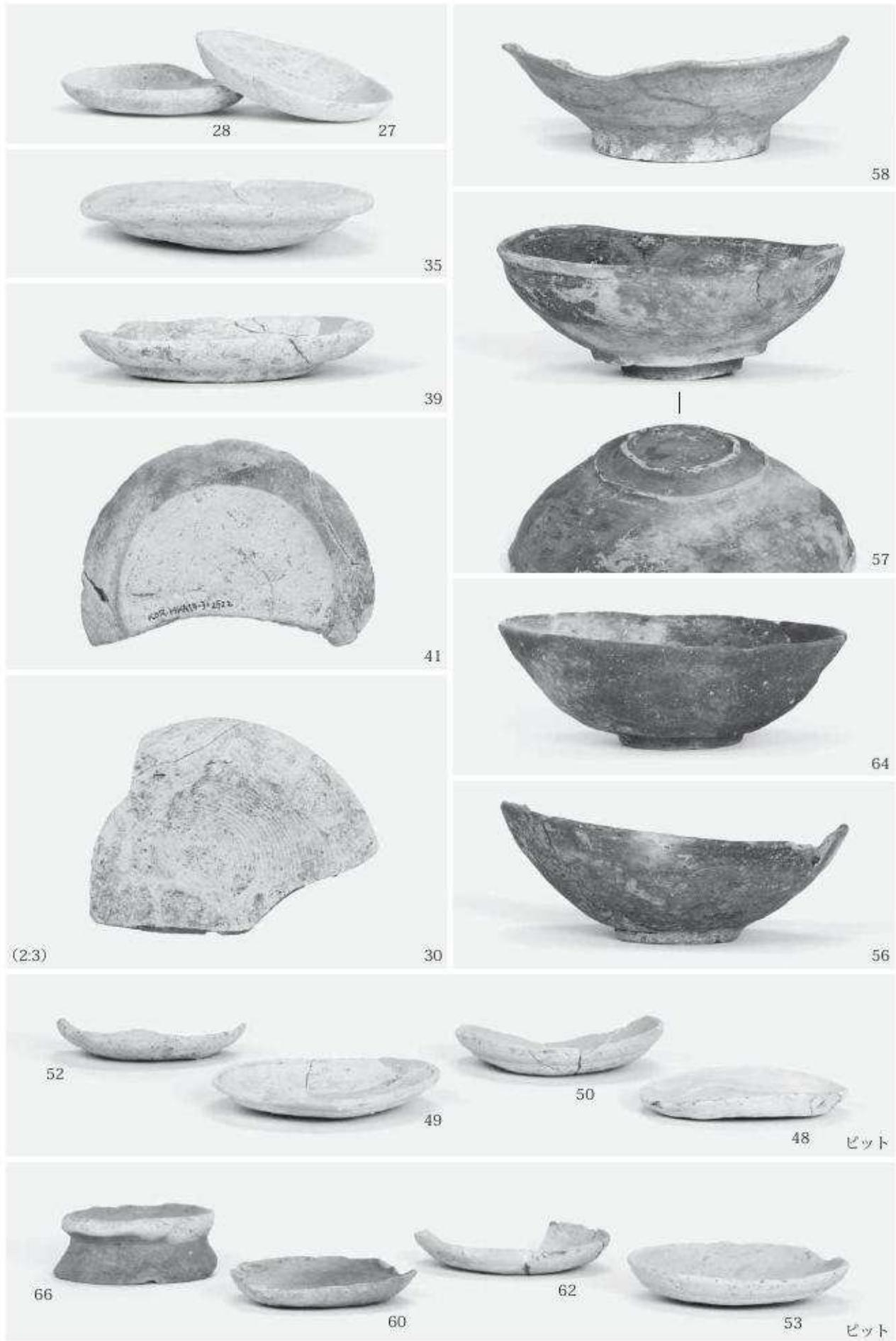


2. 4140 溝石庵丁出土状況 [東から]

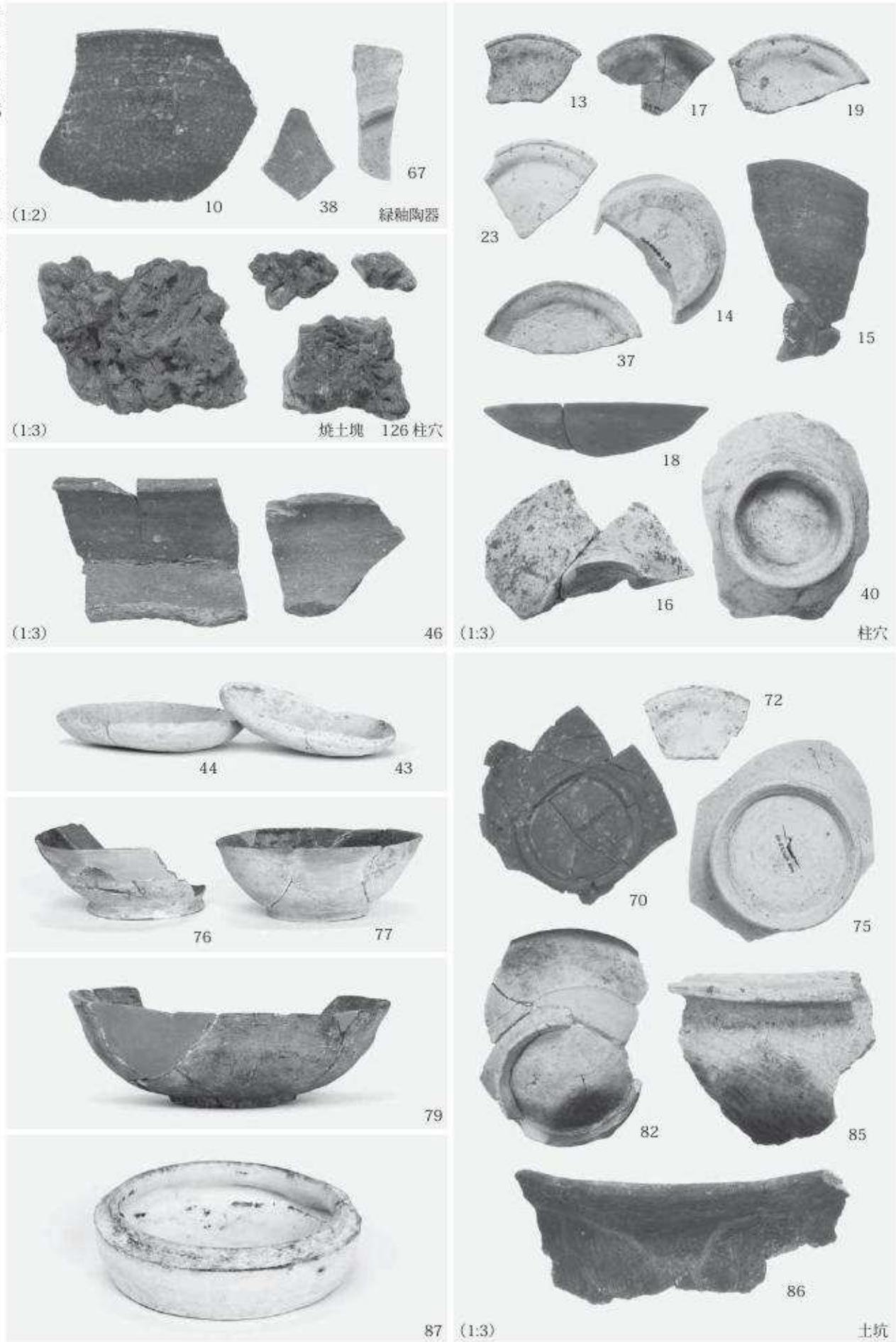


3. 4140 溝石庵丁出土状況 [南から]

(全て 5 区)



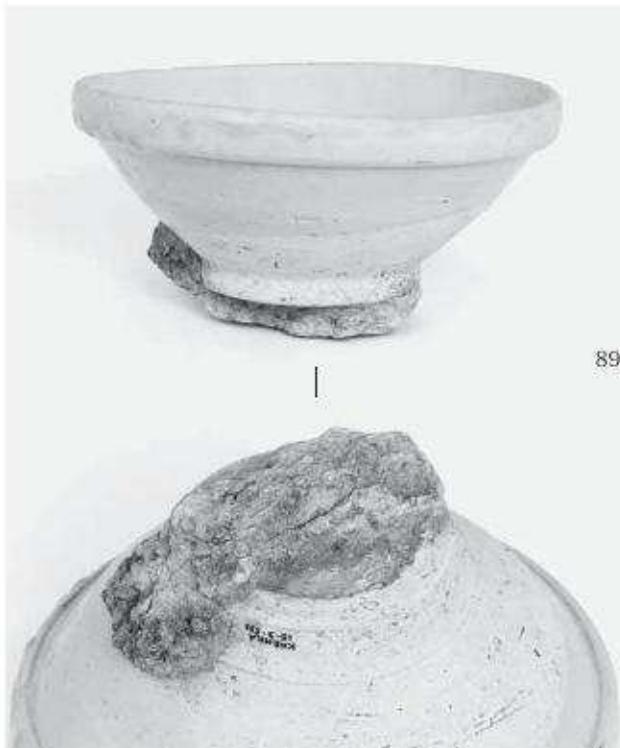
写真図版 58  
4層上面出土遺物



88



89



111



113

井戸

95



97



94



96



99

216 井戸

93

92

92



106

101

107

217 井戸

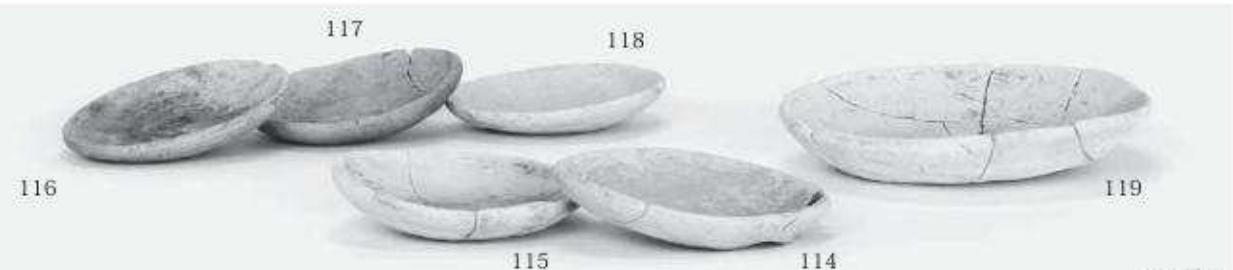


(1:4)

217 井戸

139 (この破片のみ512 井戸出土)

写真図版 60  
4層上面出土遺物



134



132



135



133



140



145



(1:4)

137



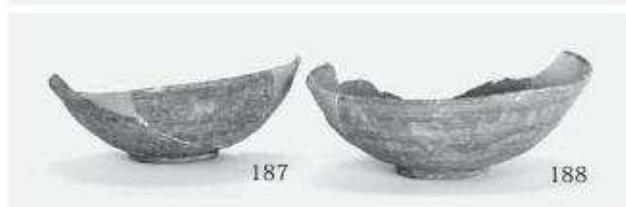
159

161



163

162



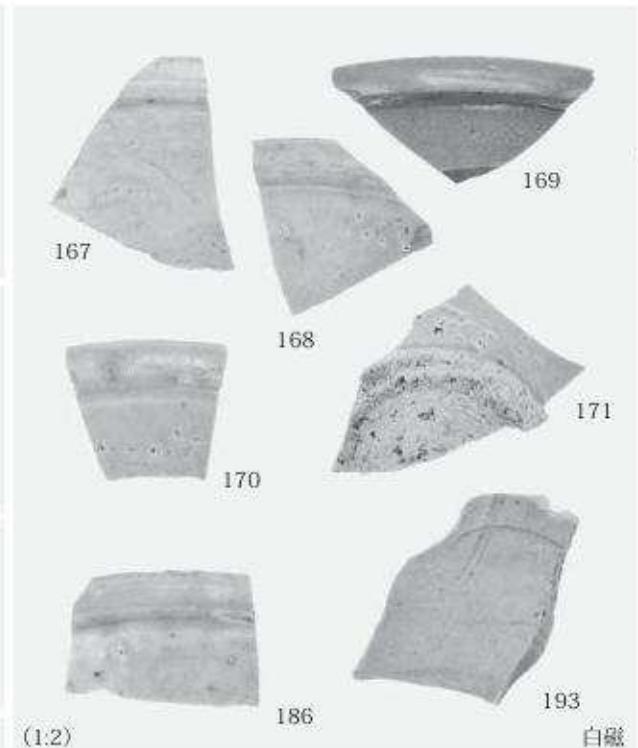
187

188



192

191



167

168

171

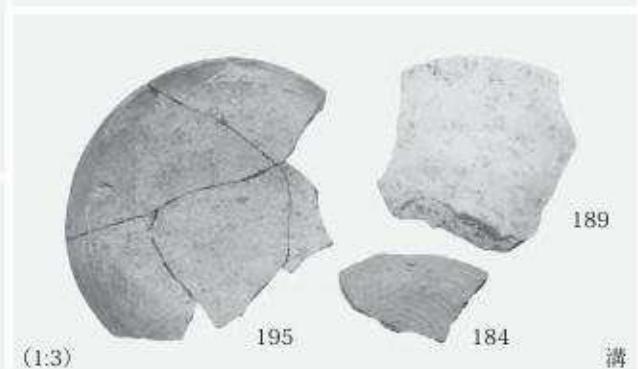
170

(1:2)

186

193

白磁



189

195

184

溝



157

158

160

1274 井戸



164

165

166

1274 井戸



149

151

150

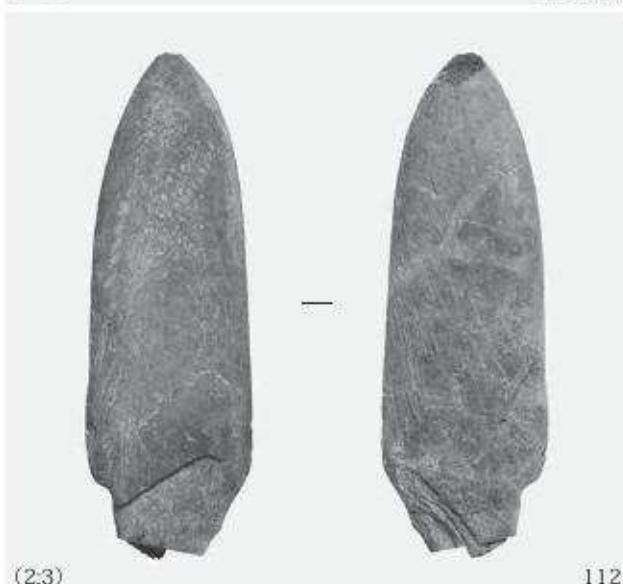
152

1274 井戸

写真図版 62  
4層上面出土遺物



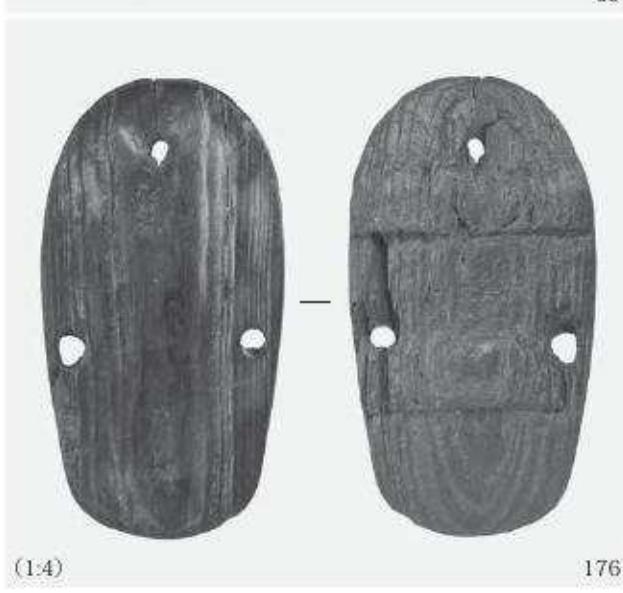
金属製品



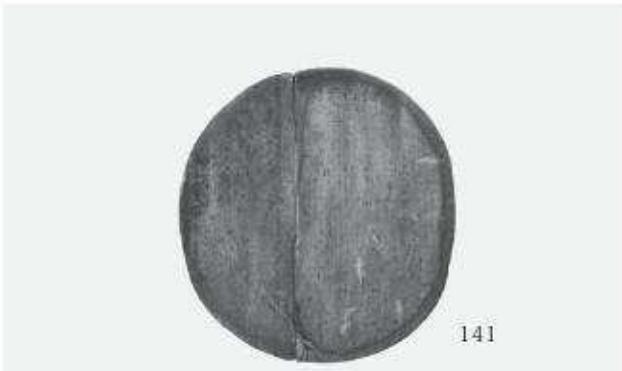
112



69 (2.3)



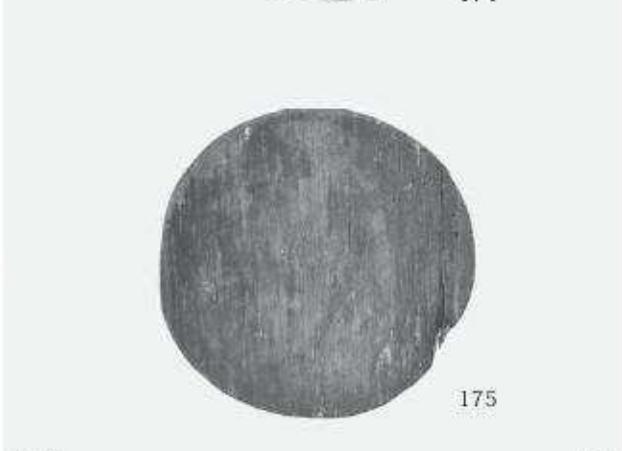
176



141



174



175

井戸



183



178



181



180



177



1



1



182



179

写真図版 64  
4層下面出土遺物



199



208



209



214



213



211



215



217

図版65  
4層下出土遺物



223



225



233



232



255



235



234

写真図版 66  
4層下面出土遺物



252



240



242



247



257



261



265



273



269



(1:4)



(1:5)



321



326

324

325



313



334



323



335



337



336

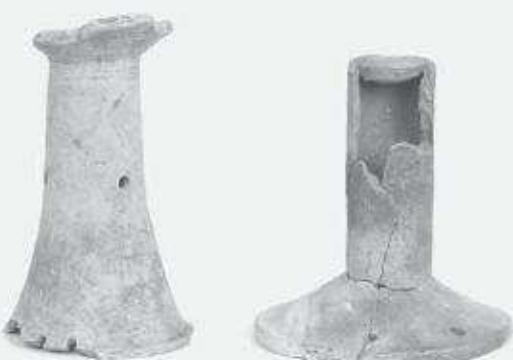


342



338

写真図版 70  
4層下面出土遺物





369



371



377



382



380



381



389



388



390

写真図版 72  
4層下面出土遺物



392



393



395



391



396



399



400



403



写真図版 74  
4層下面出土遺物



421



424



—



422



423



438



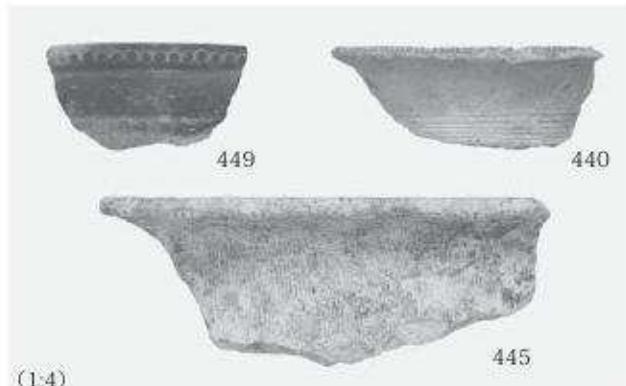
434



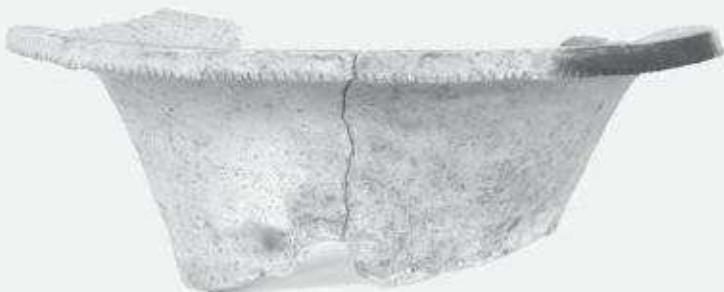
444



432



写真図版 76  
4層下面出土遺物





508



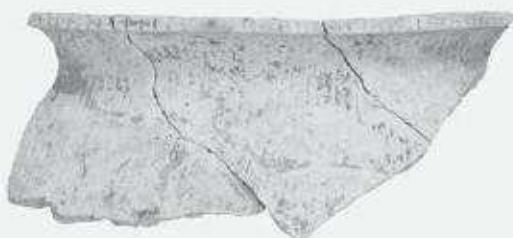
521



512



523



514



517



518

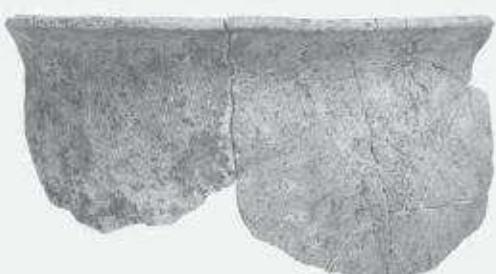


539

写真図版78  
4層下面出土遺物



534



540



541



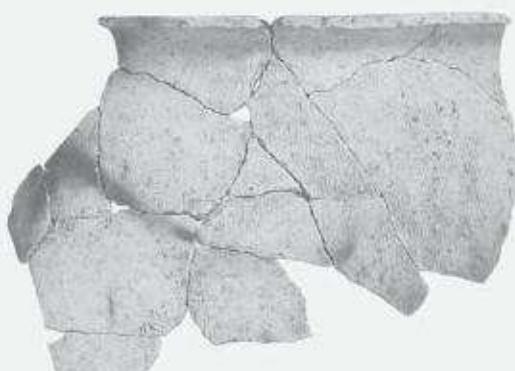
542



551



547



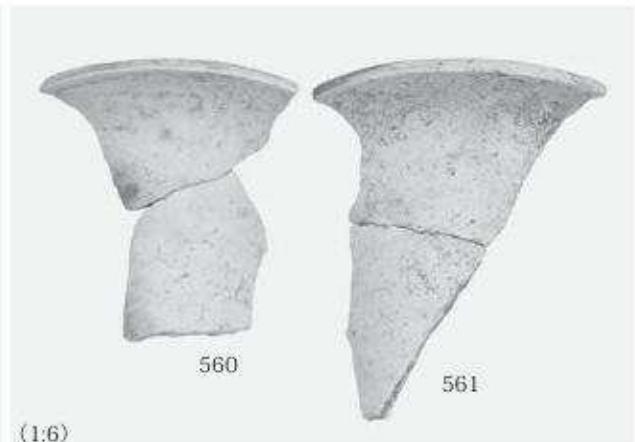
552



553



554



560

561

(1:6)



562



559



568



567

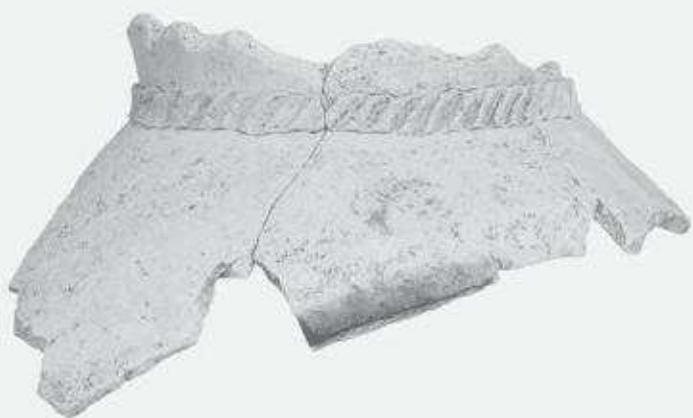


569



583

写真図版 80  
4層下面出土遺物



580



586



576



577



578



579



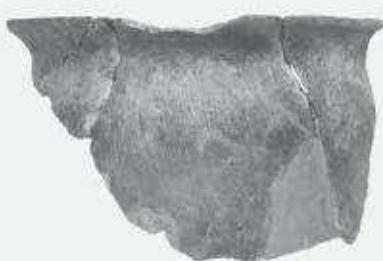
619



590



594



615



604



607



613



631



633



632



634



637



638



645



647



644



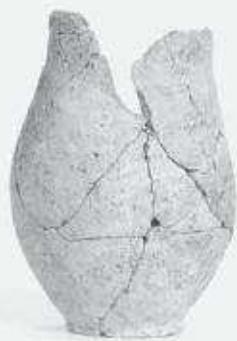
649



652



648



654



653



656



657



659



661



662



623



625

(全て 1:3)

626

627

628

629

630

626'

627'

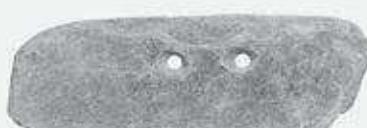
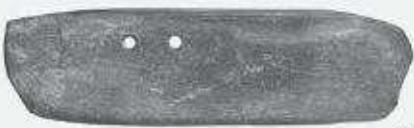
628'

629'

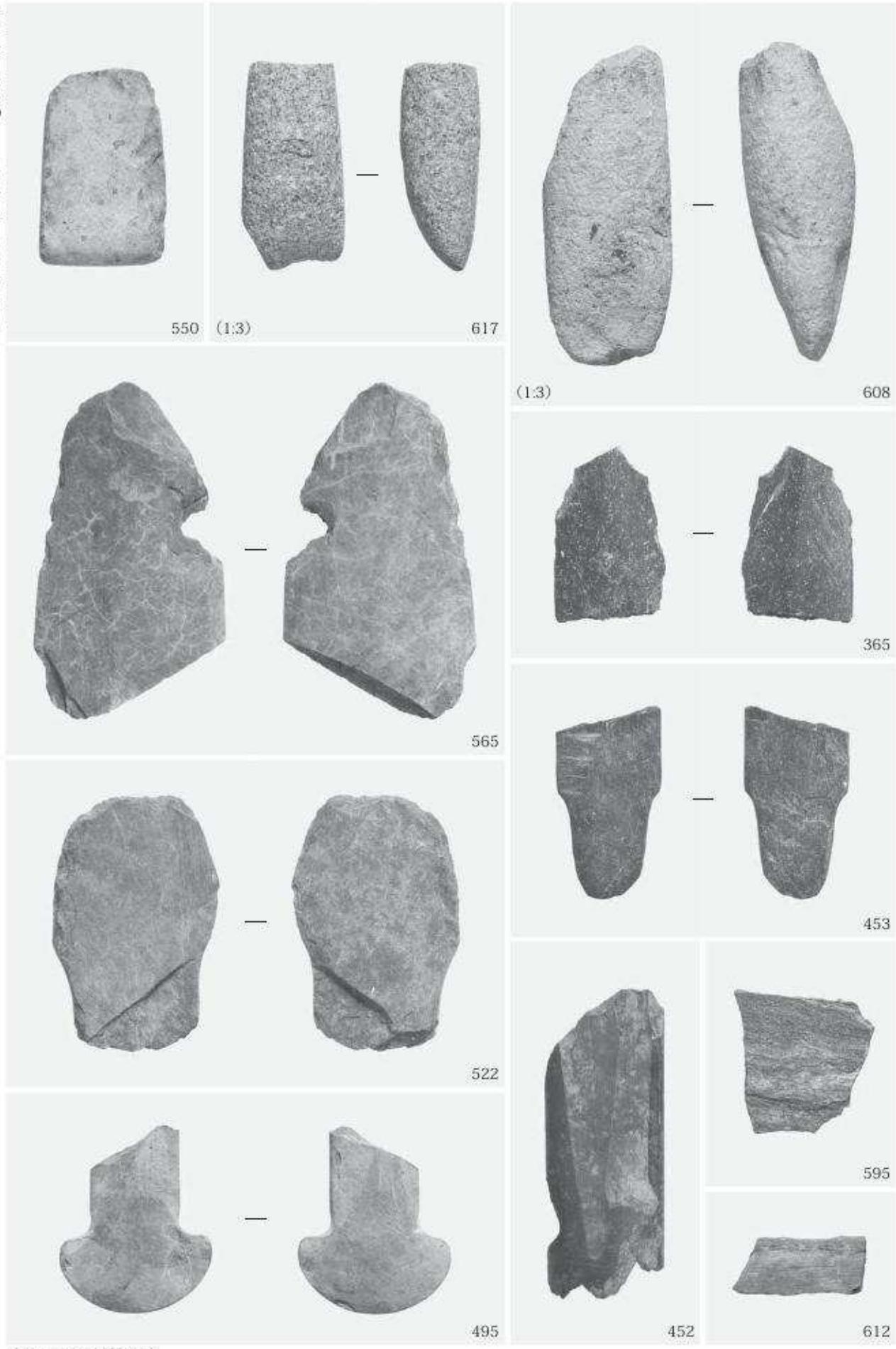
630'

491

492



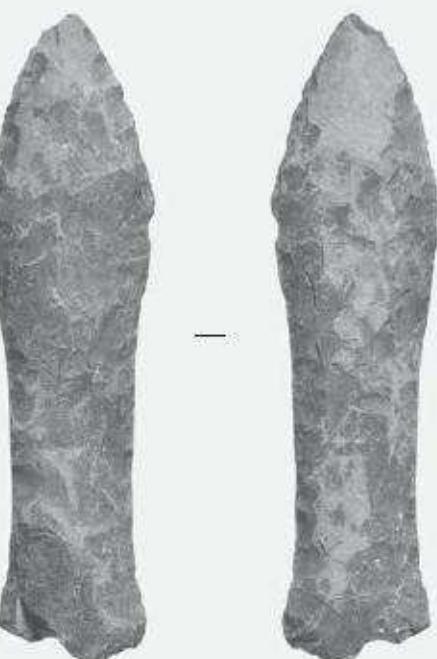
写真図版 86  
4層下出土遺物



362

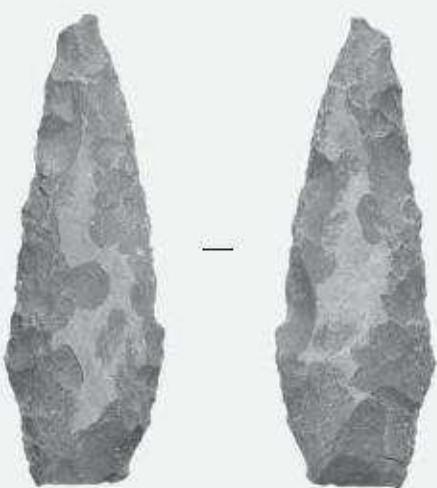


361



493

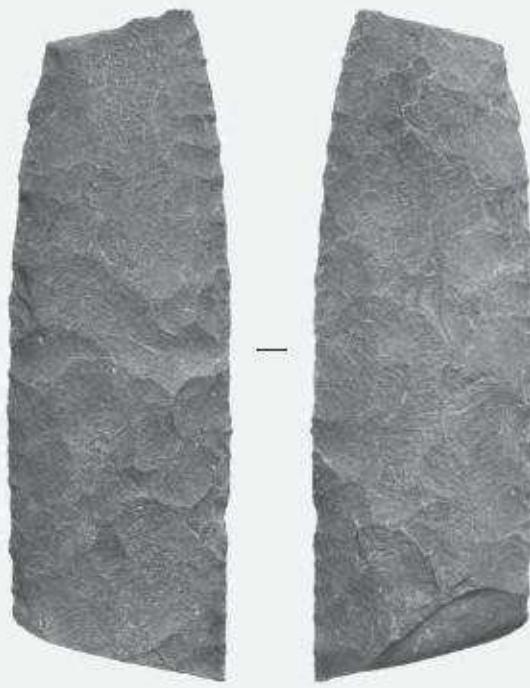
494



210

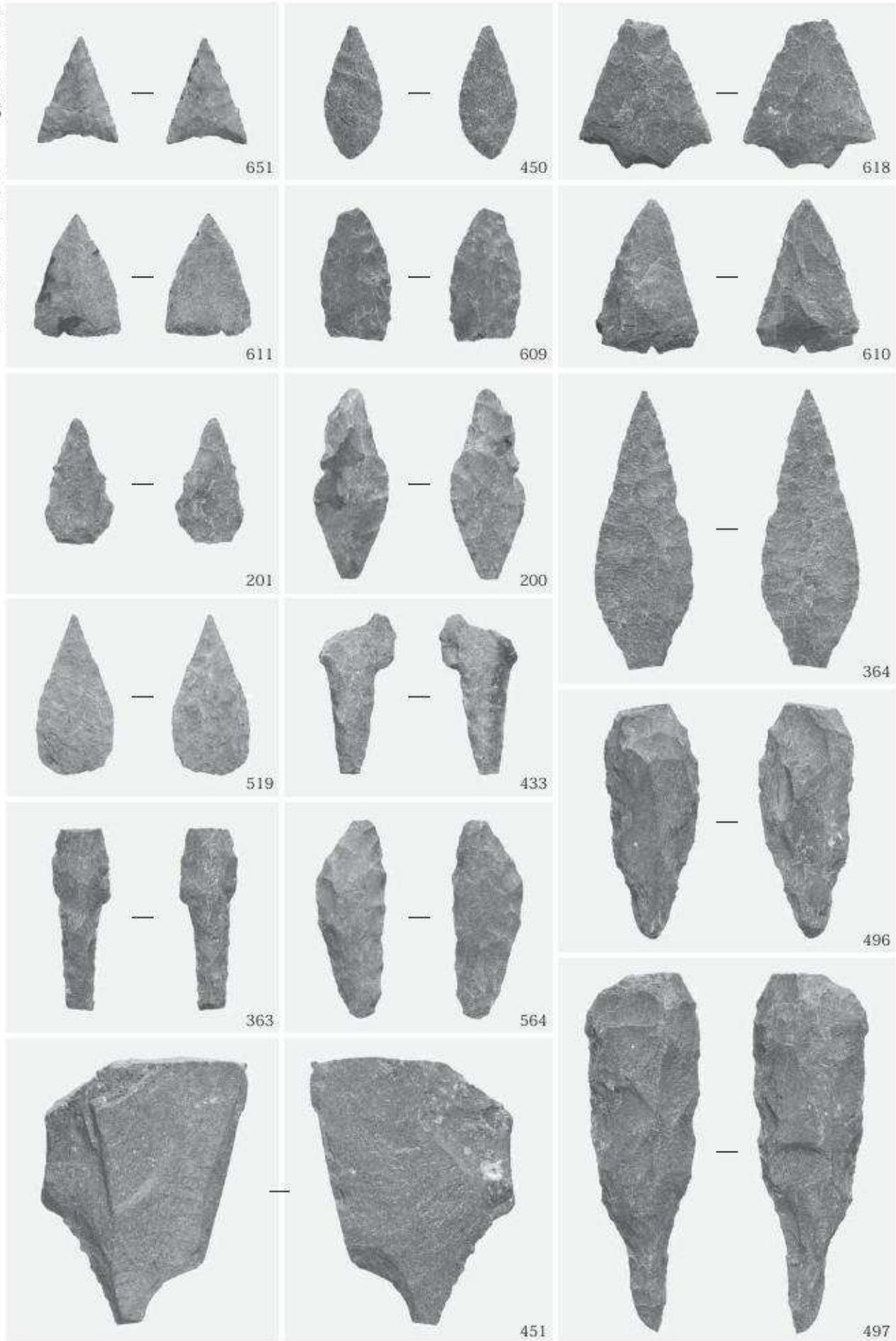


575



(全て2:3)

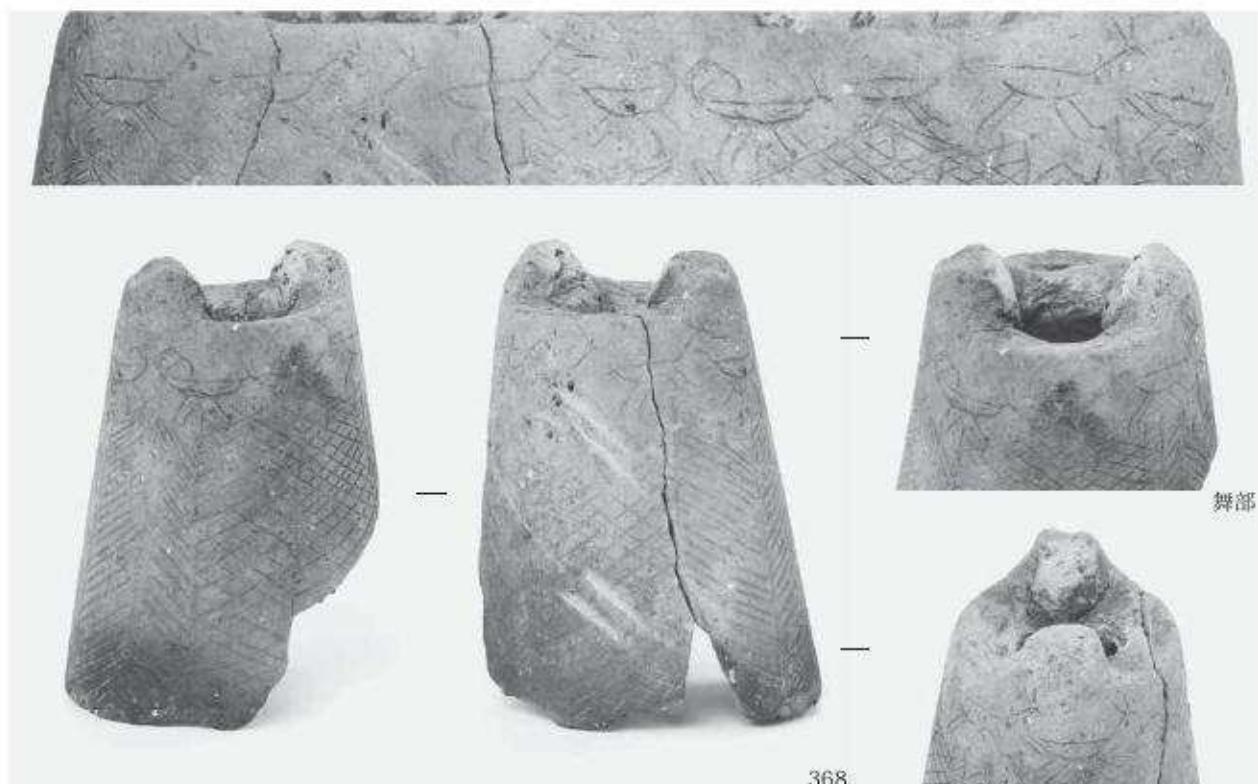
写真図版 88  
4層下面出土遺物



(全て 1:1)

舞部

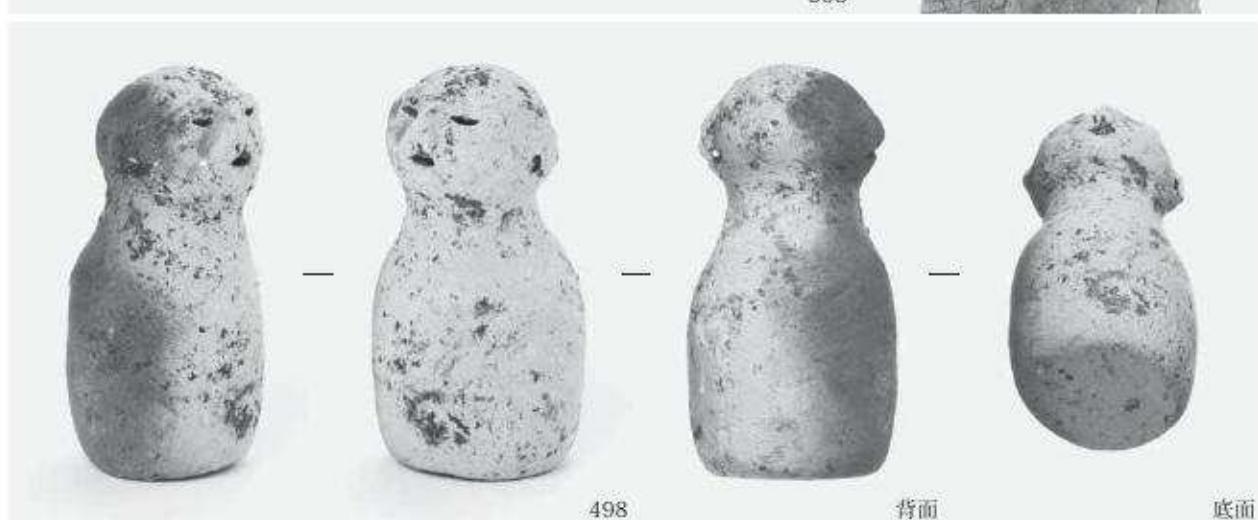
368



底面

498

背面



220

216

570

571

572



367 (3:2)

256





## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	こおりいせき・へかいせき						
書名	郡遺跡・倍賀遺跡 1						
シリーズ名	茨木市文化財資料集						
シリーズ番号	第71集						
シリーズ名	公益財團法人 大阪府文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第295集						
編著者名	伊藤 武(編)、佐伯博光、坂田典彦						
編集機関	公益財團法人 大阪府文化財センター						
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 tel 072-299-8791						
発行機関	茨木市教育委員会						
住所	〒567-8505 大阪府茨木市駅前三丁目8番13号 tel 072-620-1686						
発行年月日	2018年12月28日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号				
こおりいせき 郡遺跡 へかいせき 倍賀遺跡	おなさかふいばらきし 大阪府茨木市 まつしたちょう 松下町	35 27211 47	北緯 34° 49' 37" 東経 135° 34' 01"	2016.06.01 ～ 2017.03.31	16,360	(仮称) 茨木市 松下町物流施設 建設工事に伴う	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
郡遺跡 倍賀遺跡	墓 集落	弥生時代 中期 ～ 古墳時代 前期	竪穴建物、環濠、溝、土坑、ピット、方形周溝墓、周溝墓外木棺墓	弥生土器、土師器、人形土製品・銅鐸形土製品・高杯形土製品・送風管などの土製品、石庖丁・大型石庖丁・石錐・石斧・砥石・石劍・石鎌・尖頭器・管玉などの石製品	埋葬施設から管玉3点が出土 周溝内から大型石庖丁や人形土製品が出土 高杯形土製品・送風管の出土から集落内で青銅器の生産が行なわれていたことが判明 環濠からは銅鐸形土製品が出土		
	集落	平安時代 後期 ～ 鎌倉時代	掘立柱建物、壙、ピット、土坑、井戸、墓、溝	土師器、黑色土器、瓦器、瓦質土器、須恵器、綠釉陶器、灰釉陶器、山茶碗、常滑焼、輸入陶器、白磁、青白磁、釘、刀子、下駄、曲物、砥石	細溝によって方形に区画された屋敷跡を検出		
要約	銅鐸鋳型が出土したことで知られる東奈良遺跡から北に約3kmの旧茨木川右岸に位置する。遺物包含層の上面で10世紀後葉から13世紀前半に建てられた多数の掘立柱建物を検出した。その中には廂や縁が付属するものや、まさに屋敷と呼ぶべき周囲を細溝で方形に囲むものも見られた。下面では、これまで知られていなかった弥生時代の新たなムラの存在が明らかとなった。II様式初頭からV様式前半に営まれたムラで、その集落域と墓域を検出した。集落はIV様式になると周囲を環濠で囲まれ、墓域との境が明確になる。集落内からは高杯形土製品が発見され、青銅器の生産が行なわれていたことも明らかになった。集落西側の墓域はII様式初頭から方形周溝墓が造られ始め、最終的に約160基以上が周溝を共有しながら網の目状に展開する。その数や墓域の広さは全国的に見ても突出した規模である。周溝からは大型石庖丁や人形土製品など特異な遺物も多く出土しており、方形周溝墓の祭祀を復原する上で有用な資料を得ることができた。今回の調査で見つかった弥生集落は、環濠によって集落と墓域とが明瞭に分かれており、当時の一つのムラの景観を鮮やかに復原することができる貴重な資料である。						

茨木市文化財資料集 第71集  
公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第295集

## 郡遺跡・倍賀遺跡1

発行日 平成30年(2018年)12月28日  
編集 公益財団法人 大阪府文化財センター  
大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号  
発行 茨木市教育委員会  
大阪府茨木市駅前三丁目8番13号  
印刷 株式会社トウユー  
大阪府茨木市横江一丁目14番5号